ふ名人があつたといはれてゐるが（用薬談儀）、康に召出され、後穴戸庄兵衛に笛を學んだとへられたともいふ。五代目以降代々又六郎と稱し、十二代又六郎（初米次郎）は昭和四年殁した。（森田流）始祖森田庄兵衛は、幼時徳川家落し、その實子は他業に轉じた。（森田流）ワキ方高安流の本系で、その先は後漢光武帝から出たといふ。室町末期観世信光（小次郎）に大鼓を學び一代鬼三に至る。（高安流）京都本願寺寺侍の出で大蔵道智の長男弥太蔵定之が、大蔵流を創め、現十四代繁次郎に師事して、九郎兵衛と稱したのに始まる。

九代九郎兵衛定陸の後、家藝は絶えた。

【太鼓方】（金春流）金春氏信（觀竹）の叔父三郎（法名を觀阿又は貫阿といふ）に始まり、二代彌次郎勝國、三代彌次郎勝氏、四代彦次郎氏重（宗節）を經て、五代より惣右衛門と稱し、現十九代次郎兵衛に至る。（観世流）観世元重（音阿彌）の子與四郎吉國が、金春三郎に學んだのに始まり、三郎を初代とす。吉國の子吉久は美濃權頭を許され、小鼓をも創めた。五代國慶は似我與左衛門と呼ばれ、七代重次は左吉と稱し、現十九代次郎兵衛（正能）の次男久次郎（宗清）養子となつた。（觀世流）足利義輝の頃、観世信光（小次郎即ち新九郎流）の孫彌七郎が宮增彌七郎に學んだが、明治能樂發展に際して、彼は觀世流一流を成したもの。代々新九郎と稱したが、家系は大蔵九郎を初代とす。代々長右衛門又は六蔵と稱し、現十三代喜太郎に至る。（觀世流）

【笛方】（一噌流）初代を中村備中入道一噌慶安五年殁）といひ、三代八十右衛門の時一噌を姓とした。或は一噌の姓は豊臣秀吉から與へられたともいふ。五代目以降代々又六郎と稱し、十二代又六郎（初米次郎）は昭和四年殁した。（森田流）始祖森田庄兵衛は、幼時徳川家康に召出され、後穴戸庄兵衛に笛を學んだとのであるともいふ。代々庄兵衛（六代九代は長内國昌山氏の臣關川國兵衛の子市右衛門に始まり、森田と同じく穴戸伯耆守に笛を學び、春日の姓は家康から與へられたといふ。代々市右衛門と稱したが、大正年間家名を門人に讓つた。

【小鼓方】（幸流）流祖四郎次郎忠能（天正七年殁）は宮增彌左衛門に學んだ。代々四郎次郎又は五郎次郎、或は清六等と稱し、金春座附後、家藝一時中絶したが、門人三須平司の子悟朗がその跡を繼いで今日に至る。（幸清流）幸流二代五郎次郎（正能）の次男久次郎流）大倉流大鼓の始祖大蔵九郎の子道智が六蔵といふ者を養つて小鼓を學ばせたのに始まるが、家系は大蔵九郎を初代とす。代々長右衛門又は六蔵と稱し、現十三代喜太郎に至る。（觀世流）足利義輝の頃、観世信光（小次郎即ち新九郎流）の孫彌七郎が宮增彌七郎に學んだが、明治能樂發展に際して、彼は觀世流一流を成したもの。代々新九郎と稱したが、家系は大蔵九郎を初代とす。代々長右衛門又は六蔵と稱し、現十三代喜太郎に至る。（觀世流）

能舞臺（のうぶたい）【名義】能樂を演奏するために設けられた特殊な建築物を能舞臺といひ、これに觀覽席その他能樂の演奏及び觀覽に必要な諸設備を併せ備へたものを能樂堂といひ、能舞臺と略式のもので、普通の建物の中に設けられてゐるものを式舞臺といふ。特殊な設備を缺いてゐるものを略式舞臺といふ。能舞臺とは能樂の舞臺からも來た名稱で、能舞臺といふのである。

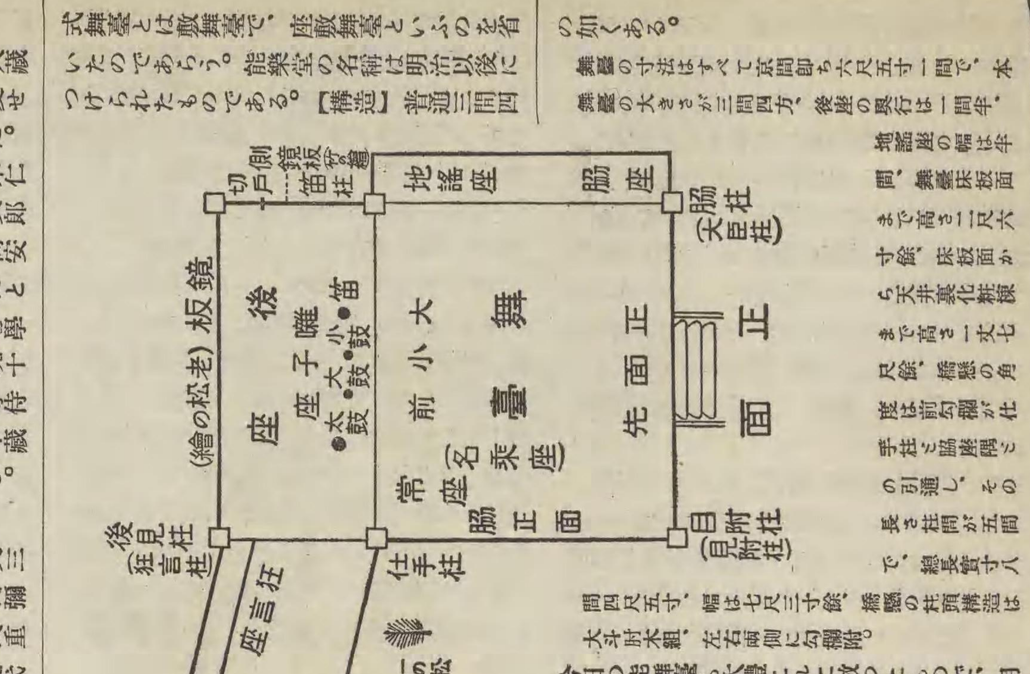
【沿革】（生成期）能樂が今日のやうな形に整成しない古い生成期に於ては、猿樂は野外の平地で演ぜられたものと見え、「藥師堂緣起」に「舞つて居り、古圖では猛猪の上で舞つてゐる。古くは能樂も古くから立合といふことをして、さういふ場合には役者の通路を述べ、又シテが屢々立ちどまつて謠ひ出しを所作をし始める所即ち演奏の基點となる所に入つた所は、普通ワキ・シテなどが名乘舞臺であるが、その前面外方の白洲には實物の若松を三ヶ所植ゑてゐる。これを舞臺に近い方から數へて一の松、二の松、三の松といふ。橋懸から本舞臺を掛け垂らして、これを揚げ又は切つて落すといふ。役者が主として立ち舞ふのは本舞臺であるが、橋懸も亦屢々演奏の場所とせられ、橋懸に近い所は後見役の坐る所で後見座といひ、笛座前の角柱を笛柱といふ。後座の後方左隣り橋懸の右隣は狂言の控へる所で、狂言座といひ、この間にある柱を後見柱といふ。後座の後方は、狂言座と後見座及び右側には羽目板があつて、これを鏡板といひ、正面の鏡板には老松の繪を側鏡板には若竹の繪を描く。側鏡板の隅には引戸の出入口があつて、これを切戸口又は忘口或は嘘吐口といふ。

なほ觀覽席はこれを見所と名づけてゐる。

能舞臺（本願寺）

能舞臺（嚴島神社）

式舞臺とは敷舞臺で、座敷舞臺といふのを省いたのであらう。能樂堂の名稱は明治以後につけられたものである。【構造】背道三間四方、後座の奥行は一間半、鏡の間、幕口、地謠座の幅は半間、鏡板の寸法はすべて京間即ち六尺五寸一間で、本舞臺の大きさが三間四方、後座の奥行は一間半、橋懸の長さ桂間が五間で、揚長貳寸八尺、幅は七尺三寸餘、橋懸の柱頭構造は大斗肘木組、左右兩側に勾欄附。

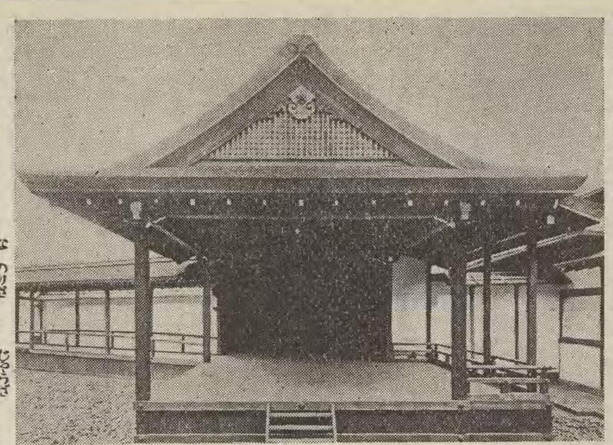


鏡の間　幕口　橋懸　主要部とし、これに多くの附屬的部分を加へたものである。今日の能舞臺もこれに倣つたもので、用材はすべて素木、外面の細部所々に飾金具を施し、後座の鏡板に老松、側鏡板に竹の畫を描いてゐる外、何等の粉飾を施してゐない。

【各部の名稱】能舞臺の主要部即ち四本の角柱に圍まれた三間四方の板張の部分を舞臺又は本舞臺といひ、舞臺の後方奥行一間半の板敷を後座といひ、又跡座とも書き、舞臺に向つて右側間口半間の板敷、その正面先に近い部分を脇座、他の大部分を地謠座といひ、舞臺から離れて、役者が演能の仕度をする部屋を樂屋といひ、舞臺と樂屋とを連絡してゐる又橋掛とも書く。役者が樂屋から橋懸へ出る鏡の間といふ。橋懸への出入口を幕口といひ、これには東見の大鏡があつてこれを鏡の間といふ。

〔參考〕能舞臺概觀（山崎樂堂の講曲講座七、八）○能本作者註文（のうほんさくしゃちゅうもん）「謠曲」を見よ。

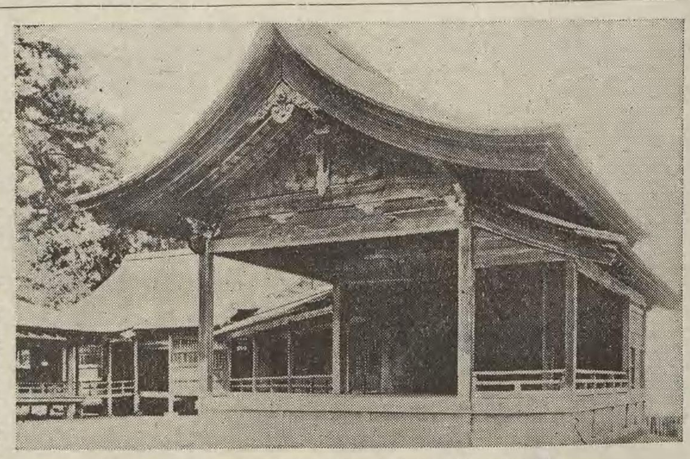
農民文學（のうみんぶんがく）【解說】農民文學には凡そ二種類ある。（一）は地方々々の田園の特色を描き出す事を目的として、その特殊な地方色の中に、主としてその地の農民生活を描き出す事が主要事項となつてゐる文學。地方主義文學、或は鄉土文學、またレジオナリズムの文學と呼ばるゝもの。（二）は特殊な鄉土色を表出するといふ點に重きを置かないで、



本願寺能舞臺（桃山時代）

を掛け垂らして、これを揚幕又は切幕或は御幕といふ。役者が主として立ち舞ふのは本舞臺であるが、橋懸も亦屢々演奏の場所とせられ、その前面外方の白洲には、實物の若松を三本植ゑてゐ、これを舞臺に近い方から數へて一の松、二の松、三の松といふ。橋懸から本舞臺に入つた所は、普通ワキ・シテなどが名乘を述べ、又シテが屢々立ちどまつて謠ひ出し所作をし始める所、卽ち演奏の基點となる所であるから、この所を名乘座又は常座といひ、この所の角柱を仕手柱といひ、その前方卽ち舞臺先の舞臺に向つて左側にある柱は、シテの常に目標とする所で、これを目附柱又は見附柱といふ。脇座・地謠座はそれ〴〵ワキ又は地謠の坐る所で、脇座と本舞臺との間にある柱を脇柱又は大臣柱といふ。後座の前方は囃子方の坐る所で、地謠座に近い方から見て笛・小鼓・大鼓・太鼓の順に着席するので、その座をそれ〴〵笛座・小鼓座・大鼓座、併せて囃子座といひ、その前方を囃子座前又は大小前といひ、笛座前の角柱を笛柱といふ。後座の後方橋懸に近い所は後見役の坐る所で後見座といひ、その左隣り橋懸の右隅は狂言の控へる所で狂言座といひ、この間にある柱を後見柱又は狂言柱といふ。後座の後背及び右側には羽目板があつて、これを鏡板・側鏡板といひ、正面の鏡板には老松の繪を側鏡板には若竹の繪を描く。側鏡板の隅には引戸の出入口があつて、これを切戸口又は忘口或は臆病口といふ。なほ觀覽席はこれを見所と名づけてゐる。

【沿革】〔生成期〕能樂が今日のやうな形に整成しない古い生成期に於ては、猿樂は野外の平地で演ぜられたものと見え、「藥師堂緣起」の猿樂古圖では菰席の上で舞つて居り、古式を傳へた春日神社の能では、今でも平地をそのまゝ舞臺として、若宮御能初日（十一月二十七日）には影向の松を舞臺の目じるしとし、同二日目御旅所の能には、土壇を築いて演舞の區劃とし、薪能（別項）（二月七日から晴天七日間）には、所々に篝火を焚いて舞臺の輪郭としてゐる。併しこれは古い時代、特殊の場合だけであつて、能藝が發達して來て、見物人が多く集まるやうになれば、觀覽の便宜上、高い舞臺を要求するやうになるのが自然で、かの貞和五年の勸進田樂にも、すでに宏大な舞臺や棧敷が作られてゐたのである。〔室町期〕かうして自然の要求に應じて發達して來た舞臺には、多くの場合、もと申樂座が神社に附屬してゐた關係上、神社の拜殿・神樂殿を借用したことと想像されるのであるが、それは臨時借用のものであつて、本式の能舞臺としては、申樂が舞樂と併行した關係上、殊に舞樂



嚴島神社能樂堂（室町末期）

の民衆化として發展して來た關係上、舞樂舞臺の樣式を採ることとなつた。今日の能舞臺が本舞臺を三間四方とし、その正面前方に三級の階段のあるのは、その一證左であらう。從つて役者の出入する橋懸も、その初めはやはり舞樂舞臺と同じやうに、舞臺の後方にあつたらしいが、田樂も申樂も古くから立合といふことをして、さういふ場合には役者の通路を東西の兩側に置いた。前述勸進田樂の場合にも、「兩方に橋懸をかけたり」と「太平記」に記してゐるのである。これが本となつて立合でない場合にも橋懸を橫側につけることを考案したらしい。そして世阿彌も「申樂談儀」に、「橋の詰は舞臺の日かくしの柱の中手より は側へ寄せて、片面の柱半間ばかり置きて架くべし」と、橋懸を橫斜につけよといつてゐるのである。かうして室町幕府に於てはこれを式樂同樣に重んじて保護奬勵するに從ひ、すべてが整備して、天正十三年七月、豐臣秀吉が參內した時の能舞臺には、今日とほぼ同樣のものとなつたのである。〔佐成〕

【參考】能舞臺概觀 山崎樂堂（謠曲講座七・八）○德川時代の能舞臺 池內信嘉（能樂盛衰記上）

能本作者註文（のうほんさくしゃちゅうもん）【解說】「謠曲」を見よ。

農民文學（のうみんぶんがく）は凡そ二種類ある。（一）は地方々々の田園の特色を描き出す事を目的として、その特殊な地方色の中に、主としてその地の農民生活を描き出す事が主要事項となつてゐる文學。地方主義文學、或は鄕土文學、またレジオナリズムの文學と呼ばるゝもの。（二）は特殊な鄕土色を表出するといふ點に重きを置かないで、むしろ職業的に言つて、農業生活者自身が、鍬をとり鋤をとつて耕作しつつある暇々に、その農業從事者の生活氣分なり、理想要求なり、現狀描寫なりを書き現はしたものであつて、農業者自身の文藝表現である。代表作としては、日本では長塚節の「土」、眞山靑果の「南小泉村」、田山花袋の「重右衞門の最後」（各別項）。イギリスでは、トマス・ハアディの諸作、アイルランド文學の一部。フランスでは、バルザックの「農民」、ジョルジュ・サンドの「魔の沼」その他、ゾラの「大地」、ルネ・バザンの「死に行く大地」、ギュイヨオマンの「單純な者の一生」その他。獨逸では、鄕土藝術家と呼ばるゝ人々、特にヘッセ、エミール・シュトラウス及びフレンセンの如き作家、特にフレンセンの「イェルン・ウール」の如き作。スカンディナヴィアでは、クヌウト・ハムズンの諸作、ビョルンソンの諸作。ポーランドでは、レイモン

前ぜ言ぜ用ひ、一角仙人・龍女などには特定の面を用ひる。）狂言には面を着けない場合が多いのであるが、末社の女には乙御前を、「釣狐」の前には白蔵主を、後には「福の神」「惠比須」「毘沙門」などの神體にはこれに適つた面を用ひる。

【源流】わが國固有の歌舞演藝には、面をつけないのが本則のやうで、古く隼人舞の起原を記した「日本書紀」の一書には、「以ㇾ赭塗ㇾ掌及ㇾ面」とあつて、顔に色どりを施してその人物を表はしたやうであり、後世の歌舞伎も亦隈取りによつてその人物の性格を示し、田樂の方でも、「蔭涼軒日錄」寛正六年十月五日の條に、「田樂元來於ㇾ南都ㇾ不ㇾ着ㇾ面」といつてゐるる。尤も田樂は全く面を用ひなかつたのではないが、女性に扮する場合などには、面をつけないのを本旨としてゐたらしい。これに反して庶樂・高麗樂・伎樂（各別項）などの外來樂には、面を用ひるのが通例で、能面はこの外來樂の影響を受けたものであることは疑ひないが、そのいづれの樂に據つたものであるかについては異論が多い。中にも伎樂面に據つたものであるといふ高野辰之博士の說（日本歌謠史）は有力なものであるが、一般に伎樂面は形が尨大であるのに反して、能面は大抵小柄であつて、この點寧ろ舞樂面に近い。恐らくは二三の異形面を除いては、伎樂面より一層舞樂面に接近したものでなからうかと思ふ。〔佐成〕

【參考】假面讀書雜志　古能〇能樂源流考　芳賀矢一　假面考　藤懸靜也　能樂全書　小倉末之助　能樂大觀　檜山坦　能樂研究　野上豐一郎　能面の研究　生田蕗堂

能面

能樂【名義】能樂の演出には、その曲中の人物性格を表はすために、これにふさはしい面を顏に着けることが多い。この面を能面又は「おもて」といふ。但し能面を着けるのは、シテとツレとだけで、ワキ・子方などは全くこれを着けず、シテ又はツレでも、能樂參照）のシテ又は複式能（能樂參照）の前ツレが男性である場合には、面を着けないのが通例で、このやうにシテ・ツレが面を着けないものを直面（ひためん）といふ。

【種類】能面はその種類が甚だ多く、神男女狂鬼、それ〴〵その能柄に適したものを用ひてある。その主なものを擧げる。

尉（じょう）・鍾馗（しょうき）尉（じょう）・大飛出（おおとびで）尉（じょう）・黒式尉（くろしきじょう）・白式尉（しろしきじょう）・三番叟（さんばそう）尉（じょう）・朝倉尉（あさくらのじょう）・笑尉（わらいじょう）・悪尉（あくじょう）・若尉（わかじょう）・小牛尉（こうしじょう）・癋見（べしみ）・鼻癋見（はなべしみ）・悪癋見（あくべしみ）・大癋見（おおべしみ）・平太（へいた）・若武者（わかむしゃ）・中将（ちゅうじょう）・今若（いまわか）・十六（じゅうろく）・童子（どうじ）・喝食（かっしき）・俊寛（しゅんかん）・頼政（よりまさ）（これ等の中、自式尉は「翁」に、黒式尉は「三番叟」に限つて用ひ、他の面は彼此融通するが、小牛尉は氣品の高いもので、「高砂」「難波」等脇能の前シテに、朝倉尉は用途の多いもので、「鵺」「阿漕」等の前シテに、笑尉もこれに似て「實盛」「頼政」等の前シテに、鍾馗は「老松」の後シテ、「西行櫻」のシテ等に用ひる。惡鬼物は總じて異相面と見るべきで、大惡尉は「玉井」「氷室」等の後シテに、鼻癋見は「白髭」「大社」等の後シテに、若武者惡尉は「張良」「殺生石」の後シテに用ひる。男を面（おもて）・邯鄲男（かんたんおとこ）・中将（ちゅうじょう）・今若（いまわか）・十六（じゅうろく）・童子（どうじ）・喝食（かっしき）・俊寛（しゅんかん）・頼政（よりまさ）（これ等の中、邯鄲男が氣品の高いもので、「高砂」「弓八幡」の後シテ等多く神體に用ひ、中將は貴族的な男性である「鵺」「雪林院」の後シテ等に用ひ、十六は大盛中將に似て、それよりもやゝ年若に用ひる。童子は更に年若な「箙」「清經」の後シテ等に、「屋子・童子は更に年若な「田村」「小鍛冶」の前シテ「枕慈童」のシテ等に、平太は中將に似てやゝ武張つた「景平」「田村」の後シテ等に、若男・今若は通俗的な男性「歌占」のシテ「女郎花」の後シテ等に、痩男・蛙・痩男は淺味のある「阿漕」「善知鳥」「藤戸」の後シテ等に、喝食は名の通り「自然居士」「花月」等の喝食物に用ひ、その外「俊寛」「頼政」「景清」などのシテには、その曲特定の面を用ひる。姥（うば）・姥面（うばめん）・姥（うば）・老女（ろうじょ）・山姥（やまうば）・姥（うば）は「高砂」「雨月」の前ツレ「蟬丸」「盲僧」等普通の老女に用ひ、老女は「卒都婆小町」「檜垣」のシテ等特殊な老女に用ひ、山姥には特定の面を用ひる。女面（おんめん）・小面（こおもて）・近江女（おうみおんな）・若女（わかおんな）・曲見（くせみ）・泥眼（でいがん）・橋姫（はしひめ）・深井（ふかい）・井戸（いど）・連面（つれめん）（これ等の中、增が氣品のある點で「羽衣」「吉野天人」のシテ等に、深井は增に似て「櫻川」「三井寺」のシテ等に、小面・若女は普通の三番目物のやゝ年若の女に、曲見は「芭蕉」「祖崎」などやゝ年增の女に、痩女は痩男に對立したやゝ凄味のあるもので「定家」「品」の後シテ等に用ひ、泥眼は一層凄味があるもので、「鐵輪」「葵上」のシテ等に用ひる。その外女ツレの時は大抵氣品の高いもので、「寺尋」「難波」等脇能の前シテに、「朝倉尉」は用途の多いもので、「鵺」「阿漕」等の前シテに、「笑尉」もこれに似て「實盛」「頼政」等の前シテに、「鍾馗」は「老松」の後シテ、「西行櫻」のシテ等に用ひる。惡鬼物は總じて異相面と見るべきで、大惡尉は「玉井」「氷室」等の後シテに、鼻癋見は「白髭」「大社」等の後シテに、若武者惡尉は「張良」「殺生石」の後シテに用ひる。男を面（おもて）・邯鄲男（かんたんおとこ）・中将（ちゅうじょう）・今若（いまわか）・十六（じゅうろく）・童子（どうじ）・喝食（かっしき）・俊寛（しゅんかん）・頼政（よりまさ）（これ等の中、邯鄲男が氣品の高いもので、「高砂」「弓八幡」の後シテ等多く神體に用ひ、中將は貴族的な男性である「鵺」「雪林院」の後シテ等に用ひ、十六は大盛中將に似て、それよりもやゝ年若な「箙」「清經」の後シテ等に、「屋子・童子は更に年若な「田村」「小鍛冶」の前シテ「枕慈童」のシテ等に、平太は中將に似てやゝ武張つた「景平」「田村」の後シテ等に、若男・今若は通俗的な男性「歌占」のシテ「女郎花」の後シテ等に、痩男・蛙・痩男は淺味のある「阿漕」「善知鳥」「藤戸」の後シテ等に、喝食は名の通り「自然居士」「花月」等の喝食物に用ひ、その外「俊寛」「頼政」「景清」などのシテには、その曲特定の面を用ひる。姥（うば）・姥面（うばめん）・姥（うば）・老女（ろうじょ）・山姥（やまうば）・姥（うば）は「高砂」「雨月」の前ツレ「蟬丸」「盲僧」等普通の老女に用ひ、老女は「卒都婆小町」「檜垣」のシテ等特殊な老女に用ひ、山姥には特定の面を用ひる。女面（おんめん）・小面（こおもて）・近江女（おうみおんな）・若女（わかおんな）・曲見（くせみ）・泥眼（でいがん）・橋姫（はしひめ）・深井（ふかい）・井戸（いど）・連面（つれめん）（これ等の中、增が氣品のある點で「羽衣」「吉野天人」のシテ等に、深井は增に似て「櫻川」「三井寺」のシテ等に、小面・若女は普通の三番目物のやゝ年若の女に、曲見は「芭蕉」「祖崎」などやゝ年增の女に、痩女は痩男に對立したやゝ凄味のあるもので「定家」「品」の後シテ等に用ひ、泥眼は一層凄味があるもので、「鐵輪」「葵上」のシテ等に用ひる。その外女ツレの時は大抵氣品の高いもので、「寺尋」「難波」等脇能の前シテに、「朝倉尉」は用途の多いもので、「鵺」「阿漕」等の前シテに、「笑尉」もこれに似て「實盛」「頼政」等の前シテに、「鍾馗」は「老松」の後シテ、「西行櫻」のシテ等に用ひる。惡鬼物は總じて異相面と見るべきで、大惡尉は「玉井」「氷室」等の後シテに、鼻癋見は「白髭」「大社」等の後シテに、若武者惡尉は「張良」「殺生石」の後シテに用ひる。

若女

喝食

翁

けられ、ジョルジュ・サンドの如き田園文學者が生れ、やがて世界各國に田園文學、それについで地方主義・鄕土主義文學が十九世紀末、二十世紀初頭に至つて豐富に現はるゝに至つたのである。そして農業者自身が持つ農民文藝にいたつては、世界大戰以後になつてから非常な勢ひで、現に各國に於て、特に主農國たるフランスなどに於て作られつつあるので

朝倉尉

翁

增

喝食

大癋見

般若

に、茗荷惡尉は「張良」「畷覺」等の後シテに用ひる)。男面・邯鄲男・中將(中尉)・今若・十六・童子・慈童・平太・若男・淡男・蛙・痩男・三日月・喝食・俊寛・賴政(これ等の中、邯鄲男が氣品の高いもので、「高砂」「弓八幡」の後シテ等多く神體に用ひ、中將は貴族的な男性である「融」「雲林院」の後シテ等に用ひ、十六は大體中將に似て、それよりもやゝ年若な「楊貴妃」「源氏」の後シテ等に、童子・慈童は更に年若

釣眼は舞樂面抜頭に攜したもので「賀茂」「嵐山」の後シテ等神佛に、大飛出もこれに似て「國栖」「氷室」の後シテ等に、小飛出は、「殺生石」「小鍛冶」の後シテ等に、大癋見は「鞍馬天狗」「大會」の後シテ等の天狗に、小飛出は「鵜飼」「昭君」の後シテ等に、獅子は「石橋」「紅葉狩」の後シテ等に、般若・鬼女・眞蛇には二本の角があつて

普通の男面に近く、「養老」「藍染川」の後シテ等に

本歌謠史)は有力なものであるが、一般に伎樂面は形が彫大であるのに反して、能面は大抵小柄であつて、この點寧ろ舞樂面に近い。恐らくは二三の異形面を除いては、伎樂面よりも舞樂面に暗示を得て、能面として新しく創作したものでなからうかと思ふ。【佐成】

【參考】假面譜亭多古能○能樂萬代鑑齋藤香村

野上豐一郎子 小說家・翻譯家

【閲歴】明治十八年五月大分縣臼杵町に生る。明治三十二年臼杵高等小學校を卒業、翌年上京、明治女學校に入學、三十九年同校高等科を出でて野上豐一郎（白川）に嫁した。明治四十年二月、處女作「緣」及び「七夕さま」が、夏目漱石の紹介で「ホトトギス」に掲載されてから、明治の末期まで、寫生文派の影響を受けた作物を、「ホトトギス」「中央公論」「新小說」國民新聞等に發表した。大正元年以後は、獨自の境地を開拓し、「中央公論」の增刊號に絕えずその力作を載せた外、諸種の文藝雜誌に創作を發表した。中でも、小說「海神丸」（大正十一年「改造」）、連篇四篇（大正十二年「中央公論」）の外、昭和三年から三年間に亙つて、斷續的に「中央公論」及び「改造」等に連載された「眞知子物」の一聯、「眞知子」から「血」に終る七篇けで發展される彼女の長篇は、いたづらに重苦しくて讀者を退屈させる。詩と感情の高揚が、彼女の作物に乏しいからである。理性的であり、良心的であるこの作家が、現代の社會相をつきつめて、眞知子物につき當つたのはいかにも彼女らしい。それにしても、眞知子物の一聯には、物解りのよい時代苦の同情はあるが、どこまでも頭腦での同情で、心臟の同感ではない。そこにどこか吹き切れない作家としての彼女の物足らなさがある。「海神丸」や、「大石良雄」が傑作だと云はれるが、彼女の特色は稀薄である。昨今の思想傾向にも、彼女がどこまで踏み込むか解らぬし、古典主義といふ以外、イズム上の彼女は、どれだともいひきれない。

野雁集（のがりしふ）「ぬかり集」を見よ。

〔千葉〕

た。遲い歸宅が、信じてゐた母にも疑惑を起させ、直ぐ學校に歸るやうに、その夜言ひわたされた。船で市川へ出る朝、小雨の中に、髮はさつぱりした銀杏返しに薄く化粧した民子が、しよんぼり泣いて見送つた。彼女が嫁いだのを母から聞かされたのは、二度目の歸省の折だつた。二人の間をさいた母と嫂のために、心に叛いて結婚した民子は、流產が原因で死んだ。電報で半狂亂の母の許に呼び歸された政夫が、母から聞いたのは、民子を無理に他にやつた罪の赦しであつた。政夫は眞新しい民子の墓に立つてゐた。せめて彼女の最も愛した野菊を墓に植ゑようと、あたりを見ると、弔ひの人に踏まれてもなほ青々と莖立つてゐる野菊が繁つてゐた。死の枕を直す折に、絆（きづな）絹の切れに包んだ政夫の寫眞と手紙だもので、又その家より富士を遠望し得たので樓を芙蓉樓と號した。國書を烏丸光胤及び坂靜山に學び、特に和歌に長じ、家集に「遺珠集」がある。椿軒は專門の狂歌師ではないが、その門下より唐衣橘洲・四方赤良・朱樂菅江・平秩東作（各別項）等の狂歌の大家を出して、天明調の產婆役であつた。「若葉集」にその狂歌五十六首が載せてある。

〔野崎〕

野口雨情（のぐちうじやう）　詩人　【本名】英吉。

【閲歴】明治十五年十二月、茨城縣磯原町に生る。東京專門學校文科出身、坪內逍遙博士に薰陶を受け、專ら歌謠の作に志し、明治四十年「朝花夜花」を刊行した。その後或は北海道に渡り、或は公吏となり、或は農業に從事し、新聞にも携はり、雜誌「金の星」の記者などをして一時詩作に遠ざかつてゐた。大正中期、

【閲歴】明治十八年五月大分縣臼杵町に生る。明治三十二年臼杵高等小學校を卒業、翌年上京、明治女學校に入學、三十九年同校高等科を出でて野上豐一郎(臼川)に嫁した。明治四十年二月、處女作「緣」及び「七夕さま」が、夏目漱石の紹介で「ホトトギス」に掲載されてから、明治の末期まで、寫生文派の影響を受けた作物を、「ホトトギス」「中央公論」「新小說」國民新聞等に發表した。大正元年以後は、獨自の境地を開拓し、「中央公論」の增刊號に絕えずその力作を載せた外、諸種の文藝雜誌に創作を發表した。中でも、小說「海神丸」(大正十一年「改造」)、連篇四篇(大正十二年「中央公論」)の外、昭和三年から三年間に亙つて、斷續的に「中央公論」及び「改造」等に連載された「眞知子物」の一聯、「眞知子」から「血」に終る七篇の長篇が、いろんな角度から、批評の中心となり、文壇から注目された。著書としては、以上の戲曲・小說を集輯した「新らしき命」「海神丸」「大石良雄」「小說六つ」「人間創造」等があり、飜譯として、バルフィンチの神話「傳說の時代」、スピリの「ハイヂ」、セルマラーゲルレフの「ゲスタ・ベルリング」の外に、ソーニャ・コヴァレフスカヤの傳記等があり、昭和六年の「輕井澤の夫人の手紙」以外、二三の短篇小說を發表しつつある。

【批評】我が國の女性作家として、最も長く文壇の生命を續けてゐる一人であり、明治時代から數へるなら、ただ一人殘された精力的な作家であらう。今日たまに發表される創作を見ても、一向に生理的な衰へを見せてない。その作品が有つ宗教的な純聖さや、大ものを巧みにこなす野心には、北ヨーロッパの女性作家達を連想させるが、理智の觀照と解說だけで發展される彼女の長篇は、いたづらに重苦しくて讀者を退屈させる。詩と感情の高揚が、彼女の作物に乏しいからである。理性的であり、良心的であるこの作家が、現代の社會相をつきつめて、眞知子物につき當つたのはいかにも彼女らしい。それにしても、眞知子物の一聯には、物解りのよい時代苦の同情はあるが、どこまでも頭腦での同情で、心臟の同感ではない。そこにどこか吹き切れない作家としての彼女の物足らなさがある。「海神丸」や、「大石良雄」が傑作だと云はれるが、彼女の特色は稀薄である。昨今の思想傾向にも、彼女がどこまで踏み込むか解らぬし、古典主義といふ以外、イズム上の彼女は、どれだともいひきれない。

【千葉】

野雁集(のがりしふ)「ぬかり集」を見よ。

野菊の墓(のぎくのはか)小說【作者】伊藤左千夫【發表】明治三十九年一月、「ホトトギス」。【刊行】明治三十九年四月、籾山書店。現代日本文學全集四十卷所收。

【梗概】松戸から二里離れた農村矢切村の政夫の一家は、病母・兄・嫂・從姉(民子)等を擁して、物語のやうな朝夕を靜かに過してゐた。政夫と民子は十五と十七の姉弟のやうに遊び戲れてゐたが、村人の噂が、却つて二人を戀に陷らしてしまつた。その年の秋休みに、唯二人で山畑の棉採に行く事になつた。村外れで落ち合ひ、朝露の野道を行つた。民子を野菊、政夫を龍膽と秋草の中から見たて、幼ない戀をかよはせても、彼女をやるせなくさせるのは、政夫より年上といふ寂しさだつた。仕事も愛する二人には樂しかつた。歸途半分も來た頃、十三夜の月が木の間から影をさして、尾花にゆらぐ風もなく露のきらめく夜になつた。遲い歸宅が、信じてゐた母にも疑惑を起させ、直ぐ學校に歸るやうに、その夜言ひわたされた。船で市川へ出る朝、小雨の中に、髮はさつぱりした銀杏返しに薄く化粧した民子が、しよんぼり泣いて見送つた。彼女が嫁いだのを母から聞かされたのは、二度目の歸省の折だつた。二人の間をさいた母と嫂のために、心に叛いて結婚した民子は、流產が原因で死んだ。電報で半狂亂の母の許に呼び歸された政夫が、母から聞いたのは、民子を無理に他にやつた罪の赦しであつた。政夫は眞新しい民子の墓に立つてゐた。せめて彼女の最も愛した野菊を墓に植ゑようと、あたりを見ると、弔ひの人に踏まれてもなほ青々と莖も葉も繁つてゐる野菊が繁つてゐた。死の枕を直す絲絹の切れに包んだ政夫の寫眞と手紙が、彼女が胸にのせてゐた。と、家族が泪ながらに告げるのであつた。

【解說】田園の青年少女の戀愛に取材した私小說である。左千夫は歌人であるが、子規の唱道した寫生文をつくり、延いて四十三歲で世に問うた處女作小說である。可憐な抒情味の豐かな素材に、作者の情熱が溢れてゐるので、この作以來、小說家としての地位を得たが、技巧に幼稚なところがあり、世俗的常識的一面が飛び出して、いたく構成を歪めてゐる。

【齋藤(茂)】

軒端玉椿(のきばのたまつばき)狂歌師【本名】內山淳時。字は文卿、通稱傳藏【別號】椿軒・賀邸【生歿】享保七年生れ、天明八年(一七八八)十一月九日歿す。享年六十七【墓所】牛込七軒寺町鳳林寺【閲歷】江戶の人。儒家にして國學を兼ね、牛込加賀町に帷を垂れて子弟を教授してゐた。賀邸の號は、この町名に因んだもので、又その家より富士を遙望し得たので樓を芙蓉樓と號した。國書を烏丸光胤及び坂靜山に學び、特に和歌に長じ、家集に「遺珠集」がある。椿軒は專門の狂歌師ではないが、その門下より唐衣橘洲・四方赤良・朱樂菅江・平秩東作(各別項)等の狂歌の大家を出して、天明調の產婆役であつた。「若葉集」にその狂歌五十六首が載せてある。

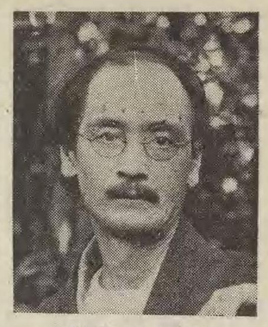
【野崎】

野口雨情(のぐちうじやう)詩人【本名】英吉。【閲歷】明治十五年十二月、茨城縣磯原町に生る。東京專門學校文科出身、坪內逍遙博士に薰陶を受け、專ら歌謠の作に志し、明治四十年「朝花夜花」を刊行した。その後或は北海道に渡り、或は公吏となり、或は農業に從事し、新聞にも携はり、雜誌「金の星」の記者などをして一時詩作に遠ざかつてゐた。大正中期、童謠民謠勃興の機運に乘じ、全國に歌謠行脚をつづけると共に、その作品も普及されるに至つた。而して最近二三年は殆ど沈默の形である。【著作】朝花夜花○都會と田園○十五夜お月さん○童謠十講○雨情民謠百篇○童謠教本○野口雨情集(現代詩人全集第十一卷)等。【業績】明治四十年に御風・介春・露風・東明等と早稻田詩社(別項)を結び、雨情はひとり新民謠への動向を示したが、その結社は間もなく解散された。雨情の活躍は大正期に入つてからである。北原白秋の進出よりはやゝ後れ、西條八十と殆ど相前後して童謠及び民謠の作家として一般に知られるに至り、世に流布された作品も二三に止まらない。童謠の「十五夜お月さん」、民謠の「船頭小唄」「波浮の港」などその一例であらう。雨情の歌謠は單純にして素朴、鄕土の風俗を探求し、方言を攝取し、田園の情趣濃かなるを特色とする。餘りに單

純化を欲して無味枯淡に陷つてゐる點もあるが、詩より出發して現代の歌謠を普遍的ならしめた功勞は認むべきであらう。　〔河井〕

野口寧齋（のぐちねいさい）「寧齋」を見よ。

野口米次郎（のぐちよねじらう）　詩人　【閲歷】明治八年十二月八日愛知縣津島町に生る。慶應義塾に學び、後、渡米してカリフォルニアに到り、苦學力行、諸地方を流浪し、その間に彼はヨセミテ溪谷に入つた。機を得て詩人オーキン・ミラアに師事し、ボオに傾倒した。かくて英詩をつくる技能を得、最初の英詩集(Seen and Unseen)を一八九七年(明治三十年)桑港で出し、米詩壇の一隅に在つて注目を受けた。彼はYone Noguchi の名によつて英米に知られてゐる。後シカゴを經てニューヨークに出たが、彼の詩名を高めたものは、彼が倫敦に渡つて一九〇二年（明治三十五年）「東海より」(From the Eastern Sea) を出した時に始まる。彼はこの一詩集によつて、驚異すべき詩人の一人として彼の地に認められた。その詩中にはポオの影響多きものがあるが、詩體は彼獨特の散文的自由詩で、その詞句の用法が英米詩の傳統になき清新なものであつたことが、彼の詩名を高めたのである。彼は明治三十七年歸朝、大正二年再び渡英し、オックスフォード大學で「日本詩歌論」の講演をした。又彼は日本協會、ゼ・ロオヤル・エヂアチック協會、ゼ・クエスト・ソサエチイなどでも日本の和歌・俳句等について講演し、その後歐大陸を廻つて歸朝した。明治三十八年、散文英詩集「夏雲」(Summer Clouds)を日本より出し、又英詩集「巡禮」(Pilgrimage)（明治三十九年）を倫敦より出し、一層圓熟した彼の詩技を示した。彼は慶應義塾大學で英文學を教授する傍ら、明治三十九年あやめ會を起し、日英米詩人の詩作を一卷に收めた詞華集第一集を「あやめ草」と命名して出版した。これには泡鳴・林外・白星・泣菫・有明・敏・薫等が採錄されてゐる。ついで同年第二集「豐旗雲」を出したが、幾ばくもなく、あやめ會は內訌を起して解散した。彼の邦詩に於ける進出は比較的後のことで、それは初め彼の嘗て創作した英詩を飜譯したものであつたが、更に自作の詩を自由なる散文體で發表し始めた。邦詩の最初の集は、「二重國籍者の詩」（大正十年）である。ついで「林檎一つ落つ」（同十一年）が出で、それより繼續的に、「山上に立つ」「沈默の血汐」「この手を見よ」等の邦語詩集が出版された。英語著書十八卷、日本語著書も等身に及んでゐる。



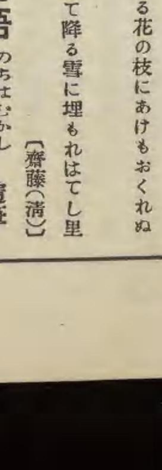
野口米次郎

【批評】彼は夙に日本文化の紹介者として、海外に日本の事物、日本の美術・文學等を知らしめた第一人者で、歐米に於てヨネ・ノグチの名は、詩人として著名であると同時に、日本美術の紹介者として著名である。その著「廣重」「北齋」「歌麿」「光琳」と共に、「日本詩歌論」(The Spirit of Japanese Poetry) は、日本の詩歌の本質を明かにした著として知られてゐる。彼の詩は散文的な形式に於ける毀譽褒貶はあるが、その思索的態度、現實批判的な詠嘆には彼獨特のものをもつてゐる。　〔川路〕

野崎左文（のざきさぶん）　狂歌師・新聞記者　【本名】城雄。幼名新次郎　【別號】狂詩には愛蟹子・無腸翁・里山人。狂歌には、蟹廼屋・坂上神樂麿。別に、吳園情史・琴亭文彥等の變名もある。左文と號したのは、生來の左利きで、左筆橫書きの癖があつたので、その師假名垣魯文が蟹垣左文と名づけたのに由る。【閲歷】安政五年九月二十六日土佐國高知七軒町布掛氏に生る。生後一百日で同藩士野崎傳太に養はれ、城雄と改む。母は馬場來八の妹しか子で、馬場孤蝶とは從兄弟。慶應二年（八歲）長崎に遊學し、吉井某に就いて初めて英書を學び、維新後一旦歸國、更に明治二年藩費生として上京、大學南校に入り、正則英語を學ぶこと二年半。同四年春高知の吸江に藩立の英學校が出來て、それに入學するため歸國を命ぜられたが、學科の適するものがなかつたので、更に大阪に出で開成學校に入つたが、一身上の都合で半途退學、同六年鐵道寮の外國技師附の雇となつたが、翌七年の末工部省工作局八等技手に補せられた。當時東京に「讀賣」「繪入」「假名讀」等の小新聞が發行されてゐたので、投書家の仲間に入り、その頃名高かつた中坂まとき・爲永春江・高島屋塘雨・南新二・伊東橋塘・山田風外等と交はり、又鐵道寮在職當時の同僚河原英吉（岡丈紀、後には三世風來山人）の紹介で假名垣魯文（別項）の門に入り、明治十三年假名讀新聞の見習記者を振出しに、明治日報・いろは新聞・繪入朝野新聞・東京繪入・今日新聞・自由燈の各社を轉々し、同十九年浪華新聞に聘され、坂崎紫瀾と共に同地に赴き、翌年退社、同二十一年中江兆民の東雲新聞に入り、次いで關西日報に移り、同二十二年歸京して東京公論に入つたが、翌年同新聞が大同新聞と合併して「國會」を發行するに當つて同社に移り、專ら社會記事を擔當してゐた。同二十五年、「日本名勝地誌」の編纂を思ひ立ち、「國會」を辭してその著作に從事し、五年間に亙つて同地誌十二卷（末の二卷は田山花袋編）を完成し、その編纂中萬朝報に入社、これを記者生活の打止めとして同二十八年に辭し、更に日本鐵道會社・北海道官設鐵道・九州鐵道會社等に歷任、後鐵道院副參事となり、九年間勤續、大正三年被免、自ら天竺浪人を以て任じ、悠々閑日月を送つてゐる。これといふ深い學問はないが、魯文の仕込みだけに一種の滑稽文に長じ、狂詩・狂歌に秀で、殊に狂歌は唯一の宗匠株であつた。明治初期以來大正中期頃まで、狂歌の創作・研究に盡したが、最後の思ひ出として、大正五年に「みなおもしろ」といふ狂歌專門誌を發行して宣傳に努めたが、これも三四年で廢刊後は、殆ど世間から遠ざかつてゐる。【著作】「日本名勝地誌」十二卷の外、戲作類に明治十四年刊「東京粹書」初篇一册と「新橋藝妓評判記」二册がある。同十六年刊の「名士品評」一册と匿名で出した「東京流行細見記」や、魯文を傳した「かな反古」「狂歌一夕話」の外に、新聞記者時代に續き物の小說が單行本として二三出版された。昭和二年刊の「私の見た明治文壇」は、明治初期の文學界を知る唯一の文獻史料として後世に傳へらるべき好著である。　〔石川(巖)〕

【參考】野崎左文自傳○私の見た明治文壇

野ざらし紀行（のざらしきかう）　俳諧紀行　一册　【著者】松尾芭蕉【名稱】初め草稿のまゝ傳はり、題號も「草枕」「芭蕉翁道之記」「甲子吟行」「甲子紀行」などとも呼ばれてゐた。「野ざらし紀行」の名は許六の「歸休後傳」に見え、「草枕」の名は許六の自讚論に見えて、素龍はこの題號が紀行の本名であるから、自分は野晒以下の表題を取らないと云つてゐる。また「芭蕉翁道之記」の名は、鳳國の「泊船集」に出で、「甲子吟行」の名は、波靜の眞蹟本に題されてゐた。「野ざらし紀行」の名は、卷頭の「野ざらしを心に風のしむ身哉」の發句から出で、「草枕」「道之記」の名は、その性質が紀行文である所から名づけたもの、「甲子吟行」「甲子紀行」の名は、旅行の歲の干支によつたものである。【成立】貞享二年四月成る。【傳本・刊行】「泊船集」(元祿十一年刊)中の「芭蕉翁道之記」が最初の刊本であらう。次に月下が明和五年に所持の寫本を「野ざらし紀行」の名で覆刻し、波靜は安永九年に、芭蕉の眞蹟を「甲子吟行」の名で摹刻してゐる。又本書と同名の異本もに詣で、ひとり芳野に入り、西行の舊跡を尋ね、後醍醐天皇の御陵を拜み、山城を經て近江に入り、美濃に到つて大垣の木因の家に主として居り、次いで熱田に詣で、名古屋に吟行し、故郷の山家にて歲を越え、貞享二年春奈良に出で、二月堂に籠り、洛に上つて三井秋風の鳴瀧の山莊を訪ひ、伏見西岸寺任口上人に謁し、近江に入り、湖水を眺望し、再び尾張の桐葉の許に到り、それより甲斐を經て、四月の末、深川の草庵に歸るまでの紀行である。【價値】熱田・名古屋を中心として、その周圍に蕉風の勢力を扶植し得たのは、この旅通の因を作つたかが推知される。



野ざらし紀行

【參考】泊船集註解　輕花坊　○野ざらし紀行聚園抄　石河積翠　○泊船集解說　馬場錦江　○野ざらし紀行評釋(芭蕉文庫)　荻原井泉水　○解釋　芭蕉紀行全集　樋口功　【萩原】

のせ猿草子（のせざるさうし）　御伽草子（二十三篇の一）一卷　【成立】室町期か　【諸本】古板本は御伽草子本。御伽草子後編(今泉嘉山校)・御伽草紙(有朋堂文庫)・日本文學大系第十九卷等所收。【解說】童話。異類物の戀愛物語。丹波國のせ山の老猿ましお權頭に、苔丸殿として才藝勝れた一子があつた。二十歲になつたが、兩親に勸められても妻を迎へず、公卿・殿上人の女ならでは先祖猿丸大夫の系圖にも恥ぢるとて承知せぬ。或る時日吉の山王に詣でるとて京に出で、東山邊りの漫歩（そぞろある）きに、北白

歌數實に四千首を越え、一個人の集としては珍らしい大部のものである。

【歌風】宣長の實子であるだけに、その作は鈴屋派の正系をひいてゐる。調子の低いただ言歌もないではないが、「うれしさの常なる世とも知らでただうき事のみぞ數へられける」「皆人の迷ふすぢなくなりゆきていつ世にひろくみちの八ちまた」の如き主觀歌が多い。併し特色は却つて叙景歌の方にあるやうに思ふ。一般に體言止が多いのでも知られる通り、取材に隙間がない。まづ新古今調として推賞すべきものであらう。

ほの〴〵と色みえそむる花の枝にあけもおくれぬもゝ鳥のこゑ

けぶりのみ靡くは見えて降る雪に埋もれはてし里の竹村

【齋藤(清)】

野乃舎随筆（のぬのやずいひつ）　随筆　一巻　【著】

珍らしい大部のものである。

後はむかし物語（のちのはむかしものがたり）　随筆　一巻　【著】平澤常富（田鶴堂喜三二）　【成立】喜和三年　【諸本】燕石十種第一冊所収　【解説】自序中に「我七つ八つになりけるとしよりこなた覚束のころまでの事、耳の底に残り或はそら覚えに覚えたりしたはれごとの忘れたるはわすれたるまゝにかいつけて云々」とあるごとく、江戸期中葉の俗事を記したもので、江戸を主とし、聊か京都の事にも及び、歌謡・劇場・遊女・書品等に係る項が多い。略暦大小の始の條から幕明の口上の條まで四十四條を收めてある。著者の知友西原梭江（松羅館）に贈つたものの由の跋語があり、又享和三年の自序があつて、「平澤常富六十九歳」と署してある。本文中所々の項下に、石川雅望・滝澤馬琴の附考がある。　（和田）

野ざらし紀行（のざらしきこう）　俳諧紀行　一巻　【著者】松尾芭蕉　【名寄】初め草稿のまゝ冊子に書き、後に清書したもの　【成立】貞享元年八月、芭蕉は門人千里を従へ深川の庵を出で、路を東海道に取り、富士川を過ぎ、伊勢に到り、松葉屋風瀑を訪れ、十日ばかり留まり、外宮に詣で、西行谷の麓を過ぎ、山田の雷枝・嘯山を訪ひ、九月の初め郷里伊賀に着いた。それより大和に向ひ、葛下郡竹の内なる千里が家に到り、二上山當麻寺に詣で、ひとり芳野に入り、西行の庵跡を尋ね、後醍醐天皇の御陵を拝み、山城を経て近江に入り、美濃に到つて大垣の木因の家に主として居り、次いで熱田に詣で、名古屋に吟行し、故郷の山家にて歳を越え、貞享二年春奈良に出で、二月堂に籠り、洛に上つて三井秋風の鳴瀧の山荘を訪ひ、伏見西岸寺任口上人に謁し、近江に入り、湖水を眺望し、再び尾張の桐葉の許に到り、それより甲斐を経て、四月の末、深川の草庵に帰るまでの紀行である。【價値】熱田・名古屋を中心として、その周圍に蕉風の勢力を扶植し得たのは、この旅行の大なる收穫であつた。「俳諧七部集」（別項）の最初に選ばれてある「冬の日」の五歌仙が名古屋で成つたのもこの時である。素堂の跋には、紀行中の彼此の句を推賞し、殊に山路来てのすみれ、道端のむくげ、昨日や鶴を盗まれしの句を秀逸としてある。その文は、「笈の小文」「奥の細道」（各別項）と共に並稱さるべきもので、簡浄にして雄健、富士川のほとりに捨子をあはれむの條の如き、特に名文とされてある。其角は狂句木枯しの吟行でますます〳〵蕉徳化し、正風の帥と仰がれたと云つてあるが、句と云ひ文と云ひ、この紀行が如何に蕉風弘通の為を作つたかが推知さるゝ。

（筆自蕉芭）行紀しらざ野

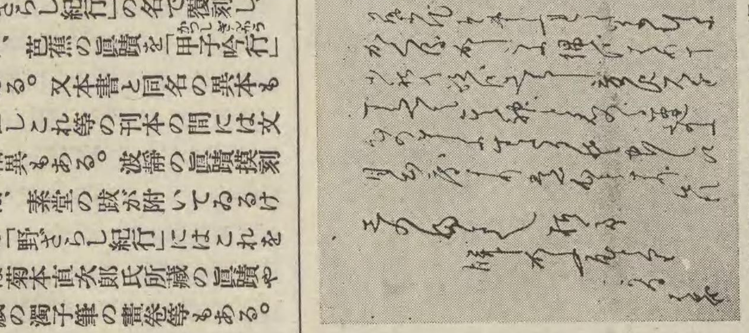
【參考】野崎左文自傳○私の見た明治文壇○泊船集○泊船集註解○鹿島紀行○野ざらし紀行○芭蕉翁行脚集○芭蕉翁行脚集評釋○芭蕉文庫○蕉門俳諧の研究○芭蕉紀行全集（藏原伸二郎）

のせ猿草子（のせざるさうし）　御伽草子　二十三篇の一冊　【成立】室町期か　【諸本】古板本は御伽草子本。御伽草子後編（今泉雄山校）・御伽草紙（有朋堂文庫）・日本文學大系第十九巻等所收。【解説】童話。異類物の戀愛物語。丹波國のせ山の老猿ましお權頭に、苔丸殿と云る上人の女ならでは先祖猿丸大夫の系圖にも恥ぢるとて京に出で、東山邊りの漫歩きに、北白川の御所で琴を彈いてゐる美しい姫君を見染め、日吉の社に參つて姫を得たいと祈り、苔の姫なる由を語り、幸ひ御仕へしてゐる娘けしやうのまひ（尼）を手引に戀を叶へさせようと勵まし、文を書かせて蝶し、遂に契を結ばせたので雙方の親も喜悦し、姫はのせ山に迎へられてめでたく終えた。（島津）

後鈴屋集（のちのすずのやしふ）　和歌集　前編三卷・後編三卷計六冊　【著者】本居春庭　【刊行】文化十三年十二月の本居建正の序及び本居有卿の跋歌一首を加へ、天保三年刊行。【諸本】第三卷に所收。【内容】兩編共に、上卷春・夏部、中卷秋・冬部、下卷戀・雜部となつて、全部の最初に選ばれてある「冬の日」の五歌仙（別項）の最初に置かれてある「冬の日」の五歌仙

後はむかし物語（のちのはむかしものがたり）　隨筆　一卷　【著】平澤常富（田鶴堂喜三二）　【成立】喜和三年　【諸本】燕石十種第一冊所收　【解説】自序中に「我七つ八つになりけるとしよりこなた覚束のころまでの事、耳の底に殘り或はそら覚えに覚えたりしたはれごとの忘れたるはわすれたるまゝにかいつけて云々」とあるごとく、江戸期中葉の俗事を記したもので、江戸を主とし、聊か京都の事にも及び、歌謡・劇場・遊女・書品等に係る項が多い。略暦大小の始の條から幕明の口上の條まで四十四條を收めてある。著者の知友西原梭江（松羅館）に贈つたものの由の跋語があり、又享和三年の自序があつて、「平澤常富六十九歳」と署してある。本文中所々の項下に、石川雅望・滝澤馬琴の附考がある。　（和田）

野ざらし紀行（のざらしきこう）　俳諧紀行　一　【著者】松尾芭蕉　【名寄】初め草稿のまゝ冊子に書き、後に清書したもの　【成立】貞享元年八月、芭蕉は門人千里を従へ深川の庵を出で、路を東海道に取り、富士川を過ぎ、伊勢に到り、松葉屋風瀑を訪れ、十日ばかり留まり、外宮に詣で、西行谷の麓を過ぎ、山田の雷枝・嘯山を訪ひ、九月の初め郷里伊賀に着いた。それより大和に向ひ、葛下郡竹の内なる千里が家に到り、二上山當麻寺に詣で、ひとり芳野に入り、西行の庵跡を尋ね、後醍醐天皇の御陵を拝み、山城を経て近江に入り、美濃に到つて大垣の木因の家に主として居り、次いで熱田に詣で、名古屋に吟行し、故郷の山家にて歳を越え、貞享二年春奈良に出で、二月堂に籠り、洛に上つて三井秋風の鳴瀧の山荘を訪ひ、伏見西岸寺任口上人に謁し、近江に入り、湖水を眺望し、再び尾張の桐葉の許に到り、それより甲斐を経て、四月の末、深川の草庵に帰るまでの紀行である。【價値】熱田・名古屋を中心として、その周圍に蕉風の勢力を扶植し得たのは、この旅行の大なる收穫であつた。「俳諧七部集」（別項）の最初に選ばれてある「冬の日」の五歌仙が名古屋で成つたのもこの時である。素堂の跋には、紀行中の彼此の句を推賞し、殊に山路来てのすみれ、道端のむくげ、昨日や鶴を盗まれしの句を秀逸としてある。その文は、「笈の小文」「奥の細道」（各別項）と共に並稱さるべきもので、簡浄にして雄健、富士川のほとりに捨子をあはれむの條の如き、特に名文とされてある。其角は狂句木枯しの吟行でますます〳〵蕉徳化し、正風の帥と仰がれたと云つてあるが、句と云ひ文と云ひ、この紀行が如何に蕉風弘通の為を作つたかが推知さるゝ。



（筆自蕉芭）行紀しらざ野

【參考】野崎左文自傳○私の見た明治文壇○泊船集○泊船集註解○鹿島紀行○野ざらし紀行○芭蕉翁行脚集○芭蕉翁行脚集評釋○芭蕉文庫○蕉門俳諧の研究○芭蕉紀行全集（藏原伸二郎）

のせ猿草子（のせざるさうし）　御伽草子　二十三篇の一冊　【成立】室町期か　【諸本】古板本は御伽草子本。御伽草子後編（今泉雄山校）・御伽草紙（有朋堂文庫）・日本文學大系第十九巻等所收。【解説】童話。異類物の戀愛物語。丹波國のせ山の老猿ましお權頭に、苔丸殿と云る上人の女ならでは先祖猿丸大夫の系圖にも恥ぢるとて京に出で、東山邊りの漫歩きに、北白川の御所で琴を彈いてゐる美しい姫君を見染め、日吉の社に參つて姫を得たいと祈り、苔の姫なる由を語り、幸ひ御仕へしてゐる娘けしやうのまひ（尼）を手引に戀を叶へさせようと勵まし、文を書かせて蝶し、遂に契を結ばせたので雙方の親も喜悦し、姫はのせ山に迎へられてめでたく終えた。（島津）

後鈴屋集（のちのすずのやしふ）　和歌集　前編三卷・後編三卷計六冊　【著者】本居春庭　【刊行】文化十三年十二月の本居建正の序及び本居有卿の跋歌一首を加へ、天保三年刊行。【諸本】第三卷に所收。【内容】兩編共に、上卷春・夏部、中卷秋・冬部、下卷戀・雜部となつて、全部の最初に選ばれてある「冬の日」の五歌仙

後はむかし物語（のちのはむかしものがたり）　隨筆　一卷　【著】平澤常富（田鶴堂喜三二）　【成立】喜和三年　【諸本】燕石十種第一冊所收　【解説】自序中に「我七つ八つになりけるとしよりこなた覚束のころまでの事、耳の底に殘り或はそら覚えに覚えたりしたはれごとの忘れたるはわすれたるまゝにかいつけて云々」とあるごとく、江戸期中葉の俗事を記したもので、江戸を主とし、聊か京都の事にも及び、歌謡・劇場・遊女・書品等に係る項が多い。略暦大小の始の條から幕明の口上の條まで四十四條を收めてある。著者の知友西原梭江（松羅館）に贈つたものの由の跋語があり、又享和三年の自序があつて、「平澤常富六十九歳」と署してある。本文中所々の項下に、石川雅望・滝澤馬琴の附考がある。　（和田）

野乃舎随筆（のぬのやずいひつ）　随筆　一巻　【著

珍らしい大部のものである。

神社に關する考証。中書自筆補訂稿本四冊國書刊行會藏）○瞼の杉一卷（山城國菊宿神社に關する考證）○番神考一卷（山城國平野神社・河内國安宿郡飛鳥戸神社・同國志紀郡當宗神社の祭神に關する考證）○八幡考一卷○中臣祓詞要解一卷（中書自筆補訂稿本一冊國書刊行會藏）○係姫命世紀考一卷（神道五部書の一たる「係姫命世紀」に考註したもの。未定稿。稿本一冊帝國圖書館藏）○佛神論一卷（自筆稿本、表題「靈佛神論」一冊帝國圖書館藏）○竹葉祕抄一卷（皇族賜姓の研究。中書自筆補訂稿本一冊國書刊行會藏）○宇知都志祇一卷（中書自筆補訂稿本一冊國書刊行會藏）○長等の山風二卷・附錄四卷（弘文天皇の御事蹟に就いて考說し、壬申役に關する大海人皇子方の人々に就いての考說を附錄としたもの。中書自筆補訂稿本四冊國書刊行會藏）○殘櫻記二卷（南北朝合一以後に於ける南朝方の諸皇子の御事蹟を述べ、下卷に嘉永の役に於ける三種の神器並に安德天皇に就いて述べたもの。嘉永三年刊）○高橋氏文考注二卷○松の蔭論一卷（藤坂鎌足の子なりといふ定説を論證したもの。中書自筆補訂稿本一冊國書刊行會藏）○中外經緯傳六卷（前三卷は朝鮮・支那・琉球等との外交に關する記述、後三卷は征戎遺文類として天正十一年から慶長四年に至る琉球朝鮮との外交古文書を年代順に編纂したもの。中書自筆補訂稿本六冊國書刊行會藏）○和氣系圖附考一卷（中書自筆補訂稿本一冊國書刊行會藏）○史籍年表二卷（未定稿。稿本、未收本）○錦屏彩略年譜二卷（文政十二年刊、同四年刊、全集未收本）○假字本末（別）○雁鬘考一卷（用例を古書中から集めたもの。中書自筆稿）○假字本末（別）○假字本末の五音に就いて、その由來・名稱・沿革等を考證したもの。未定稿。全集未收本

武器考證訂補○姓氏錄注小補○姓序考小補○
御靈考○饅迪日命傳○眞榮弓柄考○葬儀考○○
論○神樂催馬樂歌語考○○三神器實祕抄○八所
外神社考○越前敎賀宮社私考○神樂催馬樂私
記注小補○若狹志小補○神名帳考證訂補○式
風土記注小補○豐後風土記注小補○出雲風土
證○風土記逸文略注○常陸風土記逸文略注○
叙附言○伊勢物語由來考○和名抄國郡鄉考
○言語轉訛論○語彙○和訓菜葉○類聚名義抄
にょる寫本一冊圖書寮藏、全集未收本）○成語推格
集未收本）○獸肉臠湯考附穢多考一卷（自筆稿本
帝國圖書寮藏）○獸尤考一卷（寫本一冊圖書寮藏、全
書寮藏）○大刀契考一卷（中書自筆補訂稿本圖書寮
藏○寶鏡祕考一卷○弓矢古義推考一卷（國書
寮藏寫本「鈔實私論」と同本か）○服飾考々攷考一卷（自
筆稿本一冊帝國圖書館藏）○鞆考補證一卷（伊勢
も考證を得意とした。また六國史の校訂は、
畢生の力を盡したところであつて、明治十七
年命により、その稿本を宮内省に提出した。
【參考】伴信友翁傳（伴信友全集卷二所收）○山岸惟和○
伴信友翁略年譜（同上）○和田信二郎○伴信友と
平田篤胤との絶交問題（上田三平、歷史と地理二
ノ三所收）○伴信友著書目錄（嘉永三年刊、殘櫻記下卷
○伴信友翁著述目錄（寫本）

國造本紀考證○大同帝紀記○諡考○前王崩薨小記○
隱岐名勝○前山巡狩錄小補○補訂記（以上三十三部は全集未收本）○
史中に見える姓と名の索引、帝國圖書館藏の外に萬葉
集・新撰字鏡・字鏡集・類聚名義抄・和名抄（鰐名）・神名
帳・三代格・大神宮儀式帳解・姓氏錄（同上）・姓氏錄考
證・古事談・續古事談・安齋隨筆・翻譯名義集・藤關詔
詞解等の索引を編してゐる）○中古雅唱集（別項）
○武邊叢書十一卷（史籍集覽所收）○殘編總國風
土記（自筆校訂本六冊圖書寮藏）○皇居避災例（自
筆本をもとにした轉寫本一冊圖書寮藏）。以上の外、
逸文風土記・逸語國國內神名帳・神社古緣起類
集・武藏國阿伎留神社古物考・鸚武轉語例・增
加金石遺文・神樂祕函・古文書異體字彙（附皇國
製字・赤穗義士流芳・識人歌合部集・古墓誌集・
戶籍邊・波夫利和射集等の雜錄があり、校本類
も甚だ多い。

【業績】寸陰を惜しんで群書を涉獵し、殊に致
仕の後は俗事を全く放擲して專心著作に沒頭
し、その著は百餘部に上り、外に校訂輯錄したも
のも頗る多い。殊に假字に就いて各種の字體を
併せて字體變遷の大要をも知らしめ、又當時
の學界の論議の中心題目の一であつた神代文
字（別項）に就いて、その字體と史實の兩方面から
考證して、存在論を根柢から覆すなど、最
も考證を得意とした。また六國史の校訂は、
畢生の力を盡したところであつて、明治十七
年命により、その稿本を宮内省に提出した。
【參考】伴信友翁傳（伴信友全集卷二所收）○山岸惟和○
伴信友翁略年譜（同上）○和田信二郎○伴信友と
平田篤胤との絶交問題（上田三平、歷史と地理二
ノ三所收）○伴信友著書目錄（嘉永三年刊、殘櫻記下卷
○伴信友翁著述目錄（寫本）

以下百二十部の古書に見ゆる歌謠の記載によつてその調節を考
五十音順に排列してその出據を示したもの。○比古
婆衣（別項）○伊勢日記附註一卷（伊勢集
に校訂を加へたもの、自筆稿本一冊圖書寮藏）○源
順家馬毛名歌合注一卷（中書自筆補訂稿本一冊圖
書寮藏、全集未收本）○神樂歌考一卷○古詠考一
卷（古書に見ゆる歌謠の記載によつてその調節を考
證したもの）○長谷寺多寶塔銘文一卷○長谷寺
緣起剏僞一卷（中書自筆補訂稿本一冊圖書寮藏）○
上野國三碑考一卷（中書自筆補訂稿本一冊圖書寮
藏）○荒山大捷之神記事一卷○若狹舊事考一
卷○論鬼神新論一卷（平田篤胤の「鬼神新論」を批
評したもの）○正卜考三卷（安政五年刊三冊）○鑛
魂傳一卷（中書自筆補訂稿本一冊圖書寮藏）○方術
原論一卷（自筆補訂稿本一冊圖書寮藏）○周易私
論一卷○神籬三辨一卷（中書自筆補訂稿本一冊圖
書寮藏）○大刀契考一卷（中書自筆補訂稿本圖書寮
藏）○獸尤考一卷（寫本一冊圖書寮藏、全
集未收本）○獸肉臠湯考附穢多考一卷（自筆稿本
帝國圖書寮藏）○貞丈の一鞆考」の遺漏を補うたもの、自筆草稿本一冊
寮藏寫本「鈔實私論」と同本か）○服飾考々攷考一卷（自
筆稿本一冊帝國圖書館藏）○鞆考補證一卷（伊勢
も考證を得意とした。また六國史の校訂は、
畢生の力を盡したところであつて、明治十七
年命により、その稿本を宮内省に提出した。
【參考】伴信友翁傳（伴信友全集卷二所收）○山岸惟和○
伴信友翁略年譜（同上）○和田信二郎○伴信友と
平田篤胤との絶交問題（上田三平、歷史と地理二
ノ三所收）○伴信友著書目錄（嘉永三年刊、殘櫻記下卷

信名　なのぶ

【號】柳洲【生歿】天明七年常陸國久慈郡石
名坂村に生れ、天保七年（一八三六）十一月十
日歿す。享年五十。【法名】仰日院榊林文空
居士【墓所】江戸下谷常泰寺【家系】平國香
の末孫、坂本女トの子である。後、幕臣中山
有林の養子となる。【閱歷】幼少の時から强
記を以て知られ、「太平記」を誦んじて一字も
誤らないので、太平記童と呼ばれた。十六歲
の時、江戸に出でて搞保己一の門に入る。保
己一が群書類從の編纂をなす時に、信名をし
てその校訂の任に當らしめた。二十三歲、中
山氏の養子となり、翌年書物御用出役となつ
た（七十俵五人扶持）。三十二歲出役頭取となる。
後、和學講談所の敎授ともなつたが、書を著
し得た理由であると見られる。（久松）
【參考】荷田東麻呂翁大貳實滿○荷田全集

信名　なのぶ

【號】柳洲【生歿】天明七年常陸國久慈郡石
名坂村に生れ、天保七年（一八三六）十一月十
日歿す。享年五十。【法名】仰日院榊林文空
居士【墓所】江戸下谷常泰寺【家系】平國香
の末孫、坂本女トの子である。後、幕臣中山
有林の養子となる。【閱歷】幼少の時から强
記を以て知られ、「太平記」を誦んじて一字も
誤らないので、太平記童と呼ばれた。十六歲
の時、江戸に出でて搞保己一の門に入る。保
己一が群書類從の編纂をなす時に、信名をし
てその校訂の任に當らしめた。二十三歲、中
山氏の養子となり、翌年書物御用出役となつ
た（七十俵五人扶持）。三十二歲出役頭取となる。
後、和學講談所の敎授ともなつたが、書を著
し得た理由であると見られる。（久松）
【參考】荷田東麻呂翁大貳實滿○荷田全集

信名　なのぶ

【號】柳洲【生歿】天明七年常陸國久慈郡石
名坂村に生れ、天保七年（一八三六）十一月十
日歿す。享年五十。【法名】仰日院榊林文空
居士【墓所】江戸下谷常泰寺【家系】平國香
の末孫、坂本女トの子である。後、幕臣中山
有林の養子となる。【閱歷】幼少の時から强
記を以て知られ、「太平記」を誦んじて一字も
誤らないので、太平記童と呼ばれた。十六歲
の時、江戸に出でて搞保己一の門に入る。保
己一が群書類從の編纂をなす時に、信名をし
てその校訂の任に當らしめた。二十三歲、中
山氏の養子となり、翌年書物御用出役となつ
た（七十俵五人扶持）。三十二歲出役頭取となる。
後、和學講談所の敎授ともなつたが、書を著

信淵　ひのぶち

【號】椿園・翠屋・松庵【生歿】佐
渡草蘇下町松庵等【閱歷】信淵夙に父秦信に
從ひ、生國出羽を出て江戸に遊び、宇田川槐園
の門に入り、蘭學を究めたが、文化十二年、本
田篤胤の門に入り、神道を學んだ。彼は常に
蒼莽に從事しつつ天下を巡遊し、開物成務の
方法を起し、殖産興業の道に多大の改善を施
し、海防火技の術に前古未發の說を立てた。
【著書】天地鎔造化育論○弊政改革記○開物
論○農政本論等。
【批評】信淵已に篤胤の門に學んだので、その
說平田流の傾向を免れないが、また二書考孔仲
尼、鄕字に從つて古昔を學びき。大道を脩る
者は、固より常師なし。苟くも合靈を濟救す
るの業に裨益あらば、則ち蠻夷戎狄も何の選

信淵　ひのぶち

【號】椿園・翠屋・松庵【生歿】佐
渡草蘇下町松庵等【閱歷】信淵夙に父秦信に
從ひ、生國出羽を出て江戸に遊び、宇田川槐園
の門に入り、蘭學を究めたが、文化十二年、本
田篤胤の門に入り、神道を學んだ。彼は常に
蒼莽に從事しつつ天下を巡遊し、開物成務の
方法を起し、殖産興業の道に多大の改善を施
し、海防火技の術に前古未發の說を立てた。
【著書】天地鎔造化育論○弊政改革記○開物
論○農政本論等。
【批評】信淵已に篤胤の門に學んだので、その
說平田流の傾向を免れないが、また二書考孔仲
尼、鄕字に從つて古昔を學びき。大道を脩る
者は、固より常師なし。苟くも合靈を濟救す
るの業に裨益あらば、則ち蠻夷戎狄も何の選

【影響】彼の學は、その子延經（別項）に傳はり、門人山本廣足・島野時繩（別項）・松下見林等によつて首揚せられ、大儒山崎闇齋（別項）も亦これを發揮してゐる。要するに彼は、神道研究の未だ發達せざる時代に、能く一家の見を立て、學界の荊棘を開き、本居・平田等の學者の勃興を促したるの功は、偉なりと云はなくてはならぬ。（田中義）

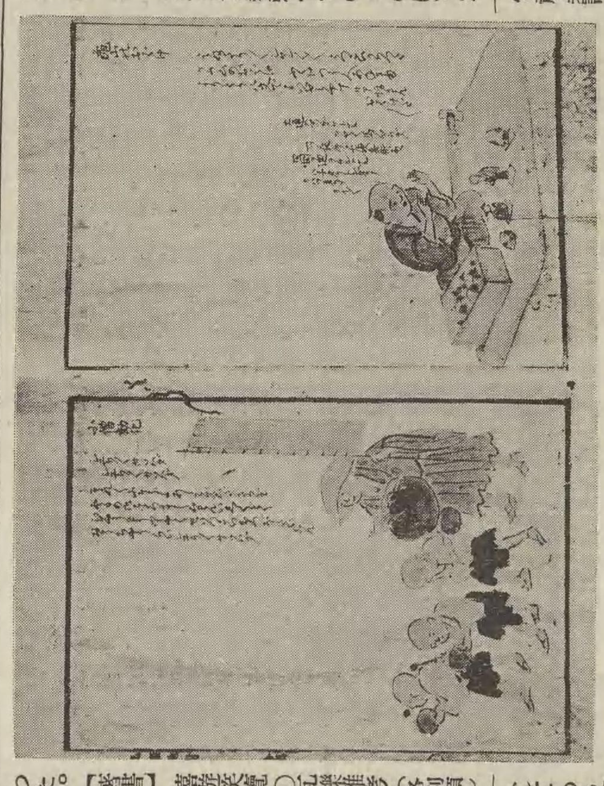
昇曙夢（のぼるのぶる）　飜譯家　【本名】直隆　【閲歴】明治十一年七月、鹿兒島縣大島郡に生れた。明治三十六年正教神學校を卒業、同校の教師となり、大正五年、陸軍教授に任命され、陸軍士官學校の教官となつた外、各種の學校の講師として、露語及び露文學の教授につとめた。昭和三年の秋、トルストイ誕生百年祭に際し、勞農露國政府の招待を受けて、露國に赴いた外、露國に遊ぶこと前後三回、昭和七年、陸軍士官學校を辭し、昭和八年日本大學藝術科講師となつた。【著述】二葉亭四迷の死去以後、露西亞文學界の唯一の權威として、露國文學の新思潮や文學の現情を、新聞雜誌に紹介批評した外、ロシヤ近代文學の飜譯も少くなく、海外思潮の移植者としての、昭和五六年までに至る彼の功績は極めて多い。著書に「ロシヤ近代文藝思想」「露國現代思潮及び文學」「露國革命と社會運動」外、諸種のパンフレットがあり、飜譯には「決闘」「虐げられし人々」「復活」その他がある。（千葉）

呑込多靈寶緣起（のみこんだぜんうえんぎ）　黄表紙　三冊　十五丁二十圖　【作者】山東京傳　【畫工】重政畫風　【名義】角書に「諸色とある。【刊行】享和二年鶴屋版（「諸色大寺の開帳と靈寶の緣起とを茶化した意味。【諸本】近代日本文學大系）

し、遂に欝然一家を成し、慶安元年、與村弘正等と謀り、豐宮崎文庫を創立し、益々斯學の發展を期した。【著書】陽復記○伊勢大神宮神異記○神代卷講述抄○大神宮神道或問○大神宮神道啓蒙問答○靈顯鴻事紀○靈頭古事記等。

【學風】從來の神道說は、佛敎によつてその說を構成せるところ多きも、延佳は「神道五部書」の「屛佛法息二の話に基いて、專ら佛敎を排斥し、儒敎、殊に易によつてその說を立て、「神道と易とは符節を合はしたるが如し」と云ひ、「日本の神聖の跡、唐の聖人の書に符を合せたる事は、いかゞと思ふべけれど、天地自然の道の、かの國こゝの國うちがひなき、是ぞ神道なるべき」（國復記）と云つてゐる。併し神道は「易」から出たと云ふ說には極力反對し、「神代より相傳にはあらずして、大神宮の御傳にはあらず、中道を修行し、正直の御敎を信じ、本心に違ふ時は、日用の間神道ならずと云事なし。さして是は神道なりと一々指南に及べきなり。天神・地神より相傳の中極の道を根と云は、上一人より下萬民まで行ふ且暮の道じてゐる。

【批評】かくて延佳の自家の神道說は、「神道（本稿執筆者）



【參考】平田篤胤之哲學　田中義能　（田中（義）○）

信充（のぶみつ）　故實家　【姓名】栗原。幼名陽太郎。通稱孫之丞、字伯任　【號】柳峯・柳閭。別號又樂（隱居後）　【生歿】寛政六年七月二十日江戸駿河臺紅梅坂に生れ、明治三年十一月二十八日京都に歿した。享年七十七。　【墓所】京都鞠尾山高山寺　【閲歴】幼より學を好み、漢學を柴野栗山に、故實を伊勢貞丈の後裔某に、國學及び書道を屋代弘賢に學んだ。中にも弘賢に侍すること三十年、その感化を受くること多大であつた。文化中弘賢が幕命に依つて「古今要覽稿」（別項）を編纂するに當り、信充も同所詰を命ぜられ、これに干與したが、後、脚疾のために職を辭し、家居して著述に從事する傍ら門生に敎授した。元治元年昌津久光の招聘に應じて薩藩に下り、冬に至つて歸來した。明治元年に至り、本姓の武田に改めた。【著書】敎鑑新書十卷・敎鑑工譜四卷・敎鑑工譜略一卷（天保十五年刊）○木弓敎鑑（別項）○鏡三卷（同上）○弓箭圖式一卷（同上）○武器袖珍（別項）○柳營隨筆（別項）○柳營雜筆○柳營雜筆（別項）○柳營雜筆○柳營隨筆（別項）○柳營雜筆○柳營隨筆（別項）○柳營雜筆○柳營隨

享和元年の浅草観世音・亀戸天満宮・目黒不動・武州熊谷寺及び蔵前八幡等の開帳に、善男善女が参詣し、作者の盡す精氣菩薩、油を賣す行燈菩薩を脇士として本尊が立たせ給ひ、靈寶の展觀などに當てこんだもの。また「三寶利生若竹」（安永六年版、京傳作）、「身貌大通神略縁起」（天明元年版、京傳作）、「狂文寶合記」（天明三年版、爲鳳筆談、政演、政美畫）等にもよつてゐる。

【梗概】赤本尊工夫編出如來の開帳に、善男善女が參詣し、作者の盡す精氣菩薩、油を賣す行燈菩薩を脇士として本尊が立たせ給ひ、靈寶の展觀などに當てこんだもの。また「三寶利生若竹」（安永六年版、京傳作）、「身貌大通神略縁起」（天明元年版、京傳作）、「狂文寶合記」（天明三年版、爲鳳筆談、政演、政美畫）等にもよつてゐる。

【備想】當時の僧侶が營利のために頻々と行ふ開帳、荒唐無稽の靈寶の拝觀に、人生の種々相を誇張して寶合記風に表現せんとする。ここに「身貌大通神略縁起」によつてやゝ見るべき形に纏められてゐた。京傳はそれを擴充して「三寶利生初竹」に於て現はれ、更にそのお守と奉納品が色々ならべてある。最後に出開帳箱入を買うて開いて見れば、との書で有つたから早速上梓したと落す。

【構想】當時の僧侶が營利のために頻々と行ふ開帳、荒唐無稽の靈寶の拝觀に、人生の種々相を誇張して寶合記風に表現せんとする。ここに「身貌大通神略縁起」によつてやゝ見るべき形に纏められてゐた。京傳はそれを擴充して「三寶利生初竹」に於て現はれ、更にそのお守と奉納品が色々ならべてある。最後に出開帳箱入を買うて開いて見れば、との書で有つたから早速上梓したと落す。

【史的地位】京傳は既に「狂文寶合記」にも見える如く、開帳の廣告を出すなどは人を喰つたものであるが、自家の商品讃書丸の廣告を出すなどは人を喰つたものである。【史的地位】京傳は既に「狂文寶合記」にも見える如く、開帳の廣告を出すなどは人を喰つたものであるが、自家の商品讃書丸の廣告を出すなどは人を喰つたものである。

【評】京傳は既に「狂文寶合記」にも見える如く、開帳の廣告を出すなどは人を喰つたものであるが、自家の商品讃書丸の廣告を出すなどは人を喰つたものである。【評】京傳は既に「狂文寶合記」にも見える如く、開帳の廣告を出すなどは人を喰つたものであるが、自家の商品讃書丸の廣告を出すなどは人を喰つたものである。

【參考】隨筆文藝集　久松齋一編　○野守鏡に就て

【範兼】（のりかね）歌人【姓】藤原【生歿】永萬元年（一一六五）歿、享年五十九（公卿補任）說と、保延元年（一一三五）歿、享年五十四（尊卑分脈）說とがある。【閲歴】父は能兼。應保二年刑部卿に任じ、三年從三位に敍したが參議に任ぜず、永萬元年二月出家し、四月薨じた。應保二年三月十三日中宮具合に列座した清輔の手記（袋草紙第三卷の終）には、範兼が顯廣（後成）と合體して傍若無人の言をなしたので、清輔は明證をもつて駁破したとあり、評語に「範兼顯廣が同心の時如此、開證文、復如鼠也」とある。恐らく清輔とは合はなかつたのであらう。「類聚歌合」があり、別に「範兼卿身まかりて後法事の日誦經し侍りける諷誦文に書付けた歌がある。「新續古今集」には髪をおろした頃、殷富門院大輔と贈答した歌がある。その他平治元年大嘗會によんだ主基の歌（千載・新古今）、二條院に召された百首の歌等がある。「林葉集」には俊憲が彼の家でよんだ歌が見える。【著作】和歌童蒙抄（別項）十卷　○後六六撰二卷（群書類從一五九所收）　○五代名所歌枕　○薫集類抄二卷（群書類從一五九所收）　○範兼卿集　○野守鏡

【參考】隨筆文藝集　久松齋一編　○野守鏡に就て

【範兼】（のりかね）歌人【姓】藤原【生歿】永萬元年（一一六五）歿、享年五十九（公卿補任）說と、保延元年（一一三五）歿、享年五十四（尊卑分脈）說とがある。【閲歴】父は能兼。應保二年刑部卿に任じ、三年從三位に敍したが參議に任ぜず、永萬元年二月出家し、四月薨じた。應保二年三月十三日中宮具合に列座した清輔の手記（袋草紙第三卷の終）には、範兼が顯廣（後成）と合體して傍若無人の言をなしたので、清輔は明證をもつて駁破したとあり、評語に「範兼顯廣が同心の時如此、開證文、復如鼠也」とある。恐らく清輔とは合はなかつたのであらう。「類聚歌合」があり、別に「範兼卿身まかりて後法事の日誦經し侍りける諷誦文に書付けた歌がある。「新續古今集」には髪をおろした頃、殷富門院大輔と贈答した歌がある。その他平治元年大嘗會によんだ主基の歌（千載・新古今）、二條院に召された百首の歌等がある。「林葉集」には俊憲が彼の家でよんだ歌が見える。【著作】和歌童蒙抄（別項）十卷　○後六六撰二卷（群書類從一五九所收）　○五代名所歌枕　○薫集類抄二卷（群書類從

書の論書の中で、やゝ組織的になつたのは「野守鏡」を初めとするが、純粹理論の點が拙いに拘らず、その價値は相當に大きいのである。

【參考】隨筆文藝集　久松齋一編　○野守鏡に就て

【範兼】（のりかね）歌人【姓】藤原【生歿】永萬元年（一一六五）歿、享年五十九（公卿補任）說と、保延元年（一一三五）歿、享年五十四（尊卑分脈）說とがある。【閲歴】父は能兼。應保二年刑部卿に任じ、三年從三位に敍したが參議に任ぜず、永萬元年二月出家し、四月薨じた。應

貞嗣……┬能兼……┬女子（範兼母）
　　　　└光保……┬能兼

柳葉漫筆等。【石村】

信節（のぶよ）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

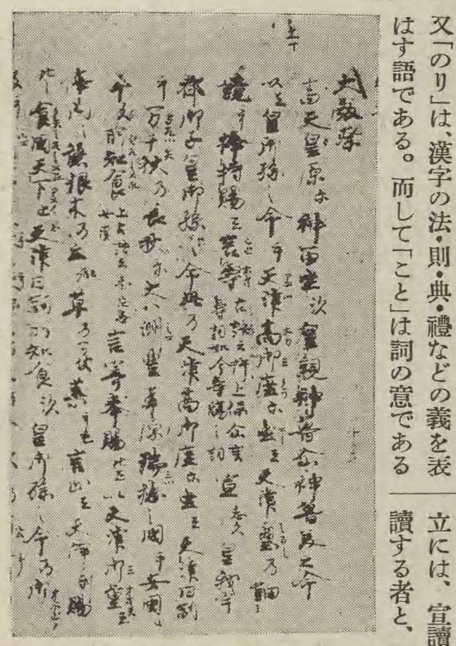
信節（のぶよし）【姓名】【生歿】【閲歴】【著作】

三五八所載）○歌は千載集以下に凡そ二十首。【參考】日本歌學史佐佐木信綱　○國文學研究史　野村八良　〔西下〕

規清（のりきよ）　神道學者【姓】加茂、又は梅辻氏【號】對翁・齋守翁・三午翁・瑞烏園【生歿】寛政十年五月十九日に生れ、文久元年（一二五一）七月二十一日歿す。享年六十四。【家系】加茂建角身命（かもたけつのみのみこと）の裔、報清（むくきよ）の子。【閲歴】規清は夙く家務を嗣ぎ、上加茂社の神職となつた。天保中江戸に出で、烏傳神道を唱ふ。烏傳とは遠祖加茂建角身命の八咫烏によつて得たる名と云ふ。弘化三年下谷池之端仲町に瑞烏園を起し、神道布教に從事した。信徒多く盛大を極めたが、幕府のために妖言人を惑はすものとして、八丈島に流された。嘉永元年四月配所に着し、以後十四年、著書と島民の敎化とに從事し、遂に配所で逝いた。【著書】烏傳神道大意○日本書紀常世長鳴鳥○烏傳神代卷等。【學說】神道を實際的に說き、古傳を比喩的に解し、國常立尊は父は天、母は地と云ふが如くに說き、現在の生活を安らかにし、これを利益するの外に神道はないものとしてゐる。

〔田中（義）〕

祝詞（のりと）　【名稱】「古事記」上卷に「布刀詔戸言（ふとのりとごと）」といひ、「書紀」神代卷に「太諄辭（ふとのりと）此云二布斗能理斗一」と記してゐる如く、美稱の「太」を添へて、「ふとのりとごと」とも、「ふとのりと」とも云つたのである。「のりと」は「のりごと」の「こと」を省いたのであつて、「のりごと」の「と」を省いて「のりと」ともいひ、「り」を省いて「のとごと」ともいはれ、又「のりと」は中古以後轉訛して「のつと」とも、「のと」とも云はれた。【名義】祝詞の祝の字は尸祝・祁祝などの祝で、あつて、「文選朝辭」に「祝祀文者饗」神之辭也」とある如く、神を祭る詞を指す。「のりと」は「のりとごと」の略であるから、名義は「のりとごと」によつて考へらるべきである。「のりとごと」の解釋に就いては從來諸說があつたが、宣說言（のりとごと）の義と見る宣長の說（古事記傳卷八・大祓詞後釋）が最も廣く行はれてゐる。併し近來は「のりとごと」を原形と見て解釋を下す學者が多い。元來「のる」は宣・告・詔などの字義に相當する語であつて、「告（の）る」「述ぶ」「伸ぶ」などと同じ系統に屬する語であり、又「のり」は、漢字の法・則・典・禮などの義を表はす語である。而して「こと」は詞の意である



延喜式祝詞（九條家本）

ことは明かであるが、「と」に就いては種々の說があつて、「とごひ」（呪詛）の「と」であると云ひ、助詞の「つ」の古形であると云ひ、又「こと」（事）の意を有する接尾辭であるとも云はれてゐて未だ定說がない。要するに祭祀に當つて神前に奏上し、若しくは百官神職等に宣布する詞の義である。【本質】祝詞は上代民族の間に廣く行はれた言靈信仰に基いて發生したものであつて、善言美辭を述べて幸福なる結果を得んことを祈請する祝言、若しくは呪禁の詞の發達したものである。而して祝詞はもと上古の儀禮的生活に於て共同の神を祭る祭儀に用ひられた祈禱の詞であつたが、國家の統一が成り、次いで中央集權制が確立して後は、祭祀も亦國家的となつて、朝廷に於て營まれる祭祀は、皇室の長久繁榮、國家の安泰、國民の無事幸福を祈ることを目的とするやうになつたから、その祭祀に用ひられる祝詞も亦、その目的に適應した形式と内容とを有するものとなり、かくて時代と共に洗練せられて遂に上代の文學的作品の一となつたのである。而して國家的祭祀に用ひられた祝詞の成立には、宣讀を命ずる主體と、命を受けて宣讀する者と、これを受ける客體との三つの要素を必要とする。一般には祝詞は天神の神勅により、若しくは現つ神なる天皇の詔命によつて宣讀するものであつて、これを宣讀するものは、中臣・齋部の如き祭祀を掌る官職に在る者であり、これを受ける客體は主として神祇であるが、時に邪氣・妖魔・惡靈などであることもある。普通祝詞と稱するものの中には壽詞（よごと）（別項）が含まれてゐる。壽詞は吉詞とも記されて「よき言」の義である。神代以來傳はつた善言吉詞を述べ、その言靈の活動によつて御代の長久を祝福するものであるから、その形式・内容、共に祝詞と相似たものである。隨つて祝詞と區別する必要のない限りは、これを廣義の祝詞として取扱ふのが普通である。【傳來】文獻の上に祝詞を奏した事が見えた最古の記事は、記紀神代卷の天岩屋戸の神話であつて、「古事記」には中臣の遠祖天兒屋命が「布刀詔戸言」を奏上したことが見え、「日本書紀」には、天兒屋命と忌部の遠祖太玉命とが、相共に祈禱（いのり）り申したことが見えてゐる。この時の祝詞は記されてゐないけれども、書紀一書に「廣厚稱辭（ひろくあつくたたへごと）祈啓（いのりまを）す」と記し、又天照大御神がこれを聞し召して「未レ有二若レ此言之麗美者一也」と仰せられたと記してゐるのを見れば、上古の祝詞が善言美辭を連ねたものであつたことを知り得るのである。次いで「古事記」の大國主命の神話の中に、櫛八玉神（くしやたまのかみ）が大國主命の祭祀を營むために、火鑽（ひきり）の詞を奏したことが見えてゐる。その文辭によれば、神前に供する幣帛や神饌を讃美することが、古くからの慣例であつたのを窺ひ知ることが出來る。壽詞も亦古くから行はれたのであつて、顯宗天皇紀にある室壽詞（むろほぎのことば）は文獻に現はれた最古のものである。上古の祝詞は以上の如き所傳によつて大體を窺ふことが出來るが、上古のものは未だ定型がなく、而もその場限りのものであつたらしく、殆ど後世に傳誦せられてゐない。その後時代を下り祭式が一定するに及んで、祝詞にも自ら定型を生じたのであるが、併しその初めはなほ文字に記されることなく傳誦せられてゐたのであるから、この傳承時代に必ずや幾多の改修刪定が施されたであらう。かくて祝詞が愈々固定したのは、大寶令以後儀式典禮の編纂が行はれ、その中に收錄せられて以來の事である。さて上代の儀式典禮を記したもので、その名が傳はつてゐるのは天武天皇紀十年四月の條にある「禁式」九十二條が最初である。次いで文武天皇紀二年七月の條には、「別式」を作つたことが見えてゐるが、併しこれ等の式に祝詞が收錄せられてゐたか否かは明かでない。下つて延喜式の制作に「凡祭祀祝詞者、御殿（みあらか）・御門（みかど）等祭齋部（いはひべ）氏祝詞、以外者祭中臣氏祝詞（マヽス）」と規定せられ、

に清和天皇の朝には「貞觀式」が成つたのであつて、恐らく祝詞も採錄されてゐたのであらうが、これ等も亦後世散逸して傳はつてゐない。その後醍醐天皇の延長五年に至つて現存する「延喜式」が制定せられた。これは弘仁・貞觀兩式を併せて整理を加へ、更に新たに定められたものを增補して成つたものであつて、現存する上代の祝詞諸篇は、その卷第八に收められてゐる。これを「延喜式祝詞」(別項)又は「祝詞式」と呼んでゐる。「延喜式」所收の祝詞の大部分は、これより先、既に弘仁・貞觀兩式に收められてゐたのであつて、これに當時新たに制作せられたものを加へたのであらうと思はれる。尤も「弘仁式」の成る前、平城天皇の大同年間に齋部廣成が撰んだ「古語拾遺」には、大殿祭と御門祭の二篇を別卷に收めたことを記してゐるが、この別卷は後世散逸した。要するに上代の祝詞にして現存するものは、「延喜式」所收のもの二十七篇を主とするのであつて、その各篇の名目を掲げる。

祈年祭　○春日祭　○廣瀨大忌祭　○龍田風神祭　○平野祭　○久度古開　○六月月次祭(准レ之)十二月)　○大殿祭　○御門祭　○六月晦大祓(准レ之)十二月)　○東文忌寸部獻二横刀一時呪(西文部准レ之)　○鎭火祭　○道饗祭　○大嘗祭　○鎭御魂齋戸祭　○伊勢大神宮　○二月祈年六月十二月月次祭　○豐受宮・同祭　○四月神衣祭(准レ之)　○六月月次祭(准レ之)　○九月神嘗祭　○豐受宮・同祭・同神嘗祭　○齋內親王奉レ入時　○遷二奉大神宮一祝詞(豐受宮准レ之)　○遷二却崇神一　○遣二唐使一時奉幣　○出雲國造神賀詞。

以上の外、なほ平安朝末期に藤原賴長が記した日記「台記」の別記に收められた中臣壽詞(又「延喜式」卷第十六及び「朝野群載」に載せられた踐祚祭文一篇がある。而して「延喜式」所收の東文忌寸部獻二横刀一時呪は漢文の呪であり、又踐祚祭文の前半は漢文であつて中途から國文で記されてゐる。從つてこの二篇は文體を異にし、且つその內容は、殆ど外來思想に據つてゐるものであるから、他の祝詞と同じやうに取扱ふべきものでない。

【制作時代】現存する祝詞は、右の如き由來を經て固定したものであるから、その最初の制作時代を勘考することは甚だ困難である。六人部是香は「大祓詞天津菅麻」に於て、「古語拾遺」「天書」「舊事本紀」などの神武天皇の御代の所傳に基いて、大祓・大殿祭・御門祭の三篇を最古のものと見做して、神武天皇の御代に成立したものであると言つてゐるが、この說は根據が薄弱であつて信を置くことができない。賀茂眞淵は「祝詞考」の序に於て、文體・用語などから見て、出雲國造神賀詞は舒明天皇の朝に成り、大祓詞は天智・天武兩朝の頃に作られ、遷却崇神・大殿祭などは、持統・文武兩朝の頃に成り、祈年祭・廣瀨祭・龍田祭の如きは奈良朝の初期に制作せられたものであらうと述べてゐるが、この說も臆測に過ぎない。これ等の說に比して最も穩當なのは、本居宣長の說である。宣長はその著「大祓詞後釋」に於て、祝詞に時代的刪修の加はつてゐることを述べた後に、祝詞が固定したのは「大寶令」の頃か、又はそれよりやゝ以前の天智・文武兩朝の頃であらうが、それも確かには言へないことであり、また後に始まつた祭の祝詞があり、祭は古いけれどもその古い祝詞が散逸して、やゝ後世になつてから新たに作つたものもあるであらうと述べてゐるのは、傾聽すべき識見である。要するに「延喜式」所收の各篇には、新古樣々のものがあるのであつて、その一々の制作時代を推定することは、殆ど不可能の事であるが、祭祀の沿革や祝詞の文體・用語・內容などの點から考察して、祈年祭・月次祭・大祓・出雲國造神賀詞・中臣壽詞の如きは最も古い面目を保存するものであり、又春日祭・平野祭及び伊勢神宮の祭祀に用ひられた各篇の如きは、比較的新しいものであることは確かである。

【傳承者】上代の祝詞は傳誦文學であつて、個人の制作に係るものでないことは既に述べた通りである。朝廷の祭政に奉仕した中臣・齋部二氏の如きは、その職掌上から見て、祝詞の制作並に傳承に最も深い關係があつたことは勿論である。卽ち「祝詞式」の卷首に「凡祭祀祝詞者、御殿(みあらか)・御門(みかど)等祭齋部氏祝詞、以外諸祭中臣氏祝詞」と規定せられ、また齋部廣成が撰進した「古語拾遺」にも、大殿・御門二篇は、齋部氏所屬のものであることを記してゐる。これ等によつて、中臣・齋部二氏と祝詞との關係を窺ふことが出來る。尤も出雲國造神賀詞(別項)は、出雲國造が奏するものであり、東西文部獻二横刀一時呪は、東西兩文部が奏するものであつて、これ等はそれぞれその氏族の傳承に係るものであることは言ふまでもない。

【種類】上代の祝詞は、文章の形式上から見ると、文末が「諸聞食止宣」で終るものと、「稱辭竟奉白久(まをさく)」で終るものとある。前者は祭庭に集へる諸員に宣讀するものであつて宣命形式であり、後者は神祇に直接奏上するものであつて奏上形式である。而して宣命形式の祝詞は主として中臣氏所屬であり、奏上形式のものには齋部氏所屬のものと中臣氏所屬のものとある。かくて齋部氏所屬の祝詞の數が少く、その形式が奏上式のものに限られてゐるのに反して、中臣氏所屬の祝詞がその數も多く、その形式が主として宣命形式であるのは、この二氏の職掌上の相違によるのである。卽ち中臣氏は祭政の要職にあつて、祭祀に當つては百官若しくは神職を召集し、詔命を奉じて祝詞を宣ることを掌つたから、その形式は自ら宣命形式となつたのである。然るに齋部氏は上古に於ては、中臣氏と相並んで祭政の要路に立つたのであるが、後に中臣氏に壓倒せられて政治上の位置を失ひ、專ら祭祀にのみ仕へるやうになつたから、その所屬の祝詞は自ら奏上形式のものに限られるやうになつたのである。

【內容】祭祀の性質目的の異なるに應じて相違するのは當然であるが、一般には皇室の長久、國家の繁榮、國民の幸福を祈願する旨を述べることを主としてゐる。更に主要なる祝詞に就いて言へば、祈年祭には穀物の種子を蒔くに當つて、また月次祭にはその成育期に當つて、それ〴〵豐作を祈り、併せて皇室の安泰と國家・國民の繁榮とを祈るのであり、廣瀨・龍田の兩祭には、風水の災害を蒙ることなく五穀が豐熟することを祈願するのであり、神嘗・大嘗兩祭には、新穀を神に供して豐作を感謝し、且つ御代の長久を祈るのであつて、これ等は農業を以て立國の大本とせる國家最重の祭に關するものであつて、祝詞の主要なるものである。玉體の平安長久を祈り、宮殿の安泰を祈ることは、多くの祝詞に見えてゐるのであるが、特にその事を主として祈請するものには、大殿祭・御門祭・鎭火祭・鎭御魂齋

詞新講一卷次田潤

【參考】神と神を祭る者との文學武田祐吉○祝詞の發生折口信夫古代研究國文學篇）○祝詞と神と政治小山龍之輔（日本文學講座）○國文學上世篇）○祝詞の表現に就いて久松潛一（上代日本文學の研究）○祝詞の研究次田潤（神道講座）【次田】

祝詞考 からのりとと註釋書 三卷【著者】賀茂眞淵【名稱】原名「のりとごとのかむがへ」通稱「のりとかう」。【成立・由來】眞淵以前に世に行はれた祝詞の註釋は何れも神道家の手に成り、その所說は牽強附會の偏見であつて、殆ど學問的研究とは言ひ難く、眞淵の師春滿の偏見に囚はれた祝詞の註釋に自由討究を試みて、且つこれによつて古意・古語を明かにしようとして、延享三年（五十歳）に「延喜祝詞解」（五卷、賀茂眞淵全集所收）を著はして田安侯に上つた。「祝詞考」は更にその後二十二年を經て明和五年（七十二歳）に、前著に大修正を加へ面目を一新したものである。【刊行】卷頭に明和五年の自序があるが、刊行は寛政十二年であつて門人荒木田久老の繪板に係る。卷末の跋文中に「追考」二卷が見えてゐるが、遂に刊行せられなかつた。【諸本】賀茂眞淵全集所收。【內容】「延喜式祝詞」（別項）全部に訓釋を施したもの。本書には祝詞の總說はないが、序文に祝詞各篇の制作年代についての私見を述べ、本文の註釋の初めには、祝詞の語義を解釋してゐる。本文の訓釋に於ては、各篇の初めに先づ題意及び祭祀の解說を掲げた後に、「訓」方を附した本文を掲げ、語釋は各句毎に二行の細註を以て記し、なほ頭書を添へてもゐる。語釋を下すに當つては、本文の此句を

祝詞の中に建國創業の武勇を叙べ、出雲國造神賀詞の中に大國主命の國讓の事が見えてゐるのは、上代の祝詞・壽詞に於て更に詳細に述べられたものが、僅かにその名殘を留めてゐるのであると云ふ（芳賀矢一著國文學史概論）。

思ふに神話的叙事によつては、參集せる人々の心を遠く神代の昔に誘導し、時間的に遠大にして莊嚴の感を起さしめる效果があり、祈禱的叙述に於て、幣帛の品々を列擧し、神々の名を列ね、參集せる人々を擧げることによつては、聞く者の心に空間的に雄大森嚴な感を起させるのであつて、祝詞の莊重美はこの構造の上にも存するのである。

【表現形式】祝詞は言靈信仰に基いて起つたものであるから、上代人がこれに文學的技巧の最善を傾けたのは當然である。然るに元來祝詞に述ぶべき內容は、ほぼ一定してゐるのであるから、技巧は自ら形式方面に注がれるのである。先づ表現の特色に就いていへば、漠然とした廣大な感を起さしめることに力を注ぎ、又語を重ね句を疊んで、冗漫の中に自ら悠揚たる風格を備へ、鄭重な感を與へようとしてゐる。從つて修辭に於ても、譬喩や誇張の如きものを用ひることは少く、寧ろ音律の快美、聲調の莊重を期することに力を注いでゐるのである。

一篇だけを取出して見ると、思想が雄大であり、形式が莊嚴であり、聲調が快美であるが、各篇を通覽するときには、內容・組織・表現・修辭等が一定の型にはまつてゐて、變化に乏しく單調を感ずる。これが「古事記」や「萬葉集」などに較べて、大體的に低調に於てゐる所以である。

祝詞の中に建國創業の武勇を叙べ、出雲國造神賀詞の中に大國主命の國讓の事が見えてゐるのは、上代の祝詞・壽詞に於て更に詳細に述べられたものが、僅かにその名殘を留めてゐるのであると云ふ（芳賀矢一著國文學史概論）。

思ふに神話的叙事によつては、參集せる人々の心を遠く神代の昔に誘導し、時間的に遠大にして莊嚴の感を起さしめる效果があり、祈禱的叙述に於て、幣帛の品々を列擧し、神々の名を列ね、參集せる人々を擧げることによつては、聞く者の心に空間的に雄大森嚴な感を起させるのであつて、祝詞の莊重美はこの構造の上にも存するのである。

【表現形式】祝詞は言靈信仰に基いて起つたものであるから、上代人がこれに文學的技巧の最善を傾けたのは當然である。然るに元來祝詞に述ぶべき內容は、ほぼ一定してゐるのであるから、技巧は自ら形式方面に注がれるのである。先づ表現の特色に就いていへば、漠然とした廣大な感を起さしめることに力を注ぎ、又語を重ね句を疊んで、冗漫の中に自ら悠揚たる風格を備へ、鄭重な感を與へようとしてゐる。從つて修辭に於ても、譬喩や誇張の如きものを用ひることは少く、寧ろ音律の快美、聲調の莊重を期することに力を注いでゐるのである。

一篇だけを取出して見ると、思想が雄大であり、形式が莊嚴であり、聲調が快美であるが、各篇を通覽するときには、內容・組織・表現・修辭等が一定の型にはまつてゐて、變化に乏しく單調を感ずる。これが「古事記」や「萬葉集」などに較べて、大體的に低調に於てゐる所以である。

を畏怖に變化させ給ふことがあり、又雷電出雲國造神賀詞の中の安全を祈るものに遺唐使時奉幣の祝詞があり、百官を初め國民が過ち犯した罪や穢を祓ひ清めるために大祓があり、又遣外使節の道の安全を祈るものに、春日祭・平野祭などがあり、中臣壽詞・出雲國造神賀詞があり、外戚の神に御代の繁榮を祈るものに、中臣の外に御代の長久を祝福するものに、天皇の御靈を鎭め祭るものに、道饗祭・道鎭祭の諸篇がある。以上

呂祭・遷却崇神祭・道鎭祭の諸篇がある。以上を稱へ盡して、祈願の旨を述べるのである。

かくてこの二部から成る祝詞は古い型を保存するものであるが、新しいものは第一部を缺き、その代りに祈禱の詞が特に長大となつてゐる。芳賀矢一博士の說によれば延喜式祝詞は、その主要なる歷史・傳說の叙述を除去せられたものであつて、鎭火祭の中に伊邪那美命が火を產み給うたことが見え、大殿祭に齋庭の穗の齋庭を以て

試みて讀字・行文に就いての私見を記し、訓釋は記・紀・萬葉・宣命等の語例を引いて考證的に述べ、なほ文章・語句の構成に就いても觀察を加へてゐる。【價値】本書は「萬葉考」「冠辭考」（各別項）と共に眞淵の訓詁的業績の重要なるものであるが、眞淵は元來歌文に長じた文學者肌の人であつたから、その獨創の見識は動もすれば才にまかせて略轉を應用した爲めに、今日の語學的見地から見て、明かに誤謬と認められる點が少くない。併し傳統的に神祕主義を奉じて牽強附會した獨斷に陷り易く、訓義の解說には音の延約をした點に於ては驚異に値ひするのであるが、考證は多岐に亙つて冗長繁雜を極め、爲めに讀者をしてその要旨を摑むのに困難を感じさせる弊がある。彼はその師荷眞の學風を最もよく承けただけに、その神道論には眞淵・宣長の古學思想とは自ら異なる所があり、隨つて本書の所說には、古神道の本義から離れた見解や獨斷に失した缺點があり、又訓釋に於ては

彼の大著「日本書紀傳」と共に博引旁證に努めた點に於ては驚異に値ひするのであるが、考證は多岐に亙つて冗長繁雜を極め、爲めに讀者をしてその要旨を摑むのに困難を感じさせる弊がある。彼はその師荷眞の學風を最もよく承けただけに、その神道論には眞淵・宣長の古學思想とは自ら異なる所があり、隨つて本書の所說には、古神道の本義から離れた見解や獨斷に失した缺點があり、又訓釋に於ては

同	二年	別冊	社歌合の作者
同	元年	七月高野にて才蓮抄ロ	流され、應
治	元年	常陸國に配	
寬	元年	廣田社歌合の作者	保二年召還
安	二年	經盛朝臣家歌合の作者	道したが召
仁	二年	應保二年召還（五十四歳）	し捕へられ
安	三年	常保元年六月百首和歌	入り、入
同	六年	百首和歌	棄の龔隆寺
同	五年	正三位	戮敗れて太
久安	三年	從三位	
天養	元年	詞花集撰進の院宣下る	
保延	七年	參議（三十三歳）	

たが、御用ひがなく、已むなく白河殿に供奉した。滿を感じ、「拾遺古今二十卷を撰したといはれてゐる。保元の亂には崇德院を御諫め申し

滿を顧慮に值へたが、成立した詞花集には不敬を以て罰せられる使者として憂目を見た。

十まで存したことがわかる。顯昭は敎長註があまり杜撰なので、自らも註して守覺法親王に奉つたのであるが、奧書に「先是、宰相入道、俗名敎長、法名覺蓮、被注獻、賜件本、加披閱、乱邪正、仍多引載彼抄而已」とあつて、敎長も守覺法親王にこの註を奉つたこと、顯昭は同じく顯昭註に引用する敎長註と現存する敎長註とは全く一致しない點から見ると、顯昭の見たものと治承元年某に口授したといふ現存本とは成立が別であらうと考へられる。敎長註は貫之自筆と稱せられる崇德院本「古今集」を

試みて讀字・行文に就いての私見を記し、訓釋は記・紀・萬葉・宣命等の語例を引いて考證的に述べ、なほ文章・語句の構成に就いても觀察を加へてゐる。【價値】本書は「萬葉考」「冠辭考」（各別項）と共に眞淵の訓詁的業績の重要なるものであるが、眞淵は元來歌文に長じた文學者肌の人であつたから、その獨創の見識は動もすれば才にまかせて略轉を應用した爲めに、今日の語學的見地から見て、明かに誤謬と認められる點が少くない。併し傳統的に神祕主義を奉じて牽強附會した獨斷に陷り易く、訓義の解說には音の延約をした點に於ては驚異に値ひするのであるが、考證は多岐に亙つて冗長繁雜を極め、爲めに讀者をしてその要旨を摑むのに困難を感じさせる弊がある。彼はその師荷眞の學風を最もよく承けただけに、その神道論には眞淵・宣長の古學思想とは自ら異なる所があり、隨つて本書の所說には、古神道の本義から離れた見解や獨斷に失した缺點があり、又訓釋に於ては

彼の大著「日本書紀傳」と共に博引旁證に努めた點に於ては驚異に値ひするのであるが、考證は多岐に亙つて冗長繁雜を極め、爲めに讀者をしてその要旨を摑むのに困難を感じさせる弊がある。彼はその師荷眞の學風を最もよく承けただけに、その神道論には眞淵・宣長の古學思想とは自ら異なる所があり、隨つて本書の所說には、古神道の本義から離れた見解や獨斷に失した缺點があり、又訓釋に於ては

同	二年	別冊	社歌合の作者
同	元年	七月高野にて才蓮抄ロ	流され、應
治	元年	常陸國に配	
寬	元年	廣田社歌合の作者	保二年召還
安	二年	經盛朝臣家歌合の作者	道したが召
仁	二年	應保二年召還（五十四歳）	し捕へられ
安	三年	常保元年六月百首和歌	入り、入
同	六年	百首和歌	棄の龔隆寺
同	五年	正三位	戮敗れて太
久安	三年	從三位	
天養	元年	詞花集撰進の院宣下る	
保延	七年	參議（三十三歳）	

たが、御用ひがなく、已むなく白河殿に供奉した。滿を感じ、「拾遺古今二十卷を撰したといはれてゐる。保元の亂には崇德院を御諫め申し

滿を顧慮に值へたが、成立した詞花集には不敬を以て罰せられる使者として憂目を見た。

十まで存したことがわかる。顯昭は敎長註があまり杜撰なので、自らも註して守覺法親王に奉つたのであるが、奧書に「先是、宰相入道、俗名敎長、法名覺蓮、被注獻、賜件本、加披閱、乱邪正、仍多引載彼抄而已」とあつて、敎長も守覺法親王にこの註を奉つたこと、顯昭は同じく顯昭註に引用する敎長註と現存する敎長註とは全く一致しない點から見ると、顯昭の見たものと治承元年某に口授したといふ現存本とは成立が別であらうと考へられる。敎長註は貫之自筆と稱せられる崇德院本「古今集」を

かくてこの二部から成る祝詞は古い型を保存するものであるが、新しいものは第一部を缺き、その代りに祈禱の詞が特に長大となつてゐる。芳賀矢一博士の説によれば延喜式祝詞は、その主要なる歴史・傳説の叙述を除去せられたものであつて、鑽火祭の中に伊邪那美命が火を産み給うたことが見え、大殿祭に鏡璽を皇孫に授け給ふことがあり、遷却崇神祭の

であつて、列擧法・反復法・對句法の如き形式的修辭を多く用ひてゐる。かくて祝詞は或る一篇だけを取出して見ると、思想が雄大であり、形式が莊嚴であり、聲調が快美であるが、各篇を通覽するときには、内容・組織・表現・修辭等が一定の型にはまつてゐて、變化に乏しく單調を感ずる。これが「古事記」や「萬葉集」などに較べて、文學的價値に於て劣る所以で

（別項）（國文註釋全書）鈴木重胤〇祝詞講義十五卷（別項）（國文註釋全書）鈴木重胤〇祝詞考三卷（別項）（同上）賀茂眞淵〇祝詞講義十五卷（別項）（國文註釋全書）鈴木重胤〇祝詞略解六卷久保季茲〇祝詞正解二卷青柳高鞆〇祝詞演義二卷船曳鐵門〇祝詞辨蒙五卷敷田年治〇祝詞式講義一卷春山顯毋〇祝詞式講義二卷大久保初雄〇延喜式祝詞評釋一卷岡熊雄〇祝詞式新釋一卷鈴鹿清勇〇祝

訓釋を施したもの。本書には祝詞の總説はないが、序文に祝詞各篇の制作年代についての私見を述べ、本文の註釋の初めには、祝詞の語義を解釋してゐる。本文の訓釋に於ては、各篇の初めに先づ題意及び祭祀の解説を掲げた後に、訓方を附した本文を掲げ、語釋は各句毎に二行の割註を以て記し、なほ頭書を添へてゐる。語釋を下すに當つては、本文の批判を

試みて誤字・衍文に就いての私見を記し、訓釋は記・紀・萬葉・宣命等の語例を引いて考證的に述べ、なほ文章・語句の構成に就いても觀察を下して古文の妙味を稱揚してゐる。【價値】本書は「萬葉考」「冠辭考」（各別項）と共に眞淵の訓詁的業績の重要なるものであるが、眞淵は元來歌文に長じた文學者肌の人であつたから、その獨創の見識は動もすれば才にまかせた獨斷に陷り易く、訓義の解説には音の延約略轉を應用した爲めに、今日の語學的見地から見て、明かに誤謬と認められる點が少くない。併し傳統的に神祕主義を奉じて牽强附會な解釋を下してゐた古註を排斥して、古學の立場から祝詞に學問的研究を施した最初の述作であり、而も宣長以後の國學派の人々の祝詞研究の基礎となつた點に於て、古典の註釋事業の重要なる位置を占めてゐる。本書の失考を補正したものに、宣長の「大祓詞後釋」「出雲國造神壽後釋」（各別項）がある。〔次田〕

祝詞講義（のりとかうぎ）　註釋書　十五卷　【著者】鈴木重胤【成立】嘉永元年十月から同四年の秋に至る。【諸本】國文註釋全書に「中臣壽詞講義」（別項）二卷と共に收む。【内容】卷一の首めに祝詞の總説があつて、祭政一致の國體の特徴を説き、祝詞を「天下の大御政の御制度書なり」と言ひ、「上古の政を知り神幽の事を窺ふの捷徑此に過たるは有可からず」と述べ、又祝詞の本質に就いては、天つ宮事を法則とするものであるとしてゐる。その他祝詞の制作年代・名義等に就いても、著者獨自の神道説の立場から、從來の學者と異なる意見を述べてゐる。祝詞各篇の解釋は、先づその祭祀の意義・起原・沿革等を廣く古典を引いて考證し、且つ私見を加へた後に、本文の語句を順次に抄出して極めて綿密な訓釋を施してゐる。故人の所説の中では眞淵・士清・宣長等の解釋を多く引用して批判を加へてゐるが、殊に宣長・篤胤に負ふ所が多い。併し著者は、神道説に於て獨自の見識を有し、語學の方面には音義説を主張して創見に富み、從來の解釋と大に趣を異にしてゐる。【價値】本書は彼の大著「日本書紀傳」と共に博引旁證に努めた點に於ては驚異に値ひするのであるが、考證は多岐に亙つて冗長繁雜を極め、爲めに讀者をしてその要旨を摑むのに困難を感じさせる弊がある。彼はその師篤胤の學風を最もよく承けただけに、その神道論には眞淵・宣長の古學思想とは自ら異なる所があり、隨つて本書の所説には、古神道の本義から離れた見解や獨斷に失した缺點があり、又訓釋に於ては音義説を根據とした爲めに、語學的にも妥當でない所がある。本書にはかくの如き缺點はあるけれども、眞淵以來の祝詞研究を集成したものであつて、該博な考證は後學に幾多の資料を提供し、その獨創の意見は後の研究家に種々の暗示を與へるのである。思ふに江戸時代に於ける祝詞の訓詁事業は、宣長に至つて一先づ完成したのであつて、本書の如きは寧ろ綜合集成と考證とに於て、その價値を發揮するものである。〔次田〕

祝詞式（のりとしき）　「祝詞」「延喜式祝詞」を見よ。

教長（のりなが）　歌人【姓】藤原氏【法號】觀蓮（尊卑分脈に親蓮とあるのは誤か）【生歿】天仁二年（一一七九）生れ、歿年未詳。【閲歴】崇德・近衛の兩天皇に仕へ、特に崇德天皇の御寵愛を蒙り、官位は正三位參議に陞つた。天養元年「詞花集」撰進の院宣を顯輔に傳へたが、成立した「詞花集」には不滿を感じ、「拾遺古今」二十卷を撰したといはれてゐる。保元の亂には崇德院を御諫め申したが、御用ひがなく、已むなく白河殿に供奉して爲義を召される使者となつた。戰敗れて太秦の廣隆寺に入り、入道したが召し捕へられ（保元物語）、常陸國に配流され、應保二年召還された（公卿補任）。家集に「ことにあたりて吾妻の方にまかりけるに」「かくて常陸の國まで四十日あまりにまかりいたりぬ、いたらむとする所はしたの浮島となん申す、海のほとりに船にのりける時よめる」などとある。仁安・承安の頃は京にゐたやうであるが、治承元年七月には高野山に在つて「才葉抄」を伊經に口傳してゐる。同年九月には、某に「古今集註」（後出）をも口傳してゐるが、翌年行はれた別雷社歌合に就いては、家集に「賀茂に歌合すとて賴輔朝臣歌よめとて題をおくれるに」とあつて、高野に居りながら歌だけを賀茂に送つたらしいから、「古今集註」も高野で口授したのであらう。高野の外、東山・北山に閑居してゐた時代のあることも家集によつてわかる。和歌の外、書道にも秀れてゐたことは、「今鏡」（水蓮）に記されてゐる。

元永二年	從五位下
保延七年	參議（三十三歳）
天養元年	詞花集撰進の院宣下る
久安三年	從三位
同　五年	正三位
同　六年	百首和歌
保元元年	常陸に配流（四十七歳）
應保二年	召還（五十四歳）
仁安二年	經盛朝臣家歌合の作者
承安二年	廣田社歌合の作者
治承元年	七月高野にて才葉抄口傳、九月古今集註口授
同　二年	別雷社歌合の作者

【著作】古今和歌集註。永く佚書といはれてゐたが、先年某家の秘庫より出現し、轉々して遂に京都帝國大學に收められた。桝型の蝴蝶裝にて三册、卷十七の後半以下を缺いてゐるが、顯昭註に引用されてゐる所に依つて卷二十まで存したことがわかる。顯昭は教長註があまり杜撰なので、自らも註して守覺法親王に奉つたのであるが、奥書に「先是、宰相入道、俗名教長、法名覺蓮、被注獻、賜件本、加披閲糺邪正、仍多引載彼抄而已」とあつて、教長も守覺法親王にこの註を奉つたこと、顯昭は同親王から教長註を賜はつたことが分る。而して顯昭註に引用する教長註と現存する教長註とは全くは一致しない點から見ると、顯昭の見たものと治承元年某に口授したといふ現存本とは成立が別であらうと考へられる。教長は貫之自筆と稱せられる崇德院本「古今集」を書寫したことはこの註の序、「顯註密勘」の奥書に依つてわかり、彼はこの本によつて本文の考勘を試みたのであるが、清輔も教長と同じく崇德院本を書寫し、それが顯昭に傳はつたものか、顯昭は教長が引用した崇德院本の本文と、自ら所見するものと一致しない箇所を指摘してゐる。本註は清輔本「古今集」の一本、關戸家「後撰集」の如く古體の片假名を用ひてゐるのは、原本のまゝであらうと考へられる。現存本の筆者並に書寫年代は不明であるが、相當古い時代の書寫とされてゐる。本書の註は甚だ幼稚であつて、「古今集」の古い註釋書である以外には、價値が乏しいのであるが、國語變遷史の研究上、有力な資料として注意されてゐる。〇拾遺古今二十卷（現存しないが、中古六歌仙に引用せられる）〇才葉抄（群書類從四九四所載、書道に關するもの）〇家集「貧道集」（別項）〇勅撰集に入る歌は詞花集二、千載十、

新古今以下凡そ二十五、合計凡そ三十七首、私撰集に入るものは、後葉集十首、續詞花集七首。

【批評】彼は普通の歌人の如く、和歌に對して特殊な用意をもつてゐたとは考へられず、眼を現實生活の上におき、意志の力によつて押し通して行かうとする覇氣を示してゐる。

【參考】大日本史百四十二〇公卿補任〇尊卑分脈〇保元物語〇今鏡〇藤原敎長著「古今集註」吉澤義則(藝文四ノ一〇)〇國文學研究史 野村八良 【西下】

範永（のりなが）

歌人 【姓】藤原氏 【生歿】未詳 【閲歴】三條・後一條・後朱雀・後冷泉天皇の御代の人にて、諸國の守を歴任し、正四位下に敍した。その歌には賴通の邸にてよんだものが多く、祐子内親王・四條宮皇后の歌合の作者であり、相模・出羽辨等との贈答歌がある點から見て、權門に出入した歌人であることがわかる。當時六人黨(別項)と稱する歌人の團體があつたが、彼が最も有名であつた。藏人であつた頃、遍照寺に遊び、「住む人もなき山里の秋の夜は月の光もさびしかりけり」と詠じた(拾遺集には「廣澤の月を見てよめる」とある)。定賴がこの歌を北山の長谷に住む父公任の許に送ると、大に感歎して歌の表に「範永誰人哉、和歌得其體」と記した。範永はこれを聞いて大に喜び、詠草を乞ひうけ、錦の袋に入れて重寶としたといふ(袋草紙三)。【著作】「範永朝臣集」圖書寮に二種の傳本がある。共に一卷一册で(一)は凡そ八百十四首を、(二)は五十六首を所載。兩者に共通な歌は凡そ四十八首にて巻頭から二十五首は大略一致するが、詞書歌等に於て可なりの相違がある。巻末には兩本共に同樣な作者の叙任を載せ、(一)は建長六年二月辨入道眞觀が病惱の隙を以て書寫し、原本には破損の箇所が多く、他本を以て少々書き入れた旨を記した奥書と、永仁四年の奥書とがあり、(二)には、

長和五年	藏人
寛仁元年	修理權亮
同 三年	式部大丞、從五位下
同 四年	甲斐權守
治安三年	春宮少進
萬壽二年	伯耆守
長元三年	從五位上
同 四年	正五位下
同 九年	從四位下
同 十年	尾張守
長久四年	從四位上
寛德二年	大膳大夫
永承五年	祐子内親王家歌合
天喜元年	但馬守
同 四年	正四位下、皇后宮春秋歌合
康平五年	阿波守
同 八年	攝津守

(家集の奥に載する所のものによる)

永仁三年五月西山往生院に於て屋々丸が書寫した旨の奥書がある。所載の歌には賴通及び源大納言師房の邸に出入して作つたもの、相模・出羽・能因、女院にゐた清少納言の女と贈答したもの、一子良綱のために代作したもの等が見える。〇勅撰集に入る歌は後拾遺集十四首、金葉集以下凡そ十七首、合計凡そ三十一首 〇「範永宅歌合」(續群書類從四一二)は、十題十番にて範永自らの歌はない。

【批評】彼は傳統を守つて形式的な完成を求めてゐるやうであるが、形にとらはれて氣力が乏しく、美の幻想を求めて觀念に陷つてゐるものが多い。同時代の歌人と比較してみると、經信(別項)は多くの趣味を調和した一般的なものの上に立脚し、通俊(別項)は人間的な意欲に立脚し、能因(別項)は境地を深めることに努力してゐるが、範永は個性味が乏しく極めて不徹底な所が多い。

【參考】大日本史二百二十〇袋草紙〇尊卑分脈 【西下】

宣長（のりなが）

國學者・歌人・語學者 【姓名】小津氏。後(寶曆二年)本居と改む。幼名富之

元文五年	七月二十三日父定利死す(十一歳)。
寛保元年	五月十四日母勝子・宣長及び三人の弟妹等と共に魚町一丁目の宅に移る(十二歳)。
寛延元年	伊勢國山田の紙商今井田氏の養子となる(十九歳)。
寛延二年	伊勢山田の宗安寺の住職法幢を師として歌を學ぶ(二十歳)。
寛延三年	離緣して家に歸る。
寶曆元年	二月二十八日、義兄定治死す。この年家督相續す(二十三歳)。
寶曆二年	三月、京都に遊學す。醫學修行の準備として、堀景山につき儒學を學ぶ。
寶曆三年	七月二十二日、堀元厚に就いて醫を學ぶ。
寶曆四年	五月一日、典藥武川幸順の門に入り醫を學ぶ。遊學中契沖の著書を見る。
寶曆七年	十月六日、伊勢松坂に歸り、醫業を開く(二十八歳)。この頃賀茂眞淵の「冠辭考」を見る。古典の研究に心を潜め「源氏物語」等の講筵を開く。
寶曆十二年	一月十七日、伊勢安濃津の人草深氏の女民子(後勝子と改む)を娶る(二十三歳)。母勝子・妹智遊、尼となる。
寶曆十三年	二月三日、三十四歳、春庭生る。「紫文要領」「石上私淑言」成る。五月廿五日眞淵と松坂に會ふ。この年の末眞淵の門に入る。「古事記」の研究に志す。
明和五年	一月一日、母六十四歳にて死す。
安永元年	三月、大和旅行をなす(四十三歳)。「古事記」上巻の解を終る(五十七歳)。
天明六年	「古事記傳」完成す(六十九歳)。
寛政十年	三月より六月まで京都に旅行し、古學を弘む(七十二歳)。

後、健藏。【號】芝蘭・舜庵・春庵 【生歿】享保十五年五月七日、伊勢國松坂本町に生れ、寛政十三年(享和元年)(一八〇一)九月二十九日歿す。享年七十二。【墓所】伊勢松坂山室山。

【學統】眞淵からの影響は、「古事記」「萬葉集」等の上代文學の研究であつて、三十四・五歳までの「源氏物語」を中心とする王朝文學の研究としては、契沖の影響を先づ學ぐべく、堀景山の影響も忘れられない。宣長の系統としては歿後の門人として平田篤胤・伴信友を最とし、本居春庭・本居大平・田中道麿・横井千秋等がある。本居大平の記した「恩賴圖」はよくこの關係を示してゐる。【閲歴】父は小野三四右衞門定利道樹、母は勝子、宣長の外に弟一人妹二人が生れた。

勝子は定利の後妻で、先妻榮珠の腹には男子がないので、道喜定治を嗣子としてゐたが、後に勝子によつて宣長等が生れた。定利歿するに及び、江戸に出て商業に從事してゐた定治はその家を嗣いだ。が、やはり江戸に出て商業に從つた。宣長は一度養子に出たが、翌年の冬、出でて家に歸つた。この頃から山田で法幢を師として學に志し、度々旅行にも出た。寶曆元年(二十二歳)、義兄定治が病死したので、江戸に出てその家を整理し、歸宅してから家督を相續した。併し資産も傾き、宣長も商人には不適當であつた爲め、勝子は宣長を醫者にす

べく京都に遊學せしめた。寶曆七年(二十八歳)十月六日まで六年の間、京都に於て醫學修業をしたが、その間に堀景山に就いて漢學を學び、また景山が國學に深かつた爲めに國學をも學んだ。殊に契沖の「百人一首改觀抄」を見てから契沖に私淑すること深く、京都の生活が自然王朝文學の研究に進ましめて、「源氏物語」には、相當の造詣を示すに至つた。遊學時代にも日記を記し「排蘆小船」の著もあつた。

松坂に歸省した後は醫者を開業して生計をたつると共に國學の研究に入り、門人に講義をし、また歌合等をも催した。彼の講義は「源氏物語」「萬葉集」をはじめ、「古今集」「新古今集」「祝詞」「日本書紀」その他各種にわたつたが、最も多く行つたのは「源氏」

宣長

政十年(六十九歳)六月十三日に下巻の傳が成つた。その間に語學その他各種の研究が成つた。さうして後年になるほど門人も增し(村岡氏の調査によると天明八年には百四十七人、安永二年には四百九十三人)、また京都その他に旅行することも多くなつた。その間寛政四年加賀侯前田治修が宣長を國學の學頭に招いたが、他國移住を好まず、松坂住か京住ならば仕官するといふことで中止になつた。更に續いて紀州家から招かれたが、松坂居住を許されたのでこれを受けた。寛政十二年(七十一歳)七月には遺言狀を書き、諡號をも秋津彦美津櫻根大人と定め、山室山の頂に墓地をも定めた。その年

紀考 一巻(玉の小櫛と同部に成) 〇古今集遠鏡六巻(寛政九年刊)(別項) 〇萬葉集問聞抄三巻(安永九年三月刊)(別項) 〇萬葉集玉の小琴一巻(天保九年後、天明四年前成) 〇出雲國造神壽詞後釋(寛政八年刊)(別項) 〇大祓詞後釋三巻(寛政八年刊)(別項) 〇古事記傳四十四巻(明和初年起稿、寛政十一年六月十三日完成、文政五年全部刊行終)(別項) 〇古訓古事記三巻(寛政十一年春成、同年刻) 〇續紀歷朝詔詞解六巻(寛政十一年六月八日起稿、翌年四月二十三日成、享和三年九月刊)。

【語學書】 てにをは紐鏡(一名タベの追風) 一表(明和八年刊)(別項) 〇漢字三音考一巻、天明五年二月刊)(別項) 〇字音假字用格一巻(安永五年春刊)(別項) 〇呵刈葭二巻のうち後篇(實は前篇、天明七年正月成)(別項) 〇詞の玉緒七巻(寛政二年既刊)(別項) 〇御國詞活用抄一巻(一名言語活用抄)(明治十九年十月刊)(別項) 〇玉あられ一巻(寛

紀考 一巻(玉の小櫛と同部に成) 〇古今集遠鏡六巻(寛政九年刊)(別項) 〇萬葉集問聞抄三巻(安永九年後、天明四年前成) 〇出雲國造神壽詞後釋(寛政八年刊)(別項) 〇大祓詞後釋三巻(寛政八年刊)(別項) 〇古事記傳四十四巻(明和初年起稿、寛政十一年六月十三日完成、文政五年全部刊行終)(別項) 〇古訓古事記三巻(寛政十一年春成、同年刻) 〇續紀歷朝詔詞解六巻(寛政十一年六月八日起稿、翌年四月二十三日成、享和三年九月刊)。

【語學書】 てにをは紐鏡(一名タベの追風) 一表(明和八年刊)(別項) 〇漢字三音考一巻、天明五年二月刊)(別項) 〇字音假字用格一巻(安永五年春刊)(別項) 〇呵刈葭二巻のうち後篇(實は前篇、天明七年正月成)(別項) 〇詞の玉緒七巻(寛政二年既刊)(別項) 〇御國詞活用抄一巻(一名言語活用抄)(明治十九年十月刊)(別項) 〇玉あられ一巻(寛

天明七年正月成)(別項) 〇玉鉾百首一巻(天明六年既成、同年秋刊) 〇秘本玉くしげ二巻(寛永四年天明七年二月刊) 〇神代正語三巻(寛政二年刊)(別項) 〇天祖都城辨々一巻(寛政八年版)(別項) 〇神代卷髣髴山蔭二巻(寛政十二年秋刊)(別項) 〇眞暦考不審辨一巻(寛政十二年既成、文政三年十二月刊) 〇臣道一巻(寛政十二年既成) 〇古語拾遺疑・齋辨一巻(寛政十二年既成) 〇五部書說辨加評一巻(寛政十二年成) 〇伊勢二宮さき竹の辨一巻(寛政十年四・五月頃成、享和元年八月刊) 〇鈴屋答問錄一巻(天保六年刊) 〇みくさの上物語一巻(天保十五年刊)。

【歌文集・雜著】 玉勝間十四巻(寛政五年正月より書始め歿年に及ぶ。五回に刊行)(別項) 〇初山踏一巻(寛政十一年春刊)(別項) 〇おもひ草一巻(寶曆三年作) 〇手枕一巻(寶曆十三年既成、寛政七年

べく京都に遊學せしめた。寶曆七年(二十八歳)十月六日まで六年の間、京都に於て醫學修業をしたが、その間に堀景山に就いて漢學を學び、また景山が國學に深かつた爲めに國學をも學んだ。殊に契沖の「百人一首改觀抄」を見てから契沖に私淑すること深く、京都の生活が自然王朝文學の研究に進ましめて、「源氏物語」には、相當の造詣を示すに至つた。遊學時代にも日記を記し「排蘆小船」の著もあつた。

松坂に歸省した後は醫者を開業して生計をたつつると共に國學の研究に入り、門人に講義をし、また歌合等をも催した。彼の講義は「源氏物語」「萬葉集」をはじめ、「古今集」「新古今集」「祝詞」「日本書紀」その他各種にわたつたが、最も多く行つたのは「源氏」「萬葉」で、「源氏」は二・六・十の夜、「萬葉」は四の夜と定めて講讀し、その他の古典は、右以外の日に行つた。「源氏」は全部三回の講義を終つて第四回に入り、「萬葉」は、全部二回を終つて第三回に入つた。かういふ講義をなす一方に著述に從つたのである。この間に寶曆十二年民子(後、勝子)を娶り、翌年には長子春庭が生れるとともに、「紫文要領」「石上私淑言」(別項)が成つた。彼の王朝文學研究はこれによつて完成したと言つてよい。さうして翌寶曆十三年五月二十五日には眞淵と會し、「古事記」研究の志を語り、古道研究に入つた。その後、天明六年五十七歳に至り、「古事記」神代卷の傳を終つた。又寬政四年(六十三歳)十二月二十日に中卷が成り、寬政十年(六十九歳)六月十三日に下卷の傳が成つた。その間に語學その他各種の研究が成つた。さうして後年になるほど門人も增し(村岡氏の調査によると天明八年には百四十七人、安永二年には四百九十三人)、また京都その他に旅行することも多くなつた。その間寬政四年加賀侯前田治修が宣長を國學の學頭に招いたが、他國移住を好まず、松坂住か京住ならば仕官するといふことで中止になつた。更に續いて紀州家から招かれたが、松坂居住を許されたのでこれを受けた。寬政十二年(七十一歳)七月には遺言狀を書き、諡號をも秋津彦美津櫻根大人と定め、山室山の頂に墓地をも定めた。その年の暮から翌年の春にかけて和歌山に滯在し、又三月二十八日には、最後の京都旅行をなし、滯京七十日の間、古學普及のために盡した。その間、中山愛親に招かれて「延喜式祝詞」を講じた。かくてこの年の九月に歿した。春庭(別項)は盲目でもあつたので、養嗣子本居大平(別項)が後を嗣いで紀州侯に仕へた。

宣長自畫像

【著書】【全集】本居宣長全集○本居宣長稿本全集 ○增補本居宣長全集。

【註釋書】草庵集玉箒六卷・續編三卷(草庵集參照)○新古今集美濃家苞同折添八卷(寬政三年四月十三日成一卷末自記)(美濃家苞參照)○源氏物語玉の小櫛九卷(寬政八年成)(別項)○源氏物語年紀考一卷(玉の小櫛と同年に成)○古今集遠鏡六卷(寬政九年刊)(別項)○萬葉集玉の小琴一卷(天保九年三月刊)(別項)○萬葉集問聞抄三卷(安永九年後、天明四年前成)○出雲國造神壽詞後釋(寬政八年刊)(別項)○大祓詞後釋三卷(寬政八年刊)(別項)○古事記傳四十四卷(明和初年起稿、寬政十一年六月十三日完成、文政五年全部刊行終)(別項)○古訓古事記三卷(寬政十一年奉成、同年刻)○續紀歷朝詔詞解六卷(寬政十一年六月八日起稿、翌年四月二十三日成、享和三年九月刊)。

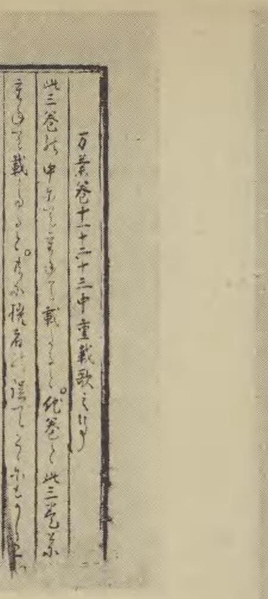
【語學書】てにをは紐鏡(一名タベの追風)一表(明和八年刊)(別項)○漢字三音考一卷(天明五年二月刊)(別項)○字音假字用格一卷(安永五年春刊)(別項)○呵刈葭二卷のうち後篇(實は前篇、天明七年正月成)(別項)○詞の玉緒七卷(寬政二年既刊)(別項)○御國詞活用抄一卷(一名言語活用抄)(明治十九年十月刊)(別項)○玉あられ一卷(寬政四年奉刊)(別項)○地名字音轉用例一卷(寬政十二年刊)(別項)○後撰集詞の東ね緒一卷(享和元年秋成、享和二年五月晦日刊)。

【文學論書】排蘆小船一卷(京都遊學の末期か)○紫文要領二卷(寶曆十三年六月七日成)○石上私淑言三卷(文化十三年七月刊)(別項)○古今選五卷(寶曆八年正月二十日起稿、同年三月二十二日成、文化五年刊)○國歌八論及同斥非評一卷(明和五年九月成)(國歌八論參照)○國歌八論斥非再評の評一卷(藤原維濟が國歌八論斥非評を評したのをまた評したもの)。

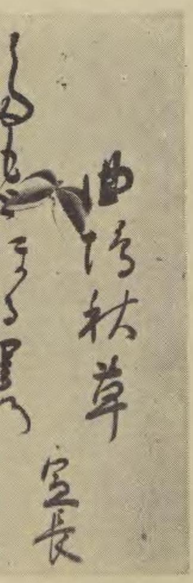
【古道論書】直毘靈一卷(明和八年)(別項)○馭戎慨言四卷(寬政八年七月刊)(別項)○葛花二卷(享和三年一月刊)(別項)○眞暦考一卷(天明二年九月十二日成、寬政元年奉刊)○鉗狂人一卷(文政四年刊)(別項)○玉くしげ一卷(寬政二年三月刊)(別項)○呵刈葭二卷のうち前篇(實は後篇、天明七年正月成)(別項)○國號考一卷(天明六年既成、同年秋刊)○玉鉾百首一卷(天明六年既成、天明七年二月刊)○秘本玉くしげ二卷(寬永四年五月刊)(別項)○神代正語三卷(寬政二年刊)(別項)○天祖都城辨々一卷(寬政八年版)(別項)○神代卷髣髴華山蔭二卷(寬政十二年秋刊)(別項)○眞暦考不審辨一卷(寬政十二年既成、文政三年十二月刊)○臣道一卷(寬政十二年既成)○古語拾遺疑齋辨一卷(寬政十二年既成)○五部書說辨加評一卷(寬政十二年成)○伊勢二宮さき竹の辨一卷(寬政十年四・五月頃成、享和元年八月刊)○鈴屋答問錄一卷(天保六年刊)○みくさの上物語一卷(天保十五年刊)。

【歌文集・雜著】玉勝間十四卷(寬政五年正月より書始め歿年に及ぶ。五回に刊行)(別項)○初山踏一卷(寬政十一年奉刊)(別項)○おもひ草一卷(寶曆三年作)○手枕一卷(寶曆十三年既成、寬政七年六月刊)○菅笠日記二卷(安永元年三月成)○結び捨たる枕の草葉一卷(寬政五年四月成、安政二年刊)○紀見の惠一卷(寬政六年末成、安政二年刊)○自撰歌一卷(明和四年より寬政七年に至る詠草から自ら撰んだもの)○鈴屋集九卷(別項)○枕の山一卷(寬政十二年十月十八日歟)○家の昔物語一卷(寬政十年七月二十日記す)。

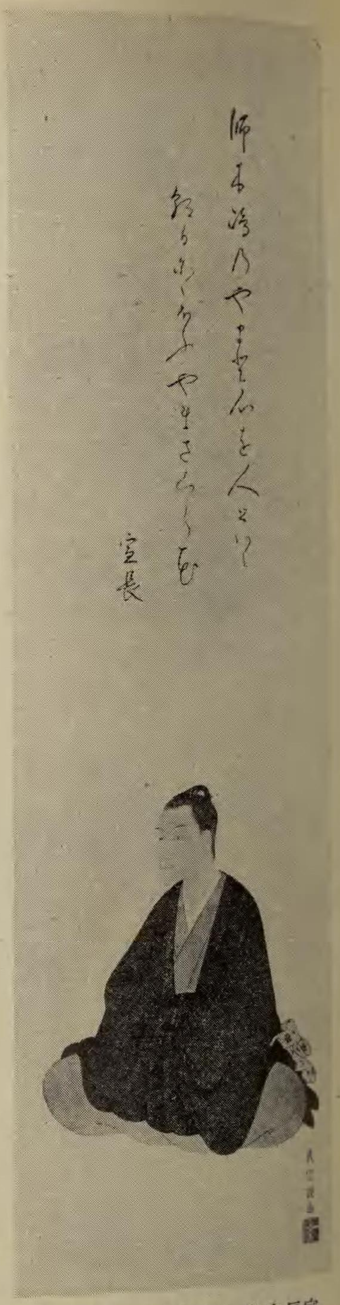
【人物】圓滿・調和的な性格で、處世の才もあり、常識にも富んでゐた。善良なる市民であり家長であつたことは、醫を學んで經濟上安固なるを得て、靜かに古典研究に從つた點からも知られる。併し彼の人物が常識的にならなかつたのは、單に理性の人でなく內に熱情があつたからである。そこから強い意志も生ずる。宣長が眞淵に會つて「古事記」研究の志を語つてから數十年間その研究に專念したのも、その意志の力の現はれである。この意志



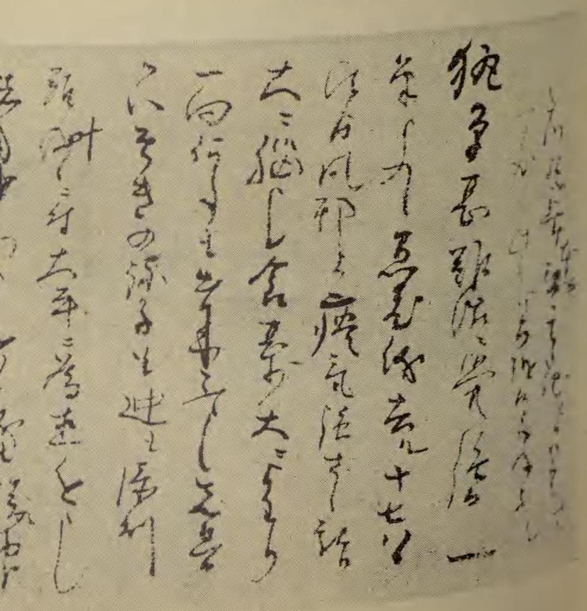
宣長自筆



宣長筆



宣長肖像（佐佐木信綱氏藏）



宣長絕筆書簡（植松安氏藏）

の力はやがて學問の愛となる。前田家の招きをもそのまゝ應ぜずして松坂から離れず、「古事記傳」を完成したのも、學問に對する熱情があつたからである。國學に入つてからその學問的な信念に基づいて儒佛を排し、種々の論難を行つたのも、學問に對する信念からである。眞淵を師として尊敬しながら、なほ學說に於てそのまゝ盲信しなかつたのは、學問に對する愛と信念とあつて初めてなされることである。要するに春の如き圓滿調和的な人格の中に、學問に對する愛と信念とを藏してゐたと言つていゝ。

【業績】多方面に亙つてゐるが、大別すれば古典學者としての方面と、歌人文章家としての方面とがある。前者は更に註釋的方面、語學的方面、文學論的方面、古道的方面の四つに分けられ、この四方面とも宣長は多くの業績を殘し、近世古典學の完成を示してゐる。

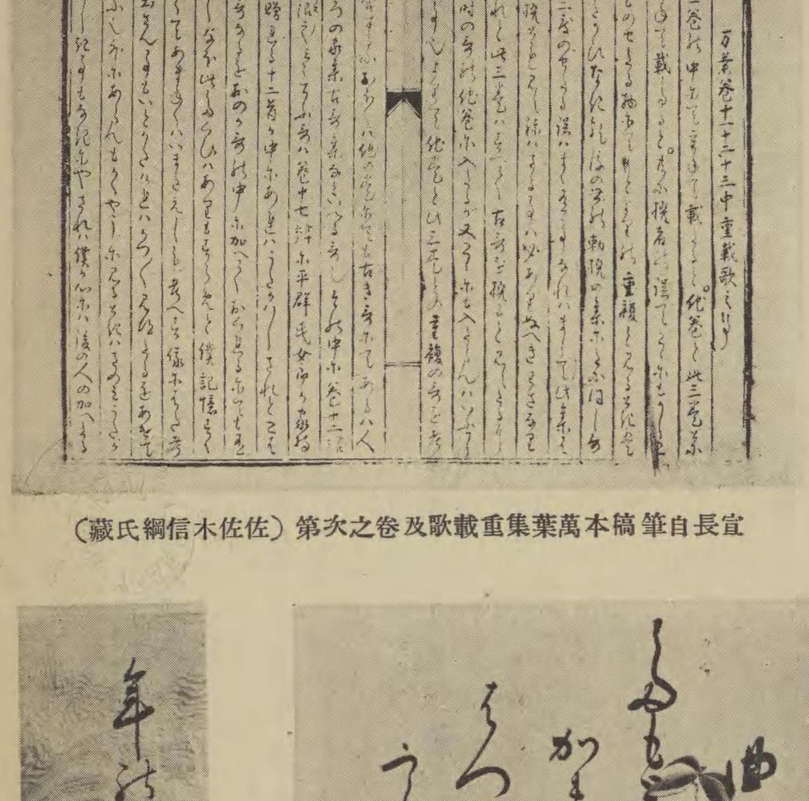
【註釋家として】「古事記傳」を中心として「祝詞」の一部分、「宣命」「萬葉集」「源氏物語」「古今集」「新古今集」「萬葉」「源氏」は、眞淵若しくは季吟の註釋書の補訂として、新見のある部分のみを擧げたものであり、「新古今」は批評が主であり、「古今」は一般的な口語譯である。かくて全體に亙つて宣長の見解の註釋として綜合せられたのは「宣命」と「草庵集」とである。「草庵集」は眞淵の怒りを招いたことによつて注意されてゐるが、「草庵集」を重んじた所に批評的見識を見得べく、「宣命」は助辭を明かにするのが目的であつただけに、文法的見解に富んでゐる。併し兩者とも必ずしも精細ではなく、宣長の見識を見るべきであるが、これに對して多年の心血を濟し、最も詳細で、且つ態度としては、文化的研究を行つたのが「古事記」の註釋である。宣長自らも彼の上代文學のすべての知識・見解を網羅しようとしたとある如く、「古事記傳」は單に「古事記」の註釋といふよりは、「古事記」を中心とした上代文學の文化史的研究といふべきである。さうしてまた宣長の學問は、形式としては註釋的研究であるが、本質に於て註釋的研究以上に出た綜合的研究である所に特色がある。

【文學評論家として】文學論に關する著は「排蘆小船」と「石上私淑言」「紫文要領」と「玉の小櫛」總論の如く、歌論及び物語論の二方面にわかれてゐる。さうして歌論に於ては「新古今」を重んじ、物語論に於ては「源氏」を重んじてゐるのであるが、これ等を通じて「ものの哀れ」論を尊重してゐたと言へる。もの、あはれは宣長によると「源氏」の中心をなすものであるが、また歌の理想をなすものであつて、このもの、あはれは內容と形式との關係の上から言ふと、形式を尊重するが、併しそれは單なる技巧や形式でなく、完全に調和すべきものであつた。卽ち彼によれば眞情のあり、それは必ず技巧を伴ふものである。高まる時、それを技巧的に表現するやうになるのは自然であり、また情の高まる場合にそれを他人に傳へたくなるのも自然で、そのために技巧的にもなるのであるとする。かくて技巧や形式を重んずる事と、眞情もしくは內容を尊重する事とを調和せしめてゐる。次に內容の性質から言へば、壯美といふよりは優美を重んじ、力强さよりは物和かい美を尊重したと言へる。これは平安時代文學から歸納的に得た見解であるための自然の結果であらうが、力强さや深さを閑却してゐる點に、文學論としての一面的な弱點もある。

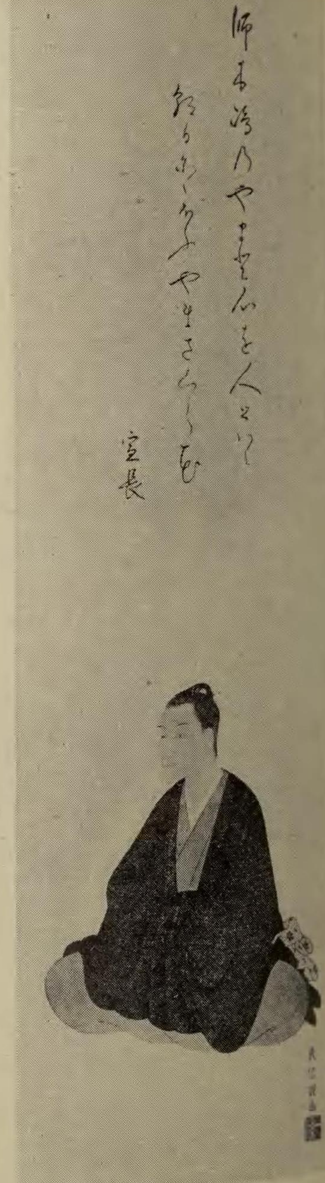
【古道論者として】古道研究は、彼の三十四歲「古事記」研究を志した時からはじまる。爾來「古事記」研究を中心として註釋的研究に從ふと共に、その間から歸納される種々の研究を發表した。それは上代文學の中から古代生活を見出すことであり、古代文化の研究といふ事にもなる。宣長によれば古代生活は神が一切を支配し、神の意志のまゝに行つて理窟をさけた所に神ながらの道があり、これが古代生活を支配する精神であつたのである。從つて「古事記」を中心とする古代生活の研究は、神ながらの道を明かにする所にあつたと見られる。かくの如き見解を端的に示すものは、「古事記傳」の總論となつた「直毘靈」（別項）であるが、更に儒・佛に對する破壞を行つた「馭戎慨言」（別項）をはじめ、或は古代の曆を說き、高天原を說き、國號を說き、古代精神から現代の治世を說く等、各方面にわたつて論じてゐるのである。その見解は神に對する絕對の信仰から「古事記」等の記事に少しも批判を加へないところに、今日から見て批評の餘地はあるにしても、その古代文化、古道に對する見解は、彼の學說の中心を占めるものである。

【以上久松】

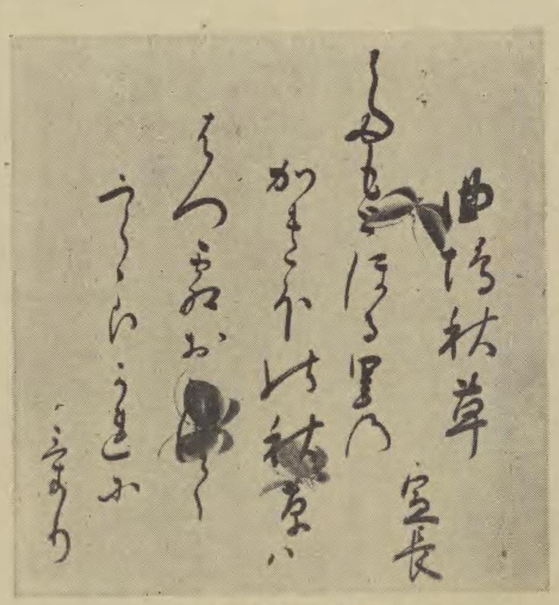
【語學者として】國語研究史上に一時期を劃する大學者であつて、その研究は廣く且つ深い。第一に擧ぐべきは手爾乎波に關する研究で、「てにをは紐鏡」（別項）とその註解であり、證明である「詞の玉緒」（別項）は、宣長のてにをは研究を代表するものである。一體、手爾波の研究は、詠歌の上に必要缺くべからざるものであるから、その研究は早く鎌倉時代から起つてゐるが、「手爾波大概抄」「端ケ小路式」「春樹顯祕抄」（各別項）「歌道祕藏錄」「てには綱引綱」（別項）等を初め少からぬ書があり、それ等は直接或は間接に宣長の研究に影響を與へてゐる。これ等の書は殆ど祕傳傳授を旨としたものであつて、その所說は獨斷的傾向を免れない。然るに宣長はそれ等先人の研究を經とし、平安朝文學の研究の結果を緯として、手爾波の呼應を研究したものであつて、その研究態度は自由討究を旨とし、その結果は先人の研究よりも遙かに進歩したもので、手爾波の呼應の研究としては殆ど完全の域に近いものであつて、爾後の手爾波研究の基本になつてゐる。又「紐鏡」は一枚の圖表であるが、かくの如き簡單明瞭な圖表を用ひることは宣長に初まるものである。なほ手爾波の係結に於て、結びの手爾波は、必然用言の活用に關係してゐる故、爾後の用言研究にも少からぬ貢獻をしてゐる。第二に活用の研究としては「御國詞活用抄」（別項）及び前記「紐鏡」及び「玉緒」がある。さて「紐鏡」「玉緒」の結ぶ手爾波は終止・連體・已然の三段に當るものを說いたに過ぎない。「御國詞活用抄」には活用のみに就いて二十七項（或は二十八項）に分つて說いてゐるが、活用形に於ても活用の種類に於ても不備誤謬が甚だ多い。卽ち宣長は活用の研究に於てはなほ幼稚であつた。併しこの宣長の研究が、春庭や義門の研究に重大な影響を與へたのであつて、その點に於て重要視しなければならぬ。第三に字音の假名遣の研究したものに「字音假字用格」（別項）がある。本書に於て特に注意すべき功績は、「お」「を」の所屬を改めたことである。が、本書には誤りも存する。說中、漢字のン韻を有する字は、假名は凡てム・すべきであるとしたのは大なる誤りである



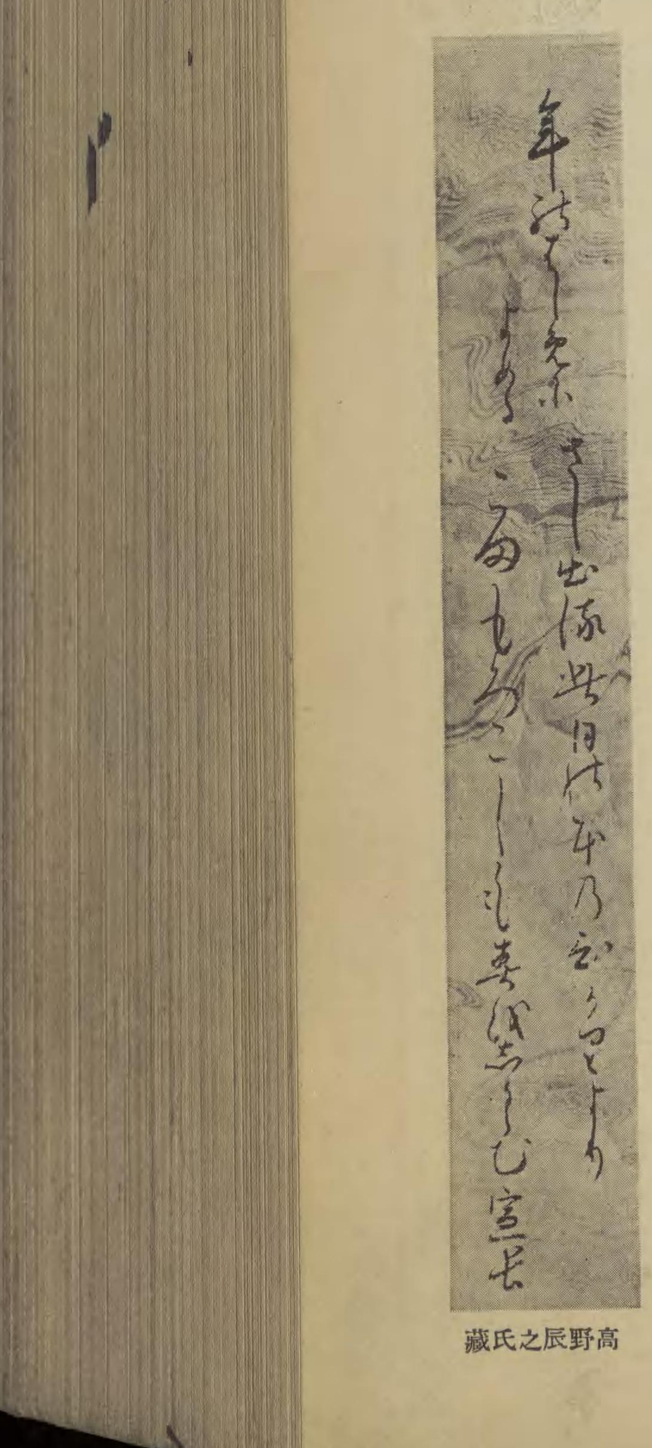
宣長自筆稿本萬葉集重載歌及巻之次第（佐佐木信綱氏藏）



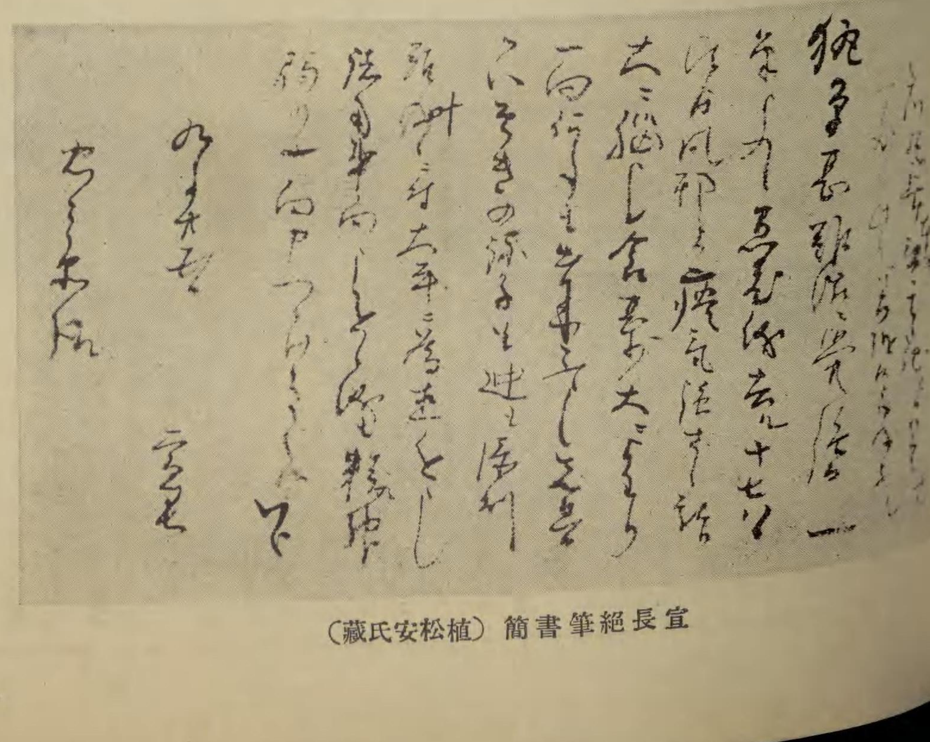
宣長肖像（佐佐木信綱氏藏）



宣長自筆色紙（高野辰之氏藏）



宣長自筆短冊（高野辰之氏藏）



宣長自筆簡書（植松安氏藏）

る。而も宣長は飽く迄ム韻を主張し、上田秋成と激烈な論戰を交へて一歩も讓らなかつた（阿刈良參照）。第四に漢字の音韻に就いても研究してゐる。「漢字三音考」（別項）がこれである。宣長は吳音・漢音・唐音に對する地理的及び歷史的考察はほぼ正鵠を得てゐるが、極端な日本尊重の思想のために獨斷的な論斷を下し、自家撞着に陷つてゐる點が少くない。なほ本書の附錄の音便の研究は尊敬すべき研究である。又「地名字音轉用例」（別項）は、我が國の地名に用ひた漢字音で、普通の字音と異るものは、後世に訛つたのではなく、初めから字音を轉用したのである事を研究したものであるが、本書は後に義門や白井寛蔭の漢字の音韻研究に少からぬ貢獻をしたものである。上記の外「後撰集詞の束緒（つかねを）」（一册、享和二年刊）「玉あられ」（別項）「玉かつま」（別項）等に國語學上貴

な詠風が、殆ど完成してからであつた。彼の歌論の根本は、やがて彼の文學論の根本をなす「もののあはれ」の說である。當時何彼につけて敎化の手段とのみ見られがちの歌（文學）を、一個獨立したものと見、それが意欲から出たものでなくて、感情から出たものであるとしたところは、洵に卓見と言はなくてはならぬ。そして又その「花實論」に於ては、歌は表現であるといふことを認めてゐたやうである。併しこれだけでは遂に概論たることを免れない。論そのものは正しいやうに見えて、而も飛んでもない誤謬に陷つた。その誤謬は「もののあはれ」といふ言葉の解釋に含まれてゐた。彼は「もののあはれ」といふ言葉を情趣趣向と解した。かう解して來ると歌の理想境は「新古今」とならざるを得ない。作歌の心ばへとして、先づ源語一篇を讀めと言つてゐる

く軒の山風に身のほど知らぬ袖の香そ（山居雜）と言つた生氣のないものであるに對し、晩年の彼の歌は、同じやうな趣向でも、「ききにとて人もこそ來れかくれがに鳴く聲高き時鳥かな」（閑居郭公）と、比較的しつかり詠み据ゑるやうになつてゐる。併し結局その何れにしても新古今風であつて、眞淵の歌風とは似ても似つかぬものであつた。蓋し眞淵門に入る前に、既に詠風が定まつてゐたからである。元來が歌は好きであつたらしく、月數回にわたる弟子達の歌會にも缺かさず出てゐた。近體といふのは、言ふまでもなく彼本來の風、卽ち新古今風のもので、彼としては得意なものである譯だが、どうも生彩に乏しい。頭で作り上げてあつて生きてゐない。

夕立の雲にきほひて涼しさのますけ片寄るそがの河風

を試み、穩健の中に創見の多いことは契沖に似て、契沖よりも綜合的である。「新古今」「源氏」「古事記」を中心とし、殊に「古事記」によつて中心を設けつつ、而も古典學の全體にわたつてゐるのは、特殊的にして綜合的と言ふことが出來る。部分的にはものゝあはれの文學論の如き、手爾乎波その他の語學說の如き、現在に於ても確說とすべきである。宣長の到達した所は、現在に於ても古典研究の出發點としなければならないのである。宣長學の價値はそこにある。近世學問史上に大なる焦點をなしてゐる。殊に國學史の上では契沖に出發し、春滿に成立し、眞淵に發展したのが、宣長に於て完成したと言へる。宣長以後平田篤胤に於て、伴信友に於て、多少の補訂を見たが、國學の體系は宣長に於て完成したと見て差支ない。さうして綜合的な國學の全體系に於て

る。而も宣長は飽く迄ム調を主張し、上田秋成と激烈な論戰を交へて一步も讓らなかつた（阿刈篇參照）。第四に漢字の音韻に就いても研究してゐる。「漢字三音考」（別項）がこれである。宣長は吳音・漢音・唐音に對する地理的及び歷史的考察はほぼ正鵠を得てゐるが、極端な日本尊重の思想のために獨斷的な論斷を下し、自家撞着に陷つてゐる點が少くない。なほ本書の附錄の音便の研究は尊敬すべき研究である。又「地名字音轉用例」（別項）は、我が國の地名に用ひた漢字音で、普通の字音と異るものは、後世に訛つたのではなく、初めから字音を轉用したのである事を研究したものであるが、本書は後に義門や白井寬蔭の漢字の音韻研究に少からぬ貢獻をしたものである。上記の外「後撰集詞の束緒（つかねを）」（一册、享和二年刊）「玉あられ」（別項）「玉かつま」（別項）等に國語學上貢獻するところ少からぬものがある。これを要するに、宣長は手爾波・活用・假名遣・音韻等各種の研究に於て注意すべき研究をなしてゐるが、研究として最も優れてゐるのは、「紐鏡」「玉緒」に現はれた手爾乎波の研究である。その他のものは固より國語學上重要な研究であるが、多少の不備誤謬を免れない。併し宣長は本居春庭・鈴木朖・東條義門・中島廣足（各別項）等を初め、多數の有力な後繼者を得た爲めに、その研究は漸次改訂增補せられた。これ宣長のために一大幸福であり、同時に我が國語學界の幸福であつた。（以上龜田）

【歌論・歌風】歌の最初の師は山田の法幢といふ僧、次いで醫者の修業に京都に上つてゐる頃、藤原章尹・有賀長川等に就いたといふ。何れも當時の堂上風の流れを汲む人達である。賀茂眞淵に就いたのは、すでに彼の草庵集風な詠風が、殆ど完成してからであつた。彼の歌論の根本は、やがて彼の文學論の根本をなす「もののあはれ」の說である。當時何彼につけて敎化の手段とのみ見られがちの歌（文學）を、一個獨立したものと見、それが意欲から出たものでなくて、感情から出たものであるとしたところは、洵に卓見と言はなくてはならぬ。そして又その「花實論」に於ては、歌は表現であるといふことを認めてゐたやうである。併しこれだけでは遂に概論たることを免れない。論そのものは正しいやうに見えて、而も飛んでもない誤謬に陷つた。その誤謬は「もののあはれ」といふ言葉の解釋に含まれてゐた。彼は「もののあはれ」といふ言葉を情趣趣向と解した。かう解して來ると歌の理想境は「新古今」とならざるを得ない。作歌の心ばへとして、先づ源語一篇を讀めと言つてゐるのもそれである。宣長は遂に抒情詩の本質に就いては、その師眞淵の敎示にも拘はらず、一生悟るところがなかつたやうである。彼の歌風の、小說的趣向に富み、技巧の凝つた、調子の弱い、新古今風といふよりは、下つて草庵集風でさへあるのはこれに依る。併しさすがに眞淵に就いてからとそれ以前とは、形の上で多少の相違がある。これを彼の歌論で言へば、「排蘆小船」と「初山ぶみ」との相違である。即ち歌は風流であると共に、古學の手段だといふのが「初山ぶみ」の考へ方で、後者は全く眞淵の影響である。この考へからして、彼は古體と近體と合せ詠むべきことを主張した。歌論としては寧ろ後退したものである。しかし事實としては、心持の緊張が、歌論の後退を補つて餘りがあつた。即ち眞淵に就いて間もない頃の彼の歌が、「かくれがやうめさく軒の山風に身のほど知らぬ袖の香ぞする」（山居梅）と言つた生氣のないものであるに對し、晩年の彼の歌は、同じやうな趣向でも、「ききにとて人もこそ來れかくれがに鳴く聲高き時鳥かな」（閑居郭公）と、比較的しつかり詠み据ゑるやうになつてゐる。併し結局その何れにしても新古今風であつて、眞淵の歌風とは似ても似つかぬものであつた。蓋し眞淵門に入る前に、既に詠風が定まつてゐたからである。元來が歌は好きであつたらしく、月數回にわたる弟子達の歌會にも缺かさず出てゐた。近體といふのは、言ふまでもなく彼本來の風、即ち新古今風のもので、彼としては得意なものである譯だが、どうも生彩に乏しい。頭で作り上げてあつて生きてゐない。

夕立の雲にきほひて凉しさのますゐ片寄るそがの河風

島山につもるも見えずかきくれて友船しろき雪の海原

などはそのうちでも佳作である。古體は徒らに「萬葉」を眞似たものが多く、形こそ「萬葉」なれ、心は何處までも「新古今」だと言つたものが多い。題材に特異な點は、國家思想をしきりに歌つたこと、及び櫻の花の歌の多いことである。なほ晩年の歌には口拍子に乘つて作つたといふ風な歌も多い。要するに宣長に取つて歌は樂しい餘技であつたので、彼は斷じて歌人ではなかつた。（以上龍田）

【史的地位】宣長の古典研究は、歷史的價値のみならず、絕對的價値に於ても、近世國學の中で第一流の位置を占める。宣長の學問は一部分に深いといふ點では、富士谷成章・御杖もしくは本居春庭等に及ばないかも知れない。併し古典學の全面に亙つて、明快精到な研究を試み、穩健の中に創見の多いことは契沖に似て、契沖よりも綜合的である。「新古今」「源氏」「古事記」を中心とし、殊に「古事記」によつて中心を設けつつ、而も古典學の全體にわたつてゐるのは、特殊的にして綜合的と言ふことが出來る。部分的にはものゝあはれの文學論の如き、手爾乎波その他の語學說の如き、現在に於ても確說とすべきである。宣長の到達した所は、現在に於ても古典研究の出發點としなければならないのである。宣長學の價値はそこにある。近世學問史上に大なる焦點をなしてゐる。殊に國學史の上では契沖に出發し、春滿に成立し、眞淵に發展したのが、宣長に於て完成したと言へる。宣長以後平田篤胤に於て、伴信友に於て、多少の補訂を見たが、國學の體系は宣長に於て完成したと見て差支ない。さうして綜合的な國學の全體系に於てのみならず、その分科としての文學評論史の上に於て、國語學史の上に於て、又註釋史の上に於て、それ〴〵高い歷史的位置を占めてゐる。宣長の「もののあはれ」論、てにをは研究、註釋としての「古事記傳」は、それ〴〵の歷史の上の頂點を示すものである。（以上久松）

【參考】家の昔物語 ○日記 ○鈴屋門人錄 ○鈴屋門人錄補正 本居溝造 ○鈴屋翁略年譜一卷 伴信友 ○鈴屋翁略年譜補正 ○本居宣長大人傳記 川口常文 ○本居宣長翁の百年祭にあたりて 上田萬年 ○鈴屋大人略傳 內田銀藏 ○本居宣長村岡典嗣 ○賀茂眞淵と本居宣長 佐佐木信綱 ○本居宣長傳資料 上田萬年編（帝國文學大正八ノ一二） ○宣長のものゝあはれと神ながらの道 久松潛一（上代日本文學の研究所收） ○本居宣長（國學院雜誌、昭和五ノ五特輯號）

令世（のりよ）　國學者　【姓名】吉田氏。字は

平坦、通稱平太郎。【號】活堂【生歿】寛政三年に生れ、弘化元年(一五〇四)に歿す。享年五十四。【閲歴】令世は水戸藩士吉田尚典(號愚谷)の子、藤田幽谷に學び、後その長女を娶つた。文化十年彰考館に入り、天保十二年、弘道館助教となり、史職をも兼ねた。烈公德川齊昭がまだ公子としてあつた時、令世は侍讀として薫陶の功多く、なほ藤田東湖等と共に藩政にも盡すところが多かつた。令世は常に學問の要は風俗人情に通じ、漢土周孔の教を以て皇道の羽翼とするにありといつてゐたといふ。その見、世の古學者とはやゝ異るところがあつたのである。【著作】擊文私言一册(別項)(文政九年刊。日本文庫に收む。學問の要義を論辨す)○歷代和歌勅撰考(存採叢書所收)○水の一すじ(同上、烈公襲立の始末を錄す)。【森】

【參考】古學小傳 清宮秀堅 ○水戸文籍考

野良松人形 のろまにんぎやう 操人形 【名稱】人形遣野良松勘兵衞の名による。【解說】寛文延寶の頃、和泉太夫の金平淨瑠璃(別項)の芝居に野良松勘兵衞といふ人形遣がゐて、頭扁たく色青黒きいやしげなる人形を遣つた。よつてこれをのろま人形と世人が言ひ囃した。差込みと稱する裾から手を差込んで遣ふ一人遣ひの人形である。武勇傳を語つた和泉太夫の配下に野良松のある事は、一應不釣合のやうであるが、一方謙齋左兵衞といふかしこき人形を遣ふ對手があつて、のろまと賢愚を對比せしめ、和泉太夫の武勇物語の金平淨瑠璃の間狂言を演じたものである。「のろま」の語源をなす程、のろま人形は殺伐なる當時の金平を好む人情にも飽和された間狂言の人形であつた。恰も能の間に狂言が挿まる如く、又阿國歌舞伎のやゝ後の間に傾城狂言が演ぜられたと同轍である。故に野良松人形について、「此のろまは彼狂言を學びて、やゝ今の歌舞伎の態あり」と「甲子夜話」に述べてゐる。「雲錦隨筆」によると、正德年中まで淨瑠璃短くして間の物にのろま人形の道外或は機巧など加へて勤めたが、正德五年十一月「國姓爺合戰」の竹本座より、のろま人形がなくなつたとある。【種目】「甲子夜話」からのろま狂言品目を擧げると左の通りである。

淡島いわゐ・鏡とぎ・贋公家・春日もうで・たら福大人・福壽萬歲・川越座當・戀の米つき・のり立・かんる狐・いなか大人・犬山伏・たのきづか・稽古狐・六條新右衞門・竹下孫八左衞門・花見座當・ふたりむこ・鬼が酒・金子三十郎・出世窟かき・三保のあみ引・振舞ゑんま・すだむこ・骨皮・新市のいわゐ・きよすかわら・うかれえびす・惡太郎・長持男・大法印・水鏡・どもり浪人・花その地藏・たばかりの井戸・三人長者・倉間もうで・戀の關守・小鍛治・のしく・京内詣・粟田口・仕方噺・猿引三番叟。

【影響】この野良松勘兵衞の時代は、寛文・延寶を中心として榮えたのであるが、のろまを祖としてゐる間狂言の操人形で、京・大阪では野呂間・麁呂七・麥間など名付けて道化たる詞色をなし、淨瑠璃段物の間狂言に人形を遣つた。併し寶曆六年刊行の「竹豐故事」に、「近來はケ樣成事(のろま風の間狂言の事)はすたり、知れる人も稀に成し也」とあるに見て、夙に磨滅した事が分る。然るに享和三年刊行の「役者昔物語」に、「淨瑠璃の間々に間の狂言といふ有。是近來とり出たるのろまなり。のろま・米平など人形の名にて、のろまは治兵衞といふ男の人形、米平は荒右衞門といふ男の人形也とぞ」とあるのを見ると、享和頃に治兵衞・荒右衞門などいふ間狂言の人形遣が、江戸に昔の野良松勘兵衞の跡を再興したらしい。そしてこののろま人形が、今日では佐渡に傳はつて現存してゐる。

【參考】嬉遊笑覽卷六上○役者昔物語○和訓栞○近代世事談○甲子夜話十一卷○竹豐故事○雲錦隨筆卷四○繪入淨瑠璃史下卷水谷不倒○民俗藝術(第二ノ四)　【石割】

呪師 のろし 「呪師」を見よ。

野分 のわき 小說 【作者】夏目漱石 【發表】明治四十年一月「ホトトギス」 【刊行】「坑夫」と合せて「草合」と題し、翌年九月春陽堂より出版。漱石全集第二卷。同普及版第三卷所收。【梗概】白井道也は文學者である。彼は、大學を出て七年間教員生活をして金力と權力のために容れられないで、三度職を失ひ、八年目に東京へ舞ひ戻つて、文筆を以て社會を矯正しようと決心した。さうして雜誌記者をしたり字引の編纂をしたりして苦しい生計を立ててゐる。それに飽き足りない細君は、良人の生活を甚だつまらないものに見くびつてゐる。昔彼の教へた生徒で彼を追ひ出した時の仲間の一人であつた高柳周作といふ青年がある。大學を出たばかりで、飜譯の下働きをしながら暮してゐる。病弱で皮肉屋で、何か痛切ない〳〵物が書きたいともがいてゐる。その友達に中野春臺といふブルジョアのお坊つちやんで、戀愛主義者で、空想小說を書かうと考へてゐる青年がある。中野は幸福な結婚をし、高柳は中野の好意に依つて轉地靜養することになつたが、その金は却つて白井道也先生の窮乏を救ふといふ結果になる。高柳をして最も感激せしめたものは、白井先生の青年に對する理想を說く演說であつた。

【批評】その演說は、この作品に於て浮き出してゐるが、「野分」の一篇は、この演說に相當の重點を置いてゐるから、これを除外することは出來なかつたのであらう。筋としても、「虞美人草」(別項)以後の長篇を除いては、一番小說らしい筋を持つてゐるが、併しどう見ても「野分」は筋で讀ませるものではなく、その主題となるところのものは、文學者白井道也の社會的正義感の訴へでなければならぬ。ただ地の文が何となく角々しくて、習作のやうな感じを與へるのは惜しむべきである。しかも第一の特色は、その情熱に富んでゐることである。　【野上】

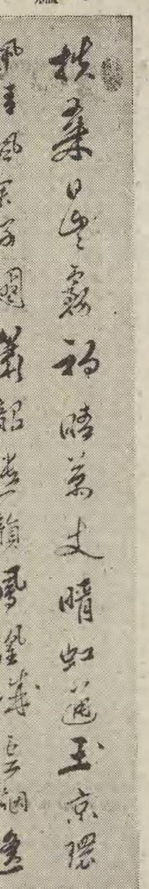
は

廢園 はいゑん 詩集 【著者】三木露風 【刊行】明治四十二年四月、東京光華書房。【解說】デーメル詩集の裝釘を摸した特殊の形式によつて出た三百餘頁の詩集。その詩風は概ね明るく爽やかな感覺的表出をもつた詩が多く、一種の廢頽的官能の詠嘆もあるが、そこに清新な韻律をもち、才氣煥發の趣を示した。

われは見る、廢園の奥、折ふしの音なき花の散りかひ、風の歩み、靜かなる午後の光に、去りゆく憂しき五月のうしろ影を。

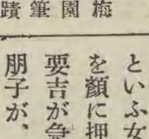
といふが如き詩に一般の傾向を看取し得る。即ち感情の澁剌と鋭敏と、纖細な神經をもつ詩である。

梅園 ばいゑん 儒者 【姓名】三浦晉、字は安貞。【別號】洞仙・驛山・幸山・東川・二子山人。【生歿】享保八年六月二日豐後の無事藩主人 【生歿】



祥榮に生れ、寛政元年(一四四九)三月十四日歿す。享年六十七。【閲歴】初め藩儒綾部綱齋に就き、後、豐前中津藩儒藤田敬所に學んだ。常に天地造化の理を究めんと欲し、屢々寢食を廢するに至つた。自ら天球儀を作り、仰觀俯察すること多年、年三十の時、初めて天地に條理あることを知り、卽ち曰く、「天地は唯是れ一氣物なり。氣外に物なく物外に氣なし。一條の妙理、宇宙に貫徹して玄界際なく、神化測られず」と。三十二歳の時、「玄語」八卷を著はし、陰陽消長の度、氣物融化の道を論じた。片言隻語も古人に依らず、悉く獨創に出たものである。尋いで「贅語」十卷を著はし、その餘蘊をつ

煤煙 ばいえん 小說 【作者】森田草平 【發表】明治四十二年一月より五月中旬まで、東京朝日新聞に連載。【刊行】明治四十三年二月第一卷、同年八月第二卷、大正二年八月第三卷、以上如山堂發行。同年十一月第四卷、新潮社。現代日本文學全集・明治大正文學全集所收。【梗概】小島要吉は、去年大學を出た時さへ歸省しなかつたのに、今度は母の用事で、久しぶりに岐阜在の田舍へ歸つた。一生歸りたくないと思つてゐたその田舍には、たつた一人の母がゐた。その上、里方には妻子をも預けてあつた。母には父の生前からいまはしい關係の男があり、それが今は公然と出入りをし、

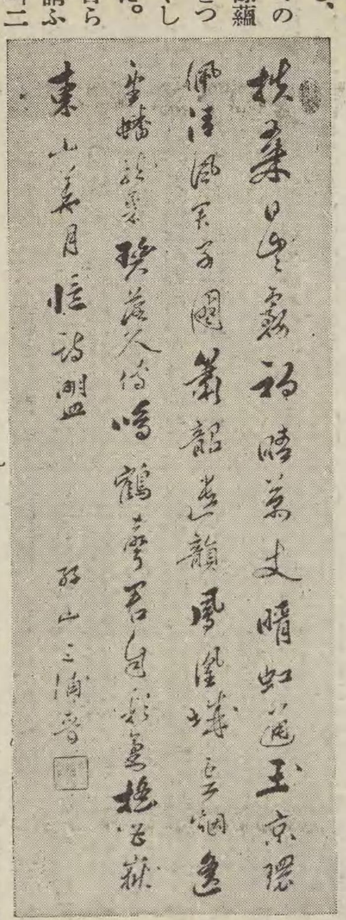


要吉との間に因果な關係がついてしまつたのだ。その以前から要吉は、主人が死んで以來、店を疊んでしまつてゐたお種の母親と相談づくで、本郷の丸山へ假世帶を持つてゐたのだつた。歸つて見ると思つた通りお種が泊りに來てゐた。友人の神戸からは、また金葉會を始めたから出席してくれと言つて來てゐた。金葉會といふのは一週に一回、若い女が集まつて外國文學を研究する會で、神戸がその主催者だつた。お種は翌日殘り惜しさうに姉の家へ歸つて行つた。踊の師匠になるつもりで子供の頃の踊を溫習つて貰つてゐるのださうだ。その後要吉は、金葉會の會員で眞鍋朋子といふ女を紹介された。朋子はあの世の烙印を額に押したやうな暗い陰のある女だつた。要吉が急性リユウマチスで入院した時、その朋子が、神戸と一緒に病院へ見舞ひに來た。

烈な接吻を交した。朋子は强い酒や煙草を嗜んだ。そして街へ出た時、女はこの儘では歸らないと云ひ出した。「如何にでも先生の爲さるやうになりたい」といふ。二人は手を把つて上野の闇を歩いた。女は要吉の胸に顏を埋めてよゝと泣いた。「足りない、足りない。それぢや足りない」「いやだ〳〵、どうかして仕舞つて下さい」、女は譫言のやうに口走つて、苛立たしさうに身をもだえる。要吉はやゝたじろいだ。女はなほ泣きやまない。この狂態のあとで、「もう歸ります、歸らないと內の都合が惡うございますから」、かう言つて朋子は立ち上つた。その聲には冷かな失望が含まれてゐた。要吉はぎくりとした。翌日朋子は、約束の場所へは遂に姿を見せなかつた。待ちあぐんで歸つて見ると朋子からの手紙が來てゐた。それには、自分の昨夜の行爲は虛僞に滿

杵築に生れ、實政元年（一四四九）三月十四日歿す。享年六十七。【閲歴】初め藩儒綾部綱齋に就き、後、豐前中津藩儒藤田敬所に學んだ。常に天地造化の理を究めんと欲し、屢々寢食を廢するに至つた。自ら天球儀を作り、仰觀俯察すること多年、年三十の時、初めて天地に條理あることを知り、卽ち曰く、「天地は唯是れ一氣物なり。氣外に物なく物外に氣なし。一條の妙理、宇宙に貫徹して玄界際なく、神化測られず」と。三十二歳の時、「玄語」八卷を著はし、陰陽消長の度、氣物融化の道を論じた。片言隻語も古人に依らず、悉く獨創に出たものである。尋いで「贅語」十卷を著はし、その餘蘊をつくした。自ら謂ふ「二語未だ性命の理に及ばず」と。そこで「敢語」一卷を作り、堯・舜・周・孔の道を論じた。合せて「梅園三語」といふ。安永二年「價原」一卷を著はし、貨幣及び物價の原理を論じ、經濟學に所謂グレシヤムの法則と同一の理法を說いた。天明中、杵築侯松平親賢の召すところとなり、家老の禮を以て遇せられた。梅園は學問該博にして、天文・物理・哲理等より政治・經濟・醫學・博物・文學・語學等に至るまで、通曉しないものはなかつた。明治四十五年二月從四位を贈られた。著述に「梅園全集」（別項）二册がある。

【佐久】



梅園筆蹟（富野辰之氏藏）

煤煙 ばいえん 小說 【作者】森田草平 【發表】明治四十二年一月より五月中旬まで、東京朝日新聞に連載。【刊行】明治四十三年二月第一卷、同年八月第二卷、大正二年八月第三卷、以上如山堂發行。同年十一月第四卷、新潮社。現代日本文學全集・明治大正文學全集所收。【梗概】小島要吉は、去年大學を出た時さへ歸省しなかつたのに、今度は母の用事で、久しぶりに岐阜在の田舍へ歸つた。一生歸りたくないと思つてゐたその田舍には、たつた一人の母がゐた。その上、里方には妻子をも預けてあつた。母には父の生前からいまはしい關係の男があり、それが今は公然と出入りをしてゐた。その男のために、山林を抵當に金を借りてやりたいといふのが母の希望だつた。ところがその方の話が長びきさうになつたので、一切を母に任せて急に東京へ引揚げてしまつた。以前から要吉は、村人の噂から、或は自分がその男の子かも知れないといふ疑ひを常に抱いてゐるのだつた。要吉は東京に近づく汽車の中でお種のことを考へてゐた。お種は要吉と同年で、彼が十四で東京へ出て來た時、同鄕の關係で厄介になつてゐた或る大きな金物屋の娘であつた。それが昨年の秋、嫁入先から離緣になつて戻つて來てゐる間に、要吉との間に因果な關係がついてしまつたのだ。その以前から要吉は、主人が死んで以來、店を疊んでしまつてゐたお種の母親と相談づくで、本鄕の丸山へ假世帶を持つてゐたのだつた。歸つて見ると思つた通りお種が泊りに來てゐた。友人の神戸からは、また金葉會を始めたから出席してくれと言つて來てゐた。金葉會といふのは一週に一回、若い女が集まつて外國文學を研究する會で、神戸がその主催者だつた。お種は翌日殘り惜しさうに姉の家へ歸つて行つた。踊の師匠になるつもりで子供の頃の踊を溫習つて貰つてゐるのださうだ。その後要吉は、金葉會の會員で眞鍋朋子といふ女を紹介された。朋子はあの世の烙印を額に押したやうな暗い陰のある女だつた。要吉が急性リユウマチスで入院した時、その朋子が、神戸と一緒に病院へ見舞ひに來た。女はなぜか要吉の心を惹きつけてしまつた。朋子は要吉から英譯の「死の勝利」を借りて歸つた。神戸たちと入れ違ひに、妻の隅江が子供を連れて不意に見舞ひに來た。丸山の小母さんからの知らせで、田舍から出て來たのだつた。隅江が來てからは、今まで殆ど一日置きに見舞つて、眞心こめて介抱してくれたお種がぷつつり來なくなつた。朋子からも何の音沙汰もない。一月あまりで、やつと退院して、また丸山の家へ歸つたが、隅江と子供のゐるのが、要吉を憂鬱にするばかりだつた。朋子とは金葉會で逢ひ、手紙を交換するまでになつた。要吉は知れば知るほど、女の不思議な性格に引き入れられて行つた。そして要吉は僞はつて女を呼び出し、戀を打ち明けてしまつた。二人はその日、郊外からの歸りに富士見軒で夕食を共にした。そして初めての熱烈な接吻を交した。朋子は强い酒や煙草を嗜んだ。そして街へ出た時、女はこの儘では歸らないと云ひ出した。「如何にでも先生の爲さるやうになりたい」といふ。二人は手を把つて上野の闇を歩いた。女は要吉の胸に顏を埋めてよゝと泣いた。「足りない、足りない。それぢや足りない」「いやだ〳〵、どうかして仕舞つて下さい」、女は譫言のやうに口走つて、苛立たしさうに身をもだえる。要吉はやゝたじろいだ。女はなほ泣きやまない。この狂態のあとで、「もう歸ります、歸らないと內の都合が惡うございますから」、かう言つて朋子は立ち上つた。その聲には冷かな失望が含まれてゐた。要吉はぎくりとした。翌日朋子は、約束の場所へは遂に姿を見せなかつた。待ちあぐんで歸つて見ると朋子からの手紙が來てゐた。それには、自分の昨夜の行爲は虛僞に滿ちたものだ、自分に取つては戀も愛も同情も無意義の文字に過ぎない。自分の住んでゐる世界は全く感動のない世界、氷獄の中だとも書いてあつた。要吉は女に弄ばれたやうな氣がしたが、今は却つて嫻られた情慾も手傳つて、どこまでも弄ばれて遣らうと思ふやうになつた。妻の目もはゞからず、要吉は翌日また朋子を誘ひ出して逢つた。そして女から意外な告白を聞かされた。朋子は性慾の起らない女だつた。要吉は女の言葉に、「ぎらりと電光を頭の中へ送られたやうな心持がした」。今になつて女の仕打の一つ一つが理解された。かうなつてはもう仕方がない、男はただずるずると女に引ずられて行くばかりだつた。逢曳の家を出た要吉の眼には、凡てのものが餘りにも蕭條と映つた。夕暮の瑠璃色の中で、砲兵工廠の煙突が凄じい勢ひで黑煙を吐き出かひ、風の歩み、靜かなる午後の光に、去りゆく優しき五月のうしろ影を。

といふが如き詩に一般の傾向を看取し得る。卽ち感情の激刺と鋭敏と、纖細な神經をもつ詩である。

【川路】

梅園 ばいえん 儒者 【姓名】三浦晉、字は安貞。【別號】洞仙・學山・季山・東川・二子山人・無事齋主人。【生沒】享保八年八月二日歿後の

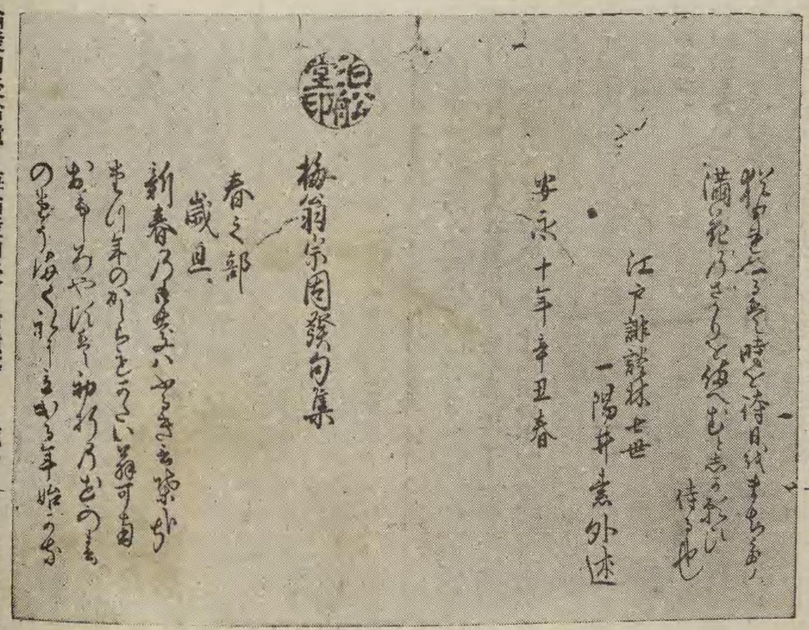
してゐる。「煙がよう御座いますね。私、煤煙の立つのを見てゐると、眞實に好い氣持なんです」「貴方の心の動搖を象徴的に表してる樣だから？」。女は男の反問には答へなかつた。二人の奇怪な交渉は段々深くなつて行つた。女は明らさまに死をさへ求めて來た。そして死場所を搜して彷徨ひ歩きもした。しかし要吉は、幼い子供が腦膜炎で重態に陷つた時だけは、さすがに朋子との問題を忘れて妻と同じ事を心配して暮したが、その子供も亡くなつてしまふと、その骨を持たせて隅江は故郷へ返してしまつた。そして遂に最後の日が來た。朋子と要吉は死地を求めて鹽原の奥、雪の尾花峠に分け入つたが、ふと死ぬことを思ひとどまつた要吉は、女の手を取つて、倒れては起き直りつつ、相擁して月下の雪の上を、氷獄の中を、一足一足に踏んで頂上を目指して上つた。「だん〳〵月の光がぼんやりとして、朝の光に變つてゆく」。

【解說】この作は、作者の生活と性格の危機の中に、謂はば彼の生涯の歷史の轉廻期の中に打ち立てられた記念塔であり、當時の尖端を行つた青年と若き女性の熱情に燒きつけられた映像である。「若き日の日本」が歩んだ足跡でもある。何故ならば、この作の題材は作者自身が身を以て描いた生活それ自體であり、作中の主人公は彼であり、又彼女である。その女主人公が平塚雷鳥女史であることは餘りに有名なことだ。なほこの作にはダンヌンチオの、殊に「死の勝利」の大きな影響があることは見遁してはならない。構想にも、內容にも、その歷々たる影響を指摘することが出來る。なほこゝに注意すべきことは、當時に於ける文壇の主流は、新興の自然主義によつて代表されてゐたといふ點である。しかも「煤煙」の一篇は、それとは凡そ對蹠的な作品であつた。溶けた鐵のやうな情熱の火を、戀愛のるつぼへ强烈に注いで、そこに人生の生き甲斐を見出さうとしたのがこの作である。尤も作の前半には自然主義的な匂ひが、かなり濃厚に見られ、それがこの作を純一なものでなくしてゐる憾みはある。しかし同じ漱石門下の鈴木三重吉の諸作と共に、唯美的な新浪漫主義の作風に强烈な拍車をかけた作品として注目すべきものである。なほこの作が一たび新聞紙上に發表されるや、青年達の間に白熱的な歡迎を受け、作者は忽ちにして文名を成すに至つた。【江口】

梅園全集（ばいえんぜんしふ）　二卷二册　【著者】三浦安貞　【刊行】大正元年、弘道館。【內容】梅園會の編纂で、梅園の著作は殆ど全部網羅されてゐる。【上卷】玄語八卷○贅語十四卷○敢語○寓意○乘綸子○元熙論○死生譚○造物餘譚○身生餘譚○丙午封事○僭原○豐後跡考○五月雨抄　○東遊草（以上各一卷）○歸山錄二卷○名字私議二卷○先考三浦虎角居士行狀一卷。【下卷】梅園叢書（別項）○梅園拾葉三卷○梅園後拾葉一卷○梅園拾英一卷○愉婉錄二卷○養生訓○勅制○梅園讀法○子歲漫錄（以上各一卷）○詩轍六卷○獨嘯錄一卷○春遊草一卷○梅園詩集二卷○梅園詩稿一卷○梅園文集一卷○書翰集一卷。【佐久】

梅園叢書（ばいえんそうしよ）　隨筆　三卷　【著者】三浦安貞　【刊行】安政二年　【諸本】梅園全集・百家說林所收。【解說】道學者の見地から修身齊家の要義を平易に說いたもので、全編四十九章、第一章「詩を說きて道に志す人に喩す」に起り、第四十九章「施しをなしまた施しを受くる心得」に終る。尋常の隨筆とは異なつて、敎誨を主としたものである。【和田】

梅翁宗因句集（ばいをうそういんくしふ）　二册　【編者】谷素外　【刊行】天明元年、文化二年。【諸本】俳諧珍本集（俳諧文庫）所收　【解說】梅翁宗因發句集・梅翁發句追加・梅翁發句拾遺・梅翁發句後拾遺・梅翁發句後々拾遺等より成つてゐて、後々拾遺の外は、凡て四季に類別されてゐる。最初の梅翁宗因の發句集に梅翁發句追加へたものが天明元年に刊行され、發句集の句數が二百三十八句、追加が百十二句であつたが、それに拾遺百十一句、後拾遺六十四句、後々拾遺四句（卷二句、卷二句）を增補して、文化二年に刊行した。安永十年辛丑春江戸俳談林七世一陽井素外述の自序が附いてゐるが、それによると「梅翁宗因發句集」は當時すでに成つてゐたもので、それに追加を加へて天明元年に刊行したものであることが知られる。又この自序は宗因の閱歷の概要を餘程確實に述べてゐるので、貴重な資料となるものである。句々の出典を示してないのは惜しいが、宗因の句の大部分が集められてゐるから、その點に於て便宜な句集である。【萩原】



梅翁宗因發句集（松字文庫藏）

俳畫（はいぐわ）　繪畫　【解說】自然の中に存在する詩的情調が、俳句によつて創造せられるやうに、自然の俳趣味を繪畫形式に於て表現したもので、江戸時代夙に松花堂の筆觸に現はれつつあつた。彼の畧繪は、後の俳畫といふべき性質を具へてゐた。後に出た大雅や蕪村のやうな文人畫家は、支那畫風と支那趣味とを超越した日本の俳畫を畫いた。蓋し俳畫の流行は、自己の俳句を繪に表現して、それを贈答する風習が彼等俳人の間に行はれたことに起るものであらう。俳句が十七字詩である如く、俳畫も亦簡單直截であつて、その趣味は兩者全く相同じである。【藤懸】

俳諧（はいかい）　【名義】「史記」の滑稽傳の註に「滑稽は俳諧の如し」とあるところから、古來俳諧はをかしきたはむれごとの義と解されてゐた。然るに「古今集」に俳諧歌の語を用ひて、言偏の誹の字を用ひて以來、種々の論を生じたのであるが、支那にも古く言偏の誹の字を用ひた例があるので、「古今集」は、それに依つたのかとも思はれるのであるが、要するに人偏の俳の正しいことは云ふまでもない。貞門（別項）では概ね誹の字を用ひたのであるが、これは故實を尊んだからである。談林（別項）もこの點では大體變らない。蕉風（別項）では、芭蕉は他門に對しては彼此は云はぬが、人偏の俳を用ひる方がよいとの說であつたので、俳の字を用ひる方が普通になつた。支考などは、芭蕉が俳の字に定めた如く云つて、俳の字に限るとしてゐるが、芭蕉は確定的に云つた譯ではない。蕉風內及びとなり、安永・天明の復興俳諧では壯麗な趣味のものとして蕉風を復興したのである。【沿革】【足利時代】この時代の後期に宗鑑・守武が出て、俳諧を連歌（別項）から獨立せしめた。宗鑑の俳風は滑稽能く人の頤を解くが、往々野卑なものもあつた。その編に、「新撰犬筑波集」（別項）がある。守武の俳風も大體同樣ながら、やゝ上品な處がある。その代表的な作に、獨吟の所謂「守武千句」（別項）がある。この千句はまだ俳諧の式目の定まらない時代の作として注目すべきものである。【江戸時代】宗鑑・守武以來、俳諧が暫く連歌に壓倒されてゐたが、江戸期の初めに貞德（別項）が出て、俳諧を中興した。彼の俳風はやさしきを體とし、をかしきを用とすると云はれる。卽ち彼の俳諧は、彼が若年から修行した連歌の素養となり、安永・天明の復興俳諧では壯麗な趣味のものとして蕉風を復興したのである。【沿革】【足利時代】この時代の後期に宗鑑・守武が出て、俳諧を連歌（別項）から獨立せしめた。宗鑑の俳風は滑稽能く人の頤を解くが、往々野卑なものもあつた。その編に、「新撰犬筑波集」（別項）がある。守武の俳風も大體同樣ながら、やゝ上品な處がある。その代表的な作に、獨吟の所謂「守武千句」（別項）がある。この千句はまだ俳諧の式目の定まらない時代の作として注目すべきものである。【江戸時代】宗鑑・守武以來、俳諧が暫く連歌に壓倒されてゐたが、江戸期の初めに貞德（別項）が出て、俳諧を中興した。彼の俳風はやさしきを體とし、をかしきを用とすると云はれる。卽ち彼の俳諧は、彼が若年から修行した連歌の素養な點が古風に飽いた人の人氣を呼び、貞門の俳士でこの風に走り、或は化せられる者も少くなく、延寶の頃專ら流行を見た。やゝ降る頃、仙臺に三千風（別項）がゐて、難訓怪奇な文字を濫用して、一種の談林風を唱へてゐた。これより先、寬文十二年に江戸に下つた芭蕉（別項）は、古風・談林の俳風を經て、滑稽遊戲的な俳諧を革新し、俳諧を詩の正道に歸せしめて蕉風（別項）を開いた。かくして後世永く據るべき方向が示されたが、その確立の期は凡そ貞享・元祿の頃であつた。その門下に所謂蕉門十哲（別項）を初め、優れた作者が多く現はれた。芭蕉と殆ど同時に、初め重頼に師事した伊丹の鬼貫（別項）が、貞享二年「まことの外に俳諧なし」と悟つて蕉風に近い俳風を拓き、伊丹風（別項）を確立するに至つた。彼は安永・天明の俳壇に清新の風を失はなかつた。殊に葛飾派系統の一茶は、當時に於ける一種特殊な存在として、特異の俳調を擅まゝにした。然るに天保度に至つては、俳壇は再び俗了した。この時代の主なる人には、護物・鳳朗・蒼虬・梅室等があつたが、最早芭蕉

作中の主人公は彼であり、又彼女である。その女主人公が平塚雷鳥女史であることは餘りに有名なことだ。なほこの作にはダンヌンチオの、殊に「死の勝利」の大きな影響があることは見遁してはならない。構想にも、内容にも、その歴々たる影響を指摘することが出來る。なほこゝに注意すべきことは、當時に於ける文壇の主流は、新興の自然主義によつて

○梅園詩集二卷○梅園詩稿一卷○梅園文集一卷○書翰集一卷。　【佐久】

梅園叢書（ばいえんそうしょ）　隨筆　三卷　【著者】三浦安貞　【刊行】安政二年　【諸本】梅園全集・百家說林所收。【解說】道學者の見地から修身齊家の要義を平易に說いたもので、全編四十九章、第一章「詩を說きて道に志す人に喩す」に起り、第四十九章「施しをなしまた施し

はいかい

るところから、古來俳諧はをかしきたはむれごとの義と解されてゐた。然るに「古今集」に俳諧歌の語を用ひて、言偏の誹の字を用ひて以來、種々の論を生じたのであるが、支那にも古く言偏の誹の字を用ひた例があるので、「古今集」は、それに依つたのかとも思はれるのであるが、要するに人偏の俳の正しいことは云ふまでもない。貞門（別項）では概ね誹の字を用ひたのであるが、これは故實を尊んだからである。談林（別項）もこの點では大體變らない。蕉風（別項）では、芭蕉は他門に對しては彼此は云はぬが、人偏の俳を用ひる方がよいとの說であつたので、俳の字を用ひる方が普通になつた。支考などは、芭蕉が俳の字に定めた如く云つて、俳の字に限るとしてゐるが、芭蕉は確定的に云つた譯ではない。蕉風内及び蕉風以後でも、誹の字を用ひないことはなく、特に貞門系では誹の字を用ひる方が多いが、併し俳の字の方が優勢にはなり來つたのである。【名稱・性質】俳諧は發句（俳句）・連句（狹義の俳諧）の總稱である。これに式目・卷式・附合・賦物・切字・季寄（各別項）等が考へられてゐる。又これから派生した和詩（別項）があり、一方に俳文・俳論（別項）がある。近頃は俳諧・俳文・和詩など、俳諧味を持つものを總稱して俳文學とも云つてゐる。俳諧は元來俳諧連歌の略稱で、連歌の俳諧的（滑稽的）なものの獨立したものなので（連歌參照）、貞門・談林に於ては文字通り俳諧的なものであつたのであるが、蕉風に於て内容が革新されて、名とは別の眞面目な文學的なものとなつたのである。宗鑑・守武（各別項）以來、貞門・談林では、大體懸詞・譬喩等言葉の上の滑稽が主であつたが、蕉風では所謂寂・萎・細み等の幽玄閑寂な趣のもの

となり、安永・天明の復興俳諧では北麓な趣味のものとして蕉風を復興したのである。【沿革】【足利時代】この時代の後期に宗鑑・守武が出て、俳諧を連歌（別項）から獨立せしめた。宗鑑の俳風は滑稽能く人の頤を解くが、往々野卑なものもあつた。その編に、「新撰犬筑波集」（別項）がある。守武の俳風も大體同樣ながら、やゝ上品な處がある。その代表的な作に、獨吟の所謂「守武千句」（別項）がある。この千句はまだ俳諧の式目の定まらない時代の作として注目すべきものである。【江戸時代】宗鑑・守武以來、俳諧が暫く連歌に壓倒されてゐたが、江戸期の初めに貞德（別項）が出て、俳諧を中興した。彼の俳風はやさしきを體とし、をかしきを用とすると云はれる。即ち彼の俳諧は、彼が若年から修行した連歌の素養と宗鑑の俳諧の感化とによるものである。彼は俳言（俗語・漢語）のあることを俳諧の本質的條件としたので、形式に傾く嫌があつた。始めて俳諧の式目を定め、「御傘」（別項）を著はしてゐる。多くの門人中、立圃・重頼・貞室・令德・西武・季吟・梅盛の所謂七俳仙（別項）等が勝れてゐる。この派を貞門又は古風と稱し、寛文以前專ら隆盛であつた。貞門が形式に捉はれ、式目に拘泥し過ぎる傾きがあつたので、これの反動として起つたのが宗因（別項）であつた。この派を談林と稱する。宗因は俗語漢語を自由に用ひ、字餘りをも嫌はず、式目にも必ずしも拘泥せず、新奇を求め、やゝ内容的なものともした。門下に惟中・西鶴・高政・松意（各別項）等があつて、その斬新奇拔な點に於て宗因よりも一步を進め、奔放な輕口狂言の道化に走り、放埒を極める點さへあつた。西鶴の如きは特に輕口早口を得意とした。その新奇

な點が古風に飽いた人の人氣を呼び、貞門の俳士でこの風に走り、或は化せられる者も少くなく、延寶の頃專ら流行を見た。やゝ降る頃、仙臺に三千風（別項）がゐて、難訓怪奇な文字を濫用して、一種の談林風を唱へてゐた。これより先、寛文十二年に江戸に下つた芭蕉（別項）は、古風・談林の俳風を經て、滑稽遊戲的な俳諧を革新し、俳諧を詩の正道に歸せしめて蕉風（別項）を開いた。かくして後世永く據るべき方向が示されたが、その確立の期は凡そ貞享・元祿の頃であつた。その門下に所謂蕉門十哲（別項）を初め、優れた作者が多く現はれた。芭蕉と殆ど同時に、初め重頼に師事した伊丹の鬼貫（別項）が、貞享二年「まことの外に俳諧なし」と悟つて蕉風に近い俳風を拓き、伊丹風（別項）を確立するに至つた。彼は安永・天明の中興俳人にも影響を與へる所が少くない。芭蕉歿後、中心を失つた門下は漸く分裂を來した。其角系統の洒落風（江戸座參照）、嵐雪の雪門（別項）、支考の美濃風（別項）、凉菟・乙由の伊勢風（別項）、外に芭蕉の俳友素堂の葛飾風（別項）があり、また不角の化鳥風（別項）、沾洲の比喩體（別項）、淡々の浪花振等が寶曆頃までの間に起つた。この間に、宗瑞等の五色墨（別項）などの運動があつたが、俳壇は愈々頽廢するのみで、點取俳諧となり、蕉風の眞諦は失はれて行つた。併し動反動の原則によつて、遂に蕉風復興の機運が動き、復興の聲は京・江戸・尾張・伊勢・加賀等の各地から起つた。安永・天明の復興俳諧が即ちそれで、蕪村・藜太・白雄・曉臺・樗良・闌更・麥水等は、その雄なるものであつた。これを概括して天明調（蕪村參照）とも稱する。これ等復興派の目標は、芭蕉の完成した境地よりも、寧ろその前期にある

ものが多かつた。即ち蕪村は貞享の「初懷紙」（別項）の調を愛し、曉臺は貞享の「冬の日」（別項）を規矩とし、麥水は天和の「虛栗」（別項）を尊んだ如きがそれである。而も單なる復古摸倣に了らないで、諸家それ〴〵清新の調を出したところに復興の意義と價値とがあつた。復興の諸家は大方寛政の末までに歿したが、蕪村門の月居、曉臺門の士朗・素檗、藜太門の完來・大江丸、白雄門の長翠・道彦、その他乙二・五明・成美等が、なほ能く前代の風韻を繼承し得て、化政度の俳壇に清新の風を失はなかつた。殊に葛飾派系統の一茶は、當時に於ける一種特殊な存在として、特異の俳調を擅まゝにした。然るに天保度に至つては、俳壇は再び俗了した。この時代の主なる人には、護物・鳳朗・蒼虬・梅宇等があつたが、最早芭蕉の形骸を見るのみで眞諦を解せず、徒らに芭蕉を神の如く崇拜し、「七部集」を經典の如く尊ぶのみで、天保の俗俳を以て稱せられるものとなり了つた。かくて嘉永以後明治に至つては、西馬・逸淵・見外・爲山・梅年・永機・幹雄等の宗匠を次々出したけれども、天保の俗調を繰返すに過ぎず、衰運の一途を辿るのみで、遂に明治三十年前後、子規の日本派（別項）の革新運動を釀成するに至つた。

【研究史】俳諧の註釋及び俳人の傳記の研究は、江戸時代に於ても見られるが、俳諧の史的研究は頗る乏しく、俳論は少からず出てゐて、特に蕉風系統の人の著が多いが、本質的研究として注意するに足るものは比較的少く、史的研究及び本質的研究は、明治以後に至つて研究らしい研究になつて來たと云へる。史的研究、特に流派的研究としては、許六の「歷代滑稽傳」（別項）、沾洲の「鳥山彦」、白露の「誹

句を縮に表現して、それを贈答する風習が彼等俳人の間に行はれたことに起るものであらう。俳句が十七字詩である如く、俳書も亦簡單直截であつて、その趣味は兩者全く相同じである。

俳諧（はいかい）　【名義】「史記」の滑稽傳の註に「滑稽は俳諧の如し」とあ

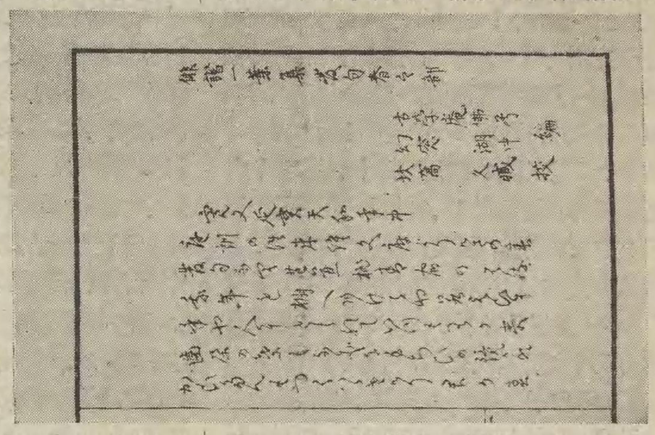
俳諧石車（はいかいいしぐるま）

「石車」を見よ。

俳諧一葉集（はいかいいちえふしふ）

俳諧集 前編五冊 後編四冊 【編者】幻窓湖中・古學庵佛兮

【名義】湖中の自序によると、芭蕉の「夏來てもただ一つ葉のひとつかな」といふ句によつて名づけたので、一つ葉の如きに着眼した芭蕉らしさに取つたのであらうか。【刊行】文政十二年【諸本】活字本には明治二十五年の覆刻、大正十四年の「芭蕉一葉集」と改題のものがある。【解說】芭蕉の發句・附句を年代順に集め、紀行・文・消息・句合・遺語の各部門に分つて、芭蕉一代の述作を網羅したものである。即ち前編一之卷には、寛文より元祿迄の發句を四季順に集め、各季の末に考證として疑問の存する句を掲げてある。二之卷には寛文十年より天和四年迄の三吟・附句・歌仙・百韻等を集め、卷之三には貞享元年より元祿元年迄の同じく連句、卷之四には元祿二年より同四年迄の連句、卷之五には元祿五年より同七年迄の連句を集め、後編卷之一には紀行・文、卷之二には消息・句合、卷之三・四には遺語を收めてゐる。文政十年洞海涼谷の漢文序、同十一年太田一徑の序、同十年仲秋四壁堂湖中の自序があり、凡例九條がある。四壁堂藏版である。【價値】本書以前にも芭蕉の發句や連句を年代順に集めたものや文集などは出てゐるが、それ等は皆個々の集に集めたもので、紀行・文章・消息・遺語等に亙つてまで網羅したものはない。本書は初めてこれ等凡てを集大成したもので、芭蕉研究の資料として缺くべからざるものである。【影響】本書の出版は、後世に大なる影響を與へ、本書以後の「芭蕉一代集」は大方本書に準據して編輯されてゐる。即ち默池の「袖珍鈔」、秀三の「芭蕉一代集」、瓊音の「芭蕉全集」とその他のものは、「一葉集」を源流として、誤謬を訂したり、補つたり、又は出典を明かにしたりしてゐる。【參考】撰原志田



俳諧一串抄（はいかいひとつらぬきしやう）

俳論 一冊 【著者】六平齋赤夢。赤夢は本名那雄、諸摩に遁じ、俳人としては越中富山に翁を唱へた人。【名義】體裁論を以て全篇を一つの串の如く貫いてゐるために、一串抄の名がある。【刊行】天保元年【諸本】俳諧論集（俳諧文庫）所收。【解說】俳諧の變格を論じたもので、著者の說明によれば、「俳諧の作風は一般の作風と異つてゐるために、その作風は一般と異つてゐるが、それは變格であるからである」といふ點に於て湖中の努力を多とせねばならぬ。ただ時代が時代であつただけに、芭蕉にあらざる宗房の句を芭蕉のものに出典を示さなかつたのが甚だ惜しいふべきものである。この點に於て湖中の努力を多とせねばならぬ。ただ時代が時代であるが、これは獨り湖中の罪ではない。ただ集めたものに出典を示さなかつたのが甚だ惜しい點である。

俳諧一葉集（はいかいいちえふしふ）

俳論 前編五冊 後編四冊 【編者】幻窓湖中・古學庵佛兮

【名義】湖中の自序によると、芭蕉の「夏來てもただ一つ葉のひとつかな」といふ句によつて名づけたので、一つ葉の如きに着眼した芭蕉らしさに取つたのであらうか。【刊行】文政十二年【諸本】活字本には明治二十五年の覆刻、大正十四年の「芭蕉一葉集」と改題のものがある。【解說】芭蕉の發句・附句を年代順に集め、紀行・文・消息・句合・遺語の各部門に分つて、芭蕉一代の述作を網羅したものである。即ち前編一之卷には、寛文より元祿迄の發句を四季順に集め、各季の末に考證として疑問の存する句を掲げてある。二之卷には寛文十年より天和四年迄の三吟・附句・歌仙・百韻等を集め、卷之三には貞享元年より元祿元年迄の同じく連句、卷之四には元祿二年より同四年迄の連句、卷之五には元祿五年より同七年迄の連句を集め、後編卷之一には紀行・文、卷之二には消息・句合、卷之三・四には遺語を收めてゐる。文政十年洞海涼谷の漢文序、同十一年太田一徑の序、同十年仲秋四壁堂湖中の自序があり、凡例九條がある。四壁堂藏版である。【價値】本書以前にも芭蕉の發句や連句を年代順に集めたものや文集などは出てゐるが、それ等は皆個々の集に集めたもので、紀行・文章・消息・遺語等に亙つてまで網羅したものはない。本書は初めてこれ等凡てを集大成したもので、芭蕉研究の資料として缺くべからざるものである。【影響】本書の出版は、後世に大なる影響を與へ、本書以後の「芭蕉一代集」は大方本書に準據して編輯されてゐる。即ち默池の「袖珍鈔」、秀三の「芭蕉一代集」、瓊音の「芭蕉全集」とその他のものは、「一葉集」を源流として、誤謬を訂したり、補つたり、又は出典を明かにしたりしてゐる。【參考】撰原志田

俳諧一串抄（はいかいひとつらぬきしやう）

俳論 一冊 【著者】六平齋赤夢。赤夢は本名那雄、諸摩に遁じ、俳人としては越中富山に翁を唱へた人。【名義】體裁論を以て全篇を一つの串の如く貫いてゐるために、一串抄の名がある。【刊行】天保元年【諸本】俳諧論集（俳諧文庫）所收。【解說】俳諧の變格を論じたもので、著者の說明によれば、「俳諧の作風は一般の作風と異つてゐるために、その作風は一般と異つてゐるが、それは變格であるからである」といふ點に於て湖中の努力を多とせねばならぬ。ただ時代が時代であつただけに、芭蕉にあらざる宗房の句を芭蕉のものに出典を示さなかつたのが甚だ惜しいふべきものである。この點に於て湖中の努力を多とせねばならぬ。ただ時代が時代であるが、これは獨り湖中の罪ではない。ただ集めたものに出典を示さなかつたのが甚だ惜しい點である。

俳諧一葉集（はいかいいちえふしふ）

俳論 前編五冊 後編四冊 【編者】幻窓湖中・古學庵佛兮

【名義】湖中の自序によると、芭蕉の「夏來てもただ一つ葉のひとつかな」といふ句によつて名づけたので、一つ葉の如きに着眼した芭蕉らしさに取つたのであらうか。【刊行】文政十二年【諸本】活字本には明治二十五年の覆刻、大正十四年の「芭蕉一葉集」と改題のものがある。【解說】芭蕉の發句・附句を年代順に集め、紀行・文・消息・句合・遺語の各部門に分つて、芭蕉一代の述作を網羅したものである。即ち前編一之卷には、寛文より元祿迄の發句を四季順に集め、各季の末に考證として疑問の存する句を掲げてある。二之卷には寛文十年より天和四年迄の三吟・附句・歌仙・百韻等を集め、卷之三には貞享元年より元祿元年迄の同じく連句、卷之四には元祿二年より同四年迄の連句、卷之五には元祿五年より同七年迄の連句を集め、後編卷之一には紀行・文、卷之二には消息・句合、卷之三・四には遺語を收めてゐる。文政十年洞海涼谷の漢文序、同十一年太田一徑の序、同十年仲秋四壁堂湖中の自序があり、凡例九條がある。四壁堂藏版である。【價値】本書以前にも芭蕉の發句や連句を年代順に集めたものや文集などは出てゐるが、それ等は皆個々の集に集めたもので、紀行・文章・消息・遺語等に亙つてまで網羅したものはない。本書は初めてこれ等凡てを集大成したもので、芭蕉研究の資料として缺くべからざるものである。【影響】本書の出版は、後世に大なる影響を與へ、本書以後の「芭蕉一代集」は大方本書に準據して編輯されてゐる。即ち默池の「袖珍鈔」、秀三の「芭蕉一代集」、瓊音の「芭蕉全集」とその他のものは、「一葉集」を源流として、誤謬を訂したり、補つたり、又は出典を明かにしたりしてゐる。【參考】撰原志田

俳諧一串抄（はいかいひとつらぬきしやう）

俳論 一冊 【著者】六平齋赤夢。赤夢は本名那雄、諸摩に遁じ、俳人としては越中富山に翁を唱へた人。【名義】體裁論を以て全篇を一つの串の如く貫いてゐるために、一串抄の名がある。【刊行】天保元年【諸本】俳諧論集（俳諧文庫）所收。【解說】俳諧の變格を論じたもので、著者の說明によれば、「俳諧の作風は一般の作風と異つてゐるために、その作風は一般と異つてゐるが、それは變格であるからである」といふ點に於て湖中の努力を多とせねばならぬ。ただ時代が時代であつただけに、芭蕉にあらざる宗房の句を芭蕉のものに出典を示さなかつたのが甚だ惜しいふべきものである。この點に於て湖中の努力を多とせねばならぬ。ただ時代が時代であるが、これは獨り湖中の罪ではない。ただ集めたものに出典を示さなかつたのが甚だ惜しい點である。

俳諧石車（はいかいいしぐるま）

「石車」を見よ。

俳諧一葉集（はいかいいちえふしふ）

俳論 前編五冊 後編四冊 【編者】幻窓湖中・古學庵佛兮

【名義】湖中の自序によると、芭蕉の「夏來てもただ一つ葉のひとつかな」といふ句によつて名づけたので、一つ葉の如きに着眼した芭蕉らしさに取つたのであらうか。【刊行】文政十二年【諸本】活字本には明治二十五年の覆刻、大正十四年の「芭蕉一葉集」と改題のものがある。【解說】芭蕉の發句・附句を年代順に集め、紀行・文・消息・句合・遺語の各部門に分つて、芭蕉一代の述作を網羅したものである。即ち前編一之卷には、寛文より元祿迄の發句を四季順に集め、各季の末に考證として疑問の存する句を掲げてある。二之卷には寛文十年より天和四年迄の三吟・附句・歌仙・百韻等を集め、卷之三には貞享元年より元祿元年迄の同じく連句、卷之四には元祿二年より同四年迄の連句、卷之五には元祿五年より同七年迄の連句を集め、後編卷之一には紀行・文、卷之二には消息・句合、卷之三・四には遺語を收めてゐる。文政十年洞海涼谷の漢文序、同十一年太田一徑の序、同十年仲秋四壁堂湖中の自序があり、凡例九條がある。四壁堂藏版である。【價値】本書以前にも芭蕉の發句や連句を年代順に集めたものや文集などは出てゐるが、それ等は皆個々の集に集めたもので、紀行・文章・消息・遺語等に亙つてまで網羅したものはない。本書は初めてこれ等凡てを集大成したもので、芭蕉研究の資料として缺くべからざるものである。【影響】本書の出版は、後世に大なる影響を與へ、本書以後の「芭蕉一代集」は大方本書に準據して編輯されてゐる。即ち默池の「袖珍鈔」、秀三の「芭蕉一代集」、瓊音の「芭蕉全集」とその他のものは、「一葉集」を源流として、誤謬を訂したり、補つたり、又は出典を明かにしたりしてゐる。【參考】撰原志田

俳諧一串抄（はいかいひとつらぬきしやう）

俳論 一冊 【著者】六平齋赤夢。赤夢は本名那雄、諸摩に遁じ、俳人としては越中富山に翁を唱へた人。【名義】體裁論を以て全篇を一つの串の如く貫いてゐるために、一串抄の名がある。【刊行】天保元年【諸本】俳諧論集（俳諧文庫）所收。【解說】俳諧の變格を論じたもので、著者の說明によれば、「俳諧の作風は一般の作風と異つてゐるために、その作風は一般と異つてゐるが、それは變格であるからである」といふ點に於て湖中の努力を多とせねばならぬ。ただ時代が時代であつただけに、芭蕉にあらざる宗房の句を芭蕉のものに出典を示さなかつたのが甚だ惜しいふべきものである。この點に於て湖中の努力を多とせねばならぬ。ただ時代が時代であるが、これは獨り湖中の罪ではない。ただ集めたものに出典を示さなかつたのが甚だ惜しい點である。

俳諧一葉集（はいかいいちえふしふ）

俳論 前編五冊 後編四冊 【編者】幻窓湖中・古學庵佛兮

【名義】湖中の自序によると、芭蕉の「夏來てもただ一つ葉のひとつかな」といふ句によつて名づけたので、一つ葉の如きに着眼した芭蕉らしさに取つたのであらうか。【刊行】文政十二年【諸本】活字本には明治二十五年の覆刻、大正十四年の「芭蕉一葉集」と改題のものがある。【解說】芭蕉の發句・附句を年代順に集め、紀行・文・消息・句合・遺語の各部門に分つて、芭蕉一代の述作を網羅したものである。即ち前編一之卷には、寛文より元祿迄の發句を四季順に集め、各季の末に考證として疑問の存する句を掲げてある。二之卷には寛文十年より天和四年迄の三吟・附句・歌仙・百韻等を集め、卷之三には貞享元年より元祿元年迄の同じく連句、卷之四には元祿二年より同四年迄の連句、卷之五には元祿五年より同七年迄の連句を集め、後編卷之一には紀行・文、卷之二には消息・句合、卷之三・四には遺語を收めてゐる。文政十年洞海涼谷の漢文序、同十一年太田一徑の序、同十年仲秋四壁堂湖中の自序があり、凡例九條がある。四壁堂藏版である。【價値】本書以前にも芭蕉の發句や連句を年代順に集めたものや文集などは出てゐるが、それ等は皆個々の集に集めたもので、紀行・文章・消息・遺語等に亙つてまで網羅したものはない。本書は初めてこれ等凡てを集大成したもので、芭蕉研究の資料として缺くべからざるものである。【影響】本書の出版は、後世に大なる影響を與へ、本書以後の「芭蕉一代集」は大方本書に準據して編輯されてゐる。即ち默池の「袖珍鈔」、秀三の「芭蕉一代集」、瓊音の「芭蕉全集」とその他のものは、「一葉集」を源流として、誤謬を訂したり、補つたり、又は出典を明かにしたりしてゐる。【參考】撰原志田

俳諧一串抄（はいかいひとつらぬきしやう）

俳論 一冊 【著者】六平齋赤夢。赤夢は本名那雄、諸摩に遁じ、俳人としては越中富山に翁を唱へた人。【名義】體裁論を以て全篇を一つの串の如く貫いてゐるために、一串抄の名がある。【刊行】天保元年【諸本】俳諧論集（俳諧文庫）所收。【解說】俳諧の變格を論じたもので、著者の說明によれば、「俳諧の作風は一般の作風と異つてゐるために、その作風は一般と異つてゐるが、それは變格であるからである」といふ點に於て湖中の努力を多とせねばならぬ。ただ時代が時代であつただけに、芭蕉にあらざる宗房の句を芭蕉のものに出典を示さなかつたのが甚だ惜しいふべきものである。この點に於て湖中の努力を多とせねばならぬ。ただ時代が時代であるが、これは獨り湖中の罪ではない。ただ集めたものに出典を示さなかつたのが甚だ惜しい點である。

俳諧一葉集（はいかいいちえふしふ）

俳論 前編五冊 後編四冊 【編者】幻窓湖中・古學庵佛兮

【名義】湖中の自序によると、芭蕉の「夏來てもただ一つ葉のひとつかな」といふ句によつて名づけたので、一つ葉の如きに着眼した芭蕉らしさに取つたのであらうか。【刊行】文政十二年【諸本】活字本には明治二十五年の覆刻、大正十四年の「芭蕉一葉集」と改題のものがある。【解說】芭蕉の發句・附句を年代順に集め、紀行・文・消息・句合・遺語の各部門に分つて、芭蕉一代の述作を網羅したものである。即ち前編一之卷には、寛文より元祿迄の發句を四季順に集め、各季の末に考證として疑問の存する句を掲げてある。二之卷には寛文十年より天和四年迄の三吟・附句・歌仙・百韻等を集め、卷之三には貞享元年より元祿元年迄の同じく連句、卷之四には元祿二年より同四年迄の連句、卷之五には元祿五年より同七年迄の連句を集め、後編卷之一には紀行・文、卷之二には消息・句合、卷之三・四には遺語を收めてゐる。文政十年洞海涼谷の漢文序、同十一年太田一徑の序、同十年仲秋四壁堂湖中の自序があり、凡例九條がある。四壁堂藏版である。【價値】本書以前にも芭蕉の發句や連句を年代順に集めたものや文集などは出てゐるが、それ等は皆個々の集に集めたもので、紀行・文章・消息・遺語等に亙つてまで網羅したものはない。本書は初めてこれ等凡てを集大成したもので、芭蕉研究の資料として缺くべからざるものである。【影響】本書の出版は、後世に大なる影響を與へ、本書以後の「芭蕉一代集」は大方本書に準據して編輯されてゐる。即ち默池の「袖珍鈔」、秀三の「芭蕉一代集」、瓊音の「芭蕉全集」とその他のものは、「一葉集」を源流として、誤謬を訂したり、補つたり、又は出典を明かにしたりしてゐる。【參考】撰原志田

俳諧一串抄（はいかいひとつらぬきしやう）

俳論 一冊 【著者】六平齋赤夢。赤夢は本名那雄、諸摩に遁じ、俳人としては越中富山に翁を唱へた人。【名義】體裁論を以て全篇を一つの串の如く貫いてゐるために、一串抄の名がある。【刊行】天保元年【諸本】俳諧論集（俳諧文庫）所收。【解說】俳諧の變格を論じたもので、著者の說明によれば、「俳諧の作風は一般の作風と異つてゐるために、その作風は一般と異つてゐるが、それは變格であるからである」といふ點に於て湖中の努力を多とせねばならぬ。ただ時代が時代であつただけに、芭蕉にあらざる宗房の句を芭蕉のものに出典を示さなかつたのが甚だ惜しいふべきものである。この點に於て湖中の努力を多とせねばならぬ。ただ時代が時代であるが、これは獨り湖中の罪ではない。ただ集めたものに出典を示さなかつたのが甚だ惜しい點である。

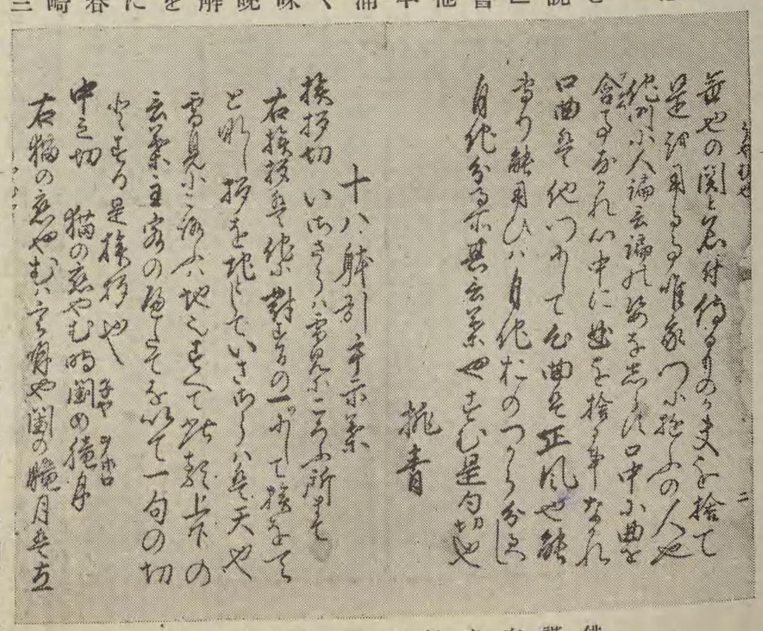
あるが、作用の由つて來る實體即ち毛と管とから成る物質が筆の體である。詩歌連俳の如きはこの體を持たず、詩歌連俳といふ名が直ちにその體である。體には各々これに附屬した一定不變の規格がある。この規格が所謂體格であるとした。即ち本文は俳諧に於けるこの規格を論じたもので、或る事を言ひ出すのが俳諧がために、先づ別の一事を言ひ出すのが俳諧の體格であるとした。この觀點に立つて俳諧の本質、蕉風の發句・附句の特質及び句作上の心得、その他俳諧一道を考察したのである。本文には、「名は體用の元たる事」「俳諧の作句に體格ある事」「俳句の格は題詠にて定むべき事」「古今集の俳諧歌は翁の俳句の證とはならざる事」など、隨所に諸種の標題を掲げてあるが、閲讀の便を計つた程のもので、全篇は有機的に綴られた一聯の文である。〔各務〕

俳諧馬の糞（はいかいうまのくそ） 俳話 【著者】高濱虛子 【刊行】明治三十九年一月 【内容】「ホトトギス」その他、各種の雜誌・新聞等に載せた虛子の俳話、その他を輯めたもので、「北の山」「芭蕉歿後の俳壇」「新虛栗の句と蕪村の句」などの如く、古俳諧に就いて論じたもの、「寫生趣味と空想趣味」「技巧の弊」「考へやう二つ」の如く作句法を實際に說いたもの、「連句の趣味」「連句論」の如く、連句に就いて意見を述べたものがある。その他、句評・日記・紀行等、長短合して四十八篇、虛子の早い時期の意見・文藻を見るべきものである。〔水原〕

俳諧海山（はいかいうみやま） 「海山」を見よ。

俳諧埋木（はいかいうもれぎ） 「埋木」を見よ。

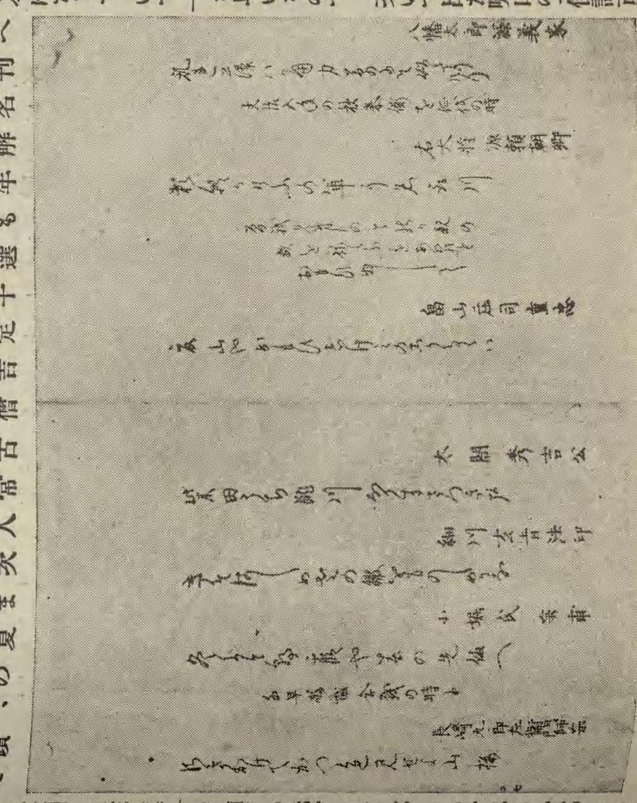
俳諧有也無也關（はいかいうやむやのせき） 俳諧作法 一册 【著者】不詳。卷末に現幻住落柿三世主人在判とあつて、これが著者か傳者か明かでないが、恐らく傳者であらう。併し假設名らしい。【名稱】本名は「幻住庵俳諧有也無也關」、略して「幻住庵俳諧」といふ。但し卷末識語には、「右、元祿新式室內有也無也關は云々」とあり、書中にも元祿の新式とあるので「元祿の新式」とも呼ばれてゐる（例へば秋成の「也哉抄」にさう呼んでゐる如き）。【名義】書中の十八體引手爾葉に冠する桃青と署名あるはしがきに、貫之が「古今集」に俳諧の俳の字を言偏の誹にして以來、これを故實として俳の字に通用してゐるから、蕉門では俳の字を用ひる事にしても、「他門に對して論ずべからず」と云ひ、「爰を以て是を有也無也の關と名付け侍るものか」と云ひ、「能く守り能く用ひば自他をのづから分るべし」とあるやうに、自門他門の間に境界は立てながら、凡て他門に對して積極的に論議しない模糊たる態度を取ると云ふ點から、有也無也の關と名づけたのである事が知られる。勿論語としては、「奥の細道」に、むや〳〵の關（即ちうやむやの關）の出てゐる所からの思ひ付であらう。【刊行】明和元年【諸本】續俳諧論集（俳諧文庫）所收。【内容】卷頭に芭蕉と署名あるはしがきがあつて、本文は桃青と署名あるはしがきを持つ十八體引手爾葉を以て始まつてゐる。これは芭蕉の自語直傳のものである譯である。以下は全部芭蕉の傳授を書き傳へた形のものになつてゐて、發句堅横幷狂句仕立樣の事、姿情の事、虛實正の事、不易流行の事、發句五品の事（及び曲節作）、發句八體の事、奉納傳三品、脇第三、第三振、附合八體の事、附合八體の七名、附合八體の轉句、俳諧五花の口決、俳諧月の傳、七夕傳の事、月次の月の事、月に螢の事、名所前後の事、本式表十句の事の十九箇條が述べられてゐる。尤もこの十九箇條には、傳云とあるものと云ないものとがあり、間接叙法のものと直接叙法のものとが混淆してゐて、或るものは芭蕉の直語の如くにも見えるが、併し兎に角十九箇條のものは芭蕉の傳授を記した意味のものと解せられる。要するに本書は蕉風の元祿の新式たる芭蕉の傳授を誰かが記したといふ形のものである。書末に蔡子と署名ある出版に際しての奥書があるが、思ふところあつての匿名らしい。【考證】著者に就いては、千那とする說と重厚とする說と僞書說とがある。風之の「誹諧耳底記」（別項）に、「家々に翁の教への書として」として、「梧の一葉」その他僞書說のある書などに交へて本書を擧げ、別の所に、「堅田の浦に鴈が音ならで有也無也と鳴くもあり」とあるのが千那を意味すると思はれるから、風之の晩年頃には本書が千那の著と理解されてゐたらしい。事實本書を見ると、「唐崎の松は花より朧にて」（芭蕉）、「山は櫻をしぼる春雨」（千那）の附合や、この「唐崎の松」の句の發句・第三・平句三種の形などが擧げられ、又最末が千那の加はれる去來・許六・芭蕉・曾良との五吟の本式表十句で結ばれてゐるなど、著者を千那のやうに見せかけた形跡がないではないが、併し著者が千那自身でないことは、其角の句（いざ櫻小町が姉の名は知らず）や、萬子の句（煤掃や又此茶屋も不挨拶）を芭蕉の句と誤つたり、芭蕉の



俳諧有也無也關（松字文庫藏）

と考へられる。落柿とあることが判ぜられぬが、芭蕉を幻住庵一世と立て、次を千那、次を自己と立てれば、幻住庵三世とする假設が成立つ譯である。次に「眞享式海印錄」（別項）に、翁の遺訓の書の中に「ウヤムヤノ關（重厚）」として擧げてゐる。これは卷末署名中の落柿三世による見方のものであらうが、固より根據

且五章、虱及び蚤の句、五倫の句などの俳句も早いもので、次いで出た鳴山の「俳諧古選」には目錄があつて、次いで「守武千句」の跋の二三節を蓮谷が接ぎ合はしたものと、貞德の「御傘」の序とを序として掲げてある。各派各時代の句を廣く選拔編纂したものとしては最



俳諧落葉考 はいかいおちばこう

「落葉考」を見よ。

俳諧温故集 はいかいしゅんこしゅう

俳諧集 上下二冊【編者】箕輪蓮谷【名義】編者の後序による。【内容】貞德の「御傘」の序に、「温故集といふ題をもとむるより、乾坤の二巻となれるも、むかしを今になして、いでよ人をなぐさめんとおもへるなるべし」とある。【刊行】延享五年【諸本】元祿名家句集（俳諧文庫）所收。【解說】後序によると、正德二年から句を集めて、十萬句にもなつた中から、秀逸の句を選んだもので、俳句數九百七十餘句ある。上卷の初めに、定家・光廣等の公卿、義家・秀吉等の武家、長明・澤庵等の僧侶・遁世者、數濟・宗祇等の古連歌師、その他利休・道落・常信・春慶等、各種の方面の俳人以外の人々の俳句を集め、次に守武・宗鑑以來、蓮谷當時までの俳人の、俳句の春の部・夏の部があり、下卷には、同樣の俳人の秋の部・冬の部の俳句、次に賴光から尋氏までの事蹟を載せ、次に貞佐の句を諸集句した歌仙、貞佐・遊谷・治洲・超波と附けた四句までの附合、東里・貞佐・遊谷三吟歌仙を收めて終つてゐる。それ以上の中には、貞佐の點二十餘、幾女の點

のないものであらう。次に「芭蕉句選年考」（別項）に、「有耶無耶の關は芭蕉の作と云ふとも、偽書とおもはるゝ也」といふ偽書說がある。併し本書は芭蕉作の體裁ではないから、芭蕉の作としての偽書說は成り立ち難い。故に今著者問題と關する本書の內容を檢すると、芭蕉とあるはしがき、桃青とあるはしがき共に、支考偽作說のある「二十五箇條」などを種としたものと認められ、十八體引手褒菓は、支考の「俳諧古今抄」（別項）に說く所を始とその盡取つて切字十八體を立てたものと見られ、その證句の如きも「古今抄」のものとただ一句自語直傳などでもあらう筈がなく、特に芭蕉はこの種の傳授といふもののない人である。また十九箇條の部でも、附合の七名八體は、「俳諧十論」（別項）以來、說いて「古今抄」に至考がつてゐるもので、それを始とそのまゝ取つて多少の按排を施したものであり、姿情・虛實・曲節などもすべて支考の高唱するもの、「庚崎の松」の句の三體も、「二十五箇條」「古今抄」に擧げてゐるもので、要するに本書は支考の所說を取る所頗る多く、それを根幹として枝葉を加へ茂らせたものである。それになほ千那の作者が鎖國の如くあり得る作詩上から疑義が生ずる。かくて本書は素材調べ及びその年代と內容の杜撰さとからして、千那の著ではあり得ないことになり、支考の文辭がなく、支考の所說と一致しない所もある點から支考の門人の誰かが、千那の傳書の如く感作したものと見らるべきことになるやうである。〔志田〕

俳諧家譜 はいかいかふ

系譜一冊【編者】早川支右【刊行】寶曆元年十一月【諸本】俳諧系譜逸話集（日本俳書大系）所收。【由來】同門秋蛙の序及び自序によると、俳諧の正統を正し、系統を改めて後進を導かんが爲めに、書林の求めるまゝに、古書の記すところ古老の傳へるところを輯錄して、各流派の點者及び點者でなくても、由緒は高名ある者の系圖並に印譜を錄したものである。先づ貞德を於ける俳諧點者及びそれに准ずる者の道統系を作成したのである。【解說】京都その他に

俳諧音調論 はいかいおんちょうろん

一冊【著者】沼波瓊音【刊行】明治三十三年八月、新聲社。【內容】發句の五・七・五字の續きを音調的に解析して研究したもの、例へば「一行を。」「春を。」「近江の人と。」「を。」「一。」「近。」「。」と一句を。」の連鎖ある點がこの句を音調的に名句たらしむる所以なりといふ如き、これを「連鎖調」と著者は名づく。又「羽子板の」（省）に、「けたり」「はるの雪」の如き、各句頭は。音を以て連ねたるを、著者は「重頭」と名づく。而して羽子板はやさしく、春の雪は消え易く、全體の配合すべて輕きものにて、「は。」などいふ輕き音。」の据りあることを指摘してゐる。か。行音・た行音・促音・撥音・延音などに就いてもそれぞれの音調的特質を擧げてゐる。頭韻は、動かし難き音調的の据りあることを用俳字（中略）雖然古今始遺等皆以用誹字尤不審也」とある。誹諧歌は「後拾遺和歌集」卷二十にも誹諧歌として二十一首あり、「千載和歌集」卷十八に誹諧歌三十二首、「續千載和歌集」卷七に二十首、「新千載集和歌集」卷十八に十八首、「新拾遺和歌集」卷二十に十七首、「新續古今和歌集」卷十九に十九首といふやうに、勅撰和歌集の中に見られるのであり、近世の私家集にしても、下河邊長流の自撰「晩花集」に俳諧歌として五首載つて居り、契沖の自撰「漫吟集」に俳諧歌として八首載つて居り、香川景樹の「桂園一枝」に俳諧歌として九十餘首も俳諧歌として五首載つて居り、契沖の自撰の歌がある。勅撰集では誹諧歌とあるが、近世では俳諧歌となつてゐる。かくの如く各時代に於ける俳諧點者及びそれに准ずる者の道統系圖並に印譜を錄したものである。先づ貞德を

俳諧家譜 はいかいかふ

系譜二冊【編者】早川支右【刊行】寶曆元年十一月【諸本】俳諧系譜逸話集（日本俳書大系）所收。【由來】同門秋蛙の序及び自序によると、俳諧の正統を正し、系統を改めて後進を導かんが爲めに、書林の求めるまゝに、古書の記すところ古老の傳へるところを輯錄して、各流派の點者及び點者でなくても、由緒は高名ある者の系圖並に印譜を錄したものである。先づ貞德を於ける俳諧點者及びそれに准ずる者の道統系

きがあるので、この點は古選によつて相補ひ得る關係になる。　〔志田〕

俳諧音調論（はいかいおんてうろん）　俳論　一册　【著者】沼波瓊音　【刊行】明治三十三年八月、新聲社。　【内容】發句の五・七・五字の續きを音調的に解析して研究したるもの、例へば、「行く春を近江の人とをしみける」の「を」「に」。韻の連鎖ある點がこの句を音調的に名句たらしむる所以なりといふ如き、これを「連鎖調」と著者は名づく。又「羽子板のはく（箔）にうけたりはるの雪」の如き、各句頭は音を以て連ねたるを、著者は「重韻」と名づく。而して羽子板はやさしく、春の雪は消え易く、全體の配合すべて輕きものにて、はなどいふ輕き頭韻は、動かし難き音調的の据りあることを指摘してゐる。か行音・た行音・促音・撥音・延音などに就いてもその音調的特質を擧げてゐる。　【價値・批評】古來、發句の音調に就いての言説は、極めて斷片的のものみであつたが、それを科學的に研究したものとしては、第一の論稿として擧げらるべき書である。發句の音調として音韻も大切ではあるが、更に基本的の生命をなす動律（リズム）の事に着眼しなかつたのは、時代として已むを得ないとも云へよう。又一句中の各語の音脚（フート）の事に論及しなかつた點も物足りない。又題して「俳諧音調」といふからは、連句に於ける前句・附句の音調的諧和に就いての研究も、着手されねばならぬものと思ふ。俳諧の音調に關して、この書は僅か一小部分を取扱つただけだが、その取扱つた限界に於ては克明に調べてある。　〔荻原〕

俳諧歌（はいかいか）　和歌　【名義】俳諧的な歌の意味で、滑稽な性質を有する歌。「萬葉集」卷十六にある無心所著歌や、戯歌・戯笑歌などと近い意味の歌で、「古今集」の卷十九に誹諧歌として五十八首あるのが、名稱の起原である。「奥義抄」には誹諧歌は「滑稽也」とし、「可用俳字（中略）雖然古今拾遺等皆以用誹字尤不審也」とある。誹諧歌は「後拾遺和歌集」卷二十にも誹諧歌として二十一首あり、「千載和歌集」卷十八に誹諧歌二十二首、「續千載和歌集」卷七に二十首、「新千載集和歌集」卷十八に十八首、「新拾遺和歌集」卷二十に十七首、「新續古今和歌集」卷十九に十九首といふやうに、勅撰和歌集の中に見られるのであつて、近世の私家集にしても、下河邊長流の自撰「晩花集」にも俳諧歌として五首載つて居り、契沖の自撰「漫吟集」に俳諧歌として八首載つて居り、香川景樹の「桂園一枝」に俳諧歌として九十餘首の歌がある。勅撰集では誹諧歌とあるが、近世では俳諧歌となつてゐる。かくの如く各時代を通じて見られるのであつて、この誹諧、もしくは俳諧が、輕い滑稽的な性質を有するところから滑稽的連歌を俳諧の連歌といひ、單に俳諧（別項）とも稱するに至つたのである。　【性質】「古今集」の誹諧歌を見ると、「梅の花見にこそきつれ鶯のひとく〳〵といとひしもをる」「山吹のはな色衣ぬしやたれとへど答へずくちなしにして」の如く、俗語を用ひたと見るべき歌を多く含み、卑俗な歌といふべきであつて、「萬葉集」の戯歌が滑稽的な素材をうたつた歌が多いのと多少異なつてゐる。この傾向は、「古今集」以後の誹諧歌も大體同樣であるが、「後拾遺」の「武隈の松は二木を三きと云へばよく讀るにはあらぬ成べし」の如きは、卑俗な度がまさつてゐる。近世の契沖の誹諧歌の中には、「つまごひによわりて空に眺むれば歌の力もなきかはづかな」の如きがあつて、むしろ狂歌に近いものがある。誹諧歌は和歌の上では第二義的な意義しかないが、滑稽や洒落や輕みを愛する一面を見るべく、連歌・俳諧・狂歌（各別項）等との源流として注目されるのである。

【參考】勅撰和歌集○私家集○奥義抄　〔久松〕

俳諧家譜（はいかふ）　系譜　二册　【編者】早川丈石　【刊行】寶曆元年十一月　【諸本】俳諧系譜逸話集（日本俳書大系）所收。　【由來】同門秋蛙の序及び自序によると、俳諧の正統を正し、系統を改めて後進を導かんが爲めに、書林の求めるまゝに、古書の記すところ古老の傳へるところを輯錄して、各流派の點者及び點者でなくても、由緒或は高名ある者の系圖を作成したのである。　【解説】京都その他に於ける俳諧點者及びそれに准ずる者の道統系圖並に印譜を錄したものである。先づ貞德を鼻祖としてその直弟を譜載し、その中、立圃・重頼（しげより）・西武（さいむ）・令徳（れいとく）・貞室・季吟・梅盛の貞門七俳仙及びその他の直弟の後系を別に記し、各々その詳傳或は略傳を註記し、外に守武・宗鑑及び江戸に於ける沾德の後系を記し、次いで浪華に於ける貞德・沾德及び祇空の傳系を記し、追加として、大津・南都に於ける芭蕉及び宗因の孫弟譜を掲げ、更に家譜追加として右系譜に載せた俳家の發句を輯錄してある。東都の點者を缺いてゐるのは凡例によると、沾涼（別項）の「綾錦」に審かであるから、特に省いたのであるといふ。本書が貞門の傳系に詳かにして、談林・蕉風（各別項）等に疎なのは、編者が荻野安靜系の貞門の俳士であるためと思はれる。又註記した傳記には、編者の知人以外のものには調査不十分のため粗漏失誤がある。なほ別册として、福田練石以下京都・浪華の點者九十人の印譜を載せ、後編として京都點者門弟發句百餘句を附錄してゐる。印譜は點取者流の對象となつてゐた點式を表にして示したもので、當時の點式の複雜であつた事を窺ひ得る。なほ本書の奥附に「諸國俳諧家譜後篇全二册」の近日出來を豫告してあるが、その上梓の事實を知らない。

【附説】本書梓行後、本書の拾遺として、「誹諧家譜拾遺集」と「誹諧家譜後拾遺」とが梓行された。何れも一册本で、編者は兩書とも靑木十口である。十口は京都の人、貞徳・佐德・意心齋・沛古散人等と號し、中川貞佐に師事、寛政三年七月二十一日歿す。享年六十九歳。「誹諧家譜」の編者が安靜系の貞門であるに對し、十口は貞室系の貞門である。十口が「拾遺集」の編著を思ひ立つたのは、凡例によると、「誹諧家譜」編輯當時在世の人も物故した人があり、同譜後に點列に加はつた人もあるので、更に歿時を記し、遺漏を補ふのであるとあるが、丈石の家譜と同じく點者以外の人も多少加へられてゐる。「誹諧家譜拾遺集」はかくして貞德の傳系の補正、明和七年現存の在京點者の傳系その他を記して明和八年孟春に上木された。「誹諧家譜後拾遺」（寛政九年季夏刊。寛政三年二月成）は「誹諧家譜拾遺集」の缺漏を補ひ又訂正したもので、同集の後を承けて貞門の末葉で京都に在る點者の系譜を記し、物故者の辭世句その他を記したものである。稿成つて編者は「家系よゝの月花」と題したが、上木に至らずして歿したので、男如口と門人五口とが校訂し、標記の如き書名を附して剞劂に附したのである。以上の「拾遺集」及び「後拾遺」共に貞門の傳系を傳へるを主としたものであるから、主義・内容共に、全く「誹諧家譜」の延

長と稱すべきものである。

【著者・小傳】丈石は京都の人、名は知雄、剃髪して宗順と稱し、丈石齋・千載堂と號した。鈴鹿知石門。安永八年七月二十一日寂す。享年八十五。なほ著書に「誹諧名目抄」（別項）等がある。【各務】

俳諧勸進牒（はいかいくわんじんてふ）　俳諧集　二册

【撰者】八十村路通　【名稱】上卷内題には、「俳諧勸進帳」とある。【名義】俳諧を勸進したので、卷頭に「奉加乞食路通敬白」と署する勸進牒が掲げてあり、かくて集名をも「俳諧勸進牒」としたのである。【刊行】元祿四年　【諸本】蕉門俳諧前集（俳書大系）所收　【解説】卷頭の勸進牒によると、元祿三年十一月十七日の夜、觀音の靈夢があり、「普く俳諧の勸進を弘め、風雅を起すべし」と宣うて、「霜の中に根は枯らさじなさしも草」の句を詠んで奉加に附かせ給うたので、勸進の大願を起し、翌十八日を修行始めとして、諸國を廻つて人々の俳諧を集めたのである。勸進に應じた者、風羅坊（本書には、特に芭蕉をかく署してゐる）・露沾子以下、蕉門のみならず蕉門以外の人々があり、守武・貞德・重頼・休甫・玄札等の如き直接勸進に應じた人でない故人の句をも加へてゐる。上卷には、冬（歲旦を附す）・春・夏・秋の發句二百五十七句と、路通の判じた「月山（つきのやま）發句合」（別項）とを收め、下卷には、元祿三年に十四歲の龜翁が、其角の「花摘集」の追加として詠んだ句を勸進に寄せた五十一句（其角の序、沾德の跋がある）と、「俳諧連歌勸進始曲水亭」の路通・曲水・其角・里東・芹花五吟歌仙、「路通餞別」の露沾・路通・沾荷・虛谷四吟歌仙、「乙州が江戸へ赴く時」の風羅坊發句の歌仙（後の折の三句目まで近江を詠み、その後が江戸で詠まれたと思はれるもの）、その他、露沾發句の歌仙、肅山發句の歌仙、居文發句の歌仙、由之發句の歌仙、岩泉發句の五十韻、路通發句の歌仙、都合五十韻一卷、歌仙八卷とを收めてゐる。茶化した書き方をした元祿四年春の狂而堂（其角）の跋がある。本集は、路通の主著として路通の研究には缺くべからざるものである。それと共に、路通は兎角問題の人で、この頃から蕉門の人々にも忌み憎まれ、芭蕉の祕傳なるものを僞作したりして、芭蕉にも不通の狀態となつて行くので、觀音の靈夢及び詠句といふ事から起つた本集の企圖も、問題とすべきものであらう。【志田】

俳諧京羽二重（はいかいきやうはふたへ）　「京羽二重」を見よ

俳諧錦繡緞（はいかいきんしうだん）　俳諧集　上下二册

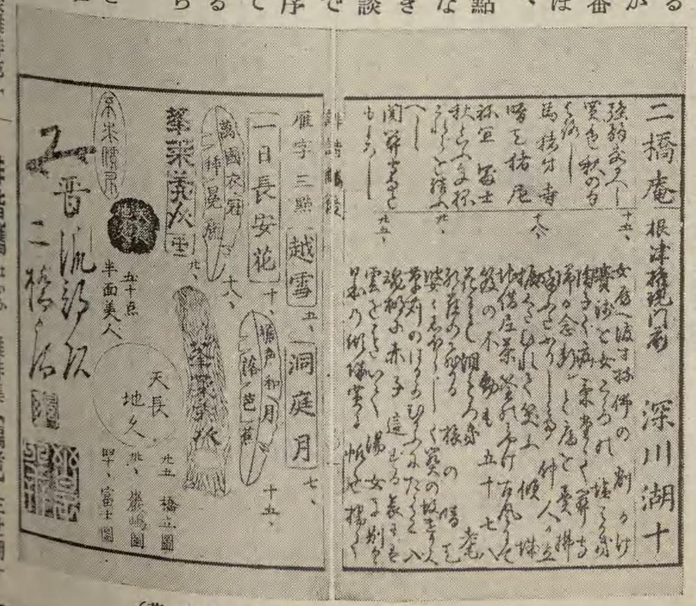
【撰者】寶井其角　【名義】室町時代に建仁寺の天隱が唐・宋・明の詩三百二十餘首を輯めた「錦繡段」（別項）があり、同寺の月舟が同じく三百首の詩を輯めた「續錦繡段」がある。其角がこれに倣つて自己の俳諧集をかく名づけたのであらう。【刊行】元祿十年　【諸本】其角七部集・其角全集（俳諧文庫）・其角全集（勝峰晋風編）に所收。【解説】連句を主とし發句を從とした集で、その連句・發句共に、前々の自集に一度發表したものの中から簡拔したものである。連句二十五篇（表三句三章、附合一章を含めて）のうち、「鴨啼や」の卷、「角なうて」の卷、「下臥に」の卷、「星合の」の卷の四卷と表三句三章、附合一章の四章とは「いつを昔」（別項）から、「月華や」の卷、「薄氷」の卷、「黒塚の」の卷、「生てあふ」の卷、「やぶれても」の卷、「うつぶいて」の卷、「川つらに」の卷、「桐の葉や」の卷の八卷は「雜談集」（別項）から、「一鍬に一の卷、「つくり木の」の卷、「ちんばひく」の卷、「打寄りて」の卷、「雨の脚」の卷、「雫數に」の卷、「ゆふだちや」の卷、「舟人の」の卷、「初鮭は」の卷の九卷は「句兄弟」（別項）から取つたものである。發句はまとまつた形で卷頭と卷尾及び所々に挿んであるが、大部分は「いつを昔」から取つたもので、「いつを昔」からは、元祿元年上洛旅行の嵯峨遊吟や湖上の吟を取つた外、その十題百句や交題百句から多くを取つて居り、「句兄弟」からは、その中の隨緣紀行から其角自身の發句のみを拔いたものを甲戌紀行と題して揭げ、「雜談集」からは、連句に關聯する發句三句と附句一句、句兄弟の三十九番の兄弟の句（其角・芭蕉）を取つてゐるのみである。連句等に關聯する文章をも取つてゐて、「句兄弟」から芭蕉の東順傳、それと三十九番の兄弟句の後記の初め三分の一ほどを取り（これが卷末となつてゐる）、「雜談集」から「句は道具なり。點はあき人なり」の語を含む著名な文を取つてゐる。凡そ以上の如きもので、全部が「いつを昔」「雜談集」「句兄弟」から簡拔したものであるが、江上隱士山松子（素堂）の序に、「此集を賓晋齊の醍醐味ともてはやすも亦むべならずや」とある如く、其角が既成三自集の中から自己會心の作を選拔したもので、そこに其角らしさが感ぜられると共に、既成三集に對して別な存在價値もあると云へる。【志田】

俳諧金砂子（はいかいきんすなご）　雜俳集　上下二册

【諸本】德川文藝類聚雜俳第十一（國書刊行會）所收。【解説】紀逸・存義・圓十等江都に於ける當時の俳宗二十八家の高點句を收錄したもの。慶紀逸の序文にある通り武玉川と同じく板元は松葉軒である。【西原】

俳諧句雙紙（はいかいくざうし）　俳諧句合　半紙本二册

【編者】井上重厚　【刊行】天明六年　【内容】其角の「句兄弟」（別項）に倣ひ、昔今の人の句を左に、重厚自身の句を右に、その句の着想又は用語の近似せるものを番へた句合である。併しその勝負を定むる評言を加へないのと、俳人ならざる各種の人々、即ち千利久・石川丈山・一休和尚・林道春・大雅堂・祇園のかぢ・賣茶翁などの句を取つたのとが、この句合の特異點である。【贊川】



俳諧觿（志田義秀氏藏）

俳諧觿（はいかけい）　雜俳集　【編者】三井鋪十の門人柔蘭山人雙成。三編以下は再版改めて二

代雲成編　【名稱】本書の讀み方を「はいかいつのぎり」とする説があるが、京傳の「傾城觿」は傾城買と訓ませる趣向で、その序文にも「俳諧觿」に擬して「傾城觿」と題すとあるのみか、「俳諧觿」の丁數附にケイ一・ケイ二などの記入のあるに徵して、「はいかいけい」と訓むべきものらしい。【刊行】明和五年初編刊行。天保二年頃まで續刊されて三十編位で廢刊したらしい。六十編或は百編まで刊行したとの説もあるが、根據不明。【内容】六十餘年間に跨り、その時代々々の各派判者の選定した高點句を十餘句づつ半枚に收錄し、他の半枚にはその判者の用ひた各種の點式印を示し、頭註にはこの判者は山川草木の句を好むとか、人情戀愛の句を嗜むなど、專らその選拔の傾向等を示したもので、言はば應吟者の指針盤として必携の書である。「誹風柳多留」（別項）と

の各句集と併せ見らるべきものである。本書の影響として嘉宵宇亭が太祇・蕪村・青羅・曉臺・闌更五子の句を混交類聚して寛政十二年に出版した「俳諧發句新五子稿」がある。【志田】

俳諧古選　句集　小本　一册

【編者】三宅嘯山　【刊行】寶曆十三年正月、京井筒屋庄兵衛等刊。【諸本】本書は初版以後度々開板されたものと見え、附錄の補遺の如き二三本を比較して見ると出入が多い。俳諧珍本集（俳諧叢書）・名家俳句集（俳諧文庫）所收本がある。【解説】嘯山が古俳人の秀吟を選び集めて五卷とし、所々に漢文で短評を加へたもので、その選擇概ね當を得、評語も亦頗る一家の見を持する所がある。又總

俳諧古選

どれだけの命があるかと云ふやうなことは能く知りませぬ。それよりは、寧ろ俳諧と云ふものが德川時代にどれ程の力を持つて居つたか、如何なる新しい修辭を日本の文學界に與へたかと云ふやうな方面から調べる」立場から企圖されたものである。且つ一般的な聽講者に對しての講演であるから、さういふ方面からの參考書となるべきものである。【荻原】

俳諧古今抄（はいかいここんせう）　「葛の松原」を見よ。

俳諧五子稿（はいかいごしかう）　俳句集　一册　【編者】朝陽館主人（石原茂兵衛・五晴）。蔗陰舍大魯閲　【名義】天曆の梨壺の五人になぞらへて俳人五子の句集を集めたからの名である。【刊行】安永四年　【諸本】本集中の「紫藤軒言水句集」「合歡堂沾德句集」「十萬堂來山句集」は元祿名家句集（俳諧文庫）に、「山口素堂句集」は元祿名家句選（俳書大系）に所收。【解説】池

によると、寶曆十二年に編輯され、名古屋の永樂屋東四郎と大阪の河内屋太助との合板で發行され、後、河内屋太助一個の板となつたとあるが、享和本は河内屋太助外二軒の大阪の書肆の合板になつて居り、又享和本凡例によると、初め「節用抄」と名づけたが後故あつて「歲時記」と改めたとあり、柱書が「節用鈔」とあつて、なほ序跋等も書き改められた形跡が

代雪坡編【名稱】本書の訓み方を「はいかいいつのざり」とする説があるが、京傳の「俳城艫」は傾城買と訓ませる趣向で、その序文にも「俳諧艫」に擬して「傾城艫」と題すとあるのみか、「俳諧艫」の丁數附にケイ一・ケイ二などの記入のあるに徴して、「はいかいけい」と訓むべきものらしい。【刊行】明和五年初編刊行。天保二年頃まで續刊されて三十編位で廢刊したらしい。六十編或は百編まで刊行したとの説もあるが、根據不明。【内容】六十餘年間に跨り、その時代々々の各派判者の選定した高點句を十餘句づつ半枚に收錄し、他の半枚にはその判者の用ひた各種の點式印を示し、頭註にはこの判者は山川草木の句を好むとか、人情戀愛の句を嗜むなど、專らその選拔の傾向等を示したもので、言はば應吟者の指針盤として必携の書である。「誹風柳多留」（別項）と類吟の句が極めて多く、「誹諧武玉川」（別項）との類句も亦少くない。又全く同一の句がこの三書のいづれへも收められてゐる。〔西原〕

俳諧講演集（はいかいこうえんしふ）　一册【編者】筑波會【刊行】明治三十八年三月、金港堂。【解説】明治三十七年八月、筑波會員が主となつて、神田區三崎町大成學館に於て夏期講習會を開いた。その講演筆記を輯めたもので、「俳句評釋」（沼波瓊音）、「俳諧より川柳に至る變遷」（吉岡向陽）、「蕪村論」（宮島五丈原）、「江戸座の俳諧」（笹川臨風）、「芭蕉論」（得能秋虎）、「川柳論」（吉丸眞古刀）、「俳文評釋」（長地骨）、「俳諧の修辭」（佐々政一）、「俳句論」（芳賀矢一）、「短詩形」（大町桂月）、「現代の俳諧」（國府犀東）が收められてゐる。代表的の編者たる佐々政一が云つてゐるやうに、「俳諧といふものが、文學上にどれ程の價値があるものであるか、今後どれだけの命があるかと云ふやうなことは能く知りませぬ。それよりは、寧ろ俳諧と云ふものが德川時代にどれ程の力を持つて居つたか、如何なる新しい修辭を日本の文學界に與へたかと云ふやうな方面から調べる」立場から企圖されたものである。且つ一般的な聽講者に對しての講演であるから、さういふ方面からの參考書となるべきものである。〔荻原〕

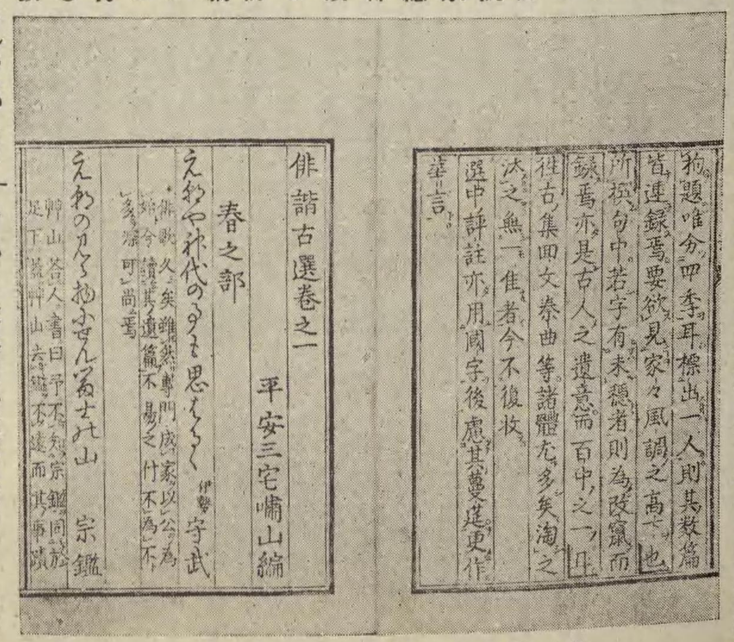
俳諧古今抄（はいかいここんせう）　「葛の松原」を見よ。

俳諧五子稿（はいかいごしかう）　俳句集　一册【編者】朝陽館主人（石原茂兵衛・五晴）。蔗陰舍大魯閲【名義】天曆の梨壺の五人になぞらへて俳人五子の句集を集めたからの名である。【刊行】安永四年【諸本】本集中の「紫藤軒言水句集」「合歡堂沾德句集」「十萬堂來山句集」は元祿名家句集（俳諧文庫）に、「山口素堂句集」は元祿名家句選（俳書大系）に所收。【解説】池西言水・尚井去來・山口素堂・水間沾德・小西來山（各別項）の句集を輯めたものである。貞門系の言水、談林系の來山、談林系で其角の江戸風を繼承した沾德、蕉風の去來、葛飾派の祖素堂の五人を選んだのであるが、これ等の五人は、各派に於てそれ〴〵の意味で注目すべき人であるので、この五人を選擇した事は、大體に於て意義のある事であつたと云へる。然るにこの五人中、沾德以外の四人には、別にそれ〴〵句集があり、言水には早く自選句集の「初心もと柏」（享保二年刊）、去來には蝶夢編の「去來發句集」（安永三年刊）、素堂には門人子光編の稿本「素堂家集」（寛延四年成）及び久堘編の稿本「素堂家集」（文化九年成。以上二集共に俳書集覽中に刊行）、來山には門人古道外二人編の「今宮草」（安永七年刊）及び什山編の「續今宮草」（天明三年刊）がある。されば本集はこれ等の各句集と併せ見るべきものである。本集の影響として嘉智宇孝が太祇・蕪村・青藍・曉臺・關東五子の句を混交類聚して寛政十二年に出版した「俳諧發句新五子稿」がある。〔志田〕

俳諧古選（はいかいこせん）　句集　小本　一册【編者】三宅嘯山【刊行】寶曆十三年正月、京井筒屋庄兵衞等刊。【諸本】本書は初版以後屢々開板されたものと見え、附錄の補遺の如き二三本を比較して見ると出入が多い。俳諧珍本集（俳諧文庫）・名家俳句集（俳諧叢書）所收本がある。【解説】嘯山が古俳人の秀吟を選び集めて五卷とし、所々に漢文で短評を加へたもので、その選擇概ね當を得、評語も亦頗る一家の見を持する所がある。又總論に俳諧の變遷を說き、三都の風調を論じ、或は讀書を以て詩歌・連俳の至極に達する方法とし、舊門の作者を品評するなど、句評と相俟つて編者の學者としての識見を窺ふに足り、世人を啓發する所が多い。隨つて古來汎く世に行はれ、特に「俳家奇人談」（別項）には本書から句と評語とを拔抄して、一層その聲價を高からしめた。なほ卷末に附錄として當時の俳人の句を集め、これにもまゝ短評を加へてゐる。

【參考】評釋俳諧古選　木村架空　〔穎原〕

俳諧歲時記（はいかいさいじき）　俳諧季寄　横本　二卷二册【著者】瀧澤馬琴【刊行】享和三年三月。但し馬琴の「近世物之本江戸作者部類」によると、寫本十二年に編輯され、名古屋の永樂屋東四郎と大阪の河内屋太助との合板で發行され、後、河内屋太助一個の板となつたとあるが、享和本は河内屋太助外二軒の大阪の書肆の合板になつて居り、又享和本凡例によると、初め「節用抄」と名づけたが後故あつて「歲時記」と改めたとあり、柱書が「節用鈔」とあつて、なほ序跋等も書き改められた形跡がある。されば前に一度板に成つたことが知られるが、享和三年本以前の板本の現存を聞かない所から云ふと、實際は發行されずに板の儘で轉々し、書名及び序跋等變改を施されて始めて發行されたものか。これ等の點判明し難い。【由來】風月庵雪碎の序及び自序によると、初め馬琴兄弟の俳友雪碎が一稿を作つて



俳諧古選（松宇文庫藏）

案上の備考としてゐたのを、馬琴の兄東岡舎羅文が增訂を試みつつあつたのが、仕官の暇なき儘に果さずして歿し、馬琴が亡兄の遺志を繼いで完成したものである。【解說】本書の編纂法は、全體を春・夏・秋・冬の四部に分ち、その各々の季の中を月分けにし、各々の月に屬する季題を大體日の順を追うて輯錄し、或る月に限り難いものは、例へば「兼ニ三春一物」の如くにして各季の初めの月の末尾に集めてある。各季題には詳簡適當に解說を施してあるが、人事に關する物には一體に解說が精しく、その他の物には簡であるか或は季題のみを擧げて解說の施してないものもある。これは自然かうなる譯でもあらう。兎に角施してある解說は、該博で俳諧作の經驗も積んだ馬琴であつただけに、該博で而も要を得て居り、從來の歲時記類に比べて群を拔く所がある。この外本書の特色と見られるものは、凡例にも云つてあるやうに、從來の歲時記は、著者が多く京都の人で、京都の事に精しく江戸の事に及ばぬ憾みがあつたのを、新たに江戸の事をも加へた事、又從來俳諧では二十年來を云はなかつたのを、二十年來の物でも用ひるべきものは加へた事などである。これ等の結果、季題の數も二千六百餘あつて從來に見ない多數に上つてゐる。以上の外、卷首に「發端三論」として、俳諧の字義、連哥權輿の論、俗談平話を正すの三論を揭げ、卷末に雜之部を立て、「一卷の式」と標題して卷式に關する諸事を詳說してゐる。卽ち卷式の種類・去嫌・正花・非季の詞・戀の詞・切字・題・附合・點取・書讀等について述べ、この部だけで一卷の式目書をなす如きものになつてゐる。本書は以上の如きもので、從來の類書に優る特色があり、手頃で便宜でもあるので、大に行はれたらしい。

【附說】右の「俳諧歲時記」は、從來のものに對して數歩を進めたものであるが、季題を月分けにした爲めに、知らうとする物が、どの月に屬するかを知らなければ繰出し得ない不便があり、又解說が省略され過ぎた憾みがないではない。かくて藍亭青藍が增訂改纂を思ひ立ち、各季をいろは別に改纂し、解說のなかつたものにも解說を加へ、且つ季題を取捨しつつ增補して三千四百二十餘たらしめ、卷首の論、雜之部にも取捨改訂を施し、「增補改正俳諧歲時記栞草」（橫本五册）と題して、嘉永四年十一月出板した。この書は、馬琴のものに比して遙かに便利であるため、この書が出て以來、馬琴のものに代つて大に行はれるやうになり、數度の覆刻が重ねられてゐる。

【參考】馬琴の俳諧歲時記の企圖者　志田義秀（俳文學の考察）○歲時記解說　宇田久（俳句講座俳書解說篇）【志田】

誹諧作者名寄　俳諧系譜一册【編者】朝江種寬。種寬は京都の人、名は忠榮、通稱小左衞門。野々口立圃門。一風子又梅遊軒と號した。【刊行】寬文年中【諸本】俳諧系譜逸話集（俳書大系）所收。【由來】自序に、俳諧作者の名を後世に遺さんがために著はしたとある。【解說】貞德系の寬文頃の俳諧師の門人を系圖書きにした名寄並に諸國の俳諧師の名寄に、俳書の名寄を附したものである。卽ち先づ貞德直系の三十二名家を一般の系圖書きの如く罫線を以て一列に並べ、その中から重頼・令徳・西武・貞室・季吟・梅盛・立圃のいはゆる貞門七俳仙を初め、その他門人を擁する人々を摘出して、それ等の門人をそれ〴〵罫線を用ひて各別に記してある。但し編者は立圃門の人であるため、貞德直門の人では、特に立圃に重きを置き、立圃の門人を擧げること五十六家に及び、のみならず、その中から江崎幸和・服部定清・隼士常辰等の門人を有する者を更に摘出して、それ等の門人をもそれ〴〵記してゐる。次に五畿內を初め、東海・東山・北陸・山陰・山陽・西海の各道に於ける國々の作者名を集めてある。これ等地方の作者に就いては、自序に田舍の作者はその門弟を知らざる故、聞き及んだ作者ばかりを記すと云つてゐるやうな事情で、門人を記さなかつたのである。次に「俳諧書物の名寄」として、「守武千句」「犬筑波」以下當時までに板行された俳書約百部を集めてある。以上頗る簡略な名寄ではあるが、作者中の或る人々には、その撰著にかゝる俳書を示したり、住地・別號・血族關係等を註したものもある。兎に角本書は、名寄であると共に系譜的にもなつてゐるので、後の俳諧系譜の根元をなすものと云ひ得るものである。【各務】

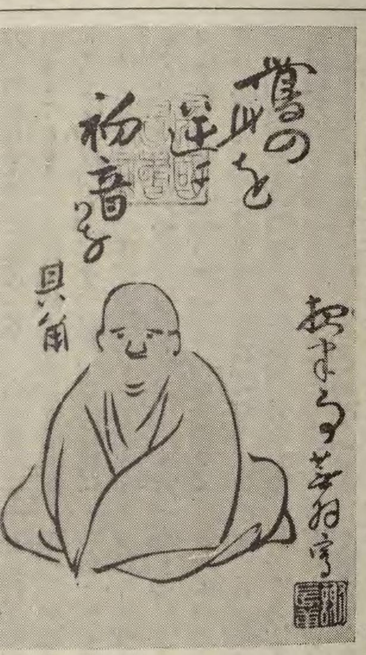
俳諧雜誌　俳誌【刊行】大正六年一月一日創刊、籾山梓月主宰、同十二年六月號にて廢刊。大正十五年四月一日再興。上川井梨葉主宰、昭和五年二月號にて再び廢刊。共に俳書堂出版。【解說】流派を超越して諸派に亙つた俳誌で、關係者の主なるものは、久保田傘雨・井上啞々・鈴木燕郎・長谷川春草・大場白水郎・小泉迂外・岩本梓石等であつた。【水原】

俳諧寂栞　俳論　三册【著者】加舍白雄（拙堂增補）【名義】著者が蕉風俳諧の神髓に觸れた所論であるとの謂ひで名付けたもので、本文が、所謂寂・栞の論を取扱つてゐるものではない。【刊行】文化九年【諸本】俳諧叢書・俳論作法集（俳諧叢書）に收め、中興俳話文集（俳書大系）には別本が收めてある。【由來】凡例に依ると、本篇はもと著者が門弟子のために書いて與へ、他見を憚つたもので、從來寫本として傳はつたものであるが、拙堂がこれを俳友のために公にする事とし、寬政年間の奥書ある寫本、いはゆる寬政選本を本とし、これに安永選本を參考して增補を施した上梓行したものである。梓行に際し、文化九年七月の如泥齋主人（富小路從二位刑部卿貞直）の序、同年秋の俳仙堂定雅の序及び詩人大窪詩佛の漢文序を附した。【解說】平明暢達な文を以て、發句・附句及び句作の技巧、また手爾波を論じて、俳諧の要旨を演述したものである。全篇三册のうち、上卷には發句の論を收めて、蕉風の大意、風姿風情の論をなし、中卷には附句に就いての所論を收めて、連句の脇・第三・月花の句・戀の句等の附方を說き、下卷には俳諧の句一般に關する技巧修辭の論を揭げ、員外として、哉・やを解說し、また係結を說くなど、いはゆる手爾波の論を附錄してある。拙堂の增補した部分は、【補】の印を附してあるが、その增補は、安永選本に依つて、一二句或は數行の文或は一章等、長短を論ぜず行はれてゐるが、中には安永選本にはなく、拙堂自身の一個の見によつて適宜增補したものもある。例へば著者が引用した證句は、殆ど芭蕉及びその門弟詞友の句で、ただこれに著者の師祖白井鳥酔の發句を二三加へたのであつたが、拙堂增補の本書には、更に著者白雄及びその門弟俳友の發句を加へた如きはそれである。のみならず、著者の稿にあつたもので、拙堂が都合で刪除した部分をある。かくの如く本書は著者

以外の人の手によつて按配せられたものである。なほ拙堂の增補を經ない稿本には、拙堂が凡例に言つてゐる如く、門弟子に書き與へた時の後記があつて、それは芭蕉の遺語を本とし、去來の遺著を涉獵し、鳥酔の夜話を擧げて三卷としたが、他見を憚るといふ旨を記したものであるが、增補本にはそれを凡例中に記してある。【各務】

俳諧三尺のむち　雜俳集一册【刊行】寬延三年、大坂順慶町一丁目筋、田原屋平兵衞【諸本】德川文藝類聚雜俳第十一（國書刊行會）所收。【內容】冠附の高點句を集めたものである。【西原】

俳諧三十六歌仙　俳畫句集　大本一册【編者】與謝蕪村【刊行】寬政十一年、大坂鹽屋忠兵衞等刊。【解說】蕪村が蝶夢の選んだ「非諧三十六歌仙」（芭蕉堂歌仙作なり　同上（同人昭和四ノ七、三枚同四ノ九）



寬政板俳諧三

又摸刻の技の拙劣なために、甚しく筆致を損じてゐるものもある。されば近時河東碧梧桐は、これ等數種の摸刻類を凡て僞作だと論定してゐる位である。それは今遽かに決し難いが、とにかく蕪村が「三十六俳仙圖」といふ如きものを屢々描いたことは、弱冠にして既に「俳仙群會圖」を作つたといふことに徵しても

俳諧三部抄　俳書　四册【著者】岡西惟中【名義】貞德の三部書などの例に做つて俳諧學習に肝要な三部を揭出したので、かく名づけたのである。【刊行】延寶五年霜月【解說】一之卷は最初に俳諧大概と題して、作意・寓言・風體等に就いて簡單に論じ、次に俳諧發句之體大略と題して、守武・梅翁・貞德・任口・季吟・維舟その他の發句春三百四十四、夏二百二十五を擧げ、二之卷は寓言體見習記と題し、後、俳諧不得道下手皮顚厚撰と道化て、家隆・爲家・爲氏を初めとして貞德・宗鑑・梅翁・守武以下の附句四百九十八を

俳諧寂栞（俳諧叢書）・俳論作法集（俳諧叢書）

俳諧師　【解說】林鴻はその「京羽二重」（別項）に、俳諧點者と俳諧師とを區別して擧げ、俳諧師の部には俳諧師並作者として擧げてゐる。點者は師匠から點業を許されて點料を取つて衣食する者をいふので、點者になれば宗匠といふのである。宗匠は元來、花の本（別項）を云つた。林鴻が俳諧師と云つてゐる者は、まだ點業を許されない者と衣食の道は他にあつてただ俳諧に遊ぶ者との二種を合せて云つてゐるやうで、それ故作者をもこれに附隨せしめ、芭蕉・去來・凡兆の如きをもこの中に含めてゐる。併しこれは林鴻の便宜による區別で、一般には點者と俳諧專門でまだ點者とならぬ者とを總括して俳諧師と云ふのが普通である。これを後には業俳と云ひ、衣食の道は他にあつて俳諧に遊ぶ者を遊俳とい

以外の人の手によつて按配せられたものである。なほ猶堂の增補を經ない稿本には、猶堂が凡例に言つてゐる如く、門弟子に書き與へた時の後記があつて、それは芭蕉の遺語を本とし、去來の遺著を涉獵し、鳥酔の夜話を擧げて三卷としたが、他見を憚るといふ旨を記したものであるが、增補本にはそれを凡例中に記してある。【各務】

俳諧三尺のむち（はいかいさんしやくのむち） 雜俳集 一册【刊行】寛延三年、大坂順慶町一丁目筋、田原屋平兵衞【諸本】德川文藝類聚雜俳第十一（國書刊行會）所收。【内容】冠附の高點句を集めたものである。【西原】

俳諧三十六歌仙（はいかいさんじふろくかせん） 俳畫句集 大本一册【編者】與謝蕪村【刊行】寛政十一年、大坂鹽屋忠兵衞等刊。【解說】蕪村が蝶夢の選んだ「俳諧三十六歌仙」（芭蕉堂歌仙圖參照）の人物を俳畫風に描き、これにその人々の代表句を讃したものである。二柳の序によれば、書肆獻可堂（鹽屋忠兵衞）は豫て蕪村の書畫を愛してゐたので、この眞蹟を汎く同好の士の風鑑に供へようと思つて、摸刻出版したのであるといふ。由來蕪村がこの種の人物略畫に、能くその風神を寫して妙を得てゐたことは、「山中人饒舌」等にも記されてゐる所で、特にこの「三十六歌仙圖」はその代表的なものとされてゐる。隨つてこの寛政版の外「蕪村三十六歌仙」と題して文政十一年に出版されたもの、明治の再刻本、板表裝で「俳仙帖」と題したもの、その他「俳仙圖」「夜半亭六六句選」「摹刻夜半帖」等と題した折本・大本・半紙本數種の異本が坊間に行はれて居り、又肉筆の歌仙圖も所々に藏されてゐる。併しそれ等の中には明かに僞筆と認むべきものも多く、

寛政板俳諧三十六歌仙（帝國圖書館藏）

これを知り得る。寛政版の如きは、よし眞蹟でないにしても、最も彼の筆致に近いものであらう。日本俳書大系（蕪村一代集）の中に收められてゐる。【西原】

【參考】蕪村三十六歌仙に就いて 河東碧梧桐（鹿火屋大正二二ノ一〇）蕪村俳諧三十六歌仙は僞作なり 同上（同人昭和四ノ七、三枚同四ノ九）

俳諧三部抄（はいかいさんぶせう） 俳書 四册【著者】岡西惟中【名義】貞德の三部書などの例に做つて俳諧學習に肝要な三部を揭出したので、かく名づけたのである。【刊行】延寶五年霜月【解說】一之卷は最初に俳諧大概と題して、作意・寓言・風體等に就いて簡單に論じ、次に俳諧發句之體大略と題して、守武・梅翁・貞德・任口・季吟・維舟その他の發句春三百四十四、夏二百二十五を擧げ、二之卷は寓言體見習記と題し、後、俳諧不得道下手皮顏厚撰と道化て、家隆・爲家・爲氏を初めとして貞德・宗鑑・梅翁・守武以下の附句四百九十八を示し、三之卷は、一之卷の續きとして秋の發句百八十七、冬の發句百五十九を擧げ、四之卷は岳山鬢鬢四季俳諧發句一人百句と題して、惟中自身の發句百句並に惟中吟として附句各百句を選び、なほ卷末に文章六篇を添へてゐる。惟中の俳論・俳風を窺ひ得る纏まつたものとして價値がある。

彼は專ら寓言といふことを尊んでゐる。例へば「俳諧大概」に、「以レ海詠二鹽物濃一、以レ山詠二疱瘡山一、以レ鐘詠二巾着銀一、以レ衣詠二丸藥衣一。如レ此之時無レ取二古句一之難一」とか、或は「俳諧無二師匠一、唯以二寓言句一爲レ師」などとあつて、彼の作風の比喩見立に存する點が能くわ

又摸刻の技の拙劣なために、甚しく筆致を損じてゐるものもある。されば近時河東碧梧桐は、これ等數種の摸刻類を凡て僞作だと論定してゐる位である。それは今遽かに決し難いが、とにかく蕪村が「三十六俳仙圖」といふ如きものを屢々描いたことは、弱冠にして既に「俳仙群會圖」を作つたといふことに徵しても

かる。

俳諧師（はいかいし）【解說】林鴻はその「京羽二重」（別項）に、俳諧點者と俳諧師とを區別して擧げ、俳諧師の部には俳諧師並作者として擧げてゐる。點者は師匠から點業を許されて點料を取つて衣食する者をいふので、點者になれば宗匠といふのである。宗匠は元來、花の本（別項）を云つた。林鴻が俳諧師と云つてゐる者は、まだ點業を許されない者と衣食の道は他にあつてただ俳諧に遊ぶ者との二種を合せて云つてゐるやうで、それ故作者をもこれに附隨せしめ、芭蕉・去來・凡兆の如きをもこの中に含めてゐる。併しこれは林鴻の便宜による區別で、一般には點者と俳諧專門でまだ點者とならぬ者とを總括して俳諧師と云ふのが普通である。これを後には業俳と云ひ、衣食の道は他にあつて俳諧に遊ぶ者を遊俳といふ。芭蕉は點者宗匠とはならぬ主義の人であつたので、從つて芭蕉一門は點業を許すといふことがなく、嚴格に云へば宗匠とも俳諧師とも云ひ難く、この點に於ても革新的な特殊な地位を取るのであるが、俳諧師といふ語を芭蕉一門の如き人をも含めて使ふとすれば、俳諧師と云つてよく、又かゝる使ひ方をもするのである。併し蕉門も芭蕉歿後には數派に分裂して頽廢的傾向を取り、遂に點者宗匠となるにも至つたのである。特に後世俳壇が一般に墮落して、俳諧師と云ひながら碌に風雅の道も心得ず、專ら對間的渡世をする者も生じたので、對間的渡世をする遊人を俳諧師といふ事も生じてゐる。俳諧師を卑しんで座敷乞食といふ事もあつたが、これも同樣の所に起因してゐる。これに就いては、連歌師の方で、稱名院公條（きんえだ）が紹巴を「乞食の客」と云つた

事から連歌師を座敷乞食といふやうになり、それから移つたのであるとも云はれてゐる。なほ林鴻の擧げてゐる元祿四年に於ける京都の點者は六十六人あつて、そのうち談林の人は極めて僅かで、大部分は貞門の人であるが、これに江戸・大阪に於ける點者を加へたら、餘程の數に上つたのであらう。小野顯道の「塵塚談」には、俳諧師宗匠といふ者が、元文年間には三十六人あり、安永頃にはその百倍の數となつたとあるが、この數字は當てにならぬけれども、後になるほど增したことは事實である。俳人といふ語は、既に三千風の「日本行脚文集」（別項）に見え、乙州の「それ〳〵草」や支考の「和漢文操」（別項）などにも見え、特に「行脚怪談袋」は專ら俳人といふ語を使ひ、その後も引續き彼此のものに見えるが、一般的用法の語とはならなかつた。明治に至つて子規の新派が起つて專ら俳人といふ語を使つてから、俳諧師といふ語が廢れて俳人といふ語が一般的用語となつたのである。

【參考】江戸惣鹿子藤田某 ○京羽二重大全博昌堂序 ○京羽津根 換書堂主人 〔志田・萩原〕

俳諧師 はいかいし

小說 【著者】高濱虛子 【發表】明治四十一年二月、國民新聞。【刊行】同四十二年一月、民友社。代表的名作選集（新潮社・明治大正文學全集等所收。但し明治大正文學全集所收本は、後に作者が改訂したものである。

【梗概】塀和三藏は、中學卒業間際になつて勉强をつまらぬと思ひだし、文學書を耽讀し始めた。京都の高等學校に入つてもこの考は變らなかつた。夏期休暇に先輩增田の友人で、吉原の遊女あがりの妻君を連れた五十嵐十風が來た。三藏は十風から俳句を學び、山柿と號を貰つた。十風が東京へ歸つてから、同鄉の先輩越智李堂を紹介して呉れたので、三藏はその後は專ら李堂に就いて學んだ。又李堂の紹介で京都へ遊びに來た篠田水月と知つた。水月は塀和が獨逸語を習ひに行つてゐた渥美の親戚だつた。塀和はその哲人風な性格を尊敬してゐた。翌年の冬、學問に全く興味を失つた三藏は退學届を出し、上京して十風をたづね、非常に窮迫してゐるうちに、酒を飲むことや、吉原へ行くことを覺えた。しかし俳句の方は李堂や北湖先生に上達を認められた。十風夫婦は僅かの昇給をあてに北海道へ轉勤することになつたので、三藏はひとり本鄉の下宿に移る。その頃から竹本小光の淨瑠璃に興味を感じ始め、小光のかゝる席へは每夜通ふばかりか、遂には小光を料亭に呼んだり、小光の家へ出かけるまでに進展したが、小光の心はいつまでも冷やかである。十風夫婦は北海道から京都へ歸つたが、その中に十風は病氣になつて自棄になり、再び茶屋入りをするやうになつた。新聞社の通信員として京都に來た三藏は、十風を見舞つたが、十風は衰へ果てて遂に死んだ。その年の秋、東京へ歸つて來た塀和は、三四年間殆ど俳交を絕つてゐた水月に逢つた。すつかり平凡な人になつてしまつて、その句さへも月並になつてゐた。その折、自殺するつもりだといつてゐたが、二三日してから本當にピストル自殺を遂げた。

【批評】この一篇は、ホトトギス派の寫生文の手法を、初めて長篇小說に應用したもので、それだけ、後年の著者の作物のやうな、ふつくりした落着きと陰影がない代り、全部が描寫であつて、描寫が驚くべきほど細かい。語尾のテンスを現在詞で止めてゐるのがひどく目に付く。多少の煩しさと視點の散漫な點があるが、部分的には傑れた閃きが見え、後年の完成が豫約されてゐるかに見える。この作風は、文壇に大なる影響を與へ、夏目漱石は二葉亭四迷の「平凡」（別項）以上と激賞した。同じ作者の「續俳諧師」（明治四十二月國民新聞、同年九月民友社刊）は、「續」と題してはあるが、內容的には關係はない。 〔水原〕

俳諧寺一茶 はいかいじいっさ

俳人傳 一册 【著者】東松露香 【刊行】明治四十三年 【內容】一茶自畫像・俳諧寺十哲圖・一茶眞蹟の寫眞網版、年譜・家系・宗門人別帳・俳系等を卷首に載せ、本文は一茶の傳記を搖籃地より終焉までの二十八項に分つて記述し、終りに諸家の一茶研究十四篇を附したもので、一茶同好會の事業として發行したものである。【價値】一茶の多くの句日記その他、一茶に關する各種の資料の發見された今日から見れば、多少改訂を要する部分がないではないが、明治四十三年當時に於て、これだけ纏まつた編著を爲し得たことは、非常な努力の結果といはねばならぬ。柏原驛本陣中村氏の資料、特に遺產分配に關する書類の如き、得難き資料等に據つてあつて、一茶の傳記の正確を期した最初のものと云へる。 〔賀川〕

俳諧寺十哲 はいかいじじってつ 「一茶」を見よ。

俳諧七部集 はいかいしちぶしふ

半紙本 十二册 【編者】佐久間柳居 【刊行】未詳。曲齋は享保・元文の間であらうといふが、研究の餘地があらう。【名義・內容】芭蕉一代に於ける俳諧の代表的な集七部を選んで名づけたもので、即ち貞享・元年刊の「冬の日」（一册）から、「春の日」（一册）、「曠野」（三册）、「ひさご」（一册）、「猿蓑」（二册）、「炭俵」（二册及び元祿十一年刊の「續猿蓑」（二册）（各別項）までの七部十二册をいふのである。【諸本】俳諧七部集（子周編。小本二册、安永三年刊。但しこれには再刻や幾種かの僞版がある）・俳諧七部集（半紙本七册、寬政七年覆刻。これにも再刻があり、覆刻薄樣摺本もある）・俳諧七部集（精窩道人校。豆本二册、天保七年版。但し天保十一年增刻本もある）・校正七部集（蘿齋校。三ツ切本一册、弘化二年版）・校正七部集（龍守・仙鳥校。橫本二册、嘉永四年版）・正改新刻七部集（五律編。三ツ切本一册、文久三年版）・俳諧繪入七部集（貞房畫草双紙。十册、出版年月未詳）。明治以後に於ては、俳諧七部集（沼波瓊音校。銀杏本と云はれた）・類題芭蕉七部集（伊藤松宇編、連句・文章を省く）・芭蕉七部集定本（勝峰晋風編）・芭蕉七部集（藤井乙男編）・芭蕉七部集（伊藤松宇校、岩波文庫）・俳諧七部集（萩原蘿月校、改造文庫）・七部集總覽篇（俳文學大系）等がある。【異說】七部集に對して異說を唱へる者もあつた。「續猿蓑」が各務支考の僞撰であるといふ說のあるのと、「春の日」が芭蕉の連句の見えない所から、一部に疑はれてゐるとのため、この二集の代りに「深川集」「盧栗」「初懷紙」「卯辰集」「雪丸げ」（各別項）等を以て抜き差しする者があるのである。併し「盧栗」を加へれば、「次韻」（別項）も加へねばならぬ理窟にならうし、「冬の日」が入つてゐれば「初懷紙」を加へる必要はあるまいし、「深川集」は價値のある集ではあるが、殊更にこれを以て代へねばならぬかは問題であらうし、「卯辰集」「雪丸げ」は蕉風變風の代表とするには適當ではあるまいと思はれるので、結局七部集の內容は從來通りで差支あるまいと思はれるのである。【史的地位】芭蕉の俳諧は、古風・談林・蕉風と推移したものであるが、

蕉風が確立したと見られるのは「冬の日」の頃とするのが妥當であらう。されば七部集の編者が「冬の日」を初めに置いて七部を選擇したことは、蕉風の推移を知らしめるに適當な方法であつたと云はねばならぬ。蕉風俳諧の代表的撰集に就いては、許六・去來・風國・支考等の間に種々の見解もあつたが、支考は蕉風の變化を論ずるに「冬の日」以後の六部を選び、而もそれは「ひさご」さへ加へれば丁度七部集になる如きものになつてゐるのである。支考が後人から七部集の編者たる疑を懸けられてゐるのもこれに因るのであるが、同時に又七部集編成の暗示もこの邊にあるのであらうと考へられる。かくて七部集編成以來、七部集の尊崇は依然として變らず、吏登・麥太・麥水・園更・白雄・曉臺・積翠・五明等の七部學者も輩出し、その中、上述の如き七部集の異議流行するに至つた。七部集に漏れた集を集めて七部としたものでは、「誹諧哥仙七部拾遺」（天明七年刊。但しこれは、芭蕉の歌仙七卷を集めたものである）「蕉門十書」（享和元年）「俳諧七部拾遺」（同二年刊）「俳諧續七部集」（同三年刊）「芭蕉翁七書」（文化十二年刊）「俳諧新七部集」（俳諧七部餘錄。文政十一年刊）「新撰俳諧七部集」等がある。類書の七部集には、「其角七部集」（天明七年刊）「椋良七部集」（寬政五年刊）「士朗七部集」（文化二年刊）「西國七部集」（同六年刊）「蕪村七部集」（同年刊）「流行七部集」（文政三年刊）「士朗續七部集」（同七年刊）「月居七部集」（同十一年刊）「枯魚七部集」（同年刊）「曉臺七部集」（同十二年刊）「道彥七部集」（同十三年刊）「乙二七部集」（天保六年刊）「更科七部集」（同七年刊）「俳諧今七部集」（同八年刊）「禾葉七部集」（同九年刊）、その他出版年時不詳のものに「雪門七部集」「同拾遺」

部集は蕉門の最も特殊なる事を論じてゐる。凡例に本書は先に撰した「七部集詳解」の拔書である事、發句・附句の解し難いものを記いて他は略した事、素堂・馬光以來の口授を元とした事（これを師說と呼んでゐる）、舊解・舊說を取つた事、升六の「冬の日註解」、何丸の「七部集大鏡」「七部集解」（杉家の祕書）、「七部解」（振々亭三鯨）等からも取つた事、古書を引き古事を示してゐるも深く調べた事でないから、誤もあらうといふ事などを述べてゐる。一之卷に「冬の日」、二之卷に「春の日」、三・四・五之卷に「曠野」、六之卷に「同員外」、七之卷に「瓢」、八・九・十之卷に「猿蓑」、十一・十二之卷に「炭俵」、十三・十四之卷に「續猿蓑」を解き、各集の前に解題がある。但し「續猿蓑」は、嘉永四年火事に逢つて草稿が燒失して了つたので、同五年春僅かに殘つてゐる稿と記憶を辿つて

蕉風が眞に確立したと見られるのは「冬の日」の頃とするのが妥當であらう。されば七部集の編者が「冬の日」を初めに置いて七部を選擇したことは、蕉風の推移を知らしめるに適當な方法であつたと云はねばならぬ。蕉風俳諧の代表的撰集に就いては、許六・去來・風國・支考等の間に種々の見解もあつたが、支考は蕉風の變化を論ずるに「冬の日」以後の六部を選び、而もそれは「ひさご」さへ加へれば丁度七部集になる如きものになつてゐるのである。支考が後人から七部集の編者たる疑を懸けられてゐるのもこれに因るのであるが、同時に又七部集編成の暗示もこの邊にあるのであらうと考へられる。かくて七部集編成以來、七部集の尊崇は依然として變らず、吏登・麥太・麥水・園更・白雄・曉臺・積翠・五明等の七部學者も輩出し、その中、上述の如き七部集の異議も出たのではあつたが、而もその異議者の一人關更さへ「正風に志すともがら凡上に載せずといふ事なし」と云つてゐる程で、蕉風俳諧を學ぶの徒はこれを準的としない者はなく、かくて異議の聲も漸く絶え、益々流行と尊崇を高めたのである。俳諧低化の天保以降は七部集の尊崇も愈々強く、殆ど聖典視されるやうになり、貞門系の天來が梅室を「七部先生」「七部の井蛙」など罵つた返答に、「七部をさへ讀まざる人の相手には大人氣なし」と報いた事實さへあつた。この時代の七部學者には、何丸・錦江・曲齋・樫柯・西馬・青藍等があつて、流布の印本を正し、進んで定本を作らうとするに至つた。かくして七部集熱は明治の中頃までも及んだのである。【影響】七部集の流行に連れて、天明以後七部集に漏れた集を集めて七部とする事や類書の七部集を出す事が流行するに至つた。七部集に漏れた集を集めて七部としたものでは、「誹諧哥仙七部拾遺」（天明七年刊。但しこれは、芭蕉の歌仙七巻を集めたものである）「蕉門七書」（享和元年）「俳諧七部拾遺」（同二年刊）「俳諧續七部集」（同三年刊）「芭蕉翁七書」（文化十二年刊）「俳諧新七部集」（俳諧七部餘錄。文政十一年刊）「新撰俳諧七部集」等がある。類書の七部集には、「其角七部集」（天明七年刊）「樗良七部集」（寛政五年刊）「士朗七部集」（文化二年刊）「西國七部集」（同六年刊）「蕪村七部集」（同年刊）「流行七部集」（文政三年刊）「士朗續七部集」（同年刊）「月居七部集」（同十一年刊）「枯魚七部集」（同年刊）「曉臺七部集」（同十二年刊）「道彦七部集」（同十三年刊）「乙二七部集」（天保六年刊）「更科七部集」（同七年刊）「俳諧今七部集」（同八年刊）「禾葉七部集」（同九年刊）、その他出版年時不詳のものに「雪門七部集」「同拾遺」「護物七部集」等がある。以上のものどもは、代表集を考へる標準としてよき參考となるのであるが、校合の宜しきを得てゐないものが多いので、この點に留意を要する。

【參考】高鮮佐久間柳居〇同光忌同上〇俳諧本來道加興〇俳諧四季供養杉坂百明〇蕉門一夜口授高桑闌更〇俳諧或問石河積翠〇誹諧七草牧岡天來〇七部集連句早見河田寄三〇七部集概論伊藤松宇（類題芭蕉七部集）〇俳諧七部集論萩原蘿月（詩人芭蕉）〇七部集解說志田義秀（改造社版俳句講座）〇七部集の書目類原退藏（俳諧史の研究）

【志田・萩原】

俳諧七部通旨（はいかいしちぶつうし）

【編者】佐久間柳居【刊行】未詳。曲齋は享保・元文の間であらうといふが、研究の餘地があらう。【名義・內容】芭蕉一代に於ける俳諧の代表的な集七部を選んで名づけたもので、卽ち貞享元年刊の「冬の日」に一番から、「春の日」に一番、「曠野」に三番、「ひさご」に一番、「猿蓑」に十番、「炭俵」に十三番、「續猿蓑」に十番、「深川集」は價値のある集ではあるが、殊更にこれを以て代へねばならぬかは問題であらうし、「卯辰集」「雪丸げ」は蕉風變風の代表とするには適當ではあるまいと思はれるので、結局七部集の內容は從來通りで差支あるまいと思はれるのである。【史的地位】芭蕉の俳諧は、古風・談林・蕉風と推移したものであるが、

【半紙本　十二冊】

【著者】馬場錦江【成立】嘉永二年稿、同四年再校。【傳本】帝國圖書館に稿本がある。【解說】錦江の漢文の序、假名序があつて「冬の日」以來の蕉風の變化を說き、七部集は蕉門の集の精撰なる事を論じてゐる。凡例に本書は先に撰した「七部集詳解」の抜書である事、發句・附句の解し難いものを說いて他は略した事、素堂・馬光以來の口授を元とした事（これを師說と呼んでゐる）、舊解・舊說を取つた事、升六の「冬の日註解」、何丸の「七部集大鏡」「七部集解」（杉家の祕書）、「七部解」（振々亭三餘）等からも取つた事、古書を引き古事を示してゐるも深く調べた事でないから、誤もあらうといふ事などを述べてゐる。一之卷に「冬の日」、二之卷に「春の日」、三・四・五之卷に「曠野」、六之卷に「同員外」、七之卷に「瓢」、八・九・十之卷に「猿蓑」、十一・十二之卷に「炭俵」、十三・十四之卷に「續猿蓑」を解き、各集の前に解題がある。但し「續猿蓑」は、嘉永四年火事に逢つて草稿が燒失して了つたので、同五年春僅かに殘つてゐる稿と記憶を辿つて書いたと云つてゐる。七部集の變化を論じ、附意・附方に亙つて註し、懇切に出來てゐて、著者の稿本の多い中でも、最も力を注いだものの一と思はれる。葛飾派の說を代表すべき唯一の七部集の註釋書であり、大部で周密な註解でもあるので、稿本ではあるが特に注目すべきものである。

【萩原】

誹諧耳底記（はいかいじていき）

【著者】額田風之【本名】梅の鎖聞書誹諧耳底記【名義】烏丸光廣の歌學に關する雜記「耳底記」（別項）の名を襲つたものである。【成立】風之の晩年の著作であらう。【刊行】年時不明【諸本】俳諧論集（俳諧文庫）所收。【由來】遺子文下の序によると、風之が洒堂に、洒堂が芭蕉から傳授してゐたといふ蕉門の未來記たる祕書「梅の鎖」の傳授を乞うて許されず、僅かに「梅の鎖」の心を以て、年頃語り聞かされた洒堂の風說を、あり〳〵に筆錄して「耳底記」と題したが、刊行に至らずして死んだ。それを文下が、父の手澤の空しくなるのを本意なく思つて梓に上せ、同門の人々に贈る事にしたのであるといふ。併し洒堂の風談云々の件は、本文の趣とやゝ異なる所があり、「梅の鎖」といふものも疑ふべきものらしい。

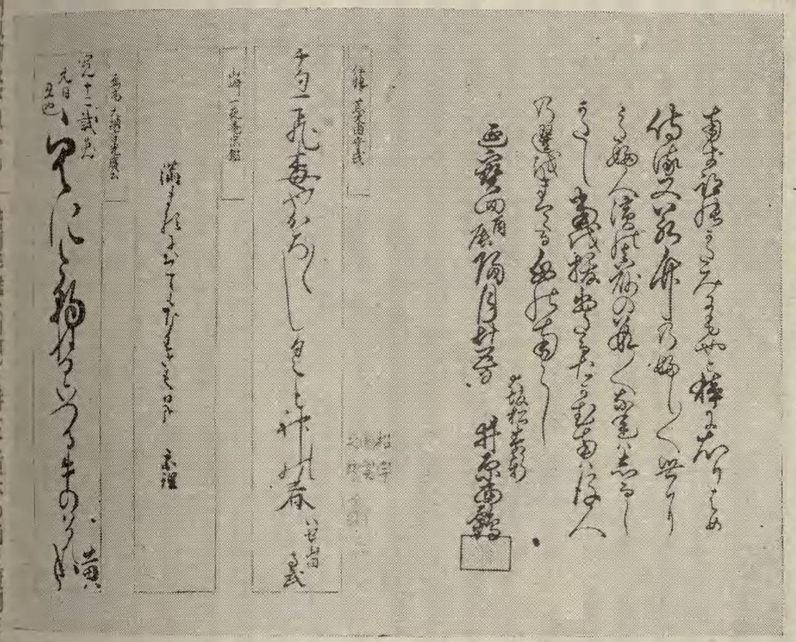
【半紙本　十二冊】

【著者】額田風之【本名】梅の鎖聞書誹諧耳底記【名義】烏丸光廣の歌學に關する雜記「耳底記」（別項）の名を襲つたものである。【成立】風之の晩年の著作であらう。【刊行】年時不明【諸本】俳諧論集（俳諧文庫）所收。【由來】遺子文下の序によると、風之が洒堂に、洒堂が芭蕉から傳授してゐたといふ蕉門の未來記たる祕書「梅の鎖」の傳授を乞うて許されず、僅かに「梅の鎖」の心を以て、年頃語り聞かされた洒堂の風說を、あり〳〵に筆錄して「耳底記」と題したが、刊行に至らずして死んだ。それを文下が、父の手澤の空しくなるのを本意なく思つて梓に上せ、同門の人々に贈る事にしたのであるといふ。併し洒堂の風談云々の件は、本文の趣とやゝ異なる所があり、「梅の鎖」といふものも疑ふべきものらしい。

【解說】本書は、主として野坡の俳風を祖述したものである。上卷では著者と門人百千及び假空の人物、如猿と百千との問答の形を借りてある。卽ち先づ著者と百千との問答に擬して蕉風に遊ぶ者の目標とすべき所、「梅の鎖」と洒堂との交涉、野坡の虛實に關する敎、野坡の敎に基づく風體の意義並に風體と連俳との關係、連歌・俳諧の附合の相異に關する芭蕉の敎、句の死活の法などを、或は祖述し或は論斷してゐる。次に如猿と百千との問答に擬して、文字の學問と芭蕉の奧旨との關係、著者の理想とする風調などを述べ、一轉して其角以下蕉門の駿足十三家を鳥になぞらへて品隲し、特に野坡を以て蕉風の骨髓を得た者と斷じ、俳諧と平話、心の俳諧と詞の俳諧との關係を論じ、作者の大事とすべき所などを說いてゐる。下卷では、芭蕉の說いた附合の十體、野坡の說いた附合の二十一品を以て蕉風附合の風體と定め、嵐雪以下著者の目して眞に俳諧を得たと信ずる蕉門の十九家に就いてその發句を擧げ、發句の模範とすべき芭蕉の句二十餘を示して、これに對する著者及び野坡の說を述べ、更に芭蕉の句に對する丈草の語、俳諧及びその新古を知るべき去來の辨を揭げ、俳諧の流行に關する芭蕉の語を揭げて流行に就いて說き、「梅の鎖」その他祕傳書の事や蕉門の奧儀としての大事・祕事・口決を說

明してゐる。これで見ると、本文は既記の如く主として野坡の教を祖述したもので、文下の序にいふ如き洒堂の風談を寫したものでない。が、ともあれ本書は野坡の俳論をその儘繼承してゐるもので、野坡及び野坡門流の俳論を知るには便宜の多いものである。【著者小傳】風之は大和の人。京に九十九庵を結んで住み、九十九庵・一歩人と號した。野坡（別項）の門下であるが、洒堂（別項）にも教を受けた。延享四年十二月二十八日歿す。年六十一。【各務】

俳諧師手鑑（はいかいしてかがみ）　眞蹟帖　大本一册　【編者】井原西鶴【刊行】延寶四年【諸本】大正十一年、新選西鶴全集俳諧篇（石川巖編）に活字で收め、昭和五年伊藤松宇によつて、「俳諧師手鑑後集」と併せて、原本通り覆刻された。【解説】自序によると、古筆治平が集めて置いたものをもととし、これに增補して板行したもので、守武・宗鑑以來當時に至る俳諧作者の發句眞蹟短册二百四十六枚を木板に附したものである。短册の右肩に、住地と姓名・號等の類を人々により適當に附記してある。作者は守武を卷頭に宗因を卷尾に据ゑ、光廣・宗甫・門跡光怒・闘白康道の如き人も交へられて居り、守武・宗鑑・光廣夫婦の如き貞門以前及び以外の人もないではないが、他はすべて貞德を初めとし、貞門及び談林の俳諧師である。治平や西鶴自身も加へられてゐる。俳諧作者の手鑑では本書が嚆矢で、貞門・談林の作者の眞蹟作句を知り得るのみならず、右肩に附記されたものが少い字數であるに拘はらず、作者の研究に確實な資料を與へるなど、誠に貴重な書である。【志田】



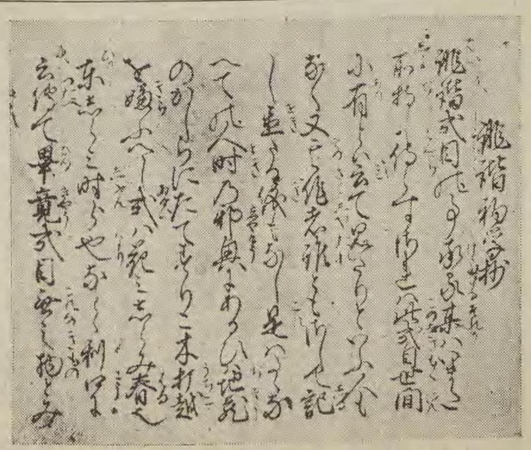
俳諧師手鑑

俳諧師手鑑後集（はいかいしてかがみごしふ）　眞蹟帖　大本一册　【編者】佐倉笑種【刊行】元祿十三年【諸本】昭和五年、伊藤松宇によつて「俳諧師手鑑」（別項）と併せて原本の通り覆刻された。【解説】自序によると、西鶴の「俳諧師手鑑」に漏れた古い作者及び、その頃未熟で除かれた作者に、その後の作者を加へ、作者數を同數の二百四十六人としたもので、體裁も前集と全く同樣である。作者は、門跡尊澄・身延日脫・遊行他阿・闘白信尹・大納言時茂・細川玄旨・松花堂昭乘の如き人も交へられてゐるが、貞門・談林・蕉風・伊丹派等に廣く亙り、芭蕉・鬼貫もこの集には見え、又笑種自身も加はつてゐる。本集の價値も大體前集に準ずる。松宇覆刻の前後集合册のものには、解説及び作者の略傳が附してある。【志田】

俳諧辭典（はいかいじてん）　辭書　一册　【著者】武田櫻桃【刊行】明治四十二年二月公文書院【解説】季題人名などを、いろは順に排列して解説を加へ、それに句例を添へたもので、主として新派の俳諧を學ぶ初歩の人のために作られた辭書である。連句には重きを置かず、季題の如きも、特に意を用ひて新題を多く入れ、現代に通用しない古い季題は省いたものがある。併し新しい季題中には妥當でないかと思はれるものもある。全體として俳諧辭典といふよりも、寧ろ季題辭典といふ如きものである。卷頭に五十餘頁の「俳諧作法」を掲げて初學者に便じてある。【伊藤】

俳諧十論（はいかいじふろん）　「葛の松原」を見よ。

俳諧初學抄（はいかいしよがくせう）　俳諧式目　一册【撰者】齋藤德元【刊行】寛永十八年【諸本】芭蕉以前俳諧集（俳諧文庫）・貞門俳諧集（俳書大系）所收。【由來】寛永十八年正月二十五日の撰者の跋によると、本書は某君の命によつて書かれたものである。撰者はもと岐阜城主織田秀信の臣であつたのを、慶長五年關ケ原役に敗北して江戸に隱れたのであるが、撰者に本書の撰を命じた君侯が何人であるかは明かでない。ともかく撰者は俳諧式目の撰を囑せられ、俳諧に式目のないのを理由として辭退したが、承引を得ず、更に度々辭したが否み難くて、筆を執ることになつたとある。【解説】撰者が俳諧に理想とする所及び自ら按じた式目を述べたものである。從來俳諧に式目の書があると傳へられたのは誤で、古く用ひ來つたものは連歌の和漢の法度に等しいものであるとして、先づ連歌の新式に書き出された和漢法度の箇條書を示し、次に撰者の理想から案出した式目二十條を掲げた。その後に「四季の詞幷戀の詞」の部を設けて、春夏秋冬各季節に行はれる習俗行事を解説し、戀の心を含む詞八十餘を並べて戀の詞の例とし、次に和漢の實在非實在の人物で數寄者の名を得た男女四十九名を傳して、これ等の人名が或はその儘で戀の詞となり、又前句との關係に依つて戀の詞となる事を敍へた。本文は分量の上では「四季の詞幷戀の詞」が全體の四分の三程を領してゐるが、實質的に主要なのは二十條の式目である。即ち俳諧の句體は連歌に俗語を加へ、前句の詞をあらぬ品に取りなして附ける樣であるとして、連歌に比して秀れた五點を俳諧の五德であると自讃し、この信條の下に、連歌の和漢の法式に準じて去嫌を定め、俳諧の品格を說き、一句の仕立樣、季を定める分別の位、連歌付・俳諧付、用付・體付・取りなし付・心付その他の附句の法を論しなどし、なほこの外、諸種の問題に亙つて俳諧の式目を說いたのである。その所說は式目として見得ると同時に、俳諧の本質的な問題に觸れた所も多い。【史的地位】俳諧の式目は、理論上は守武によつて制定せられたと推せられもするが、守武の式目制定の事實は、世に知られてゐない。守武以後も亦同じである。



俳諧初學抄（松字文庫藏）

俳諧書籍目錄（はいかいしよじやくもくろく）　上下二册【各務】【編者】阿誹軒（筒井庄兵衞重勝）。書中に藤ノ柳塵・秦柳塵などとあり、貞門派の俳人である。【刊行】元祿五年、京都井筒屋筒井庄兵衞重勝增補重版寶永四年。【諸本】珍書同好會謄寫版複製本・石川巖校訂井上書店發行本（以上共に寶永本）【解説】本書は元祿五年の「廣益書籍目錄大全」に、二（册）阿誹として、「古今誹諧ノ作者付年號時代ヲ考ル。自レ是毎年々々板行出來ヲ加入ス」と記されてゐるもので、卷頭に洛陽阿誹軒藤ノ柳塵の元祿五年三月二十七日の自序があつて、上卷には、宗鑑撰の「犬筑波」、重賴撰の「犬子集」（寛永十年）から、自悅作の「空林風葉」まで、二百七十九部の俳書をほぼ年代順に收め、年代を記したものは寛永から三程を領してゐるが、實質的に主要なのは二十條の式目である。即ち俳諧の句體は連歌に俗語を加へ、前句の詞をあらぬ品に取りなして附ける樣であるとして、連歌に比して秀れた五點を俳諧の五德であると自讃し、この信條の下に、連歌の和漢の法式に準じて去嫌を定め、俳諧の品格を說き、一句の仕立樣、季を定める分別の位、連歌付・俳諧付、用付・體付・取りなし付・心付その他の附句の法を論しなどし、なほこの外、諸種の問題に亙つて俳諧の式目を說いたのである。その所說は式目として見得ると同時に、俳諧の本質的な問題に觸れた所も多い。【史的地位】俳諧の式目は、理論上は守武によつて制定せられたと推せられもするが、守武の式目制定の事實は、世に知られてゐない。守武以後も亦同じである。

がある。

俳諧書籍目錄（はいかいしよじやくもくろく）　上下二册【各務】【編者】阿誹軒（筒井庄兵衞重勝）。書中に藤ノ柳塵・秦柳塵などとあり、貞門派の俳人である。【刊行】元祿五年、京都井筒屋筒井庄兵衞重勝增補重版寶永四年。【諸本】珍書同好會謄寫版複製本・石川巖校訂井上書店發行本（以上共に寶永本）【解説】本書は元祿五年の「廣益書籍目錄大全」に、二（册）阿誹として、「古今誹諧ノ作者付年號時代ヲ考ル。自レ是毎年々々板行出來ヲ加入ス」と記されてゐるもので、卷頭に洛陽阿誹軒藤ノ柳塵の元祿五年三月二十七日の自序があつて、上卷には、宗鑑撰の「犬筑波」、重賴撰の「犬子集」（寛永十年）から、自悅作の「空林風葉」まで、二百七十九部の俳書をほぼ年代順に收め、年代を記したものは寛永から

出來ノ俳集次第ニ摺足者也」といふ井筒屋の奥書があつて終つてゐる。以上は元祿五年版行本であるが、寶永四年本は、以上の後に附錄が附いてゐて、その初めには蕉門俳書の作者値段付を掲げる由の井筒屋庄兵衞の元祿十五年九月の序言があつて、自店版行の蕉門俳書「春の日」（貞享二年）から「花の首尾」（寶永四年）まで、二百一部の書店・册數・刊年・撰者・値段付を記し、年代順に排列してゐる。【考證】寶永本の附錄の序言の年時が元祿十五年であり、その値段付書目中、千山の「花の雲」が、元祿十五年の部と同十六年の部とに重出してゐる點などから考へて見れば、該値段付書目は元祿十五年に一旦脫稿されたものと考へられるが、併し當時版行はされなかつたらしく、寶永四年に元祿十六年以下を增補し以外の或る目錄であることになり、從つてそれは前述の「誹諧渡奉公」の俳書目錄を意味するものらしく思はれて來る。本書が「誹諧渡奉公」の編者と同人らしい汲淺集に「東山名所記」を收載しながら「誹諧渡奉公」を收載せず、且つ「書籍拾遺」の解說に、單に漠然と目錄と云つて曖昧に濟ましてゐることは、その意向の不純を思はしめるが、兎に角「書籍拾遺」の解說によつて、本書が「誹諧渡奉公」の俳書目錄の追加を行つた目錄である事をほのめかしてゐる事にはなるやうである。【價値】「寛文書籍目錄」の誹諧書の部は、書名と册數のみであり、「誹諧渡奉公」の俳書目錄を增補した本書は、元祿五年の「廣益書籍目錄大全」の誹諧書の部と共に、古俳書を知るに最も重要なもので、而も「廣益目錄」には大切な刊記がな

三程を領してゐるが、實質的に主要なのは二十條の式目である。即ち俳諧の句體は連歌に俗語を加へ、前句の詞をあらぬ品に取りなして附ける樣であるとして、連歌に比して秀れた五點を俳諧の五德であると自讃し、この信條の下に、連歌の和漢の法式に準じて去嫌を定め、俳諧の品格を說き、一句の仕立樣、季を定める分別の位、連歌付・俳諧付、用付・體付・取りなし付・心付その他の附句の法を論しなどし、なほこの外、諸種の問題に亙つて俳諧の式目を說いたのである。その所說は式目として見得ると同時に、俳諧の本質的な問題に觸れた所も多い。【史的地位】俳諧の式目は、理論上は守武によつて制定せられたと推せられもするが、守武の式目制定の事實は、世に知られてゐない。守武以後も亦同じである。かくして本書の式目制定は、俳諧に於ける最初の企ての一つであり、本書の季寄も俳諧に於ける最初の編成の一つで、當時西武の「久留流」や立圃の「はなび草」や、重頼の「毛吹草」（各別項）等も草稿が成つてゐたやうであるが、未だ出版されず、俳諧式目書として出版されたものは、本書が最古のものであり、又江戸に於ける俳書出版の先驅をなしたものでもある。【價値】俳諧の式目書として最初に現はれたものであるが、需めに應ずるだけのものであつた爲めか、後のものの如く精密でないのは已むを得ない。和漢の法式を祖述したものと言へば言へるものであるけれども、そこにおのづから獨自の見もあり、季寄に於ても時代としての注意が拂はれてゐるので、草分の制定の苦心と功績は認められる。特に俳諧の本質に觸れた所說は、「毛吹草」などの所說と對比すべきものがあつて、傾聽すべき卓見がある。

俳諧書籍目錄（はいかいしょじゃくもくろく）　上下二冊【編者】阿誹軒（筒井庄兵衞重勝）の書中に藤ノ柳層・秦柳層などとあり、貞門派の俳人である。【刊行】元祿五年、京都井筒屋筒井庄兵衞重勝增補重版寶永四年。【諸本】珍書同好會謄寫版複製本・石川巖校訂井上書店發行本（以上共に寶永本）【解說】本書は元祿五年の「廣益書籍目錄大全」に、二（冊）阿誹として、「古今誹諧ノ作者付年號時代ヲ考ル。自レ是毎年々々板行出來ヲ加入ス」と記されてゐるもので、卷頭に洛陽阿誹軒藤ノ柳層の元祿五年三月二十七日の自序があつて、上卷には、宗鑑撰の「犬子集」（寬永十年）から、自悅作の「空林風葉」まで、二百七十九部の俳書をほぼ年代順に收め、年代を記したものは寬永から貞享元年までに至つて居り（中には年代の前後してゐるものもある）、下卷には、守武撰の「毛吹追加」（正保四年）から團水作の「海草」まで、二百七十四部の俳書を年代順に收め、年代を記したものは、元祿五年までに至つてゐる（中には上卷と同じく年代の前後してゐるものもある）。該書目は書名・册數・刊行年月日・撰者、或は作者を記してあるが、刊記のないものもある。撰者或は作者には、姓・別號・住地等の中を記したものがあり、序者・跋者・判者等の或る者を記したものがあり、發句を記したり、稀に極く短い解說を附したものなどもあるが、一律にはなつてゐない。書目の後に、本書の跋で同時に次の歌仙の序になつてゐる言水の序言があつて、言水・阿誹兩吟の歌仙があり、その後に、秦柳層が嘗て「歷書滑稽志」なるものを作つた時の春澄の跋なる呪が揭げられ、その奥に「追々出來ノ俳集次第ニ增足者也」といふ井筒屋の奥書があつて終つてゐる。以上は元祿五年版行本であるが、寶永四年本は、以上の後に附錄が附いてゐて、その初めには舊聞俳書の作者値段付を揭げる由の井筒屋庄兵衞の元祿十五年九月の序言があつて、白店版行の舊聞俳書「春の日」（貞享二年）から「花の首尾」（寶永四年）まで、二百一部の書店・册數・刊年・撰者・値段付を記し、年代順に排列してゐる。

【考證】寶永本の附錄の序言の年時が元祿十五年であり、その値段付書目中、千山の「花の雲」が、元祿十五年の部と同十六年の部とに重出してゐる點などから考へて見れば、該値段付書目は元祿十五年に一旦脫稿されたものと考へられるが、併し當時版行はされなかつたらしく、寶永四年に元祿十六年以下を增補して重版されたものらしい（元祿十五年の「花見車」に「書籍目錄　阿誹」と見えるものは、元祿五年版行のものを指すと考へられる）。また藤井乙男博士の「阿誹軒の俳諧書籍目錄と俳諧渡奉公」（國語國文昭和八ノ一〇）には、本書の元祿五年本は、その延寶四年の部までは、延寶四年大鹿汲淺編の「俳諧渡奉公」（上卷は俳書目錄、下卷は四季發句集）の俳書目錄を踏襲したものであることが、兩書の比較によつて認められてゐる。然るに本書の中に、「二册。元祿五ノ夏。此書目錄に書もらしたる書籍追加也。阿誹撰」として揭げる「書籍拾遺」なるものが、若し本書以外のものであるとすると、元祿五年本書出版の事實及び同書と本書との關係が頗る難解なものになるのであるが、同書が本書と同じもの卽ち異稱同物たるに過ぎぬものとすると、甚だ解し易いことになる。然るにさうとすると同書の前揭の解說中に云ふ目錄は當然本書以外の或る目錄であることになり、從つてそれは前述の「俳諧渡奉公」の俳書目錄を意味するものらしく思はれて來る。本書が「俳諧渡奉公」の編者と同人らしい汲淺集に「東山名所記」を收載しながら「俳諧渡奉公」を收載せず、且つ「書籍拾遺」の解說に、單に漠然と目錄と云つて曖昧に濟ましてゐることは、その意向の不純を思はしめるが、兎に角「書籍拾遺」の解說によつて、本書が「俳諧渡奉公」の俳書目錄の追加を行つた目錄である事をほのめかしてゐる事にはなるやうである。【價値】「寬文書籍目錄」の俳諧書の部は、書名と册數のみであり、「俳諧渡奉公」の俳書目錄を增補した本書は、元祿五年の「廣益書籍目錄大全」の俳諧書の部と共に、古俳書を知るに最も重要なもので、而も「廣益目錄」には大切な刊記がないに對して本書にはそれがあるなど、「廣益目錄」に比べて本書の寶永本は、含む時代も長く、且つ蕉門俳書の値段付を知り得る點に於て價値が最も大である。刊記のない俳書が本書によつてその刊行時の知られるものがあり、中には刊行の月日をも知り得るものがある。記載は正確なものが固より多いが、間々誤がないではない。特にこの點に關して注意される事は、撰者或は作者がさまでの俳人でない場合、それが著名な俳人に變つてゐるもののある事で、これには編者が書肆なるが故に商策に出づるものがあるらしく、單なる誤謬以外、本書に於て要心さるべきものはこの點にある。

【附說】俳諧書籍目錄（漆山天童編、明治三十九年、國書刊行會第一期・新群書類從第七書目所收）阿誹軒の「俳諧書籍目錄」を本として、これに寶永以後江戸時代全體に亙る俳書を增補し、五

も當を得たもののみではないので、史的事實として信じ難い所説も多い。

【著者小傳】空阿は備中小田郡笠岡の人、擇津還月庵の僧となり、如日といった。俗姓は丸山、字は照空、還月庵と號した。初め擇津大阪に住し、生駒山下に庵を結んだが、後諸國を歴遊して、東は奥州、西は長門に到つた。陸前の鹽竈、磐城の平潟、常陸の水戸に庵を結んだこともある。文化九年九月十五日江戸で寂した。享年六十三。〔各務〕

俳諧世說（はいかいせせつ）俳書　半紙本　五册

【著者】高桑闌更【刊行】天明五年春。京菊屋令太兵衛等刊。【諸本】俳人逸話紀行集（俳諧叢書）・俳諧系譜逸話集（俳書大系）所收。【解説】闌更が嘗て金澤附近で湯治中、徒然の餘り、北枝の遺事や布因から聞いた事などを書き集めて、「正風人物誌」と題して置いた。それを後年乞ふ人のあるに任せ、「俳諧世說」と題して出版したのであるといふ。内容は主として芭蕉とその門人との逸話を集めたものであるが、加賀蕉門に關する事が最も多い。〔價値〕内容が凡て逸話的のものであるから、史的資料として多く資るべき所はないが、「蕉門頭陀物語」（別項）の如き小説的のものでなく、凡て確かに拠いた所がある。例へば智月尼の話は「芭蕉翁行狀記」（別項）に、牧童が芭蕉の遺の音讀説だけを聞えてゐたことは「草刈笛」（別項）に、それぞれその憑據がみめられる。勿論闌更が必ずしも一々古書に據つたか否かは明かでないが、少くとも自ら言つてゐる北枝の遺書等は、信ずべき資料であつたのであらう。だからその中には「頭陀物語」の誤傳を正して情態してゐる所もある。要するに本書は、ふうした類のきゝ書としては、最も

たので、二册本・一册本があり、その追加の部の如きは諸本によつて丁數・句數に頗る異同が多い。版を重ねる度に、或は加へ或は削つたからである。名家俳句集（俳諧叢書）所收本は追加の部のないものである。【内容】鄕に編者が撰んだ「俳諧古選」（別項）に倣つて、今人の秀吟を選び集め、四季・雜の類題別にしたもので、以て元文から明和に至る頃までの風調を大觀する事が出來る。本書は今人であるため憚つたのか、句評は全く試みてゐないが、その總論は「古選」の總論と對比して、蛸山の識見を見る事が出來る。〔羅原〕

俳諧水滸傳（はいかいすいこでん）俳諧傳　十卷五册

【著者】空阿【名義】元の施耐庵の一百八人の義氣水滸傳に倣ひ、俳諧中興の祖松尾芭蕉の墳墓が琵琶湖の南汀にあるところから、水滸の名を施したのである。【成立】凡例に「行脚巾錫の草稿である」とある。藤岡作太郎氏は、天明の末より寛政の初めにかけて執筆したものと推定した。【諸本】名著文庫（藤岡作太郎校訂）所收。【解説】守武以下芭蕉の時代に至る間の高名の俳家に關し、各家の生歿・行住・逸話・傳説等を小説めかして叙したものである。叙せられた諸家は守武・芭蕉の外、立圃・重頼・宗因・宗鑑・望一・貞室・貞德・西鶴・由平・來山・言水・拾女・杉風・季吟・嵐蘭・東順・素堂・其角・嵐雪・才麿等である。旅中の執筆に係るもので、引用書もなく、大凡記憶に綴つて書いたものでもなく、或は先人の筆記に基き、或は知人等からの傳聞により、或は扁額・碑などを參酌した所も多く、その叙事は史的價値を有するものもないではないが、芭本的には既に俳史小説ありたるものであり、又扁額の如きは必ず

去嫌詞等としたのは、切字の說・去嫌詞等・四季詞等の順序による世の習俗に違ふのである。これは北ラク季を冒頭として句を起し、句を冠して句を起し、句作の全般に亙る口決として、神祇・釋教・戀・述懷・懷舊・哀傷・無常・人倫の詞及び人倫に似て人倫に非ざる詞、夜分の詞、夜分に似て夜分に非ざる詞を擧げ、脇句の五つの習、第三の仕樣、句作の善惡のことを說き、その後に去嫌の詞等がある。以上が主要な題目であるが、撰者は最後に、漢和・和漢の式の撮要を述べ、これ等に關聯して「新式今按」に載せた入韻の詞等を掲げ、詩歌題の心得を述べてあるが、これ等は要するに附說である。右のうち切字を轉載し、また俤趣・落題の辨をなし和歌の說などを掲げる順序を四季詞等・切字の說・去嫌詞等・四季詞等の順序にとらない點が、江戸時代全體を通じ、俳書を普くが、江戸時代全體を通じ、俳書を普くよつて檢出し得る點が便利である。〔志田〕

俳諧新式（はいかいしんしき）俳諧式目　一册　【撰者】青木鷺水【別名】「秋の夕べ」【刊行】元祿十一年。卷末に元祿十一年二月二十五日の洛陽書林柏屋種充の記した「新式或問」と題する跋がある。【由來】自序及び跋によると、最近四五年の間に俳諧の式目書が簇々出たが、それ等は全く雜書に過ぎない。今、草庵の月次の會毎に、居並ぶ人々から、貞德・立圃の式目集成のことを懇望せられるまゝ、貞德の正法眼、立圃の骨髓として編集したとある。【解說】貞門の式目を集成したもので、最初に俳諧之連歌五字の字義を解說し、次に句を案ずる法を說き、五義・六義の說を詳述し、四季の詞、切字の說があり、次に發句・脇・第三並に發句作の全般に亙る口決として、神祇・釋教・戀・述懷・懷舊・哀傷・無常・人倫の詞及び人倫に似て人倫に非ざる詞、夜分の詞、夜分に似て夜分に非ざる詞を擧げ、脇句の五つの習、第三の仕樣、句作の善惡のことを說き、その後に去嫌の詞等がある。以上が主要な題目であるが、撰者は最後に、漢和・和漢の式の撮要を述べ、これ等に關聯して「新式今按」に載せた入韻の詞等を掲げ、詩歌題の心得を述べてあるが、これ等は要するに附說である。右のうち切字を轉載し、また俤趣・落題の辨をなし和歌の說などを掲げる順序を四季詞等・切字の說・去嫌詞等・四季詞等の順序にとらない點が

蕉實性に富む點に於て、その價値を認むべきである。【頴原】

誹諧草庵集（はいかいさうあんしふ）　俳諧集　三冊

【撰者】句空【名義】自序によると、句空が草庵のきりこのもとで、きり〳〵すの鳴いてゐる聲を聽いて、自分が先年義仲寺に泊つて、芭蕉から「淋しさや釘にかけたるきり〳〵す」といふ句を貰つた事を想起し、何となく本書の題號に「草庵集」と付けたのであるといふ。【刊行】元祿十三年【解說】句空は加賀金澤郊外の卯辰山麓に住む俳僧で、草庵に芭蕉自書の「秋の色ぬかみそつぼもなかりけり」「淋しさや釘にかけたるきり〳〵す」の二句を所持してゐた。これは共に芭蕉の義仲寺での吟で、前者は兼好の書賛として書き與へたもの、後者は句空が義仲寺に泊つた時、夜半に起されて話され、その折書いて貰つた句で、芭蕉歿後、彼は師の形見として大切に保存してゐた。句空は久しく眼を病んで、芭蕉の墓參も出來ず、魂祭も二十日餘りも後れるやうな有樣の所へ、切籠（きりこ）の下できり〳〵すの鳴くのを聽いてから芭蕉が一層懷かしくなり、遂に芭蕉七回忌追善の出版として本書を刊行するに至つたものらしい。卷頭に芭蕉が「奥の細道」の行脚の際、敦賀で詠んだ「月いづこ鐘はしづみて海の底」の句を掲げてゐる。上中下三卷の中、上卷は秋・冬で、發句二百六十七句、歌仙二卷、中卷は春・夏で、發句二百九十八句、歌仙二卷、下卷は雜で、發句七十句、歌仙四卷、附句一、文章數篇（日石寺不動尊・一ノ宮鹿高寺・布勢の湖めぐり・與茂太郎傳その他）及び追加として發句三十八句、歌仙一卷を收めてゐる。作者は北枝・小春・牧童・從吾・十丈等金澤を中心とする北越俳人一般である。【價値】楚常・北枝の「卯辰集」（別項）、句空の「北の山」（別項）等に次いで、北越蕉門の俳風を窺ふに必要な集である。また句空が十餘年前知恩院に於て剃髮した事や、芭蕉の有磯めぐりを慕つて義仲寺に旅寢した事や、芭蕉の折々の文通に、今一度山中の溫泉に入り、白根ケ嶽の雪見をしたいものだと言ひながら果さなかつた事や、久しく眼を病んでゐて困つた事など、句空の俳生涯に關する研究資料が隨所に見えて頗る參考となる集である。【萩原】

俳諧叢書（はいかいそうしよ）　二十八册　【刊行】明治三十二年から同四十二年に至る。發行所は初めホトトギス發行所。後、俳書堂。外に同名の叢書がある。【解說】明治の新派俳句興隆期に際して、雜誌「ホトトギス」（別項）の刊行と共に、輕便な叢書の形で上梓され、同派の普及運動に力となつたものである。「俳諧大要」は入門的のものではあるが、正岡子規の俳句文學觀を最も直截に語つたもの、「俳人蕪村」は芭蕉より蕪村をといふ子規の藝術觀を說いた評論である。「俳句問答」は子規の俳句觀を窺ふべきもの、「俳句界四年間」は明治二十九年から同三十二年に至る子規一門の年次的進展を知るべきもの、「老梅居俳句問答」は內藤鳴雪の俳句觀を知るべきものである。「春夏秋冬」「續春夏秋冬」の二種は、子規一門に於ける代表的の選集で、この前に「新俳句」、この後に「日本俳句鈔」と續けて通覽すれば、明治年間に於ける俳句の年次的變遷を明かになし得よう。「新春夏秋冬」は歷史的展開の意義に乏しい。又「故人春夏秋冬」は編者の句作標準によつて元祿天明時代の句を拔抄したものである。「俳諧三佳書」は「猿蓑」と「續明鴉」「五車反古」とを合編したもので、「浪化涼莵句集」及び「太祇全集」「几董句集」「召波樗良句集」とともに、子規の晚年に於けるその一門の古俳句關心の方向を窺ひ得るものである。叢書は次の二十八篇である。

第一篇俳諧大要（正岡子規著）○第二篇俳人蕪村（子規著）○第三篇俳諧三佳書（高濱虛子編）○第四篇太祇全集（虛子編）○第五篇几董句集（虛子編）○第六篇召波樗良句集（虛子編）○第七篇春夏秋冬（夏秋冬）（虛子・碧梧桐共選）○第十一・十二篇俳句問答上下（子規著）○第十三篇俳句界四年間（子規著）○第十四篇浪化涼莵句集（河東碧梧桐編）○第十五—十八篇續春夏秋冬（碧梧桐選）○第十九・二十篇老梅居俳句問答上下（內藤鳴雪著）○第二十一—二十四篇新春夏秋冬（松根東洋城選）○第二十五—二十八篇故人春夏秋冬（大須賀乙字編）【萩原】

俳諧叢書（はいかいそうしよ）　七册　【編者】佐々醒雪・巖谷小波　【刊行】大正元年から大正五年に至る。博文館【解說】博文館の開業二十五周年記念出版として企圖された叢書中の一つで、大體から云へば、元祿時代を中心とした蕉風の俳書類及びその末書の複刻類聚である。連歌師の紀行が二三入つてゐたり、天明前後の作者の作もあるにはあるが、それは附けたりと云ふ程である。そして前に同じ版元から出版された「俳諧文庫」（別項）と重複したものもあるが、元祿蕉風俳諧の註釋書類を加へたが如きは、初學者に便益するところが多からう。所收の俳書は次の如きものである。

【第一篇俳諧註釋集上卷】○芭蕉翁發句評林集（杉雨）○蕉翁發句茜堀（梅丸）○朱紫（五山）○七部集大鏡（何丸）○七部婆心錄（曲齋）及び附錄、元祿の蕉風（佐々醒雪）【第二篇俳諧註釋集下卷】○七部婆心錄（續）○晉子發句撮解（莊丹）○晉子十及圖句解（莊丹）○俳諧みみな草（永機）○嵐雪發句撮解（莊丹）○俳諧古今抄（支考）○芭蕉翁附合集評註（石兮）○七部搜（吏登）○去來抄（去來）。【第三篇名家俳句集附附合集】○延寶廿歌仙（芭蕉門弟）○芭蕉句選拾遺（篤治）○緞錦（沾涼）○俳諧古選（嘯山）○俳諧新選（嘯山）○丈草發句集（蝶夢）○惟然坊句集（秋擊）○杉風發句集（梅人）○桑々畔發句集（有佐・平砂）○素丸發句集（德布）○淡々發句集（分外）○風草及壺中句集（惟中）○はいかい袋（大江丸）○一茶發句集（一具補）○なゝくるま（鬼貫）○鬼貫句選（太祇）。【第四篇俳論作法集】○俳諧或問（僊竹堂）○俳諧增補提要錄（鳥醉）○貞享式海印錄（曲齋）○俳諧寂栞（白雄・拙堂）○蕉風格外辨（軍蓋）○葛の松原（支考）○俳諧發句小鑑（麥太）○俳諧附合小鏡（麥太）。【第五篇名家俳文集】○風俗文選（許六）○糊柑文集（其角）○風俗文選拾遺（北華）○風狂文艸（友水子）○蝶夢和尙文集（蝶夢）○鴉衣（也有）。【第六篇俳人逸話紀行集】○宗祇諸國物語（著者不詳）○行脚怪談袋（著者不詳）○俳諧世說（闌更）○滑稽太平記（浮生）○歌俳百人選（海鷄）○俳家奇人談（玄々一）○白河紀行（宗祇）○筑紫道の記（宗祇）○佐野の和多理（宗碩）○斗藪雜記（景山）○江都近在所名集（一漁）○箱館紀行（乙二）○斧の柄（乙二）○わがほとけ（乙二）○そぞろざと（道彦）○霍芝（道彦）○馬の上（道彦）○雞口集抄（樵風の雞口集の拔抄）。【第七篇芭蕉翁全集】○芭蕉翁繪詞傳（蝶夢）○泊船集（風國）○俳諧七部集（編者不詳）（冬の日・春の日・曠野集・ひさご集・猿蓑集・炭俵・續猿蓑集）○續七部集（闌更編）（俳諧深川集・卯辰集・句選・韻選・刀奈美山・有磯海・芭蕉庵小文庫・千鳥掛）○七部拾遺（護車編）（丙寅初懷紙・野ざらし紀行・三歌仙・一ばし・桃の實・初便・其袋）。【萩原】

俳諧大要（はいかいたいえう）　俳諧作法　一册【著者】正岡子規【成立】明治二十八年秋【刊行】明治三十二年一月、ホトトギス發行所。【解說】子規が明治二十八年に、日淸戰爭の

行】安永三年秋【由來】序に、「御伽婢子の寓言ながらと」とある如く、寓言として俳壇の天に月十三夜、連中と句談をなす折柄、夢幻の間に山城喜撰が嶽の天狗六尺坊にさらはれ、怪しき天界をよぎつて喜撰が嶽に伴はれ、山崎宗鑑の後身たる山主に「汝をとらへ俳諧の厚薄をこゝろみ罪の輕重を糺すなり」と云はれ、六尺坊を相手として一句に對する百句の附句の遲速を競はせられ、宇達は低頭懺悔して人界へ歸してくれと賴み、一句に對する神祇・釋教・戀・無常の附句百句をさせられて漸く許されるが、これに一派の歌仙・發句を附載したものである。魔界の奇談とは、卽ち武藏隅田川のほとりに住み、俳諧に慢心を起してゐる宇達が、九百章の附句はわけまよふ麓のみちのしをり草にも」と安永癸巳（二年）秋、序を附して出版したものである。【諸本】蓼太全集（俳諧文庫）・俳文學大系作法篇に所收。【解說】隱士宇達なる者が魔界の奇異を談ずる話を本體とし、

俳諧手引種

【著者】谷素外【刊行】文化四年【諸本】二冊【由來】門人一烏井遙瀬の後記に依ると、本書は初學道に入るに便するため、遙瀬等の懇望するに任せて書かれたものとある。【解說】發句の立て方及び附合の附方案じ方を說明したものである。上卷には、先づ發句の一般的考察を述べ、發句の案じ方、發句の體、平素心掛くべきことを初めとして、神祇・釋教・離別・羇旅・名所・舊蹟・戀・哀傷・挽歌・追悼・追善・懷舊・述懷・贈答・書讀・題詠・物名・祝等の句の法を說き、切字の事を解說するなど、專ら發句に關する作法を述べ、神祇以下の句法の實例として一派の發句百數十句を附錄し、下卷には、先づ附句の一般論を揭げ、進んで脇・第三・以下表八句の附方案じ方を述べ、親句・疎句の附方・四手附・坂成附・四道の附方・七名八體の事等、連句作法に關して極めて懇切に初心者を導き、最後に俳諧諸派を品隲して、一派に偏せず、他流にも交はるべきことを敎へ、四道の附方による附句の作例を附錄してゐる。これ等の解說は、極めて平易通俗で、全く標題にいふ手引種の名に背かぬものである。【著者小傳】素外は本姓池田氏、大阪の人、江戶神田お玉が池の邊りに住む。一陽井・玉池・三化と號した。江戶談林七世の宗師。初め建部涼袋門、後小菅蒼狐門。文政六年二月八日歿す。享年九十。「玉池雜錄」「俳諧根源集」「梅翁宗因發句集」その他著書頗る多い。【各務】

俳諧天狗問答

【著者】大島蓼太（俳諧文庫に下卷のみを收む。

聽くを例とした。本書はその翌年正月八日より、翌々明和三年二月八日（この間無脊或は憲太不參のこともあつたが）に至る間の講說・雜談を問答の儘に筆記し、鼠腹が上木したものである。【解說】蕉風俳諧の根本的な問題や句作又は附合等に關し、多くは具體的な作例や說明に依つて著者の解釋及び意見を述べたものである。その說く所は、其角・支考等の俳論を祖述する態度を取つたもので、俳諧の新古の事、趣向を立てる法、指合・季立の事、修行の事、風姿風情の事、その他誹諧の問題を取扱つてゐるが、著者の創見として見るべきものは殆どないが、力めて蕉風の面目を表はさうとしてゐる。【附說】本書は、「門弟四世雪中庵完來に」よつて再訂され、「十三條」「花鳥篇」（別項）と共に「雪門報恩集」に加へられてゐる。【各務】

俳諧纜

【別名】俳諧纜（はいかいのともづな）【著者】男也（をとこなり）【刊行】寶曆十二年【諸本】雪門報恩集・蓼太全集俳諧文庫所收【由來】著者の自序に「會席の作法を以て自筆に卷端を立て、門弟風骨房風國の二人、會席ごとに後學の爲に書記し、俳諧を研究するに資する所が少くない。卷頭に、湖雨・常牧外・ホ外等の序がある。【白圃】

俳諧棚捜

【著者】大島蓼太【成立】明和三年二月【刊年】不明【諸本】雪門報恩集・蓼太全集俳諧文庫所收【由來】雪門報恩集に「俳諧纜（はいかいのともづな）」を見よ。

俳家逸話

【著者】安藤和風【刊行】明治三十九年五月【解說】正篇に百四十九項、續篇に二百二十三項を收む。この書の特色とするところは、成書たる俳家奇人談「雀門頭陀物語」「近世畸人傳」「一乘寺」「俳人百家撰」「歌俳百人選」等から抄出することを避け、專ら斷簡零墨や、故老の談話や、編者の見聞を錄した點にあつて、上は至尊より下は僕隷に至る今古の俳人數百人の傳記の誤り固より保せずと記してある通り、或は信ずべく或は信ずべからざるものもあるが、兎に角新資料に據る事と比較的正確を期する事とを主眼としたもので、俳人の傳記的研究に資する所が少くない。【白圃】

俳諧高天鶯

【別名】俳諧（はいかい）高天鶯（たかあまうぐひす）【著者】鶴翥軒良弘（大和國葛城山麓に庵を結んで閑居した人）【刊行】元祿九年【諸本】德川文藝類聚俳書一冊所收。【解說】その自序に、我が住所の邊にある高天寺の名鳥たる鶯の名を取りて、かくは名づけたと記してゐる。京阪地方前句附の歷史等を知るによい資料である。【西原】

俳諧女歌仙

【編著】井原西鶴【名稱】傳本は題簽を逸し、小林文七舊藏本には、「今古俳諧女歌仙」と「刊行」されてゐるが、卷頭に「元祿三年午春正月吉日」とあつて、刊行年は元祿三年、刊行所は大阪南本町堺筋河內屋長兵衞である。【由來】序に「女歌仙の卷を解說して」とあるが、本書は貴人の俳句作法書では「虛子の「俳句入門」（別項）に加へられてゐるが、本書は貴人の俳句作法書ではなく、「虛子の「俳句入門」（別項）の前に成つたものであるから、新派俳人の著の作法書の嚆矢で、同時に子規の俳句觀を窺はしめるものである。【志田】

俳諧高天鶯

【別名】俳諧（はいかい）高天鶯（たかあまうぐひす）【著者】鶴翥軒良弘（大和國葛城山麓に庵を結んで閑居した人）【刊行】元祿九年【諸本】德川文藝類聚俳書一冊所收。【解說】その自序に、我が住所の邊にある高天寺の名鳥たる鶯の名を取りて、かくは名づけたと記してゐる。京阪地方前句附の歷史等を知るによい資料である。【西原】

俳諧棚捜

【著者】大島蓼太【成立】明和三年二月【刊年】不明【諸本】雪門報恩集・蓼太全集俳諧文庫所收【由來】著者の自序に「會席の作法を以て自筆に卷端を立て、門弟風骨房風國の二人、會席ごとに後學の爲に書記し、俳諧を研究するに資する所が少くない。【白圃】

俳諧女歌仙

【編著】井原西鶴【名稱】傳本は題簽を逸し、小林文七舊藏本には、「今古俳諧女歌仙」と「刊行」されてゐるが、卷頭に「元祿三年午春正月吉日」とあつて、刊行年は元祿三年、刊行所は大阪南本町堺筋河內屋長兵衞である。【由來】序に「女歌仙の卷を解說して」とあるが、本書は貴人の俳句作法書では「虛子の「俳句入門」（別項）の前に成つたものであるから、新派俳人の著の作法書の嚆矢で、同時に子規の俳句觀を窺はしめるものである。【志田】

俳諧女歌仙

【編著】井原西鶴【名稱】傳本は題簽を逸し、小林文七舊藏本には、「今古俳諧女歌仙」と「刊行」されてゐるが、卷頭に「元祿三年午春正月吉日」とあつて、刊行年は元祿三年、刊行所は大阪南本町堺筋河內屋長兵衞である。【由來】序に「女歌仙の卷を解說して」とあるが、本書は貴人の俳句作法書では「虛子の「俳句入門」（別項）の前に成つたものであるから、新派俳人の著の作法書の嚆矢で、同時に子規の俳句觀を窺はしめるものである。【志田】

俳諧纜

【別名】俳諧纜（はいかいのともづな）【著者】男也（をとこなり）【刊行】寶曆十二年【諸本】雪門報恩集・蓼太全集俳諧文庫所收【由來】雪門報恩集に「俳諧纜（はいかいのともづな）」を見よ。

俳家逸話

【著者】安藤和風【刊行】明治三十九年五月【解說】正篇に百四十九項、續篇に二百二十三項を收む。この書の特色とするところは、成書たる俳家奇人談「雀門頭陀物語」「近世畸人傳」「一乘寺」「俳人百家撰」「歌俳百人選」等から抄出することを避け、專ら斷簡零墨や、故老の談話や、編者の見聞を錄した點にあつて、上は至尊より下は僕隷に至る今古の俳人數百人の傳記の誤り固より保せずと記してある通り、或は信ずべく或は信ずべからざるものもあるが、兎に角新資料に據る事と比較的正確を期する事とを主眼としたもので、俳人の傳記的研究に資する所が少くない。【白圃】

俳諧天狗問答

【著者】大島蓼太（俳諧文庫に下卷のみを收む。

俳諧手引種

【著者】谷素外【刊行】文化四年【諸本】二冊【由來】門人一烏井遙瀬の後記に依ると、本書は初學道に入るに便するため、遙瀬等の懇望するに任せて書かれたものとある。【解說】發句の立て方及び附合の附方案じ方を說明したものである。上卷には、先づ發句の一般的考察を述べ、發句の案じ方、發句の體、平素心掛くべきことを初めとして、神祇・釋教・離別・羇旅・名所・舊蹟・戀・哀傷・挽歌・追悼・追善・懷舊・述懷・贈答・書讀・題詠・物名・祝等の句の法を說き、切字の事を解說するなど、專ら發句に關する作法を述べ、神祇以下の句法の實例として一派の發句百數十句を附錄し、下卷には、先づ附句の一般論を揭げ、進んで脇・第三・以下表八句の附方案じ方を述べ、親句・疎句の附方・四手附・坂成附・四道の附方・七名八體の事等、連句作法に關して極めて懇切に初心者を導き、最後に俳諧諸派を品隲して、一派に偏せず、他流にも交はるべきことを敎へ、四道の附方による附句の作例を附錄してゐる。これ等の解說は、極めて平易通俗で、全く標題にいふ手引種の名に背かぬものである。【著者小傳】素外は本姓池田氏、大阪の人、江戶神田お玉が池の邊りに住む。一陽井・玉池・三化と號した。江戶談林七世の宗師。初め建部涼袋門、後小菅蒼狐門。文政六年二月八日歿す。享年九十。「玉池雜錄」「俳諧根源集」「梅翁宗因發句集」その他著書頗る多い。【各務】

俳諧天狗問答

【著者】大島蓼太（俳諧文庫に下卷のみを收む。

聽くを例とした。本書はその翌年正月八日より、翌々明和三年二月八日（この間無脊或は憲太不參のこともあつたが）に至る間の講說・雜談を問答の儘に筆記し、鼠腹が上木したものである。【解說】蕉風俳諧の根本的な問題や句作又は附合等に關し、多くは具體的な作例や說明に依つて著者の解釋及び意見を述べたものである。その說く所は、其角・支考等の俳論を祖述する態度を取つたもので、俳諧の新古の事、趣向を立てる法、指合・季立の事、修行の事、風姿風情の事、その他誹諧の問題を取扱つてゐるが、著者の創見として見るべきものは殆どないが、力めて蕉風の面目を表はさうとしてゐる。【附說】本書は、「門弟四世雪中庵完來に」よつて再訂され、「十三條」「花鳥篇」（別項）と共に「雪門報恩集」に加へられてゐる。【各務】

俳諧纜

【別名】俳諧纜（はいかいのともづな）【著者】男也（をとこなり）【刊行】寶曆十二年【諸本】雪門報恩集・蓼太全集俳諧文庫所收【由來】雪門報恩集に「俳諧纜（はいかいのともづな）」を見よ。

俳家逸話

【著者】安藤和風【刊行】明治三十九年五月【解說】正篇に百四十九項、續篇に二百二十三項を收む。この書の特色とするところは、成書たる俳家奇人談「雀門頭陀物語」「近世畸人傳」「一乘寺」「俳人百家撰」「歌俳百人選」等から抄出することを避け、專ら斷簡零墨や、故老の談話や、編者の見聞を錄した點にあつて、上は至尊より下は僕隷に至る今古の俳人數百人の傳記の誤り固より保せずと記してある通り、或は信ずべく或は信ずべからざるものもあるが、兎に角新資料に據る事と比較的正確を期する事とを主眼としたもので、俳人の傳記的研究に資する所が少くない。【白圃】

たと記してゐる。京阪地方前句附の歴史等を知るによい資料である。〔西原〕

俳諧棚捜（はいかいたなさがし） 俳論 一冊 【著者】大島蓼太 【成立】明和三年二月 【刊年】不明 【諸本】雪門報恩集・蓼太全集（俳諧文庫）所収 【由來】著者の門弟愚得房鼠腹は、毎月八の日を以て自亭に會席を立て、會終つて後、會者が質疑をなし、それに對する著者の講說・雜談を

たと云ふ俗說を擧げてゐるので、それから思ひついたものであらう。又八吟歌仙の作の假作名は、假作名の頭字を右から讀み、下の字をそれに續けて左から讀むと、宇楚那加羅是風雅遠都呂九南親仁達となるから、恐らくこんな趣向なのであらう。從つて最初に隱士の名として宇達と出して置いたのは、實はかゝる趣向から出てゐる文字であつた事が知られる譯である。なほ云つて見ると、當時既に歿してゐた活々坊舊室は、別號を天狗坊といふが、或はこれなどからも暗示を得てゐるかも知れぬ。以上が本書の主要な部分で、乾の卷をなして居り、坤の卷には、鳳足と著者蓼太との兩吟歌仙及び一派の發句二百數十句を採錄してゐて、これは附錄たる性質を持つものである。【價値】小說的結構として面白く讀ませつつ當時の俳壇の消息を傳へる所に、創作としての價値があると共に、一句の前句に對する附句百句の二樣のものを見せてゐることは、著者蓼太の附合の技倆を示したもので、この點に於ても本書は注意されねばならぬものである。〔志田〕

俳諧二百年史（はいかいにひゃくねんし） 俳諧史 【著者】齋藤淡舟 【本名】「俳諧二百年史」傳 【刊行】明治四十四年、隆文館。【內容】俳諧といふも、俳句を主としての觀察で、先づ元祿之卷を一册とし、次いで天明之卷が著はされる筈であつて遂に出でずに終つた。この元祿之卷には、貞德風・檀林風の消長より蕉風の勃興を叙し、芭蕉一門の作品として「冬の日」「春の日」「曠野」「炭俵」を以て、その俳風の推移の跡を指摘し、芭蕉の門下にては、荷兮・野水・越人・杜國・去來・凡兆・野坡・曾良・路通・丈草・乙州・嵐蘭・許六・其角・嵐雪・支考に就いて、殊に委しく評傳してある。又蕉風に對する鬼貫を說論して伊丹連衆に及び、芭蕉の歿後、江戸座の流行、伊勢風の地方的勢力を記述して筆を止めてある。又近松と俳諧との關係にも一視線を投げてある。【價値】後册が續かぬために、標題と內容とはそぐはないけれども「元祿俳諧史」と題して見ると、俳句史二百年中に於ても、その黃金時代たる芭蕉時代を叙述して、繁に過ぎず簡に流れず、殊に人物中心に見てゐるので、史觀としてもいきいきとしたものが出てゐる。〔荻原〕

俳諧女歌仙（はいかいにょかせん） 俳諧 大本一册 【編者】井原西鶴 【名稱】傳本は題簽を逸してゐるが、小林文七舊藏本には、「古今俳諧女歌仙繪入（すがた）」といふ標題があつたといふ。【刊行】貞享元甲子曆孟冬下旬大阪南本町堺筋河內屋市右衞門板。再摺の刊記は、「正德五乙未曆九月吉日伊丹屋新七」とある。【解說】本書は西鶴の自筆自畫の刻本であつて、大本二十丁ある。開卷、難波俳林西鶴と署し、鶴永の印を押した彼一流の序文があつて、俳諧は和歌のはしで、女のいやしからぬすさみなること等を說き、「和朝の風俗なれば、此道に入れと、いまだ手習する娘に見せける」と結んでゐる。女歌仙の名を連ぬるものは、光貞妻・蝶幕・葉南・津宇・滿女・初女・捨女・孝女・辨女・好女・榮春・一直妻・一入子娘・松安妻・虎女・里女・方女・永鷺・林女・藤女・輝貞母・正治妻・勝女・傳女・金女・雪女・正由娘・久女・六女・花鳥・夕霧・吉田・吉野・竹女・妙庵で、それ〴〵姿繪を描き、右の上にその略傳・俳歷ともいふべきものを書き、左の上にその俳句を揭げてゐる。全國的に俳諧に名ある女作者を集めたのであるが、貴族階級の者、武士の娘もあるが、多く平民階級の者、殊に遊女も交つて西鶴の浮世草子に通ずる趣味が見られる。その長崎丸山の遊女花鳥、大阪新町の遊女夕霧、江戸吉原の遊女吉田、京三筋町の遊女吉野は彼の好色本に理想的な遊女として描かれてゐるものである。なほ同じく西鶴自筆刻本の俳諧に名ある男作者を集めた天和元年刊行の「難波色紙百人一句」と姉妹篇をなすものとして、興味の深いものである。

俳諧女歌仙（笹野堅氏藏）

【參考】西鶴の眼に映じたる夕霧並に其委繪 水谷不倒（歌舞伎研究第十輯） 〔笹野〕

俳諧年代記（はいかいねんだいき） 俳諧年表 一册 【編者】牧野望東（角田竹冷監修） 【刊行】明治四十二年十一月、吉川弘文館。【解說】本書は慶長三年松永貞德が俳諧宗匠を免許されしより明治四十年に至る三百有餘年間に於ける俳界の事蹟、俳人の生歿、俳書の刊行等を編年體に編述したものである。書中を分けて四段とし、一段には紀年、二段には俳壇及び俳人の事蹟、三段には生歿享年、四段には俳書の刊行を記載してある。卷頭には歿年索引が附してある。同じ編者が、明治三十四年に星野麥人との共著、同じ竹冷の校閱で、「俳諧年表」（別項）を著はしてゐるので、本書は更にそれを簡約し、編述の體裁を變へて分段式とし、かなり訂正をも行ひ、簡單な俳諧年表として役立てたものである。〔荻原〕

俳諧年表（はいかいねんぺう） 一册 【著者】牧野望東・星野麥人共著。角田竹冷閱 【刊行】明治三十四年十月、博文館。【解說】延德元年山崎宗鑑が武門を去る頃から、明治三十四年十月に至る四百十三年間に於ける俳人の生時、各俳人の傳記の概略、主要な俳諧事項、刊行俳書を編年體に排列した年表である。歿年の不明な俳人は一切除き、歿年に諸說あるものは眞に近しと思はれる年時の所に揭げ、異說は括弧中に收めてある。又俳諧の起原・沿革等を知らしめる便から、連歌師及び連歌書をも揭げてあるが、俳諧が漸く隆盛に

家に亙つてゐる。事實の正否に就いては編者自ら「精覈なる考證を經たりと云ふにあらず、傳聞の誤り固より保せず」と記してゐる通り、或は信ずべく或は信ずべからざるものもあるが、兎に角新資料に據る事と比較的正確を期する事とを主眼としたもので、俳人の傳記的研究に資する所が少くない。卷頭に、湖南・宙外・天外等の序がある。〔白田〕

戸神田お玉が池の邊りに住む。一陽井・玉池・三化と號した。江戸談林七世の宗師。初め建部涼帋門、後小菅蒼狐門。文政六年二月八日歿す。享年九十。「玉池雜藻」「俳諧根源集」「梅翁宗因發句集」、その他著書頗る多い。【各務】

俳諧天狗問答（はいかいてんぐもんだふ） 俳話 二册 【著者】大島蓼太（鳳足の序には、「はじめ作ける人も知らず」とあるが、これは假託である）【刊

高ぶり天狗になつてゐるのを諷したものであるが、この趣向に就いては次の事が思ひつかれる。結構の樣式の暗示は、涼帋の「俳仙窟」（別項）などから來てゐるやうし、天狗と俳諧を結びつけた趣向の根本は、本書中にも云つてゐる當時流行した天狗俳諧にあらうが、宗鑑を喜劇が嶽の大天狗にしたのは、其角の「雜談集」（別項）に、宗鑑が後に八幡山の天狗になつ

至る頃を以て停止してある。巻首には、參考書目の外、人名索引を附して檢出に便じてある。明治時代に於ける俳諧年表には、これより先、三十年に刊行された俳諧文庫第二編「芭蕉以前俳諧集」（大野酒竹編）上巻巻頭の酒竹の編にかゝる「俳諧年表」があるが、同年表に比べては、すべてに亙つて增加されてゐる點が勝れてゐる。併し殘年不明の俳人を收むべき方法を講じなかつたことは惜しむべき缺陷であり、なほ史實の研究の不十分であつた時代の關係上、今日からは改訂さるべき點も少くない。

〔伊藤〕

誹諧之連歌獨吟千句（はいかいのれんがどくぎんせんく）「守武千句」を見よ。

誹諧破邪顯正（はいかいはじゃけんせい）　俳諧論爭書　一册【著者】中島隨流【刊行】延寶七年十二月【諸本】俳諧珍本集（俳諧文庫）・貞門俳諧集（俳書大系）所收【内容】菅野谷高政の「中庸發」（別項）中の獨吟百韻を難詰した書である。冒頭を著者が田舍から出て新在家のほとりに宿り、二三の友人と連誹の物語する體に書き起し、高政の「中庸發」を見てその異風に驚き、開祖宗因（別項）の邪俳なる事、高政の惣本寺號の僭越なる事、古式を無視する事、言語・表現の無法なる事、神佛を愚弄する事等を指摘して、高政を手酷しく論難したものである。【價値】貞門の舊思想を墨守する頑固な俳人が、革命的な新興俳諧の談林を攻撃するのであるから、自然、感情的に走つた點が多く、學問的に得る所は少いけれども、間接に貞門俳諧と談林俳諧との相異、談林俳諧の性質、その社會的勢力、談林派の内部的事情等を知るに益するところが少くない。

【附記】隨流の談林攻撃がいたく俳壇を沸騰させ、當の相手の高政自身は、これに對して何等の返答をもしなかつたけれども、岡西惟中（別項）が先づ衒學的な筆法を以て「誹諧破邪顯正返答」（延寶八年刊）を著はし、高政に就いては隨流の非難を是として、却つて高政を難じ、師宗因を辯護した。これに對して重頼が「誹諧熊坂」を著はして、諸曲の熊坂もぢりで談林を論駁したらしく（傳本不詳）、これに應じて、當時高政派となつてゐた青木春澄が、同じく諸曲の頼政もぢりの「誹諧頼政」を著はして、本書及び「誹諧熊坂」の兩書に返答反駁した。これ等と同時、或は續いて「誹諧熊坂」の返答書の「誹諧源氏供養」や、同じく談林派の著らしい「あつかひ草」（以上二書傳本不詳）や歌人金勝慶安の著と傳へられ、高政と隨流との訴狀に擬した趣向を立て、「中庸發」を批判しながら中立の態度を取つた「二つ盃」などが現はれ、又談林派の著ながら却つて惟中の「誹諧破邪顯正返答」に附した獨吟百韻を非難した「行事板」が現はれた。惟中は直ちにこれに應じて、「誹諧破邪顯正評判之返答百韻自註」を著はして、自ら獨吟百韻に註解を附すると共に、「行事板」を反駁した。隨流は暫く沈默を守つて形勢を見てゐたらしいが、以上の書などの出たのを見すまして、隨流の門人の瀧川隨有が「誹諧猿蘰（さるかづら）」を著はして、惟中の「誹諧破邪顯正返答」に附した獨吟百韻を攻撃したのである。これに續いて、「破邪顯正並にその返答の評判」と名乘つて、中立の立場に立ちながら實は貞門に有利な論をなした「俳諧綾卷」が現はれた。以上本書の現はれた延寶七年十二月から翌八年四月頃までの間に、上述のやうな論爭書が續々と現はれ、或は隨流乃至貞門を擁護し、或は惟中乃至談林を是認し、或は第三者の地位に立つて兩者を批判するなど、正字巴の白熱化した論爭が行はれたのであるが、多くは攻撃のための攻撃となり、人身攻撃の醜惡な言辭の弄せられることが多く、俳諧論究の學的な言說は比較的少いものとして了つたのである。（中庸發參照）

【參考】俳諧論戰史（潁原退藏）（俳諧史の研究）○貞門談林の論爭と俳論　同上（俳句講座俳論俳文篇）

〔志田・萩原〕

俳諧芭蕉談（はいかいばせをだん）　俳論　乾坤二册【編者】僧文曉【名稱】文曉の跋に、「無二外篋、且編首無二書名一」とあり、「私題爲二芭蕉談一」とある如く、書名は文曉の附したものであり、また「多芭蕉翁所レ與二諸門人一論辨答述之語」とある如く、かゝる點から俳諧芭蕉談としたものと思はれる。【刊行】享和二年【諸本】享和二年菊屋太兵衞板のものは、栗本玉屑の序がある。後この序を除き、近江の美松山人亞溪の序を附した後刷があるといふ。また黒田源次編「芭蕉翁傳」の一部としても收められてゐる。【由來】玉屑の序及び自跋によれば、文曉が明和二年長崎に遊び、外尾氏から本書の稿本を得たが、卯七の記したものであつた。後、篋中に祕すること數十年、享和二年に至りて京に出で、薩の關叟と謀り、書肆菊舍をして上梓せしめたのであるといふ。【解說】俳諧・俳文・俳諧集等に關する雜多な談話論評等で、その中に聞書や書簡が混じて居り、全體の中、去來と卯七との問答及び去來の談が多きを占め、特に乾の卷に於てさうである。然るに乾の卷の條々には、去來の「花實集」乾卷と同一本源と思はれる條が十三條もあつて、そのうち「花實集」の方には其角曰とあるものが去來曰となつてゐるものや、「花實集」には、其角曰で始まつてゐるものが省かれてゐるものや、「花實集」には其裔の問であるものが魯町となつてゐたり、蘭國曰であるものが魯町となつてゐたりしてゐて、かく人物の變更してゐる條が六條もあるのである。これは同一本源のものが二樣に傳へられたものと考へられぬではないが、又一方が一方を改竄したものとも考へ得、改竄したものとすれば、「花實集」の性質から考へて本書の方が改竄したものと考へねばならぬのである。然るに又、本書乾の卷の條々の中、寫本「去來抄」の故實篇の條々と殆ど一致するものが十二條あつて、且つこれ等の大部分のものが、「花實集」とほぼ一致する前述の條々と同一のものである。若し本書の條々が「花實集」を改竄したものとするならば、この點から云つて、寫本「去來抄」故實篇の條々が、本書と同樣に「花實集」を改竄したものといふことになる。然るに本書乾の卷の冒頭には「故實」と標記して、その註記の如き形で、「予初學の時より」で始まつて、「此節は先師の物語有し事ども僅に覺へ侍るを記す」と結んだ文があつて、この文の樣子では去來の自記の如く見做され、從つて本書乾の卷と寫本「去來抄」故實篇とは同一本源のものであるべきことも推せられる。なほ本書乾の卷には、「旅寐論」の俤を引く條が三條ある。又本書坤の卷で云ふと、頗る長文の正秀の送翰中に、鬼貫の幻住庵訪問を云ひ、而もそれが鬼貫の机上の假託旅行記たる「禁足旅記」を、眞の旅行と誤り考へて述べてゐるものであり、又卯七・去來の問答の一條に就いては、曲齋が既に數々の虚僞の證を擧げて僞文說を出してゐるのであるが、その他にあつても、去來が「續猿蓑」を元祿七年に芭蕉翁手ゐ

としてゐることが、元祿六年の去來の書簡中に本書のことを云つてゐるのと矛盾する。この二事から云つても、坤の卷の性質がどんなものであるかは明白であらう。要するに本書は、信ずべきものも採られてはゐようけれども、改竄僞作を敢てしたものをも合せて、去來乃至卯七の記錄の如く見せかけた作爲の書で、而も去來の記か卯七の記かが判別しにくい如きものになつてゐるのである。

【參考】七部婆心錄（原田曲齋）○芭蕉に關する參考書一斑（麵口功）（芭蕉研究）

〔志田〕

俳諧獨稽古（はいかいひとりげいこ）　俳諧詞寄　二册【著者】米樓川【成立】文政十年【刊行】文政十一年【由來】序・跋によると、本書成稿の後、或る人に勸められて上木を思ひ立ち、文政十年秋の二世伽羅庵麻中の序を得、文政十記すのみである。

【著者小傳】樓川は江戸の人、谷口樓川の養子鷄口の門に遊び、二世樓川を嗣ぎ萬物庵・六々野人・木樨庵二世・貞松齋と號した。

〔各務〕

俳諧百一集（はいかいひゃくいちしゅう）　俳人畫像　大本一册【編者】尾崎康工【刊行】明和二年【内容】俳人一百人の肖像を畫き、その人の一句を題したもので、百人一句集卽ち百一集の名の生じた所以である。各々諸書から取つた

坊・尼智月・浪化・正秀・越人・尼芳樹・野水・曾良・句空・凡兆・その・友吉・李由・木導・二水・とよ・和及・重軌・すて・とめ・從吾・巴靜・辨三・兎士・左靜・五竹・尼素心・淡々・司鱗・舍梁・春波・素風・杜菱・秋瓜・千代尼・尼珊凉・麻父・岸虎・禹洗・生可・左菊・鳥醉・麥太・見風・凉帒・晩九・也有・封卜・其汀・交琴・柳几・大皐・門瑟・麥水・卷阿・尼芳人・闌更・可枝・汪由・既白・馬明・或靜・康工・柳居・蘆元・希因・麥林の百人である。選んでゐる人に北陸の人、伊勢派の人が比較的多いのは、康工の鄕貫と流派とによるものであらう。その肖像は多く想像に基くもののやうに考へられるから、これを以て直ちに史的證憑と

俳諧

記事的證拠を集めたもので、「俳諧風聞記」「俳諧又聞記」「俳諧露骨錄」の三篇を收めてゐる。「俳諧風聞記」は、明治二十八年九月每日新聞に登載された明治俳壇に對する觀察で、卽ち十千萬堂一派の談林風に始まつて、尾崎紅葉・饗庭篁村・角田竹冷・正岡子規と日本派を批評し、連俳是非を說いたもの、「俳諧又聞記」は、二十八年十・十一月の「女學雜誌」に揭載されたもので、明治舊俳壇の觀察、「俳諧露骨錄」は三十三年一・二月の人民新聞に登載されたもので、日本派及び秋聲會（各別項）に就いての時評である。以上の三篇は斷片的のものではあるが、ほぼ維新以降俳運の推移變革の一斑が窺ひ得られるものである。

〔伊藤〕

俳諧袋（はいかいぶくろ）　俳話　二册【著者】大伴大江丸【刊行】享和元年二月【諸本】一茶

としてゐることが、元祿六年の去來の書簡中に本書のことを云つてゐるのと矛盾する。この二事から云つても、坤の卷の性質がどんなものであるかは明白であらう。要するに本書は、信ずべきものも採られてはゐようけれども、改竄僞作を敢てしたものをも合せて、去來乃至卯七の記錄の如く見せかけた作爲の書で、而も去來の記か卯七の記かが判別しにくい如きものになつてゐるのである。

【參考】七部婆心錄原田曲齋○芭蕉に關する參考書一斑麵口功（芭蕉研究）　【志田】

俳諧獨稽古（はいかいひとりげいこ）　俳諧詞寄　二冊

【著者】米樓川　【成立】文政十年　【刊行】文政十一年　【由來】序・跋によると、本書成稿の後、或る人に勸められて上木を思ひ立ち、文政十年秋の二世伽羅庵麻中の序を得、文政十一年玄冥に自ら漢文跋を書いて剞劂に附したのである。　【諸本】俳文學大系作法篇。外に付合作法全集（俳諧文庫）には上卷のみ所收。

【解說】俳諧の式法及び初心者就學の心得を說き、また四季その他の詞を寄せたものである。上卷には、俳諧の起原より始めて發句の切字、脇の韻字、第三の手爾波、四句目の輕み、七名八體のこと、賦物（ふしもの）のこと、その他連句に關する諸般の事項を極めて平易に說き、下卷には、四季の詞、神祇・釋敎・戀・無常・述懷並に懷舊・人倫・居所・夜分・山類・水邊・雜等の詞を寄せた。その詞寄の最初に揭げた四季之詞を見ると、春夏秋冬の四部を三月づつに分つて、それぞれの月に行はれる雅俗の歲事、當月の時候・草木禽獸等の名目を類聚し、その三月に亙るものは、各季節の最初の月の詞を寄せた次に集めたのである。詞寄は凡て語義の解說は施さず、稀に附合上の注意を簡單に記すのみである。

【著者小傳】樓川は江戶の人、谷口樓川の養子鷄口の門に遊び、二世樓川を嗣ぎ萬物庵・六々野人・木婢庵二世・貞松齋と號した。　【各務】

俳諧百一集（はいかいひゃくいちしふ）　俳人畫像　大本一冊　【編者】尾崎康工　【刊行】明和二年

【內容】俳人一百人の肖像を畫き、その人の一句を題したもので、百人一句集卽ち百一集の名の生じた所以である。各々諸書から取つた

俳諧百一集（松宇文庫藏）

短評を附してある。その俳人は、芭蕉・守武・宗鑑・望一・貞德・貞室・立圃・重頼・季吟・湖春・宗因・其角・見龍・嵐雪・去來・丈草・凉菟・許六・北枝・野坡・素堂・尙白・杉風・信德・鬼貫・言水・木因・一笑・任口・千那・木節・露川・萬子・秋之坊・尼智月・浪化・正秀・越人・尼芳樹・野水・曾良・句空・凡兆・その・友吉・李由・木導・二水・とよ・和及・重軌・すて・とめ・徒吾・巴靜・辨三・兎士・左靜・五竹・尼素心・淡々・司鱗・舍朱・春波・素風・杜菱・秋瓜・千代尼・尼珊凉・麻父・岸虎・禹洗・生可・左菊・鳥醉・麥太・見風・凉岱・晩九也有・封ト・其汀・交琴・柳几・大阜・門瑟・麥水・卷阿・尼芳人・蘭更・可枝・汪由・既白・馬明・或靜・康工・柳居・盧元・希因・麥林の百人である。選んでゐる人に北陸の人、伊勢派の人が比較的多いのは、康工の鄉貫と流派とによるものであらう。その肖像は多く想像に基くもののやうに考へられるから、これを以て直ちに史的證憑とするのは考慮を要するが、併し又蘭更は總髮の姿であり、既白は僧體であるなど、疑問を解決し得るものもあつて、研究家に役立つ所が少くない。

【著者小傳】康工は越中戶出の人、通稱澤屋伊兵衞、八椿舍・六壁庵などの別號があつた。中川乙由門で、俳畫を善くした。安永八年歿す。享年七十九。編著は外に、「俳諧金花傳」「蕉句後拾遺」がある。　【賀川】

俳諧百韻之抄（はいかいひゃくゐんのせう）　「百韻自註」を見よ

俳諧隨筆（はいかいずゐひつ）　一冊　【著者】岡野知十　【刊行】明治三十五年十一月

【解說】本書は、知十のものした明治俳壇の批評的隨事を集めたもので、「俳諧風聞記」「俳諧露骨錄」の三篇を收めてゐる。「俳諧風聞記」は、明治二十八年九月每日新聞に登載された明治俳壇に對する觀察で、卽ち十千萬堂一派の談林風に始まつて、尾崎紅葉・鷹庭篁村・角田竹冷・正岡子規と日本派を批評し、連俳是非を說いたもの、「俳諧又聞記」は、二十八年十・十一月の「女學雜誌」に揭載されたもので、明治舊俳壇の觀察、「俳諧露骨錄」は三十三年一・二月の人民新聞に登載されたもので、日本派及び秋聲會（各別項）に就いての時評である。以上の三篇は斷片的のものではあるが、ほぼ維新以降俳運の推移變革の一斑が窺ひ得られるものである。　【伊藤】

俳諧袋（はいかいぶくろ）　俳話　二冊　【著者】大伴大江丸　【刊行】享和元年二月　【諸本】一茶大江丸全集（俳諧文庫）・中興俳話文集（俳書大系）所收。　【由來】本書編著の企てられたのは天明七年以前のことで、同年九月に歿した大島蓼太の序が附いてゐる。これが完成したのは板行と同年で、板下を自ら書き、大島完來の序を得、自費で出板したのである。　【內容】著者の俳話と著者の發句及びその周圍の人々との連句を集めたものである。俳話としては古今高名の俳人の略傳を按じ、逸話を語り、又それ等の人々の俳論俳話を紹介し、或は師說を述べ、自己の俳歷を叙するなど、人及びその所說を主としてゐる。發句は凡て著者の吟で、これを他人の連句と併せ載せ、四季の順に類別して俳話と大凡交互に錄してある。これを春夏及び秋冬の二册に分ち、春夏の卷の初めに蓼太及び完來の序を置き、次に芭蕉の行脚掟を載せ、秋冬の卷の末に貞德の「誹諧未來記」の一節を抄して跋に代へてゐる。　【價

俳諧文庫 はいかいぶんこ 叢書 二十四冊

【刊行】明治三十年から三十四年に至る。博文館【解説】十千萬堂派・蚊波會・秋聲會・日本派（以上各別項）等の新興の俳壇流派の擡頭に連れて俳境が活気を帯び来り、舊派がそれに刺戟された等の關係から、古俳諧に對する鑑賞研究の機運が動き来つた結果企圖されたもので、編纂者は舊派とそれに連絡を持つ秋聲會及び秋聲會に連絡を持つ蚊波會の大野酒竹であつた。俳書の知識及び所藏は當時これ等の方面の人々が勝れてゐた事情と、眞の革新派の目本派はおのづから別立してゐた、且つ當時俳書の知識に於ては貧弱なものであつた事とが時代的に注意される。かくてこの叢書に於て、古俳書中の主なるものは、啓蒙的な意味で大體網羅されたと云つてよく、便宜或は作者本位に或は種類別に編輯して、俳論史の大要を窺はしめるものになつてゐる。特に附錄として「俳諧略史」「俳家系圖」「俳諧年表」や、芭蕉傳・芭蕉後傳及び風雪・支考・也有・一茶等の傳記評論等が附けられ、各冊の卷首には作者若者の略傳、俳書の解題が與へられてゐるので、初學者研究者に便宜するところが多い。兎に角古俳書類を集成して活版に覆刻し收めたものは、これが最初である。所收の書類は次の如きものである。

（各務）

俳諧發句題叢 はいかいほっくだいそう

中本四冊【編者】青野太祐【刊行】文政三年【諸本】俳諧類題句集前編（俳諧文庫）所收【解說】寶暦頃から當時までの俳人二千七十二人の四季の發句約一萬三千句を類題的に編纂したもので、「はいかいの夫木抄」とも名づけやうか。卷首に國別の作者人名表を擧げ、各季に季題の總目錄を掲げ、集中にも作者に國所を附記するなど遺憾なきを期してゐる。この種類の發句集としては先づ以て完備したものである。編纂者は舊派の俳人で、雪門一派の句ぶりを見るべきものである。

（志田）

俳諧發句帳 はいかいほっくちょう

【撰者】野々口親重（立圃）【刊行】寛永十年十一月一日奥村【解說】春・夏・秋・冬の四部に分つて貞德派の發句を類聚したもので、句數二千六百餘を收めてゐる。「玉海集」追加（一名「犬子集」）の跋によると、初め親重・重頼の二人が去年中以來の發句附句を撰集して一集となすべきことを貞德に懇望し、貞德が遂に許して「犬子草」といふ題號を與へたのを、重頼一人が私して「犬子草」の草を集と改めて「犬子集」と名づけたものだといふ。今日からは作者及び俳書の考證的方面に改訂さるべきものがある。この後、俳諧の叢書も次々に刊行され、單行書も種々現はれてゐるので、この叢書の價値は次第に減じ來つてゐる譯である。

（志田）

第八編 支考全集（光風堂永機・其角堂機一校訂）
嘉の松原（支考）○續五論（支考）
笈日記（支考）○三定底（支考）○東雅集（支考）○自他羅尼（支考）
西華集（支考）○三定底（支考）○涼菟（支考）○南無俳諧（支考）○夏衣（支考）
考）○阿誰話（支考）○俳諧十論（支考）○發顯文（支考）
（里紅）○三日月日記（支考）及び附錄として野鐘子
支考（宮島六鼠）。第九編蕉門十哲集（光風堂永機・
晋舉庵狗進校訂）其角文集（校訂者）○續虛栗集
（其角）○類柑文集（其角）○嵐雪文集（校訂者）○支
考文集（校訂者）○許六文集（校訂者）○去來文集
（校訂者）○伊勢紀行（去來）○去來抄（去來）○丈草
文集（校訂者）○ねこづゞ（丈草）○野坡俳文（校
訂者）○野坡句集（校訂者）○越人俳文（校訂者）○
不猫蛇（越人）○北枝俳文（校訂者）○北枝句集（校
訂者）○杉風句集（嵐人）○多かづら（杉風）。第十
編元祿名家句集附女流俳句集（大野酒竹校訂）言
水句集（五噺）○來山句集（五噺）○沾德句集（五噺）
○麿師（巳水）○卯辰集（蓼太）○北枝・深川集
（酒堂）○有磯海（浪化）○芭蕉小文庫（史邦）○千
鳥掛（知足・蝶羽）○波々句集（冬映）○俳諧温故集
（遠谷）○園女句集（校訂者）○智月尼句集（校訂者）
○秋色女句集（校訂者）○千代尼句集（大夢）○花讃
女句集（蓑笠）○多代女句集（多代女）。第十一編
一茶大江丸全集（岡野知十校訂）一茶發句集（俳諧
寺社中）○一茶帳（一茶）○一茶聯句集（校訂者）
○おらが春（一茶）○俳諧觸帳（大江丸）○はいかい
袋（大江丸）○おがたの三月よっきん（大江丸）及び附
錄ふる茶袋（岡野知十）。第十二編蕪村暁臺全集
（大野酒竹校訂）蕪村句集（几董）○蕪村句集後篇
（酒竹）○蕪村遺稿（蕪村）○俳諧玉藻集（蕪村）○十
哲左右句合（蕪村）○新花摘（蕪村）○俳諧七車（几董）
○夜半亭發句帖（几董）○明和辛卯春興（几董）○續
明和歌仙（几董）○花摘（蕪村）○五車反古（蕪村）

嘉の松原（支考）○笈日記（支考）○續五論（支考）
西華集（支考）○東雅集（支考）○自他羅尼（支考）
○三定底（支考）○涼菟（支考）○南無俳諧（支考）○夏衣（支考）
考）○阿誰話（支考）○俳諧十論（支考）○發顯文（支考）
（里紅）○三日月日記（支考）及び附錄として野鐘子
支考（宮島六鼠）。第九編蕉門十哲集（光風堂永機・
晋舉庵狗進校訂）其角文集（校訂者）○續虛栗集
（其角）○類柑文集（其角）○嵐雪文集（校訂者）○支
考文集（校訂者）○許六文集（校訂者）○去來文集
（校訂者）○伊勢紀行（去來）○去來抄（去來）○丈草
文集（校訂者）○ねこづゞ（丈草）○野坡俳文（校
訂者）○野坡句集（校訂者）○越人俳文（校訂者）○
不猫蛇（越人）○北枝俳文（校訂者）○北枝句集（校
訂者）○杉風句集（嵐人）○多かづら（杉風）。第十
編元祿名家句集附女流俳句集（大野酒竹校訂）言
水句集（五噺）○來山句集（五噺）○沾德句集（五噺）
○麿師（巳水）○卯辰集（蓼太）○北枝・深川集
（酒堂）○有磯海（浪化）○芭蕉小文庫（史邦）○千
鳥掛（知足・蝶羽）○波々句集（冬映）○俳諧温故集
（遠谷）○園女句集（校訂者）○智月尼句集（校訂者）
○秋色女句集（校訂者）○千代尼句集（大夢）○花讃
女句集（蓑笠）○多代女句集（多代女）。第十一編
一茶大江丸全集（岡野知十校訂）一茶發句集（俳諧
寺社中）○一茶帳（一茶）○一茶聯句集（校訂者）
○おらが春（一茶）○俳諧觸帳（大江丸）○はいかい
袋（大江丸）○おがたの三月よっきん（大江丸）及び附
錄ふる茶袋（岡野知十）。第十二編蕪村暁臺全集
（大野酒竹校訂）蕪村句集（几董）○蕪村句集後篇
（酒竹）○蕪村遺稿（蕪村）○俳諧玉藻集（蕪村）○十
哲左右句合（蕪村）○新花摘（蕪村）○俳諧七車（几董）
○夜半亭發句帖（几董）○明和辛卯春興（几董）○續
明和歌仙（几董）○花摘（蕪村）○五車反古（蕪村）

茶等の傳記評論等が附けられ、各篇の巻首に作者著者の略傳、俳書の解題が與へられてゐるので、初學者研究者に便益するところが多い。兎に角古俳書類を集成して活版に覆刻したものは、この叢書が最初である。所收の書類は次の如きものである。

【第一編芭蕉全集（光鳳堂永機・庵心庵學人校訂）】冒頭（芭蕉）○旧庵の初合（芭蕉作・追善附）○枯尾花（芭蕉）○笈の小文（芭蕉）○更科紀行（芭蕉）○嵯峨日記（芭蕉）○奥細道（芭蕉）○奥細道拾遺（曾良）○曾良旅日記（曾良）○俳諧七部集（芭蕉）○猿蓑（芭蕉）○炭俵（芭蕉）○續猿蓑（芭蕉）○俳諧古選（嘯山）○春泥發句選（維駒）○涼袋獨吟集（涼袋）○花見次郎（升六）○舍利風語（梅通）。【第十九編俳諧文集（巖谷小波校訂）】本朝文鑑（支考）○和漢文操（支考）○芙蓉文集（耳得）○新選俳諧文集（鼠弁）。【第二十編俳諧逸話全集（鵜澤四丁校訂）】滑稽太平記（浮生）○行脚怪談袋（著者不詳）○蕉翁消息集（關東）○俳家奇人談（玄々一）○續俳家奇人談（玄々一）○俳人百家撰（川柳）○歌俳百人選（海壽）○名家談叢（著者不詳）。【第二十一編付合作法全集（伊藤松宇校訂）】鶴のあゆみ（其角作・芭蕉評）○其角十七條（傳其角）○二葉集（傳其角・嵐雪）○俳諧入船（幸佐）○俳諧名目抄（丈石）○俳諧附合小鏡（麥太）○七名八體附合要錄（梅人）○手引草（凡董）○齋眼集（道彦）○誰よっ手（道彦）○淺川早引集（宜麥）○俳諧手引種（素外）○續繪歌仙（宜麥）○俳諧獨稽古（櫻川）○俳諧道の便（月居）○梅林茶談（梅室）○俳諧仕機帳（是綱）○俳諧目廼童（蓼屋）○蕉門俳諧師說錄（傳越人）○七部集連句早見（寄三）。【第二十二編俳諧類題句集、前編（尾崎紅葉校訂）】俳諧發句題叢（太笏）。【第二十三編俳諧類題句集、後編（尾崎紅葉校訂）】發句類聚（了輔）○新類題發句集（蝶夢）○類題發句集（蝶夢）。【第二十四編俳諧紀行全集（佐藤飯人校訂）】日本行脚文集（三千風）○野晒紀行（翠園抄（積翠園）○奥細道菅菰抄（梨一）○奥細道拾遺（麥太）○椎の葉（才麿）○陸奥千鳥（桃鄰）○塵語庵入日記（雲鈴）。

【價値】古俳書の見難い時期に、これ程集成して刊行されたので、以後の俳諧研究者に便益を與へたことの尠少でなかつた事は云ふまでもない。併し本文の誤讀脫落があつたり、校正の嚴密を缺いてゐることは惜しむべき缺陷である。なほ史的研究の不十分であつた時期のものだけに、今日からは作者考及び俳書の考證的方面に改訂さるべきものがある。この後、俳諧の叢書も次々に刊行され、單行書も種々現はれてゐるので、この叢書の價値は次第に減じ來つてゐる譯である。（志田）

俳諧發句題叢（はいかいはつくだいそう）

中本四册 【編者】青野太笏 【刊行】文政三年 【諸本】俳諧類題句集前編（俳諧文庫）所收

【解說】寶曆頃から當時までの俳人二千七十二人の四季の發句約一萬三千句を類題的に編次したもので、「はいかいの夫木鈔とも名づけぬべきか」と、跋者成美は云つてゐる。卷首に國別の作者人名表を擧げ、各季に季題の總目錄を揭げ、集中にも作者に國所を附記するなど遺憾なきを期してゐる。この種類の發句集としては先づ以て完備したものである。龜田鵬齋の漢文の序、いしもるあるじの和文の序、成美の跋がある。

【附說】蝶夢の安永三年刊「類題發句集」（別項）寬政四年刊「新類題發句集」が出て、類題的發句集の軌範を示し、これ等の集が初學者を益することの多大なると、發句點取時代を來たしたのと相俟つて、この種の發句集が續出し、太笏の「題叢」もその一つであるが、今同集以外のものを擧げる。○俳諧發句題苑集 中本五册目錄一册（寬政十一年刊。一無庵丈左撰、陸奥南陽・律大校合）。春夏秋冬一册づつに分けて、當時の俳人の作を主に、まゝ古人の作を加へて類題的に編次した。編者丈左は岸氏、京の人、江戸住、烏明門といふ外、未考。○新題林發句集 中本四册（周防史公編、浪華會大校。享和元年刊）。石兮の序中、「車螯の俳諧題林集有てこたび新題林發句集おこなはる」とあるが、この集は車螯の「俳諧發句題林集」（寬政六年刊）に編くものではなくて、丈左の「題苑集」の改竄剽竊である。丈左のものは目錄を別册にしてあるのを、この集はこれを各季各册の初めに移したので、四季四册となつてゐる。内容は各册とも初めの一二枚を改竄しただけのものである。又「題苑集」册尾にある四季朗詠之部を省いてあり、編者史公に就いては未考である。序者の石兮に就いても、飯田篤老の假名である佐野石兮と同人であるか否かも未考である。○發句類聚 中本二册（青顧廬了輔編輯、水黑庵麥松删定。文化四年刊）。了輔は野村氏、王子在の尾久に住し、麥太門であつた。人々の發句を書き留める事二十餘年、同門麥松の删定を經たが、主として雪門の作を集めたもので、雪門一派の句ぶりを見るべきものである。了輔は八十二歲の高齡を重ねて天保七年十一月十四日歿した。○近世發句類題集 半紙本四册（雀堂來會編、石津亮澄跋。文政三年刊）。文化以後の人々の四季發句を類題的に輯錄したものである。編者來會に就いては未考である。

【編者小傳】青野太笏は下總香取の人、通稱慶次郎、猫頭庵・迎風道人など號したが、椿丘の號が多く用ひられた。白雄門の奥州三春の人で、下總佐原にゐた今泉恒丸に學び、のち江戸へ出て門戸を構へ、晩年には越後の長岡にも草庵を構へて半年庵と號した。江戸と越後と半年交代の意である。文政七年五月十八日出羽の大塚村なる蕉甫亭古翠方で、一具庵夢南（一具前名）に邂逅し、「過こしかたの物語に去年の僻をことしにくやみ、昨日の謬をけふ驚き、六十一年の塵つもる頭の霜を拂ひ捨て」（寂砂子）たのである。成美・道彦・一茶・一具・孤山（大梅）などと特に親しかつた。文政十一年八月十八日、長岡の半年庵に於て歿した。享年六十五。本書の外、「丈古今」「寂砂子二俳諧發句題叢後篇」の編著がある。（櫻川）

誹諧發句帳（はいかいはつくちやう）

【撰者】野々口親重（立圃） 中本四卷二册 【刊行】寬永十年十一月一日（奥付）

【解說】春・夏・秋・冬の四部に分つて貞德派の發句を類聚したもので、句數二千六百餘を收めてゐる。「玉海集追加」（別項）の跋によると、初め親重・重賴の二人が天文年中以來の發句附句を撰集して一集となすべきことを貞德に懇望し、貞德が遂に許して「犬子草」といふ題號を與へたのを、重賴一人が私して「犬子草」の草を集と改めて「犬子集」（別項）を出版したのみならず、先輩たる親重の句は七十五句、重賴自身の句は百五十餘句を入れたので、親重がこれを憤つて四季四卷の句帳を作り、「犬子集」の千五百句をも加へて二千六百餘句とし、重賴の句は元の儘の句數、自己の句は增して三百句とし、古筆一村に淸書せしめて開板したとあるが、この所傳は十分信ずるに足るのである（「滑稽太平記」の所傳は大部分誤りである）。「犬子集」は發句附句の集であるのを、親重は發句のみの集とし、「犬子集」の發句の部の句數をその儘取つて、これに更に千句以上を增加したのである。その結果兩集を比べると、季題に於て、本集には僅かではあるが「犬子集」にはなかつた季題が增して居り、作者に於て、京の作者が遙かに增し、又「犬子集」にはなかつた紀州の宗朋（二十句）・爲三（一句）が加へられてゐる。その他は伊勢山田の人が、却つて一人減じてゐる外移動がない。そして句數に於て千句以上を增してゐるのは、親重自身の句の外、貞德の句を增して三百五句とすると共に、自己の門人を新たに加へ、或はその句數を增してゐることが主なる

とも版を改める毎に前册の「校訂餘言」中の過誤を正してある如きも、校訂者の良心を窺ふべきである。所收書は次の如きものである。

第一篇ゑらが巻（一茶著）○第二篇去來抄（去來著）○第三篇花屋日記（文鱗編）○第四篇新花摘（蕪村著）○第五篇新五子稿（亨編）○第六篇芭蕉書簡集（俳書堂編）○第七篇蘆葉千鳥（烏巣都著）○第八篇雪まろげ（曾良著）。〔浜居〕

俳諧明倫雜誌 はいかいめいりんざっし　俳論　五冊　【著者】森川許六【校訂者】岡本芳麿【名稱】原名が「青根が峰誹諧問答抄」で、一に「誹諧青根が峰問答抄」「誹諧問答青根が峰」、略して「青根が峰」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」とあつて、この本及びこの名稱が一般に行はれてゐる。【名義】「青根が峰」とは、後柏原天皇の「柏玉集」にある「夏木立青根が峰の自雲や若葉にふかき花を見すらん」の御詠に基づくものである事が目錄に見える。〔成立〕元祿十一年三月【刊行】天明五年十月【諸本】許六全集（俳諧文庫）（後刷の俳諧問答）・蕉門俳話文集（俳書大系）・俳文學大系俳論篇・青根が峰俳諧問答抄）所收。【由來】校訂者芳麿の序によると、本書の稿本は、もと芭蕉・其角に從遊して一方の雄と稱せられた宿津祇空の祕藏したもので、これが祇空の實弟椎本芳室に贈られ、芳室より更にその門下の芳麿に傳へられたものである。芳麿はこれを祕藏して年を經たが、本書のあることを知る者は世に少く、又蕉門の末流が正風を失ふ時勢を慨して門人なる有賀の乞ふに任せて刊行することになつたと云ひ得るのである。〔浜居〕

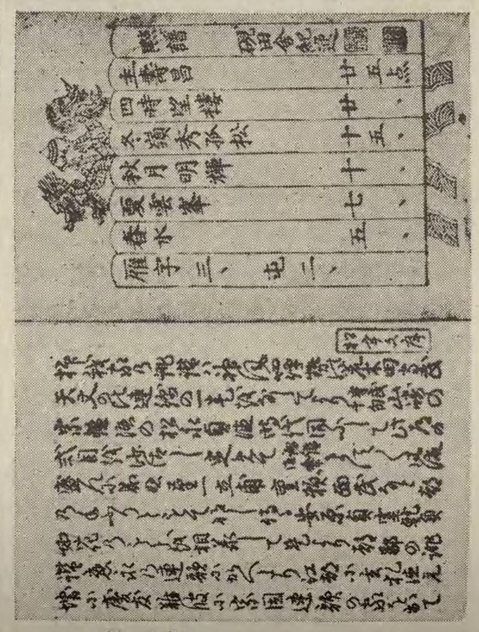
俳諧明倫雜誌 はいかいめいりんざっし　俳論　五冊　【著者】森川許六【校訂者】岡本芳麿【名稱】原名が「青根が峰誹諧問答抄」で、一に「誹諧青根が峰問答抄」「誹諧問答青根が峰」、略して「青根が峰」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」とあつて、この本及びこの名稱が一般に行はれてゐる。【名義】「青根が峰」とは、後柏原天皇の「柏玉集」にある「夏木立青根が峰の自雲や若葉にふかき花を見すらん」の御詠に基づくものである事が目錄に見える。〔成立〕元祿十一年三月【刊行】天明五年十月【諸本】許六全集（俳諧文庫）（後刷の俳諧問答）・蕉門俳話文集（俳書大系）・俳文學大系俳論篇・青根が峰誹諧問答抄）所收。【由來】校訂者芳麿の序によると、本書の稿本は、もと芭蕉・其角に從遊して一方の雄と稱せられた宿津祇空の祕藏したもので、これが祇空の實弟椎本芳室に贈られ、芳室より更にその門下の芳麿に傳へられたものである。芳麿はこれを祕藏して年を經たが、本書のあることを知る者は世に少く、又蕉門の末流が正風を失ふ時勢を慨して門人なる有賀の乞ふに任せて刊行することになつたと云ひ得るのである。〔浜居〕

俳諧問答 はいかいもんどう　俳論　五冊　【著者】森川許六【校訂者】岡本芳麿【名稱】原名が「青根が峰誹諧問答抄」で、一に「誹諧青根が峰問答抄」「誹諧問答青根が峰」、略して「青根が峰」ともいふ。寛政十二年の後刷本には「俳諧問答」とあつて、この本及びこの名稱が一般に行はれてゐる。【名義】「青根が峰」とは、後柏原天皇の「柏玉集」にある「夏木立青根が峰の自雲や若葉にふかき花を見すらん」の御詠に基づくものである事が目錄に見える。〔成立〕元祿十一年三月【刊行】天明五年十月【諸本】許六全集（俳諧文庫）（後刷の俳諧問答）・蕉門俳話文集（俳書大系）・俳文學大系俳論篇・青根が峰誹諧問答抄）所收。【由來】校訂者芳麿の序によると、本書の稿本は、もと芭蕉・其角に從遊して一方の雄と稱せられた宿津祇空の祕藏したもので、これが祇空の實弟椎本芳室に贈られ、芳室より更にその門下の芳麿に傳へられたものである。芳麿はこれを祕藏して年を經たが、本書のあることを知る者は世に少く、又蕉門の末流が正風を失ふ時勢を慨して門人なる有賀の乞ふに任せて刊行することになつたと云ひ得るのである。〔浜居〕

俳諧名著文庫 はいかいめいちょぶんこ　叢書　八冊　【編者兼校訂者】粗山仁三郎（稱月）【刊行】大正五年、俳書堂。【內容】古俳書の名著を一册づつ覆刻したもの（六篇だけは新編）、殊に校訂の嚴正を期したもので、校訂者は、一原稿も亦みづから作りて筆耕生などの手に委することなく、時弊に鑑みて一字一句の末までも決しておろそかにせず」と斷つてある。各篇に校訂者の慶筆たる「校訂餘言」のある事は深切なやり方で、便益となる點が尠くない。「去來抄」には、「向井家の系圖と去來の遺蹤」の一章が附せられて居り、「花屋日記」には「開業醫の立場から見た蕉門の死」の小論文が附せられてゐる。なほ「蕉門十哲」の人物に關する考證は、「蕉門十哲の研究」と題して別册として刊行された。〔浜居〕

俳諧萬人講 はいかいばんにんこう　雜俳集　一册　【著者】早川丈石【刊行】寶慶九年【諸本】付合作法全集（俳諧文庫）・俳文學大系作法篇に所收。【由來】自序に依ると、本文は或る人の請に任せ、童蒙のためにするとて書かれたが、成稿の後なほ人の請に應じて一ヶ年に第八編を出した。版元は第十編まで江戸日本橋通本石町三丁目角松葉軒植村藤三郎。「誹諧蕉都枝折」と改題後は小石川傳通院前雁金屋儀助。【諸本】德川文藝類聚第十一・川柳雜俳集（日本名著全集）所收。外に抄錄本もある。【解說】初編の紀逸の自序に、自分が選した中から秀逸を書き留めて置いたものを、書肆の需めに應じて刊行した旨を記してある。柄井川柳の「柳樽」（別項）と同樣な性質のもので、川柳の名聲の擧つて來たのは紀逸の晩年であつたが、大體同時代の人であるから、この「武玉川」と「柳樽」とを比較對照して見ると、同吟類句が隨分多く見出される。精査したなら恐らく千句近くもあらう。中には暗合もあらうが、摸倣剽竊も少くなかつたものと思はれる。或は又同一の人が兩方の選者に投吟した句もあらう。ただ短句を長句に、長句を短句に燒き直したやうな句の多いことは頗る注目に値ひする。〔西原〕

俳諧武玉川 はいかいむたまがわ　前句附句集　十八編十八册　【編者】第十五編までは慶紀逸、以下は二世紀逸（四時機）【名稱】第十一編から「誹諧蕉都枝折」と改題した。【刊行】寬延三年に第一編が出て以下順次刊行され、寶暦十一年に第十五編を出し、なほ十年を經て別に第十六編、なほ二年に第十七編、同年に第十八編を出した。版元は初編から第十編までは江戸本石町三丁目角松葉軒植村藤三郎、第十一編から第十五編までは江戸日本橋通本石町三丁目角松葉軒植村藤三郎。【諸本】德川文藝類聚第十一・川柳雜俳集（日本名著全集）所收。外に抄錄本もある。【解說】初編の紀逸の自序に、自分が選した中から秀逸を書き留めて置いたものを、書肆の需めに應じて刊行した旨を記してある。柄井川柳の「柳樽」（別項）と同樣な性質のもので、川柳の名聲の擧つて來たのは紀逸の晩年であつたが、大體同時代の人であるから、この「武玉川」と「柳樽」とを比較對照して見ると、同吟類句が隨分多く見出される。精査したなら恐らく千句近くもあらう。中には暗合もあらうが、摸倣剽竊も少くなかつたものと思はれる。或は又同一の人が兩方の選者に投吟した句もあらう。ただ短句を長句に、長句を短句に燒き直したやうな句の多いことは頗る注目に値ひする。〔西原〕



俳諧名目抄 はいかいみょうもくしょう　俳諧詞寄　一册　【著者】早川丈石【刊行】寶慶九年【諸本】付合作法全集（俳諧文庫）・俳文學大系作法篇に所收。【由來】自序に依ると、本文は或る人の請に任せ、童蒙のためにするとて書かれたが、成稿の後なほ人の請に應じて一ヶ年に第八編を出した。版元は第十編まで江戸日本橋通本石町三丁目角松葉軒植村藤三郎。「誹諧蕉都枝折」と改題後は小石川傳通院前雁金屋儀助。【諸本】德川文藝類聚第十一・川柳雜俳集（日本名著全集）所收。外に抄錄本もある。【解說】初編の紀逸の自序に、自分が選した中から秀逸を書き留めて置いたものを、書肆の需めに應じて刊行した旨を記してある。柄井川柳の「柳樽」（別項）と同樣な性質のもので、川柳の名聲の擧つて來たのは紀逸の晩年であつたが、大體同時代の人であるから、この「武玉川」と「柳樽」とを比較對照して見ると、同吟類句が隨分多く見出される。精査したなら恐らく千句近くもあらう。中には暗合もあらうが、摸倣剽竊も少くなかつたものと思はれる。或は又同一の人が兩方の選者に投吟した句もあらう。ただ短句を長句に、長句を短句に燒き直したやうな句の多いことは頗る注目に値ひする。〔西原〕

俳諧名著文庫 はいかいめいちょぶんこ　叢書　八冊　【編者兼校訂者】粗山仁三郎（稱月）【刊行】大正五年、俳書堂。【內容】古俳書の名著を一册づつ覆刻したもの（六篇だけは新編）、殊に校訂の嚴正を期したもので、校訂者は、一原稿も亦みづから作りて筆耕生などの手に委することなく、時弊に鑑みて一字一句の末までも決しておろそかにせず」と斷つてある。各篇に校訂者の慶筆たる「校訂餘言」のある事は深切なやり方で、便益となる點が尠くない。「去來抄」には、「向井家の系圖と去來の遺蹤」の一章が附せられて居り、「花屋日記」には「開業醫の立場から見た蕉門の死」の小論文が附せられてゐる。なほ「蕉門十哲」の人物に關する考證は、「蕉門十哲の研究」と題して別册として刊行された。〔浜居〕

俳諧萬人講 はいかいばんにんこう　雜俳集　一册　【著者】早川丈石【刊行】寶永二年、大阪心齋橋筋相原屋清右衛門【諸本】德川文藝類聚第十一所收。【解說】來山・伴自・一禮・園女・文十・何中・岸柴・東行・甘泉・海音・文流・豐流・萬海・鷺水・言水・我黑・晩山・好春・雲山・螺石等の高點句を收錄した冠附・前句附の書である。〔西原〕

俳諧或問 はいかいわくもん　俳論　一册　【著者】林俳諧批判（著者・刊年不詳）がある。〔吟齋〕

俳諧或問 はいかいわくもん　俳論　二册　【著者】修竹堂佐々醒雪。岡西惟中の變名かと推したが、惟中の特論たる俳諧の本質を高言とすることである。そして本書の論の中心をなすものは、惟中の特論たる俳諧を知れるもので、この略史に至つて極略なが

ら「誹諧蕉都枝折」と改題した。【刊行】寬延三年に第一編が出て以下順次刊行され、寶暦十一年に第十五編を出し、なほ十年を經て別に第十六編、なほ二年に第十七編、同年に第十八編を出した。版元は初編から第十編までは江戸日本橋通本石町三丁目角松葉軒植村藤三郎、第十一編から第十五編までは江戸日本橋通本石町三丁目角松葉軒植村藤三郎。【諸本】德川文藝類聚第十一・川柳雜俳集（日本名著全集）所收。外に抄錄本もある。【解說】初編の紀逸の自序に、自分が選した中から秀逸を書き留めて置いたものを、書肆の需めに應じて刊行した旨を記してある。柄井川柳の「柳樽」（別項）と同樣な性質のもので、川柳の名聲の擧つて來たのは紀逸の晩年であつたが、大體同時代の人であるから、この「武玉川」と「柳樽」とを比較對照して見ると、同吟類句が隨分多く見出される。精査したなら恐らく千句近くもあらう。中には暗合もあらうが、摸倣剽竊も少くなかつたものと思はれる。或は又同一の人が兩方の選者に投吟した句もあらう。ただ短句を長句に、長句を短句に燒き直したやうな句の多いことは頗る注目に値ひする。〔西原〕

俳諧武玉川 はいかいむたまがわ　前句附句集　十八編十八册　【編者】第十五編までは慶紀逸、以下は二世紀逸（四時機）【名稱】第十一編から「誹諧蕉都枝折」と改題した。【刊行】寬延三年に第一編が出て以下順次刊行され、寶暦十一年に第十五編を出し、なほ十年を經て別に第十六編、なほ二年に第十七編、同年に第十八編を出した。版元は初編から第十編までは江戸日本橋通本石町三丁目角松葉軒植村藤三郎、第十一編から第十五編までは江戸日本橋通本石町三丁目角松葉軒植村藤三郎。【諸本】德川文藝類聚第十一・川柳雜俳集（日本名著全集）所收。外に抄錄本もある。【解說】初編の紀逸の自序に、自分が選した中から秀逸を書き留めて置いたものを、書肆の需めに應じて刊行した旨を記してある。柄井川柳の「柳樽」（別項）と同樣な性質のもので、川柳の名聲の擧つて來たのは紀逸の晩年であつたが、大體同時代の人であるから、この「武玉川」と「柳樽」とを比較對照して見ると、同吟類句が隨分多く見出される。精査したなら恐らく千句近くもあらう。中には暗合もあらうが、摸倣剽竊も少くなかつたものと思はれる。或は又同一の人が兩方の選者に投吟した句もあらう。ただ短句を長句に、長句を短句に燒き直したやうな句の多いことは頗る注目に値ひする。〔西原〕

俳諧名目抄 はいかいみょうもくしょう　俳諧詞寄　一册　【著者】早川丈石【刊行】寶慶九年【諸本】付合作法全集（俳諧文庫）・俳文學大系作法篇に所收。【由來】自序に依ると、本文は或る人の請に任せ、童蒙のためにするとて書かれたが、成稿の後なほ人の請に應じて一ヶ年に第八編を出した。版元は第十編まで江戸日本橋通本石町三丁目角松葉軒植村藤三郎、第十一編から第十五編までは江戸日本橋通本石町三丁目角松葉軒植村藤三郎。【諸本】德川文藝類聚第十一・川柳雜俳集（日本名著全集）所收。外に抄錄本もある。【解說】初編の紀逸の自序に、自分が選した中から秀逸を書き留めて置いたものを、書肆の需めに應じて刊行した旨を記してある。柄井川柳の「柳樽」（別項）と同樣な性質のもので、川柳の名聲の擧つて來たのは紀逸の晩年であつたが、大體同時代の人であるから、この「武玉川」と「柳樽」とを比較對照して見ると、同吟類句が隨分多く見出される。精査したなら恐らく千句近くもあらう。中には暗合もあらうが、摸倣剽竊も少くなかつたものと思はれる。或は又同一の人が兩方の選者に投吟した句もあらう。ただ短句を長句に、長句を短句に燒き直したやうな句の多いことは頗る注目に値ひする。〔西原〕

俳諧萬人講 はいかいばんにんこう　雜俳集　一册　【著者】早川丈石【刊行】寶永二年、大阪心齋橋筋相原屋清右衛門【諸本】德川文藝類聚第十一所收。【解說】來山・伴自・一禮・園女・文十・何中・岸柴・東行・甘泉・海音・文流・豐流・萬海・鷺水・言水・我黑・晩山・好春・雲山・螺石等の高點句を收錄した冠附・前句附の書である。〔西原〕

俳諧或問 はいかいわくもん　俳論　二册　【著者】修竹堂佐々醒雪。岡西惟中の變名かと推したが、惟中の特論たる俳諧の本質を高言とすることである。そして本書の論の中心をなすものは、惟中の特論たる俳諧

俳諧連歌 はいかいれんが　俳論　一册　【著者】修竹堂が惟中でなくしてその門下であるとしても、俳論は總て惟中の說と見て大差なからうといふ。盡し首肯すべき說である。即ち俳

俳諧或問 はいかいわくもん　俳論　二册　【著者】修竹堂佐々醒雪。岡西惟中の變名かと推したが、惟中の特論たる俳諧の本質を高言とすることである。そして本書の論の中心をなすものは、惟中の特論たる俳諧を知れるもので、この略史に至つて極略なが

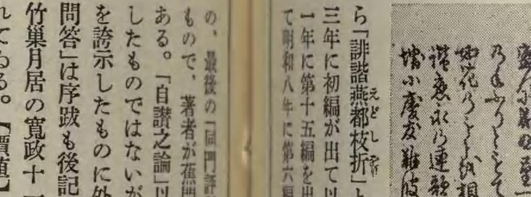
俳諧或問 はいかいわくもん　俳論　一册　【著者】林俳諧批判（著者・刊年不詳）がある。〔吟齋〕

俳諧名目抄 はいかいみょうもくしょう　俳諧詞寄　一册　【著者】早川丈石【刊行】寶慶九年【諸本】付合作法全集（俳諧文庫）・俳文學大系作法篇に所收。【由來】自序に依ると、本文は或る人の請に任せ、童蒙のためにするとて書かれたが、成稿の後なほ人の請に應じて一ヶ年に第八編を出した。版元は第十編まで江戸日本橋通本石町三丁目角松葉軒植村藤三郎、第十一編から第十五編までは江戸日本橋通本石町三丁目角松葉軒植村藤三郎。【諸本】德川文藝類聚第十一・川柳雜俳集（日本名著全集）所收。外に抄錄本もある。【解說】初編の紀逸の自序に、自分が選した中から秀逸を書き留めて置いたものを、書肆の需めに應じて刊行した旨を記してある。柄井川柳の「柳樽」（別項）と同樣な性質のもので、川柳の名聲の擧つて來たのは紀逸の晩年であつたが、大體同時代の人であるから、この「武玉川」と「柳樽」とを比較對照して見ると、同吟類句が隨分多く見出される。精査したなら恐らく千句近くもあらう。中には暗合もあらうが、摸倣剽竊も少くなかつたものと思はれる。或は又同一の人が兩方の選者に投吟した句もあらう。ただ短句を長句に、長句を短句に燒き直したやうな句の多いことは頗る注目に値ひする。〔西原〕

俳諧萬人講 はいかいばんにんこう　雜俳集　一册　【著者】早川丈石【刊行】寶永二年、大阪心齋橋筋相原屋清右衛門【諸本】德川文藝類聚第十一所收。【解說】來山・伴自・一禮・園女・文十・何中・岸柴・東行・甘泉・海音・文流・豐流・萬海・鷺水・言水・我黑・晩山・好春・雲山・螺石等の高點句を收錄した冠附・前句附の書である。〔西原〕

俳諧武玉川 はいかいむたまがわ　前句附句集　十八編十八册　【編者】第十五編までは慶紀逸、以下は二世紀逸（四時機）【名稱】第十一編から「誹諧蕉都枝折」と改題した。【刊行】寬延三年に第一編が出て以下順次刊行され、寶暦十一年に第十五編を出し、なほ十年を經て別に第十六編、なほ二年に第十七編、同年に第十八編を出した。版元は初編から第十編までは江戸日本橋通本石町三丁目角松葉軒植村藤三郎、第十一編から第十五編までは江戸日本橋通本石町三丁目角松葉軒植村藤三郎。【諸本】德川文藝類聚第十一・川柳雜俳集（日本名著全集）所收。外に抄錄本もある。【解說】初編の紀逸の自序に、自分が選した中から秀逸を書き留めて置いたものを、書肆の需めに應じて刊行した旨を記してある。柄井川柳の「柳樽」（別項）と同樣な性質のもので、川柳の名聲の擧つて來たのは紀逸の晩年であつたが、大體同時代の人であるから、この「武玉川」と「柳樽」とを比較對照して見ると、同吟類句が隨分多く見出される。精査したなら恐らく千句近くもあらう。中には暗合もあらうが、摸倣剽竊も少くなかつたものと思はれる。或は又同一の人が兩方の選者に投吟した句もあらう。ただ短句を長句に、長句を短句に燒き直したやうな句の多いことは頗る注目に値ひする。〔西原〕

本】付合作法全集（俳諧文庫）・俳文學大系作法篇に所收。【由來】自序に依ると、本文は或る人の請に任せ、童蒙のためにするとて書かれたが、成稿の後、なほ人の請に應じて一々書寫して與へる不便を除くため、自費を以て梓行したのである。【解說】俳諧の附合上の用語を、その語の頭音によつて伊呂波順に排列し、註解を施したものである。例へば「伊」



ら「誹諧燕都枝折」と改題した。【刊行】寬延三年に初編が出て以下順次刊行され、寶曆十一年に第十五編を出した。その後、十年を經て明和八年に第六編、安永二年に第七編、同五

（

の

リ

尾

れ

字一句の末までも決しておろそかにせず」と斷つてゐる。各篇に校訂者の署書たる「校訂餘言」のある事は深切なやり方で、便益となる點が尠くない。「去來抄」には、「向井家の系圖と去來の遺墨」の一章が附せられて居り、「花屋日記」には「開業醫の立場から見た松尾芭蕉の死」（小池藍人）が附せられてゐて、これ等も研究家に取つて好い參考である。各篇

贈られ、芳室より更にその門下の芳麿に傳へられたものである。芳麿はこれを祕藏して年を經たが、本書のあることを知る者は世に少く、又蕉門の末流が正風を失ふ時勢を慨してこれが刊行を思ひ立つ折柄、書林にして門人なる有賀の乞ふに任せて刊行することになつたとある。乃ち芳麿は內山椎蔭の天明五年六月跋安藝文庫、與々軒封齋の同年孟秋漢文の

雜序を得、自ら同年五月中旬の叙と後記を記してゐる。【內容】著者が去來と論辨の問答をなした書狀を集載したものである。卷頭に去來の「贈二晋氏其角一書」を載せ、次に著者の「贈二落柿舍去來一書」、去來の「答二許子問難一辨」、著者の「再呈二落柿舍一書」「自讃之論之上」「再呈、下」（自讃之論之下の略）「自得發明辨」「同門評判」の七篇が收められてゐる。「贈二晋氏其角一書」は、其角が新しみを以て生命とする俳諧の流行に移らぬのを非難したもので、元祿十年の其角の「末若葉（うわかは）」に附載された「贈二晋渉川先生一書」（十年五月附）とは辭句の異同があつて、「末若葉」のものは其角が取捨を施したものである。去來側の風國が同年に板行した「菊の香」に、「末若葉」の「贈二晋渉川先生一書」と去來の原文の儘の「贈二其角先生一書」とを併せ揭げ、その後者は元祿十年二月附になつて居り、「青根が峰」所載のものと殆ど辭句に異同がない。即ち「青根が峰」は「菊の香」の「贈二其角先生一書」を轉載したものである事が知られる。著者の「贈二落柿舍去來一書」は、去來の「贈二晋氏其角一書」を難じて不易流行の解釋をなしたものであるが、これに答へた去來の「答二許子問難一辨」はこれに反駁を加へたもので、元祿十年十二月附になつてゐる。次の「再呈二落柿舍一書」は著者が重ねて去來の說を駁したもので、「自讃之論」の上下はこの再呈書に附錄したものであるが、著者が初め北村季吟の貞門俳諧の風を承け、後、田中常矩の談林風に變じ、更に蕉風の血脈を承けた次第を叙して自家の俳諧觀を誇示したもので、元祿十一年三月附になつて居り、「自得發明辨」も同月去來に送つたもので、著者が師より相承したと稱する取合せ論を高調し發展させたもの、最後の「同門評判」も同月に去來に送つたもので、著者が蕉門の高足を批評したものである。「自讃之論」以下二篇は直接去來を難詰したものではないが、難詰の延長として自家を誇示したものに外ならぬ。後刷本の「俳諧問答」は序跋も後記も一切省かれ、ただ卷頭に竹巢月居の寬政十一年冬の序が新たに附せられてゐる。【價値】本書は去來の不易流行論と著者許六の取合せ論とを中心とする俳論と見らるべきものであるが、去來の論が大凡中正を得てゐるに對して、許六の論には可なり議すべき點がある。又許六の述べる自己の俳歷や芭蕉との關係にも、事實に疑ふべき點があり、誇大に失する所がある。而も許六の俳歷及び俳諧觀を知り、去來の俳諧觀を知るに好適なものの一である。又著者の「同門評判」は、蕉門の名家を拉し來つて自由にそれ等の傾向特色を剔抉したもので、これにも感情的な曲筆と思はれる點がないではないが、批判の鋭い所があり、能く特色を捉へ得てゐるところがあるので、蕉門の諸士を知るに、參考となる點が少くない。【各務・志田】

俳諧雪おろし（はいかいゆきおろし）「雪おろし」を見よ。

俳諧略史（はいかいりやくし）文學史　一册　【著者】大野洒竹　【刊行】明治三十年十月。博文館刊行の俳諧文庫第二編「芭蕉以前俳諧集」上卷の卷頭に附したもの。【解說】先づ連歌の變遷に筆を起し、以下俳諧の起原、俳諧の中興、談林風の勃興、伊丹風の俳諧、蕉風の俳諧、俳壇の趨勢、俳壇の俗了、俳風の復興、享和文化の俳風、天保の俳風等の章に分ち、綱要を捉へて略述したものである。明治俳諧勃興の初期に於ける啓蒙的な地位を取るものであるが、明治に於ける俳諧史としては、これより前、明治二十六年に山崎麓（午太郎の一俳諧史談）があるけれども、同書はなほ頗る不備を免れぬもので、この略史に至つて概略ながらほぼ纏まりの附いた俳諧史に始めて接し得たと云ひ得るのである。【伊藤】

俳諧連歌（はいかいれんが）「連歌」を見よ。

俳諧或問（はいかいわくもん）俳論　二册　【著者】脩竹堂（佐々醒雪は、岡西惟中の變名かと推した）　【刊行】延寶六年八月　【諸本】俳論作法集（俳諧叢書）所收　【由來】序によると、關西より來つて東武の傍らに僑居する著者と、その書窓を敲いた一客人との間に問答された俳諧に關する意見を集めたものと云ふことになつてゐる。【內容】本書は問答體を用ひて、著者の俳論及び談林の附句並に宗因判の惟中の獨吟を收めたものである。即ち俳諧の濫觴より說き起して俳諧の本質を概述し、守武以後の俳諧の沿革を溫ね、惟中が寓言を以て俳諧の骨子とする所以を考へ、寓言と狂言との關係を明らめ、發句及び一般の句の理想を說き、當今誹付を好む所以を檢して謠曲と俳諧の關係に及び、遣句・用付・噂付・心いき・扠なし付と當風（談林）との關係を述べ、次に貞德・立圃を排擊したり、或は宗因に親炙せずして宗因の的流と稱する點を排したりする事を斥け（以上上卷）、最後に附合に關する意見を述べて著者の見聞に入つた附句百數十句を實例として列記し、宗因判の惟中獨吟を正式として示してゐる（以上下卷）。上卷には卷頭に守武の畫像を揭げ、本文卷首に本書成立の由來を記した筆者不明（恐らくは著者）の序を、下卷には美作の大村花陽軒が延寶六年八月に、東武の旅館で記した本書推輓の漢文の跋を附してゐる。【批評】著者脩竹堂が、岡西惟中の變名たるとも否ともに關はず、本書が惟中に關係の深い人の筆に成る事は明かである。佐々醒雪は、假令脩竹堂が惟中でなくしてその門下であるとしても、俳論は總て惟中の說と見て大差なからうといふ。蓋し首肯すべき說である。即ち俳論の中心をなすものは、惟中の特論たる俳諧の本質を寓言とすることである。そして本書に說く所は、大體に於て中正を得、理路も當時のものとしては整備したものと云ひ得る。ただ貞德・立圃等、貞門作者を排擊する事を斥けてはゐても、事實に於ては貞門の俳諧史上に於ける地位を認めてゐない。故にこの點からいへば、說くところ多少偏頗に陷つた觀がないではない。なほ本書に對する難書に、「談林俳諧批判」（著者・刊年不詳）がある。【各務】

俳諧或問（はいかいわくもん）俳論　一册　【著者】石河積翠（いしこ）　【刊行】年時不詳　【諸本】俳諧論集（俳諧文庫）所收。【內容】蕉門の論客支考・其角・許六・去來・路通等の俳論及び蕉風の附句の法式等に就いて、著者の見る所を問答體を用ひて述べたものである。即ち「葛の松原」「俳諧十論」「雜談集」「篇突（へんつき）」等に見える俳諧の本質の問題、支考・去來・路通・許六の附句上の說、その他附合の根本的な問題等を評論し、蕉風俳諧の要旨を說明してゐる。就中、蕉風論、流派論、七部集論の如きは、本書中重きをなすものであり、「滄浪詩話」「氷川詩式」等詩話を參照し來つてゐる點も本書の特色である。【批評】著者は太白堂系であるが、その論述するところは太白堂の流風を祖述しようとする態度でなく、蕉風一般として公正に考察しようとしてゐる。其角や嵐雪の說に對する心得を問はれて其角を推稱し、桃隣には一言も觸れてゐない如き、とかく非難攻擊の多い支考・

許六輩の說く所にも耳を傾けて、それ等の說をも採つてゐる如き、本書は公正穩健な態度で書かれたものである。特に識見があり、その所論に卓越したところがあつて、俳論書中でも優れたものの一つである。

【著者小傳】積翠は甲斐守、旗本、中奥小姓で、初め燕志門、後太白堂二世桃隣門。享和三年七月四日歿す。「野ざらし紀行翠園抄」「芭蕉句選年考」（別項）「面問答」の著もある。〔各務〕

俳家大系圖　俳諧系譜　二冊

【本名】古風・談林・正風俳家大系圖　【編者】生川春明

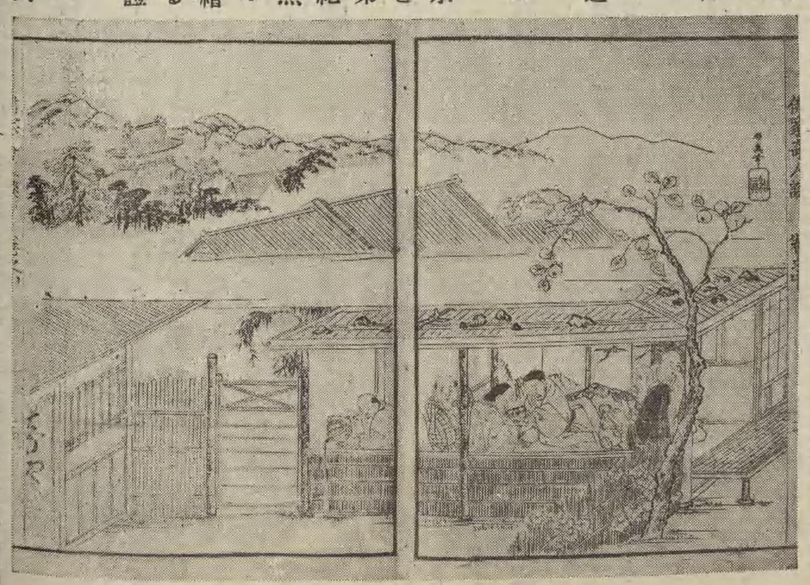
【刊行】奥付に「天保九年戊戌四月彫成」とあるが、山崎よし故の後叙は「天保九年いぬの文月」とあるから、實際の出版は七月以後であらうと思はれる。【諸本】俳諧系譜逸話集（俳書大系）所收。【由來】序・跋等によると、俳諧の師傳が混雜して分ち難く、正統を辨ずるにたやすからぬを患へて編者は古今俳家の眞蹟を集め、家々の祕事を探つて系譜三篇を編み、これを「俳家大系圖」と題して世に廣めることになり、先づその初編二册を梓行したのが本書である。梓行に際し、春樓寫峯の序、及び自序、山崎よし故の後叙を附した。【解說】古風（別項）及び談林風（別項）の俳家の系圖を記したもので、守武・宗鑑（各別項）を俳諧權輿として略傳を掲げ、以下貞門の祖貞德直弟の譜、貞德直弟の中、立圃・重頼・貞室・分德・西武・季吟・梅盛（各別項）の所謂貞門の七俳仙、その他貞德の高弟の系譜、談林の祖宗因直弟の譜、宗因直弟の中、西鶴・調和・露沾（各別項）等高弟を摘出してそれ等の系譜を記し、最後に三千風の譜を記してゐる。系譜は一般の系圖書きの如く罫線を以て關係を表はし、それ〴〵の俳家の略傳並に家書等を註記した。編者はこの系譜を編むに數多の俳書を閲し、巻頭の引用書目錄に記されたものだけでも二百七十三部に及んでゐる。それ等の俳書中には、編者當時に在つても既に稀覯のものが少くなく、原本が得難く孫引したものも四十四部ほどあるが、これは目錄に特に孫引の旨を斷つてある。この一事からも推察せられる如く、編述の態度は頗る眞面目に考證的で、從つて本文の記事も殆ど正確といふを得べく、偶々發見せられる誤謬は、誰にも避け難き失誤乃至校合の際の過失に歸すべきものの如くである。巻首に守武・貞德・西鶴（宗因に代ふ）・芭蕉四家の畫像、守武の獨吟千句の奥書、貞門・談林の俳書から引いた名家の句等を載せてゐる。

俳家大系圖巻首芭蕉像

【附記】題名の角書に正風ともあるが、初編たる本系圖には正風はない。本系圖巻末に中編二巻、下編三巻の近刻豫告があるが、これは出版されなかつたらしく、正風については下編に記されてゐたものと思はれる。〔各務〕

俳家奇人談　俳人傳　三册

【編者】竹内玄々一　【名稱】外題には「時代擧畫俳家奇人談」とある。【刊行】文化十三年秋【諸本】俳諧逸話全集（俳諧文庫）・俳人逸話紀行集（俳諧叢書）所收。【由來】序・跋によつて見ると、本書は「近世畸人傳」（別項）の例に倣つて俳家の奇行あるものを集錄したのである。然るに刊行に至らずして編者が歿したので、男青々がこれを校正刊行し、青々述の「玄々居士略傳」及び知友の追悼の詩・短歌・發句等を附錄した。【解說】文明より安永に至る間の古今俳家八十餘名を傳してゐる。俳家の主なものは、宗祇・守武・宗鑑・貞德・季吟・宗因・芭蕉を初めとして、貞門・談林・蕉風の高弟・孫弟等で、凡例によると、「諸俳家集・紀事・雜記の類、都て數百部」を參照したとあり、書讃・短册・尺牘等の摹寫や、蕙齋紹眞の筆に成る挿繪を挿んで、各俳家の面容を傳へることを期してゐる。記述は、大體初めに略傳を、次に奇行を述べ、その間にその作者の風調を見るべき作を掲げてゐる。但し奇行と云つても必ずしも常軌を逸した行爲ではなく、大體逸事ともいふべき程のものである。編述の態度として、その依據したものが時代の降るものや孫引と思はれるものがあるので、直に信用し難い點があり、誤謬をそのまゝ襲うてゐるものがある。特に逸事は逸事としての興味と共に、觀者は一應注意を要する。


俳家奇人談挿畫（紹眞筆）

引用した諸俳家の俳句は「俳諧古選」（別項）からの引用が多く、その點に於てこれも注意を要する。

【附記】「俳家奇人談」が世に出て後十數年、天保三年秋、「續俳家奇人談」三册が上梓せられた。編者は前編と同じく玄々一となつてゐる。

白峰・關史・曉臺・存義等の近代名家に至るまでを傳し、體裁は前編と同一であるが、これには挿繪がなく、眞蹟物も頗る少い。但し本編には、卷頭に蕪村の筆に成る蕉門十哲の淡彩俳畫・畫像並に題句として、その發句一句づつが載せられてゐる。本編の價値性質は前編と同樣である。

【著者小傳】玄々一は播磨の人、江戸住。初め吉田白馬門、後越谷吾山門。有無軒・竹窓と號し、勾當の官に進んだ。文化元年八月二十五日歿す。享年六十三。〔各務〕

梅花軒隨筆（ばいくわけんずゐひつ）　隨筆　四卷【著者】梅花軒三休子（本名未詳。江戸武家の隱士であらう）【成立】卷末自跋の終に、「享保十一年丙午秋九月既望、梅花軒雅明叟源命書五十五歳」とある。【解說】江戸時代前半期に武家・諸大名の間に起つた逸事や、又自身在府或は旅行中見聞の談話等を趣味的に記したもので、當時知名の侯伯などの評判もあり、まゝ武士の復讐談もある。いはゆる御當家史の一資料であらう。享保十一年春宵軒醉月（鳥居和隆）の漢文序、同年著者の和文序跋がある。〔和田〕

賣花新驛（ばいくわしんえき）　洒落本　一册【作者】朱樂館主人（朱樂菅江）【口繪】桃江書【名稱】易の書「梅花新易」のもぢり、新驛は新しく開かれた驛の義、新宿の意をかけたのである。【刊行】安永六年【諸本】德川文藝類聚第五・洒落本代表作集（近代日本文學大系）・洒落本評釋所收。【題材】新宿遊廓が一度享保年間に廢止され、安永元年に再興を許されたのを、新奇の趣向を競ふ洒落本として取材したのである。

【梗概】四谷あたりに、醉中庵嵐雜と云ふ俳諧師がゐる。その執筆に嵐非・嵐外の二人がゐた。處る日、四十男の風流が宗匠の崩れに二十歳に足らぬ嵐興をそゝのかして新宿に出かける事になり、嵐外をも誘ふ。茶屋吳竹屋から桝坂屋へ上る。嵐酒は何かにつけて吉原の噂を聞かせたがる。嵐興ひとりは妓に愛せられたが、嵐酒・嵐外は冷遇されて、不平滿々で嵐興を起して歸つた。

【構想】半可通の生意氣さで、新宿を馬鹿にする客はふられ、温順しい初心な客が厚遇されるといふ洒落本の類型的な描寫である。客と遊女との間は初期の洒落本に近い淡々たる描き方である。驛路風景の一節は特に新宿の鄉土的特色を髣髴させる。その點がこの書の取柄である。【影響】「驛舍三友」（別項）は明かに本書の脫化である。人物の設定も兩者相同じく、對話にも兩々相似た所がある。〔山崎〕

梅花氷裂（ばいくわひようれつ）　讀本　三卷【作者】山東京傳【挿畫】歌川豐國【名稱】詳しくは「綺本梅花氷裂」。作中の梅野與四兵衞・小梅及び氷裂の鏡に因んだものである。【刊行】文化三年。

【梗概】室町時代の初め、信濃の守護職小串貞行の忠臣唐琴浦右衞門は、妻棧との間に子がなかつたので、相談の上、家臣鷺森數右衞門の手を經て藻の花を妾とした。然るに高階師直の一族舊鳥蓑文太は、浦右衞門が主君と共に鎌倉に上つた留守中、奸計を以て棧と通じ、藻の花を慘殺して、共に家寶の鎬藤四郎の名刀を奪ひ逐電した。この時藻の花の靈は亂巾の金魚と化して彼等に祟る。浦右衞門は鎌倉で藻の花の靈に遭うて怪しむ折柄、弟からの使者で事變を知り、數右衞門と共に妻敵討に出發したが、信州笛吹峠で蓑文太に謀られて死し、數右衞門も鹽谷家の浪人粟野十郎左衞門が、途中賊のために名刀を奪はれたこゝに泉州堺の十郎左衞門の浪宅では妻沖津が夫を案じて病となつたので、孝子長吉は水垢離を取つて平癒を祈り、井中から亂巾の金魚を得て大金にかへた。然るに信濃に於ける十郎左衞門の所行が報ぜられると、沖津は先夫の娘小梅の夫梅野與四兵衞は數右衞門の子であるから小梅と長吉は仇同士となつたと語り自殺した。一方浦右衞門の弟瀧次郎は玉骨の刀と氷裂の鏡を貞行から與へられ、僕油助を從へて仇討に出發し、武藏芝崎村與四兵衞方に到つて變を告げたが、與四兵衞が足痛に惱んでゐるので、彼を殘して出立した。さて蓑文太等は越後衞菊峠に隱れ住んで惡事を働き、棧は奇病に罹つて金魚の狀を呈し、癒えて後も醜婦となつた。やがて蓑文太は羽州男鹿山の兇賊蛇丸の山寨を陷れて賊主となつた。後を追うて來た棧は此處に殺され、その首は焰を吐いて中空に飛び去つた。その後與四兵衞は偶々研屋琥助方に藤四郎の名刀を見てこれを得んと金策に出かけた留守中、長吉は巡禮姿で小梅を訪ねて來るが、小梅は名告らずに歸し、入れ違ひに與四兵衞が歸宅して金の調はぬを嘆いてゐると、其處へ行者姿の十郎左衞門が來て、藻の花の兄であること、蓑文太と誤つて數右衞門を殺したことを語つて屠腹した。與四兵衞は首を刎ぬるに忍びず、その笈を刺すと意外にも笈の中には長吉がゐて、母の死から父母のために與四兵衞の手に死なんと決心した由を告げ、五十兩の金を出した。小梅はその金で刀を買取つて來たが、それは贋物であつた。（後篇梗概の豫告—棧の靈蓑文太に報ふ事、小梅出產、玉骨・氷裂二寶器の靈驗、與四兵衞夫婦の出世、數御前小梅村梅遲の由來）。

【解說】作者自ら識すところの述意に、浮瑠璃・歌舞伎から飜案し、支那小說の說話を混合して新たに作り設けたとある。梅野與四兵衞が長吉殺しの話は、元祿年間の事實で、「新著聞集」にも見え、また西澤一鳳の「傳奇作書」にも出てゐる。胡椒頭巾の强盜として知られた與四兵衞が、天王寺屋の小僧長吉を殺して百兩の金を奪つた事件である。これは元文三年原田由良・並木宗輔が「茜染野中際井」（別項）といふ淨瑠璃に作り豐竹座で演じたが、この梅の由兵衞を忠義者とし、長吉をその妻小梅と姉弟の關係に改め、忠義のために長吉を殺すといふやうに作つた。又歌舞伎で有名な寬政八年並木五瓶作の「隅田春妓女容性」（別項）の由兵衞の話に、小梅・長吉の再會の一件が加はつてゐるが、それは明和五年に上演された近松半二等の「傾城阿波の鳴門」のお弓の話に由來するものであらう。京傳はこれ等の有名なものに脚色を藉り、お家騷動と妻敵討の話を交へて、善は榮え惡は亡びるの趣向を取つたのである。併し「江戸作者部類」に言つてゐるやうに當時評判がよくなかつたらしく、後篇は豫告されたのみで未完に終つた。文政九年二世楚滿人は、これを補綴して柳川重山の畫を挿み、「梅野與四兵衞物語後編梅花春水」（四卷）と題して出版してゐる。

【參考】近代小說史　藤岡作太郎　〔笹野〕

梅花無盡藏（ばいくわむじんざう）　漢詩文集　七卷【著者】萬里周九（一に集九に作る）【名稱】著者の號、梅花道人に據る（周ノ參照）。【諸本】續群書類從所收。【解說】この集は、應仁以後の製作にかゝるものが多く、殊に旅行の見

聞應酬等は五山文學の末期の輕滑眞率なる詩風を代表して居り、文藝として價値は少いが、作者の經歷交際等に依り、史料とせらるべきものが多い。一卷は七言絶句二百七十首、二卷は七言絶句二百八十首で、文明十七年九月、東遊して武藏に入る途中日課の作、同十八年十月、江戸より鎌倉に至る途中日課の作、長享元年十月、江戸にかへり、あくる二年九月に至る作を收む。三卷上は七言絶句三百三十首で、長享二年九月、武藏平澤を發し、越後府中に至る途中日課の作、同地方に滯留中の作、同年十一月、越後府中を發し、市場に至る途中日課の作、延德元年四月、越後を發して越中に入り、西歸途中の諸作、同二・三年、明應元・二・三年の作を收む。三卷下は七言絶句百八十四首で、明應三・四・五・六・七・八・九年、文龜元年の作を收む。四卷は頌百四十七首・雜體數十首。五卷は七言律詩・五言律詩・五言絶句等二百數十首。六・七卷は雜文數十篇を收めてゐる。

（鷲尾）

梅巖　心學者　【姓名】石田興長。通稱勘平【生歿】貞享二年九月十五日、丹波國桑田郡東縣村に生れ、延享元年（二四〇四）九月二十四日京都に歿す。享年六十。【墓所】京都鳥邊山【閱歷】父は淨心といひ、母は角氏であつたことだけが知られてゐる。二十三歲京に上つて、ある商家の徒弟となつたが、當時より既に思ひを神道に潛め、ついで禪學に入つて僧了雲の提撕を受けた。四十歲の頃、鄉里に母の病氣を看護してゐた時に、所用あつて扉を出ようとした瞬間に、忽然として頓悟し、更に上京後、日夜寢食を忘れて工夫すること一年餘にして大悟徹底し、己と天地とは同根にして、萬物は一體なるの理を會得した。四十二三歲にして主家を退き、享保十四年四十五歲の時、車屋町通御池上る所東側に住んでそこに講筵を開いた。これが我が國心學（別項）講釋の濫觴であつた。その時表の柱に出した書付にいふ、「何月何日開講、席錢入不申候。無緣にても御望の方々は、無遠慮御通り御聞可被下候」と。世上の評判はまちまちで、陰で嗤ひ、明らさまに譏る者もないではなかつたが、その至誠は次第に貫徹して、門弟子は年と共に多くなつた。元文三年五十四の歲に、門下の五六人と但馬の溫泉に浴したが、同五年の冬、不作のために京中貧困に陷る者多きを聞き、門人等を遣つて、實際を探らせた上、同年の暮より進んで米錢を施與して翌年に至つた。この事よりして梅巖を尊信する者は更に多きを加へ、京都以外に大阪へも赴き、河內國にも到つて講席を開いた。

石田梅巖（參前舍藏）

【人物】溫厚篤實にして慈悲心深く、敬虔の念が厚かつた。自ら奉ずること薄く、常に簡易な自炊の生活に甘んじて、一生妻帶せず、門下を敎導すること懇切丁寧を極め、一生を民衆の師として終つた。石門心學は、その祖梅巖の高潔なる人格によつてその基が開かれたのである（心學參照）。【著述】都鄙問答○齊家論○石田先生語錄（未刊）。

【參考】石田梅巖先生事蹟（心學叢書第六編の內）○梅巖と堵庵足立栗園（德川三百年史中卷の內）○平民の師石田梅巖　大川周明○石門心學の研究　白石正邦

（白石・森）

俳句　【名義】俳諧の句といふと同じで、それの縮約した語である。從つて元來は連句（狹義の俳諧）の句及び發句を通じて用ひた語である。發句のみを指してゐる用例も見られるが、それはその場合、さう用ひただけである。俳句の語は、既に寬文三年の定濟の「尾蠅集」に見え、天和三年の惟中の「あまの子のすさび」、同年の其角の「虛栗」（別項）に見え、降つては完來に「俳諧一串抄」（別項）は專らこの語を用ひて居り、江戸時代を通じて常に見られる用語ではあるが、一般的用語といふ程のものにはならなかつた。然るに明治に至つて、子規が日本派（別項）を起して、この語を專ら發句のみを意味する語として使ふやうになつてから、爾來一般的用語となり、發句といふ語は漸く用ひられざるに至つた。【性質】普通には五音・七音・五音の三句十七音の律格の短詩と說明されてゐる。然るに俳句は、源流たる連歌の發句以來、形式上の斷切と內容上の斷切と一致しないものもあるので、形式律・內容律の如く分つて說明するのが便利である。形式律は五・七・五の十七音が基本律で、これに所謂字餘りも字足らずもある。そして形式律では、全句上斷切のあるものとないものとがあつて、斷切のあるものは、普通には初句の末か中句の末かにあつて、これが句切れと云はれ、この句切れに切字（別項）のある時とない時とがある。然るに形式上でも、句切れが初句末乃至中句末にある事とがあつて、これを普通中間切れと云ふのである。これは形式律から云へば破格のものと云ひ得る。併しこの場合でも五・七・五音の三句の音感は感じ得るのであるから、破格は句法或は句切れ上の變化であつて、五・七・五音の音感律は、依然基本律として動かないと云へる。內容律では、形式上の句切れの所に內容上の斷切がある事とない事とがあつて、形式上、初句末乃至中句末に句切れのある場合、そこが內容上でも斷切になることが多いけれども、さうでない場合があり、形式上中間切れの場合は、內容上でも斷切になるのが普通である。例へば「鶏頭や松に並びの淸閑寺」（其角）、「凩の箱根に澄むや伊豆の海」（太祇）の如きは、形式上では初句末や中句末が句切れになつてゐるが、內容上では「鶏頭や松に並びの」や「凩の箱根に」に斷切があつて、形式上の句切れとは一致しない。併し「唐崎の松は花より朧にて」（芭蕉）、「一行の雁や端山に月を印す」（蕪村）の如き中間切れの場合は、內容上の斷切も、これに一致してゐるのが普通である。俳句は最短形式の短詩としての自然の發展上、想の飛躍單純化と表現の省略緊縮が行はれ、句切れ・切字に特殊の發達の見られると共に、俳句獨特の形態を具へるに至つた。それと共に、俳句には連歌の發句以來當季を結ぶべき慣例が起り、從つて季題（別項）の研究も起つたのであるが、俳句時代に入つても、早くは俳諧連歌の系統の儘俳句も滑稽味のものであつたのを、芭蕉に至つて革新され、眞面目な詩的な俳句となると共に、季の俳句に對する關係も、作句に對して必然性を持つものとなつて、全句の中核となるものとなり、ここに

又俳句の本質の基底をなすものとなり來つてゐる。季の入らぬ句は雜の句と云はれ、除外例のものとされた。近來以上の制約を離れた俳句が起つたが、その或る派では詩と云つてゐる。

【沿革】發句は元來長連歌の第一句であるので、それが獨立しても詠まれるものとなつた時期はいつかが問題となる。發句の獨立は俳諧時代に入つてのことと認められ、宗鑑の「犬筑波」（別項）の時代には獨立してゐたと認め得る。故に嚴格な意味に於ける俳句はこゝを先頭として考へ得るのであるが、併し連句（狹義の俳諧）の發句も、獨立の俳句と本質に於て異ならぬから同樣に取扱はれて居り、また「犬筑波」以前の俳諧連歌の發句も、同樣の意味に於て俳句と認め得るから、これも俳句として取た事とが特色である。從つて用語も自由に、又甚しい字餘りをも敢へてした。

松に藤淸木にのぼるけしきあり　宗因
必ず友あり初陽うるほふ今この春　同
鯛は花は見ぬ里もあり今日の月　西鶴
みつがしら鶯なくなりくわ！〳〵
くわい！〳〵　同

內容的になり來つた談林には、

菜の花や一本咲きし松のもと　宗因

の如き句がやゝ見られ、談林一體としてもこの種の句が見られるやうになり、愈々次の蕉風（別項）への道程を進め來つた。かくなり來つたのは既に時代でもあつたので、芭蕉よりは先輩又は同輩に當る貞門乃至談林の系統の人々の中に、蕉風式な傾向を取る人々が現はれた。貞門系統の信德・素堂・鬼貫・言水、談林系統の一鐵・來山などがそれである。時に鬼化鳥風（別項）と對峙したが、淺德からはその門人沾洲の比喩體（別項）が生じた。これ等は各々その個性によつて蕉風を變改し荒頽せしめたもので、その俳句もさうしたものであり、以後の俳風、俳句をして益々荒頽に歸せしめたものである。一方風雪の雪門、杉風の一門（後の採茶庵派）、桃隣の一門（後の太白堂派）、それに許六の所謂彥根體等があり、傍ら素堂の葛飾派（別項）があつて、後の採茶庵派では、素堂・嵐雪・杉風・桃隣の四人を江戸の四大家と併稱したやうに、これ等のものは穩健な俳風であつたけれども、而も自然の低下を進めるのみであつた。

日の本の風呂吹といへ比叡山　其角
餅喰はぬ旅人はなし桃の花　支考
芦の葉のさらば〳〵や九月盡　涼菟

のような事來ると共に、そこから自然的に發展の兆も生じて來た。其角・嵐雪門たる巴人門の蕪村、雪門三世の夢太、伊勢派の麥水・闌更・二柳・樗良・白雄、美濃派の曉臺・靑藍等は、復興更新の雄なる人々で、これ等の人々は、大體芭蕉晩期の閑寂枯淡な俳調よりも芭蕉草期の壯麗な俳調を目標として、安永・天明の復興俳壇の中堅となつたのである。

時鳥平安城をすぢかひに　蕪村
五月雨や或夜ひそかに松の月　夢太
行く秋や蹴ぬけの塔を散る木の葉　麥水
枯芦の日に〳〵折れて流れけり　闌更
わりなしや海苔に纏はるうつせ貝　二柳
我が庵は榎ばかりの落葉哉　樗良
夕汐や柳がくれに魚わかつ　白雄
曉や鯨の吼ゆる霜の海　曉臺
風の蝶消えては麥にあらはるゝ　靑藍

氏であつたことだけが知られてゐる。二十三歳京に上つて、ある商家の徒弟となつたが、當時より既に思ひを神道に潜め、ついで禪學に入つて僧了雲の提撕を受けた。四十歳の頃、郷里に母の病氣を看護してゐた時に、所用あつて扉を出ようとした瞬間に、忽然として頓悟し、更に上京後、日夜寢食を忘れて工夫すること一年餘にして、萬物は一體なるの理を會得し

へも赴き、河内國にも到つて講席を開いた。

【人物】溫厚篤實にして慈悲心深く、敬虔の念が厚かつた。自ら奉ずること薄く、常に簡易な自炊の生活に甘んじて、一生妻帶せず、門下を敎導すること懇切丁寧を極め、一生を民衆の師として終つた。石門心學は、その祖梅巖の高潔なる人格によつてその基が開かれたのである（心學參照）。【著述】都鄙問答○齊家論○石門心學奇談○等がある。

容律の如く分つて說明するのが便利である。形式律は五・七・五の十七音が基本律で、これに所謂字餘りも字足らずもある。そして形式律では、全句上斷切のあるものとないものとがあつて、斷切のあるものは、普通には初句の末か中句の末かにあつて、これが句切れと云はれ、この句切れに切字（別項）のある時とない時とがある。然るに形式上でも、句切れが初句の中間にはなく、全句の中間にある

それと共に、俳句には連歌の發句以來當季を結ぶべき慣例が起り、從つて季題（別項）の研究も起つたのであるが、俳句時代に入つても、早くは俳諧連歌の系統の儘俳句も滑稽味のものであると共に、季を結ぶことも依然慣例的であつたのを、芭蕉に至つて革新され、眞面目な詩的な俳句となると共に、季の俳句に對する關係も、作句に對して必然性を持つものとなつて全句の中堅をなすものとなり、それが

はいく

又俳句の本質の基底をなすものとなり來つてゐる。季の入らぬ句は雜の句と云はれ、除外例のものとされた。近來以上の制約を離れた俳句が起つたが、その或る派では詩と云つてゐる。

【沿革】發句は元來長連歌の第一句であるので、それが獨立しても詠まれるものとなつた時期はいつかが問題となる。發句の獨立は俳諧時代に入つてのことと認められ、宗鑑の「犬筑波」（別項）の時代には獨立してゐたと認め得る。故に嚴格な意味に於ける俳句はこゝを先頭として考へ得るのであるが、併し連句（狹義の俳諧）の發句も、獨立の俳句と本質に於て異ならぬから同樣に取扱はれて居り、また「犬筑波」以前の俳諧連歌の發句も、同樣の意味に於て俳句と認め得るから、これも俳句として取扱はれ來つてゐる。

【貞門以前・貞門】室町後期の宗鑑・守武（各別項）の俳句及び江戸期に入つて貞德が中興し、寬文頃を大成期とした貞門（別項）の俳句は、言語上の滑稽を主とした點に於て、大體同樣の作風のものであつた。

まん丸に出でゝも永き春日哉　宗鑑
飛梅やかろ〳〵しくも神の春　守武
しをるゝは何かあんずの花の色　貞德

貞門には、例へば後の蕉風で貴ばれた句の、

これは〳〵こぼかり花の吉野山　貞室

の如き類のものもないではなかつたが、これ等は頗る稀なものであつた。併し又俳句の更新さるべき道程に立つものでもあつた。

【談林】貞門の反動として宗因によつて開かれ、延寶頃を大成期とした談林（別項）の俳句は、同じく滑稽のものではあつたが、その滑稽がやゝ內容的になつた事と斬新奇拔を覗つた事とが特色である。從つて用語も自由に、又甚しい字餘りをも敢へてした。

松に藤咲木にのぼるけしきあり　宗因
必ず友あり初陽うるほふ今この春　同
鯛は花は見ぬ里もあり今日の月　西鶴
みつがしら鶯なくなりくわ！〳〵　同

內容的になり來つた談林には、

菜の花や一本咲きし松のもと　宗因

の如き句がやゝ見られ、談林一體としてもこの種の句が見られるやうになり、愈々次の蕉風（別項）への道程を進め來つた。かくなり來つたのは既に時代でもあつたので、芭蕉よりは先輩又は同輩に當る貞門乃至談林の系統の人々の中に、蕉風式な傾向を取る人々が現はれた。貞門系統の信德・素堂・鬼貫・言水、談林系統の才麿・來山などがそれである。特に鬼貫は伊丹風（別項）を確立した人として注意される。當時又仙臺に三千風がゐたが、これは怪奇な文字を弄する險怪な談林風であつた。

【蕉風・蕉風荒類】貞門・談林を經た芭蕉は、獨り能く眞に俳句の革新に成功し、滑稽を擺脫した幽玄閑寂の蕉風（別項）を開き、元祿頃をその大成期たらしめた。

古池や蛙飛び込む水の音　芭蕉

の句は、その眞の開眼の句であると共に、蕉風として又俳句として芭蕉の所謂不易の句である。芭蕉の門人は所謂蕉門十哲（別項）を初め多士濟々であつたが、芭蕉の歿後は高弟が分裂し、その個性の俳風を進める者もあつた。其角の洒落風、支考の美濃風、凉菟・乙由の伊勢風（各別項）の如きがそれであり、洒落風は露沾門の沾德に繼がれた傍ら、門人湖十の浮世風や淡々の浪花振となり、不卜門の不角の化鳥風（別項）と對峙したが、沾德からはその門人沾洲の比喩證（別項）が生じた。これ等は各々その個性によつて蕉風を變改し荒類せしめたもので、その俳句もさうしたものであり、以後の俳風、俳句をして益々荒類に歸せしめたものである。一方嵐雪の雪門、杉風の一門（後の採茶庵派）、桃隣の一門（後の太白堂派）、それに許六の所謂彦根體等があり、傍ら素堂の葛飾派（別項）があつて、後の採茶庵派では、素堂・嵐雪・杉風・桃隣の四人を江戶の四大家と併稱したやうに、これ等のものは穩健な俳風であつたけれども、而も自然の低下を進めるのみであつた。

日の本の風呂吹といへ比叡山　其角
餅喰はぬ旅人はなし桃の花　支考
芦の葉のさらは〳〵や九月盡　凉菟
浮草や今朝はあちらの岸に咲く　乙由
ついこけて寢よとの鐘や花の蔭　沾德
梅折れはおのれも動く月夜哉　湖十
朝霜や笠で書きし不二の山　淡々
六月の晦日家越のはらひ哉　不角
初雪や芦葉のうへの眼玉　沾洲

享保頃は其角系統が愈々點取俳諧となり、跋扈を極めたので、杉風門の宗瑞・蓮之、雪門の卑尺、葛飾派の素丸、沾德門ながら點取俳諧を屑しとしなかつた長水の五人が、其角門ながら人格者であつた隱者俳人祇空を後見として、反抗的廓淸運動の「五色墨」（別項）を試みたのであつたが、併し大勢を動かす效果を擧げ得なかつたのは、一は作の力の伴はないためであつた。

【天明復興・荒類】俳壇全般のうち、或は奇怪な調を弄し、或は平俗に流れた諸派が、漸く活氣を失つて歩み寄り、一律に卑近な調のものとなり來ると共に、そこから民衆的に俚俗の糸も生じて來た。其角・嵐雪門たる巴人門の蕪村、雪門三世の蓼太、伊勢派の麥水・闌更・二柳・樗良・白雄、美濃派の曉臺・靑藍等は、復興更新の雄なる人々で、これ等の人々は、大體芭蕉晩期の閑寂枯淡な俳調よりも芭蕉草期の壯麗な俳調を目標として、安永・天明の復興俳壇の中堅となつたのである。

時鳥平安城をすぢかひに　蕪村
五月雨や或夜ひそかに松の月　蓼太
行く秋や踰ぬけの塔を散る木の葉　麥水
枯芦の日に〳〵折れて流れけり　闌更
わりなしや海苔に纏はるうつせ貝　二柳
我が庵は榎ばかりの落葉哉　樗良
夕汐や柳がくれに魚わかつ　白雄
曉や鯨の吼ゆる霜の海　曉臺
風の蝶消えては麥にあらはるゝ　靑藍

以上の復興諸傑にはそれ〴〵優秀な門人があつて、中には師に劣らない人があり、その他にもこれに化せられた優秀な人々があつて、寬政から文化・文政に亙つては、なほ能く前代の俳風を繼承し得てゐる。謂はゆる寬政三大家・奥羽四天王（各別項）と呼ばれる人々は、當時の俳壇に於ける巨匠であつた。又この時、一種特別な存在の一茶も現はれた。併しその守成は活力に乏しく、その間に自然荒類低下の傾向も孕まれてゐた。かくて天保に至つては、所謂天保四老人（別項）と稱せられる梅室・蒼虬・鳳朗・卓池の如き、頗る聲望があつたが、俳句そのものは低劣俗化の極に達し、かゝる情勢のまゝで明治時代に入つたのである。

萩の花一本折れは皆動く　梅室
百合切つて並べて置くや草の上　蒼虬
名月の雨さへたぐひなかりけり　鳳朗
鉢叩夜毎聞くほど老いにけり　卓池

〔日本派〕天保以來の俗俳を承けた明治の俳壇は、なほ暫くその儘の低迷を續けたが、同二十年以後に至り、子規の日本派の興起によつて俳句は再び詩の本道に歸した。然るに子規歿後同四十年頃から所謂新傾向（別項）が生じて、これと在來の日本派との分裂對立となり、新傾向が更に復古派と前進派とに分れ、前進派が更に分裂展開して今日に至つてゐる。

【研究史】俳句は獨立の文學ではあるものの、一方では連句の第一句でもある關係上、明治以前に於ては、俳句に關する獨立の研究は、註釋方面に比較的多くを見た位で（且つそれは殆ど芭蕉及び蕉門のものであつた）、その他の方面は、連句と合併された形で見られるのが普通で、俳句の各方面を包括しての獨立の研究は殆ど明治以後に屬するのである。これは子規の日本派が俳句のみに重きを置くに至つたからである。季題（別項）の研究は、季寄（別項）として、連歌以來頗る多く見られるものであるが、季題は俳句に最も重要な關係を持つものではあるけれども、また連句全體としても關係を持つもので、季題の研究は俳句のためのみの意味のものではなかつた。これが俳句のためのみのものの如く意識されるに至つたのは、日本派以來特に日本派系統の新派俳人に於てである。切字（別項）の研究も、切字は俳句に於てその形態上特に重要な意義を持つもので、切字の研究として類書を壓する無腸の「也哉抄」（別項）は、殆ど俳句の切字の研究になつてゐる位であるが、而も切字は連句全體としても關係を持つので、切字の研究としても俳句のみに關する意味のものではなかつた。作法に於て、藤太に「俳諧發句小鑑」があつて、これは俳句のみの獨立した作法書ではあるが、而も「俳諧附合小鑑」及び「手爾波の小鑑」との三部作の一として企圖されたものである點に於て、純然たる獨立性を持つものとは云ひ難いのである。俳句の歷史の研究も大體俳諧の史的研究が乏しかつたので、なほ更、俳句のみの史的研究はなく、俳句の歷史の獨立した研究は、明治の日本派俳人たる紅綠の「俳句小史」（別項）が最初のものであらう。俳論（別項）にあつても同樣で、俳句の本質が考慮されてゐても、それは連句と併せての形に於てであり、のみならず俳句と連句（別項）との根本的な本質的相異は、劃然と意識されてゐなかつたと云つてよいのである。俳論に於ては、主張が同時に研究とも認められると思ふが、貞德が俳言（俗語漢語）を以て俳諧を規定し、談林の宗因、特に惟中が寓言を以て俳諧を規定した如きも、俳諧一般としてであつて俳句のみのことではなく、芭蕉が俳諧を風雅の道とし、「造化に從ひて四時を友とす」るものと云ひ（笈の小文）、俗談平話を正すものと云ふ意味のことを云つてゐるのも（山中問答）、やはり俳諧一般としてであつたのであるが、而も造化に從つて四時を友とすることが眞に本質的に適合するのは俳句であるので、この點から云つて、芭蕉もなほ俳句と連句との劃然たる本質的相異を意識してゐなかつたと云へるのである。かくて江戸時代に於ては、俳句と連句との本質的相異は遂に意識されるに至らず、俳句の本質は明治の子規以來特に乙字（別項）に至つて、眞に明らめられたと云つてよい（乙字俳論集）。江戸時代の俳論中、支考が俳句の形態を二句一章と見たことは（俳諧古今抄・白馬集發解）、注意すべき見方で、乙字はこれを俳句の內容律と見たのであるが、凡ての俳句をかく見ることには疑問があり、それと共に、發句に三段切もあるとする連歌以來の見方が、俳句に於ても江戸時代・明治時代を通じて是認されてゐたのであるが、その間にあつて獨り「俳諧一串抄」（別項）が、所謂三段切を切れ一箇所と見る說を出してゐることは注意すべきである。明治末新傾向發生以來、この方面に於ける俳句の見方は、その作の異なつて行つた如く異なつてゐる。（俳諧・發句參照）

【參考】俳諧七部集 ○俳諧大要 正岡子規 ○獺祭書屋俳話同上 ○俳諧美學 中川四明 ○俳句の研究 籾山江戸庵編 ○明治の俳風 中村樂天 ○觸背美學 中川四明（新俳諧美學） ○三句索引 俳句大觀 佐々政一 ○俳句提唱 荻原井泉水 ○碧梧桐は斯ういふ 河東碧梧桐 ○我等の句境 中塚一碧樓編 ○乙字俳論集 大須賀乙字 ○分類俳句全集 正岡子規 ○現代俳句 志田義秀（岩波講座日本文學） ○俳文學の考察 志田義秀 ○俳句文法六十講 松本仁 ○明治大正俳句史 井手逸郎 ○俳句文法服部畊石 ○俳句講座（改造社版） 〔志田〕

俳句小史 はいくしょうし　文學史　【著者】佐藤紅綠　【刊行】明治三十五年三月、內外出版協會　【內容】先づ俳諧から發句即ち俳句の獨立したる所以より說き起して、第一期、守武と芭蕉もなほ俳句と連句との劃然たる本質的相異を意識してゐなかつたと云へるのである。かくて江戸時代に於ては、俳句と連句との本質的相異は遂に意識されるに至らず、俳句の本質は明治の子規以來特に乙字（別項）に至つて、眞に明らめられたと云つてよい（乙字俳論集）。江戸時代の俳論中、支考が俳句の形態を二句一章と見たことは（俳諧古今抄・白馬集發解）、注意すべき見方で、乙字はこれを俳句の內容律と見たのであるが、凡ての俳句をかく見ることとは、宗鑑、貞德時代、宗因時代。第二期、芭蕉時代と芭蕉の死後。第三期、蕪村時代と享和文化時代。第四期、天保時代に分ち、句例を主として、要領を簡明に說いてある。【批評】俳諧連句と引き離して、俳句のみに照光を向けた事と、徒らに史的事實の列記ではなくて、批判の眼を以て論評的に見た點が、他の俳諧史と異る本書の特色であつて、それも作者が史的考證家でなくて、文學者であり俳人だからである。

俳句大觀 はいくたいかん　索引　一册　【編者】佐々政一　【本稱】三句索引俳句大觀　【刊行】大正五年十月、明治書院　【內容】明治以前の最も著名な俳句を五十音順によつて排列したもので、三部に分ち、第一部では初句によつて、第二部では中句によつて、第三部では末句によつて排列してあつて、初・中・末どの一句からでも索出し得るやうにしたものである。句の下には作者と出典とが記してある。採收の俳句は一萬二千餘句で、その出典としては、俳諧七部集・俳諧古選・俳諧新選・風俗文選・蕪村句集・鬼貫句選・太祇句集・一茶句集・鶉衣・俳家奇人談・續俳家奇人談・芭蕉一代集その他を取つてあつて、國定教科書中に現はれる句の如き廣く現代人の耳目に觸れるものを採錄したのである。【價値】本書の選んだ出典は、多くは通俗に知られてゐる俳書を選んだのであるから、さうした意味の出典であつて、その句の載せられた第一原本を知るには別に檢討せねばならぬのであるが、兎に角或る出典を知り得る點に於て便利である。又編者自らも云ふ如く、漢字の讀み方に疑義があつて五十音の何れに配當すべきかに惑はされるものがあり、又字餘りの句の斷續の判定に苦しまれるものや中間切れの句の如き三句に分割し難いやうなものがあるのであるが、これ等の句は編者の信ずる所によつて配當してある。實際から云ふと、例へば「夜興の狸錢にしてこれに化けたと笑ひけり」の「錢にして」は、初句中のものとすべきか、中句中のものとすべきか、又全句を中間切れのものと見做すべきかに問題が起るが、編者はこれを中句中のものと見做し、三句に分割して配當してゐる。この句は、實は「夜興の狸錢にしてこれに化けたと笑ひけり」との二句から成る中間切れの句と見るべきものかと思はれるが、とにかく本書は檢出の便宜を主としたものであるから、凡ての俳句を三句に分割することは已むを得ない所であらう。　〔荻原・志田〕

俳句入門 はいくにふもん　一册　【著者】高濱虛子　【刊行】明治三十一年四月、內外出版協會。【解說】全篇を、第一篇總論（俳句とは何ぞや、俳句の形式・內容・價値その他）、第二篇俳句を解すること、第三篇俳句を作ること（第一章寫生、第二章題詠、第三章進歩）、第四篇季、第五篇切字、第六篇動く動かぬといふこと、第七篇たるむたるまぬといふこと、第八篇俳句雜話に分つてある。その所說は、大體子規の說を敷衍して平易に俳句の作法を說いたもので、子規の「俳諧大要」（別項）もまだ出版されない

れに化けたと笑ひけり」との二句から成る中間切れの句と見るべきものかと思はれるが、とにかく本書は檢出の便宜を主としたものであるから、凡ての俳句を三句に分割することは已むを得ない所であらう。　〔荻原・志田〕

俳句入門 はいくにふもん　一册　【著者】高濱虛子　【刊行】明治三十一年四月、內外出版協會。【解說】全篇を、第一篇總論（俳句とは何ぞや、俳句の形式・內容・價値その他）、第二篇俳句を解すること、第三篇俳句を作ること（第一章寫生、第二章題詠、第三章進歩）、第四篇季、第五篇切字、第六篇動く動かぬといふこと、第七篇たるむたるまぬといふこと、第八篇俳句雜話に分つてある。その所說は、大體子規の說を敷衍して平易に俳句の作法を說いたもので、子規の「俳諧大要」（別項）もまだ出版されない

の苦心談、第五篇は俳評で、主として俳書並に俳論に對する批評である。以上の五篇は、量に於ても質に於ても、當時の俳句研究書として優れたものである。執筆者は正岡子規を初め、內藤鳴雪・高濱虛子・河東碧梧桐等である。【增補第三版には、第六篇として子規の「俳人太祇」等を加へ、卷頭には諸家の筆蹟を揭げてある。】　〔石井〕

誹語堀之內詣 はいごほりのうちまうで　滑稽本　二册　【作者】十返舍一九　【名義】誹語をハイゴと訓ましめたのは俳語、卽ち滑稽の意味を持たしめたもので、滑稽堀之內詣の謂ひである。【刊行】文化十三年　【諸本】續一九全集（帝國文庫）・滕栗毛全集（文藝叢書）所收。【題材】堀之內妙法寺參詣の途中に於ける見聞を描き、世の種々相を寫したものである。

關係上、外面的寫實となり、三場の作品と似た所も認められる。かうした筆致にも一九獨特のうまさがある。　〔小柴〕

【參考】輪講誹語堀之內詣（彗星四ノ六）

俳懺悔 はいざんげ　俳話　二册　【著者】安井舊國（大伴大江丸）　【名義】卷頭の著者の俳諧懺悔文及び卷末の圓通蒙光の附言によると、著者は浪速の作者の一人として相當自負してゐたが、一年陸前松島に遊んで苦吟するも遂に句を得ず、興に乘じて心頭に浮ぶものを書き附けて見ると、偶然にも大島蓼太の舊作であつた。而もその句は自家の及ぶ所でないと知つた。乃ち過去の自負を恥ぢ、江戸に至つて蓼太に師弟の禮を執つたといふ。書名は著者のこの懺悔に由來するのである。【成立】寬政二年十月【刊行】寬政二年十一月【諸本】

俳人等に關する逸話・逸話をも錄してゐて、色彩頗る多樣である。著者の作句はこれ等俳話の隨所に四季に分つて配置してある。著者自身の數へるところに從ふと、その俳話は百三十許、發句は千餘に及んでゐる。本書は發句の季に從つて、春夏及び秋冬の二册に分つたのである。　〔名務〕

梅室 ばいしつ　俳人　【姓名】氏は橘、姓は櫻井、幼名は次郎作、名乘は能充　【俳號】初め雪雄、のち素芯、又素信と改め、別に梅室と號し、遂に梅室を通稱とした。また方圓齋・陸々道人の別號があり、その時、その所によつて遲速庵・餘花園・寒松庵・相應軒などの號を用ひた。【生歿】明和六年十一月二十六日、加賀國金澤升形に生れ、嘉永五年（二五二）十月朔日京東洞院佛光寺北の草庵に歿した。享年八十

れに化けたと笑ひけり」との二句から成る中間切れの句と見るべきものかと思はれるが、とにかく本書は檢出の便宜を主としたものであるから、凡ての俳句を三句に分割することは已むを得ない所であらう。〔荻原・志田〕

俳句入門（はいくにふもん）　一册　【著者】高濱虛子　【刊行】明治三十一年四月、内外出版協會。【解説】全篇を、第一篇總論（俳句とは何ぞや、俳句の形式・内容・價値その他）、第二篇俳句を解すること、第三篇俳句を作ること（第一章寫生、第二章題詠、第三章進歩）、第四篇季、第五篇切字、第六篇動く動かぬといふこと、第七篇たるむたるまぬといふこと、第八篇俳句雜話に分つてある。その所説は、大體子規の説を敷衍して平易に俳句の作法を説いたもので、子規の「俳諧大要」（別項）もまだ出版されない時であつたので、當時新興の機運に向つてゐた日本派に入らうとする初心者には、益せられる所の多かつたものである。兎に角出版年代から云へば、新派俳人の手に成る入門書として刊行された最初のものである。第八篇の俳句雜話は、明治二十九・三十年に新聞雜誌に掲載したものを集めたもので、斷想的な俳論俳話である。〔志田〕

俳句の研究（はいくのけんきう）　俳論　【刊行】明治四十年七月、俳書堂。【解説】明治三十一年十月から同三十八年七月に至る約七年間に亙り、雜誌「ホトトギス」誌上に載せられた俳句に關する研究その他を集めたもので、第一篇は俳句總論で、一般に俳句といふものに就いての概論的研究、第二篇は俳句の作りやうに就いての研究並に俳句の選評、第三篇は一家の俳風に就いての研究並に古俳家に就いての考證的研究、第四篇は俳論俳話並に句作上の苦心談、第五篇は俳評で、主として俳書並に俳論に對する批評である。以上の五篇は、量に於ても質に於ても、當時の俳句研究書として優れたものである。執筆者は正岡子規を初め、内藤鳴雪・高濱虛子・河東碧梧桐等である。增補第三版には、第六篇として子規の「俳人太祇」等を加へ、卷頭には諸家の筆蹟を掲げてある。〔石井〕

誹語堀之内詣（はいごほりのうちまうで）　滑稽本　二册　【作者】十返舍一九　【名義】誹語をハイゴと訓ましめたのは俳語、即ち滑稽の意味を持たしめたもので、滑稽堀之内詣の謂ひである。【刊行】文化十三年　【諸本】續一九全集（帝國文庫）・膝栗毛全集（文藝叢書）所收。【題材】堀之内妙法寺參詣の途中に於ける見聞を描き、世の種々相を寫したものである。【梗概】「膝栗毛」の彌次郎兵衞と同じ長屋に住む佐次兵衞が、神田八丁堀から麹町に出で、四谷を經て、内藤新宿から堀之内妙法寺へ參詣に行く。途中、茶屋に休んでは客の動作に目をつけ、或は往來する者の會話に耳を傾け、又は往來の出來事に興を催す。町人を誤魔化して酒を飲む侍もあれば、利いた風な色男が借金に悲鳴を擧げてゐるもの、夫の惡口を語り歩く老婆連、馬糞の一件で喧嘩するものなど、いろ〳〵の事を目擊して參拜を終る。【構想】作者も附言に、「膝栗毛」の糟粕と自ら述べてゐるが、それは事實である。併し從來の彼の作と異つてゐる點は、佐次兵衞が影武者であり、傍觀者であるに過ぎぬ所にある。「膝栗毛」から彌次・喜多を拔いたやうな作品とも見られる。故に事件と主人公との間には何の因果關係もない。それで滑稽の要素は外部の事件に置かれてある。事件に重きを置く關係上、外面的寫實となり、三馬の作品と似た所も認められる。かうした筆致にも一九獨特のうまさがある。

【參考】輪講誹語堀之内詣（彗星四ノ六）〔小柴〕

俳懺悔（はいざんげ）　俳話　二册　【著者】安井舊國（大伴大江丸）　【名義】卷頭の著者の俳諧懺悔文及び卷末の圓通蒙光の附言によると、著者は浪速の作者の一人として相當自負してゐたが、一年陸前松島に遊んで苦吟するも遂に句を得ず、興に乘じて心頭に浮ぶものを書き附けて見ると、偶然にも大島蓼太の舊作であつた。而もその句は自家の及ぶ所でないと知つた。乃ち過去の自負を恥ぢ、江戸に至つて蓼太に師弟の禮を執つたといふ。書名は著者のこの懺悔に由來するのである。【成立】寛政二年十月　【刊行】寛政二年十一月　【諸本】一茶大江丸全集（俳諧文庫）・中興俳話文集（俳書大系）所收。【由來】著者が俳諧懺悔文を認めた日附は明和七年十月十二日である。上總大多喜藩主葆光齋天府は、請によつて序を書いたが、その日附は安永二年初冬である。これで見ると安永の初め頃にはほぼ腹案が出來てゐたらしいが、完成したのは梓行の年の十月で、上島鬼貫の「獨言」（別項）の卷末にある俳文「祝」の一章を跋に代へ、同年中冬朔附の蒙光の附言を得て板下を自書し、十一月自費を以て板行したのである。【解説】著者の俳話と發句とを集めたものである。著者は活々坊舊室・松木淡々・白井鳥酔・勃々庵良能・大島蓼太・與謝蕪村その他多數の各流派の名家に、或は師事し、或は交りを結び、或は先達と仰いで來た人であるから、その見聞は多方面に亙つてゐたのである。俳話はそれ等各方面の人々から承けた直指見聞等を初め、連歌師・古俳人等に關する逸話・逸話をも錄してゐて、色彩頗る多樣である。著者の作句はこれ等俳話の隨所に四季に分つて配置してある。著者自身の數へるところに從ふと、その俳話は百三十許、發句は千餘に及んでゐる。本書は發句の季に從つて、春夏及び秋冬の二册に分つたのである。〔名務〕

梅室（ばいしつ）　俳人　【姓名】氏は橘、姓は櫻井、幼名は次郎作、名乘は能充　【俳號】初め雪雄、のち素芯、又素信と改め、別に梅室と號し、遂に梅室を通稱とした。また方圓齋・陸々道人の別號があり、その時、その所によつて遲速庵・餘花園・寒松庵・相應軒などの號を用ひた。【生歿】明和六年十一月二十六日、加賀國金澤升形に生れ、嘉永五年（二五二二）十月朔日京東洞院佛光寺北の草庵に歿した。享年八十四　【法名】方圓院梅室日賓居士　【墓所】京寺町廣小路北本禪寺　【俳系】闌更門　【閲歴】加州侯の刀劍研師櫻井新九郎を父（母は中村氏）として生れた。十六歳俳諧に入り、初めは槐庵馬來に學び、後、闌更に就いた。文化元年病氣の故を以て、研師の職をその弟子に繼がせて隱居し、槐庵雪雄と號して專ら俳諧に遊んだが、同四年京に出で、梅室と稱して俳壇に馳驅し、妻子を金澤から呼び寄せたが、同十一年七月二日その妻は歿し、越えて六年その子は江州土山の常明寺で出家した。上京以後の十二三年間は、京を中心として江州へも吉野へも、又天の橋立などへも遊び、又京へ來た對竹（鳳朗）・久減・道彦・孤山（大梅）等と連句を闘はし、「四時行」などの小刷物をも出した。文政三年春大阪へ移り、中國に遊び、同五年抱儀の招きによつて江戸へ下るに當り、門人十丈・五錐・布雪と共に、東行餞別四歌仙を賦した。

不明である。

【參考】梅室翁紀年錄（山本春秋編）

俳書集覽　いはいしふらんそはんしよ　叢書　六册

伊藤松宇・角田竹冷【刊行】大正十五年から昭和四年に至る。十二卷刊行する豫定であつたのを六卷で中止した。【内容】松宇文庫・竹冷文庫所藏の俳書の中から珍書を選擇して同刊行當からとして覆刻したもので、「すべて版本の正しきに依り、一切寫本には依らず、原本に最も忠實な覆刻で、原書の面目を存するやうに努めてゐる。底本の題簽や卷頭を寫眞版として揭げて原本の俤を傳へ、第一卷の「百人一句」や第六卷の「我身鉢」の如きは、全部を凸版として收めてある。選ばれてゐる書は元祿を中心としてその前後に亙るもので、大體次の如きものである。【蔵原】

（第一卷）百人一句（重以）○望一千句（望一）○飛梅千句（西鶴）○寶誓講引付（其角）（第二卷）望一後千句（望一）○桃青門弟獨吟二十歌仙○東日記（言水）○歌仙ぞろへ（元隆）（第三卷）はすのみ（實子）○誹諧當世男（順水）○姿かな（寢舟）○已が光（車庸）○我庵（泥足）○三つの猿（越人）（第四卷）小弓誹諧集（東鬼）○誹諧伊達衣（筆舟）○若葉集（風雪）○芭蕉翁行狀記（路通）（第五卷）浪花屋火燵（尓計）○ひらつゝみ（東潮）○俳諧續猿蓑（凡兆・野水・史邦・去來）（第六卷）我身鉢（雪水）○文蓬萊（曾の谷谷水）（第六卷）我身鉢（雪水）○文蓬萊（沾德）○鹿子の渡（且海）○葉堂家集（子光・久禎）

俳書大系　たいはいしよけいは　叢書　十七册【本名】日本俳書大系【編者】藤峰晉風【通說】

【著者】荻原井泉水【刊行】大正十五年から昭和三年に至る。春秋社。本叢書は出版完了後、改めて「普及版俳書大系」の名を以て、全三十冊に分つて再刊された。これは初刊本の各

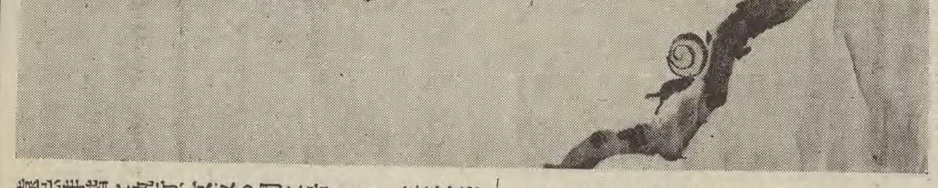
月の頃から病臥し、遂に逝いた。

【編著】梅室附合集　小本二册（文政十一年江戸刊。）

伊勢の菊所編）○今四歌仙　半紙本一册（天保四年江戸刊）○梅室兩吟稿　小本二册（天保九年金澤刊）○梅室家集　小本二册（天保十年京都刊。四季發句約八百句を自選したもの。俳書大系近世俳話句集所收）○方圓俳諧集　小本四册（天保十二年京都刊。真文篇。大阪中心の連句集）○梅林茶談　半紙本一册（天保十二年京都刊。梅室業信撰、門人九起署ミしてあるが、事實は梅室の著作である。連句の指合・去嫌等に就いて、或る流派の煩瑣な瑕風を指摘し、蕉風の無礙自在を揮揚した記述である。「舍利風話」中の「梅室隨筆」（俳話四則）ミ共に梅室の所見を知るべき

圓發句集　半紙本二册（天保十三年京都刊。）

【史的地位】七十二歳で再び京阪に乘り出した梅室は、當時の俳壇に大なる波動を起した。連句技術の如何が直にその俳人の價値を決した當時にあつては、四十年の行脚生活に於て鍊磨した纖麗巧緻な修辭と句法とを以て縱橫に連句を裁いて行く梅室は、恰も雞群の一鶴の如く見えたのである。天保四老人（別項）の中でも、同じ金澤の出身で同じく閨更の敎へを受けた梅室と蒼虬（別項）とは、世間からは常に對立的に見られてゐたが、梅室は蒼虬より十二歳若く、蒼虬の遲鈍に對して



（藏原文庫・松宇）

遠忘俳諧を執行、京阪の間に居ること三年、盛名一時に高かつた。大阪の反古庵夭來が難問を起し來つたのも、その盛名に對する反抗的行動であつた。ついで四國に遊び、京に歸つて伊賀に行き、遂に再び京に落付く事になつた。弘化元年七十六歳の六月一子を擧げ、辰丸と命名した。明治時代の宮內省大書記官櫻井能監はこの辰丸である（鍋洞ミ號し諱をよくした。）

嘉永四年二條家の俳諧に召されたが、老齡の故を以て辭退したので、俳席の儀は沙汰止みとなり、花の下宗匠の允許狀を代理參殿の者に授與された。當時の職業俳人が羨望する所であつたのであるが、梅室の晩年を飾るべき榮譽で遠く江戸へ迄も聞えた。

翌年は八歳若く、蒼虬より十二年前に見られてゐたが、梅室は蒼虬よりも二年も長生した。梅室の早世は惜まれるに足るが、蒼虬の長壽は必ずしも幸福ではなかつた。

梅室家集　小本二册（天保十年京都刊。四季發句約八百句を自選したもの。俳書大系近世俳話句集所收）○梅室隨筆（俳話四則）

方圓俳諧集　小本四册（天保十二年京都刊。

梅林茶談　半紙本一册（天保十二年京都刊。梅室業信撰、門人九起署ミしてあるが、事實は梅室の著作である。連句の指合・去嫌等に就いて、或る流派の煩瑣な瑕風を指摘し、蕉風の無礙自在を揮揚した記述である。「舍利風話」中の「梅室隨筆」（俳話四則）ミ共に梅室の所見を知るべき

梅室兩吟稿　小本二册（天保九年金澤刊）○梅室家集　小本二册（天保十年京都刊。四季發句約八百句を自選したもの。俳書大系近世俳話句集所收）○方圓俳諧集　小本四册（天保十二年京都刊。

梅室附合集　小本二册（文政十一年江戸刊。）

圓發句集　半紙本二册（天保十三年京都刊。）

梅室家集　小本二册（天保十年京都刊。四季發句約八百句を自選したもの。俳書大系近世俳話句集所收）○梅室兩吟稿　小本二册（天保九年金澤刊）○梅室附合集　小本二册（文政十一年江戸刊。）

梅室隨筆（俳話四則）

梅林茶談　半紙本一册（天保十二年京都刊。梅室業信撰、門人九起署ミしてあるが、事實は梅室の著作である。連句の指合・去嫌等に就いて、或る流派の煩瑣な瑕風を指摘し、蕉風の無礙自在を揮揚した記述である。「舍利風話」中の「梅室隨筆」（俳話四則）ミ共に梅室の所見を知るべき

方圓俳諧集　小本四册（天保十二年京都刊。

（第一巻・芭蕉一代集）（芭蕉時代の一）芭蕉俳類
聚○芭蕉俳句異同考○芭蕉俳句不審抄○芭蕉連句
聚成○芭蕉句合餝語集○芭蕉紀行日記集○芭蕉文
集○芭蕉書簡集。
（第二巻・蕉門俳諧前集）（芭蕉時代の二）天和二歳
歳旦發句牒（紙背）○武藏曲（千春）○虚栗（貧角）○句
繍虚栗（貧角）○冬の日（荷兮）○春の日（荷兮）○句
餞別（芭蕉）○千鳥掛（知足）○蛙合（仙化）○舉栗合
（嵐蘭）○噴野（荷兮）○噴野後集（荷兮）○其袋（嵐
雪）○俳諧勧進牒（路通）○いつを昔（其角）○花摘
（其角）○ひさご（珍碩）○猿蓑（凡兆・去來）○元祿
百人一句（江水）○北の山（句空）○己が光（車庸）○
俳風弓（壺中）○桃の實（元峯）○藤の實（素牛）○炭
俵（野坡・孤屋・利牛）○市の庵（酒堂）○別座舗（子
珊）○其便（泥足）○續猿蓑（沾圃）○枯尾花（其角）。
（第三巻・蕉門俳諧後集）（芭蕉時代の三）笈日記
（支考）○臭日記（支考）○有磯海（浪化）○續有磯海（浪化）○草刈笛（支考・牧童）
○菊の香（風國）○渡鳥集（去來・卯七）○芭蕉庵小
文庫（史邦）○俳諧續猿蓑（維舟）（銃隊）○○
俳選玄（等窮）○皮籠摺（涼菟）○二幅の陰裏（路草）○杜
撰集（嵐雪）○蟻通（百里）○龍蟄（許六・李由）○
正風彦根體（許六）○二葉集（惟然）○庭鳥集（越人）
○幾人水主（莱圃）。
（第四巻・蕉門俳話文集）（芭蕉時代の四）葛の松原
（支考）○續五論（支考）○二十五ヶ條（支考）○俳諧
一巻が二冊とされたもので、一篇尤も簡潔な
ものである。校訂と巻頭掲載の解題執筆とは晋
風が當り、巻尾掲載の通説と題する評論は井
泉水の執筆である。

（第一巻・芭蕉一代集）（芭蕉時代の一）芭蕉俳類
聚○芭蕉俳句異同考○芭蕉俳句不審抄○芭蕉連句
聚成○芭蕉句合餝語集○芭蕉紀行日記集○芭蕉文
集○芭蕉書簡集。
（第二巻・蕉門俳諧前集）（芭蕉時代の二）天和二歳
歳旦發句牒（紙背）○武藏曲（千春）○虚栗（貧角）○句
繍虚栗（貧角）○冬の日（荷兮）○春の日（荷兮）○句
餞別（芭蕉）○千鳥掛（知足）○蛙合（仙化）○舉栗合
（嵐蘭）○噴野（荷兮）○噴野後集（荷兮）○其袋（嵐
雪）○俳諧勧進牒（路通）○いつを昔（其角）○花摘
（其角）○ひさご（珍碩）○猿蓑（凡兆・去來）○元祿
百人一句（江水）○北の山（句空）○己が光（車庸）○
俳風弓（壺中）○桃の實（元峯）○藤の實（素牛）○炭
俵（野坡・孤屋・利牛）○市の庵（酒堂）○別座舗（子
珊）○其便（泥足）○續猿蓑（沾圃）○枯尾花（其角）。
（第三巻・蕉門俳諧後集）（芭蕉時代の三）笈日記
（支考）○臭日記（支考）○有磯海（浪化）○續有磯海（浪化）○草刈笛（支考・牧童）
○菊の香（風國）○渡鳥集（去來・卯七）○芭蕉庵小
文庫（史邦）○俳諧續猿蓑（維舟）（銃隊）○○
俳選玄（等窮）○皮籠摺（涼菟）○二幅の陰裏（路草）○杜
撰集（嵐雪）○蟻通（百里）○龍蟄（許六・李由）○
正風彦根體（許六）○二葉集（惟然）○庭鳥集（越人）
○幾人水主（莱圃）。
（第四巻・蕉門俳話文集）（芭蕉時代の四）葛の松原
（支考）○續五論（支考）○二十五ヶ條（支考）○俳諧
一巻が二冊とされたもので、一篇尤も簡潔な
ものである。校訂と巻頭掲載の解題執筆とは晋
風が當り、巻尾掲載の通説と題する評論は井
泉水の執筆である。

【内容】年代的には、（一）芭蕉以前（二）芭蕉時代（三）蕉村時代（四）一茶時代に大別し、年代と流派と類別と個人との類聚法を按配して集成したものである。そのうち個人集は、芭蕉・蕉村・一茶の作品を各々一代集と名づけたものである。

（第一巻・芭蕉一代集）（芭蕉時代の一）芭蕉俳類
聚○芭蕉俳句異同考○芭蕉俳句不審抄○芭蕉連句
聚成○芭蕉句合餝語集○芭蕉紀行日記集○芭蕉文
集○芭蕉書簡集。
（第二巻・蕉門俳諧前集）（芭蕉時代の二）天和二歳
歳旦發句牒（紙背）○武藏曲（千春）○虚栗（貧角）○句
繍虚栗（貧角）○冬の日（荷兮）○春の日（荷兮）○句
餞別（芭蕉）○千鳥掛（知足）○蛙合（仙化）○舉栗合
（嵐蘭）○噴野（荷兮）○噴野後集（荷兮）○其袋（嵐
雪）○俳諧勧進牒（路通）○いつを昔（其角）○花摘
（其角）○ひさご（珍碩）○猿蓑（凡兆・去來）○元祿
百人一句（江水）○北の山（句空）○己が光（車庸）○
俳風弓（壺中）○桃の實（元峯）○藤の實（素牛）○炭
俵（野坡・孤屋・利牛）○市の庵（酒堂）○別座舗（子
珊）○其便（泥足）○續猿蓑（沾圃）○枯尾花（其角）。
（第三巻・蕉門俳諧後集）（芭蕉時代の三）笈日記
（支考）○臭日記（支考）○有磯海（浪化）○續有磯海（浪化）○草刈笛（支考・牧童）
○菊の香（風國）○渡鳥集（去來・卯七）○芭蕉庵小
文庫（史邦）○俳諧續猿蓑（維舟）（銃隊）○○
俳選玄（等窮）○皮籠摺（涼菟）○二幅の陰裏（路草）○杜
撰集（嵐雪）○蟻通（百里）○龍蟄（許六・李由）○
正風彦根體（許六）○二葉集（惟然）○庭鳥集（越人）
○幾人水主（莱圃）。
（第四巻・蕉門俳話文集）（芭蕉時代の四）葛の松原
（支考）○續五論（支考）○二十五ヶ條（支考）○俳諧
之註（正竟）○歌仙ぞろゝ（元隣）○中庵要（高
政）○俳諧破邪顯正（隨流）○俳諧破邪顯正返答（惟
中）○俳諧顯政（蕉門）○ふたつ盃（金勝）○俳
諧さゝめごと（隨有軒）○俳諧發巻（蓑笠不詳）。
（第七巻・談林俳諧集）（芭蕉以前のニ）大阪獨吟集
（虎翁判）○談林十百韵（松意）○虎渓の橋（西鶴）
○當世男（蝶々子）○雅市（常矩）○當流籠抜（宗旦）
○江戸蛇之酢（言水）○東日記（言水）○江戸八百
韻（幽山）○七百五十韵（信徳）○獨の原（不卜）○お
くれ双六（流水）○誹枕（幽山）○天狗俵（百韻）○
○白根嶽（調寶）。

（第八巻・蕉村一代集）（蕉村時代の一）蕉村俳句類
聚○蕉村俳句異同考○蕉村句集○蕉村發句解（乙
二）○蕉村連句選集○蕉村文集○蕉村書簡集○夜
半樂○花鳥篇○新撰誹諧三十六歌僊○反古諛
（不狂）○たまも集○芭蕉翁句集○からかさ集（几
董）○常盤の香（紫曉）。
（第九巻・中興俳諧名家集）（蕉村時代の二）みかへ
り松（祇空）○花月六百韻（淡々）○五色墨（宗瑞等）
○續五色墨（素丸等）○夜半亭發句帖（巴人）○新撰
武藏曲（曉雨）○延享中歌仙（湖十）○千化尼句集
（千化）○蟻つか（也有）○反古裏（何誰）○平安中
歌仙（太祇）○新みなし栗（菱水）○其雪影（几董）○
明がらす（几董）○續明烏（几董）○冕經社集（蕉村）
○五車反古（維駒）○續一夜松前集（几董）○續一夜
松後集（几董）○俳諧骨董（蓼太）○春秋稿（自雄）○
秋の日（曉臺）○幣ぶくろ（土朗・都貢）○七柏集（蠛
太）○水餅集（二柳）。
（第十巻・中興俳話文集）（蕉村時代の三）雜話抄
紀遊（駒仲）○駒仲遺稿（米仲）○南北新話（涼袋）○紀行俳
仙遊（涼袋）○蕉門一夜口授（麥水）○俳巖梅（大江
丸）○はいかい袋（大江丸）○淡葉考（闌更）○稿本
俳諧寂栞（自雄）○也哥抄（無腸）○新雜談集（几董）
○附合てびき草（几董）○點印論（几董）○俳諧書お
ろし（蓑太）○俳諧變すゝ古義（雁宕）○俳諧蓮八刻
（魚汶）○俳諧一字叚若（進歩）○俳諧三十禪（止笑）
○うづら衣（也有）。
（第十一巻・天明名家句選）（蕉村時代の四）蘇明山
莊發句選（米翁）○哲阿彌句選（晩得）○飄獲集（宋
屋）○太祇句選（太祇）○太祇句選後編（太祇）○石
の月（太祇）○春泥發句集（召波）○井華集（几董）
○濾陰句選（大魯）○蓼太句集（蓼太）○自雄句集
（自雄）○樗良發句集（樗良）○青藍發句集（青藍）○
半化坊發句集（闌更）○曉臺句集（曉臺）○建亭句集
（嘯山）○葛箐（麥水）○素丸發句集（素丸）。

（第十二巻・一茶俳諧集）（一茶時代の一）一茶俳
諧集（文政句帖）○一茶俳諧寂栞（一茶）○一茶
俳諧句選抄○一茶俳諧句集成○一茶紀行日記集○一茶書翰抄○一茶著作集。
（第十三巻・近世俳諧名家集）（一茶時代の二）この
巻は、一茶俳諧集に洩れた諸家の俳諧を集めたもので、
次の如く見えたのである。天保四老人（別項）の一
人○口狀（露川）○玄峯（露川）○○ゑぶくさ（露川）○
青根が峰（誹諧問答抄）（許六）○本朝文選（許六）。
（第五巻・元祿名家句選）（芭蕉門人）初心もと
柏（言水）○いまみや草（來山）○續いまみや草（來山）○
（貝寸）○七車（鬼貫）○獨言（貝寸）○いまみや草（來山）○續いまみや草（來山）○
素堂句集（素堂）○才麿發句抜萃（才麿）○五元集
（其角）○玄峯集（嵐雪）○蓮二吟集（支考）○五元井
竈句集（許六）○北枝發句集（北枝）○古太白堂句選
（鉢叩）○彭風句集（彭風）○惟然坊句集（惟然）○去
來發句集（去來）○丈艸發句集（丈草）○退化上人發
句集（退化）○麥林集（乙由）○類柑子（其角）○續其
袋（嵐雪）。
（第六巻・貞門俳諧集）（芭蕉以前の一）獨吟千句
（守武）○新撰犬筑波（宗鑑）○新增犬筑波（油煙斎貞
徳）○紅梅千句（貞德）○塵塚（西武）○玉
海集（貞室）○山之井（季吟）○俳諧初學抄（德元）○
俳諧之註（正意）○歌仙ぞろゝ（元隣）○中庵要（高
政）○俳諧破邪顯正（隨流）○俳諧破邪顯正返答（惟
中）○俳諧顯政（蕉門）○ふたつ盃（金勝）○俳
諧さゝめごと（隨有軒）○俳諧發巻（蓑笠不詳）。
（第七巻・談林俳諧集）（芭蕉以前のニ）大阪獨吟集
（虎翁判）○談林十百韵（松意）○虎渓の橋（西鶴）
○當世男（蝶々子）○雅市（常矩）○當流籠抜（宗旦）
○江戸蛇之酢（言水）○東日記（言水）○江戸八百
韻（幽山）○七百五十韵（信徳）○獨の原（不卜）○お
くれ双六（流水）○誹枕（幽山）○天狗俵（百韻）○
○白根嶽（調寶）。

（第八巻・蕉村一代集）（蕉村時代の一）蕉村俳句類
聚○蕉村俳句異同考○蕉村句集○蕉村發句解（乙
二）○蕉村連句選集○蕉村文集○蕉村書簡集○夜
半樂○花鳥篇○新撰誹諧三十六歌僊○反古諛
（不狂）○たまも集○芭蕉翁句集○からかさ集（几
董）○常盤の香（紫曉）。
（第九巻・中興俳諧名家集）（蕉村時代の二）みかへ
り松（祇空）○花月六百韻（淡々）○五色墨（宗瑞等）
○續五色墨（素丸等）○夜半亭發句帖（巴人）○新撰
武藏曲（曉雨）○延享中歌仙（湖十）○千化尼句集
（千化）○蟻つか（也有）○反古裏（何誰）○平安中
歌仙（太祇）○新みなし栗（菱水）○其雪影（几董）○
明がらす（几董）○續明烏（几董）○冕經社集（蕉村）
○五車反古（維駒）○續一夜松前集（几董）○續一夜
松後集（几董）○俳諧骨董（蓼太）○春秋稿（自雄）○
秋の日（曉臺）○幣ぶくろ（土朗・都貢）○七柏集（蠛
太）○水餅集（二柳）。
（第十巻・中興俳話文集）（蕉村時代の三）雜話抄
紀遊（駒仲）○駒仲遺稿（米仲）○南北新話（涼袋）○紀行俳
仙遊（涼袋）○蕉門一夜口授（麥水）○俳巖梅（大江
丸）○はいかい袋（大江丸）○淡葉考（闌更）○稿本
俳諧寂栞（自雄）○也哥抄（無腸）○新雜談集（几董）
○附合てびき草（几董）○點印論（几董）○俳諧書お
ろし（蓑太）○俳諧變すゝ古義（雁宕）○俳諧蓮八刻
（魚汶）○俳諧一字叚若（進歩）○俳諧三十禪（止笑）
○うづら衣（也有）。
（第十一巻・天明名家句選）（蕉村時代の四）蘇明山
莊發句選（米翁）○哲阿彌句選（晩得）○飄獲集（宋
屋）○太祇句選（太祇）○太祇句選後編（太祇）○石
の月（太祇）○春泥發句集（召波）○井華集（几董）
○濾陰句選（大魯）○蓼太句集（蓼太）○自雄句集
（自雄）○樗良發句集（樗良）○青藍發句集（青藍）○
半化坊發句集（闌更）○曉臺句集（曉臺）○建亭句集
（嘯山）○葛箐（麥水）○素丸發句集（素丸）。

（第十二巻・一茶俳諧集）（一茶時代の一）一茶俳
諧集（文政句帖）○一茶俳諧寂栞（一茶）○一茶
俳諧句選抄○一茶俳諧句集成○一茶紀行日記集○一茶書翰抄○一茶著作集。
（第十三巻・近世俳諧名家集）（一茶時代の二）この
巻は、一茶俳諧集に洩れた諸家の俳諧を集めたもので、
次の如く見えたのである。天保四老人（別項）の一
人○口狀（露川）○玄峯（露川）○○ゑぶくさ（露川）○
青根が峰（誹諧問答抄）（許六）○本朝文選（許六）。
（第五巻・元祿名家句選）（芭蕉門人）初心もと
柏（言水）○いまみや草（來山）○續いまみや草（來山）○
（貝寸）○七車（鬼貫）○獨言（貝寸）○いまみや草（來山）○續いまみや草（來山）○
素堂句集（素堂）○才麿發句抜萃（才麿）○五元集
（其角）○玄峯集（嵐雪）○蓮二吟集（支考）○五元井
竈句集（許六）○北枝發句集（北枝）○古太白堂句選
（鉢叩）○彭風句集（彭風）○惟然坊句集（惟然）○去
來發句集（去來）○丈艸發句集（丈草）○退化上人發
句集（退化）○麥林集（乙由）○類柑子（其角）○續其
袋（嵐雪）。
（第六巻・貞門俳諧集）（芭蕉以前の一）獨吟千句
（守武）○新撰犬筑波（宗鑑）○新增犬筑波（油煙斎貞
徳）○紅梅千句（貞德）○塵塚（西武）○玉
海集（貞室）○山之井（季吟）○俳諧初學抄（德元）○
俳諧之註（正意）○歌仙ぞろゝ（元隣）○中庵要（高
政）○俳諧破邪顯正（隨流）○俳諧破邪顯正返答（惟
中）○俳諧顯政（蕉門）○ふたつ盃（金勝）○俳
諧さゝめごと（隨有軒）○俳諧發巻（蓑笠不詳）。
（第七巻・談林俳諧集）（芭蕉以前のニ）大阪獨吟集
（虎翁判）○談林十百韵（松意）○虎渓の橋（西鶴）
○當世男（蝶々子）○雅市（常矩）○當流籠抜（宗旦）
○江戸蛇之酢（言水）○東日記（言水）○江戸八百
韻（幽山）○七百五十韵（信徳）○獨の原（不卜）○お

（第八巻・蕉村一代集）（蕉村時代の一）蕉村俳句類
聚○蕉村俳句異同考○蕉村句集○蕉村發句解（乙
二）○蕉村連句選集○蕉村文集○蕉村書簡集○夜
半樂○花鳥篇○新撰誹諧三十六歌僊○反古諛
（不狂）○たまも集○芭蕉翁句集○からかさ集（几
董）○常盤の香（紫曉）。
（第九巻・中興俳諧名家集）（蕉村時代の二）みかへ
り松（祇空）○花月六百韻（淡々）○五色墨（宗瑞等）
○續五色墨（素丸等）○夜半亭發句帖（巴人）○新撰
武藏曲（曉雨）○延享中歌仙（湖十）○千化尼句集
（千化）○蟻つか（也有）○反古裏（何誰）○平安中
歌仙（太祇）○新みなし栗（菱水）○其雪影（几董）○
明がらす（几董）○續明烏（几董）○冕經社集（蕉村）
○五車反古（維駒）○續一夜松前集（几董）○續一夜
松後集（几董）○俳諧骨董（蓼太）○春秋稿（自雄）○
秋の日（曉臺）○幣ぶくろ（土朗・都貢）○七柏集（蠛
太）○水餅集（二柳）。
（第十巻・中興俳話文集）（蕉村時代の三）雜話抄
紀遊（駒仲）○駒仲遺稿（米仲）○南北新話（涼袋）○紀行俳
仙遊（涼袋）○蕉門一夜口授（麥水）○俳巖梅（大江
丸）○はいかい袋（大江丸）○淡葉考（闌更）○稿本
俳諧寂栞（自雄）○也哥抄（無腸）○新雜談集（几董）
○附合てびき草（几董）○點印論（几董）○俳諧書お
ろし（蓑太）○俳諧變すゝ古義（雁宕）○俳諧蓮八刻
（魚汶）○俳諧一字叚若（進歩）○俳諧三十禪（止笑）
○うづら衣（也有）。
（第十一巻・天明名家句選）（蕉村時代の四）蘇明山
莊發句選（米翁）○哲阿彌句選（晩得）○飄獲集（宋
屋）○太祇句選（太祇）○太祇句選後編（太祇）○石
の月（太祇）○春泥發句集（召波）○井華集（几董）
○濾陰句選（大魯）○蓼太句集（蓼太）○自雄句集
（自雄）○樗良發句集（樗良）○青藍發句集（青藍）○
半化坊發句集（闌更）○曉臺句集（曉臺）○建亭句集
（嘯山）○葛箐（麥水）○素丸發句集（素丸）。

（第十二巻・一茶俳諧集）（一茶時代の一）一茶俳
諧集（文政句帖）○一茶俳諧寂栞（一茶）○一茶
俳諧句選抄○一茶俳諧句集成○一茶紀行日記集○一茶書翰抄○一茶著作集。
（第十三巻・近世俳諧名家集）（一茶時代の二）この
巻は、一茶俳諧集に洩れた諸家の俳諧を集めたもので、
次の如く見えたのである。天保四老人（別項）の一
人○口狀（露川）○玄峯（露川）○○ゑぶくさ（露川）○
青根が峰（誹諧問答抄）（許六）○本朝文選（許六）。
（第五巻・元祿名家句選）（芭蕉門人）初心もと
柏（言水）○いまみや草（來山）○續いまみや草（來山）○
（貝寸）○七車（鬼貫）○獨言（貝寸）○いまみや草（來山）○續いまみや草（來山）○
素堂句集（素堂）○才麿發句抜萃（才麿）○五元集
（其角）○玄峯集（嵐雪）○蓮二吟集（支考）○五元井
竈句集（許六）○北枝發句集（北枝）○古太白堂句選
（鉢叩）○彭風句集（彭風）○惟然坊句集（惟然）○去
來發句集（去來）○丈艸發句集（丈草）○退化上人發
句集（退化）○麥林集（乙由）○類柑子（其角）○續其
袋（嵐雪）。
（第六巻・貞門俳諧集）（芭蕉以前の一）獨吟千句
（守武）○新撰犬筑波（宗鑑）○新增犬筑波（油煙斎貞
徳）○紅梅千句（貞德）○塵塚（西武）○玉
海集（貞室）○山之井（季吟）○俳諧初學抄（德元）○
俳諧之註（正意）○歌仙ぞろゝ（元隣）○中庵要（高
政）○俳諧破邪顯正（隨流）○俳諧破邪顯正返答（惟
中）○俳諧顯政（蕉門）○ふたつ盃（金勝）○俳
諧さゝめごと（隨有軒）○俳諧發巻（蓑笠不詳）。
（第七巻・談林俳諧集）（芭蕉以前のニ）大阪獨吟集
（虎翁判）○談林十百韵（松意）○虎渓の橋（西鶴）
○當世男（蝶々子）○雅市（常矩）○當流籠抜（宗旦）
○江戸蛇之酢（言水）○東日記（言水）○江戸八百
韻（幽山）○七百五十韵（信徳）○獨の原（不卜）○お

（第十二巻・一茶俳諧集）（一茶時代の一）一茶俳
諧集（文政句帖）○一茶俳諧寂栞（一茶）○一茶
俳諧句選抄○一茶俳諧句集成○一茶紀行日記集○一茶書翰抄○一茶著作集。
（第十三巻・近世俳諧名家集）（一茶時代の二）この
巻は、一茶俳諧集に洩れた諸家の俳諧を集めたもので、
次の如く見えたのである。天保四老人（別項）の一
人○口狀（露川）○玄峯（露川）○○ゑぶくさ（露川）○
青根が峰（誹諧問答抄）（許六）○本朝文選（許六）。
（第五巻・元祿名家句選）（芭蕉門人）初心もと
柏（言水）○いまみや草（來山）○續いまみや草（來山）○
（貝寸）○七車（鬼貫）○獨言（貝寸）○いまみや草（來山）○續いまみや草（來山）○
素堂句集（素堂）○才麿發句抜萃（才麿）○五元集
（其角）○玄峯集（嵐雪）○蓮二吟集（支考）○五元井
竈句集（許六）○北枝發句集（北枝）○古太白堂句選
（鉢叩）○彭風句集（彭風）○惟然坊句集（惟然）○去
來發句集（去來）○丈艸發句集（丈草）○退化上人發
句集（退化）○麥林集（乙由）○類柑子（其角）○續其
袋（嵐雪）。
（第六巻・貞門俳諧集）（芭蕉以前の一）獨吟千句
（守武）○新撰犬筑波（宗鑑）○新增犬筑波（油煙斎貞
徳）○紅梅千句（貞德）○塵塚（西武）○玉
海集（貞室）○山之井（季吟）○俳諧初學抄（德元）○
俳諧之註（正意）○歌仙ぞろゝ（元隣）○中庵要（高
政）○俳諧破邪顯正（隨流）○俳諧破邪顯正返答（惟
中）○俳諧顯政（蕉門）○ふたつ盃（金勝）○俳
諧さゝめごと（隨有軒）○俳諧發巻（蓑笠不詳）。
（第七巻・談林俳諧集）（芭蕉以前のニ）大阪獨吟集
（虎翁判）○談林十百韵（松意）○虎渓の橋（西鶴）
○當世男（蝶々子）○雅市（常矩）○當流籠抜（宗旦）
○江戸蛇之酢（言水）○東日記（言水）○江戸八百
韻（幽山）○七百五十韵（信徳）○獨の原（不卜）○お

（第八巻・蕉村一代集）（蕉村時代の一）蕉村俳句類
聚○蕉村俳句異同考○蕉村句集○蕉村發句解（乙
二）○蕉村連句選集○蕉村文集○蕉村書簡集○夜
半樂○花鳥篇○新撰誹諧三十六歌僊○反古諛
（不狂）○たまも集○芭蕉翁句集○からかさ集（几
董）○常盤の香（紫曉）。
（第九巻・中興俳諧名家集）（蕉村時代の二）みかへ
り松（祇空）○花月六百韻（淡々）○五色墨（宗瑞等）
○續五色墨（素丸等）○夜半亭發句帖（巴人）○新撰
武藏曲（曉雨）○延享中歌仙（湖十）○千化尼句集
（千化）○蟻つか（也有）○反古裏（何誰）○平安中
歌仙（太祇）○新みなし栗（菱水）○其雪影（几董）○
明がらす（几董）○續明烏（几董）○冕經社集（蕉村）
○五車反古（維駒）○續一夜松前集（几董）○續一夜
松後集（几董）○俳諧骨董（蓼太）○春秋稿（自雄）○
秋の日（曉臺）○幣ぶくろ（土朗・都貢）○七柏集（蠛
太）○水餅集（二柳）。
（第十巻・中興俳話文集）（蕉村時代の三）雜話抄
紀遊（駒仲）○駒仲遺稿（米仲）○南北新話（涼袋）○紀行俳
仙遊（涼袋）○蕉門一夜口授（麥水）○俳巖梅（大江
丸）○はいかい袋（大江丸）○淡葉考（闌更）○稿本
俳諧寂栞（自雄）○也哥抄（無腸）○新雜談集（几董）
○附合てびき草（几董）○點印論（几董）○俳諧書お
ろし（蓑太）○俳諧變すゝ古義（雁宕）○俳諧蓮八刻
（魚汶）○俳諧一字叚若（進歩）○俳諧三十禪（止笑）
○うづら衣（也有）。
（第十一巻・天明名家句選）（蕉村時代の四）蘇明山
莊發句選（米翁）○哲阿彌句選（晩得）○飄獲集（宋
屋）○太祇句選（太祇）○太祇句選後編（太祇）○石
の月（太祇）○春泥發句集（召波）○井華集（几董）
○濾陰句選（大魯）○蓼太句集（蓼太）○自雄句集
（自雄）○樗良發句集（樗良）○青藍發句集（青藍）○
半化坊發句集（闌更）○曉臺句集（曉臺）○建亭句集
（嘯山）○葛箐（麥水）○素丸發句集（素丸）。

（第十二巻・一茶俳諧集）（一茶時代の一）一茶俳
諧集（文政句帖）○一茶俳諧寂栞（一茶）○一茶
俳諧句選抄○一茶俳諧句集成○一茶紀行日記集○一茶書翰抄○一茶著作集。
（第十三巻・近世俳諧名家集）（一茶時代の二）この
巻は、一茶俳諧集に洩れた諸家の俳諧を集めたもので、
次の如く見えたのである。天保四老人（別項）の一
人○口狀（露川）○玄峯（露川）○○ゑぶくさ（露川）○
青根が峰（誹諧問答抄）（許六）○本朝文選（許六）。
（第五巻・元祿名家句選）（芭蕉門人）初心もと
柏（言水）○いまみや草（來山）○續いまみや草（來山）○
（貝寸）○七車（鬼貫）○獨言（貝寸）○いまみや草（來山）○續いまみや草（來山）○
素堂句集（素堂）○才麿發句抜萃（才麿）○五元集
（其角）○玄峯集（嵐雪）○蓮二吟集（支考）○五元井
竈句集（許六）○北枝發句集（北枝）○古太白堂句選
（鉢叩）○彭風句集（彭風）○惟然坊句集（惟然）○去
來發句集（去來）○丈艸發句集（丈草）○退化上人發
句集（退化）○麥林集（乙由）○類柑子（其角）○續其
袋（嵐雪）。
（第六巻・貞門俳諧集）（芭蕉以前の一）獨吟千句
（守武）○新撰犬筑波（宗鑑）○新增犬筑波（油煙斎貞
徳）○紅梅千句（貞德）○塵塚（西武）○玉
海集（貞室）○山之井（季吟）○俳諧初學抄（德元）○
俳諧之註（正意）○歌仙ぞろゝ（元隣）○中庵要（高
政）○俳諧破邪顯正（隨流）○俳諧破邪顯正返答（惟
中）○俳諧顯政（蕉門）○ふたつ盃（金勝）○俳
諧さゝめごと（隨有軒）○俳諧發巻（蓑笠不詳）。
（第七巻・談林俳諧集）（芭蕉以前のニ）大阪獨吟集
（虎翁判）○談林十百韵（松意）○虎渓の橋（西鶴）
○當世男（蝶々子）○雅市（常矩）○當流籠抜（宗旦）
○江戸蛇之酢（言水）○東日記（言水）○江戸八百
韻（幽山）○七百五十韵（信徳）○獨の原（不卜）○お

（第十二巻・一茶俳諧集）（一茶時代の一）一茶俳
諧集（文政句帖）○一茶俳諧寂栞（一茶）○一茶
俳諧句選抄○一茶俳諧句集成○一茶紀行日記集○一茶書翰抄○一茶著作集。
（第十三巻・近世俳諧名家集）（一茶時代の二）この
巻は、一茶俳諧集に洩れた諸家の俳諧を集めたもので、
次の如く見えたのである。天保四老人（別項）の一
人○口狀（露川）○玄峯（露川）○○ゑぶくさ（露川）○
青根が峰（誹諧問答抄）（許六）○本朝文選（許六）。
（第五巻・元祿名家句選）（芭蕉門人）初心もと
柏（言水）○いまみや草（來山）○續いまみや草（來山）○
（貝寸）○七車（鬼貫）○獨言（貝寸）○いまみや草（來山）○續いまみや草（來山）○
素堂句集（素堂）○才麿發句抜萃（才麿）○五元集
（其角）○玄峯集（嵐雪）○蓮二吟集（支考）○五元井
竈句集（許六）○北枝發句集（北枝）○古太白堂句選
（鉢叩）○彭風句集（彭風）○惟然坊句集（惟然）○去
來發句集（去來）○丈艸發句集（丈草）○退化上人發
句集（退化）○麥林集（乙由）○類柑子（其角）○續其
袋（嵐雪）。
（第六巻・貞門俳諧集）（芭蕉以前の一）獨吟千句
（守武）○新撰犬筑波（宗鑑）○新増犬筑波（油煙斎貞
徳）○紅梅千句（貞德）○塵塚（西武）○玉
海集（貞室）○山之井（季吟）○俳諧初學抄（德元）○
俳諧之註（正意）○歌仙ぞろゝ（元隣）○中庵要（高
政）○俳諧破邪顯正（隨流）○俳諧破邪顯正返答（惟
中）○俳諧顯政（蕉門）○ふたつ盃（金勝）○俳
諧さゝめごと（隨有軒）○俳諧發巻（蓑笠不詳）。
（第七巻・談林俳諧集）（芭蕉以前のニ）大阪獨吟集
（虎翁判）○談林十百韵（松意）○虎渓の橋（西鶴）
○當世男（蝶々子）○雅市（常矩）○當流籠抜（宗旦）
○江戸蛇之酢（言水）○東日記（言水）○江戸八百
韻（幽山）○七百五十韵（信徳）○獨の原（不卜）○お

俳書地名索引○芭蕉蕪村一茶俳諧全句索引。

【價値】俳諧の叢書は「俳諧文庫」(別項)以來數種のものがあるが、本叢書はその中の最も浩瀚なものである點に第一の特色がある。他の叢書が、「俳諧文庫」がやゝ年代的である外、いづれも單に類聚的であるのと異なり、年代的に系統立てたところに第二の特色がある。芭蕉・蕪村・一茶の三作家をそれ〴〵元祿・天明・文政時代の代表として据ゑた點は、俳諧史的に見て(特に一茶に就いて)異論もあらうけれども、新時代的の編者の解釋に據つたものである。俳書として著名な一般的の著述は素よりこれを輯めたと共に、未飜刻のもの數十種を收めたことは第三の特色である。全體を通じての「地名人名索引」一册を附して檢索に便じたことは第四の特色である。底本は出來得る限り初刻本に據り、校訂と校正とは能ふ限り嚴密を期し、底本に插圖あるものは、それと同大にして載せたことは第五の特色である。各卷の口繪として插んだコロタイプ版の眞蹟類に珍品が少からずあることも注意されねばならない。要するに俳諧文學を年代的に鑑賞し研究しようとする者に取つて、本叢書は劃期的なものであるといつてよからう。【荻原】

俳書堂文庫(はいしよだうぶんこ)　叢書　十五編九册【刊行】明治四十一年から同四十二年に至る。俳書堂【内容】俳句及び連句の入門者のために、極めて手輕に手にし得るやうにと企てられた叢書であるが、總に九册を出して中絶され、採收された書類も甚だ無雜である。初學者に役立つものもあるにはあるが、中に研究者に取つて益するものとして、「玉珂冥々句集」のあることを注意すべきであらう。所收の俳書は次の如きものである。

【第一編】連句入門(粺山江戸庵著)。【第二編】稿本虛子句集(今村一聲編)。【第三・四編】連句名作(田山耕村編)。【第五編】連句作例(粺山江戸庵編)。【第六・七編】醫藥疾患句集(小池既人編)。【第八・九編】俳人名簿(俳書堂編)。【第十・十一編】玉珂冥々句集(俳書堂編)。【第十二・十三編】柑子句集(粺山柑子編)。【第十四・十五編】女流名家句集(佐藤滴泉編)　【荻原】

俳人百家撰(はいじんひやくかせん)　俳諧逸話　一册【著者】水谷川柳(川柳五世參照)【刊行】奥附に嘉永八乙卯歲次孟春發行とあるが、嘉永には八年がなく、乙卯は安政二年であるから、安政二年刊行であらうか。【諸本】俳諧逸話全集(俳諧文庫)に收められてゐるが、圖書は凡て省かれ、先哲六俳・芭蕉十哲・樂翁の句・芭蕉等の眞蹟も省かれてゐる。【由來】著者が多年の見聞を書纂に貯へて置いたのを書肆の求めによつて上木することになつた由が、嘉永八卯の孟春とある自序に見える。【解說】守武以下蓼太まで古今の俳人百家に就いて、百人一句選の形を取つて揭げ、且つ傳記逸事を錄したものである。卽ち各家毎にその肖像及び發句を下段に揭げ、上段にそれ〴〵の傳記逸事を記してある。これ等の肖像は雄齋國輝の畫く所である。著者が何等かの奇趣を選擇の標準とする態度を取つた爲め、選ばれた百家は必ずしも俳諧史上に重要な地步を占める人ばかりではなく、遊女・大盡その他風變りの人でも、俳諧に因みある人は選ばれてゐる。これ等本文をなすものの外、卷首に、先づ芭蕉庵の舊地の楓園玄魚の筆に係る圖を揭げて說明し、玄魚の摸寫に係る野々口立圃筆の守武・宗鑑・貞德・宗因・貞室・芭蕉の先哲六俳の肖像、同じく玄魚筆の蕪村の畫趣を摸した蕉門十哲の淡彩畫肖像、芭蕉その他七家の色紙扇面等淡彩刷の眞蹟、白河樂翁の案山子の句及び淡彩畫の插畫、職人畫に古俳人の句を題した職人盡發句競(くらべ)畫を配した諸國遊女八人の發句を揭げ、次に俳諧の濫觴の說明、往古の發句の體と題する往古の人の句、其角の信神の句作、百花の雨乞の句、天野桃隣の安產符の句、曾呂利新左衞門の頓智の句、大淀三千風(みちかぜ)の堪忍の句、岩波午心烏よけの句、これ等皆畫を伴ひ、次に塚の圖を揭げて芭蕉塚の說明、笠の圖を揭げて笠塚の說明がある。以上卷首揭載の肖像及び插畫は、凡て楓園玄魚の畫く所で、本書は全體として繪を主とした繪本の體裁になつてゐるのである。【各務】

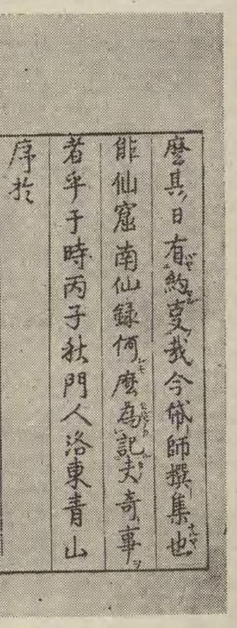
俳人蕪村(はいじんぶそん)　俳書　一卷【著者】正岡子規【發表・刊行】明治三十年五月から十一月に至る日本新聞に載り、次いで雜誌「ホトトギス」に轉載され、明治三十二年十二月、ホトトギス發行所より單行本として出で、後俳書堂より出版。大正二年に「合本俳諧大要」の中に、「俳諧大要」「俳句問答」「俳句界の四年間」等と共に收む。單行本の末に明治二十九年草稿、明治三十二年訂正と書いてある。【解說】本書は蕪村に對する研究批評で、「獺祭書屋俳話」「俳諧大要」(各別項)などと同じく子規の初期の俳論に屬するものであるが、子規が俳句革新の烽火を擧げて間もなく、俳句革新の實際的の指導者をば、芭蕉以外にこの蕪村に見出したのであるから、子規の蕪村に對した態度は、一面は驚異であり、一面は諧歎であり湯仰であつた。是に於てか芭蕉は無比無類の俳人として認められ復た一人の之に匹敵する者あるを見ざるの有樣なりき。芭蕉は實に故手なきか。曰く否。といふ樣言の口吻を讀んでもその一般を知ることが出來る。そして蕪村の俳諧につき、積極的美・客觀的美・人事的美・理想的美・複雜的美・精細的美・用語・句法・句調・文法・材料・緣語及譬喩・時代・履歷性行等の十四項に分つて剖析吟味して居り、遂に「俳句に於ける蕪村の技倆は俳句界を橫絕せり、終に芭蕉其角の及ぶ所に非ず」とまでいふに至つたのである。併し子規は蕪村をば芭蕉の上位に位せしめてゐないことは、常に他の論文に據つてこれを證明することが出來る。子規は蕪村の力量を發見し、それを吟味研究して暗に自己進嚮路の指南車たらしめ、世間も亦子規派を目して、蕪村派などと稱へたこともあるくらゐであるから、「俳人蕪村」は、子規の俳句に對する考が吐露せられてゐるのみでなく、明治新派俳句運動の實行的方面は、この「俳人蕪村」等によつて誘導せられたものだと謂つて毫も錯語ではない。また語を換へていへば、「俳人蕪村」は明治俳壇の不易の古典といふべきである。【齋藤(茂)】

俳星(はいせい)　俳誌【解說】明治三十三年に秋田縣能代で、石井露月が島田五空と共に創刊したものである。中絕後、大正十五年同じく兩人が共力して秋田市から「雲雀」を發行した。その後、昭和元年十月兩人が「俳星」を再興したが、同誌が第三卷に至つた昭和三年に兩人共相次いで逝いたので、現今は赤木格堂・岩動炎天・平川霞溪子等が主として執筆してゐる。途中中絕等のこともあつたが、子規生前からの子規系統の地方俳誌として尊重すべき歷史を持つものである。【水原】

俳聲(はいせい)　俳誌【刊行】明治三十四年二月創刊。【解說】他の俳誌の如く、或る俳句團體の機關雜誌として生れたものでなく、新舊兩派を包含して進まうとしたものであつた。併し執筆者は秋聲會(別項)の幹部の人々が多く、日本派の「ホトトギス」(別項)に對抗して立つたものと見ることが出來るが、永く續かずして廢刊した。編輯署名者は松田竹嶼であつた。【伊藤】

梅盛(ばいせい)　俳人【姓名】高瀨氏。通稱太郎兵衞【別號】佗心子【生歿】慶長十八年生れ、元祿十四年(二三六一)四月八日歿す。享年八十九【法號】宗入居士。

【閱歷・作風】貞門七俳仙(別項)の一人である。京の人、二條油小路に住した。貞德生前に點者の許免を得ず、その歿後に自立して點者となつたと云ふ。談林が流行し、蕉風が起るに及んでも古風を捨てず、つまり古風の保守派



【參考】俳諧綴卷　著者不詳　○貞德永代記　中島隨流　○俳諧家譜早川丈石　○俳家奇人談竹內玄々一　○俳家大系圖生川春明　○滑稽太平記北藤浮生　○採菊暇筆九々庵　【荻原】

俳仙窟(はいせんくつ)　俳論書　一册【著者】建部涼袋【名稱】詳しくは「紀行俳仙窟」【刊行】寶曆七年九月、江戸須原屋太兵衞・京井筒屋庄兵衞刊。【諸本】中興俳話文集(俳書大系)・俳文學大系紀行篇所收。【解說】著者が俳仙の

れてゐる。一種の小說的構想を取つた俳論として興味多く讀ませるものである。特に盤珪禪師を俳祖に推して一見識を示し、希因・梅路二家の言を最も尊んで、遂に梅路は「南仙錄」の一卷を著者に與へ、以てその遺風を傳へさせる事に終つてゐる如きは、本書の主意が那邊にあるかを物語つてゐる。卽ち著者は梅路を南方の仙として、深くその俳風を信じてゐたので、茲に古今の俳人を擧げて評論し、結局當時の俳壇を指導すべきは梅路の風である事を述べたのである。それで卷末に附した「南仙錄」は「南北新話」「同後篇」「伊勢のはなし」等と同じく、麥林・希因・梅路の意を祖

下卷に五條を提擧してゐる。長秀を讚すること峻烈を極め、彼が古典に據らず俗書を引きして事實を誤つてゐるのを指摘して、「本書を見ず、事實を學ばず、書ぬき學文の證據なり」など謂ふ條々が甚だ多い。「俗說辨」を讀む者は必ず本書を參照すべきである。多田義俊は有職考證學を以て自任する人で、長秀の如き雜學家を眼中に置かぬ氣色がありく〳〵と現はれてゐる。

梅窗筆記(ばいさうひつき)　隨筆　二卷【著者】橋本經亮【刊行】文化三年【解說】有職家の見地から、宮中の行事を初めとして民間の習俗に至るまで、苟も故實先規に關する事項を擧げて考說したもの。上卷に、神樂庭火ノ末句ウタハザル事以下九十八條、下卷に、掛物

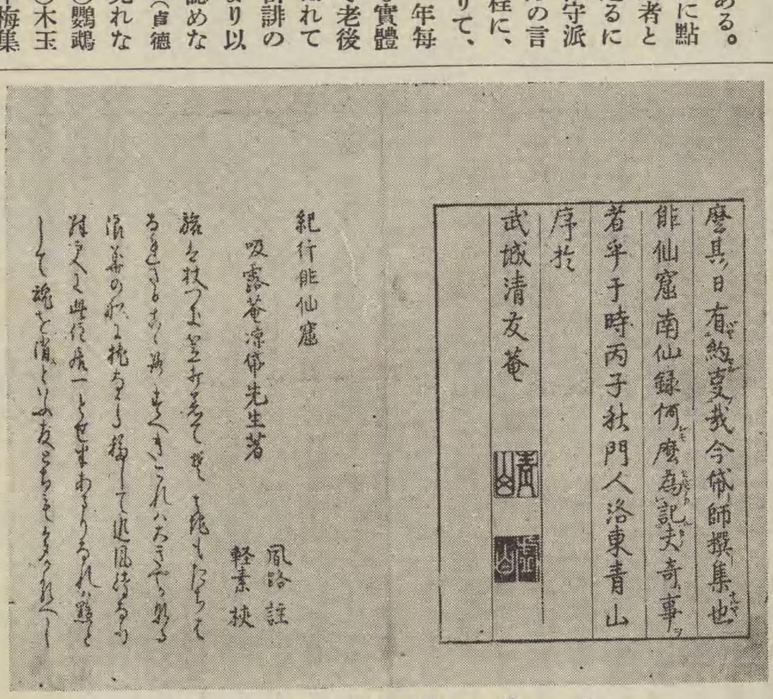
兩派を包含して進まうとしたものであつた。併し執筆者は秋聲會（別項）の幹部の人々が多く、日本派の「ホトトギス」（別項）に對抗して立つたものと見ることが出來るが、永く續かずして廢刊した。編輯署名者は松田竹嶼であつた。【伊藤】

梅盛（ばいせい）　俳人　【姓名】高瀬氏。通稱太郎兵衞【別號】佗心子【生歿】慶長十八年生れ、元祿十四年（一三六一）四月八日歿す。享年八十九【法號】宗入居士。

【閲歴・作風】貞門七俳仙（別項）の一人である。京の人、二條油小路に住した。貞德生前に點者の許免を得ず、その歿後に自立して點者となつたと云ふ。談林が流行し、蕉風が起るに及んでも古風を捨てず、つまり古風の保守派として終始した。延寶八年に既に貞門方の言ながら「梅盛こそ前々は輕口いひなりし程に、當時猶おどけられんと思へば、結句靜まりて、大方は會をも止め、句を問へ共語らず。年毎の三ツ物などにて遍く見れば、いかにも實體にして少しもそゝけたる事なし。是こそ老後のたしなみ尤の事なれ」（俳諧綴卷）と云はれてゐる。隨流は「古俳なりとて笑へども、當俳の及ぶ所にあらず」といひ、「崑山集（別項）より以來發句秀逸多し」と云つてその技倆を認めながら、「誹諧一道の毒にも藥にもならず」（貞德永代記）と云つてゐるのは、聊か矛盾を免れない。【著作】口眞似草五册（明曆二年刊）○鸚鵡集十册（同三年刊）○拾子集（寬治二年刊）○木玉集六册（寬文元年）○落穗集七册（同上）○早梅集六册（同上）○さゞれいし五册（寬文八年刊）○便船集七册（同上）○山下水五册（寬文十二年刊）○類船集七册（延寶五年刊）○七十二物爭　○道連集　○古かゞみ。

【參考】俳諧綴卷　著者不詳　○貞德永代記　中島隨流　○誹諧家譜　早川丈石　○俳家奇人談　竹內玄々　一　○誹家大系圖　生川春明　○滑稽太平記　北藤浮生　○採菊暇筆　九々庵　【萩原】

俳仙窟（はいせんくつ）　俳諧書　一册　【著者】建部涼袋【名稱】詳しくは「紀行俳仙窟」【刊行】寶曆七年九月、江戸須原屋太兵衞・京井筒屋庄兵衞刊。【諸本】中興俳話文集（俳書大系）・俳文學大系紀行篇所收。【解說】著者が俳仙の



（松宇文庫藏）

俳仙窟　れてゐる。一種の小說的構想を取つた俳論として興味多く讀ませるものである。特に盤珪禪師を俳祖に推して一見識を示し、希因・梅路二家の言を最も尊んで、遂に梅路は「南仙錄」の一卷を著者に與へ、以てその遺風を傳へさせる事に終つてゐる如きは、本書の主意が那邊にあるかを物語つてゐる。卽ち著者は梅路を南方の仙として、深くその俳風を信じてゐたので、玆に古今の俳人を擧げて評論し、結局當時の俳壇を指導すべきは梅路の風である事を述べたのである。それで卷末に附した「南仙錄」は「南北新話」「同後篇」「伊勢のはなし」等と同じく、麥林・希因・梅路の意を祖述したものである。涼袋が當時、いかに伊勢風（別項）に傾倒してゐたかを知る事が出來よう。而して盤珪和尙を特に俳祖と稱した事も、かの「片歌二夜問答」（別項）に芭蕉の句を難じたり、「とはじ草」に、芭蕉を能順に比して貶したやうな語氣を用ひ、又「貞德ばせをなどいふものを古人と思ひて」等と言つたりした心持に相通じた所が見られる。【穎原】

敗箒添塵（はいさうてんぢん）　隨筆　三卷　【著者】多田義俊【名稱】一名を「難俗說辨」といふ。【諸本】百家隨筆（國書刊行會）所收。【解說】門人村瀨忠臣・岡田廣品の所校。井澤長秀の著「廣益俗說辨」を駁非したもので、上卷に七條、中卷に七條、下卷に五條を提擧してゐる。長秀を駁すること峻烈を極め、彼が古典に據らず俗書を引きして事實を誤つてゐるのを指摘して、「本書を見ず、事實を學ばず、書ぬき學文の證據なり」など謂ふ條々が甚だ多い。「俗說辨」を讀む者は必ず本書を參照すべきである。多田義俊は有職考證學を以て自任する人で、長秀の如き雜學家を眼中に置かぬ氣色があり〳〵と現はれてゐる。【和田】

梅窗筆記（ばいさうひつき）　隨筆　二卷　【著者】橋本經亮【刊行】文化三年【解說】有職家の見地から、宮中の行事を初めとして民間の習俗に至るまで、苟も故實先規に關する事項を擧げて考說したもの。上卷に、神樂庭火ノ末句ウタハザル事以下九十八條、下卷に、掛物ノ上下ヲ卷テ掛ルコト以下九十八條を收め、考古學上、參照の價値ある記事が甚だ多い。後附として服飾・器具・建築物・紋樣等の精圖を添へてある。文化二年十一月丘思純の序がある。【和田】

梅村載筆（ばいそんさいひつ）　隨筆　三卷　寫　【著者】林信勝【解說】學問詩文の事、禁中の作法、支那典籍の類別、和漢聞人の逸事、その他心に浮ぶまゝの雜俗事項數百則を記したもの。天卷に陳眉公が語以下、地卷に御室への永宣旨以下、人卷に南山白額以下を收めてゐる。一二行の短記事が多いが、これで著者の博覽洽聞を知ることが出來る。【和田】

梅亭金鵞（ばいていきんが）　滑稽本・人情本作者　【姓名】瓜生政和（まさより）、舊姓吉田。通稱熊三郎【別號】梅亭主人・梅亭蕩人・三世東男一丁・吾妻雄兎子・梅亭化叟・鬱溪隱士・松亭鶴仙・白山人化三・竹亭綠水・半生半史・迂流・迂叟・文福茶

釜蚊【匿名】橋爪金造【生歿】文政四年三月三十日江戸兩國藥研堀に生れ、明治二十六年六月二十九日（或は三十日）、本郷團子坂下自宅にて歿す。享年七十三【墓所】東京淺草阿部川町稱念寺内西尊寺【家系】柳剛流の劍客吉田勝之丞の次男。後、新田四天王と呼ばれた名家、瓜生家の養嗣子となる。【閲歴】父が江戸兩國藥研堀に道場を開いてゐたので幼少より劍道を修め、十三歳の時には既に門下の壯輩を壓倒したと云ふ。父も彼の天分を認め、天保七年彼の十四歳の春、伊勢の劍客某氏の許へ遣はした。居る事二年、更に近國を修行して天保十年江戸に歸り、都下の道場を歩き、青年劍客の名聲高く、父の代稽古をなすに至り、谷中初音町の道場を預かつてゐた。弘化三年、二十三歳の時、特に見込まれて瓜生家の養子となり、本郷附木店（今の菊坂）に住んだ。その後、何時か武藝を捨て文士とのみ交際するやうになり、嘉永の初年、友人服部幸三郎（萬亭應賀）に伴はれ、松亭金水（別項）を訪ひ、遂にその門下となり、梅亭金鷲の號を貰ひ、師と同じく阪下筆耕を業としつつ、傍ら著作を始むるに至つた。當時最も交りの深かつたのは、金水をはじめ、萬亭應賀（別項）・竹葉舍金瓶・杉亭金升・古森金淨及び實弟の書家梅の本鶯齋などであつた。彼等は日夜相集まつて俳諧・雜俳、茶番狂言の趣向等に興じた。當時の彼等の生活は、全く瀧亭鯉丈作「八笑人」「和合人」（各別項）中の人物と等しかつた。彼の代表作「七偏人」は實にこれを綴つたものである。（一）近世文藝叢書川柳之部（變庭筆村校二冊）所收のものは、初編より六十編までで、誹風柳樽全集（國書刊行會本）はその複刻合冊である。（二）國民谷町白山神社裏蓮華坂上に移し、西洋物流行に乘じて啓蒙書類を濫作し、傍ら端唄・都々逸等の赤本を著はし、更に「嬉笑新聞」と云ふ滑稽雜誌を發行した。明治十年、野村文夫等が「團々珍聞」を發行するや、聘せられてその主筆となり、梅亭化三（曳）の戲號で、戲文・都々逸・川柳等の欄を擔任した。後、客員となり、都々逸の選者となつた。この外彼の編輯したものに、「驥尾團子」「奇言餘誌」がある。これ等に人情小說・滑稽小說・落語・口上茶番・狂文等を多く掲げた。中にも「驥尾團子」に連載した「人情小說春色花曆」は艷麗を極めたもので、當局の忌む所となつて、連載中止を命ぜられた。後、東京繪入新聞の客員となり、明治十七年、日本橋橋町書肆鶴聲社の顧問となり、古書飜刻を案出した。明治以後この方面の元祖と稱せられてゐる。明治二十二年鶴聲社の小石川に轉宅するに及び、彼も掃除町に轉じ、「團々珍聞」と全く關係を斷ち、やまと新聞の小說及び三面記事を分擔し、傍ら雜誌「小洒落意誌」の雜錄に筆を執つた。明治二十三年二月十一日、憲法發布一周年の祝日とて社中で巫山戲會を催す事となり、入浴中、中風となり、爾來全く社會と絶ち、團子坂下新開地に居を移して靜養したが、遂に再び起たなかつた。

【著作】【滑稽本】妙竹林話七偏人（安政四年―文久三年）○滑稽千社參（後、滑稽立志編と改題、刊年未詳、一九の「六阿彌陀詣」續編）（各別項）○雜司ヶ谷紀行後編（「人情本」夜三月柳之横櫛十五卷○春宵風見草九卷（各別項）○春色野咲の花六卷○靑郊初和歌名四・五編六卷（狂文亭春江作の續編）○媚色處女七種六・七編六卷（爲永春水作の續編）○艷魔地獄（刊行）嘉永元年【解說】初・二・三・四の四編、各上・中・下三卷より成る。門人坪井信良の弘化三年の端書に成立の事情が述べてあり、同四年の筒井繙溪・篠崎小竹の小序がある。旭莊の詩に就いては既に清の兪曲園の激賞する所である。即ち「其の詩才氣橫溢、變幻百出、長篇大作は五花八陣の奇を極む。而かも片語單詞、また雋永味ふべし。宜なり東國詩人の冠たるや」と謂つてゐる。【佐久】

誹番匠（はいばんしやう）「いつを昔」を見よ。

俳風新柳樽（はいふうしんやなぎだる）川柳集　二十編二十册【編者】素行堂松鱗【解說】多く天保時代以後の狂句を集錄したもので、大阪河内屋外二軒の合同板である。【西原】

俳風末摘花（はいふうすゑつむはな）川柳集　四編四册【撰者】卷尾に似實軒醉茶選とある。淺草二十軒茶屋の洒落であらうが、本名は未詳である。【刊行】初編は安永五年、第二編は天明三年、第三編は寛政三年、第四編は享和元年。【諸本】飜刻本は、祕密出版にかゝるもの一二種あるけれども、編者も發行者も固より不明である。【解說】萬句合及び誹風柳多留の中にある猥褻句、即ち末番句を摘錄した本で、初編には花久の序文があり、又五六の挿繪がある。なほ「俳風末津陸花」と題された五・六篇の續刊本や「柳の露」や「柳の葉末」と題する破禮句集などがあるけれども、內容の價値は遠く本篇に及ばない。【西原】

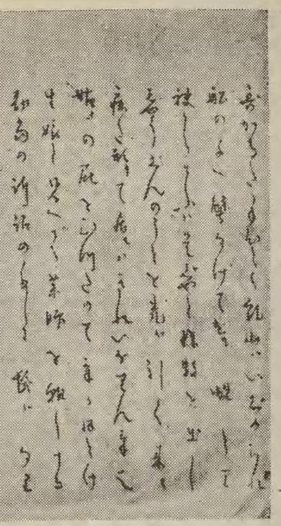
誹風柳多留（はいふうやなぎだる）川柳集　百六十七編【撰者】初編より第二十四編までは初代川柳。以後代々の川柳の選である。【成立・刊行】明和二年五月、木綿と號する人が、吳陵軒可有といふ名で、初代川柳の選にかゝる雜choice句合中から一句立として意味のわかる佳吟約七百餘を選んで、小半紙判の冊子に仕立

阿古耶の松六卷。これ等の外に、所謂艷本數部がある。【明治以後の作】駿甲俠客濱の松風一册○横濱奇文菊濱風噂の高島一册○春色娘節用一册○備後土産稻生夜話一册○馬鹿馬鹿卿々論一册○東京漫遊獨案内一册○物の始教早二册○說教心得草四册○說教新誌二册○歐行用文章一册○素讀究理草紙一册○神武天皇御傳記一册○西洋新書十册○各國英智史略二册○西哲叢談三册○教訓洗湯論一册○兎狸月下問答二册○西洋見聞圖解四册○和洋合才袋二册○萬國百物語八册。

【業績】彼は滑稽本作家としては、殿將ともいふべき地位にあつた。滑稽の才は相應あつたらしいが、最早この期に至ると、滑稽本が持つ清新さも魅力も殆ど失はれて、ただ型にはまつた形式的のものとなつてゐた。故に彼が「和合人」「八笑人」等の影響をうけ、傍ら自分の周圍の友人をモデルにした「七偏人」も、結局滑稽本界に大きな足跡を殘すことが出來ず全く滑稽本の最後をなしたに止まる。又彼は新しく勢力を得て來た人情本への進出をも試みた。けれども人情本とても頽廢文學として生命も短く、松亭金水の門に入つたとしても華々しい活動の世界はなかつた。また飜客出の彼に人情本作者として才が豐かであるとは言ひ得なかつた。從つて彼の戲作界に於ける業績は、江戸末期の文學を明治へまで持越したといふ點と、操觚界に於ける活動の點とにあると云ふべきである。

【參考】新修日本小說年表○古今狂歌人物誌○戊辰以來新刻書目便覽○明治初期戲作年表○早稻田文學（大正一五／四）【山崎・小柴】

梅墩詩鈔（ばいとんしせう）漢詩集　十二卷【著者】廣瀨旭莊【刊行】嘉永元年【解說】初・二・

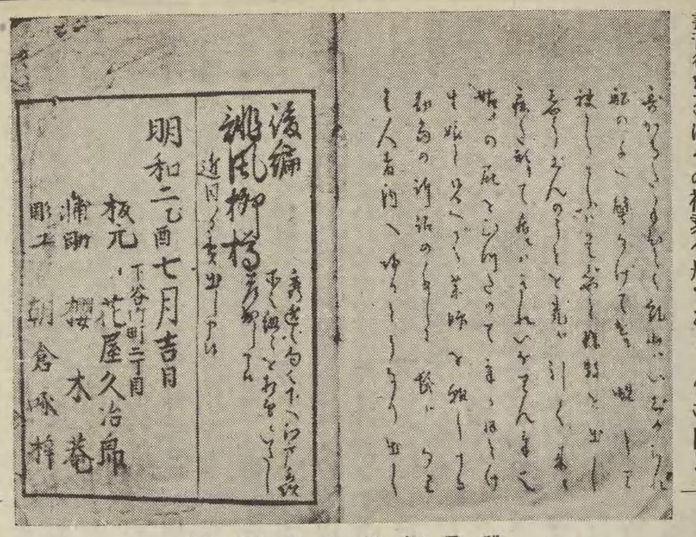


誹風柳

て、書肆花屋久治郎が出版したのに始まる。爾來天保九年に至る約七十五年間に百六十七編を刊行した。【諸本】原本は傳本甚だ稀れである。飜刻本に數種あるが、最も多く行はれてゐるのは、次の四種である。（一）近世文藝叢書川柳之部（變庭筆村校二册）所收のものは、初編より六十編までで、誹風柳樽全集（國書刊行會本）はその複刻合册である。（二）國民分には佳句名吟が割合に多いが、それ以後のものになると駄句狂句が漸く多くなる。尤も風俗史料としては、寧ろ後の部分に參考になる句が多い。また第二十四編以後にも、例へば第三十・三十一・三十四・七十等の各編には、初代川柳の選によつたものが含まれてゐる。なほこの「誹風柳多留」以外に「新編柳樽」と稱し、天保十二年より嘉永三年に至る約十年の間、即ち五世川柳の時代に、三十八册の柳樽が續刊されてゐるが、收むるところ多くは狂句であつて、その價値は正編に及ばざること甚だ遠いものである。【西原】

誹風柳多留拾遺（はいふうやなぎだるしふゐ）川柳集　十編十册【編者】未詳ではあるが、初編及び三編にある序文によつて、蓋し類題川柳集の嚆矢であらう。【西原】

賣卜先生糠袋（ばいぼくせんせいこぬかぶくろ）心學書　一卷　後編二卷【著者】盧白齋【刊行】正編安永六年、後編同七年【諸本】日本教育文庫心學篇に收む。【解說】著者盧白齋自らを賣卜者に擬し、一身上の問題の判斷を乞ふ人々に諭すに裁に書いてをり、陰陽者身の上知らず、實もなきことをいひ散したといふ意から「糠袋」と題名したと自序にいつてゐる。一々實際問題について意見を述べたところにこの書の特色があり、賣卜先生の言がきび〳〵してゐて痛切であり、文章最も生彩に富む。後編にはまた人物のみならず、蟲類・植木等との問答をも加へてゐるのが面白く、著者が文學的才能にも富んでゐたことが知られる。純文學以外の文學書として、この書の如きは注意



誹風柳樽初編（奥附）

て、書肆花屋久治郎が出版したのに始まる。爾來天保九年に至る約七十五年間に百六十七編を刊行した。【諸本】原本は傳本甚だ稀れである。飜刻本に數種あるが、最も多く行はれてゐるのは、次の四種である。(一)近世文藝叢書川柳之部（變庭鼎村校二冊）所收のものは、初編より六十編までで、誹風柳樽全集（國書刊行會本）はその複刻合冊である。(二)國民文庫中の川柳集（一冊）は、初編より四十五編までを收め、中根淑の「前句源流」の一篇を添へてゐる。(三)日本名著全集中の川柳雜俳集は初編より第三十一編まで、(四)岩波文庫中の「誹風柳多留」（三冊）は初編から二十四編までを收めてゐる。なほ目下柳樽刊行會の手によつて全編の飜刻が進められてゐる。【解說】第二十四編（寛政三年刊）、即ち初代川柳選の部分には佳句名吟が割合に多いが、それ以後のものになると駄句狂句が漸く多くなる。尤も風俗史料としては、寧ろ後の部分に參考になる句が多い。また第二十四編以後にも、例へば第三十・三十一・三十四・七十等の各編には、初代川柳の選によつたものが含まれてゐる。なほこの「誹風柳多留」以外に「新編柳樽」と稱し、天保十二年より嘉永三年に至る約十年の間、即ち五世川柳の時代に、三十八册の柳樽が續刊されてゐるが、收むるところ多くは狂句であつて、その價値は正編に及ばざること甚だ遠いものである。【西原】

誹風柳多留拾遺（はいふうやなぎだるしふゐ）　川柳集　十編十册【編者】未詳ではあるが、初編及び三編にある序文によつて、桃井庵和笛であらうと主張する人が多い。【名稱】最初は「古今前句集」と題し、後、「柳樽拾遺」と改題せられ、三度「類題秀句柳樽大全」と改題、更に「類題誹風柳樽」と改題された。【成立・刊行】最初は「古今和歌集」に擬して「古今前句集」と題し、序文も類別もそれに摸し、寛政八年の秋、江戸通油町蔦屋重三郎が發行したものを、花久卽ち星運堂がその版木を讓り受け、享和元年の頃、「柳樽拾遺」と改題して上梓したものである。【諸本】本書の飜刻本には、岐阜柳書刊行會の誹風柳多留拾遺一册、川柳雜俳集（日本名著全集）とがある。【解說】「柳多留」初編の編者吳陵軒の選拔に洩れた萬句合の殘句中から、更に淘汰精選した句集で、內容の排列は、四季・哀別・神祇・釋敎・戀・無常・遊里・戲場・史談・故事等に分ち、年代順に序列したものである。

賣卜先生糠袋（ばいぼくせんせぬかぶくろ）　心學書　一卷　後編二卷【著者】虛白齋【刊行】正編安永六年、後編同七年【諸本】日本敎育文庫心學篇に收む。【解說】著者虛白齋自らを賣卜者に擬し、一身上の問題の判斷を乞ふ人々に諭す體裁に書いてをり、陰陽者身の上知らず、實もなきことをいひ散したといふ意から「糠袋（こぬかぶくろ）」と題名したと自序にいつてゐる。一々實際問題について意見を述べたところにこの書の特色があり、賣卜先生の言がきび〳〵してゐて痛切であり、文章最も生彩に富む。後編にはまた人物のみならず、蟲類・植木等との問答をも加へてゐるのが面白く、著者が文學的才能にも富んでゐたことが知られる。純文學以外の文學書として、この書の如きは注意さるべきものであらう。ただその虛白齋の傳記の明かでないのは遺憾である。【白石・森】

誹枕（はいまくら）　俳諧集　上中下三册　【編者】高野幽山【名義】素堂の序に、「能因が枕をかつてたはぶれの號とす」とあるやうに、能因の著「歌枕」に擬して誹枕と名づけたのである。【刊行】延寶八年。但し寬文の頃刊行すべきであつたのを障多くて延びたのであると、素堂の序に見える。【諸本】談林俳諧集（俳書大系）所收。【解說】日本全國を跋涉した旅行家の幽山が、旅行中に集め得た作の中からと、それに諸家の作をも加へて撰したものである。上・中・下三卷に亙つて五畿七道のその國々で詠まれた俳句及びその國を詠んだ俳句を各國別に集め、下卷には右の次に外國として、外國に關する俳句、追加の俳句があり、次に小泉友賢が幽山の旅行辯等を述べた寬文十年の漢文の序引を以て始まる宮城野萩・名取川埋木・實方塚之傳・阿福紫松・末松山・武藏松・坂越後・十符菅など、八種の物の諸家の俳句があり、次にこの八種に關する加藤磐齋の寬文九年の「名所の草木を見て和哥并言葉」及び「名所の草木を見てよめる狂吟の長哥」があつて、追加として右の八種を詠んだ諸家の俳句があり、次に梅花翁（宗因）の幽山の需めに應じたとの序引を持つ「哥仙誹諧寄名所」の獨吟歌仙があり、續いて各篇「同」と題した露沾・怨流・幽山三吟、云奴・可心・幽山三吟、曲言・一鐵・幽山三吟、西岸寺任口獨吟、高瀧益翁獨吟、旨如獨吟、池西言水・才丸兩吟、幽山・幸順・泰清三吟、幽山・泰清・幸順三吟、幽山・松陰・千春三吟、幽山・素堂兩吟の十一篇の歌仙、都合十二篇の歌仙があつて終つてゐる。發句すべて九百二十七句ある。作者は、維舟（重頭）系統の貞門の人や幽山に直接間接の關係ある蕉門の人の外は、凡て談林及びその亞流の人々である。【價値】各國に配當された俳句には、國を誤つたものもあるが、併しこれ等の俳句が、その國々の名勝舊跡や著名な人物事項等を詠んでゐるので、句によつて編まれた一種の文化地誌の如きものになつてゐる。俳諧集ではあるが、全國旅行家の幽山の地理的俳諧集であるので、三千風の「日本行脚文集」（別項）や芭蕉の「奧の細道」（別項）その他の紀行と共に特筆すべき價値を持つもので、殊に奧州の宮城野の萩等八種の物に關する諸家の俳句を特別に集錄したなどは、「奧の細道」に對して既に先鞭を着けてゐるものとも云へる。また外國の部には、「山海經」起原の空想的な國所や、唐土・朝鮮・琉球等を詠んだものの中に、るすん・おらんだ・かびたん等を詠んだものをも交へてゐるのは、當時の南蠻趣味を反映するもの

である。

俳味（はいみ）「瓊音」を見よ。　〔萩原〕

梅蕾餘薫（ばいらいよくん）翻譯小說　全二冊　【譯者】牛山鶴堂（名は良助。長野縣の人。いふ）【原作】サー・ウオタア・スコットの傑作「アイヴアンホー」【刊行】明治十九年十二月前編、二十年二月後編刊行。【解說】纂譯と斷つてあるから全譯でないことは勿論であるが、譯文だけで言へば、やゝ雅醇流暢であつて、明治初期の翻譯文學では出來のいゝ方であらう。各章對句の標題など、馬琴の小說を眞似た趣がある。原作はイギリス王リチャード一世が、オーストリヤの一諸侯の手に囚へられ、爲めに人民は塗炭の苦しみに陷るが、アイヴアンホー、ロビンフードなどの志士の活躍によつて、再びイギリスの王位に復することを書いたものである。この書は純然たる歷史小說であるのに、當時譯者はこれに政治小說と銘を打つてゐる。これは一つは時代の好尙に從つたのであらうが、一つはこの小說が壓抑されたサクソン族が忍苦多年の後、ノルマン族に勝つことを描いてあるので、當時民間志士の苦節と政府の壓迫とをこれに引き當てて見て、譯者自身が眞面目に政治小說の積りで譯したのかも知れない。當時政治とか自由民權論とかが社會の意識を集めてしまつてゐた事は、かういふところにも現はれてゐる。　〔柳田（泉）〕

誹林一字幽蘭集（はいりんいちじいうらんしふ）俳諧集　上中下三冊　【撰者】水間沾德【名義】素堂の序に、「夫幽蘭也者、應二取二諸離騷一而除レ艾長レ蘭之意一」と云ひ、「斯集也、起二筆於性之一字一、而揭二情心忠孝仁禮義智始終本末等總百字之題一云々」とある如く、性・情等の一字題百題を選んで分類し、佳句を選んだ意を離騷の長蘭から取つて名づけたのである。【刊行】元祿五年九月【諸本】談林俳諧集（俳書大系）所收。【解說】露沾及び素堂の序によると、內藤風虎の撰集に、「夜歸」「櫻川」「信太浮島」といふ三部集があつたが、餘り世に行はれぬため、その男露沾（別項）が門下の沾德に三部集の再撰を託したので、沾德が三部集の拔萃に古風今樣の佳句をも加へて撰集したものである。上卷には三十三題あつて發句二百二十七句、中卷には四十三題あつて發句三百六十六句、下卷には二十四題あつて發句二百三十六句を收めた外、沾德・望月・且水等七吟の歌仙、露沾・沾德・春嶋等の百韻を添へてある。作者は貞門以前、貞門・談林・蕉門に涉り、時代流派共廣きに亙つて一時一派に偏しない態度を示してゐる。卷頭には露沾・素堂の序の外、標出引用之書目錄と題して漢書四十六種、倭書五十七種の書目を揭出し、なほ三卷の註字目錄を揭げてゐる。又本集は三部集に存した句は句頭に集名を加へ、集中の句の句材となつてゐる古歌・古詩・古典を註記し、紛れ易い假名には漢字を傍記し、一字題の性・心・情・志の四者には意義を註記するなど、凡て委曲を盡してゐる。かくて本集は各時代に亙つて著名な句の知られるものも少からず、句材の典據の知られるなど、價值多き集である。　〔萩原〕

陪臚（ばいろ）雅樂舞曲【名義】梵語からその名が起つてゐる。【異稱】陪臚破陣樂・倍臚【性質】林邑樂。古樂の中曲。平調曲に屬する。拍子十二（只拍子）。舞があり四人で舞ふ。舞人は常裝束に太刀を帶び、右手に鉾を持ち、左手に楯を持ち、互に相戰ふ態をなす。もと佛樂として傳はつたので、唐招提寺・東大寺等にてこれを舞ふが、元來、この曲は戰爭舞樂であるから戰陣に於て用ひられ、源義家などは屢々軍中に於てこの樂を奏した。それでこの樂を七遍奏する時に舍毛音が現はれると、我が軍は戰に勝つと稱せられてゐる。この舍毛音とは如何なるものであるか從來不明であつたが、高楠順次郎博士の研究に依れば、印度音律のSamaの音をいふもので、音律上の變化であるといふことである。察するところ全奏者の意氣投合すれば、只拍子の曲として音尾が少しく昇る癖のあるものである。このアクセントの昇りをSama卽ち舍毛音といふものらしく、要するに全士の意氣投合すれば、軍に勝つことを示したものと思はれる。答舞はない。但し「太平樂」と番舞なることがある。【沿革】從來普通には胡人班朗德の作曲であると傳へられてゐるが、班朗德とは如何なる人であるか不明である。一說には林邑國人であるといふ。この樂は天平八年に林邑國の僧佛哲が我が國に傳へた所の林邑八樂の一つであつて、その樂の性質から見て印度樂であるらしい。高楠順次郎博士はこれを佛教樂の毗盧擇迦の子（Vairudhaka）か、又は婆羅門樂の阿修羅王（Vairocana）か、何れかであらうと述べてゐられるが、これは未だ何とも決定する譯には行かぬ。我が國に於て聖德太子が守屋の陣を破り給ふ時に、この樂を奏されたといふ傳說があるが、それは後世の附會であることは明かである。この曲は天平八年に佛哲によつて傳へられ、東大寺大佛の開眼式に奏せられた。その後、佛寺並に宮廷に於て屢々奏せられて今に至つてゐる。　〔田邊〕

俳論（はいろん）【名義】俳論といふ語が一般的な用法のものになつたのは、明治以來のことであらう。文考の「雨無俳諧」に俳論の話が見えたり、やゝ降つて白露の著に「誹論」（別項）があつたりするが、普通には寧ろ俳諧の論と云つてゐて、俳論といふ語は一般的な用法のものにはなつてゐなかつたのである。俳論は詩論・歌論等の語と同列に立つ語で、俳諧の本質原理に關する研究論議の謂である。俳諧上の主義主張に關する論爭も俳論と云へないことはないやうであるが、俳論の第一義的な意味はこれを指さず、論爭の內容が俳諧の本質原理に關する場合、第二義的な意味で俳論と云ひ得るだけである。かくて論爭の形を取つたものでも、その內容が立派な俳論をなしてゐるものがあり、又多少とも俳論的なものを含むことが多い。【俳話との關係】俳話は俳諧に關する各種の談話の謂で、俳論と對立させる場合には、兩者は明かに區別せらるべきものであるが、併し談話の形式を取りながら內容が俳論である場合があり、俳論と俳論でないものとが混淆してゐる場合があるので、かゝる關係から俳論と俳話とは截然區別し難いものが多い。特に芭蕉の言談の如き、論議の道筋を略して結論のみを表白するものがあり、また俳話にもこの種のものが少くないので、一層俳論と俳話との嚴格な區別は立てにくい。それ故俳論には以上の如き俳話も含めて考へられねばならぬ。要するに俳論を交へない俳話が、眞に俳論に對立せしめられるものであるが、俳話には多少とも俳論を交へたものが多く、かゝる關係から、人によつては俳論との區別を撤して俳話の名に於て一括してゐる位である。

【沿革】俳論は歌論・連歌論の系統を引き、それを母胎とするものであるから、俳論の其礎素材を知るには、歌論・連歌論を顧みる必要がある。併し玆には俳論の沿革のみを說くこととする。【元祿以前】俳論として見るべき最も古いものは、天文九年の「守武千句」（別項）の自跋であらう。僅か數語に過ぎないが、俳諧の本質論に觸れてゐる。やゝ降つて寬永十五年に成つた重頼の「毛吹草」（別項）には、連歌と俳諧との形態上の關係を說き、同十八年に公にされた德元の「誹諧初學抄」（別項）には、重頼とほぼ同樣の意見を述べてゐる。以上の兩書に次いで、慶安四年の貞德の「御傘」（別項）の序では、連歌と俳諧とを比較して論じ、寬文二年の是誰の「玉櫛笥」（別項）では、貞德を祖述し、正風體を根ざしとし、狂言を花とすべきことを述べてゐる。降つて延寶に入ると、談林の俳論家たる惟中は、「誹諧蒙求」「誹諧三部

ものがある。芭蕉は直接一部の俳論書をも遺さなかつたが、その所論は多くの門弟の書中に書き留められ、俳諧の本質論及び蕉風俳論の基本となつて居り、特に土芳の「三冊子」（別項）や去來の著書の如きは、芭蕉の所論を最も忠實に傳へてゐる。後の蝶夢の「蕉門俳諧語錄」（別項）の中、佛兮・湖中の「俳諧一葉集」遺語之部には、芭蕉の語を輯錄してもゐる。芭蕉の門下にも多數の論客があつて、盛んに所信を披瀝した。元祿四年の其角の「雜談集」（別項）は、大體俳話といふべきものであるが、中に著者の俳論の見るべきものがあり、また去來の「花實集」の中に、彼の俳論を見ることが出來る。元祿五年の支考の「葛の松原」（別項）は、蕉門の俳論書として最初のものと云ひ得るが、消息を集めて評論を加へた「雅文消息」（別項）は、許六の俳論を窺ひ得ると共に、後に述べる「誹諧耳底記」（別項）と併せて野坡の所見を知るべきものである。去來の俳論は、上述の「俳諧問答」によつて窺ひ得る外、許六の「篇突」を難じた「旅寢論」（別項）、其角との對談を主なものとして、芭蕉の教を說き、同門の發句等に關する意見を述べた「花實集」（別項）がある。なほこれ等と併せて見るべきもの?に「去來抄」（別項）がある。北枝の「山中問答」（別項）は、芭蕉の訓言を傳へた小篇であり、土芳の「三冊子」は、芭蕉の俳論の外、土芳の解釋も窺はれる。當時蕉風以外にあつて名を得た俳論書として、鬼貫の「獨言」（別項）がある。作句上の實際問題に觸れて「まこと」を高唱したものとして注意される。蕉門內に於ける論爭として、

ある。併し玆には俳論の沿革のみを説くこととする。〔元祿以前〕俳論として見るべき最も古いものは、天文九年の「守武千句」（別項）の自跋であらう。僅か數語に過ぎないが、俳諧の本質論に觸れてゐる。やゝ降つて寛永十五年に成つた重頼の「毛吹草」（別項）には、連歌と俳諧との形態上の關係を説き、同十八年に公にされた德元の「誹諧初學抄」（別項）には、重頼とほぼ同樣の意見を述べてゐる。以上の兩書に次いで、慶安四年の貞德の「御傘」（別項）の序では、連歌と俳諧とを比較して論じ、寛文二年の是誰の「玉櫛笥」（別項）では、貞德を祖述し、正風體を根ざしとし、狂言を花とすべきことを述べてゐる。降つて延寶に入ると、談林の俳論家たる惟中は、「誹諧蒙求」「誹諧三部抄」「俳諧或問」（別項）「近來誹諧風體抄」（別項）等を矢繼早やに著はし、俳諧の本質を寓言とする彼の論を押し進め、談林俳諧のために大に辯じた。これと共に、この延寶末年は貞門と談林との論爭の盛んな時代で、貞門の隨流と談林の惟中、それに第三者が加はつて多くの論爭書が出たが、これ等の中に、俳諧の本質に關する意見も闘はされてゐるが、多くは枝葉末節に流れ、喧騒を事としてゐる。〔元祿期〕元祿期に入つては、頽勢に向つた貞門の間に内輪爭ひがあつて、元祿四年の林鴻の「京羽二重」（別項）に對する翌五年の隨流の「貞德永代記」（別項）、これに對する談林系の只丸の「足掛」及び翌六年の林鴻の「あらむつかし」の論爭があつたが、これ等は俳諧の根本論に觸れる點が少く、徒らに論難を事とする傾きがあつた。特に時代は最早貞門を去らうとして居り、元祿期は蕉風が勃興し、その最も隆盛を極めた時代で、俳論も亦この方面に見るべきものがある。芭蕉は直接一部の俳論書をも遺さなかつたが、その所論は多くの門弟の書中に書き留められ、俳諧の本質論及び蕉風俳論の基本となつて居り、特に土芳の「三册子」（別項）や去來の著書の如きは、芭蕉の所論を最も忠實に傳へてゐる。後の「蝶夢の「蕉門俳諧語錄」（別項）の中、佛兮・湖中の「俳諧一葉集」遺語之部には、芭蕉の語を記錄してもゐる。芭蕉の門下にも多數の論客があつて、盛んに所信を披瀝した。元祿四年の其角の「雜談集」（別項）は、大體俳話といふべきものであるが、中に著者の俳論の見るべきものがあり、また去來の「花實集」の中に、彼の俳論を見ることが出來る。元祿五年の支考の「葛の松原」（別項）は、蕉門の俳論書として最初のものと云ひ得るが、平易に芭蕉の旨意を傳へてゐる。支考は蕉門中最も多く論じた人で、その所説に對しては毀譽樣々であるが、要するに芭蕉の説を進め所謂美濃派の俳論を形成したのである。著はす所、「葛の松原」の外、「續五論」「白馬奥儀解」「俳諧十論」「十論爲辨抄」「俳諧古今抄」（葛の松原參照）等は、その纏まつたもので、その他の集著の中にも、その俳論を窺ひ得る。就中「續五論」と「俳諧十論」は彼の俳論の代表的なもので、論旨は芭蕉の教をやゝ離れてゐるが、その組織的な點に於ては俳論書中の白眉である。支考に次いで多く論じたのは許六で、彼の「俳諧問答」（別項）は、去來との往復書の集成であるだけ、彼の俳論と共に去來の俳論をも窺ひ得る。その李由と共撰の「篇突」（別項）には、彼の俳諧の理想を示し、「歷代滑稽傳」（別項）は俳諧史であるが、これに添へた「一枚起請」や「俳諧指南」には、その所信を見せてゐる。嘯山が許六と野坡との間に論難應酬した消息を集めて評論を加へた「雅文消息」（別項）は、許六の俳論を窺ひ得ると共に、後に述べる「誹諧耳底記」（別項）と併せて野坡の所見を知るべきものである。去來の俳論は、上述の「俳諧問答」によつて窺ひ得る外、許六の「篇突」を難じた「旅寢論」（別項）、其角との對談を主なものとして、芭蕉の教を説き、同門の發句等に關する意見を述べた「花實集」（別項）がある。なほこれ等と併せて見るべきものに「去來抄」（別項）がある。北枝の「山中問答」（別項）は、芭蕉の訓言を傳へた小篇であり、土芳の「三册子」は、芭蕉の俳論の外、土芳の解釋も窺はれる。當時蕉風以外にあつて名を得た俳論書として、鬼貫の「獨言」（別項）がある。作句上の實際問題に觸れて「まこと」を高唱したものとして注意される。蕉門内に於ける論爭として、支考の「露川責」、これに對する露川の「合槻」があり、また支考の「俳論十論」に對する越人の「不猫蛇」（別項）、これに對する支考の「削掛の返事」、更にこれに對する越人側の「猪の早太」の論爭などがあるが、いづれも俳諧の原理を離れて揚足取になり、喧嘩口論に終つてゐる。〔元祿以後〕元祿期を過ぎると、一般俳諧の衰運に伴つて俳論も亦衰退した。刊年は不明であるが、この期に成つた早いものの一つは、風之の「誹諧耳底記」であらうが、同書によつて野坡の晩年の所見が窺はれ、また蕉風及び蕉風俳論の頽廢して行く樣子も窺はれる。刊年の明かなもので早いのは、涼帋の「南北新話」（別項）で、伊勢派の俳論俳話と共に彼の意見が述べられてゐる。涼帋には、なほ「片歌二夜問答」（別項）があつて、片歌を復興し、上代精神の復古を鼓吹する論と共に、芭蕉の善惡兩面に對して直言してゐるが、芭蕉に捉はれない所は多とすべきであるけれども、片歌復興の如き時代錯誤は、畢竟芭蕉精神が解せられなくなつた時代を物語る。やゝ降つて成つた白露の「誹論」（別項）は、史的な俳論と共に、古人の言を引いて自説を述べ、比較的整うた結構を成して居り、五竹坊の「十二夜話」（別項）は、支考・盧元坊の教を説き、自説を述べたもので、美濃派の俳論を聞くべく、蓼太の「俳諧棚捜」（別項）は、蕉風俳諧に對する彼の解釋を聞き得る。嘯山の「雅文消息」は、許六・野坡の消息に對する彼の評言に、その俳論が窺はれ、秋成の「也哉抄」（別項）は、發句の切字に關する俳論といふべく、蕪村の「新花摘」（別項）の其角論の如きも傾聽すべきものである。几董の「新雜談集」（別項）は、俳話の中に俳論として聞くべきもののあること、其角の「雜談集」と同樣であり、大江丸の「俳懺悔」「俳諧袋」（各別項）も同樣である。また白雄の「俳諧寂栞」と「白雄夜話」（各別項）は、ともに蕉風の大意を説いたもので、著者の俳論を知らしめる。これとほぼ同時頃の積翠の「俳諧或問」は、蕉門論客の論述の跡に就いて述べた私見で、天保の亦夢の俳諧の體格について論じた「俳諧一串抄」（別項）と共に、卓拔な俳論として相雙ぶべきものである。天保末に梅室が後述の「七草」に對する間接の反駁書として著はした「梅林茶談」の、多制の弊と蕉風の寛制及び祕事の謂れなきことを論じた論は、次いで弘化に現はれた梅通の「舍利風語」（別項）の蕉風諸説の中、紛らはしいものに施した解説と共に、江戸期末期にあつて注意すべきものである。さてこの期にも論爭は行はれ、深川湖十（二世）の「江戸廿歌仙」（別項）を批議した蓼太の「俳諧雪おろし」（別項）から始まつて、江戸座と雪門との對戰と

いふところにも現はれてゐる。〔柳田（泉）〕

誹林一字幽蘭集（はいりんいちじいうらんしふ）　俳諧集　上中下三册　【撰者】水間沾德　【名義】素堂の序に、「夫幽蘭也者、應二取一諸離騷一而除レ艾長レ蘭之意一と云ひ、一斯集也、起二筆於性之一字一、而揭二情心忠孝仁禮義智始終本末等總百字之題一云々」とある如く、性・情等の一字題百題を選んで分類し、佳句を選んだ意を離騷

陪臚（ばいろ）　雅樂舞曲　【名義】梵語からその名が起つてゐる。【異稱】陪臚破陣樂・倍臚　【性質】林邑樂。古樂の中曲。平調曲に屬する。拍子十二（只拍子）。舞があり四人で舞ふ。舞人は常裝束に太刀を帶び、右手に鉾を持ち、左手に楯を持ち、互に相戰ふ態をなす。もと佛樂として傳はつたので、唐招提寺・東大寺等にてこれを舞ふが、元來、この曲は戰爭舞樂

俳論（はいろん）　【名義】俳論といふ語が一般的な用法のものになつたのは、明治以來のことであらう。支考の「雨無俳諧」に俳論の語が見

たといふ傳説があるが、それは後世の附會であることは明かである。この曲は天平八年に佛哲によつて傳へられ、東大寺大佛の開眼式に奏せられた。その後、佛寺並に宮廷に於て屢々奏せられて今に至つてゐる。〔田邊〕

俳論（はいろん）　【名義】俳論といふ語が一般的な用法のものになつたのは、明治以來のことであらう。支考の「雨無俳諧」に俳論の語が見

【沿革】俳論は歌論・連歌論の系統を引き、それを母胎とするものであるから、俳論の其處素材を知るには、歌論・連歌論を顧みる必要が

て考へられねばならぬ。要するに俳論を交へない俳話が、眞に俳論に對立せしめられるものであるが、俳話には多少とも俳論を交へたものが多く、かゝる關係から、人によつては俳論との區別を撤して俳話の名に於て一括してゐる位である。

なつた論爭や、ずつと降つて天保十一年に天來が俊峯の俳諧を難じた「誹諧七草」に端を發した貞門系と蕉風系との論爭もあるが、これ等論難を事とする中に閑くべき論もないではない。【明治期】明治二十六年、子規が「芭蕉雜談」に於て連句非文學論を唱へて以來、新興俳壇に於ては、俳論・俳話共に、幕末までのものとは全然趣を變へてしまつた。即ち子規の「獺祭書屋俳話」（別項）以來の俳論・俳話は、俳句中心のものとなつて連句は殆ど顧慮せられなくなり、同時に蕉村及び芭蕉への復歸と共に、歐米科學の新知識によつて理論づけようとする傾きのものとなつた。子規の「俳句問答」（明治三十九年）、碧梧桐の俳諧漫話（同三十六年）、虚子の「俳諧獨參」（同四十年）、「老梅居俳話」（大正元年）の如き、明治俳壇に於ける新しい俳論・俳話を見るべきものの一例で、大正期にかけての大須賀乙字の俳論は、特に留意せらるべきものであつた。

【參考】俳諧論集（俳諧文庫第十三篇）○續俳諧論集（俳諧文庫第十五篇）○俳論作法集（俳諧叢書第四篇）○雜俳話文集（俳書大系第四篇）○中興俳話文集（俳書大系第六篇）○近世俳話句集（俳書大系第十篇）○雜俳諧續集（俳書大系篇外）○俳諧の根本問題 太田水穗○俳諧論戰史 鵜月退藏○俳諧史の研究 ○俳論史 ○明治大正俳論史 大藤梅明（俳句講座）○改造社版俳句講座（俳論俳文篇）（志田・名畑）

俳論俳文　はいろんはいぶん　俳書　三冊　【著者】白露（八丈）　【刊行】明和七年八月　【成立】明和七年八月

【概説】この書は、俳諧の正風の祖述を主意とし、宗因の自由奔放な俳風を排撃し、貞門の俳諧を難じた「誹諧七草」に對する直訴等を紹介し、下つて白雄・是綱等の所說を擧げ、明治の俳論に至つて筆を結んである。【批評】ただ簡明を要としてゐるもので、百貫の價値は無いが、俳諧の大體の動きを知る參考には足らぬ小冊子である。研究書目の或る數を加へた。【藤田】

破睿　はえい　「子音」を見よ。

破戒　はかい　小說　【作者】島崎藤村　【刊行】明治三十九年三月、緑蔭叢書第一編として上田尾。後に、大正五年三月改版發行（新潮社）。大正十一年十月、藤村全集第三卷に採錄の際、全部に亙つて文體及び表現に訂正を加へた。

【梗概】瀬川丑松は若い獨身の小學校教師で、當時の新しい傾向の思想の洗禮をも受けてゐる。猪子蓮太郎といふ部落民出の解放思想家に心醉してゐる。實は丑松自身も部落民なのだ。年老いた丑松の父は、それを「隱せ」とばかり敎へてゐる。自分もさうばかり信じて來た。併し牧場の一牧夫にすぎない父親は、職業のために不慮の死をとげてしまふ。丑松は自分自身の素性を隱す虛僞とその卑屈さに次第に堪へ難くなつてくる。猪子は病軀を押して解放運動につくしてゐるが、頑迷な反對側の壯漢に暗殺される。猪子が身を以てした敎訓は、遂に丑松を立ち上らせずには置かなかつた。彼は土の上にひれ伏して、自分自身の素性を打明け、今まで自分自身を僞り、他人を欺いてゐた虛僞を懺悔するのである。

醫校を追はれ、住み馴れた村を追はれた丑松の前途には、はるかな北米の空があつた。また彼の胸には戀人の心を奪げるやうほの

なつた論爭や、ずつと降つて天保十一年に天來が俊峯の俳諧を難じた「誹諧七草」に端を發した貞門系と蕉風系との論爭もあるが、これ等論難を事とする中に閑くべき論もないではない。【明治期】明治二十六年、子規が「芭蕉雜談」に於て連句非文學論を唱へて以來、新興俳壇に於ては、俳論・俳話共に、幕末までのものとは全然趣を變へてしまつた。即ち子規の「獺祭書屋俳話」（別項）以來の俳論・俳話は、俳句中心のものとなつて連句は殆ど顧慮せられなくなり、同時に蕉村及び芭蕉への復歸と共に、歐米科學の新知識によつて理論づけようとする傾きのものとなつた。子規の「俳句問答」（明治三十九年）、碧梧桐の俳諧漫話（同三十六年）、虚子の「俳諧獨參」（同四十年）、「老梅居俳話」（大正元年）の如き、明治俳壇に於ける新しい俳論・俳話を見るべきものの一例で、大正期にかけての大須賀乙字の俳論は、特に留意せらるべきものであつた。

【參考】俳諧論集（俳諧文庫第十三篇）○續俳諧論集（俳諧文庫第十五篇）○俳論作法集（俳諧叢書第四篇）○雜俳話文集（俳書大系第四篇）○中興俳話文集（俳書大系第六篇）○近世俳話句集（俳書大系第十篇）○雜俳諧續集（俳書大系篇外）○俳諧の根本問題 太田水穗○俳諧論戰史 鵜月退藏○俳諧史の研究 ○俳論史 ○明治大正俳論史 大藤梅明（俳句講座）○改造社版俳句講座（俳論俳文篇）（志田・名畑）

俳論俳文　はいろんはいぶん　俳書　三冊　【著者】白露（八丈）　【刊行】明和七年八月　【成立】明和七年八月

【概説】この書は、俳諧の正風の祖述を主意とし、宗因の自由奔放な俳風を排撃し、貞門の俳諧を難じた「誹諧七草」に對する直訴等を紹介し、下つて白雄・是綱等の所說を擧げ、明治の俳論に至つて筆を結んである。【批評】ただ簡明を要としてゐるもので、百貫の價値は無いが、俳諧の大體の動きを知る參考には足らぬ小冊子である。研究書目の或る數を加へた。【藤田】

破睿　はえい　「子音」を見よ。

破戒　はかい　小說　【作者】島崎藤村　【刊行】明治三十九年三月、緑蔭叢書第一編として上田尾。後に、大正五年三月改版發行（新潮社）。大正十一年十月、藤村全集第三卷に採錄の際、全部に亙つて文體及び表現に訂正を加へた。

【梗概】瀬川丑松は若い獨身の小學校教師で、當時の新しい傾向の思想の洗禮をも受けてゐる。猪子蓮太郎といふ部落民出の解放思想家に心醉してゐる。實は丑松自身も部落民なのだ。年老いた丑松の父は、それを「隱せ」とばかり敎へてゐる。自分もさうばかり信じて來た。併し牧場の一牧夫にすぎない父親は、職業のために不慮の死をとげてしまふ。丑松は自分自身の素性を隱す虛僞とその卑屈さに次第に堪へ難くなつてくる。猪子は病軀を押して解放運動につくしてゐるが、頑迷な反對側の壯漢に暗殺される。猪子が身を以てした敎訓は、遂に丑松を立ち上らせずには置かなかつた。彼は土の上にひれ伏して、自分自身の素性を打明け、今まで自分自身を僞り、他人を欺いてゐた虛僞を懺悔するのである。

醫校を追はれ、住み馴れた村を追はれた丑松の前途には、はるかな北米の空があつた。また彼の胸には戀人の心を奪げるやうほの

のであるが、右に記せる如く、二編以外は能六齋の撰と見る事が出來ない。【藤田】

破睿　はえい　「子音」を見よ。

破戒　はかい　小說　【作者】島崎藤村　【刊行】明治三十九年三月、緑蔭叢書第一編として上田尾。後に、大正五年三月改版發行（新潮社）。大正十一年十月、藤村全集第三卷に採錄の際、全部に亙つて文體及び表現に訂正を加へた。

【梗概】瀬川丑松は若い獨身の小學校教師で、當時の新しい傾向の思想の洗禮をも受けてゐる。猪子蓮太郎といふ部落民出の解放思想家に心醉してゐる。實は丑松自身も部落民なのだ。年老いた丑松の父は、それを「隱せ」とばかり敎へてゐる。自分もさうばかり信じて來た。併し牧場の一牧夫にすぎない父親は、職業のために不慮の死をとげてしまふ。丑松は自分自身の素性を隱す虛僞とその卑屈さに次第に堪へ難くなつてくる。猪子は病軀を押して解放運動につくしてゐるが、頑迷な反對側の壯漢に暗殺される。猪子が身を以てした敎訓は、遂に丑松を立ち上らせずには置かなかつた。彼は土の上にひれ伏して、自分自身の素性を打明け、今まで自分自身を僞り、他人を欺いてゐた虛僞を懺悔するのである。

醫校を追はれ、住み馴れた村を追はれた丑松の前途には、はるかな北米の空があつた。また彼の胸には戀人の心を奪げるやうほの

語に及び、その後、支考・許六・去來等の論爭の意見を陳ね、鬼貫の論を瞥め、原松や羊素の三册には、扉に「松延文庫」、又は「松延」と云ふ號が記してある。元編以下近刻の撰者があるが、出なかつたらしい。

【備考】能六齋の代表的編書として名高いものであるが、右に記せる如く、二編以外は能六齋の撰と見る事が出來ない。【藤田】

破睿　はえい　「子音」を見よ。

破戒　はかい　小說　【作者】島崎藤村　【刊行】明治三十九年三月、緑蔭叢書第一編として上田尾。後に、大正五年三月改版發行（新潮社）。大正十一年十月、藤村全集第三卷に採錄の際、全部に亙つて文體及び表現に訂正を加へた。

【梗概】瀬川丑松は若い獨身の小學校教師で、當時の新しい傾向の思想の洗禮をも受けてゐる。猪子蓮太郎といふ部落民出の解放思想家に心醉してゐる。實は丑松自身も部落民なのだ。年老いた丑松の父は、それを「隱せ」とばかり敎へてゐる。自分もさうばかり信じて來た。併し牧場の一牧夫にすぎない父親は、職業のために不慮の死をとげてしまふ。丑松は自分自身の素性を隱す虛僞とその卑屈さに次第に堪へ難くなつてくる。猪子は病軀を押して解放運動につくしてゐるが、頑迷な反對側の壯漢に暗殺される。猪子が身を以てした敎訓は、遂に丑松を立ち上らせずには置かなかつた。彼は土の上にひれ伏して、自分自身の素性を打明け、今まで自分自身を僞り、他人を欺いてゐた虛僞を懺悔するのである。

醫校を追はれ、住み馴れた村を追はれた丑松の前途には、はるかな北米の空があつた。また彼の胸には戀人の心を奪げるやうほの

があつたのである。

【解説】この作中には北信州の小諸、飯山邊の自然と農村の社會生活とが、多彩な調子の高い筆觸と濃厚な地方色とをもつて立體的に而も生々と描寫されてゐる。小學校教師・農民・牧夫・田舍政治家・僧侶等、さまざまの階級と職業の人々の群れとが書き分けられてゐる。四季に移り變る高原の自然の精緻な描寫と、地方色を現はした方言の自由な驅使とは、この作を農村小說・鄉土小說の先驅たらしめてゐる。敎育者の社會の暗黑面と、僞善を暴露した敎育問題を取扱つた小說としても一面目を有してゐる。この作のプロットが劇的であるためか、發表當時、卽ち明治三十九年七月、東京眞砂座に脚色上演され（小山內薰脚色、昭和三年一月「聯和時報」所載）に書かれた。【批評】最も若い頃に、ルソオの「懺悔錄」のいち早い讀者の一人であつた藤村に、その各時代の著作を通じて、自己告白の欲求と意志をみるのは不思議ではない。浪漫的の激しい情熱が現實に沈潛した時、其處に觸發する火花のやうな自己告白の欲求と意志が生れる。その最初の激しい姿を現はしたのが「破戒」である。土にひれ伏して自己告白の叫びをあげる主人公丑松は、また當時の作者の心の姿でもある。そこには近代以前の懺悔者のやうな神をおそれたり、神をおそれる者の罪の意識などがあるわけではない。ただ眞の自分自身のすがたを自らも見直し、且つ人にも示さうとするのだ。因襲と虛僞を捨てること、眞の赤裸々の自己を表白すること、そこに新しい生活の出發がある。「破戒」に姿を現はし、「春」と「家」（各別項）を經て「新生」（別項）で、再び激しい形をとり、「嵐」（別項）「夜明け前」に及んで、更に新しく激しい第三の形相を現はさうとしてゐるものは、この自己告白の欲求と意志との進展の歷史である。「破戒」はこれによつて、爾來作者の所謂「一寫實家として進んで行く」べき、散文作家としての第一步を踏み出したものである。それまでの詩から散文藝術への、浪漫的から現實主義への過渡の時代の產物である。而もこの作ほど色々の要素をもち、色々の側面から眺められる作物も少い。第一に現實の社會問題を取扱つた所の解放的精神に滿ち溢れた小說である。換言すれば、ペンとノートをもつて研究し、調べ上げた藝術である。その調べ上げた材料を基として强い主觀化された世界に再創造した思想的の匂ひの高い小說である。作者の主觀的思想的の表現を寓するための一樣式であると共に、克明に調べ上げた藝術としてのそれであつたのだ。社會の虛僞と因襲のために犧牲となつて滅び行く者を救ふには、彼等自身が自覺を以て立ち上る外に道はないといふことを深く暗示してゐる。後年の水平運動者がこの作に對して同感と感謝を捧げてゐる所以でもある。この作の發表當時は各方面に甚大なセンセーションを捲き起した。新しき現代日本文藝の黎明が、この作に起つたと見てゐる文藝史家もある。當時島村抱月は、「予はこの作に對して小說界が始めて更に新しい廻轉期に達したことを感ずるの情に堪へぬ。歐羅巴に於ける近世自然派の問題的作品に傳はつた生命は、この作に依つて始めて我が創作界に對等の發現を得たといつてよい。十九世紀末式ヴェルト・シュメルツの香ひも出てゐる。我が小說界に一期を劃するもの、若しくは劃せんとしつつあつた幾多の先驅者を總括して、最も鮮かに新機運の施旗を揭げたものとして、予はこの作に滿腔の敬意を捧ぐるに躊躇しない。破戒はたしかに近來の大作である」とみてゐる。爾來「破戒」の評及び研究に關する文獻は枚擧にいとまないが、就中、作者自身の感想「目醒めたものの悲しみ」外數項は、注目すべきものである。

破戒曾我（はかいそが）　脚本　一幕一場　史劇

【作者】山崎紫紅【由來】市川左團次が作者へ、芝居道初春の慣例として曾我に關した新作を依賴した。紫紅は前年箱根に遊んだ時、腦裡に浮動した幻想を纏めて本作を成したといふ。【興行】明治四十二年一月、東京明治座。主なる役割は、曾我箱王丸（市川左團次）・兄十郎祐成（市川壽美藏）・箱根僧至山（市川左升）・大磯虎御前（澤村宗之助）。【諸本】史劇十二曲（博文館）所收。

【梗概】箱根蘆の湖の邊、幽邃な風景。箱王丸が「出家」する儀式。剃髮する日である。兄十郎祐成は諫止せんと登山したが、大磯の虎御前は兄弟今日の對面は、敵工藤の注意を喚起するのみである、兄嫁として自分が兄の意嚮を傳へんと言ふ。かくて虎御前は箱王を諫めるが、母の意見だからと言つて飜意しない。その腑甲斐なさに虎御前はあきらめて立ち去る。その夕方、湖水のほとりを逍遙しつつ、靜かに亡き父を回想した箱王は、飜然破戒を決心する。そして別當へ連行せんといきまく僧至山を高燈籠の紐へくゝり、再び引返して來た十郎と虎御前と共に、森の中を眞一文字に敵のもとへ飛んで行く。

【價値】坪內逍遙の新史劇に依つて、詩趣ある高踏的な史劇を創作する人々が、漸次擡頭し

俳論史（はろんし）　文學史　一册　【著者】沼波瓊音【刊行】明治四十年四月、文祿堂。【內容】「俳書以前の俳論」として、藤原清輔や宗祇の言を一瞥し、貞德・貞室以後、爭論がしきりに起つた經緯を叙し、芭蕉の調言的なる說訓は、遂に丑松を立ち上らせずには置かなかつた。彼は土の上にひれ伏して、自分自身の素性を打明け、今まで自分自身を僞り、他人をいつはつてゐた虛僞を懺悔するのである。併し冷酷な社會は、彼を容れようとしない。學校を追はれ、住み馴れた村を追はれた丑松の前途には、はるかな北米の空があつた。また彼の胸には純眞な眞心を捧げるおしほの戀

藏は閻魔の娘と戀し、こゝを駈落して血の池まで逃れたが、終に露見したので、今は佛に縋るより外なしと極樂に辿り行く。

【構想】三人の馬鹿者を主人公として、地獄を書く所に作者の趣向が存する。勿論地獄めぐりは彼の創意ではない。少くとも朝比奈の島めぐりや、甲賀三郎の地獄めぐりなどから來てゐようが、本書は地獄を滑稽化し、地獄の沙汰も錢次第の諺を實際にし、多少の諷刺と皮肉とを持たせた所が新しいのである。「冥途道中無陀栗毛」といふ寫本は、これに似て徹頭徹尾諷刺的である。要するに變態的膝栗毛物と見て注意したい。

〔小柴〕

博多小女郎波枕（はかたこぢよらうなみまくら）

淨瑠璃　三段　世話物　【作者】近松門左衞門　【興行】享保三年十一月二十日より竹本座（寶曆板「外題年鑑」）　【諸本】七行四十丁本、吉川宗兵衞板。同上、山本九兵衞板。同上、玉水源治郎板。諸種の近松全集所收。　【題材】享保三年閏十月に拔買の科人達を、大阪高麗橋で鼻をそいでさらした上追放に處した事件を脚色したもの。この實說は「月堂見聞集」卷十、享保三年の條に詳しい。但し博多小女郎の名は既に西鶴の「好色一代男」卷五や寶永五年京夷屋座の顏見世狂言「ゑびす講結御神」の中にも見えてゐて、古くから言ひ囃されてゐたものらしい。

【梗概】〔上之卷〕（大序）京の小町屋惣七は商用で筑前へ下る途中、下の關沖で毛剃九右衞門等一味の海賊船に乘合せ、彼等が密貿易の現狀を目擊した爲め、海中に投げ込まれるが、幸にも傳馬船の中に落ち、九死に一生を得て逃れ去る。（切）惣七は無一物となつて博多に到り、聟て關柴左衞門の小女郎を訪ね、衣類商品は素より身請の金まで失つた一伍一什を語り、互にその不運を悲しむ。折柄隣座敷に來て豪遊を始めた毛剃等一味と、はからずも再會した爲め、あはや血の雨を降らさうとしたが、毛剃は首領たるの襟度と機智を以て、咄嗟に小女郎を身請して惣七に與へるといふ條件で、一味たらん事を求める。惣七は國法と戀との二筋道に大に苦悶するが、遂に意を決してその配下となる。〔中之卷〕惣七は竊かに京の心淸町に一家を構へ、小女郎と共に何不自由なく暮してゐたが、これを聞き付けた親父惣左衞門は、親に隱してかゝる生活をなしてゐるからは、不正な道に嵌つてゐるに違ひないと察し、惣七夫婦の留守に來て、家財道具一切を捨賣にし、貸家札を出して了ふ。折から歸宅した惣七夫婦はこの有樣に、身に危急の迫つた事を豫感する。そこへ毛剃が訪ねて來るが、唯ならぬ四邊の樣子を怪しんで、惣七から島の割符を受取つて去る。惣左衞門は隣の壁越しに蔭ながら惣七に意見をし、且つ路銀を投げ込んで與ふれば、惣七夫婦は別れを惜しみ、涙に暮れながら遁れる。〔下之卷〕（序）「惣七小女郎道行」、惣七夫婦は尾張の方へ遁れようと、途中で駕籠を拾つて、四日市に程近き追分に着く。（大切）こゝで惣七が駕籠を換へた所へ、捕手が來て駕籠に細引網をかけてしまふ。惣七はすべてを觀念してその儘自害をする。小女郎は惣七に縋りついて泣く。そこへ他の海賊輩が繩をかけられて引かれて來、彼は死罪一等を赦されたのであつたが、既に遲かつた。

【構想】本作は海賊を扱つた點で、近松の他の諸作に類例のないものである。中之卷の惣七夫婦が、壁を隔てて親父惣左衞門と別れを惜しむ場は、「冥途の飛脚」（別項）の新口村からの脫化。　【影響】淨瑠璃では寬政元年五月、菅專助・中村魚眼によつて改作せられ、「博多縞戀錦（こひのにしきなるに）」と題して、大阪北堀江座で上演せられた。文政十年正月、大阪稻荷境內の芝居で興行せられた「博多小女郎戀錦」、弘化元年正月京都宮川町芝居で上演せられた「けいせい博多織」は、いづれも正本未見であるが、恐らく「博多織戀錦」の外題替であらう。上方歌舞伎では、延享元年十一月京北側芝居、中村喜代三郎座上場の「博多織妹背唐錦」、安永五年七月大阪小川吉太郎座興行の「和訓（やまと）水滸傳」、江戸歌舞伎では、天明五年七月桐座上場の「千代始音頭瀨戶」、享和三年四月中村座上演の「仲藏縞博多今織」、天保五年正月市村座興行の「三幅對書始曾我」、天保八年正月市村座興行の「博多小女郎」、文久元年九月中村座上演の「博多小女郎」、明治十六年八月新富座上場の「一戀（こひのみなとが）湊博多諷（たのひとふし）」、その他明治から大正にかけて「毛剃」又は「毛剃九右衞門」の外題で、數度上演された。最近では昭和三年十二月歌舞伎座興行の「博多小女郎浪枕」は小山內薰の改作で、毛剃が左團次、惣七が猿之助、小女郎が松蔦といふ役割であつた。小說では文化八年刊の山東京傳作「昔織博多小女郎」、文政十二年刊の曲亭馬琴作「（清談）博多小女郎物語」、共に合卷物である。

【參考】近松傑作全集卷之一（解題　水谷不倒）○近世演劇考說（黑木勘藏）○毛剃の研究（永見德太郎）（歌舞伎研究四・五・六輯）○歌舞伎狂言綱見（飯塚友一郎）○近松名作集（日本名著全集）上（解題　黑木勘藏）○近松全集第十一卷（解題　藤井乙男）○近世邦樂年表（鶴太夫節之卷）○京（歌舞伎年代記（續編）○大歌舞伎外題年鑑（○記・錄・綱・々歌舞伎年代記　○演藝書報（七ノ一〇）○歌舞伎（四ノ一二）○日本小說年表（近代日本文學大系）（山崎麓）　【高野（正）】

博多俄（はかたにはか）

演劇　【解說】九州博多に於ける獨特の俄狂言（別項）の一種。起原は明瞭でないが、博多には古くは室町時代よりの松囃子（まつばやし）と稱する正月の行事があり、又盂蘭盆會の盆踊の行事があり、何れも藩主を中心に城下の庶民相和して種々の餘興催物が盛んに行はれ、特に寬永の頃、時の藩主黑田忠之の代に最も盛況を呈し、町々の老若男女が練物囃子賑かに、城下に集まつて盆踊を催したと傳へるが、或はこの頃から俄狂言の種子が胚胎し、やがて數寄者連が提灯の袋などを頭に冠り、町々辻々で出會ひ頭に口合ひを以て輕口に興じ合つたのがその初めであらうといふ。やがて博多人獨特の諷刺と皮肉に富んだ輕口は、ボテ鬘などを用ひて次第に卽興的方言喜劇の面目を呈し、天保以降は半面を用ひ、町の空地等に俄舞臺を設け、書割幕を張り、市井の時事問題を脚色して上演した。天保以降は、その技藝のみは專門化し、岡崎屋喜平・市小路の吾平・馬場の宗七・中島の半助・釜屋の伊平・藥院の篤兵衞等が、名人として知られてゐる。維新後も相變らず盛んに催され、盆になると、市內寺社の境內には數々の俄舞臺が設けられ、俄師の各組が各舞臺を巡演して歩いた。また若者連・子供連も、見やう見眞似で辻々や軒先で俄を演じた。博多俄は現在でも行はれてゐるが、漸次に本來の面目を失ひ、脚色は新派劇まがひとなり、俄舞臺は劇場と化し、素人の俄師が藝人化しつゝある。なほ新派劇の瓦頭川上音二郎（別項）が、博多の出身であることは興味深い。

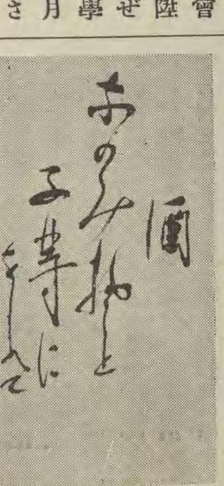
〔藤井〕

博多版（はかたばん）「刊本」を見よ。

狩能（かのう）「能樂」を見よ。

芳賀矢一（はがやいち）

國文學者　【號】芳麓生　龍江　【生歿】慶應三年五月十四日福井に生れ、昭和二年二月六日東京に歿す。享年六十一　【墓所】東京市小石川區音羽護國寺　【家系】先祖は伊勢の人。後、故ありて福井に來り、福井藩に出仕した。父眞咲は井手曙覽の門に入り、和歌に堪能であつた。宮城縣教育課長や鹽釜神社の宮司などを勤めた。母は斯波氏、代議士斯波貞吉の父有造の姉であつた。矢一はその長子で、妻（溯田氏）鋼子との間に四男五女がある。　【閱歷】東京麴町區番町小學校に學び、明治十三年一月宮城中學校入學。同十七年九月、東京大



芳賀

授に任ぜられ、國語學・國文學第二講座擔任を命ぜられた。同年九月國語調査委員會委員を仰付けらる。同三十六年四月文學博士の學位を授けられ、同年五月八日國語調査委員會主査委員を命ぜらる。この頃小石川區音羽に住んだ。明治四十一年五月二十五日臨時假名遣調査委員會委員、同年九月二十八日敎科用圖書調査委員會委員を仰付けられた。同四十二年十二月一日漢文敎授に關する調査を囑託され、同年五月十七日文藝委員會委員を仰付けられた。大正四年三月二十四日帝國學士院會員となる。同年十一月三十日高等官一等に陞る。大正五年六月八日歐米各國へ出張を命ぜらる。翌年五月歸朝。出發前免ぜられた大學の國語學・國文學第二講座擔任。同年十二月十四日小學校唱歌敎科書編纂委員長を囑託さ

○○世界文學者年表一册（同三十七年刊）○明治文典（同三十七年二月）○國語活用聯語一覽（同年七月）○內地旅行一册（同三十八年刊）○日本家庭百科事彙四册　下田氏共著（同三十九年刊）○詞藻類纂一册（同四十年刊）○國民性十論一册（同年刊）（別項）○明治文學一册（同年刊）○月雪花一册（同四十二年刊）○年中行事一册（同四十三年刊）○日本唱歌一册（同四十四年刊）○文章作文講話及文範二册　杉谷氏共著（同四十五年刊）○日本人一册（同年刊）○新式辭典一册（大正元年刊）○國學と國民性一册（同五年刊）○學生の友一册（同年刊）○口譯大鏡　○國民道德敎科書五册（同七年刊）○口譯御文章一册（同年刊）○筆にまかせて一册（同七年刊）○世界一週一册（同八年刊）○攷證今昔物語集一册（木朝之部下）（同十年刊）○古典經緯一册（同十年刊）○言泉　落合氏原著（同年刊）○國文學史文例類纂（上古篇）（同十五年刊）○同上（中古篇）（未刊）○奉悼歌一册（昭和二年刊）○國語と國民性・日本漢文學（同三年刊）○日本文獻學・文法論・歷史物語（同年刊）（以上二册講義を整理したもの）○國文學歷代選二册○帝國史要二册○聖代讀本一册。

【人物】博士は寬厚仁慈、玲瓏玉の如き人格者であつた。一度博士の溫容に接すれば、春風吹き渡るの感があつた。博士はよく門人の面倒を見た。博士の世話を受けた人は長くその

見えてゐて、古くから言ひ囃されてゐたものらしい。

【梗概】〔上之巻〕(大序)京の小町屋惣七は商用で筑前へ下る途中、下の關沖で毛剃九右衞門等一味の海賊船に乘合せ、彼等が密貿易の現狀を目擊した爲め、海中に投げ込まれるが、幸にも傳馬船の中に落ち、九死に一生を得て逃れ去る。(切)惣七は無一物となつて博多に到り、乘て馴染なる柳町妓田屋の小女郎を訪ひ、亭馬琴作「滑稽談博多小女郎物語」、共に合巻物である。

【參考】近松傑作全集卷之一 解題 水谷不倒〇近世演劇考說 黑木勘藏 〇毛剃の研究 永見德太郎(歌舞伎研究四・五・六輯)〇歌舞伎狂言綱見 飯塚友一郎 〇近松名作集(日本名著全集)上 解題 黑木勘藏〇近松全集第十一卷 解題 藤井乙男〇近世邦樂年表(義太夫節之部)〇歌舞伎年代記 續編 〇大歌舞伎外題年鑑 〇記・錄・帳々

博多版 はかた「刊本」を見よ。

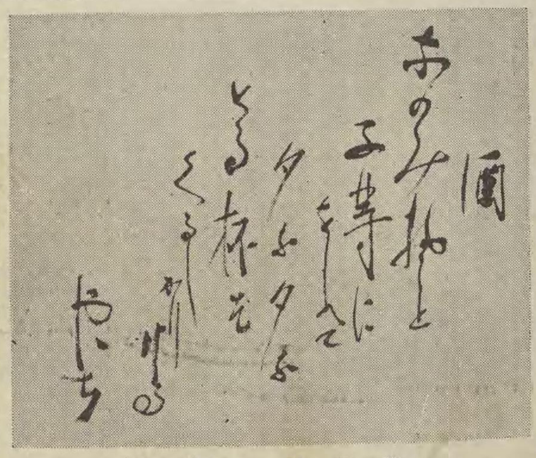
特能 のはなう「能樂」を見よ。

芳賀矢一 はがやいち 國文學者 【號】芳麗生 龍江 【生歿】慶應三年五月十四日福井に生れ、昭和二年二月六日東京に歿す。享年六十一 【墓所】東京市小石川區音羽護國寺 【家系】先祖は伊勢の人。後、故ありて福井に來り、福井藩に出仕した。父眞咲は井手曙覽の門に入り、和歌に堪能であつた。宮城縣教育課長や鹽釜神社の宮司などを勤めた。母は斯波氏、代議士斯波貞吉の父有造の姉であつた。矢一はその長子で、妻(潮田氏)鋼子との間に四男五女がある。【閱歷】東京麴町區番町小學校に學び、明治十三年一月宮城中學校入學。

芳賀矢一

同十七年九月、東京大學豫備門入學。同二十二年七月第一高等中學校卒業、直ちに帝國大學文科大學國文科に入學し、同二十五年七月卒業。それより大學院に入り、小中村清矩の指導を受けた。同年九月獨逸學協會學校教員を依囑され、同二十七年九月第一高等學校に轉じ、次いで同校教授兼高師教授に任じ、同年九月尋常中學校教科細目調査委員を命ぜられた。同三十一年一月兼官を免ぜられ、十二月帝國大學文科大學助教授を兼任、同三十二年五月帝大助教授が本官となり、國語學・國文學・國史第四講座擔任を命ぜられ、高師教授を兼任した。同年六月、文學史攻究法研究のため、滿一ヶ年半獨逸へ留學を命ぜられ、同三十五年八月歸朝。帝大文科大學教授に任ぜられ、國語學・國文學第二講座擔任を命ぜられた。同年九月國語調査委員會委員を仰付けらる。同三十六年四月文學博士の學位を授けられ、同年五月八日國語調査委員會主査委員を命ぜらる。この頃小石川區音羽に住んだ。明治四十一年五月二十五日臨時假名遣調査委員會委員、同年九月二十八日教科用圖書調査委員會委員を仰付けられた。同四十二年十二月一日漢文教授に關する調査を囑託され、同年五月十七日文藝委員會委員を仰付けられた。大正四年三月二十四日帝國學士院會員となる。同年十一月三十日高等官一等に陞る。大正五年六月八日歐米各國へ出張を命ぜらる。翌年五月歸朝。出發前免ぜられた大學の國語學・國文學第二講座擔任。同年十二月十四日小學校唱歌教科書編纂委員長を囑託さる。この頃より眼疾に罹る。同七年十二月二十二日國學院大學長就任。同九年二月二十四日神社調査會委員を囑託さる。同年七月勳二等に叙し、教科用圖書調査委員會主査委員としての功勞に依り旭日重光章を授けらる。同十年六月二十五日臨時國語調査會委員任命、同年九月三十日東宮職御用掛仰付けらる。この頃小石川竹早町に住む。大正十一年三月帝大を辭した。在職二十五年。同年四月從三位に叙せられ、同年七月名譽教授の稱號を賜はる。大正十三年四月母を失ひ、次いで八月妻を失ふ。この間小石川大塚坂下町に住む。昭和元年十二月宮內省御用掛を仰付けらる。喘息・腎臟炎に罹る。昭和二年一月願に依り御用掛を免ぜらる。同年二月六日心臟病のため逝く。同時に勳一等に叙し、瑞寶章を賜はる。

【著作】國文學讀本十册 立花氏共著(明治二十三年刊)〇國文學史十講一册(同三十二年刊)(各別項)〇世界文學者年表一册(同三十七年刊)〇明治文典(同三十七年二月)〇國語活用聯語一覽(同年七月)〇內地旅行一册(同三十八年刊)〇日本家庭百科事彙四册 下田氏共著(同三十九年刊)〇詞藻類纂一册(同四十年刊)〇國民性十論一册(同年刊)(別項)〇明治文學一册(同年刊)〇月雪花一册(同四十二年刊)〇年中行事一册(同四十三年刊)〇日本唱歌一册(同四十四年刊)〇文章作文 講話及文範二册 杉谷氏共著(同四十五年刊)〇日本人一册(同年刊)〇新式辭典一册(大正元年刊)〇東海道五十三次一册(同年刊)〇乃木大將一册(同年刊)〇明治聖帝一册(同年刊)〇攷證今昔物語集二册(天竺・震旦之部)(同二年刊)〇校註八代集二册(同年刊)〇口語文典大要一册(同年刊)〇三十六人集一册 佐佐木氏共著(大正三年刊)〇攷證今昔物語集一册(本朝之部)(同年刊)〇日本人名辭典一册(同年刊)〇近代名家歌選 佐佐木氏共著(同三年刊)〇新式座右年表一册(同年刊)〇和歌作法集一册 佐佐木氏共著(同四年刊)〇筆のまにまに一册(同年刊)〇國學と國民性一講(同五年刊)〇學生の友一册(同年刊)〇口譯御文章一册(同年刊)〇口譯大鏡〇國民道德教科書五册(同七年刊)〇筆にまかせて一册(同七年刊)〇世界一週一册(同八年刊)〇攷證今昔物語集一册(本朝之部下)(同十年刊)〇古典經緯一册(同十年刊)〇言泉 落合氏原著(同年刊)〇國文學史文例類纂(上古篇)(同十五年刊)〇同上(中古篇)(未刊)〇奉悼歌一册(昭和二年刊)〇國語と國民性・日本漢文學(同三年刊)〇日本文獻學・文法論・歷史物語(同年刊)(以上二册講義を整理したもの)〇國文學歷代選二册〇帝國史要二册〇聖代讀本一册。



芳賀矢一筆蹟

【人物】博士は寬厚仁慈、玲瓏玉の如き人格者であつた。一度博士の溫容に接すれば、春風吹き渡るの感があつた。博士はよく門人の面倒を見た。博士の世話を受けた人は長くその厚誼に感じ、恩德に服しない者はなかつた。博士は又、若い時から邊幅を飾らなかつたが、この風は終生殘つてゐた。なほ博士に就いて特筆すべきことは、忠君愛國の念の深かつた事である。今上陛下が未だ東宮でおいでになつた時、御進講の稿本の校正を不自由な眼で入念に見て、これが御奉公の終りであると言つて傍らの人にも手傳はせなかつたといふ。博士は非常に酒を愛し、煙草も亦好きであつた。酒に就いては多くの無邪氣な逸話を殘してゐる。

【學風】博士の學風は實際的であつた。常に知識の活用を重んじ、社會教養、國民修養の點に着眼してゐた。從つて國定教科書や中等學校の教科書の編纂にも力を盡し、「日本家庭百科事彙」「國民性十論」「雪月花」等の一般的讀物にも筆を執つた。博士は詞藻の豐かなる上に非常な達筆で、「國民性十論」は、一日に

一論づつ書いて十日間に脱稿し、「雪月花」は病氣入院中、一册の參考書も持たずに書いたものである。博士は若い時から才藻に富み、和歌も作れば、漢文・漢詩も作つた。これには先考眞咲翁や伯父斯波有造の感化薫陶が與つて力あつたであらう。又稀には俳句も作り、俳號を龍江と云ひ、「卯杖」に掲載された事があつた。その他狂歌・狂詩にも巧みで、往々人の頤を解くやうな作があつた。博士は後進に研究と創作とを兼ねることを奬めた。これは博士の單に學究的でないことを暗示するものである。

【業績】明治初年以來歐洲の學術・思想の輸入により、やゝもすれば我が國傳統の美が失はれようとし、國文學の研究も振はなかつた時代に當り、博士は熱烈なる國家愛を基礎とし、歐洲科學の知識を取入れて、國文學研究に新生面を開き、特に歐洲文獻學に倣つて新たなる國學を建設せんとした。博士は明治三十年頃、上田萬年・元良勇次郎・井上哲次郎・湯本武比古・高山林次郎・木村鷹太郎・藏原惟郭の諸氏と共に、「日本主義」といふ雜誌を起し、日本精神の發揮に努めた。博士は又國語教育に偉大なる業績を遺した。明治二十八年頃、未だ姿假名や句讀點などが、實際問題として世の學者から顧みられなかつた時代に、博士は既にこれ等を整理して國語教科書に改良を加へた。その他大學の講義の傍ら、辭書や百科辭典や中學校・師範學校・女學校・實業學校等の國語教科書・文法教科書をも編纂して、國民教育に多大の貢獻をなした。博士は、また國文法研究の上に於ても、形容動詞を創唱し、助動詞相互の連續に一定の順序ある事を見出すなど創見があり、その「明治文典」はその後の文法教科書に影響するところ多かつた。

【參考】國語と國文學（芳賀博士退悼號）（昭和二ノ四）○芳賀先生（芳賀博士退悼記念）（同上、國學院大學出版）　（萩原）

萩大名（はぎだいみやう）　能狂言　【格式】小習（和泉流）【題材】これは大名を中心人物として、萩の花見に於ける詠歌のことを結び附けてゐる。萩を賞翫する風は、平安時代から既に行はれてゐる。例へば「源氏物語」（橫笛の卷）に、式部卿の宮が萩の宴を催されたといふ詞が見えてゐるのでも推察せられよう。

【梗概】大名が太郎冠者を呼び出し、どこかへ遊山に出かけようといふ。冠者は、下京邊に風流人があつて、殊の外庭好きであるから、そこがよからうと勸める。併しそこへ御出になると、歌をなされねばならぬと言ふ。大名は大に當惑するので、冠者は「七重八重九重とこそ思ひしにとよ咲き出づる萩の花かな」といふ歌を教へる。さて共々出かけはしたが、大名は記憶が惡いので、冠者は、それでは物に擬（よそ）へようと、七重八重といふ時、扇の骨を七本八本ひろげる事にし、九重に九本、とよ咲きに皆ひろげる事にする。また盥に萩を、鼻に花を思ひ出させられよと言ふ。かくて庭好きの主の許に着く。果して亭主は萩の歌を所望する。大名は冠者に教へられるまゝに、七重八重の歌を詠み、亭主は滿足するが、冠者が他出した後で、亭主短册に書くためにとて再びその歌を所望する。大名は冠者がゐないので、中途につかへ、盥と鼻とまでは思ひ出したが、下の句がどうしても思ひ出せず。結局、太郎冠者の向髏に某が鼻の先とごまかし、亭主に愛想をつかされる。

【構想】大名をとらへて、その無風流で且つ暗愚なのを揶揄したのがこの作の趣向である。大名の卑劣な一面を寫したのに「雁大名」があり、空威張りをして結局失態を演じるのに「二人大名」があり、また故實を心得ぬのに「粟田口」（別項）などがある。作意に誇張もあるが、當時の大名生活の裏面が剔抉せられてゐる。なほ人から教へられた文句をその場で忘れて失敗する點だけは、「薩摩守」（別項）と同じ類型である。　【野村】

萩陀羅尼（はぎだらに）　俳句集　半紙本一册　【編者】橫山萬舊（萬舊は江戸の人、採茶庵萬里門）【刊行】文政十三年（天保元年）【諸本】元祿名家句集附女流俳句集（俳諧文庫）所收。【解說】萬舊の妻花讃女の發句集である。花讃女は古川氏で、名はまつ、花讃女と號し、夫と共に萬里門下として俳諧に遊んだが、二十三といふ若い身で、三人の子女を殘して文政十三年七月二十四日病んで歿した。夫の萬舊がその詠草を整理して發句集を編し、これに花讃女の句に脇起した萬舊・民玉・萬里・蓑笠四吟の追悼之俳諧一折と、諸家の手向の和歌・發句を輯錄附載して刊行したのがこの「萩陀羅尼」である。荊山居士の漢文の序、さるみの老人如雪の和文の序がある。手向の發句の中に、古友尼（別項）の名があり、また僕其影・僕其笑などの句があるによつて、花讃女夫婦の社會的地位を想像し得られる。　【發川】

萩之家歌集（はぎのやかしふ）　歌集　【著者】落合直文【名義】著者が萩之家と號したのによる。【刊行】明治三十九年六月。初め四六版、後菊半截に改む。【内容】明治十四年秋、伊勢の皇學館を卒業して上京途中の記「村雨日記」の中の歌から初まつて、同三十六年十二月の歸世の歌に終つてゐる。作者の和歌生涯は、凡そ三期にわかつことが出來る。第一期は、明治十四年から同二十三・四年頃まで（即ち本集（四六版本による）第一頁から四十七頁あたり迄）を、第二期は、同二十五・六年から同三十三年頃まで（即ち四十八頁あたりから二百十一頁あたり迄）を、第三期は、同三十四年頃から同三十六年まで（即ち二百十二頁あたりから終りの三百六十頁迄）を指すやうに思ふ。第一期の歌は「村雨日記」以後の分が多く散佚して傳ふべきものが甚だ少いので、この期の作風は「村雨日記」を以て代表させる外はない。この期の終り頃から、所謂新派和歌の萌芽とも見るべきものが起り、第二期に至つて旗幟が鮮明になつた。これは作者の新鋭の意氣旺盛の時代で、淺香社（別項）を結び、後進の誘掖に努めたのであつた。第三期は圓熟の境地に達し、つづいて一旋轉を試みたが、完成するに至らなかつた。【影響】作者が新しい歌の創始者として、日本歌史に鮮明に明治時代を劃し、その礎石を造つた業績は、本集によつて窺ふことが出來る。作者は門下を教養してそれ〴〵その嚮ふ所を異ならしめ、新しい歌を宣傳普及せしめたが、本集は先づ自らその範を示したものとして、大なる影響を與へてゐる。　【金子】

破鏡尼（はきやうに）　「曲翠」を見よ。

萩原乙彦（はぎはらおとひこ）　戯作者　【本名】森語一郎　【號】梅暮里谷峨（二世）・龍六齋・金龍山人・寒鰺翁・鈴亭主人・隆興堂・對梅宇・梅星笠。【生歿】文政九年に生れ、明治十九年二月二十八日歿す。享年六十一。【閲歴】江戸の人、根津宮永町三浦坂下の小普請森宗兵衛の二男。國學を鶴峰戊申に學び、俳諧を十時庵に學ぶ。後、月渓宗匠となり、對梅宇乙彦と號した。後、

草金龍山時代は、一時端唄の師匠小蝶女と共同生活をしてゐたが、いろ〳〵の逸話を遺した。その間能六齋若しくは梅暮里谷峨と號して十餘種の俗謡本、はうた歌澤節の選集物を出してゐる。就中「はうた一夕話」は俗謡註釋本の嚆矢として光つてゐた。後萩原秋巖の養子となり、俳諧宗匠の傍ら、古俳書數十笥を蒐集したのもこの時代であつたといふ。明治十三年二月靜岡新聞再興のため迎へられて入社したが、永續しなかつたらしく、遂に山梨縣の谷村へ漂泊の旅をつづけ、そこで歿した。

【著作】【讀本】釋迦實錄五册（安政元年刊）○智計雜談三册（同年、小說年表には笠亭仙果作とある）。【人情本】春色連理の梅（別項）○艷色俱良倍　初編より三編までは梅園梅彦、安政四年。四編より六編までは谷峨、安政五年刊）。【合卷】天寶水

誌「ザムボア」に詩を投じ、その知るところとなつた。當時同誌上に室生犀星の詩を見て驚異止む能はず、その詩風の相違を外にして遂に刎頸の交りを結ぶに至り、後に感情詩社を興し、雜誌「感情」を發行した。哲學書に親しみ、ベルグソン、ニーチエ、ショーペンハウエル等に私淑した。【著作】その著名なる詩集に「月に吠える」（大正六年）、「青猫」（大正十二年）等があり、外に「蝶を夢む」、綜合集「萩原朔太郎集」等がある。なほ詩論集「新らしき欲情」（同十一年）、「虚妄の正義」（昭和四年）がある。【作風】近代詩人としての多くの特性を有し、可なり變奇的であり、孤獨癖に富んでゐる。神經的でもあり、蒼白な光澤が手觸される。表現手法は口語による音樂的の律動をいち早く實行し、詩壇に一の新風を創めた。詩論に

平信綱が四男堅綱を武州埼玉郡太田莊に封じた時、馬琴の玄祖大右衞門はその家宰となつた。祖父・曾祖父共にその職を繼いだが、父興滅は、若くして陸奥棚倉の小笠原侯に仕へ、寶曆中松平家に歸參して當主信成の家宰となつ

大右衞門―興也―興吉（養子）―興滅―左馬太郎（興旨）―吉次郎（早逝）
―蓑之助（早逝）
―常三郎（興春）
―佐五郎（馬琴）
―蘭
―菊

士とされたが、强情我慢、一家のもて餘し者となつた。一方彼の文學の嗜みは次第に進み、十五歳の時には俳文「弔蓑齋」を作つた。これは素堂の「蓑蟲の說」に倣つたものである。兄羅文と共に越谷の竹庵吉山に學んで俳諧を勵むと同時に諸子百家の書から「源氏」「狹衣」を初め、諸隨筆の類を涉獵した。間もなく長兄の甲府在勤や次兄の歸家等の一家の動搖から、天明五年六月母の死に會ひ（享年四十八）、戸田家を出て山の手の某家に仕へたが、翌年はまた次兄興春が死し、その後致仕して幕府の醫師である小川町の山本宗洪の門に入り、宗仙といつたが、俳書等を耽讀して忽ち此處を追はれ、これより東西に流浪して、或は龜田鵬齋の僕となつて儒者たらんとし、或は石川雅望を訪うて狂歌を

草金龍山時代は、一時蝸牛の師匠小蝶女と共同生活をしてゐたが、いろ〳〵の逸話を遺した。その間能六齋若しくは梅暮里谷峨と號して十餘種の俗諧本、はうた歌澤節の選集物を出してゐる。就中「はうた一夕話」は俗諧註釋本の翹楚として光つてゐた。後萩原秋巖の養子となり、俳諧宗匠の傍ら、古俳書數十笥を蒐集したのもこの時代であつたといふ。明治十三年二月靜岡新聞再興のため迎へられて入社したが、永續しなかつたらしく、遂に山梨縣の谷村へ漂泊の旅をつづけ、そこで歿した。

【著作】【讀本】釋迦實錄五册（安政元年刊）○智計雜談三册（同年、小說年表には笠亭仙果作とある）。【人情本】春色連理の梅（別項）○艷色俱良倍（初編より三編までは梅園梅彦、安政四年。四編より六編までは谷峨、安政五年刊）。【合卷】天寶水滸勢力傳八册（前編安政元年、後編同四年）○夜雨ぬるたま草紙（嘉永七年八代目團十郎の不慮の死を報じた中本）○新門辰五郎游俠譚三編九册（明治十二年五月、大川屋・大島屋合梓）。【雜著】東京開化繁昌誌二編四卷（明治七年刊）○西洋民權家列傳（島田三郎共著）○山陽寶帖譯文○稗史三大家文集○新撰尺牘往來○開化商賣往來○訓蒙修身學○月儀要文○雅俗要文二編○書翰便蒙○漢語二重字引○新開字引○皇國名字大全○造化機論第三編等。

【參考】足の向く儘○新修日本小說年表○戊辰以來書目便覽○書物往來（三ノ四）

萩原朔太郎（はぎはらさくたらう）　詩人　【閲歷】明治二十一年十一月一日、前橋市北曲輪町に生る。郷里の中學卒業後、第五高等學校に入學したが、翌年、第六高等學校一部獨法科に轉校、病氣のため中途退學した。爾後、東京に放浪。明治四十四・五年の交、北原白秋の雜誌「ザムボア」に詩を投じ、その知るところとなつた。當時同誌上に室生犀星の詩を見て驚異止む能はず、その詩風の相違を外にして遂に刎頸の交りを結ぶに至り、後に感情詩社を興し、雜誌「感情」を發行した。哲學書に親しみ、ベルグソン、ニーチエ、ショーペンハウエル等に私淑した。【著作】その著名なる詩集に「月に吠える」（大正六年）、「青猫」（大正十二年）等があり、外に「蝶を夢む」、綜合集「萩原朔太郎集」等がある。なほ詩論集「新らしき欲情」（同十一年）、「虚妄の正義」（昭和四年）がある。

【作風】近代詩人としての多くの特性を有し、可なり變奇的であり、孤獨癖に富んでゐる。神經的でもあり、蒼白な光澤が手觸される。表現手法は口語による音樂的の律動をいち早く實行し、詩壇に一の新風を創めた。詩論には間々獨斷に陷ることはあるが、その率直性と感情の純なることに於て、常に詩人としての風格を見せてゐる。【北原】

馬琴（ばきん）　讀本・草雙紙作者　【姓名】瀧澤興邦。後に名を解（とく）と改む。字は子翼。瑣吉。通稱佐五郎・佐吉・清右衞門・笠翁・篁民。【別號】亭々亭・鳥水・雕窩坊・大榮山人・曲亭馬琴・著作堂主人・飯臺陳人・乾坤一草亭・玄同・齋・狂齋・信天翁・蓑笠漁隱・閑（閒）齋・葆光舍・愚山人・宙水山人。【狂名】山猶貫淵・曲わの馬ごと。【變名】魁蕾（傀儡）子・正德馬鹿輔・玉亭光峨・逸竹齋達竹・蟹行山人・小說家主人。【生歿】明和四年六月九日に生れ、嘉永元年（一八四八）十一月六日歿す。享年八十二。【法名】著作堂隱譽蓑笠居士【墓所】東京小石川茗荷谷深光寺【家系】瀧澤氏は源姓で、代々三河の長澤氏に仕へ、天正中、長澤氏が東武に麾下松平氏となるに及んでこれに隨つた。後、松平信綱が四男忠綱を武州埼玉郡太田莊に封じた時、馬琴の玄祖大右衞門はその家宰となつた。祖父・曾祖父共にその職を繼いだが、父興滅は、若くして陸奥棚倉の小笠原侯に仕へ、寶曆中松平家に歸參して當主信成の家宰となつたが、晩年、故あつて職を退はれ、江戸深川に住んだ。弓劍兵法を善くした勁直の士であつたが、安永四年春、五十一歳で歿した。母門は細川家の士吉尾門左衞門の女、江戸に生れたが、幼にして父に別れ、叔父の棚倉藩士松澤氏に養はれて興滅に嫁いだ。才氣に富む貞女で、文學を好み、古き草子物語から草雙紙淨瑠璃の類を讀んで子女に教へたといふ。五男二女があり、馬琴はその第五子である。長兄は戸田大學頭に仕へ、後、山口和泉守に仕へて用人次席に進んだが、寛政十年、四十歳で歿した。東岡舍羅文と號して、馬琴と共に俳諧に遊んだ。次兄興春は旗本蒔田家の士高田氏に養はれたが、故あつて去り、後高井土佐守・水谷信濃守に仕へたが、天明六年、二十二歳で夭折した。

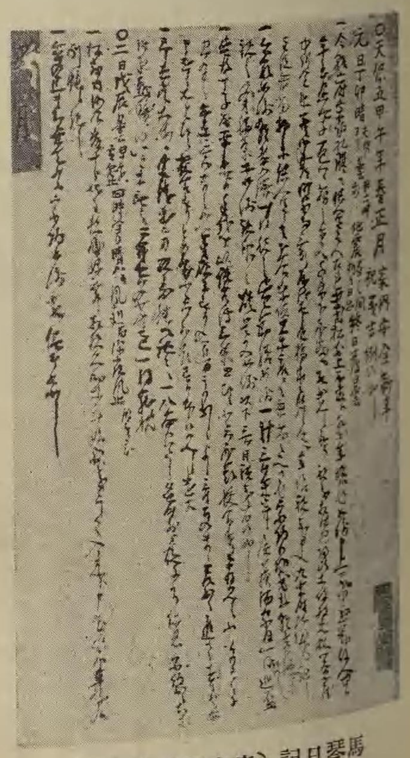
【閲歷】馬琴は、江戸深川高松通淨心寺附近の浪宅に生れた。彼は習はずして文字を覺え、七歳にして句を詠じ、安永二年には三井親和門小柴長雄の深川八幡宮前の塾に通つた。併しその翌年九歳の時父が死し、長兄が戸田家に仕へて濱町に移つたので、彼も兄の許に身を寄せ、當時印行の草雙紙・淨瑠璃本の類から和漢の軍書・實錄等を耽讀した。安永七年に、十二歳で初めて武家奉公に出たが、二年にして主家を出奔したので又兄の仕へた戸田家の徒士とされたが、强情我儘、一家のもて餘し者となつた。一方彼の文學の嗜みは次第に進み、十五歳の時には俳文「弔蟲辭」を作つた。これは素堂の「蓑蟲の說」に倣つたものである。兄羅文と共に越谷の竹庵吉山に學んで俳諧を勵むと同時に諸子百家の書から「源氏」「狹衣」を初め、諸隨筆の類を渉獵した。間もなく長兄の甲府在勤や次兄の歸家等の一家の動搖から、天明五年六月母の死に會ひ（享年四十八）、戸田家を出て山の手の某家に仕へたが、翌年はまた次兄興春が死し、その後致仕して幕府の醫師である小川町の山本宗洪の門に入り、宗仙といつたが、俳書等を耽讀して忽ち此處を追はれ、これより東西に流浪して、或は龜田鵬齋の僕となつて儒者たらんとし、或は石川雅望を訪うて狂歌を學ばんとし、更に橘千蔭の門を叩いて、その書體を得んとしたけれども何れも果さず、遂に深川仲町のあたりに住んで書賈の筆耕にかすかな生計を立てたが、この煩雜の間に處しながらも天明七年二十一歳の春「風俗文選」に倣ひ、自作の俳文と師の吾山、二人の兄、並にその友人の俳文とを集めた「俳諧古文庫」二册を編した。やがて寛政二年二十四歳の秋、當時の戲作全盛の機運に乘らんと志し、山東京傳を銀座に訪ねて入門を請ひ、同年冬深川永代寺に行はれた壬生狂言が評判となつたのに思ひ付いて「二十日餘盡用而二分狂言」を黃表紙に綴り、京傳の閲を請うて、翌春京傳門人大榮山人の名で出版した。これ彼の處女作であり、文學的生涯に入る初めであつたが、京傳に敎へられ、別に生業を持つ要を認めた彼は、間もなく神奈川に去つて賣ト を業とした。然るにこの年の秋、江戸に大洪水があり、旁々神奈

大右衞門―興書―興吉（養子）―興滅―左馬太郎（興旨）
　　―吉次郎（早逝）
　　―衰之助（早逝）
　　―常三郎（興春）
　　―佐五郎（馬琴）
　　―闕
　　―菊

國貞筆馬琴肖像（稿本戯作者考補遺所載）

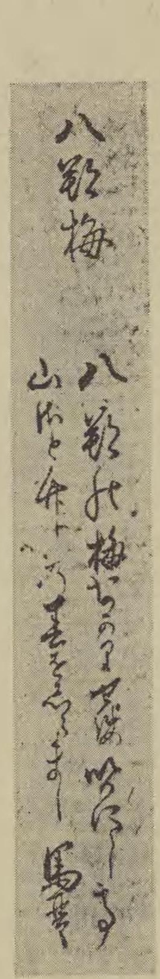
川の生活も思はしからずして、再び江戸に戻り京傳を訪れた。恰もこの夏京傳は新しい出版令に觸れて罰せられた後であつたので、彼をその家に留めて、雜事を助けさせる傍ら、草雙紙の代作を賴んだ。その代作は、寛政四年春京傳の名で出版された「龍宮擪鉢之木」「實語教幼稚講釋」等である。次いで日本橋通油町の書肆蔦屋重三郎の需により、名を佐吉と改めてその傭人となり、多くの小說類を讀みながら戯作に從事し、寛政五年の春には、初めて曲亭馬琴の名で「鼠兒婚禮塵劫記」「浮世御茶漬十二因緣」「自花團子食氣物語」「荒山水天狗鼻祖」を、また曲亭馬琴門人傀儡子の名で「增補伊賀越物語」を出版した。その號の曲亭は支那の山の名で、漢書の「巴陵曲亭の陽に樂しむ」に取り、馬琴は「十訓抄」、小野篁の「才馬卿に非ずして琴を彈くとも能はじ」に取つたといふ。そしてこの年彼は二十七歳で、九段中坂下飯田町二丁目の履物商會田氏の寡婦百に入夫し、伊勢屋淸右衞門と名乘つたが、翌々年、姑の死後瀧澤姓に復した。その後、賣藥と手習師匠を始め、また筆硯に親しむやうになつた。寛政六年に「福壽海無量品玉」、翌七年に京傳の當り作「心學早染草」（別項）の續編として「昔怪談諷敎訓心學晦荘子」を出し、翌八年の春には、忽ち五六種の戯作を發兌した。「高尾船字文」は讀本の處女作である。翌九年には、新作十二種を出したが、その中、「兎筆節用似字盡」は最も行はれて、馬琴の名は漸く擡頭して來た。以後年々十餘種の戯作雜著を著はし、享和三年に至つて大阪の書肆河內屋太助の需に應じた讀本「月氷奇緣」が人氣を博して文壇的地位を確保した。この間、寛政八年に二女ゆふを儲け、翌年は後援者笠翁を失つたが、長男鎭五郎が生れ、著作の稿料は書を買ひ、近親を撫恤するを得るなど、漸く幸福な境涯となつた。翌年長兄興旨が病歿し、同十二年には三女くはが生れた。この年豆相漫遊を思ひたち、九月武州金澤から伊豆の下田まで名所古跡を一巡して一月ばかりで歸つた。翌年五月京阪地方へ旅行を企て、三月餘を費して各地を巡り、後この紀行を「羇旅漫錄」に筆錄した。その名漸く東西に聞えて來訪する者が多くなつたが、何れも避けて蓑笠漁隱と號し閉居した。「月氷奇緣」の好評により、己が境地を開拓した馬琴は、翌文化元年には「稚枝鳩」「石言遺響」を、二年には傑作「椿說弓張月」（前篇）を初め、「四天王劒盜異錄」「三國一夜物語」「勸善常世物語」等を、三年には「標注園の雪」「隅田川梅柳新書」等を、四年には「三七全傳南柯夢」「賴豪阿闍梨怪鼠傳」「弓張月」（後篇）等を、五年には「弓張月」（續・拾遺篇）「俊寬僧都島物語」「夢想兵衞胡蝶物語」等を書いて、愈々讀本の位置を定め、その妙趣妙文は絶大の世評を得た。次いで文化六年より十年の間には、「昔語質屋庫」「弓張月」（殘篇）「常夏草紙」「占夢南柯後記」「靑砥藤綱摸稜案」「絲櫻春蝶奇緣」「皿々鄕談」等に中本・合卷を併せて十餘種に過ぎないが、これ彼が六年を要した「弓張月」を終り、「南柯夢」に成功して、晩年の大作たる「南總里見八犬傳」「朝夷巡島記」の準備を整へてゐた時で、文化十一年初冬に至り、「八犬傳」初輯五册、「巡島記」初編五册を發表した。それからは專らこの二作に力を盡したが、文化中彼の雜著の注目すべきものには、「燕石襍誌」「烹雜之記」「玄同放言」等がある。この間嘗て文壇の總帥であつた京傳と不和を來した。それに就いては、馬琴に「伊波傳毛乃記」があり、京傳の弟京山に「蜘蛛の糸卷」（別項）があるが、要するに本質的に性格を異にした兩者にとつて已むを得ざる成行であつた。そして京傳は文化十年讀本の筆を斷つてから間もなく、十三年にその晩年不遇の生涯を閉ぢた。これに反して馬琴は次々の作品の成功と共に、生活に於ても幸福の絶頂に立ち、松山冠山侯・舊主松平信成・御寄合衆石川左金吾・松前老侯等の知遇を受け、殊に松前老侯の敬愛は一方ならず、ために男宗伯は同侯御用醫の筆頭となつた。また多くの人に欣慕された中にも、陸奥の眞葛の姥といふ仙臺侯の醫師工藤氏の女で、同藩只野氏の寡婦あやとの交情は、彼の生涯に唯一の戀愛を點じたのであつた。かくして文政七年五十八歳の時、飯田町の家を長女の聟に讓り、自ら笠翁と稱して宗伯の家に隱居し、間もなく屋代輪池・山崎美成等の友人十名ばかりと耽奇會を起して所藏の珍器を、また兎園會を始めて自作の詩歌文章の類を持ち寄つて樂しんだ。これは文化以後、筆硯に漸く疲れを覺えて來た身心の、鬱屈を晴らさんための催しであつた。文政十年には宗伯興繼が年三十で路女と結婚したが、その年の夏、馬琴は大病に臥し、約半年の間、床に就いた。しかし曾肆にせめられて筆は執らず、「四遊水滸傳」「金毘羅船利生纜」等の合卷と「八犬傳」等の讀本を作つてゐる。明けて文政十一年、宗伯は男太郎を擧げた。その喜びも束の間、初夏の頃から重病に罹つた。次いで天保五年、馬琴はまた瘧に臥し、やがて癒えたが、秋の頃から宗伯が再び病みついて、翌六年五月遂に歿した。加ふるに宗伯の晩年、松前老侯と嗣君が相次いで歿してからは、馬琴一家の待遇も舊に變つてゐた時とて、この哀傷は同時に、衰老の生活を脅かすものであつた。こゝに於て馬琴はその用意にもと、翌七年書肆の勸むるまゝに兩國萬八樓に彼が七十の賀を兼ねて書畫會を催した。集まる者當代の名士を初めとして千人に及ぶ盛會で、それに得た金と藏書等を賣つた金とで、御家人の株を買ひて四谷信濃坂に居を轉じ、孫の太郎と宗伯の養嗣次郎を愛育しつつ淋しい隱棲に移つた。然るに翌年の夏には飯田町の聟興利を失ひ、天保十一年には妹に別れ、その翌年には妻百の死に會つた。興利の後に淸右衞門正次を迎へ、孫の太郎は十四歳で小姓に召された。彼が四十年の文學的生涯にとつて、最も致命的な打擊はこの頃に來つ

瀧澤馬琴の墓

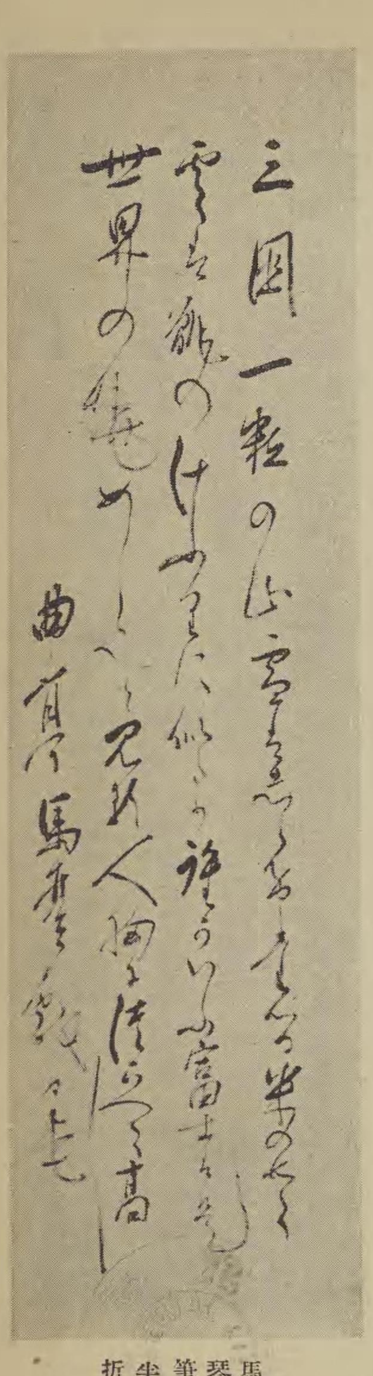


馬琴日記（東大圖書館舊藏）

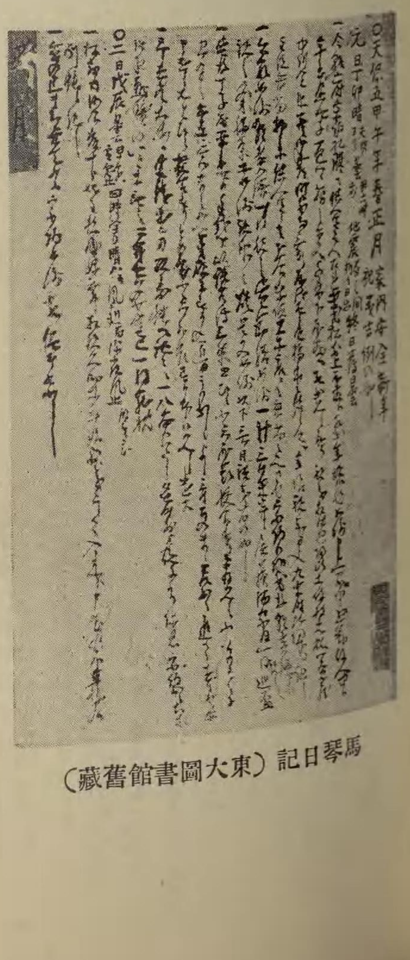
國貞筆馬琴肖像（稿本戲作者考補遺所載）



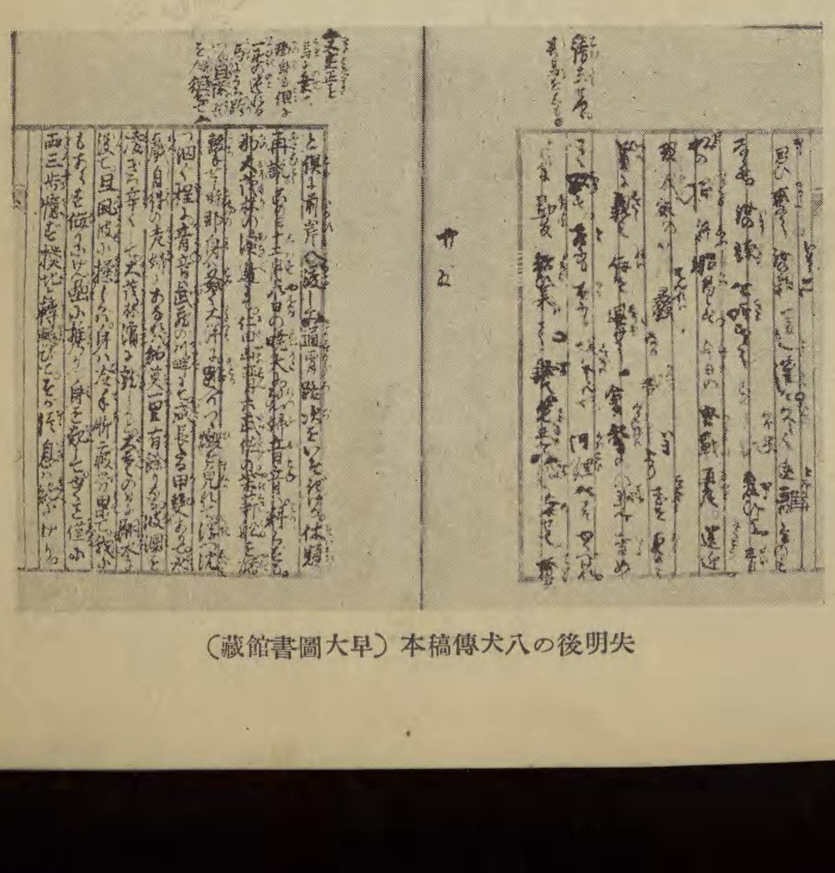
馬琴筆短冊



馬琴筆半折



馬琴日記（東大圖書館舊藏）



失明後の八犬傳稿本（早大圖書館藏）

には、忽ち五六種の戯作を發兌した。「高尾船字文」は讀本の處女作である。翌九年には、新作十二種を出したが、その中、「兎筆節用似字盡」は最も行はれて、馬琴の名は漸く擡頭して來た。以後年々十餘種の戯作雜著を著はし、享和三年に至つて大阪の書肆河内屋太助の需に應じた讀本「月氷奇縁」が人氣を博して文壇的地位を確保した。この間、寛政八年に二女ゆふを儲け、翌年は後援者高瀬を失つたが、を終り、「南柯夢」に成功して、晩年の大作たる「南總里見八犬傳」「朝夷巡島記」の準備を整へてゐた時で、文化十一年初冬に至り、「八犬傳」初輯五册、「巡島記」初編五册を發表した。それからは專らこの二作に力を盡したが、文化中彼の雜著の注目すべきものには、「燕石襍誌」「烹雜之記」「玄同放言」等がある。この間嘗て文壇の總帥であつた京傳と不和を來した。それに就いては、馬琴に「伊波傳毛乃記」があ

山崎美成等の友人十名ばかりと耽奇會を起して所藏の珍器を、また兎園會を始めて自作の詩歌文章の類を持ち寄つて樂しんだ。これは文化以後、筆硯に漸く疲れを覺えて來た身心の、鬱屈を晴らさんための催しであつた。文政十年には宗伯興繼が年三十で路女と結婚したが、その年の夏、馬琴は大病に臥し、約半年の間、床に就いた。しかし書肆にせめられて筆は執かず、「假城水滸傳」「金毘羅船利生纜」盛會で、それに得た金と藏書等を賣つた金とで、御家人の株を買ひて四谷信濃坂に居を轉じ、孫の太郎と宗伯の養嗣次郎を愛育しつつ淋しい隱棲に移つた。然るに翌年の夏には飯田町の聟興利を失ひ、天保十一年には妹に別れ、その翌年には妻百の死に會つた。興利の後に清右衞門正次を迎へ、孫の太郎は十四歳で小姓に召された。彼が四十年の文學的生涯にとつて、最も致命的な打擊はこの頃に來つ

たのである。即ち天保四年神田に在つた頃から、馬琴の右眼は用をなさず、九年の春には左眼も不自由を感じ、遂に十一年の冬全く失明した。けれども彼の不屈の精神は、この晩年の悲境の中に處して、不自由な視覺を驅り、或は路女に代筆させつつ、よく「八犬傳」「巡島記」を初め「俠客傳」「傾城水滸傳」「近世説美少年錄」等の大作の稿を繼ぎ、天保十二年八月には、前後二十八年を閲した「八犬傳」をも完成するに至つた。かくて數年後の嘉永元年夏の頃から病み臥して、十一月六日、相當多事であつた八十二年の生命と、光輝ある四十年の文學的生涯とを終つた。

【人物】この馬琴が、如何に努力の人であつたかは想像するに難くない。その全盛時代に於ある。この思想もこの癖も、彼の讀本に顯著に現はれてゐる。

【著作】曲亭馬琴翁叢書(曲亭遺稿松村操編)○馬琴傑作集(帝國文庫)○曲亭馬琴集二冊(近代日本文學大系)。【讀本】高尾船字文○(曲亭傳奇)花釵兒○小說比翼文○(復讐小說)月氷奇緣○(復讐奇譚)稚枝鳩○(繪入綺談)石言遺響○盆石皿山記○四天王剿盜異錄○敵討誰也行燈○椿說弓張月○(富士淺間)三國一夜物語○新編水滸畫傳○勸善常世物語○石堂丸刈萱物語○鑑田川梅柳新書○新累解脫物語○(題註)園の雪○旬殿實々記○松浦佐用媛石魂錄○俊寛僧都島物語○敵討枕石夜話○(松染情史)秋の七草○賴豪阿闍梨怪鼠傳○三七全傳南柯夢○雲妙間雨夜月○夢想兵衛胡蝶物語○昔語質屋庫○(ゆめあはせ)

千篇一律に漸く飽いた民衆の自然の要求であつたが、また武家の出にして、學問教養の廣く且つ深かつた彼の思想に因るところでもあつた。それで彼の讀本は、武士道的精神に儒學思想を加へ、佛教の因果應報説に統制して頗る複雜怪奇な説話を秩序整然と構成したのである。その作品は説話によつて、大體敵討物(「月氷奇緣」「稚枝鳩」等)、巷談物(「常夏草紙」「絲櫻奉蝶奇緣」等)、傳説物(「勸善常世物語」「新累解脫物語」等)、史傳物(「椿説弓張月」「南總里見八犬傳」等)に分類されてゐる。敵討物とは復讐の説話を材としたものの謂ひで、「曾我物語」を初め、浮世草子・浄瑠璃・歌舞伎等に既に陳腐な題材であるのみならず、その取扱ひ方にも新味が乏しい。ただ怪異談を絡ませてゐるのは、上の面目を傳へてゐるものである。これに比すれば彼の敵討物・巷談物・傳説物の諸作は、こゝに到るべき習作であつたとも見られる。なほ彼の文章は、主客・承應・起伏・終結等支那の修辭の約束を固く守つたものであり、又浄瑠璃・浮世草子・初期讀本、「平家物語」「源平盛衰記」「太平記」等の影響を受けて成された和漢雅俗を、巧みに折衷した獨特の美を持つものである。要するに馬琴は結構の大と脚色の妙と文章の美と、凡そ傳奇作者として必要な能力を具へてゐて、驚くべき多數の作品を成したが、現實の觀照と寫實の手法とに缺ける所が多かつたので、永遠の價値に乏しいとされる。なほ彼の博識と綿密な文才とは、又俳諧・紀行・隨筆・考證・評論等に好著を遺してゐ

たのである。卽ち天保四年神田に在つた頃から、馬琴の右眼は用をなさず、九年の春には左眼も不自由を感じ、遂に十一年の冬全く失明した。けれども彼の不屈の精神は、この晩年の悲境の中に處して、不自由な視覺を飜り、或は路女に代筆させつつ、よく「八犬傳」「巡島記」を初め「俠客傳」「傾城水滸傳」「近世說美少年錄」等の大作の稿を繼ぎ、天保十二年八月には、前後二十八年を閱した「八犬傳」をも完成するに至つた。かくて數年後の嘉永元年夏の頃から病み臥して、十一月六日、相當多事であつた八十二年の生命と、光輝ある四十年の文學的生涯とを終つた。

【人物】この馬琴が、如何に努力の人であつたかは想像するに難くない。その全盛時代に於て年々十數部數十卷を書いた多作の有樣を見ても、生涯を通じての仕事の量を測つても、長篇の數を算へても、また「八犬傳」の「囘外剩筆」に自ら記すところを讀んでも、その體力と相俟つて彼の負けじ魂と不撓の根氣とが、如何に强かつたかを髣髴することが出來る。彼の博覽强記も、多量の創作も、この努力の所産である。その晩年の失明も亦これに因つたことを想へば、暗然たらざるを得ない。而して彼は一面狷介傲慢の人であつた。その傳記の何處を開いても、この我意强情を語る事柄に逢着するが、中にも葛飾北齋・京傳・京山等との確執は、有名な事實である。彼は又驚くばかり周匝綿密な注意力を持つた人である。彼の讀本を繙くに、それが長ければ長いほど、趣向の用意周到を感ずる。また長年に亙つて誌した彼の日記を讀めば、細大洩らさぬ周密な性質をまざ〳〵と見るであらう。なほその思想は、道學者臭を帶び、その癖は衒學的である。この思想もこの癖も、彼の讀本に顯著に現はれてゐる。

【著作】曲亭馬琴翁叢書(曲亭遺稿松村操編)○馬琴傑作集(帝國文庫)○續馬琴傑作集(續帝國文庫)○曲亭馬琴集二册(近代日本文學大系)。【讀本】高尾船字文○(曲亭傳奇)花叙兒○小說比翼文○(復讐)月氷奇緣○(復讐)稚枝鳩○(繪像奇譚)石言遺響○盆石皿山記○四天王劒盜異錄○敵討誰也行燈○椿說弓張月○(富士淺間)三國一夜物語○新編水滸畫傳○勸善常世物語○石堂丸刈萱物語○墨田川梅柳新書○新累解脫物語○(續編註)園の雪○旬殿實々記○松浦佐用媛石魂錄○俊寛僧都島物語○敵討枕石夜話○(松染情史)秋の七草○賴豪阿闍梨怪鼠傳○三七全傳南柯夢○雲妙間雨夜月○夢想兵衞胡蝶物語○昔語質屋庫○常夏草紙○占夢南柯後記(ゆめあはせ)○靑砥藤綱摸稜案○絲櫻春蝶奇緣○皿々郷談○南總里見八犬傳○朝夷巡島記○近世說美少年錄○(閒卷驚奇)俠客傳(以上各別項)。【黃表紙】二十日餘盡用而二分狂言(四十兩)○鼠子婚禮塵劫記○无筆節用似字盡(以上各別項)。その他甚だ多い。【合卷】金毘羅船利生纜○殺生石後日怪談○傾城水滸傳○漢楚蠶擬選軍談○風俗金魚傳○女郎花五色石臺(以上各別項)その他。【隨筆・雜著】燕石襍志○續旅漫錄○玄同放言○蓑笠雨談(著作堂一夕話)○耽奇漫錄○兎園小說○烹雜(にまぜ)の記○近世物之本江戸作者部類○俳諧歲時記(以上各別項)等。

【作風・業績】馬琴の著作は總數三百餘篇千卷を超え、黃表紙があり、合卷があり、淨瑠璃「化競丑滿鐘」があるが、彼の作家としての本領は實に讀本にあつた。彼は從來戲作小說の主として取扱つた町人の娛樂の世界から、武士の理想の世界へ進展せしめたのである。この轉向は時代精神の歸趨に因ると共に、草雙紙の千篇一律に漸く飽いた民衆の自然の要求であつたが、また武家の出にして、學問敎養の廣く且つ深かつた彼の思想に因るところでもあつた。それで彼の讀本は、武士道的精神に儒學思想を加へ、佛敎の因果應報說に統制して頗る複雜怪奇な說話を秩序整然と構成したのである。その作品は說話によつて、大體敵討物(「月氷奇緣」「稚枝鳩」等)、巷談物(「常夏草紙」「絲櫻春蝶奇緣」等)、傳說物(「勸善常世物語」「新累解脫物語」等)、史傳物(「椿說弓張月」「南總里見八犬傳」等)に分類されてゐる。敵討物とは復讐の說話を材としたものの謂ひで、「曾我物語」を初め、浮世草子・淨瑠璃・歌舞伎等に既に陳腐な題材であるのみならず、その取扱ひ方にも新味が乏しい。ただ怪異談を絡ませてゐるのが特徵といへばいへるが、却つてこれがために現實性を弱めてゐる。巷談物とは、男女の情事に關する巷談街說中の人物の名や事件の一部を藉りて、これを著しく變化して忠義・孝行・貞烈・武勇・仁俠等の說話を展開せしめ、換骨奪胎の妙を見せたもので、敵討物に比してやゝ高級な作品である。傳說物とは、古來の各種傳說に素材を得たものである。巷談物に見る如き題材の變容はなされてゐないが、著しく因果應報的であるのを特徵とする。史傳物といふのは、眞の歷史小說といふことは出來ないが、歷史中の偉人を選んでその一生を敍し、一種の史的英雄の外傳と見られるものである。その性質上說話は長く、人物は多く、事件は廣く多端に亙るのを常とする。これは彼の近世武士道的、儒敎道德的、佛敎の因果應報的精神を最も高調して表現したもので、又彼の作風の宏大な規模と複雜な事件と整然たる脚色とが、最もよく發揮されて、彼の最上の面目を傳へてゐるものである。これに比すれば彼の敵討物・巷談物・傳說物の諸作は、こゝに到るべき習作であつたとも見られる。なほ彼の文章は、主客・承應・起伏・終結等支那の修辭の約束を固く守つたものであり、又淨瑠璃・浮世草子・初期讀本、「平家物語」「源平盛衰記」「太平記」等の影響を受けて成された和漢雅俗を、巧みに折衷した獨特の美を持つものである。要するに馬琴は結構の大と脚色の妙と文章の美と、凡そ傳奇作者として必要な能力を具へてゐて、驚くべき多數の作品を成したが、現實の觀照と寫實の手法とに缺ける所が多かつたので、永遠の價値に乏しいとされる。なほ彼の博識と綿密な文才とは、又俳諧・紀行・隨筆・考證・評論等に好著を遺してゐる。その考證には牽强附會の說も多いが、隨筆・紀行、或は日記の類には文學史料的、風俗史料的價値がある。なほ彼の評論には、「阿古義物語」評「鱗鞭」、「綟手摺昔人偶」評「をこのすさみ」、「雙蝶記」評「おかめ八目」、「本朝水滸傳」評「本朝水滸傳を讀む並批評」、その他「犬夷評判記」「明板水滸後傳序評」「水滸後傳國字解半閑窓談」「續西遊記國字評」「三遂平妖傳國字解」「增補外題鑑批評追加」等がある。その儒敎的功利主義に終始した點に憾みはあるが、卓拔な見解も見られる。夙くかうした作家に文學評論のあつたことは注意すべきである。

【史的地位】馬琴の作風文才は、彼の同時代及びそれ以後の讀本・合卷を作るほどの者に、總て影響を與へたといつても過言ではなく、時代を超えた明治となつても、依田學海・饗庭篁村・坪內逍遙等に追慕された。併し逍遙は「小說神髓」(別項)に於て再び彼を葬つてしまつたが、また高山樗牛・北村透谷・內田魯庵・藤村作

博士等により、次第に正當な評價を受けることになつた。實に彼は近世文學に讀本の一時期を劃した作家として我が國文學史上の偉大な存在である。

【師友・門流】馬琴は初め京傳門人と稱したが彼の心から慕つてゐたのは、寧ろ上田秋成と建部綾足であつた。尤も綾足が父の知人で、その風貌をかすかに幼時の記憶に留めてゐたこと以外に、直接には何等の交渉をも二人の間に持つてゐない。友人は、耽奇會・兎園會の同人の外に蒲生君平・渡邊崋山があり、殊に伊勢の殿村篠齋・小津桂窓、讃岐の木村默老、越後の鈴木牧之、江戸の小山田壺掌等は、その最もよき理解者で、彼が永く親交を續けた人々であり、その大作はこれ等の人々によつて先づ批評され、その勞を犒はれた。門人は全く尠く、男琴嶺を數へても、琴嶺と僅か三人の外、定かには擧げることが出來ない。

【參考】日本小說年表○日本隨筆索引○列傳體小說史 水谷不倒 ○瀧澤馬琴 塚越芳太郎 ○馬琴の生涯 和田萬吉(日本文學講座)○曲亭馬琴傳 赤堀又次郎(帝國文學三ノ一〇)○曲亭馬琴史學界同人(史學界)○曲亭馬琴の老後 關根正直(太陽四ノ一七)○鈴木文書と瀧澤馬琴 瀧澤又市(帝國文學八ノ四・五)○京傳と馬琴との關係 山崎麓(黒潮)○馬琴と北齋 藤井乙男(江戸文學研究)○五島惠廸及び其馬琴論 平出鏗二郎(帝國文學)○瀧澤馬琴についての夜話 眞山青果(中央公論)○支那小說と馬琴 池田大伍(早稻田文學)○馬琴と狹猾手段 幸田露伴(新小說)○曲亭馬琴が記事の文章 依田學海(國民之友)○馬琴の遺墨 市島謙吉(早稻田文學、明治四〇ノ九)○雀躍翼廸墓村○日記(稿本、早稻田大學圖書館藏)○馬琴日記鈔 靉廸墓村編○馬琴日記(附年表)和田萬吉編○曲亭書簡集 堀内快堂編○曲亭書簡集(日本藝林叢書)○馬琴の讀本 重友毅(日本文學講座)○馬琴繪賞 近松秋江(日本文學講座)○馬琴年表 内田魯庵(日本名著全集、南總里見八犬傳)○近代小說史 藤岡作太郎○新國文學史 五十嵐力○馬琴研究 藤村作(日本文學講座)

【笹野】

白河燕談(はくかえんだん) 隨筆 三卷 【著者】 釋殊意凝(傳不詳) 【刊行】 享保十五年 【解說】 和漢の慣用語・古諺、その他事物の名稱等の出處を和漢の典籍によつて考證したもので、佛家に關する事と俗界に係る事と相半ばする。引據するところの書は、數十百に上つてゐるが、支那の隨筆類が少くない。上卷に書籍呼本以下百六則、中卷に木綿布子以下八十七則、下卷に象以下九十一則、外に附錄造印肉法以下三十一則を收めてゐる。享保十四年著者の自序がある。

【和田】

白眼居士(はくがんこじ) 「好色破邪顯正」を見よ。

伯家神道(はくけしんとう) 神道 【名義】 伯家神道は、世々神祇伯となれる白川家に傳へられた神道の義である。【由來】 伯家とは神祇伯の家の意である。白川家は花山院天皇の御子、清仁(すみと)親王に出で、親王の王子延信(のぶざね)王、源姓を賜はり、臣列に下られたが、萬壽二年神祇伯に任ぜられ、爾來、子孫相續して神祇伯に任ぜられた。初冠から大副までは源朝臣を稱するが、伯に任ぜらるゝの日に、氏姓をとゞめて王に復するを例とする(「神祇の四姓」參照)。かくて白川家は、神祇伯の家ではあつたが、別に神道說を有してはゐなかつた。その神道說を表明するに至つたのは、吉田・吉川・山崎などの神道說の勃興にもとづくものである。

【解說】 伯家で未だ神道說として講說するところなかつた時代に、すでに部下の吉田家では、盛んに神道を說き、これを承けて、吉川・山崎等の神道說が勃興して來た。そこで伯家では、これ等の神道說を排斥したのである。即ち吉田神道に對しては、「天津兒屋命の神孫にて、唯受一人の神道と云へども、吉田神道は、兩部習合にて、云云。唯受一人など云立るは、實に吉田家唯一人の私事にて、他の神職の守るべき事にあらず」(神道通國辨義)と云ひ、次に「近來、吉川惟足、山崎垂加と云もの、神道を以て世に鳴たる由なれども、吉川は吉田家を神祇の長上と心得て、傳授を受たる由にて、職原のことを夢にも見ぬ人なれば、兎や角と評するに足らず」(同上)と云ひ、垂加に對しては、「儒佛に似たる事あれば、夫を止めて、自己の量の狹く、見の淺きをも思はず、心に任せて新作して、傳事のヶ條するなり。其外「神代紀」の始終を神代の昔、天上にて有たる事實とする由なれば、定めて神々が虛空雲中にて立舞さまと云なるべし。一向論ずるに足らぬ事なれども、折よく生れて歷々方に用ひられたる故、別して名高く、一流をなし、知らぬ者は、垂加と云へば、直に神の出現なりたるやうに思ふなり」(同上)と論じ、進んで伯家の神道を說き、「外國は知らず、日本の中にて神祇道を學ぶに、神系天子の外、流義と云ことの有べきや。伯家の流義は、即ち天子の御流義にして、白川家一己の私事には非ず。伯は天子の神祇一道の御手代にて、神祇官として頭なり」(同上)と云ひ、以て伯家の神道は、「伯家條目」の最初に、「夫神道者、萬國一般之大道、古今不易之綱紀、神武一體法令之出處也」(神祇伯家學則)とあるを注意し、神道は和漢竺は勿論四夷八蠻、萬國一般の大道であるとし、それは實に天御中主尊に基く所以を說き、「天御中主尊は、理天地の理神にて、天地の事物、一つも理原づかざる者なし。因て理中の理は、天地の御中の主人公、君主と云意にて、天御中主尊と申すなり。理は聲もなく、貌もなく、象なくして然も動かず、そしてよく明かなるものなり。因て天地萬物の主宰たるなり」(神道通國辨義)と云ひ、この天御中主神の理から、國常立尊の氣を生じ、「氣は一度潑活し動くときは、竟に天地に瀰淪して、萬々世々の息むと云ことなし」と云ひ、氣は質となり、質は形となること、乾坤・陰陽・天地と云ふ差別の如しとしてゐる。かく天地成り、萬物成るも、「天地の間の萬物、すべて神化に出る中にて、人は靈長とて、靈異なる長頭」であつて、その中にも、日本人は神の子孫であつて直ちに神である。その神が更に神を祭るは、由つて出づる源を祭るので、報本反始の至誠を致す時は、「自然と息災延命にして、富貴繁昌するなり」「神道の中に養はれて神を知らぬから身を知らず、身を知らぬから忠孝も知らぬなり」と論じ、人は神を知るを第一の急務とする。「我が因て出くる所の神を知らずして、物を格し、知を致し、明德を明かにすると云ふとも得べからず」としてゐる。以上の如く、神道の學說を立つると共に、實勢力を擴張することにも努め、諸國の神職に、許狀などをも出した。

【參考】伯家部類 ○神道通國辨義 ○神祇伯家學則○白川家系譜○俗神道大意○氣吹嘿○神道問答○故事類苑○神祇辭典 (田中(義))

柏玉集(はくぎょくしゅう) 歌集 【作者】 後柏原天皇 【別名】 後柏原院御集(書名) 【卷數】 十卷の刊本の外に、寫本に一卷本・三卷本・六卷本等の別がある。 【成立】 崩御までの御製を含んでゐるから、現代の形には御門弟の人が編成したものと考へられる。 【諸本】 (一)流布刊本。(1)十册本。寬文九年京都谷岡七左衞門開板といふ奥書がある。卷一春上、卷二春下、卷三夏、卷四秋上、卷五秋下、卷六冬、卷七戀、卷八雜、卷九五百首上、卷十五百首下、總計二千二三百首の御製を部立により分類したもの。(2)二册本。十册本と同板のもので、十册を上下二册に改綴し、田中理兵衞開板と板元を改めただけのものに過ぎない。(二)寫本。(1)略本三册本。「柏玉集」の題簽はついてゐるが、恐らく「後柏原院御集別本」といふべきものかと思ふ。上卷春・夏、中卷秋・冬、下卷戀・雜に分類され、百首歌の部はない。「後柏原院御集」と題するものは、前十六歲の御時、慈慧大師御法樂の御作より崩御の前年即ち大永五年の水無瀨御法樂の御製まで、ほぼ五十ヶ年に亙つてゐる。皇室式微の時代で、明應九年御踐祚ありながら、即位大禮をすら擧げ給ふこと能はず、大永元年に至り、本願寺僧光兼その資を獻金するに及び、漸く大儀を了へ給うたことは史上有名な事實であるが、頭註によつて氣付くことは、月次歌以外は、殆ど御法樂歌であると云ふことである。後柏原院御百首部類なる書によると、文明より明應に及ぶまでに、既に十九度の法樂御百首を收め得てゐるが如く、水無瀨御法樂の如きは、時に每年引續いて奉納されてゐることが分る。甚だ御多作であつたと云ふことも考へられるが、亂世に於ける御信仰人の特に愛誦した歌集になつてゐる。夥しく御多作であつたこと、例示した數首の御製にも現はれてゐるやうに、當時にあつては甚だ印象鮮明の御詠振であつたこと、すべて詩才天稟御豐富にましましたことを證して餘りがある。御集の註書によれば、榮雅點の御千首などもあつたやうであるが、全く出藍の御譽れあつたと申しあげたい。

【註釋書】「三玉桃事抄」五卷、享保八年刊)。野村尙房が、三玉集中の歌で、和漢の故事を詠出したもの七百四十五首を拔萃して、百三十餘部の古典を參考しつつ解註したと云ふ書。

【末書】「三玉和歌集類題」七卷(寬政四年刊)。松井幸隆が三玉集の歌を類題したもの。元祿九年蜂谷又玄の跋がついてゐる。「長慶集」の後に附し、又「續後集」五卷は自ら記を作つてその後に附した。都合七十五卷、收むる所三千八百四十首、これを全集とする。又別に「元白唱和」「因繼集」共に十七卷、「劉白唱和集」五卷、「洛下遊賞宴集」十卷があり、その文は悉く全集の中に在る。錢曾の「讀書敏求記」に、「宋刻の居易集は兩本皆白氏文集と題して、長慶集と名づけず」と云ひ、汪立名が「白香山詩集」を校刻するに當つて、又「寶曆以後の詩をも一概に長慶集と名づくべきでない」と云つてゐるけれども、宋人の目錄を檢するに、その言は必ずしも當らぬやうである。宋の歐陽脩が「唐書」を撰した時には、本書の完本がまだ存して、その「藝文志」には、「白氏長慶集」七十五卷を錄してゐる。然るに、晁公

學研究）○五島惠廸及び其馬琴論 平出鏗二郎（帝國文學） ○瀧澤馬琴についての夜話 眞山青果（中央公論）○支那小說と馬琴 池田大伍（早稻田文學）○馬琴と狹猾手段 幸田露伴（新小說）○曲亭馬琴が記事の文章 依田學海（國民之友）○馬琴の遺墨 市島謙吉（早稻田文學、明治四〇ノ九）○笈埃隨筆 巽齋村○日記（稿本、早稻田大學圖書館藏）○馬琴日記鈔 巽齋村編 ○馬琴日記

任ぜられた。初冠から大副までは源朝臣を稱するが、伯に任ぜらるゝの日に、氏姓をとどめて王に復するを例とする（「神祇の四姓」參照）。かくて白川家は、神祇伯の家ではあつたが、別に神道說を有してはゐなかつた。その神道說を表明するに至つたのは、吉田・吉川・山崎などの神道說の勃興にもとづくものである。

【解說】 伯家で未だ神道說として講說すると

ことの有べきや。伯家の流義は、卽ち天子の御流義にして、白川家一己の私事には非ず。伯は天子の神祇一道の御手代にて、神祇官として頭なり」（同上）と云ひ、以て伯家の神道は、「伯家條目」の最初に、「夫神道者、萬國一般之大道、古今不易之綱紀、神武一體法令之田處也」（神祇伯家學則）とあるを注意し、神道は和漢竺は勿論四夷八蠻、萬國一般の大道であると

如く、神道の學說を立つると共に、實勢力を擴張することにも努め、諸國の神職に、許狀などをも出した。

【參考】 伯家部類 ○神道通國辨義 ○神祇伯家學則 ○白川家系譜 ○俗神道大意 ○氣吹嘘 ○神道問答 ○故事類苑 ○神祇辭典（田中（義））

柏玉集 はくぎょくしゅう 歌集 【作者】 後柏原天皇 【別名】 後柏原院御集（舊名） 【卷數】 十卷の刊本の外に、寫本に一卷本・三卷本・六卷本

はくげん　はくしも

等の別がある。【成立】 崩御までの御製を含んでゐるから、現代の形には御門弟の人が編成したものと考へられる。【諸本】 （一）流布刊本。（1）十册本。寬文九年京都谷岡七左衞門開板といふ奥書がある。卷一春上、卷二春下、卷三夏、卷四秋上、卷五秋下、卷六冬、卷七戀、卷八雜、卷九五百首上、卷十五百首下、總計二千二三百首の御製を部立により分類したもの。（2）二册本。十册本と同板のもので、十册を上下二册に改綴し、田中理兵衞開板と板元を改めただけのものに過ぎない。（二）寫本。（1）略本三册本。「柏玉集」の題簽はついてゐるが、恐らく「後柏原院御集別本」といふべきものかと思ふ。上卷春・夏、中卷秋・冬、下卷戀・雜に分類され、百首歌の部はない。「後柏原院御集」には千七百六十九首あつたのを、その中三十二首の重出歌を除いて千七百三十七首を淸書した旨が例言に出てゐる。例言のない寫本もあるが、卷頭に墨付二枚ばかり斷り書が書いてある。例へば「同題歌年號之次第可書事」と云ふやうな程度で、內容には可なり込み入つた書入が多い。詠出年處、實隆の合點、「瑤樹抄」その他、他集に出づる歌の指摘等。（2）六册本。二册本、三册本と同內容のもの。（3）廣本三册本。春千二百十首、夏四百八十首、秋百十首、冬六百十首、戀七百七十首、雜七百六十首と云ふ大量本である。全歌集と言つてよい。（4）一册本。刊本とも略本三册本とも異なる。但しほぼ刊本に近いのを見れば、後人が刊本を基にし、三册本を參考しつつ寫し加へたものではないかと推定される。列聖全集・歷代御製集所收。

【內容】 寫本の書入を參考すれば、御製の時代は文明十一年、卽ち將軍義政邸にて御元服の前十六歲の御時、慈慧大師御法樂の御作より崩御の前年卽ち大永五年の水無瀨御法樂の御製まで、ほぼ五十ケ年に亙つてゐる。皇室式微の時代で、明應九年御踐祚ありながら、卽位大禮をすら擧げ給ふこと能はず、大永元年に至り、本願寺僧光兼その資を獻金するに及び、漸く大儀を了へ給うたことは史上有名な事實であるが、頭註によつて氣付くことは、月次歌以外は、殆ど御法樂歌であると云ふことである。後柏原院御百首部類なる書によると、文明より明應に及ぶまでに、既に十九度の法樂御百首を收め得てゐるが如く、水無瀨御法樂の如きは、時に每年引續いて奉納されてゐることが分る。甚だ御多作であつたと云ふことも考へられるが、亂世に於ける御信仰と云ふ事と離しては考へられない。名ある神社に洩れなく亙つてゐると言つてよい。なほ點者の名の記されたものには、實隆以外に榮雅・義尙・義政等が交つてゐる。御遺風の五六を例示すれば、

折しもあれ春の心に絲遊の日影やつなぐくれやらぬ空（絲遊）

山風の末野にきほふ程もなし夕立雲の雨そゝぎして（野夕立）

かせたかき柳はあれど我かどの一むらすゝき先みだれつゝ（風前薄）

我のみの夕になして天地もしらずとやいはん秋のこゝろは（秋夕）

影しろき月のさよ中更けはてゝ霜におどろく鶴のもろ聲（霜夜鶴）

さまざまの道の一つのさかひをもふみゝぬ身こそ先しるしけれ（述懷）

【歌風】 天皇の御集に、實隆の「雪玉集」、政爲の「碧玉集」（各別項）、この同時代に出來た三家集を世に三玉集と云ふ。近世に於て、堂上歌人の特に愛誦した歌集になつてゐる。夥しく御多作であつたこと、例示した數首の御製にも現はれてゐるやうに、當時にあつては甚だ印象鮮明の御詠振であつたこと、すべて詩才天稟御營富にましましたことを證して餘りがある。御集の註書によれば、榮雅點の御千首などもあつたやうであるが、全く出藍の御譽れあつたと申しあげたい。

【註釋書】 「三玉桃事抄」五卷、享保八年刊）。野村尙房が、三玉集中の歌で、和漢の故事を詠出したもの七百四十五首を拔萃して、百三十餘部の古典を參考しつつ解註したと云ふ書。

【末書】 「三玉和歌集類題」七卷（寬政四年刊）。松井幸隆が三玉集の歌を類題したもの。元祿九年蜂谷又玄の跋がついてゐる。

【附記】 後柏原天皇の御製を拜せんには、これ等の御集以外「金花集」「一人三臣集」「柏道冷三百首」「後柏原院御百首部類」「後土御門後柏原兩院御百韻」等がある。多く實隆や政爲の詠草との合集になつてゐる。 【齋藤（淸）】

博言學 「言語學」を見よ。

白氏文集 はくしもんじゅう （通行本） 詩文別集 七十一卷 【作者】 唐 白居易 【別名】 「白氏長慶集」とも云ひ、又我が國に於ては、王朝時代より以來、「文集」若しくは單に「集」とも呼ぶ。

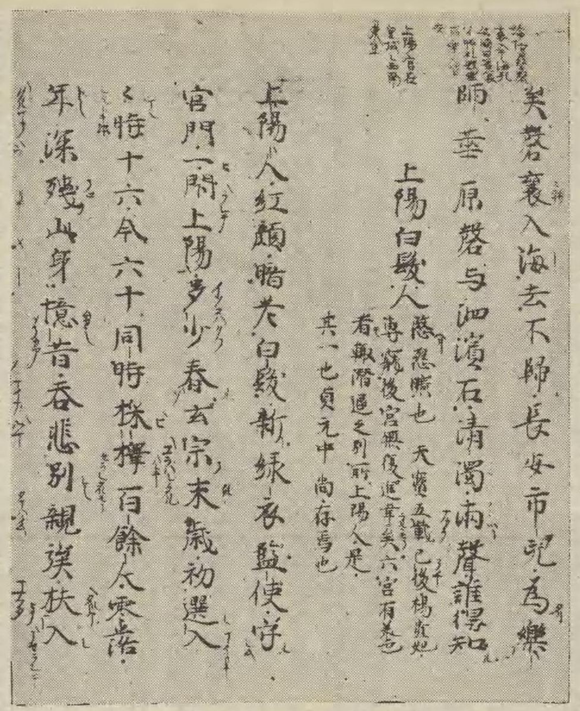
【傳來】 元稹の序に據れば、穆宗の長慶四年（皇紀二四八四）、稹が會稽に刺史となつてゐた時、樂天の文を徵めて、自らこれを排纘して五十卷とし、二千一百九十一首（舊唐書は二千二百五十一首に作る）を收め、これがために序を作り、從來多く「前集」「中集」の名を以て呼んだのを時の元號長慶が翌年の秋改められんとするので、これに因つて改めて「白氏長慶集」と曰ふとある。而して「後集」二十卷は樂天自ら序を作り、「長慶集」の後に附し、又「續後集」五卷は自ら記を作つてその後に附した。都合七十五卷、收むる所三千八百四十首、これを全集とする。又別に「元白唱和」「因繼集」共に十七卷、「劉白唱和集」五卷、「洛下遊賞宴集」十卷があり、その文は悉く全集の中に在る。錢曾の「讀書敏求記」に、「宋刻の居易集は兩本皆白氏文集と題して、長慶集と名づけず」と云ひ、汪立名が「白香山詩集」を校刻するに當つて、又「寶曆以後の詩をも一概に長慶集と名づくべきでない」と云つてゐるけれども、宋人の目錄を檢するに、その言は必ずしも當らぬやうである。宋の歐陽脩が「唐書」を撰した時には、本書の完本がまだ存して、その「藝文志」には、「白氏長慶集」七十五卷を錄してゐる。然るに、晁公武が「讀書志」を著はす時には、既に「續後集」の三卷を併して七十二卷となり、陳振孫の「書錄解題」には七十一卷を錄して、「今本七十一卷、蘇本・蜀本編次亦同じからず、蜀本又外集一卷あり、往々皆樂天自記の舊に非ず」と云つてをる。後明淸に至つてこれを刊刻する者は頗る多く、又淸の汪立名は、その詩のみを校訂して「白香山詩集」四十卷を編した。我が國へは夙くも彼の存命の中に傳へられ、普く搢紳の間に流布し、「見在書目」にも「白氏文集」七十卷及び「白氏長慶集」二十九卷を著錄してゐる。降つて江戶時代に至り、元和四年那波道圓は活字を以てこれを刊行し、明曆三年及び萬治元年に立野春節が訓點を加へて校刊し、文政中又上梓せられた。而して明曆萬治版と元和版・文政版とはその編次を異にしてゐる。

【內容】 文政版の目を擧ぐれば、

卷首元稹序、目錄一卷、卷一—四諷諭、卷五—八閑適、卷九—十二感傷、卷十三—二十律詩、卷二

十一詩賦、卷二十二銘・贊・箴・誡・偈、卷二十三哀・祭文、卷二十四碑碣、卷二十五墓誌銘、卷二十六記・序、卷二十七書、卷二十八書・序、卷二十九書・頌・議論・狀、卷三十試策問・制誥、卷三十一―三十六中書制誥、卷三十七―四十翰林制誥、卷四十一―四十四奏狀、卷四十五―四十八策林、卷四十九―五十甲乙判、卷五十一―五十二雜體・格詩・詩行、卷五十三―五十八律詩、卷六十三格詩・雜體、卷六十四―六十八律詩、卷六十九至格詩・附律詩、卷七十碑記銘・吟偈。

目錄と共にすべて七十一卷、詩は合せて三千五百九十四首。彼の詩は專ら六義に根柢して和平溫厚、杜甫の雄渾蒼勁を變じて流麗安詳と爲したと云はれ(唐宋詩醇卷十九)、曾て字句の間に佶屈艱難を尙ばず、傳へて一篇成るごとに一老嫗をしてこれを聽かしめ、解すれば錄し、解せざれば改めたと云ふ(冷齋夜話)。故に後人或は評して、山東の父老が農桑を課するが如しと云ひ、或は白俗の譏を發らしめたが、他面同じ故を以て又巧みに時事を諷諭した事と相俟つて世人の歡迎を受け、生時已に普く國中に喧傳せられ、當時の歌妓は爭つて白詩を傳唱したと云ふ。



神田本白氏文集(嘉承年中書寫)

【影響】平易流暢な彼の詩は、支那本土は固より、遠く高麗及び我が國に傳來して遍く傳播し、我が平安朝の文學に大なる影響を與へた。我が當時の學者は、五經三史の外に集選を讀み、文集又は集といへば「白氏文集」を意味した如きは、如何にその流行の旺んであつたかを想はしめ、清少納言の枕簾、菅公の聽鑛、或は嵯峨帝が往來の船を詠じ給ひ、高倉帝が仕丁を宿し給うたと云ふが如き逸事が、白詩を繞つて織り出され、「和漢朗詠集」(別項)中、五百八十九の詩句のうち、彼の詩句を引くこと一百三十七條の多きに達し、その他當時の作品に引用せられた詩句は頗る多く、その詩想及び詩藻の我が文人に與へた影響は深甚なものがある。

【著者小傳】居易、字は樂天・香山居士・醉吟先生等と稱し、通常字を以て行はれてゐる。春秋時代の楚の公族羋姓の出である。父を季庚と云ひ、母は潁川の陳氏、代宗の大曆七年(皇紀一四三〇)正月二十日、河南の鄭州新鄭縣東郭の宅に生れた(本書卷七十一所收、醉吟先生墓誌銘)。時恰も杜甫の死後二年、韓愈の生後四年に當る。幼童の頃、すでに詩を能くすることを學び、九歲にしてほゞ聲韻を識り、青年の間に早くも天稟の詩才を發露した。德宗の貞元十年、二十三歲にして父を喪つたが、同十六年、高郵の下に進士に及第し、同十八年、祕書省校書郎に除せられた。憲宗の元和元年、三十五歲の時、才識兼茂明於體用の科に應じ、策四等に入り、盩厔縣の尉となつた。「長恨歌」はこの時の作である。同四年には「新樂府」五十篇、翌五年には「秦中吟」十首を作つた。同九年の冬、入朝して太子左贊善大夫となつたが、翌十年、事に因つて江州の司馬に貶せられ、爾後四年の間、江州(今の江西省九江府)にゐたが、當時一世に喧傳された「琵琶行」は、實に元和十一年の秋に作られたものである。翌十二年には廬山の香爐峯の下に草堂を營んだ。同十五年、中央に召還せられたが、後、朋黨の積弊を論じて用ひられず、再び外任を求めて杭州の刺史となつた。時恰も越州の刺史元稹と互に境を接し、詩交頗る濃かなものがあつた。文宗の開成五年(居易年六十八)、風疾を得て、家に蓄へてゐた妓女を放ち、自ら豫め墓誌を作り、次いで武宗の會昌二年、刑部尙書を以て仕を致し、香山の僧如滿と香火の社を結び、自ら香山居士と號した。同六年(皇紀一五〇六)八月、病のために遂に歿した。享年七十有五。尙書右僕射を贈られ、同年十一月、龍門に葬つた(李商隱撰白公墓碑銘)。諡して文と云ふ(「舊唐書」本傳には、宣宗の大中元年歿す。年七十六。香山の如滿師の塔側に葬るとある)。

〔宇野・本多〕

伯爵夫人 はくしやくふじん 小說 【著者】田口掬汀 【刊行】明治三十八年四月、萬朝報連載。後、單行本として同年十月前編刊行、翌年一月後編刊行。總編は明治四十三年、大阪毎日に「外相夫人」と題して掲載。

【梗概】利根川口にある磯濱の濤聲樓主人右門には、右太郎・延代の二兒があつた。右門は亡友の遺兒中桐數馬を世話して商業大學に通學させてゐた。そのうち、延代は數馬と相思の仲になつてゐた。或る日、右門はそつと延代を呼んで、延代が實子でないこと、本當の父は失意の裡に憤死し、臨終に娘を立派な政治家の妻にしてくれと云つたこと、又數馬の父は投機に失敗し、妻に見棄てられて自殺したが、息子を立派な商人にしてくれと遺言したのだから、萬事あきらめるやうにといふ事を告げた。延代は數馬との戀をあきらめて上京、一先づ叔父三輪昌造の家に寄寓した。ところが、何事も知らぬ數馬は、延代が虛榮のために自分を捨て去つたのだと誤解し、かの女を墮落の淵から救ひ出さうと決心した。折柄延代は伯爵槇原德基に思はれてその夫人となり、一時に羨望の的となつた。それに引きかへて、數馬は延代に懸想せる奸物三輪資郎のために傷けられ、學校を出てから北海道の農場に働いたが、須山織紀の娘幹枝を救つたのが緣で東京に歸り、向島に居を卜した。一方、延代は數馬のことを片時も忘れがたく、一度會つて詫びたいと思つてゐるうちに、數馬は志を得て代議士となり、時の外相槇原伯を訪うて、移民問題のことで一場の激論をした。それから伯の園遊會で數馬の姿を見た延代は、思はず卒倒したが、延代の知己鄕田子爵の斡旋で、四年振で數馬に逢ひ、意中を話すところへ槇原伯が入つて來たといふところで前後編は終つてゐる。終編では、資郎が槇原伯の結婚ルイズと心中したので、數馬がルイズと伯との間に出來た一子を引取つて養育することを學

する。それから同伯邸内の六角堂で、數馬が延代と會見してゐるところを伯が見附けて大に怒ると、數馬はルイズの遺子を渡すために來たと辯疏する。延代は「自分が生きるも死ぬるもこの子と一緒だ」と心に叫ぶ。そこで一切が終つてゐる。

【批評】通俗小說として相當の出來榮えを示してゐるが、作者が上流社會を空想的に描くことに無理があり、常識道德に傾き過ぎたりしたので、深刻味を缺いた。が、人物の性格描寫の上では相當纏まつてをり、筋の變化の上にも作者の苦心が見えてゐる。〔以上高須〕

【附記】岩崎蘐花によつて九幕九場に脚色され、明治三十九年一月、東京本鄕座に上演された。

俳句全集○俳諧年表(牧野望東と共著)○俳諧新潮○紅葉書翰抄○紅葉句帳○紅葉遺文○蕉門十哲句集等。

麥水 ばくすい 俳人 【姓名】堀氏、通稱池田屋長左衞門 【別號】五噫逸人(夕日烏)・四樂庵(東海紀行・覇立等)・牛口山人(蕉門付句註解抄)・椶庵 【生歿】天明三年(一七八三)十月十四日歿す(あらや・落葉かく)。享年六十六(あらや)。 【法名】實言院道雪 【墓所】金澤五寶町西勝寺 【家系】麥水五世の祖を堀茂兵衞と云ひ、堀秀政の家人であつた。慶長十五年同族堀勘左衞門と共に加賀金澤に來り、勘左衞門は藩主前田利常に仕へ、茂兵衞は町人となつて家名を池田屋と稱し、竪町に居住して藏宿を業とした。かくて子孫累世長左衞門と稱し家業を繼いだ。

報に「祭の笛」を主として採錄し、これに續課童謠集「まざあ・ぐうす」を加へた北原白秋の綜合童謠集であり、その第一卷である。卷頭に論文「童謠私觀」を揭げて序に代へ、卷末に「童謠制作の辨」を附してゐる。【解說】本集は昭和期に於ける新童謠の創始者であり、また運動の中心を成した白秋の初期童謠の集成と見ていゝものである。在來の小學唱歌の功利心と無味乾燥の表現を排擊し、室町以降の市井童謠を藝術の位置にまで引きあげ、日本の傳統の上に新に近代の感覺感情の所產たる童心童語の歌謠を成さうとした。こゝに創造された童謠の新形體は、更に兒童の自由詩をも派生し、次に來る童謠時代の先驅を成すものであつた。第二卷は刊行されなかつたが、彼の

道」等に據れば、當時槇庵の主として北越に一家を成してゐた樣が窺はれる。時に彼は四十五六歲の頃である。然るにその後、彼は自ら學んだ美濃・伊勢の兩風(美濃風・伊勢風參照)が、共に卑俗で、蕉翁の意に隔たること遠いとし、諸家の風を尋ねて東西に奔走した結果、「虛栗」(別項)の氣概の高致に最も傾倒するに至つた。かくて安永二年の秋、難波に旅寓中、「蕉門一夜口授」(別項)を著はして、先づその主張を叫び、次いで安永六年「新虛栗」(別項)を撰して具體的にその風調を示した(白雄の「かさりなし」に據れば、この主張は既に明和六七年頃から唱へたものと思はれ、又明和八年長崎に遊んだ折の紀行中にも貞享正風を高潮した言葉が見える)。かうして彼は、新風鼓吹の最

する。それから同伯邸内の六角堂で、數馬が延代と會見してゐるところを伯が見附けて大に怒ると、數馬はルイズの遺子を渡すために來たと辯疏する。延代は「自分が生きるも死ぬるもこの子と一緒だ」と心に叫ぶ。そこで一切が終つてゐる。

【批評】通俗小説として相當の出來榮えを示してゐるが、作者が上流社會を空想的に描くことに無理があり、常識道德に傾き過ぎたりしたので、深刻味を缺いた。が、人物の性格描寫の上では相當纏まつてをり、筋の變化の上にも作者の苦心が見えてゐる。〔以上高須〕

【附記】岩崎嶸花によつて九幕九場に脚色され、明治三十九年一月、東京本郷座に上演された。

【役割】津久井登(高田實)、三輪昌造(深澤恒造)、伯爵楓原德基(木村周平)、子爵鄉田雅之(佐藤歲三)、女樂師ルイズ・鄉田夫人操子(河合武雄)、中桐數馬(藤澤淺二郎)等。

後に「ルイズの最期」といふ一幕物がこれから派生し、それは又眞山青果作「陸奥物語」の中に取り入れられた。〔以上久保田〕

白秋詩集　はくしゅうしし　詩集　二卷　【著者】北原白秋　【刊行】上卷大正九年八月、下卷十年一月、アルス。【解説】上卷「東京景物詩」以後の作集。下卷「邪宗門」「思ひ出」及び少年期の作品と補遺とから成る。白秋の詩的生命は、「東京景物詩」までがその純然たる進歩の歷史で、それから後は、焦躁と摸索の長き過渡時代と見られる。その焦心期に入る門は「白金の獨樂」である。〔日夏〕

白秋童謠集　はくしゅうどうようしふ　童謠集　【著者】北原白秋　【刊行】第一卷、大正十三年七月。【內容】單行の童謠集「とんぼの眼玉」「兎の電報」「祭の笛」を主として採錄し、これに翻譯童謠集「まざあ・ぐうす」を加へた北原白秋の綜合童謠集であり、その第一卷である。卷頭に論文「童謠私觀」を掲げて序に代へ、卷末に「童謠制作の辨」を附してゐる。【解説】本集は昭和期に於ける新童謠の創始者であり、また運動の中心を成した白秋の初期童謠の集成と見ていゝものである。在來の小學唱歌の功利心と無味乾燥の表現を排擊し、室町以降の市井童謠を藝術の位置にまで引きあげ、日本の傳統の上に新に近代の感覺感情の所產たる童心童語の歌謠を成さうとした。こゝに創造された童謠の新形體は、更に兒童の自由詩をも派生し、次に來る童謠時代の先驅を成すものであつた。第二卷は刊行されなかつたが、彼の童謠集としては、その後「花咲爺」「子供の村」「二重虹」「月と胡桃」等があり、また選集としては「からたちの花」「日本童謠集」「白秋童謠集」六卷等があり、白秋全集の童謠集二卷にも集大成され、未刊行の分をもこれに採錄されてある。〔內藤〕

麥人　ばくじん　俳人　【姓名】星野仙吉　【閱歷】明治十年四月東京市牛込に生る。初め大野酒竹の選者たる毎日新聞、正岡子規の選者たる新聞日本に投句し、又秋聲會(別項)にも出筵した。後尾崎紅葉の紫吟社に入つて晩鐘會を起し、雜誌「俳藪」を發行して紅葉の後援を受けた。「俳藪」は後「文藪」と改題し、紅葉自ら主宰したが、紅葉歿後再び「俳藪」と復題して發行し、當時廢刊せんとしてゐた「卯杖」に合體して同誌の倒壞を防ぎ、「卯杖」(別項)が後「木太刀」と改題するやその主幹となり、今日に及んでゐる。この間、時事新報・每日電報の選者であつた事がある。【編著】俳句大觀○百家俳句全集○俳諧年表(牧野望東と共著)○俳諧聚潮○紅葉書翰抄○紅葉句帳○紅葉遺文○舊門十哲句集等。〔伊藤〕

麥水　ばくすい　俳人　【姓名】堀氏、通稱池田屋長左衞門　【別號】五噫逸人(夕日烏)・四樂庵(東海紀行・鴉立等)・牛口山人(蕉門付句註解抄)・樗庵　【生歿】天明三年(一七四三)十月十四日歿す(あらや・落葉かく)。享年六十六(あらや)。【法名】實言院道雪　【墓所】金澤五寶町西勝寺　【家系】麥水五世の祖を堀茂兵衞と云ひ、堀秀政の家人であつた。慶長十五年同族堀勘左衞門と共に加賀金澤に來り、勘左衞門は藩主前田利常に仕へ、茂兵衞は町人となつて家名を池田屋と稱し、竪町に居住して藏宿を業とした。かくて子孫累世長左衞門と稱し家業を繼いだ。【閱歷】麥水は池田屋の次男に生れたが、兄が死んだので、當然家を相續すべきであつたのに、豫て遠遊の志があつた爲め、兄の子を跡目にして自分は後見となり、且つ妻も娶らなかつた。そして遠く長崎に遊んで蕃語數學などを修め、天草地方を歷遊した。俳諧は幼時から好んで、初め百雀齋五午といふ人に師事して可遊と號したといふ。また和田希因にも數を乞うたが(ゆめのあと・道のともし)、特に支考(別項)・麥林の風に私淑して遂に乙由(別項)の門に屬し、延享四年の夏、乙由の息麥浪が北越に行脚して來た折は、道に出迎へて希因の許に東道し(夏の白根)、また寬延二年の秋には、江戶から東海道を上つて山田に親しく麥浪・兎士等を訪ねた。さて彼は、兄の子が家を相續するに及び、獨り別居して寶曆十一年夏世を遁れ(一字題)、俳事に專念するやうになつたので、その門に點を乞ふ者も漸く多かつた。寶曆十三年、越中滑川の知十が撰した「早稻の道」等に據れば、當時樗庵の主として名聲に一家を成してゐた樣が窺はれる。時に彼は四十五六歲の頃である。然るにその後、彼は自ら學んだ美濃・伊勢の兩風(美濃風・伊勢風參照)が、共に卑俗で、蕉翁の意に隔たることが遠いとし、諸家の風を尋ねて東西に奔走した結果、「虛栗」(別項)の氣概の高致に最も傾倒するに至つた。かくて安永二年の秋、難波に旅寓中、「蕉門一夜口授」(別項)を著はして、先づその主張を叫び、次いで安永六年「新虛栗」(別項)を撰して具體的にその風調を示した(白雄の「かさりなし」に據れば、この主張は既に明和六七年頃から唱へたものと思はれ、又明和八年長崎に遊んだ折の紀行中にも貞享正風を高潮した言葉が見える)。かうして彼は、新風鼓吹の最も鮮明な旗幟を掲げ、北越の一隅から全俳壇に呼びかけたのである。なほ麥水は獨り俳諧だけでなく、弘く諸藝に通じて名があり、或は稗史・小說の類に椽大の筆を揮ひ、而もその間頗る德川氏に不平の意を示してゐる如きは、彼の傳統に盲從しない精神が見られる。又漢籍史書の造詣も深く、茶道及び書畫骨董の鑑定に長じ、蕃語數學も修めた事があり、幻術までも學んでゐたといふ。就中將棋は最も巧みで、藩主泰雲公の師範役として召出され、安永八年以來五人扶持を給せられ、醫師格を以て遇された位であつた。

【俳風・史的地位】麥水の俳風は、その追善集「落葉かく」にも前後二體に分けてゐる通り、これを二期に劃して考察されねばならない。卽ち彼がまだ支麥の風調に傾倒してゐた明和初年までと、「新虛栗」を提唱して俳風の革新に努めた晩年時代との二期である。今「落葉かく」に前體として擧げた句の二三を示すと、

蝶々や壹は朱雀の清淋し
夕顔や物を借り合ふ壁のやれ
裏町は共日すぎなり花木槿
薗の香や袴着習ふ女の童
曉に京はふるびて鉢たゝき

等があり、更に後體の二三を擧げると、

花はなし金陵一月の古小袖
蟬をいたみ杖水を打て葉に添へり
衣さび鹿に歸らめの歎を吐く
水仙や此花のもとの飯袋子
年經るやふるに飽く雪を一棒す

等がある。若しこれだけの句に就いて評するならば、前後二體の間に別段本質的な差異を發見する事は出來ないであらう。成程前體は平明ではあるが決して卑俗ではない。その差は單に表現の形式的方面に止まつてゐるのを見るのである。公平に評するならば、寧ろ後體の佶屈な格調に無理が多いと言ふべきであらう。併し實は前體時代にこの素質があつたからこそ、彼は俳壇革新を思ひ立ち、且つその手段として虚栗調を提唱したのである。彼自身の作のみに就いて言へば、或は故らにこの佶屈な表現形式を假る必要はなかつたかも知れない。何となれば、彼は支考・乙由の流を汲んだとはいへ、その創作の根本精神に於ては、既に夙くから芭蕉の意に通ずるものがあつたからである。かの寛延二年の紀行に徵しても彼の句作態度が一般よりは聊か高かつた事が知られる。併し彼はまだ自分の目ざす所と文麥の風調との間に、大きな徑庭のある事に十分氣がつかなかつた。それが次第に自覺されるに隨つて、遂に彼は支麥の徒たるに甘んずる事が出來なくなつたのである。そしてこの支麥調の卑俗さの由つて來る所を究めて、彼は俗談平話の軟弱さに換ふるに蒼古遒勁な虚栗調を以てする外はない、さういふのが彼の信念であつたのだ。而も彼はこの主張をやゝ過激すぎるまで實際化した。そこに後轉時代の作品に無理を生じ、又白雄などから非難を受ける理由も存したのであるが、彼が自分の主張を具體化するためには、勢ひそれは已むを得ない事でもあつた。のみならず彼が蒼古遒勁の調を以て支麥の卑俗を救はうとした考は、時弊に最も適切なものであつた。天明俳壇の革新は固より彼一人の力に依つたのではないが、この最も旗幟鮮明な革新運動が、時代を動かすに非常な力があつた事は言ふ迄もない。北越の地に邊在しながら、「加賀州中に天和延寶の調に髣髴たる一派あり」(明烏序)と世に認めさせたことは、明かにその運動の成功を物語つてゐるものである。且つ彼は單に支麥調に反對したのみで、先師麥林に鞭つ背恩の徒ではなかつた。「新虚栗」の中にも、乙由の句にして採るべきは必ず採つてゐる。

麥水字文筆庫藏)

【編著】蕉門一夜口授〇新虚栗(各別項)〇鶉立一册(寶曆年間。寶曆某年、金澤の四樂庵を翊に讓つて小松に蟄棲し、更に諸方に遊歷の志を雅友に告げたため知友の句を集めて出版したものである。蕉村の書、樂圃の手紙、艷詩の跋等があつて、當時の麥水の俳壇的地位を見ることが出來る。)〇貞享正風句解六册(稿本。貞享時代の蕉門の句を註解して門人に示したもので、「蕉門一夜口授」「新虚栗」と相俟つて、彼の主張を見るべき著述である)〇俳諧蒙求四册(稿本。蒙求に倣つて俳諧の教訓的逸話を記したもの)〇春の夜(明和七年歲旦帖)〇みつね(同八年歲旦帖)〇大壽曲(同九年歲旦帖)〇安永二年歲旦帖(歲旦帖はなほあるべきも、今知られたものだけをあげる)〇蕉門附句註解抄二册(安永年間、一名「十三興」。一鼠が曉戀・大魯・蕪村・二柳・青藾・闇更・樗良等當時の名家十三人の句を發句として、脇以下獨吟歌仙を試みたものに、麥水が評を加へたものである)〇葛箒二册(稿本。麥水が自句を手記したもので、その自筆本も現存してゐる)〇樗庵麥水發句集一册(稿本。金澤の雪帒が諸書に捃摭して麥水の句を集めたもので、有朋堂文庫名家俳句集に收められ、更に同文庫本には補遺がある)〇東海紀行一册(自筆稿本。寛延二年の秋鎌倉から東海道を上り、伊勢に麥浪を訪ね、近江を經て歸庵した紀行)〇山中夜話一册(自筆稿本。中に明和八年長崎に行つた折の記事が見える。原本未見。)〔稗史〕慶長中外傳〇慶安太平記〇南島變。その他。

【門友・子孫】門人として名高いのは「新虚栗」に跋し、又師の七回忌追善集「新亭」(寛政元年刊)を撰んだ垂菊洞八水や、「新亭後篇」として師の遺章百句を集めて「落葉掬」を選んだ鯉走庵其叟等があり、なほ蝶化・物赤・斬夢尼等「新亭」「落葉掬」に見える門人の數は頗る多い。俳友としては希因の門に出て浪華に住んだ二柳と最も親しかつた。麥水は西南の遠遊から歸つて後妻帶し、一子があり、倩之丞と稱したが、後、諸橋權之進の養子にした。雨檜と號して「新亭」に句が見えるが、勿論俳諧を專らにしたのではない。

【參考】堀樗庵(北國新聞明治三〇ノ六ノ一二〇)堀麥水の事 藤井紫影(にひはり昭和三ノ一)〇名家俳句集(有朋堂文庫)〇天明名家句選(俳書大系)

【穎原】

白石(はくせき) 儒者 【姓名】新井君美(きみよし)、初名は璵。字は在中、一字は濟美。通稱與五郎・傳藏・勘解由 【別號】紫陽・錦屏山人・天爵堂 【生歿】明曆三年二月十日朝辰の刻、江戸柳原土屋利直の假邸に生れ、享保十年(一七二五)五月十九日千駄ヶ谷の邸に歿す。享年六十九 【墓所】東京市中野區高徳寺(淺草より移る) 【家系】その先は、新井藏人太郎義房の二男二郎某より出でた。二郎出家して嚴義と號し、上野國新田郡荒井にゐたところから荒井禪師と稱した。これより以後、子孫は荒井を氏とし、後に新井に改めた。父は正濟(まさなり)、上總國久留里の城主土屋利直に仕へて、方正の士であつた。母は坂井氏の女。 【閲歷】白石生れて穎悟、幼にして神童を以て稱せられた。延寶三年、十九の歳、父は土屋家を辭して浪居し、白石も窮乏の裡に在りながら勉學した。天和三年(二十六歳)の春、大老堀田正俊に仕へ、貞享元年(二十八歳)木下順庵の門に入つて、その教を受けた。元祿四年、三十五歳の秋、堀田家を辭し、淺草に書を講じて僅かに生活すること二年餘、同六年の暮に至り、師順庵の推擧によつて甲府侯徳川家宣(當時綱豐)の儒員となり、眷遇極めて厚かつた。寶永六年(五十三歳)、家宣の將軍となるに及んで政務に參與し、獻替するところ甚だ多く、從五位下に叙せられ、筑後守に任ぜられた。新歷の學者にしてこの

新井白石(新井太宿)

榮進は實に異數に屬する。然るにその主家宣は、正德二年、白石五十六の歳に薨じた。吉宗が將軍職を繼ぐに及んで、白石は意を失つて退隱し、讀書著述に晩年を送つた。明治四十年、正四位を贈らる。 【著述】新井白石全集(國書刊行會)がある。一生の著述すべて三百餘種、その内上代史を研究した「史疑」をはじめ、典故故實、その他の各方面に亙り、學んで至らざるところがなかつたが、一面に於てまた詩に長じ、その什は富貴の相を帶び、絶えて寒乞の態なしとされる。幕末の詩宗野村篁園は、白石を以て近世第一の作家となし、私淑するところが最も深かつた。賴山陽も、祇園南海・梁田蛻巖・秋山玉山(各別項)と併稱して正德の四家となし、その「論詩絶句」に於て、

「正德諸公盡出群。駸雞雄雉各爭文。飜空千仞求威鳳。當屬筑洲源使君」

といつてゐる。白石は國文に於ても優に一家を成した。その文は格を外づるゝものが多いが、「藩翰譜」「折たく柴の記」などは、獨自の妙趣を具へて他の企及を許さない。

【以上森】

その功績は「東雅」に次ぐものである。第二は「東音譜」一卷(別項)に見える假名による綴字法の研究である。この問題は明治以來、特に學界の重要問題として論議せられて居り、今日なほ解決されないものであるが、白石は早くもこの問題に着眼して一つの提案をなしてゐる。而してこの問題に提案をなしたのは、江戸時代では、白石と文雄(別項)の二人であり、白石は最初の提案者である。以上の三著は、白石の國語學に關する代表的著作である。この外に「采覽異言」五卷(正德三年成る。白石全集卷四所收)と「西洋紀聞」三卷(正德五年成る。全集卷四所收)とは、外來語研究に有益なものであり、「古史通」四卷(享保元年成る。全集卷三所

石の國語學に關する研究は、今日から見れば不備もあり誤謬もあるが、その國語學史上に遺した業績の大なることは、專門の國語學者と雖も、白石の上に出づる者は五指を屈するにも足りないものである。

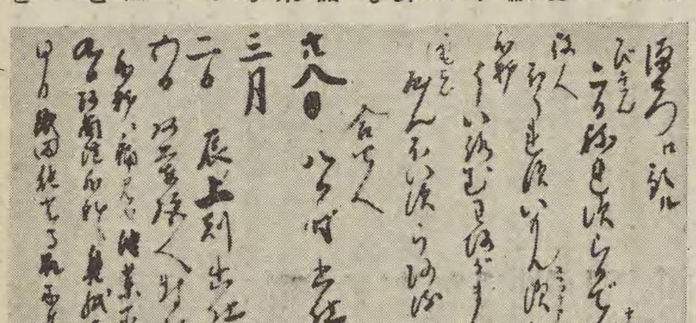
【以上龜田】

【參考】新井白石山路愛山(十二文豪第八卷)〇新井白石上田萬年〇新井白石とヨワン・シローテ吉野作造〇言語學者としての新井白石 上田萬年(國語のため)〇新井白石關係文獻總覽東京市日比谷圖書館(東京誌料特別調査第一册)

白石遺文(はくせきいぶん) 二卷 【著者】新井白石 【解說】上卷には史論、下卷には史論・雜著・詩聯句等を收めてある。また「白石遺文拾遺」二卷があり、上卷には序、下卷には雜著及び詩が收めてある。

【佐久】

新井白石（新井太吉氏藏）



新井白石筆蹟（委蛇日歷）

榮進は實に異數に屬する。然るにその主家宣は、正德二年、白石五十六の歲に薨じた。吉宗が將軍職を繼ぐに及んで、白石は意を失つて退隱し、讀書著述に晩年を送つた。明治四十年、正四位を贈らる。【著述】新井白石全集（國書刊行會）がある。一生の著述すべて三百餘種、その內上代史を研究した「史疑」をはじめ、今傳はらぬものも多い。その代表的の著書としては次の如きものがある。○藩翰譜○折たく柴の記（各別項）○古史通（後出）○古史通或問○讀史餘論○東雅（別項）○東音譜（別項）○同文通考（別項）○西洋紀聞（後出）○采覽異言（後出）○本朝軍器考○退私錄○白石先生紳書○白石爛○白石遺文（以上各別項）等。【人物】白石、少にして大志あり、常に「大丈夫生れて封侯を得ずんば、死して當に閻魔王たるべし」といつたといふ。人と爲り傲岸にして他と合ふところが少く、他よりもまた畏避された。その學餘りあつて、德量のやゝ乏しかつた憾はあるが、その曠世の雄才たりしことには、何人といへども異議がない。

【業績】白石の學問は、史學・地理學・言語學・典故故實、その他の各方面に亙り、學んで至らざるところがなかつたが、一面に於てまた詩に長じ、その什は富貴の相を帶び、絕えて寒乞の態なしとされる。幕末の詩宗野村篁園は、白石を以て近世第一の作家となし、私淑するところが最も深かつた。賴山陽も、祇園南海・梁田蛻巖・秋山玉山（各別項）と併稱して正德の四家となし、その「論詩絕句」に於て、「正德諸公盡出群。駸雞雄雉各爭文。飜空千仞求威鳳。當屬筑洲源使君」といつてゐる。白石は國文に於ても優に一家を成した。その文は格を外づるゝものが多いが、「藩翰譜」「折たく柴の記」などは、獨自の妙趣を具へて他の企及を許さない。〔以上森〕

【國語學上の業績】白石は固より國語學を專門とした人ではない。而もその卓拔な識見と倦まざる努力とは、國語學史上に甚大な貢獻をなした。その功績の第一は「東雅」二十卷（別項）に依つて代表せられる。國語の語源研究である。白石は常識的考察を排して、歷史的に研究すべき事を主張した。又國語と外來語とを明かに區別し、國語は飽くまでも國語として解說した。「東雅」以前に語源を研究したものには「和句解」及び「日本釋名」（各別項）があるが、その內容は「東雅」とは同日の談ではない。國語語源の學術的研究は、實に「東雅」に始まるのである。第二は「同文通考」四卷（別項）を中心とする文字の研究である。蓋し文字の纏まつた研究は「同文通考」を以て嚆矢とするものであり、爾後の文字の研究に甚大な影響を與へたものであつて、その功績は「東雅」に次ぐものである。第三は「東音譜」一卷（別項）に見える假名による綴字法の研究である。この問題は明治以來、特に學界の重要問題として論議せられて居り、今日なほ解決されないものであるが、白石は早くもこの問題に着眼して一つの提案をなしてゐる。而してこの問題に提案をなしたのは、江戶時代では、白石と文雄（別項）の二人であり、白石は最初の提案者である。以上の三著は、白石の國語學に關する代表的著作である。この外に「采覽異言」五卷（正德三年成る。白石全集卷四所收）と「西洋紀聞」三卷（正德五年成る。全集卷四所收）とは、外來語研究に有益なものであり、「古史通」四卷（享保元年成る。全集卷三所收）は日本古代の人名・地名の研究に裨益すること少くないものである。これを要するに白石の國語學に關する研究は、今日から見れば不備もあり誤謬もあるが、その國語學史上に遺した業績の大なることは、專門の國語學者と雖も、白石の上に出づる者は五指を屈するにも足りないものである。〔以上龜田〕

【參考】新井白石山路愛山（十二文豪第八卷）○新井白石上田萬年○新井白石とヨワン・シローテ吉野作造○言語學者としての新井白石 上田萬年（國語のため）○新井白石關係文獻總覽 東京市日比谷圖書館（東京誌料特別調查第一冊）

白石遺文（はくせきいぶん） 一卷【著者】新井白石【解說】上卷には史論、下卷には史論・雜著・詩聯句等を收めてある。また「白石遺文拾遺」二卷があり、上卷には序、下卷には雜著及び詩が收めてある。〔佐久〕

白石先生紳書（はくせきせんせいしんしょ） 隨筆 十卷【著者】新井君美【諸本】久しく寫本で流行したが、「退私錄」と同じく明治三十九年國書刊行會の新井白石全集第五卷に編入上刊された。【解說】同じ著者の別著「退私錄」（別項）と姉妹關係のあるもので、同書に似て、その師木下順庵幷に同門の知友、己が門人等から聞いた談話を書き留め、閱讀の諸書から要項を抄出し、その他古今の史談、殊に元龜・天正以後、德川氏初期に至る頃の知名將士の言行及び家系などを錄し、更に有職・法制・兵學等に係る心覺えを記し、又自家の見聞した異事・奇蹟等に至るまで、頗る雜多に亙つて書いてある。著者の「藩翰譜」（別項）の資料になつたものも定めてこの中に在るであらう。「退私錄」に比べて更に興味ある逸話が多い。但し前者には每條に標目を出してあるが、本書には標目はなく、單に一ツ書きにしてある。卷一に易の戒懼の辭以下、卷二に盛衰記の異樣語以下、卷

信屈な表現形式を假る必要はなかつたかも知れない。何となれば、彼は支考・乙由の流を汲んだとはいへ、その創作の根本精神に於ては、既に夙くから芭蕉の意に通ずるものがあつたからである。かの寬延二年の紀行に徵しても彼の句作態度が一般よりは聊か高かつた事が知られる。併し彼はまだ自分の目ざす所と支麥の風調との間に、大きな徑庭のある事に十

麥調に反對したのみで、先師麥林に鞭つ背恩の徒ではなかつた。「新虛栗」の中にも、乙由の句にして採るべきは必ず採つてゐる。

【編著】蕉門一夜口授○新虛栗（各別項）○鶉立一册（寶曆年間。寶曆某年、金澤の四樂庵を翊に讓つて小松に隱棲し、更に諸方に遊歷の志を雅友に告げたため知友の句を集めて出版したものである。蔡村の書、蕪園の手紙、艷夢の跋等があつて、當時の

に跋し、又師の七回忌追善集「新亭」（寶政元年刊）を撰んだ垂菊洞八水や、「新亭後篇」として師の遺章百句を集めて「落葉掬」を選んだ鯉走庵其叟等があり、なほ蝶化・物赤・暫夢尼等「新亭」「落葉掬」に見える門人の數は頗る多い。俳友としては希因の門に出て浪華に住んだ二柳と最も親しかつた。麥水は西南の遊遊から歸つて後事を辭し、一子があり、陸之丞と稱した

受けた。元祿四年、三十五歲の秋、堀田家を辭し、淺草に書を講じて僅かに生活すること二年餘、同六年の暮に至り、師順庵の推擧によつて甲府侯德川家宣（當時綱豐）の儒員となり、眷遇極めて厚かつた。寶永六年（五十三歲）、家宣の將軍となるに及んで政務に參與し、獻替するところ甚だ多く、從五位下に叙せられ、筑後守に任ぜられた。新進の學者にしてこの

三に琵琶泉以下、巻四に前代鎌倉の管下以下、巻五に西國衆高良の御陣に參る以下、巻六に吉川惟足の名以下、巻七に賀州醫師坂井順元以下、巻八にかうべ堂以下各數十條を收めてゐる。原本に序跋はない。〔和田〕

白石爛（はくせきらん）　隨筆　二卷　【著者】新井君美　【解說】著者の聖像攷・進呈案・玉考・樂考・木瓜考・人名考・岩松家系附錄序說・冠服考・觀樂筆談・江關筆談・樂說・俳優考・國郡名字考・地名河川兩字通用考・天正年中田地へ繩を入レ事、准后准三宮の事、決獄考の十七考證文を收めたもので、もと一篇づつで一書を成すべきものである。〔和田〕

泊船集（はくせんしふ）　俳諧集　六卷三册　【編者】鳳國　【名義】自序によると、泊船堂卽ち芭蕉庵の遺稿といふ意で名づけられたのである。　【刊行】元祿十一年十一月　【諸本】芭蕉翁全集（俳諧叢書）所收。　【解說】卷之一に芭蕉翁道の紀と題して「野ざらし紀行」を收め、卷之二・三・四・五におの〳〵芭蕉葊拾遺稿と標題して、一卷に一季づつ芭蕉の四季の發句五百二十二句を收め、卷之六に、机邊に殘つた文の端々から高客の佳章を拾つて追加とするとはしがきして、芭蕉・其角・去來その他蕉門の發句二百四十一句を四季類題として收め、その末に、梓工へ渡した後の追補があつて、その中の末に、去來からの句信を加へてある。　【價値】本書の序は、蕉風の代表撰集を五部簡拔して述べてゐて、七部集選定の先驅をなすものの一つであり、芭蕉翁道の紀は「野ざらし紀行」刊行の最初のものであり、芭蕉庵拾遺稿は芭蕉句集の先驅として後人に注目されたものである。併し一證に採寫の誤が多い上に、信章・么刀・一晶・涼菟などの句を芭蕉と誤つた

り、「武藏曲」に於ける角止・芭蕉の兩句を混同して一句としたものを揭げたり、附句であるものを發句と誤つて載せたりしてゐて、頗る杜撰を免れない。許六が「宇陀法師」に於て、「書々の眞僞を考へず、てには違、書きあやまり、文盲千萬なる事論ずるに足らず」「此泊船手にとる物にあらず」と云つてゐるのは、固より酷評に失するが、併し編輯の態度用意に粗漏のあることは覆ひ難い。

【參考】誹諧諸集訂誤烏窠庵布磧　○泊船集註解　輕花坊　〔萩原〕

白梅園驚水（はくばえんきやうすゐ）　紀行　二册　【著者】千那　【名義】遨渓の序に「蓋翁（千那を指す）初發二湖陰一之時、東三法物一駄二驛馬一。其色白矣。既而抵二武陽一之日復然。故感以命レ之云々」とある。なほ佛家に云ふ摩騰・竺法蘭の二梵僧が、白馬に佛像經卷を載せ來つた故事にも據つたのであらう。　【刊行】未詳。但し書中享保八年の跋がある。　【解說】江州堅田本福寺の住職千那の東北紀行である。全篇を釋教篇（第一）、神祇篇（第二）、戀情篇（第三）、哀傷篇（第四）、雜篇（第五）に分ち、正德三年二月遨渓の序、三井の大僧正旭海の句文、有坂氏の餞別文、妙心禪院或菴長老の律詩、享保八年月筌の跋、正德三年十二月千那の跋がある。なほ追加十一條を附記して、高祖親鸞に關する事項を詳說し、又外記・寺院部十八項を附して、淨土眞宗寺院の根元を記し、最後に千那の漢文跋がある。　【紀行大要】千那は、寶永五年三月二十八日堅田を發足し、對岸木濱に渡り、四月朔日長澤福田寺に泊り、やがて美濃路に向ひ、先づ熱田明神に夜參し、尾州笠寺の觀音を拜し、鯰子の西福星寺に宗長の石碑を尋ね、三

島明神を禮し、箱根權現に參り、湯本早雲寺を訪れ、四月二十九日江戸へ着き、深川五本松なる門人千梅の庵に入つた。六月の初め鎌倉見物、中頃江戸に歸り、八月常陸稻田の靈跡を拜し、冬又江戸に歸る。寶永六年常陸に入り、再び稻田に赴き、高祖の遺跡を拜み、七言の詩を作る。結城の玉岡は惠信禪尼の遺跡であるが、旅行中、濕に犯されて果さなかつた。更に鬼怒川を渡つて、横曾根の古寺を訪れ、水無川を渡つて筑波の麓に到り、別當の坊の側に宿る。それより小田・北條にかゝり、土浦に出る。水戸に泊り、鹿島に參社。なほ唯佛房の遺跡那珂ノ湊淨光寺に行き、金澤に志す。こゝは如信尊師の遺跡である。七・八月をかけて江戸に歸る。八月の末、又江戸を立つて越後に向ふ。先づ幸手に泊り、室ノ八島を見、日光山に參る。那須野を行き、芦野に柳を見、白川を過ぎて能因を回想し、會津若松に塗師を見る。津川・いしまの里・保田・大室・下里を過ぎ、新潟光林寺に到る。それより伊彌彥權現に參り、出雲崎を眺め、かめわり坂を上り、柿崎に到る。國分寺に參詣し、高田瑞泉寺を訪れ、關山を越えて信濃路に入り、善光寺に參詣。更科姨捨山を眺め、川中島を一見し、上田・小諸・碓日坂を經て松本に下り、熊谷を經て、こゝかしこを巡禮し、九月中旬江戸に歸る。この旅行は單なる遊歷の旅でもなく、又自家の俳諧を弘めるためでもなく、目的は宗祖遊化の地を巡禮するにあつた。途中名所舊跡を見て古人を偲びもして居り、所々で句も成つてはゐるが、それは要するに副產物で、實は淨土眞宗遺跡の巡錫が主であつた。この點が芭蕉の奥羽旅行と面目を異にしてゐるところである。文章も簡淨でよい。　【註釋書】

千那の法嗣角上の「白馬紀行口耳」がある。享保十五年の著である。「白馬紀行」に就いて千那に問うて置いたことを記したもので、紀行中の神社・佛閣・人倫・古事・詩歌・熟語・發句等に就いて註解してある。これあつて始めて「白馬紀行」中の事項を解し得るとも云ひ得るものである。　〔萩原〕

幕府御嘉例連歌（ばくふごかれいれんが）　【沿革】起原は明かでないが、室町時代に始まつてゐて、室町時代では式日が例年正月十九日であつた。江戸時代に入つては、その規模も大に整備し、式日は初め正月二十日であつたが、三代將軍家光薨去の後は、その命日を避けるために正月十一日に改められ、以後定例となつた（家忠日記・武德編年集成）。かくて江戸時代末葉までもどうにか續いた。　【作法次第】室町幕府の頃は「攝家・門跡・公家・大名・御供衆・番方・同朋、地下衆の內堪能の人祇候、殿上人御祇候、御酌御配膳武家、地下衆は五十韻過ぎてまかり立てかげにて御湯漬賜はられ候」（年中定例記）といふ如き作法であつたが、江戸幕府の頃となつては、南北兩里村家の宗匠を初め、十餘人の連衆がこれに加はり、式の前日に豫習を行ひ、當日は、宗匠は法橋又は法眼の式服を着けて連衆一同と共に登城し、連歌の間に祇候する。連歌の間には、床を飾つて菅神の像を懸け、神酒を供へ、梅花を瓶に挿む。かくて卯の下刻に至つて、連歌師は南北に居並び、執筆は床の前方文臺に近く着座して將軍の出座を待ち、出座あつて人々の句を高聲に披講する。その狀は禁中に於ける和歌御會始の模樣に相似たものである。この御城御連歌は、初めは百韻を賦したものであつたが、後には「表白・別吟・名残」を略する定めとなつた。發句

は第一の宗匠これを賦し、脇は將軍、第三は次位の宗匠がこれを賦する。將軍の句は次位の宗匠が代作するのが普通で、その宗匠は豫め作つて置いて、替句と共に封書にして當日老中の手を經て將軍に呈し、將軍の可としたものを讀み上げるのである。全部を披講し終るには長時間を要するので、將軍は第三の講唱の了るのを待たずに、黑書院から竹の廊下を傳ひ、その聲を耳にしながら白書院に入るのである。當日は老中以下然るべき人々に陪聽を許され、式が終れば連歌師に白銀及び時服を賜はるのが例であつた。　〔福井〕

幕府衰亡論（ばくふすゐばうろん）　史論　【著者】福地櫻痴　【發表】明治二十四年、雜誌「國民之友」に連載。翌二十五年十二月、民友社刊行。

を捉へる新聞記者的敏感さや、辯護的な書き方が兎角むつかしいものであるに拘はらず、それに成功して、明治期の最も異色ある史籍となつた。　〔千葉〕

伯母集（はくぼしふ）　歌集　一卷　【作者】康資王母　【名義】康資王が神祇伯であつた爲めその母を伯母といふ。　【別稱】康資王母集　【諸本】群書類從二七八所收　【解說】歌の數は百五十四首。內五首は連歌である。類從本は奥に古寫本三本を以て校合すとあり、終から七首目の肩に「以下五首一本無」とある。この五首は「後拾遺集」及び「金葉集」に見えるが、詞書を省き贈答歌の場合には、作者の歌のみを擧げ、極めて不完全な記載法をとつてゐる。恐らくは或る本が勅撰集によつて補つたもの

【作者小傳】伯母は高階成順の女で、母は伊勢大輔（別項）である。妹の筑前乳母、源兼俊母は、共に「後拾遺集」の作者である。母が上東門院にお仕へした關係か、伯母は四條宮皇后に仕へ、四條宮筑前と呼ばれた。蓋し父が筑前守であつた爲めであらう。康資王は、「本朝皇胤紹運錄」に、花山院の御孫とし（實は延信王の男、神祇伯、右京權大夫、寬治四年九月二十日卒）、母は筑前守高階成順女とあるから、伯母は延信王の室であつたことになる。伯母が成順の女であることは「尊卑分脈」に見えてゐるが、伊勢大輔が成順の妻であつたことは、本集や

花山院―清仁親王―延信王―康資王
「伊勢大輔集」
「新千載集」等

に見える同一の歌の詞書が伊勢大輔と伯母と

家に說教を聽きに行つたこともあり、また並後と最も親しかつた雲居寺瞻西とも、歌の贈答がある。長治三年（一七六六）、匡房が再び權帥となつて下るのを祝つてゐるが、始めて參內したと思はれる永承五年の頃が餘程の若年であつたとしても、この頃は六十歲以上となり、後冷泉・後三條・白河・堀河の四代に亙つて生存したことになつて、周防內侍と同時代の人となる。康資王の外に一人の娘があつたこと、橫河の聖の弟子となつたことも、本集に見える。

白米城（はくまいじやう）　傳說　【解說】普通に孤山の急峻なる絕壁の上などに附いてゐる傳說で、周圍の居住者だけが、これを史實として信じてゐる。曾てその山上に城があつて、某

は第一の宗匠これを賦し、脇は將軍、第三は次位の宗匠がこれを賦する。將軍の句は次位の宗匠が代作するのが普通で、その宗匠は豫め作つて置いて、替句と共に封書にして當日老中の手を經て將軍に呈し、將軍の可としたものを讀み上げるのである。全部を披講し終るには長時間を要するので、將軍は第三の講唱の了るのを待たずに、黑書院から竹の廊下を傳ひ、その聲を耳にしながら白書院に入るのである。當日は老中以下然るべき人々に陪聽を許され、式が終れば連歌師に白銀及び時服を賜はるのが例であつた。〔福井〕

幕府衰亡論（ばくふすいぼうろん）　史論　【著者】福地櫻痴【發表】明治二十四年、雜誌「國民之友」に連載。翌二十五年十二月、民友社刊行。【内容】「幕府を主として叙述しなければ、明治維新史の眞相は分らない」といふ着眼から起稿した。本書は三十三章から成り、まづ德川幕府は、封建制度に起つて封建制度のために亡びたと起筆し、間接の原因は尊王思想と外交問題にあるとして、幕府當初の對外政略から進んで、幕末の尊王攘夷問題までを內治外交の機微に亙つて詳說し、結局幕府衰亡の因は遠い所にあり、幕末の政策が必ずしも誤まつて居らぬと論斷し、すべて幕府側に同情して書いてゐる。【價値】德富蘇峰は、この書は、櫻痴の著述中第一の作物だが、惜しいことには突き込む力が足らず、平面描寫に過ぎて深刻味が缺けてゐる。而も情と理と勢とを揣摩して、その要領を得てゐるものは他に見當らないと序文で評してゐる。著者の實歷による多くの資料を有した事、著者の明暢老練を極めた叙事の筆が、事件の曲折を描いて小說以上の微細を盡してゐる事、大局の焦點を捉へる新聞記者的敏感さや、辯護的な書き方が兎角むつかしいものであるに拘はらず、それに成功して、明治期の最も異色ある史籍となつた。〔千葉〕

伯母集（はくぼしふ）　歌集　一卷　【作者】康資王母【名義】康資王が神祇伯であつた爲めその母を伯母といふ。【別稱】康資王母集【諸本】群書類從二七八所收【解說】歌の數は百五十四首。內五首は連歌である。類從本は奧に古寫本三本を以て校合すとあり、終から七首目の肩に「以下五首一本無」とある。この五首は「後拾遺集」及び「金葉集」に見えるが、詞書を省き贈答歌の場合には、作者の歌のみを擧げ、極めて不完全な記載法をとつてゐる。恐らくは或る本が勅撰集によつて補つたもので本來は本集に存しないものであらう。最後の歌「萬代を……」は紀伊女の歌であつて伯母のではない。集全體の部類は施されてゐないが、部分的には同一部類に屬するものや、何かの關係のあるものが連續してゐる。卷頭には堀河院艷書合の歌があり、十五首目から高陽院七番歌合の歌を載せてゐる。大部分は宮中生活に基づく贈答歌が多い。勅撰集に見える伯母の歌は「後拾遺集」以下凡そ三十九首あるが、內三十二首は本集中に見える。【歌風】伯母の歌には內面的なものが乏しく、華やかな宮中生活を享樂してゐるかの如きものがある。恐らく彼女は、文化の沒落などといふ疑惑は少しも抱かず、現在の幸福に滿足し情趣に浸つてゐたのであらう。母の伊勢大輔は、緊張した心を見せてゐるが、彼女は散漫である。周防內侍は刹那に生きる銳さと共に、生活に寂しむ心や、驚き內省する心もあるが、彼女は單純である。

【作者小傳】伯母は高階成順の女で、母は伊勢大輔（別項）である。妹の筑前乳母、源兼俊母は、共に「後拾遺集」の作者である。母が上東門院にお仕へした關係か、伯母は四條宮皇后に仕へ、四條宮筑前と呼ばれた。蓋し父が筑前守であつた爲めであらう。康資王は、「本朝皇胤紹運錄」に、花山院の御孫とし（實は延信王の男、神祇伯、右京權大夫、寬治四年九月二十日卒）、母は筑前守高階成順女とあるから、伯母は延信王の室であつたことになる。伯母が成順の女であることは「尊卑分脈」に見えてゐるが、伊勢大輔が成順の妻であつたことは、本集や

花山院―清仁親王―┬延信王　「伊勢大輔集」
　　　　　　　　└康資王　「新千載集」等

に見える同一の歌の詞書が伊勢大輔と伯母との母子關係を示してゐること等によつてわかる。伯母は寬治八年の高陽院七番歌合、長治・嘉承頃の堀河院艷書合の作者であるが、共に四條宮筑前とあり、「經信集」「基俊集」に贈答歌があるが、なほ四條宮筑前とある。これ等の歌はすべて本集中に所載せられてをり、代々の勅撰集はそれ等の歌を明かに康資王のものとしてゐるから、本集そのものを疑はない限り四條宮筑前は卽ち康資王母である。四條宮は賴通の女寬子にて永承五年入內して後冷泉院の女御となり、翌年皇后とならせ給うた。伯母もその頃若年にて參內し、女流歌人として宮中に時めき、賴通や師實等からも愛されたのであらう。集中にも宮中生活をよんだ歌が多く見える。伯母が常陸に下つたのは、後三條天皇の御代であらうが、經信は京から文を贈つてゐる。通俊は「後拾遺集」を撰するに當つて、彼女の歌を乞うた。彼女が歌を贈ると、「此を光として」と追從をいつた。基俊の家に說教を聽きに行つたこともあり、また基俊と最も親しかつた雲居寺瞻西とも、歌の贈答がある。長治三年（一七六六）、匡房が再び權帥となつて下るのを祝つてゐるが、始めて參內したと思はれる永承五年の頃が餘程の若年であつたとしても、この頃は六十歲以上となり、後冷泉・後三條・白河・堀河の四代に亙つて生存したことになつて、周防內侍と同時代の人となる。康資王の外に一人の娘があつたこと、橫河の聖の弟子となつたことも、本集に見える。〔西下〕

白米城（はくまいじやう）　傳說　【解說】普通に孤山の急峻なる絕壁の上などに附いてゐる傳說で、周圍の居住者だけが、これを史實として信じてゐる。曾てその山上に城があつて、某といふ智謀の武士が立籠つてゐた時に、敵が攻め寄せて來てどうしても落すことが出來ず、城の唯一つの弱點たる水の手を絕ち切つてこれを苦しめた。城兵はわざと平氣を裝うて、馬を蹋近く牽き出して白米を以て脚を洗ひ、水がまだ幾らでもあるやうな樣子を示した。或は崖の上から白米を流して、瀧のやうに見せかけたと傳へるものもある。敵が遠方からこれを望み見て、失望して軍を返したといふ例もないではないが、大多數は後にその計略が看破されて、終に落城したことになつてゐる。水だと思つてゐたら小鳥が來て啄ばんだ、犬が來て嘗めたといふ話もあるが、それよりも顯著なのは一人の老女、若しくは戀する若い娘の密告によつて暴露し、その罪によつて永く子孫の者に祟りがあつたと謂つてゐることである。亡靈譚の系統に屬することはこの點からも察知せられる。信州の洗馬（せば）では地名の說明としてこの傳說がある。併し今日

わかつてゐる類例は五十に近く、北は南部津輕から南は四國九州の果まで、十九の府縣に分布し、一縣に四つ五つ、知らずに同じ傳説を信じてゐた例さへある。或は土中から燒けた穀物が出たり、又は米粒に似た砂を産する土地もある故に、これが一つの誘因ではないかと考へられてゐるが、全然さういふ痕跡を持たぬ土地も、決して少くはないのである。最も主要なる共通點は、地形が城址らしく見えることと、次にはその地方の近世の軍記類に、面白く詳しくその事實を叙したものの多いこととである。各地の軍談家の中に隱れたる聯絡系統があつたといふ一つの證據と見ることが出來ると同時に、傳説が屢々語り物の土産によつて、新たなる發生を見た例ともいひ得る。この材料が支那の文獻から導いて來られたといふ説には、まだ十分なる根據はないやうである。

〔柳田〈國〉〕

白面嚢語（はくめんごん）「錦城茶話」を見よ。

白羊宮（はくやうきゅう）詩集　【著者】薄田泣菫　【刊行】明治三十九年五月、金尾文淵堂。【内容】全六十四篇「ああ大和にしあらましかば」「望鄉の歌」「妖魔自我」「笛の音」「をとめごころ」「離別」「牧のおもひで」「白すみれ」等を代表作とする。【批評】この集には、泣菫のさまざまな試作がその總收を示してゐる。さきの「二十五絃」（別項）に試みた長篇詩は、漸くその影を失ひ、「牧のおもひで」の類の小曲と、「小雀と桂女」の類の民謠調と、「妖魔自我」の如き象徴詩風と、「ああ大和にしあらましかば」の類の回顧曲とである。この泣菫詩風の頂點は「有明集」と共に、凡そ明治新體詩の最高所を示すもので、この時以後、彼には新しき展開へ私意識と力強とがあつたが、遂に新詩境を把持するに至らずして、次第に詩壇から去る事を餘儀なくせられて了つた。併しながらこの集に於ける詩語の美は、上田敏もその雜誌「藝苑」に於ける文藝月評「鏡影錄」に於て極力讃美を惜しまなかつた如く、三十年代の風潮であつた古語復活といふ事は、ひとり泣菫に於て完全に身に體して實現せられた。藤村詩の程度に滿足した一部愛詩家は、この瑰麗の古典美と高雅の浪漫美との一致に於て示された七音五音を基調とする新詩調に、初めて複雜極まる詩形美と、その背景の詩情の清奏とを西詩的感化による詩情の流露に於て味ふ美感を經驗した。

〔日夏〕

白樂天（はくらくてん）「住吉物の諸曲」を見よ。

羽倉考（はぐらかう）有職　二卷　【著者】荷田在滿　【刊行】明治十四年二月、我自刊我叢書所收。【成立・由來】校者甫喜山景雄の議語に依ると、延寶以降寶曆に至る間に、幕府が諸家から集めた考案を、名家叢書と稱して紅葉山文庫に藏してある中に存するもので、八卷のものを二卷としたものといふ。【解説】官職・裝束に關する考説を集めたもので、卷一には、王臣家領來由考、兵士考、地下人考、家領由來之事、除目名目略解、異位重行之事等の官職に關する事を載せ、卷二には、山藍、褰與、打衣不レ同、衣之色目、衣服考、水干着用考、山藍之考、青海裝束考、菊紋考、汗衫考、裙帶考、唐紙考、匂末考、君臣養父母之服紀微考等、主として裝束に關する考案が載せてある。識見卓拔、篇々悉く珍とするに足る考案である。

〔石村〕

白鯉館卯雲（はくりくわんぼううん）狂歌師　【本名】木室氏。初名庄七郎、次に庄左衞門、後七左衞門と改め、諱を卯雲と云ふ。【別名】二籠亭東雲、後、俳諧寂編蝠と改む。【生歿】生年未詳。文政十三年（一八三〇）六月二十日歿す。【法名】朝心院殿誠譽鶴翁居士。【墓所】小石川仲町西岸寺　【閲歴】江戸本所相生町に住した幕府の小普請方、初代卯雲及び朱樂菅江に就いて狂歌を學び、本所側の判者となつた。

〔野崎〕

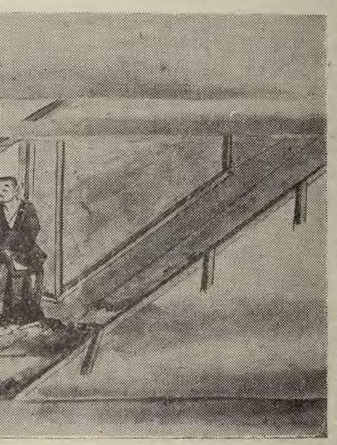
化銀杏（ばけいてふ）小説　【作者】泉鏡花　【發表】明治二十九年二月、「文藝倶樂部」　【刊行】鏡花全集第二卷所收。

【梗概】年若き芳之助は祖母と二人、敎員西岡の家に間借してゐた。西岡の妻お貞は家附の娘で、良人とは年齡も違ひ、性格も相反してゐるので、當初から圓滿を缺き、殊に一人兒を失つてからは、常に良人の憎惡と猜疑にさいなまれてゐた。芳之助が亡姉の俤に似たお貞を慕へば、お貞も亦彼を弟の如く愛するので、西岡の心は穩かでなく、夫婦間の諍ひは更に募つて行つた。お貞は良人を嫌ひ、果てはその死をさへ希ふ心になつたが、夫の病重るにつれては獻身的の看護を厭はなかつた。それで世間からは貞女とうたはれたが、西岡は妻の内心を看破して執拗に追及し、病的な復讐心から彼女の手によつて殺害されることを敢て望むに至つた。かれこれと心悸の嵩じたお貞は、遂に夫の命を絶つ決心までした。月を經て心狂つた彼女は、罪を許されて伯父が營んでゐる旅宿に歸つて來たが、夫殺しの汚名を恥ぢ、一切の光を恐れ、暗室に閉ぢ籠り、果ては旅客の枕頭の行燈までも吹き消さねば止まないので、旅宿は化銀杏と諢名されて世間の噂となつた。

【解説】この作品は、作者第一期の觀念小説時代から、次の浪漫主義に移る過程のもので、兩方面の特色が共に包含されてゐる。一篇の主題は、形式結婚の不幸に惱む者の苦悶を描いた戀愛至上主義の觀念にあるが、年上の美

女を慕ふ少年芳之助の純情は、「雲之卷」の新次、「照葉狂言」（別項）の貢と等しく、作者の浪漫趣味を現はすものである。また西岡の異常なる性格描寫には、後年の一特徴となつた殘酷美の萌芽を見ることが出來る。〔水上・平松〕

化物草子（ばけものさうし）繪詞　一卷　【名稱】「倭繪」土佐光茂の條に「カガシ化繪卷物、詞飯尾常房」とあるのは、この繪卷全體を指して言つたのか、或は第五話の部分だけが別に一卷となつてゐるのを指すのか不明であるが、「考古畫譜」の黒川眞頼補説及び「大倭畫名卷競」等の記載によれば、恐らく全卷の事を言つた別名と考へられる。【成立】足利季世か。繪を光茂とすれば享保中の人で、詞書の常房と時代が合致せず、光持（廣周幼名光持、又廣周



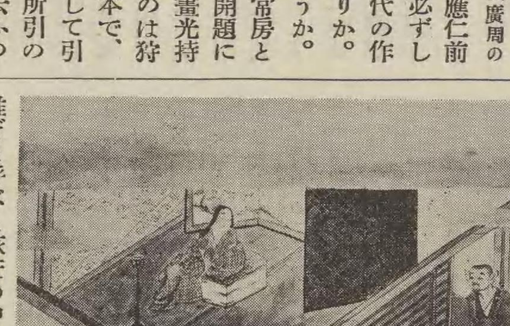
化物草

【梗概】五篇の獨立した短篇より成る小怪談集。文中不思議といふ語を特に多く用ひ、第一・二・四話はその話で結んである。〔第一話〕兵衞司の官人が七月頃のある夜、簾をあげて庭を眺めてゐると、丈の高い細い男と、低い太つた男と相撲をとるので、不思議に思つてゐると、取入れては出し〳〵四五度した。不思議に思つて翌朝調べて見ると、白い小さい杓子が炭櫃の下にはさまつてゐて、與へた栗もそのまゝにあつたと云ふ器怪説話。〔今昔物語〕卷二十七、桃園柱穴指出兒手招人語第三などが本據かもしれない。〔第三話〕女許りの家で、一人の女が夜念佛をしてゐると、出棚の側から耳の高い法師が覗き〳〵すること二夜に及んだので、不思議がつて翌朝調べると、正體は腐つた柄の折れた銚子だつたと云ふ器怪説話。〔第四話〕提の水に蠅が落ち込んだので、一人が摘み上げると、傍らの畫寢の人の鼻の穴に飛び込んだ。急に眼を醒ましたその人は、今大海に溺れ死なうとしたのを助けられたと、冷汗をかいて言つたと云ふ夢化説話。集二發心集一など、或は單記物の雜話としても固有のもの、外來のものなどが混綜して古くから豐富に傳へられるが、近古には他に「付喪神」（別項）を初め、「百鬼夜行繪卷」「天狗の草子」「土蜘蛛草子」（各別項）「魔神一如繪詞」等があり、江戸時代に入つては、支那小説の影響と相俟つて、一方「御伽婢子」（別項）「續おとぎばふこ」等から百物語式怪談咄へ、他方「英草紙」「繁夜話」から「雨月物語」（各別項）に到達する怪奇小説へ各々進展して行つた。本書に於ける化物は、恐怖の對象としてでなく、可愛い童話的なものとして描かれてゐるのが面白く、同時に早くも滑稽化せんとしてゐるのが注目される。

【參考】訂正補考古書譜卷九　○近古小説解題　○

女を慕ふ少年芳之助の純情は、「翁之巻」の新次、「船葉狂言」（別項）の貢と等しく、作者の浪漫趣味を現はすものである。また西岡の異常なる性格描寫には、後年の一特徴となつた殘酷美の萌芽を見ることが出來る。〔水上・平松〕

化物草子（ばけものさうし）　繪詞　一卷　【名稱】「倭繪」土佐光茂の條に「カガシ化繪卷物、詞飯尾常房」とあるのは、この繪卷全體を指して言つたのか、或は第五話の部分だけが別に一卷となつてゐるのを指すのか不明であるが、「考古畫譜」の黒川眞頼補説及び「大倭畫名卷競」等の記載によれば、恐らく全卷の事を言つた別名と考へられる。【成立】足利季世か。繪を光茂とすれば享保中の人で、詞書の常房と時代が合致せず、光持（廣周幼名光持、又廣周の弟も光持と云ふ）ならば、常房とほぼ同じ應仁前後の人である。詞書の作者と筆者とは必ずしも同一人とは定め難いが、先づ室町時代の作と見てよいであらう。光茂は光持の誤りか。或は後に更に、光茂も描いたのであらうか。【諸本】繪土佐光茂（一に光持）、詞飯尾常房と傳へ（考古畫譜卷九）、新編御伽草子本の開題には、東京帝室博物館本は跋語に、書常房畫光持とある由見えるが、同館に現存するものは狩野會心齋（喜川院）の奥書ある別の卷子本で、而も「考古畫譜」の眞頼補説に、それとして引くものとは又奥書が一致しない。眞頼所引の博物館本の粉本稻葉丹州所持の一卷と云ふのは、「大倭畫名卷競」に「傳云光茂筆　稻葉家藏㊀化物雙紙」と見えるそれらしい。なほ光茂は、「倭繪」「本朝畫史」「扶桑畫人傳」等に、「案山子化卷物」の筆者とせられてゐる。詞書だけの刊行としては明治以後に、新編御伽草子下卷・日本文學大系第十九卷に收められてある。



化物草子（帝室博物館藏）

【梗概】五箇の獨立した短篇より成る小怪談集。文中不思議といふ語を特に多く用ひ、第一・二・四話はその語で結んである。〔第一話〕兵衛司の官人が七月頃のある夜、簾をあげて庭を眺めてゐると、丈の高い細い男と、低い太つた男と相撲をとるので、不思議に思つてゐると、取入れては出し〳〵四五度した。不思議に思つて翌朝調べて見ると、白い小さい杓子が炭櫃の下にはさまつてゐて、與へた栗もそのまゝにあつたと云ふ器怪説話。「今昔物語」卷二十七、桃園柱穴指出兒手招人語第三などが本據かもしれない。〔第三話〕女許りの家で、一人の女が夜念佛をしてゐると、出棚の側から耳の高い法師が覗き〳〵すること二夜に及んだので、不思議がつて翌朝調べると、正體は腐つた柄の折れた銚子だつたと云ふ器怪説話。〔第四話〕提（ひさげ）の水に蠅が落ち込んだので、一人が摘み上げると、傍らの晝寢の人の鼻の穴に飛び込んだ。急に眼を醒ましたその人は、今大海に溺れ死なうとしたのを助けられたと、冷汗をかいて言つたと云ふ夢化説話。「雨月物語」の夢應の鯉魚と類話。〔第五話〕山里に寡住（やもめ）してゐる女が、淋しさに門田の案山子を眺めて自分の夫になつて呉れゝばいゝと獨語した。或る夕暮、揉烏帽子を着て弓矢を持つた男が來て宿をかるので、留めて語らひ明かした。それから毎夜通つて來たが、或る朝素性の現はれる時が來たと言ひ捨てて飄然と立ち去るので、女は怪しんで長い絲を付けて辿つて行くと、田の中の藁かし（案山子）だつたと云ふ怪婚説話。これは明かに「三輪式神婚説話」（別項）の變形で、苧環モーティヴまで含んでゐる。但し案山子の人格化は、既に「古事記」上卷の久延毘古に於て見るのであるが、この怪話は寧ろ「古今集」の誹諧歌「足引の山田のそほづおのれさへわれをほしといふれはしきこと」などから脱化してゐるとも考へられる。

【解説】怪異談は「靈異記」「今昔物語」や「水鏡」「宇治拾遺物語」「古事談」「十訓抄」「著聞集」など、或は軍記物の挿話としても固有のもの、外來のものなどが混綜して古くから豐富に傳へられるが、近古には他に「付喪神」（別項）を初め、「百鬼夜行繪卷」「天狗の草子」「土蜘蛛草子」（各別項）「魔神一如繪詞」等があり、江戸時代に入つては、支那小説の影響と相俟つて、一方「御伽婢子（おとぎばうこ）」（別項）「續おとぎばふこ」等から百物語式怪談咄へ、他方「英草紙」「繁夜話」から「雨月物語」（各別項）に到達する怪奇小説へ各々進展して行つた。本書に於ける化物は、恐怖の對象としてでなく、可愛い童話的なものとして描かれてゐるのが面白く、同時に早くも滑稽化せんとしてゐるのが注目される。

【參考】訂正增補考古畫譜卷九　○近古小説解題（島津久基）　○近古小説選附錄解説（島津久基）　黄表紙　三册　十五丁十七圖　【作者】十返舍一九　【畫工】自畫　【刊行】文化元年　【題材】「繪本太閤記」「木下蔭狹間合戰」等に據る。

【梗概】怪物太平記目錄として、讀本風の見出しが十一項目ある。三河國岡崎川の畔に住む河童は、劫を經て化物仲間の頭となり、切取强盜をして世を渡る。或る夜岡崎橋の上で、寢てゐる小蛇の尾を踏み、劍突を喰つたが、見所があるとて連れ歸る。小蛇は河童の油斷に乘じて尻子玉を拔取り、遠州松が浦の可平狐に奉公し、六兩の木の葉小判を持ち逃げしたが、小判は木の葉になつたので、又良い穴もあらうと都へ上る。往來の赤棟蛇（あかむねへび）は小蛇の相を見て將來は蟒となると豫言する。尾張の國清洲の邊に蛞蝓の化物があり、異風を好み、僧侶を捕へて牢屋に繋ぎ、隣國への往來には、轎舁の大勢に首を伸ばさせて行列を整へて通

ざまな試作がその總收を示してゐる。さきの「二十五絃」（別項）に試みた長篇詩は、漸くその影を失ひ、「牧のおもひで」の類の小曲と、「小雀と桂女」の類の民謡調と、「妖魔自我」の如き象徴詩風と、「ああ大和にしあらましかば」の類の回顧曲とである。この泣菫詩風の頂點は「有明集」と共に、凡そ明治新體詩の最高所を示すもので、この時以後、彼には新しき展開への準備と力倦とがあつたが、遂に新詩境を把

打衣不同、衣之色目、衣服考、水干着用考、山藍之考、青海裝束考、菊紋考、汗衫考、裙帶考、唐紙考、匂末考、君臣養父母之服紀微考等、主として裝束に關する考案が載せてある。識見卓拔、篇々悉く珍とするに足る考案である。〔石村〕

白鯉館卯雲（はくりくわんぼううん）　狂歌師　【本名】木室氏。初名庄七郎、次に庄左衛門、後七左衛門と改め、諱を卯雲と云ふ。【別名】二籠亭　日没す。〔法名〕朝心院殿誠譽雪翁宗居士　〔墓

る。小蛇は蛎蟇方の足輕に抱へられる。小蛇は仲間の蛇を使つて、小牧山の樹木を數へたり、三日の内に城の普請を仕上げたりして蛎蟇の氣に入り、佐屋川合戰には味方が敗れたが、小蛇のみは戰つて敵の城を取る。末尾に見越入道が出て來て、又この後編三册の出版について口上を述べる。

【構想】一九は享和三年に「怪物寶初夢」(後出)を創作して、得意の化物を四天王の百物語に結合してゐる。本書はその後を承けて寛政九年から順次に出版してゐる讀本「繪本太閤記」(岡田玉山作)と、嘗て難波にゐた頃、近松與七と號して、若竹笛躬・並木千柳等と合作した淨瑠璃「木下蔭狹間合戰」に據つて作つた黃表紙「木下蔭狹間合戰」(後出)とに據つて構想してゐるが、特に「太閤記」の人物を蟲や獸に見立てて、小蛇を秀吉、蛎蟇を信長、河童を蜂須賀、狐を松下嘉兵衞、往來の赤棟蛇(おやまかし)を安國寺惠慶、猫又を福富平左衞門に當ててゐる。小牧山御狩の陣、佐屋川合戰もそれ〴〵に當ててある。かくて三蟲の蛇對蛙、蛙對蛎蟇の關係は後編に讓る趣向で、讀者の興味をその豫告につないでゐる。かくの如く天正前後の英雄を筆端に飜弄し、化物視する冒瀆を敢てしてゐる。本書は「繪本太閤記」と同樣に、當局の忌諱に觸れ、作者は手鎖五十日、版元山口屋忠助は過料に處せられ、作品は絕版を命ぜられたが、この事件は却つて作者のために宣傳となつた。繪は中位の出來で、「繪本太閤記」に據つた挿繪が目につく。

【備考】「化物寶初夢」(享和三年刊、十返舍一九)賴光の四天王が保昌方で百物語をする。化物は恐る〳〵四天王の襲撃をとる。化物が極向に困つてゐると一九が現はれて、化物の逃げる様を見せる。金平は轆轤首と遊興する。化物の芝居の様。いづれも夢。

「木下蔭狹間合戰」(安政十二年刊、十返舍一九)盜賊蓮葉來作は猿之介・友市の二少年を養ふ。父の仇討、名劍の搜索に出た仁木彈正左衞門の子は、來作の娘お柚に通じ、來作が父の仇なるを知り、討つて蓮葉與六と改名する。小田方の軍師此下藤吉郎は猿之介で、齋藤の軍を狹間に破る。石川五右衞門は友市で、名劍は足利家にもどり、天下は安寧となる。藤吉郎は筑前守に任官する。　【小池】

馬骨人言(ばこつじんげん)　評論文　【著者】坪內逍遙　【名義】馬骨が人の如くものを言ふの意である。　【發表】明治三十四年、日本主義・國家主義から急に個人主義へ轉じて、ニイチエを讃美し、美的生活を唱へた高山樗牛(別項)は、頻りに天才主義を力說し、凡俗主義を罵つたのみならず、時代の道德・倫理の無力繁瑣なることを非難した。當時文學界から遠ざかつて倫理研究に主力を注ぎ、青年子弟を訓育しつつあつた逍遙は、ニイチエの思想に慊らず、これを鼓吹する樗牛の態度にも不滿を抱いた。逍遙を中心とした早稻田の文士中には、梁川・宙外等の如く、ニイチエ主義に反對の聲を揚げたものがあつた。それに對して樗牛は、三十四年十一月、「ニイチエの嘆美者」の題下に、「吾人が天才を嘆美するのは、吾人の精神生活を豐富にする所以だ。この間の消息は歷史論や、アナクロニズムでニイチエを批評し得たりとする輩の窺知を許さぬ」と云つた。それと共に赤門派の登張竹風等は、樗牛に聲援して早稻田に罵言を浴びせかけ、ドイツ語でニイチエを讀まぬ人々に、ニイチエがわかるかと云ふやうな氣焰を吐いた。それ等の形勢に對して、逍遙は思想上打捨て置けぬと考へ、こゝに匿名で、讀賣新聞紙上にその立場を明かにし、併せてニイチエ主義者を論難した。

【內容】逍遙が、樗牛のニイチエ鼓吹に反對した理由は、「無思慮・無分別・無見識の幼弱の目に映ずるニイチエイズムに至りては、純然たる無道德主義、絕對の利己主義也。良心を無視し、不自制を奬勵し、忠恕惻隱を排斥し、禮儀を破り、師父を侮る事を鼓吹す」と云ふにある。更にニイチエが惡時代精神の反動兒としても、その云ふところ、利己的個人主義に偏し、歷史的發達の逕路について考へず、畢竟、循俗の驕兒として惡時代精神の權化たるに留まり、その天才主義の如きは、根本的に人の子を不具にする思想であるといふ事において、逍遙はニイチエイズムを排擊するといふのであつた。

【批評】樗牛が時代の道德、倫理の行詰れることに失望し、倫理上の繁瑣な議論に滿足せず、その捌け口をニイチエに求めんとした事は一理あるが、詩人肌の彼が高調した本能滿足說にかぶれて身を誤つた青年が往々あつた。逍遙が思ひ切つて、ニイチエイズムを折伏しようとした熱意はこれを諒とすべきである。またその說述の巧妙さに讀者を微笑せしめた。が、逍遙のニイチエ哲學に關する考察が十分でなく、單にそれが道德的に及ぼした惡影響のみを功利的常識的に攻擊するに止まり、そのために樗牛との論爭も、いつまで行つてもがつしり取組めない結果で終つたことを世論は遺憾とした。兩者の立場の相違はそれをどうともなし得なかつた。なほ樗牛は右に對して「ニイチエの批難者」といふ題で答へたが、それは極めて短いものであつた。　【高須】

箱根草(はこねぐさ)　滑稽本　四編十二册　【作者】初・二編は瀧亭鯉丈、三・四編は爲永春水。　【角書】溫泉土産(たうざ)　【刊行】「日本小說年表」には天保三年の條にあげてあるが、家藏本によれば、初編奧附に、「東都瀧亭鯉丈編、爲永春水補、溪齋英泉畫、天保十五年(弘化元年)甲辰歲新刻」とあり、三編奧附には、「東都長次郎事爲永春水編、善次郎事溪齋英泉畫、弘化二年乙巳歲新刻」とある。　【諸本】滑稽名作集下(帝國文庫)・繪本稗史小說卷十五所收。

【梗概】剽輕仲間の湯本屋塔兵衞、底倉屋宮二、堂島屋木賀藏の三人が、箱根湯治を思ひ立ち、江戶を出て道中何れも色男ぶつたり、利いた風を裝つたり、惚けを言つたりしたものは二百文の罰金といふ掟をきめる。宮二は高輪でやつた狂歌を一九のものだと橫槍を入れられると、名人は暗合するものだと濟ましてゐる。塔兵衞は二人をやり過ごして居酒屋へ入ると、木賀藏は宮二を茶見世に殘して迎へに行く。宮二は茶屋の娘から煽てられて茶代一朱酒肴二朱の金を出す。料理の出來ぬうちに二人が來て、宮二をつれ出す。八幡・大森等の茶屋で酒をのみ、川崎に出で、宮二が水汲の痕を馬子の小便と思ひ、傳はつて行くと茶屋の內庭に入つて了ふ。已むなく三人は料理を取つたが食ひ切れず、折詰にして各自交替で馬持ちにして行く。神奈川の大黑屋に泊る。入浴中の褌をかくしたりして大笑ひで酒となる。翌日は藤澤・小田原を經て箱根の塔の澤、元湯彌五兵衞の宅に落ちつく。そこへ江戶から手紙が來、鯉丈に代つて春水が今後執筆すると書いてあつた。箱根細工を賣りに來た男から二朱金の入つた茶箱を素知らぬ顏で買取り、鏡の滿繼を見つけたりするが、後で驚見する。宮二は隣座敷に手拭を冠つた美人をつれた湯治客に二人を紹介し、塔兵衞とその美人とが結婚することになり、盃も終つて手拭を取ると、頭は鼈物で一杯だつた。結局三人はこゝを逃げ出す。夜の山中を恐々ながら行くと、幽靈に逢ふ。幽靈と思つたのは伊勢詣の男で、それと分ると三人は、宮本無三四だとか幡隨院長兵衞だなどと出鱈目を言つて劍術の型をやつて見せる。漸く宮の下の湯に落ちついたが、上方者のけちなのを見て喧嘩となり、仲裁で酒宴となつたが、上方者の食意地張つたのを見、醉うて寢てゐるうちに、椀に蛇や蟇を入れて大騷ぎを起す。再び大喧嘩となつたが、又仲裁が入つて酒となつた。

箱根権現縁起

てゐるといへる。　【小柴】

箱根權現緣起(はこねごんげんえんぎ)　繪卷　【解說】箱根神社所藏殘缺一卷。「さだいゑの中將」といふ人の娘が繼母にいぢめられ、或は大海に捨てられ、或は牢獄に幽閉されたりしてゐるのを、繼母の實娘が同情して遂に二人共家出し、「はらない國」の二王子の妃となつたが、その後尋ねて來た父と共に親子五人現世を果敢なみ、日本に渡つて箱根に三所權現、伊豆に二所ある。　【田中(一)】

藪姑柳(やぶなぎ)　川柳集　一册　【刊行】天明六年　【解說】初代川柳の選句集で、朱樂菅江の序文がある。難句も隨分あるが、研究家の一讀すべき珍本である。　【西原】

羽衣(はごろも)「天人物の謠曲」を見よ。

羽衣(はごろも)　傳說　【解說】現在童話の形になつて傳はつてゐるものは、「天人女房」とも名づけられてゐる。卽ち天人がこの世の男の妻となる點が要素であつて、本來羽衣の得喪は必ずしも問題でなかつたのである。謠曲の「羽衣」に男の名を白龍と謂つてゐることから考へて、この部分、支那の小說から落想を得たらしく說く人のあるのは恐らくは正しい。ただその羽衣を返し與へたら、喜んで天女が

男の機智と策謀とは、前代には必ずしも動づべきものでなく、殊に羽衣の發見といふが如き、稀有の幸運が伴ふものは、尊むべき神意とも考へられたのであらう。なほこれを取隱して、女の聽從を强ひたといふことは、古い形ではなかつたらしく、これと比照すべき多くの異類相婚譚、たとへば鶴女房や魚女房の類には、男の貧窮にして孝行正直なるを愛で、もしくは命を助けられた恩に報いるために、美女となつて來り嫁した話がある。さうしてたつた一つの約束又は禁止、卽ち機殿や產屋を覗き視るなといふ戒めを破り、或は本の姿を偶然に看破られた爲めに、天緣が切れて泣きつつ還つて行くといふ方が、飛衣奪還よりも古かつたことが考へられる。所謂豐玉姬說

り、鰻の蒲燒を奢つたりするが、後で露見する。宮二は隣座敷に手拭を冠つた美人をつれた湯治客に二人を紹介し、塔兵衞とその美人とが結婚することになり、盃も終つて手拭を取ると、頭は腫物で一杯だつた。結局三人はこゝを逃げ出す。夜の山中を恐々ながら行くと、幽靈に逢ふ。幽靈と思つたのは伊勢詣の男で、それと分ると三人は、宮本無三四だとか播隨院長兵衞だなどと出鱈目を言つて劍術の型をやつて見せる。漸く宮の下の湯に落ちついたが、上方者のけちなのを見て喧嘩となり、仲裁で酒宴となつたが、上方者の食意地張つたのを見、醉うて寢てゐるうちに、椀に蛇や蟇を入れて大騷ぎを起す。再び大喧嘩となつたが、又仲裁が入つて酒となつた。

【解說】二人の作者によつて成されてゐるだけ、前後に於て著しい相違が見られる。併し系統としては一九の膝栗毛物である。鯉丈の作には、常にそのチームは二人以上である。それは如何にも江戸人らしく、退屈紛れに二三人の友と遊山するといふ氣分が現はれてゐる。その無駄口や利いた風や色男ぶるところは、どの膝栗毛物にも見ゆる常套手法で、從つて本書からも新鮮味を見出すことは困難であるが、どうしても笑はねばならぬ江戸人といふものがはつきり出てゐる。單なる卽興的の洒落だけではなく、もつと〳〵註釋や前置を說かねばわからない洒落まで言はねば氣が濟まないといふところが見えてゐる。春水の執筆になつて來ると、洒落は餘程低級になつてゐる。鯉丈の茶番的なのに比して、春水のものはわざとらしいところがあり、而も「膝栗毛」の二番煎じのやうな題材で進んでゐる。滑稽本作者としては、春水は鯉丈に餘程劣つてゐるといへる。

箱根權現緣起（箱根神社藏）

箱根權現緣起（はこねごんげんえんぎ）繪卷【小柴】【解說】箱根神社所藏殘缺一卷。「さだいるの中將」といふ人の娘が繼母にいぢめられ、或は大海に捨てられ、或は牢獄に幽閉されたりしてゐるのを、繼母の實娘が同情して遂に二人共家出し、「はらない國」の二王子の妃となつたが、その後尋ねて來た父と共に親子五人現世を果敢なみ、日本に渡つて箱根に三所權現、伊豆に二所權現と現はれ給うたといふ物語を繪卷としたものである。詞繪とも筆者を傳へないが、その畫致には、鎌倉末期の大和繪樣式の中にも、一脈の新味を窺ふべく、製作年代は足利初期を下るものではない。而して繼子いぢめの一說話としてのみならず、箱根伊豆山に關する緣起の異本としても、興味ある一傳說である。

藐姑柳（はやなぎ）川柳集　一册【刊行】天明六年【解說】初代川柳の選句集で、朱樂菅江の序文がある。難句も隨分あるが、研究家の一讀すべき珍本である。【田中（一）】

羽衣（はごろも）「天人物の諸曲」を見よ。

羽衣（はごろも）傳說【解說】現在童話の形になつて傳はつてゐるものは、「天人女房」とも名づけられてゐる。卽ち天人がこの世の男の妻となる點が要素であつて、本來羽衣の得喪は必ずしも問題でなかつたのである。謠曲の「羽衣」に男の名を白龍と謂つてゐることから考へて、この部分、支那の小說から落想を得たらしく說く人のあるのは恐らくは正しい。ただその羽衣を返し與へたら、喜んで天女が舞ひ去つたといふ一條を、新たな附加と見ることが出來ぬのみである。沖繩本島から喜界島にかけて、今も行はれてゐる傳說に於ては、その羽衣を飛衣（とびざぬ）と謂つてゐる。男がこれを大切に匿して置いたのを、二人の中に出來たところの小兒が知つてゐて、それを子守唄に歌つたので母が心づき、窃かに取出してこれを着て天に還つたといふので、この點は又多くの狐女房譚の童兒が尻尾を見つけ、母の顏の尖つてゐるのを笑つたといふことと似通うてもゐる。伯耆の羽衣石山（うえしやま）の傳說に於ても、その天に飛び還つた天人女房には子があつた。その他の多くの例でも大に夫の家を富ましめるか、又は二人の間に佳い兒を儲けるか、兎に角にその家は永く存續して、これによつて祖先の血の尋常でなかつたことを誇つてゐたらしい痕跡は認められる。卽ち單なる文藝として持て囃される以前、信じてこれを傳へた傳說の時代も永かつたのである。妻を覓める男の機智と策謀とは、前代には必ずしも恥づべきものでなく、殊に羽衣の發見といふが如き、稀有の幸運が伴ふものは、尊むべき神意とも考へられたのであらう。なほこれを取隱して、女の聽從を强ひたといふことは、古い形ではなかつたらしく、これと比照すべき多くの異類相婚譚、たとへば鶴女房や魚女房の類には、男の貧窮にして孝行正直なるを愛で、もしくは命を助けられた恩に報いるために、美女となつて來り嫁した話がある。さうしてたつた一つの約束又は禁止、卽ち機殿や產屋を覗き視るなといふ戒めを破り、或は本の姿を偶然に看破られた爲めに、天緣が切れて泣きつつ還つて行くといふ方が、飛衣奪還よりも古かつたことが考へられる。所謂羽玉姬說話なるものは、この傳說の古い記錄の一であつた。それから他の一方に余吾湖傳說や天眞名井などの如く、天女が妻とはならずに子になつて來て養はれ、その親々の家を富貴にしたといふのも、同じ口碑の變化のやうに思はれる。富士の山麓を中心として、夙く發達してゐた鷲姬の物語、卽ち竹を伐り箕を作つて世を渡る貧しい老人二人が、一朝に神女を得て家富み榮えたといふことなども、後にその美人が飛んで空に昇つたといふことを結末にしてゐるのを見ると、同じく又異界交通の神話の名殘で、その子孫後裔と稱する家々のみは、久しくこれを我が家の由來を貴くする傳說として守り、又正式に語らせてゐたものと思ふ。もし然りとすれば、その名山の裾を洗ふ三保の海ばたを舞臺として、羽衣の謠の曲が新たに設けられたのも、甚づくところは遠く久しかつたもので、現にその詞章の中に援用せられる東遊びの駿河舞なるものも、やはり

り又人間との緣を全うして、本の國に還つて行く神の妻の、縹渺として霞の空に消え去つたなつかしさを、舞の姿によつて寫し殘さうとしたものと想像しても、大なる誤りはなさうである。〔柳田(國)〕

羽衣（はごろも）　所作事【曲節】長唄・常磐津掛合【初演】明治三十一年一月十二日初日、東京歌舞伎座中幕【作詞】三代河竹新七（前名竹柴金作）【作曲】長唄は十三代杵屋六左衛門と五代杵屋勘五郎、常磐津は七代岸澤式佐〔振附〕二代藤間勘右衛門（勘翁）〔傳來〕曲・振とも傳存。【諸本】續長唄全集（日本音曲全集）所收。【題材】謠曲の「羽衣」を所作事化したもの。【沿革】羽衣傳說は古來人口に膾炙して名高いが、戯曲としては謠曲の「羽衣」が古く、歌舞伎でも元祿期から取材せられたが、その中では、「羽衣壽曾我」（延享二年春江戸中村座、作者中村清三郎と早川儀四郎）と「けいせい天羽衣」（別項）等が著名である。殊に前者の第三番目に、初代瀬川菊之丞（後名傾城通路）によつて演ぜられた長唄の「天人羽衣」（三下り物）はこの類の所作事としての隨一で、明治前まで歌曲と共に中々流行したといふが、現今では曲節を知つてゐる人さへも少くなつた。その他、長唄には「壽相生羽衣」（通稱新羽衣。寶曆八年十一月中村座）、「二奏廓羽衣」（通稱廓羽衣。明和六年春同座）、「三保松常世通路」（明和八年七月市村座）、「七襲秋羽衣」（安永二年秋中村座）、「霞立雲井の舞振」（前出天人羽衣の增訂。同六年春市村座）、「群三舛團扇繪合」（慶應元年八月中村座）等、常磐津に「其名對色人」（通稱天人羽衣。天保十年十一月市村座）など出來たが、今日では殆ど磨滅し、現行の所作事では本曲が唯一の觀があり、長唄としては本曲と「新曲羽衣」（作詞半井桃水、作曲三代杵屋榮藏。大正七年二月鶴命會開曲）との二種が行はれてゐるに過ぎない。【解說】三保の松原で、天津乙女（五代尾上菊五郎）が漁師伯了（尾上榮三郎、現梅幸）に羽衣を奪はれて悲歎にくれるが、遂に舞を見せて返して貰ひ、天にかへるといふ筋で、曲は本調子「風早の三保の浦波穩かに」のオキに始まり、三下り「春の海原」で、伯了の出になる。「彼の三國を傳來の」から輕い振りになり、三メリに轉じて「それ唐人の酒盛に」のあたり、曲が面白く出來てゐる。「松風の音なふ聲も」で、天人の出になり、「今はさながら天人も」の愁嘆が謠曲と同樣に本曲の眼目である。それから二上り「東遊びの駿河舞」から天人の舞になつて、「浮島が原過行きて」の飛び去りに終るが、所作事としては優麗典雅の趣きがあり、幕切に見せてゐる天女の宙乘りなどが、一般に興味を持たれてゐる。新古演劇十種の一。

羽衣（初演繪番附）

【參考】劇代集二代櫻田左交○近世邦樂年表○三保の松原 島津久基（羅生門の鬼）〔秋葉〕

端作（はづくり）「詞書」を見よ。

半部（はじとみ）「源氏物語物の謠曲」を見よ。

橋姫（はしひめ）　傳說【解說】我々の民間傳承に於ても、橋姫はなほ嫉妬の神として傳へられてゐる。その例は數多いが、その一二を言ふと、甲府の西に近い國玉の大橋などでも、通行の者がこゝで猿橋の珍らしい構造の話をすると、必ず恠異を見ると謂つて、その實驗が近い頃までであつた。或は又「葵の上」のやうな女の妬みを主題とした謠曲を口吟む時は、橋の神が腹立て給ふとも信じてゐる。宇治の橋姫の荒唐なる古傳の起りを究めんとする人は、かういふ比較を試みないではゐられぬ。前代の地方人の信仰には、土地の信者等の競爭心を反映してゐるかと思ふ口碑が乏しくない。獨り橋の上の神のみと言はず、山に登つて他所の高嶺を說くことを戒め、信濃の淺間嶽の裾野を行く旅人が、富士山の話を決してせぬといふ類の俗信は、今も一部にはなほ活きて行はれてゐるかとさへ思はれる。ただこういふ中で橋姫の話だけには、今少し考へて見なければならぬ特徵が附き纏うてゐる。先づ第一には橋の神の必ず女性であること、それが遠くの川の涯（ほとり）に住む神と姉妹であつて、旅をする者に託して時々の音信をするといふこと等である。この點は東北には姉妹沼などの例もあつて、沼の神が手紙や手箱の類を預け、正直にそれを遠くの沼に持ち行き、教へ示された通りに手を打つてそこの姫神を喚び出して、無事に手渡しをした爲めにその正直を褒められ、莫大な寶を得たといふ風にも語られ、黃金小臼や黃金馬の童話の發端を爲すものも多いのだが、それは何れも皆水に屬して、この橋姫と根源の一つなることを思はしめる。「今昔物語」などを點檢して見ると、この中には既にこの種の神恠を信ずることが出來ないで、明けて見るなと戒められた手函を開き、又は手紙を開封して、嚴しく罰せられたといふ類の說話が幾つか出來てゐる。ネタシといふ形容詞の內容が、いつの間にか大に推移して、後には女性の神であるだけに、單に男を爭ふうはなりの憤りの如く解せられるに至つたことは確かであるが、本來は水の靈の尊嚴の冒瀆、その命令に對する不從順をも引きくるめて、これをネタシと謂つてゐたことは、かの安義橋の鬼女の話などを詳しく考察すれば判ることと思ふ。つまりは我々の文化が改まり、水を制する技術が進歩した結果、この神に對する民衆の信仰がいち早く衰へんとしてゐたのである。妖恠は卽ちこの過去の崇敬の消え行く姿、以前の畏怖と不安との幽かなる名殘であつた。海から移り住んだ日本人の社會に最初から水神の信仰の今の如く微弱であつた筈はない。さうして無意識に傳承された民間の行事口碑の中には、なほこれを綜合復原して、本の形を見るだけの材料は遺つてゐるのである。水の邊りに住む恠物が必ずしも人を害し、人を脅かすのみを以て能事とせず、眞率にこれを尊みその命令に服する愚直の者を愛して、賞するに稀有の財寶や勇力を以てせんとしたのもその一つである。橋は人文のやゝ開けて後、漸く始まつた工藝であるけれども、これにも畏き神の來り依るあつて、所謂橋占辻占を以て人間以上の智慮を供與した。さうして特にこの神の前に禱る者には、多くの願ひごとが許されたのである。我々の海の神は

山に降り、又地下の泉を傳うて人間との交通を試した（筆者著「桃太郎の誕生」參照）。さうしてその仲介の役を勤める者は、最初から若く美しい女性と考へられたのである。橋姫は卽ちその信仰の一面の、やゝ零落した形と見ることが出來る。〔柳田(國)〕

橋姫物語（はしひめものがたり）　御伽草子　一卷【作者】不詳【名稱】兩妻の一人の名を題名としたもの。【成立】室町期（「近古小說解題」には鎌倉時代とさへも考へられると言つてあるが、如何であらう）。【諸本】寫本にて傳存。繪卷としては、詞書白河三位雅喬卿（神祇伯雅喬王の事か）筆一卷といふが「畫圖品目」に見え、また住吉具慶筆といふ繪卷もあり、「倭錦」には如慶筆「鐵輪」の題材を生み、戻橋傳說の鬼女の完成にも與つたりしてゐるが、本書の內容とは直接の交涉はない。

【參考】古物語類字鈔○訂正增補 考古書譜卷九○近古小說解題〔島津〕

橋辨慶（はしべんけい）「判官物の謠曲」を見よ。

橋姫（はしひめ）「狹衣物語」を見よ。

橋姫（はしひめ）　謠曲【作者】不詳【名稱】本曲の主人公の名を題名としたもの。【成立】室町期（「近古小說解題」には鎌倉時代とさへも考へられると言つてあるが、如何であらう）。【諸本】寫本にて傳存。繪卷としては、詞書白河三位雅喬卿（神祇伯雅喬王の事か）筆一卷といふが「畫圖品目」に見え、また住吉具慶筆といふ繪卷もあり、「倭錦」には如慶筆「鐵輪」の題材を生み、戻橋傳說の鬼女の完成にも與つたりしてゐるが、本書の內容とは直接の交涉はない。

【參考】古物語類字鈔○訂正增補 考古書譜卷九○近古小說解題〔島津〕

橋辨慶（はしべんけい）「判官物の謠曲」を見よ。

橋姫（はしひめ）　謠曲【作者】不詳【名稱】兩妻の一人の名を題名としたもの。【成立】室町期（「近古小說解題」には鎌倉時代とさへも考へられると言つてあるが、如何であらう）。【諸本】寫本にて傳存。繪卷としては、詞書白河三位雅喬卿（神祇伯雅喬王の事か）筆一卷といふが「畫圖品目」に見え、また住吉具慶筆といふ繪卷もあり、「倭錦」には如慶筆「鐵輪」の題材を生み、戻橋傳說の鬼女の完成にも與つたりしてゐるが、本書の內容とは直接の交涉はない。

【參考】古物語類字鈔○訂正增補 考古書譜卷九○近古小說解題〔島津〕

橋辨慶（はしべんけい）「判官物の謠曲」を見よ。

橋姫（はしひめ）　謠曲【作者】不詳【名稱】兩妻の一人の名を題名としたもの。【成立】室町期（「近古小說解題」には鎌倉時代とさへも考へられると言つてあるが、如何であらう）。【諸本】寫本にて傳存。繪卷としては、詞書白河三位雅喬卿（神祇伯雅喬王の事か）筆一卷といふが「畫圖品目」に見え、また住吉具慶筆といふ繪卷もあり、「倭錦」には如慶筆「鐵輪」の題材を生み、戻橋傳說の鬼女の完成にも與つたりしてゐるが、本書の內容とは直接の交涉はない。

【參考】古物語類字鈔○訂正增補 考古書譜卷九○近古小說解題〔島津〕

橋辨慶（はしべんけい）「判官物の謠曲」を見よ。

と一軒のあばら屋があつた。一夜の宿を乞ふと主らしい姥は快く諾ひ、且つ橋姫の意中を言ひ當て、中將は龍王に捕へられて婿となつたが、卅かれながらも望鄉の念に堪へぬ由を語り、姥自身は龍王の草を預かる者なる事を打明けた上、今宵もこの家に來る筈の中將に逢はせようと約し、何か入れた鍋を火に懸け、中を見る事を禁じて出て行つた。橋姫は沸き溢れる鍋に手も觸れずにゐると、やがて姥も歸り、間もなく四邊騷がしく恐しげな聲さへ起つて、中將はみるめ・嗅ぐ鼻・手長・足長等に圍まれて入つて來た。その有樣は昔の俤なくて憔悴し、隨從の怪物等の勸める盃も取らず、ただ「狹席に衣片敷き今宵もや我を待つらん宇治の橋姫」の古歌に感じて人間の妻を戀ふるらしく思はれる。歌句を外にしては宇治の橋姫の名稱と必然的な說話上の關係はない。宇治の橋姫の傳說は別に既に平安朝から行はれ、それも姫大明神と離宮の神（袖中抄）、或は住吉大明神と宇治の橋姫（八代集抄）との戀愛傳說として流布してゐたが、後には丑の時參りの妬婦の鬼女傳說が宇治橋畔の橋姫社の緣起と結び付き（劒の卷・山州名迹志等）、諸曲

が左の袂に鏡のまるかせを賜はると夢みて得た子であるが、胎內にあること三年、生れて直ちに池水に漱ぎ母に向つて生みの恩を謝する怪異さに、山奥へ捨てられると、同じく子無きを憂ひて熊野に詣でた都五條の辨新大納言に神託下り、拾はれてにやく一と名付けられ、七歲の春叡山の慶心法印の許に遣られた。聰明であるが狂暴で、ノ堂宇を損ひ、兒衆と爭ひ、遂に慶心は一山の大衆に迫られてにやく一を放逐した。にやく一は俗體で下山する事を恥ぢ、單身根本中堂に入つて剃髮し、養父と師匠との頭字を取つて辨慶と名告り、途で袈裟衣を奪ひ取つて着て新大納言の家に歸つたが、後に嵯峨野の邊に移り住み、叡山にゐた頃、

山に降り、又地下の泉を傳うて人間との交通を試した（筆者案「桃太郎の誕生」參照）。さうしてその仲介の役を勤める者は、最初から若く美しい女性と考へられたのである。橋姫は卽ちその信仰の一面の、やゝ零落した形と見ることが出來る。

【柳田（國）】

橋姫物語（はしひめものがたり）　御伽草子　一卷

【作者】不詳【名稱】兩妻の一人の名を題名としたもの。【成立】室町期（「近古小說解題」には鎌倉時代さすらも考へられると言つてあるが、如何であらう）。【諸本】寫本にて傳存。繪卷としては、詞書白河三位雅喬卿（神祇伯雅喬王の事か）筆一卷といふが「書圖品目」に見え、また住吉具慶筆といふ繪卷もあり、「倭錦」には如慶筆と出てゐる。但し古く「色葉集」「八雲御抄」「奥義抄」「顯註密勘」「河海抄」「歌林良材抄」等に「宇治橋姫物語」といふものが見え、俊成も幼時乳母から讀み聞かせて貰つたことがあり、保安・天治の頃までは流布してゐたらしいが、「風葉集」にも歌を載せぬから、その頃までには散逸したらうと春村は言ひ、古本の內容と比較して大差ないから、現存のものも、この古本から直接に系統を引いてゐるものと「近古小說解題」は推斷してゐる。

【梗概】昔、浪華邊に住んでゐた中將に二人の妻があり、一人を宇治の橋姫といひ、惡疽に苦しんで七色の和布を乞ふので、中將は海上に漕ぎ出たが素よりそれの得られる筈もなく空しく日が暮れかゝり、ふと笛を取出して靑海波を吹くと、俄に浪風が起つて中將を夢幻の境に誘つた。橋姫は消息の知れない夫の歸りを待ちながら月日を重ねて安產し、三年を經た或る日、海邊に出てなほ中將を搜したが、夜に入つて路に迷ひ、遠くの灯を尋ねて行くと一軒のあばら屋があつた。一夜の宿を乞ふと主らしい姥は快く諾ひ、且つ橋姫の意中を言ひ當て、中將は龍王に捕へられて婿となつたが、册かれながらも望鄉の念に堪へぬ由を語り、姥自身は龍王の草を預かる者なる事を打明けた上、今宵もこの家に來る筈の中將に逢はせようと約し、何か入れた鍋を火に懸け、中を見る事を禁じて出て行つた。橋姫は沸き溢れる鍋に手も觸れずにゐると、やがて姥も歸り、間もなく四邊騷がしく恐しげな聲さへ起つて、中將はみるめ・嗅ぐ鼻・手長・足長等に圍まれて入つて來た。その有樣は昔の俤なくて憔悴し、隨從の怪物等の勸める盃も取らず、ただ「狹席に衣片敷き今宵もや我を待つらん宇治の橋姫」と口吟み、妖物の退散を待つて橋姫に對面し、その身をかこちて再會を約して立ち去つた。夜も明けたので、名殘を泣き悲しむ橋姫に、姥は道を敎へて歸宅させた。橋姫は今一人の女房の思を察して始終を告げたが、その女房は例の姥の宿で、餘りに沸き溢れる鍋の蓋を取つて、中の綿のやうな物を見たので姥に咎められ、なほ中將の繰返す歌で橋姫のみを思ふものと嫉み、居堪まらずに門を出ると、今迄の家も人もなく、我が身は茫々たる島の松原に居り、傍には板屋貝が一つ落ちてゐた。泣く〳〵歸つて橋姫に事の由を告げたが、その後は橋姫もその家の跡さへ見出し得ず、他に洩らした後悔をしなければならなかつた。

【解說】歌物語。妬婦傳說。「狹席に云々」の歌から生れた傳說の一種で、寓話味と童話味とを併せ、浦島傳說や安達ケ原傳說の影響あるらしく、禁止モーティーフを含んでゐる。現存の本は恐らく近古的の潤色をかなり蒙つてゐるらしく思はれる。歌句を外にしては宇治の橋姫の名稱と必然的な說話上の關係はない。宇治の橋姫の傳說は別に既に平安朝から行はれ、それも姬大明神と離宮の神（袖中抄）、或は住吉大明神と宇治の橋姫（八代集抄）との戀愛傳說として流布してゐたが、後には丑の時參りの妬婦の鬼女傳說が宇治橋畔の橋姫社の緣起と結び付き（劒の卷・山州名迹志等）、謠曲「鐵輪」の題材を生み、戻橋傳說の鬼女の完成にも與つたりしてゐるが、本書の內容とは直接の交涉はない。

【參考】古物語類字鈔○訂正增補考古畫譜卷九○近古小說解題　【島津】

橋辨慶（はしべんけい）　御伽草子　一卷　【作者】不詳【成立】室町期【諸本】藤井乙男氏藏寫本があるのみ、版本はない。【題材】判官物（義經傳說）。橋辨慶傳說で、謠曲「橋辨慶」と同材であるが、本書は前半は辨慶生立の物語で、この部分は「義經記」（卷三）及び「辨慶物語」（別項）と相應じ、ただ記述の內容に各々多少の異同がある。所謂橋辨慶傳說としては「義經記」及び「辨慶物語」が太刀奪ひなるに對し、これは牛若千人斬の系統に屬するもの。

【梗概】鞍馬にあつた牛若丸は十四歲の春、父義朝の十三年忌の供養のために平家の侍の千人斬を志し、都五條の橋に出て三日三夜に七百餘人を害するに及んだので、變化の物が往還の人を失ふと噂が立ち、通行人は絕無となつたが、稀には田舍から來て未だこの風聞を知らず、行きかゝる者などあつて七日七夜には九百九十九人を算へ、最後に現はれたのが西塔北谷の武藏房辨慶であつた。辨慶は熊野別當湛增が熊野權現に申子の祈誓を籠め、妻が左の袂に纏のまるかせを踊はると夢みて得た子であるが、胎內にあること三年、生れて直ちに池水に嗽ぎ母に向つて生みの恩を謝する怪異さに、山奧へ捨てられると、同じく子無きを憂ひて熊野に詣でた都五條の辨新大納言に神託下り、拾はれてにやく一と名付けられ、七歲の春叡山の慶心法印の許に遣られた。聰明であるが狂暴で、ノ堂宇を損ひ、兒衆と爭ひ、遂に慶心は一山の大衆に迫られてにやく一を放逐した。にやく一は俗體で下山する事を恥ぢ、單身根本中堂に入つて剃髮し、養父と師匠との頭字を取つて辨慶と名告り、途で袈裟衣を奪ひ取つて着て新大納言の家に歸つたが、後に嵯峨野の邊に移り住み、叡山にゐた頃、衆徒等の剃刀を集めて三條小鍛冶宗近に頼んで打たせた大薙刀の稽古に託して多くの人を殺傷した。時に五條の橋に千人斬ある由を聞き、勇んで駈け付けると、屍は山を成し、川は紅を流してゐるので、流石に驚き恐れ、一旦引返したが、敵に後を見せるは殘念と立ち歸つて牛若と鬪つた。奮戰したが遂に薙刀を打落された辨慶は、牛若に七生まで郎黨たらんと誓ひ、鞍馬の東光房に送り屆け、己は嵯峨野に歸つて行ひすました。

【影響】說話としての橋辨慶傳說乃至牛若千人斬傳說は、延寶七年刊、古淨瑠璃「牛若千人切」、近松作「卒常盤」（一段目）、文耕堂作「鬼一法眼三略卷」（五段目）、「御所櫻堀河夜討」（二段目）を初め、近世の操・歌舞伎・小說等に多く見る所であるが、謠曲・義經記等と併せての影響と見るが至當であらう。

【參考】近古小說解題　【島津】

橋本直香（はしもとただか）「直香」を見よ。

巴靜（はじやう）　俳人　【姓名】太田彌平次【別

號】藪流下（刷毛序）・桑流下・六々庵　【生歿】延享元年（一七四〇四）二月十九日名古屋六々庵にて歿す。享年六十四　【墓所】大津市馬場龍ケ岡に門人理然の建てた墓碑がある。【閲歴】美濃竹が鼻の人で、太田可政の男である。可政は貞靜と號し、北村季吟に俳諧を學んだ（翁衣、惇六々庵辭）。巴靜も亦、恐らく父の感化によつて、幼時から多少風雅の趣味を養はれた事であらうが、彼の名が初めて俳書に見えるのは、元祿十三年刊の「東華集」（別項）である。そこでは竹が鼻の連衆として、素臺・水石等と伍してゐるから、當時彼が支考に師事してゐた事は明かで、彼自らも支考を東華老師と呼んでゐる（吾妻揭序）。併しその後、彼の句が露川と關係の多い露水の「枕かけ」（元祿十四年）、素覽の「幾人水主」（元祿十六年）等に最も多く見え、且つ元祿十七年・正德三年・同五年の「露川歲旦帖」に於ける巴靜の地位を見ると、最初は寧ろ露川とより深い關係を持つてゐたものと思はれる。更に巴靜が、寶永三年に撰んだ「刷毛序」の自序によれば、寶永二年の正月から三年冬にかけて名古屋に在り、露川の許で風流に遊んだ事が明かに語られてゐる。かうして見ると、元祿八年の「後の旅」や同年の稿本「ゆづり物」等に見えてゐる巴丈は、その露川一派と深い關係を持つてゐる點から察して卽ち巴靜の前身ではあるまいかと考へられる。次いで元祿十一年の「記念題」「淡路島」等に見える巴丈も、やはり同人であらう、これ等に出てゐる巴丈の句は、「六々庵句集」に見えないが、同書には巴靜の元祿時代の作は二三しか採錄されてゐないから、それで巴丈卽ち巴靜說を否定する證には成し難い。且つ巴靜の名が見え出してから、巴丈の名が全く見えなくなつた事も、一應同一說の有利な一證ではあるまいか）。とにかく巴靜が元祿末年から正德年間にかけて露川に敎を乞ひ、その一派と最も多くの交涉を持つてゐた事は十分證せられる。然るに享保に入つてからは、次第に支考との關係が濃くなり、露川一派との交涉はこれに反して少くなつた。既に享保二年の「西國曲」、同七年の「北國曲」（各別項）等には巴靜の作を見ないのである。そこには露川と別れるべき何かの事情があつたのかも知れないが、ともあれ全く支考系の俳人となつてしまつた。さて彼は元祿・寶永頃から屢々名古屋に來往し、正德三年の「露川歲旦帖」によれば、當時既に名古屋に假寓を構へてゐたらしい。富田街黑崎家の許に旅泊し、巴靜自らその二階を修覆して三光樓と自書の額を揭げたといふのは、いつの時の事であるか知らないが、享保以後の俳書には、もはや尾張の俳人として出て居り、享保九年の支考の「三千化」には、名古屋城南連衆として支考・昇角・杉夫等と花の歌仙を催してゐる。そして享保十一年の冬、名古屋の丹以之が、芭蕉の遠忌追善集「六の花」を撰んだ時には、その跋文を草し、且つ六々庵の號も見えるから、當時彼が名古屋に於ける獅子門の中堅として推されてゐた狀が察せられる。かくて享保十九年二月には、遠く江戸に遊んで諸風士と吟席を共にし、特に麥阿とは最も親しく交りを訂して歸つた。この年、「吾妻揭」と共に「木の本」や、曲州の「可保李山」等も成つた。寬保三年十月には自ら主催して、名古屋眞福寺に蕉翁忌を營んだが、その翌年「混槃會や我が枕も跡さがり」の吟を遺して歿した。【編著】刷毛序（寶永三年。巴靜が露川一派の人々と會して得た句を、その年竹が鼻に冬籠中整理したものである）○吾妻揭三册（享保十九年。その年二月東遊した折、旅中に得た句や江戸での唱和等を集めたもの）○木の本一册（享保十九年。芭蕉の「木の本に汁も鯰も櫻哉」を初め、古人の句に倣つた社中の人々の吟、並に諸家の四季の句を集めたもの）○季吟家芭蕉家廿五ケ條（俳諧の口傳書である）○六六庵句集四册（寬延二年。門人如是庵理然が、河村秀根の豫て手記してゐたものを本として編纂した巴靜の發句集である。序文によれば、これは句稿の約三分二に止まり、殘る三分一はなほ洩れたのを加へて後編とするとあるが、その後編は遂に出なかつたらしい）○三の曙一册（享保三年。原本未見、歲旦帖か）。

【俳風】美濃派の所謂俗談平話調を最もよく代表するものの一つであつた。彼の句は餘りに單調で餘りに平俗である。強ひて言へば構想が幼稚に過ぎてゐるために、却つて千代尼の句などに見るやうな小器用な嫌味がないとも評されよう。子供らしい無邪氣さの感ぜられるものもあるが、併し勿論それは句の藝術的價値を高める何物でもない。彼は景淸を七兵衞と化するやうな事のみを蕉風變化の要諦と信じてゐたのであるが（刷毛序所載句の前書）、句作態度の重心が、いつもかうした境地のみにおかれてゐる間は、第一義的のものへ到達する事は到底望めない。そして巴靜の句境は遂にこの幼稚さ單純さから脫する事が出來ないで終つた。隨つて藝術的見地から批判する事は殆ど無意味であるが、これを歷史的に考察すれば、彼は享保期の我が俳壇に於ける一つの大きな存在であつた事を認めずには居れない。それは畢竟彼の俳風が最も能く時代の好尙に投じたからである。固よりその好尙は極めて低いものであつた。とはいへ巴靜は、その低い好尙の下で、時代の人としての跳躍を試みたのである。卽ち蕉風の俳諧が最も低級に墮落した享保期の俳壇に於て、江戸と上方との中間に介在して、彼は美濃派の頭領たる地位を保つたのである。その意味に於て彼の俳諧史上に印した足跡は、とにかく大きいものではあつた。

【門流】巴靜は尾張を中心として三遠駿濃勢の各地方に亙り、頗る多くの人々を擁してゐた。併しその多くは美濃派の俳風をその儘に承け繼いで、平凡に終つたのみで、その中から次期の俳壇革新に與るやうな者は全く出なかつた。ただ橫井也有（別項）が彼に長く敎を乞ひ、又方面の異なつた方で知られてゐる河村秀根が、彼の忠實な門人であつた事だけは、特筆すべき事であらう。

【顚原】

芭蕉（ばせを）　俳人　【姓名】松尾宗房　【通稱】様々に傳へられるが、幼名金作、元服後甚七郎が信ずるに足るらしく、或は後忠左衞門（又は忠右衞門）と改めたかとも思はれる。【雅號】桃青・芭蕉・釣月軒・泊船堂・夭々軒・坐興庵・栩々齋・華桃園・芭蕉洞・素宣・風羅坊・杖錢・鳳尾・羊角・羽扇等。寬文頃までは實名の宗房を用ひてゐる。延寶四年頃から桃青の號を用ひたらしい。芭蕉といふ號は、もと他が庵を芭蕉庵と云ひ、それから芭蕉翁とも芭蕉とも稱するに至り、自らも芭蕉と稱するに至つたらしく、天和元年頃から用ひられてゐる。杖錢・鳳尾・羊角・羽扇は專ら自畫の印章に用ひたらしい。【生歿】正保元年生れ、元祿七年（一三五四）十月十二日歿す。享年五十一。【墓所】近江國粟津義仲寺。他に遺物を埋めて築いた塚が全國に少くない。【句碑】全國に普く、實に三百餘に達してゐる。【家系】芭蕉の父の新七郎良精の臣で、その子主計良忠に近侍した。良忠は俳號を蟬吟と云ひ季吟門であつた（明曆三年芭蕉十四歲の時、「犬ころの中よかれ酉の年」といふ句を詠んだといふ說は、「靡筑波」（別項）に「犬ころの中立なれや酉の年」の句があるので信じにくい）。寬文六年四月、芭蕉二十三歲の時、

芭蕉堂及び芭

（竹人の「芭蕉翁全傳」に）

年貢繳……（八代）……季宗―宗清―家清―光清―

新繪木工守―清氏―宗俊―清正―宗時

忠清―清氏―宗俊―清正―宗時

―勝島

―西川

―松尾―某―某―百司（與左衞門）

―北川

―命清（半左衞門）

―女子

―宗房（芭蕉）

―女子（嫁片野氏）

―女子（嫁堀內氏）

―女子（オヨシ、後ニ命清ノ養女トナル）

とする說は、卜尺が季吟門で芭蕉とは同門である點から考へて最も有力である。そして芭蕉庵に入る迄は、各所に寄寓してなほ放浪生活を續けたものらしい。芭蕉が小石川關口水道の工事に關係したのもこの間らしい。これに就いても種々の說があるが、卜尺の世話で水方の官吏となつたとする說が有力である。兎に角活計の手段としたものであらう。京都・江戸に於ける放浪生活の間も依然俳諧には精進し、その技倆も漸く認められて來り、延寶の初め頃、其角や嵐蘭が入門し、又杉風も早く入門したやうであ

いだ。生活は固より隱棲で、出山の釋迦の像や四山の銘ある米入れの甕などが草庵の什物であつた。佛頂和尙に參禪したのもこの頃らしい。然るに天和二年十二月二十八日、駒込大圓寺から出火して芭蕉庵が類燒した。芭蕉は甲州郡內に流寓したが（年明けての天和三年で

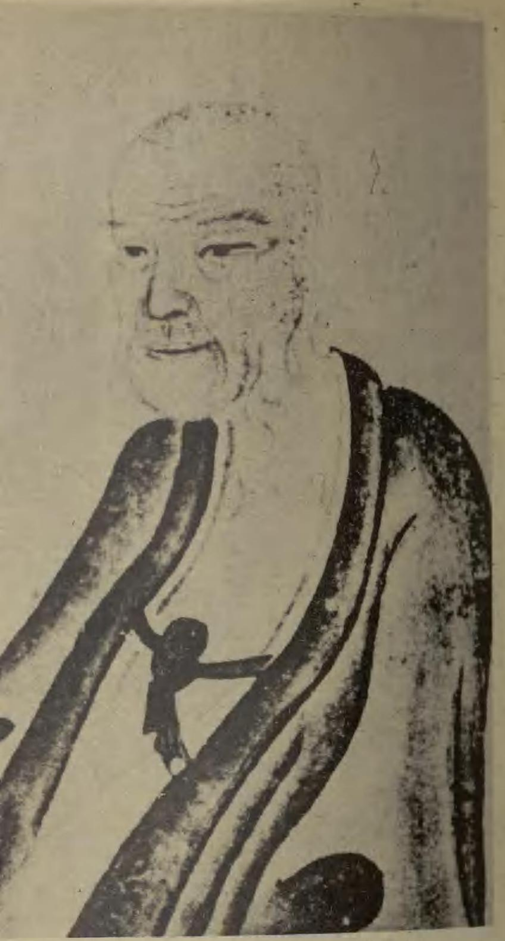
（竹人の「芭蕉翁全傳」）

平貞綱……（八代）…泰宗―貞宗（彈正少弼 土佐三郎）―家清―光清―
　　（新橋木工守 山川 日置）
　―忠清―清氏―宗俊―清正―宗時
　　―勝島
　　―西川
　　―松尾―某―某―百司 與左衞門―命清（半左衞門）
　　―北川
　　―女子
　　―宗房（芭蕉）
　　―女子（嫁片野氏）
　　―女子（嫁堀内氏）
　　―女子（オヨシ、後ニ命清ノ養女トナル）

名に與左衞門・儀左衞門の二説がある。又半左衞門の上に今一人長男の與左衞門があつたとする説もある。兄半左衞門の業務も詳かでないが、伊賀上野町松尾家菩提所愛染院所藏の位牌には、半左衞門の戒名は月峰不殘居士、元祿十五年三月二十九日歿とあると云ふ。この兄の家は、寶曆頃三代目半左衞門に至り、疫病で家族悉く死に絶えたといふ説もあるが、最近の一説によるとさうではなく、その子孫は明治十八年まで赤坂町に居住し、後、魚町に移り、現に松尾萬吉といふ人が當主である由である。芭蕉の親族には、姉聟に山岸半殘があり、甥に松村伊兵衞があつた。又雪芝（上野町山田屋市兵衞）は芭蕉の徒弟であると云はれ、天野桃隣は芭蕉の甥であると云はれる。芭蕉の一族として知られてゐる碓花や、寥禪師（碓井民部之輔清光の次男）は芭蕉の從甥で、伯方は松尾氏、叔方は碓井氏であつた。【師傳】芭蕉は北村季吟の門人で、俳諧のみならず、廣く古典をも學んだらしい。これは芭蕉の主君蟬吟（藤堂良忠）が季吟に師事した關係からであるらしい。又佛頂禪師に參禪し、北向雲竹（中葉流の祖藤木敦直門、細楷を善くした）に書を學び、門人許六（狩野永眞安信門）に畫を習つた。又田中桐江（物徂徠の詩友）に莊子を聽いたこともある。本間道悅に醫術を受けたことは事實らしく、伊藤坦庵（那波活所門、程朱學）に詩を學んだとも傳へられる。【閱歷】〔仕官時代〕芭蕉は伊賀上野城代藤堂新七郎良精（よしきよ）の臣で、その子主計良忠に近侍した。良忠は俳號を蟬吟と云ひ季吟門であつた（明曆三年芭蕉十四歳の時、「犬と猿世の中よかれ酉の年」といふ句を詠んだといふ説は、「蟇筑波」（別項）に「犬と猿の中立なれや酉の年」の句があるので信じにくい）。寛文六年四月、芭蕉二十三歳の時、蟬吟が早世した。芭蕉は良精の命によつて、六月半ば蟬吟の位牌を奉じて高野山報恩院に納めたが、その後同僚城孫太夫（友人鳥飼某とも云はれる）の門に、「雲とへだつ友かや雁の生別れ」の句を書き殘して主家を脫走した。亡命の原因に就いては、種々の戀愛問題が傳へられてゐて、こゝに一考すべきものがあると思はれるが明かでない（殉死しようとしたが、國禁でなし得なかつたとの云ひ傳へは、國史研究上否定されてゐる）。〔放浪時代〕亡命後京都に出たとするのが通説であるが、確證が得られないけれども、さうらしく思はれる。脫走者は蕩制上全く日影者になるので、伊賀へ歸つても、兄半左衞門や俳交の人々の外は交りを絶つたと云ふ（在京説にはいろ〳〵あるがいづれも確證がない）。かくて寛文十二年に「貝おほひ」（別項）を江戸で出版し、この年江戸へ下つた。江戸へ下つてから身を寄せた所にも種々の説があるが、そのうち、本船町の名主小澤卜尺の許とする説は、卜尺が季吟門で芭蕉とは同門である點から考へて最も有力である。そして芭蕉庵に入る迄は、各所に寄寓してなほ放浪生活を續けたものらしい。芭蕉が小石川關口水道の工事に關係したのもこの間らしい。これに就いても種々の説があるが、卜尺の世話で水方の官吏となつたとする説が有力である。兎に角活計の手段としたものであらう。京都・江戸に於ける放浪生活の間も依然俳諧には精進し、その技倆も漸く認められて來り、延寶の初め頃、其角や嵐蘭が入門し、又杉風も早く入門したやうである。延寶三年宗因の江戸下りの折には宗因一座の百韻に加はつて居り、同六年には或る人の需に應じて六番句合・十二番句合（十八番發句合）の判詞を書いて居り、同八年には「桃青門弟獨吟二十歌仙」が出てゐる。〔芭蕉庵時代〕延寶八年・天和元年の頃（三十七・八歳）、放浪生活から芭蕉庵に入る事になつたが、この年時についても諸説あるけれども、延寶八年冬とする説が有力である。芭蕉庵は深川六間堀にあつて、杉風の控屋敷内の籬（いけす）の番小屋を改修したものらしく、杉風の好意によつてこゝに入つたのである。門人の李下が芭蕉一本を贈り、人々が草庵を芭蕉庵と呼ぶやうになつたらしい。衣食は、杉風・文鱗等が貢

芭蕉堂及び芭蕉の墓（芭蕉堂歌仙圖所載）

いだ。生活は固より簡素で、出山の釋迦の像や四山の銘ある米入れの甕などが草庵の什物であつた。佛頂和尚に參禪したのもこの頃らしい。然るに天和二年十二月二十八日、駒込大圓寺から出火して芭蕉庵が類燒した。芭蕉は甲州郡内に流寓したが（年明けての天和三年であらう）、天和三年五月江戸へ歸つた。これは其角等の招請によつたといふ。同年九月素堂が芭蕉庵再建の勸化文を書き、諸人から金品を募つて芭蕉庵が再興された。天和二年の千春の「武藏曲（むさしぶり）」（別項）には芭蕉と記され、同三年其角の「虛栗（みなしぐり）」（別項）は、芭蕉中心の蕉門の集



許六筆　芭蕉肖像（土居剛吉郎氏藏）

破笠筆　芭蕉肖像

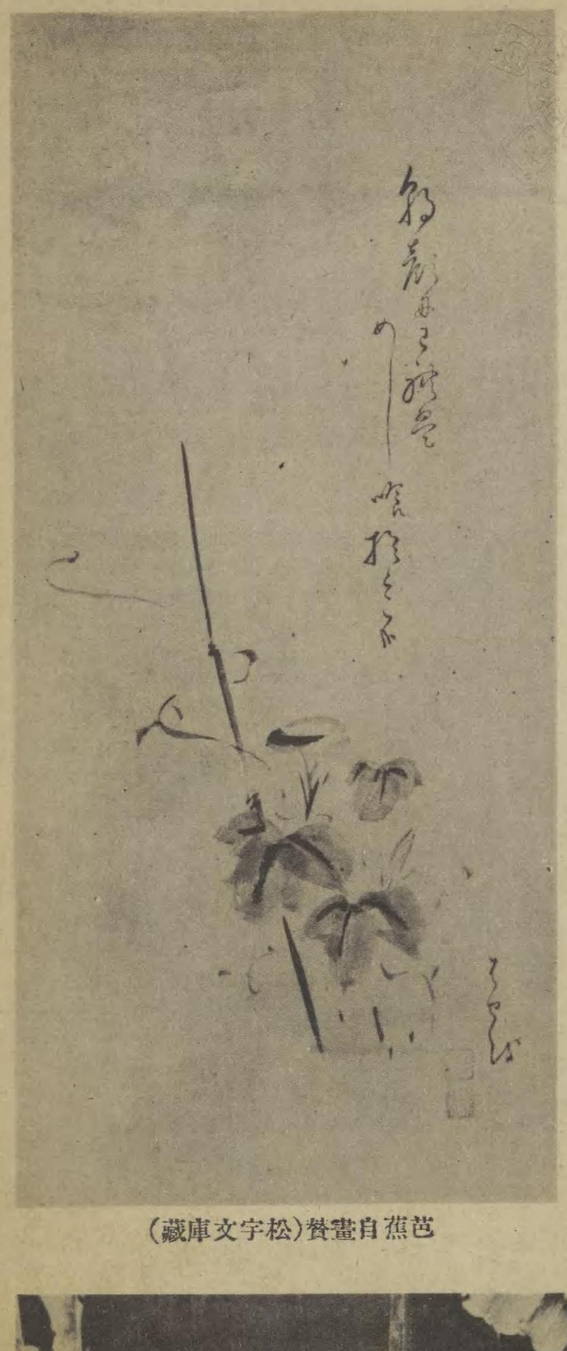
の最初である。〔行脚時代〕貞享元年八月（四十五歳）、芭蕉は門人千里を伴つて歸省を兼ねての旅に上つた。これが「野ざらし紀行」（別項）の成つた旅で、翌年四月まで九箇月に亙る旅であつたが、この間に荷兮の「冬の日」（別項）も成つたのである。貞享二年四月、江戸へ歸つたが、翌三年正月、其角の初文臺に百韻を興行した。これが「初懐紙」（別項）である。同年八月荷兮の「春の日」（別項）が刊行された。去來が入門したのもこの年頃で、それは其角の手引であつたやうである。翌貞享四年八月、曾良・宗波を伴つて鹿島に月を見、「鹿島紀行」（別項）が成つた。かくて十月二十五日愈々歸省の旅に就いた。この行を壯んにした餞別吟を集めたのが「句餞別」である。この旅は翌五年（元祿元年）までに亙り、その夏までを記した紀行が「笈の小文」（別項）である。八月越人を伴つて更科の月を賞し、「更科紀行」（別項）が成つた。かくて江戸に歸つたのである。翌元祿二年春芭蕉庵を人に讓り、三月二十七日曾良を伴つて奥羽北陸の七箇月六百里に亙る大旅行に上つた。この紀行の「奥の細道」（別項）は元祿七年に成稿されたらしい。この年荷兮の「曠野」（別項）が出版された。〔晩年時代〕元祿二年（四十六歳）、奥羽北陸旅行の後、伊勢の遷宮を拜み、外宮を拜して伊賀に歸り、奈良の祭を見物して京に上り、去來の落柿舍に鉢叩を聽き、膳所に赴いて越年した。明けて元祿三年春、伊賀に赴き、近江大津の珍碩の洒落堂に到つて、その記を作つた。この頃珍碩の「ひさご」（別項）が成つた。四月石山の奥の幻住庵に入り、「幻住庵記」（別項）が書かれた。秋には下山して粟津の無名庵に入つたが、この頃「猿蓑」（別項）が企畫された。大津の乙州の新宅に越年し、翌元祿四年春伊賀に歸つたが、四月十八日嵯峨の落柿舍に赴き、五月四日まで滯在し、その間の日記「嵯峨日記」（別項）が成つた。五月蕉風の「古今集」と云はれる「猿蓑」が出版された。京・近江の間に悠遊し、八月湖上の月を賞し、十月江戸に向ひ、東海道の各所に立ち寄つて十一月江戸に歸つた。橘町に假寓して元祿五年を迎へたが、五月杉風が舊庵附近に芭蕉庵を造つて芭蕉を迎へ、芭蕉に「芭蕉を移す詞」があつた。この頃漸く世に倦む傾があり、自派の一面にも芭蕉を憂へしめるものがあり、甥の桃印や壽貞尼などの病人が庵の厄介になる事になつたりしたので、この年、芭蕉は「閉關之說」を書いてゐる。八月、許六が入門した。九月洒堂が江戸に下り、その時の收穫が「深川集」（別項）として翌年出版された。元祿六年春桃印が歿した。五月許六が彦根へ歸藩するに當り、「柴門辭」を餞し、八月嵐蘭の死を悼んで「悼嵐蘭詞」を書き、同月其角の父東順が歿したので「東順傳」を書いた。十月素堂の殘菊の宴に臨んだ。元祿七年六月前年から企畫されてゐた野坡等の「炭俵」（別項）が出た。五月八日西國へも渡らうとする希望の最後の旅に上つた。途中東海道の各地に立ち寄り、鄉里を經て京・近江を廻り、七月老兄の招きによつて鄉里の盆會に會し、折柄壽貞尼の死を知つたので追悼の吟があつた。この時老兄の邸内に無名庵が造られ、新庵の月見が催されたりした。九月、支考・惟然を伴ひ、奈良の重陽をかけて大阪に向ひ、二十七日園女亭の俳筵に臨んだ。かくて二十九日の夜から泄痢に罹り、病勢愈々募り、十月五日御堂前の花屋仁左衞門の裏座敷を借り受けて移り、去來・支考・惟然・丈草・乙州・木節等が看護に手を盡したけれども遂に起たず、「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」の句を最後の病中吟として、十月十二日申の刻ばかりに歿したのである。旅中であつた其角は十一日の夜驅けつけて臨終に接することを得た。遺骸はその夜舟で伏見に下し、十四日義仲寺に葬儀を營み、寺主直愚上人を導師とした。木曾塚の傍に葬り、冬枯の芭蕉を植ゑて形見とした。追悼集「枯尾華」（別項）は年内に刊行された。

【人物】芭蕉は豐かな詩人的素質を有すると共に、德の優れた人格者であつた。併し芭蕉も、若い時は當時の青年に有り勝な傾向を取り、遊蕩氣味のあつた事も推定されるが、主君蟬吟の死や放浪時代の艱苦やが、愈々彼の人格を磨いて行き、その參禪も手傳つて、彼獨特の人生觀・俳諧觀が立てられると共に、詩人的素質が愈々發揮され來り、遂に遁世的生活の偉大な人格的俳人となり、俳諧の革新をなすにも至つたのである。

【著作】〔句合・紀行・日記〕貝おほひ（別項）○野ざらし紀行○鹿島紀行○笈の小文○更科紀行○奥の細道○嵯峨日記（以上各別項）。〔批評・添削〕貝おほひの判詞○十八番發句合の判詞○田舍之句合（別項）の判詞○常盤屋之句合（別項）の判詞○續の原（別項）冬の句合の判詞○初懐紙註（初懐無參照）○山中三吟の添削（「山中集」所收）○不玉獨吟歌仙の評（「秋の夜」所收）○八九間雨柳の添削○三吟歌仙の評（「芭蕉門古人眞蹟」所收）○歌仙の評（「蕉句後拾遺」所收）。〔發句集〕泊船集（別項）風國○芭蕉句選華龍○芭蕉句選拾遺寫治○芭蕉翁發句集蠟夢○なゝかまど（發句文）○もとの水井上重厚○芭蕉新發句集澤田麥水○俳翼湘夕○芭蕉初日記素堂○青於集惣山○芭蕉翁發句類題集松什○掌中芭蕉翁發句集堀麦水○芭蕉俳句全錄荻原井泉水。〔連句集〕芭蕉翁附合集大島蓼太○芭蕉翁附合集谷口蕪村○芭蕉翁俳諧集蠟夢○俳諧桃の白實車蓋○俳諧幽蘭集久村曉臺○俳諧奥の枝折柳條○金蘭集甘井○芭蕉袖草紙菅沼奇淵○俳諧玉葉集仙鳥。〔文章・書簡〕芭蕉文集小林風德○蓬萊島高桑闌更○芭蕉翁文集蠟夢○翁反古松岡大蟻○蕉翁消息集高桑闌更〔全集〕俳諧一葉集佛兮・湖中○俳諧袖珍鈔默池○續芭蕉翁一代集花の本秀三・月の本素水○芭蕉全集（俳諧文庫）○芭蕉翁全集（俳諧叢書）醒雪・小波○芭蕉全集沼波瓊音○俳聖芭蕉全集吉木蘗郎○芭蕉全集石原健生○芭蕉一代集（俳書大系）○芭蕉全集（日本名著全集）○芭蕉全集（日本古典全集）○芭蕉全集（日本名著全集）。

【業績・影響】初め季吟門として貞門の俳諧を弄し、後宗因の談林に化せられたが、遂に俳諧を革新して蕉風（別項）を樹立した。而も蕉風は芭蕉歿後二百餘年の俳壇を支配して、貞門・談林系統の者までもこれに感化せられて、芭蕉を尊ぶ者さへあるほどであつた。後世俳諧の頽廢した時、これが廓清運動は常に彼の蕉風への復興であつた。彼の俳諧の寂は、獨り俳諧の上に止まらず、俳人の人格・日常生活にまでも影響して、簡素な生活、脫落した心境を拓かせたのである。その蕉風の勢力と德望の如何に高かつたかは、門葉の芭蕉忌嚴修の夥しく且つ續いたことや、回忌毎の追善集の多かつたことや、塚の築かれることが多く、特に句碑を建造することの各時代に亙つて夥しかつたことや、「奥の細道」の旅行に倣つて奥羽旅行をする俳人の多かつたことなどが、これを證して餘りある。かくて彼に對する崇拜は、俳諧の低下と共に偶像崇拜にまでなつて行き、寶政・五年（百回忌）には、碑殿伯隣菴の

許六筆　芭蕉肖像（土居剛吉郎氏藏）



芭蕉自畫賛（松字文庫藏）

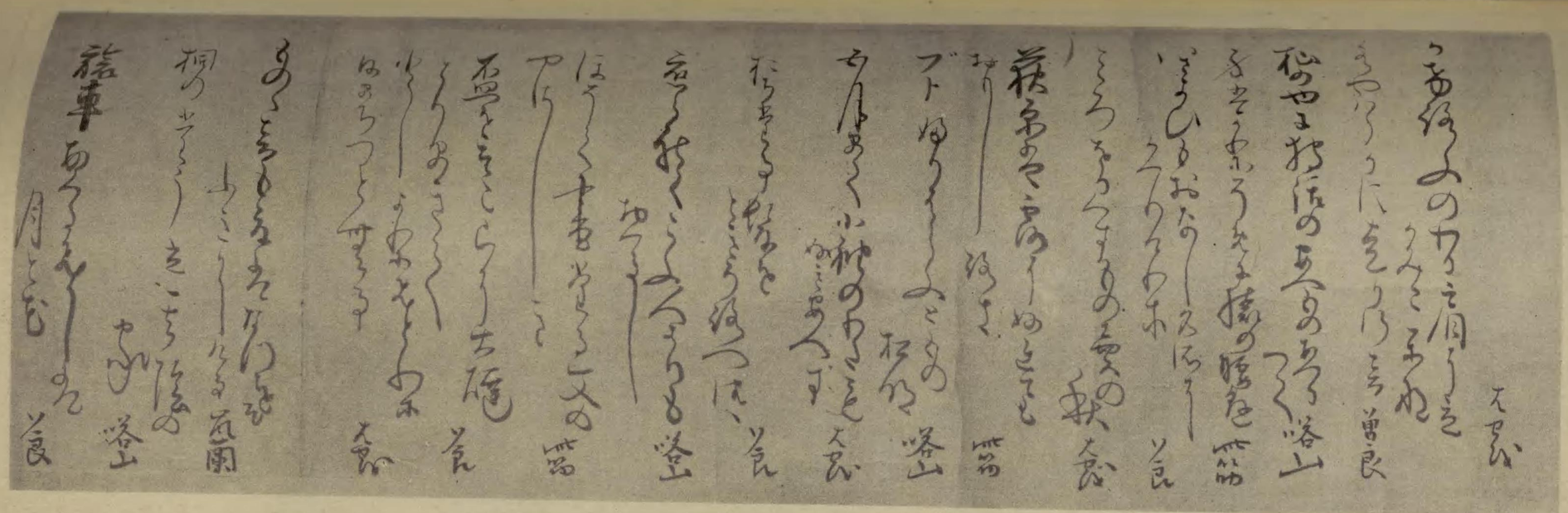
芭蕉翁墓（栗津義仲寺）

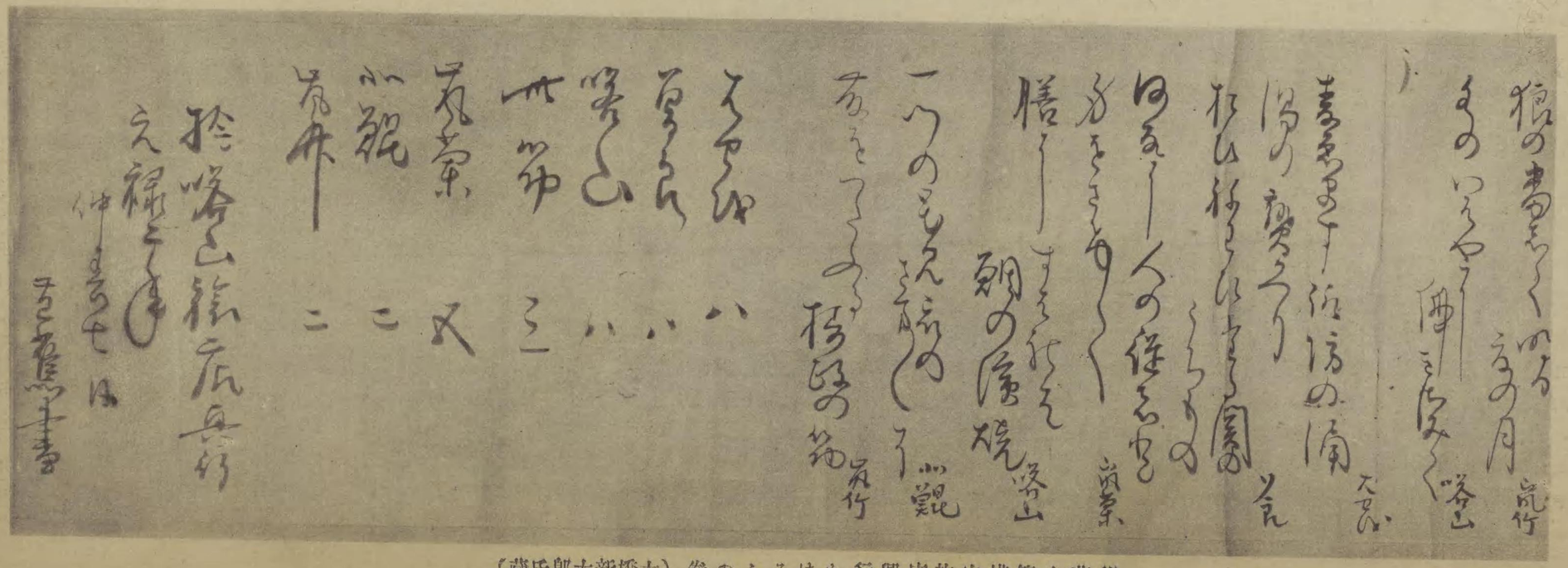
破笠筆　芭蕉肖像

祭を見物して京に上り、去來の落柿舍に鉢叩を聽き、膳所に赴いて越年した。明けて元祿三年春、伊賀に赴き、近江大津の珍碩の洒落堂に到つて、その記を作つた。この頃珍碩の「ひさご」（別項）が成つた。四月石山の奥の幻住庵に入り、「幻住庵記」（別項）が書かれた。秋には下山して粟津の無名庵に入つたが、この頃「猿蓑」（別項）が企畫された。大津の乙州の折柄壽貞尼の死を知つたので追悼の吟があつた。この時老兄の邸内に無名庵が造られ、新庵の月見が催されたりした。九月、支考・惟然を伴ひ、奈良の重陽をかけて大阪に向ひ、二十七日園女亭の俳筵に臨んだ。かくて二十九日の夜から泄痢に罹り、病勢愈々募り、十月五日御堂前の花屋仁左衞門の裏座敷を借り受けて移り、去來・支考・惟然・丈草・乙州・木節等が看

懷紙註（初學參照）○山中三吟の添削（「山中集」所收）○不玉獨吟歌仙の評（「秋の夜」所收）○八九間雨柳の添削○三吟歌仙の評（「芭蕉門古人眞蹟」所收）○歌仙の評（「蕉句後拾遺」所收）。（發句集）泊船集（別項）鳳國○芭蕉句選拾遺寬治○芭蕉翁發句集蠟燭○なゝかまど龜文○もとの水井上重厚○芭蕉新傳澤田鶯風○俳翼湘夕○芭蕉物日記素堂○青尐集梵山○芭蕉翁發句類題集松什○掌中芭蕉翁發句集旭友

望の如何に高かつたかは、門葉の芭蕉忌嚴修の夥しく且つ續いたことや、回忌毎の追善集の多かつたことや、塚の築かれることが多く、特に句碑を建造することの各時代に亙つて夥しかつたことや、「奥の細道」の旅行に倣つて奥羽旅行をする俳人の多かつたことなどが、これを證して餘りある。かくて彼に對する崇拜は、俳諧の低下と共に偶像崇拜にまでなつて行き、寛政五年（百回忌）には、論語伯鸞の





於嵯峨庵興行
元禄三年
仲春吉日
芭蕉桃青書
猿蓑
元禄三年
冬
猿蓑
元禄三年
冬
猿蓑
元禄三年
冬

桃青靈神として筑紫高良山に祀られ、同年二條家からは正風宗師の贈號があり、その後「古池」の句によつて飛音明神の神號が附き、天保十四年(百五十回忌)には、二條家から花の本大明神の神號を贈られたなど、皆その反映である。明治の子規に至つて、彼の眞價が見直され、再び彼の眞諦が俳壇の目標となるに至つた。(俳諧・蕉風參照)

【參考】〔傳記・考證・評論〕枯尾華○芭蕉翁行狀記八十村路通○笈日記支考○芭蕉翁傳(嘗窓抄所收)梨一○芭蕉翁全傳竹人○芭蕉翁傳(嘗窓抄所收)梨一○芭蕉翁綺詞傳蝶夢○芭蕉翁略傳遠藤貞松○ばせを翁正傳集竹二坊○芭蕉翁略傳岡野湖中○芭蕉庵春秋甲島素蓮○芭蕉翁全傳松平冠山○芭蕉全傳尾崎五柳○芭蕉庵桃青傳(俳諧文庫所收)內田魯庵○芭蕉庵桃青山崎藤吉(俳人芭蕉)○芭蕉論稿佐藤紅綠○評傳芭蕉天生目杜南○芭蕉翁の一生小林一郎○芭蕉研究樋口功○俳聖芭蕉翁の面影木津碩堂○旅人芭蕉荻原井泉水○續旅人芭蕉同上○芭蕉と一茶同上○芭蕉論野口米次郎○芭蕉俳諧の根本問題太田水穗○詩人芭蕉萩原羅月○芭蕉襍記室生犀星○一茶と良寛と芭蕉相馬御風○芭蕉亡命の一考察菊山當年男○江戸文學叢說藤井乙男○俳文學の考察志田義秀○芭蕉雜考穎原退藏(俳諧史の研究)○芭蕉の研究小宮豐隆。〔俳諧註釋・研究〕芭蕉發句評林杉雨○芭蕉句解大島蓼太○俳諧獨言呑吐瓢人○師走嚢正月堂○芭蕉翁發句解說叢大全溝口素丸○芭蕉金華傳尾崎康工○蕉翁句解過去種一篋坊○芭蕉發句諸抄大成菊舍太兵衞○俳諧第一義集三カ○增註桃青翁句彙集・于當○芭蕉翁發句蒙引杜哉等○蕉句雙說花蓑○桃青翁句彙後編巢居・于當○芭蕉句選年考石河積翠○三家發句解(芭蕉・其角・嵐雪)高橋莊丹○芭蕉翁句解大全茂呂何丸○芭蕉翁句解參考茂呂何丸○よしなし草白翁○翁發句助辭一覽生川春明○芭蕉俳句評釋內藤鳴雪○芭蕉句集講義角田竹冷○年代鑑別芭蕉俳句定本勝峰晉風○芭蕉句集評釋小林一郎○芭蕉俳句新釋半田良平○選評芭蕉句集樋口功○詳釋芭蕉の名句岡倉谷八○芭蕉俳句研究・續芭蕉俳句研究・續々芭蕉俳句研究安倍能成等○校註芭蕉俳句集穎原退藏○芭蕉翁附合集評註佐野石兮○芭蕉の連句樋口功○芭蕉連句の根本解說太田水穗○芭蕉俳諧研究・續芭蕉俳諧研究・續々芭蕉俳諧研究・新續芭蕉俳諧研究小宮豐隆等。〔その他〕芭蕉翁三等之文蝶夢○芭蕉翁雜考大河寥々○芭蕉翁頭陀物語建部涼袋○芭蕉翁眞蹟集松村桃籬○芭蕉翁眞蹟拾遺泡永大典○芭蕉翁手鑑石外○芭蕉(俳人眞蹟全集)幸田露伴○諸國翁墳記義仲寺○茗荷集茶靜○江都祖翁墳墓集野桂○廣茗荷集野桂

馬生(ばしやう) 落語家 【志田・萩原】

【生歿】天保九年八月二十六日歿す。【閱歷】名優四代坂東三津五郎の兄として生れ、初代三遊亭圓生(別項)の門に入り、初代三遊亭圓生(きゅうていえんしょう)と名乘り、後自ら一派を樹立し、金原亭の名を用ひ、又別號を家猿といふ。道具芝居掛を演じ、續物の祖と仰がれてゐる。

【二代】初代馬生の門人。初め馬朝(長)といひ、後、馬風と改めた。江戸の湯島に住む。仔細あつて講談師初代東玉の門に入り、更に二代目焉馬(別項)の門にも入り、焉馬に乞うて初代立川玉輔となる。後に五明樓と號した。明治元年五月晦日歿す。法名、蓮城院清德日談信士。

【三代】初代馬生の門人。初め馬吉といひ、後に馬若といふ。三代目馬生を襲名した。芝居噺の名人。

【四代】古今亭今輔の門人。今松ともいひ、後、小助六と改め、四代目馬生を襲名した。

【五代】四代目馬生の門人。初め枝三郎といふ。後二代目燕路の門に入りて小燕路と名乘る。五代目馬生となつたが、又馬生翁とも稱した。

【六代】二代目三遊亭圓喬(別項)の門人となり、東橋と稱した。後五代目馬生の門に入り、四代目馬きんと稱し、その後六代目馬生を襲名した。 〔小柴〕

芭蕉庵小文庫(ばせをあんこぶんこ) 俳諧集 二冊

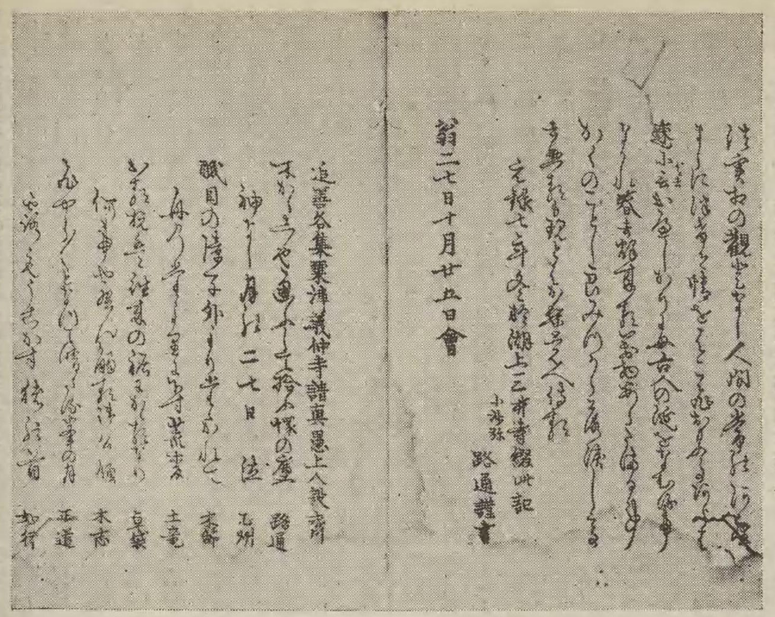
【編者】中村史邦【名義】芭蕉歿後、その遺稿を集めたので、題號もかく名づけたのであらう。【刊行】元祿九年三月【諸本】續七部集(享和三年刊)に收む。元祿名家句集(俳諧文庫)・蕉門俳諧後集(俳書大系)所收【內容】杉風が深川長溪寺に建てた芭蕉の發句塚に、史邦は愁吟を手向けてゐるが、その句に序詞を附して本書の序とし、卷末に芭蕉の座右之銘を置き、發句二百三十二(芭蕉・丈草・去來・史邦・山店・嵐竹等)、芭蕉の遺文十篇(石臼之讚・机銘・煤掃之說・栖去之辨・伊賀新大佛之記・文字摺石・弔初秋七日雨星・閉關之說・更科姨捨月之辨・堅田十六夜之辨)、連句四歌仙(芭蕉・山店・史邦・嵐竹・蓑浩歌仙一、嵐竹・史邦・山店三吟歌仙一、山店・はせを饒別歌仙一、史邦・はせを・傘水三吟歌仙一)を收めてゐる。外に西行像讚や座右之銘などがある。【價値】芭蕉歿後、芭蕉の遺文は多く史邦の手に殘つたらしく、それを載せたのが本書の價値である。但し「石臼之讚」は、越人がその「不猫蛇」に云ふ如く越人の作であり、「煤掃之說」は支考の作を史邦が猥りに芭蕉の句に書き加へたものだらうとの成美の「閒窓語話」の說もある。芭蕉の「はれ物に柳のさはるしなへかな」の句は、浪化の「有磯海」に「さはる柳のしなへかな」として去來が書き誤つて入れたものであると、史邦自らの訂正書きが附いてゐる。或る人は本書中の芭蕉の句に、特に「嵯峨日記に見えたり」といふ前書を附けて二句も出してゐる所から、「嵯峨日記」の稿本は、史邦の手に渡つたものらしいと論じてゐる。 〔萩原〕

芭蕉庵再興記(ばせをあんさいこうき) 「寫經社集」を見よ。

芭蕉翁行狀記(ばせををうぎやうじやうき) 一册

【著者】八十村路通 【成立】元祿七年冬【刊行】元祿八年【諸本】初版本の遺存少く、普通には紀逸の再刻本が行はれてゐる。紀逸本には卷頭に漢讚のある芭蕉像を揭げ、紀逸の梓行序があるが、原本の文字を改めたもの、或は誤脫等がある。俳書集覽には初版本を收め古俳書文庫には紀逸本が收めてある。【解說】路通は同門から忌み憎まれ、芭蕉の祕傳なるものを僞作したりして、自然芭蕉にも不通の狀態となつたのを、三井寺の定光坊實永阿闍梨の仲裁で芭蕉も許し、臨終に際して、我が亡き跡も路通に親しめと諸門人に託して歿したので、路通がその恩義に感じて芭蕉歿年の冬、三井寺に於て芭蕉の行狀記を綴り、それに追善の發句及び連句の卷々及び諸俳人の追悼の發句を加へて一卷としたものが本書である。行狀記は、芭蕉の簡單な經歷から始めて、直ちに最後の旅の叙述に移つて、旅の模樣から終焉及び葬送の事などを叙し、自己の宥免された遺言や、一七日の法事に參り得た事、芭蕉に對する追憶等を叙して終つてゐる。附せられた追善追悼は、二七日の義仲寺に於ける路通發句の四十四、三七日・四七日の發句、初月

忌・五七日の連句、六七日・盡七日の發句、終りに諸俳人の寄せた追悼の發句があつて終つてゐる。路通は一七日に義仲寺の法事に會したので、芭蕉の最後の旅には無關係なのであるから、行狀記に記す所は直接の見聞ではない。芭蕉が平生卽辭世と云つて辭世がなかつたと記す事も、路通の推考か或は傳聞に過ぎない。なほ芭蕉經歷の條に、芭蕉が故主に殉死しようとしたと記した事が、後世次々紹述者を出してゐるが、これも誤である事が明らめられてゐる。要するに本書は、附せられた追善追悼の部によつて當時の路通の知られる事と共に、芭蕉よりも寧ろ路通を知るべき書の多いものである。【志田】



芭蕉翁行狀記（松宇文庫藏）

芭蕉翁七書　ばしょうおうしちしょ　俳書　上中下三册【編者】佐野石兮（飯田篤老の假名と認められる。初めこの七書の中に加へられてゐた「芭蕉翁附合集評註」の著者も石兮で、同評註奥付の俳諧書目中では評註の編者を篤老として居り、評註本文中に「わが師閑更」の語もあるから、佐野石兮は飯田篤老と同人であることが知られる）。【刊行】享和元年（蕉門七書）。文化十二年（芭蕉翁七書）【解說】月居の序に、「板元葛城の家にあるところのこれかれをあはせて蕉門七書といふ。商人ごゝろの何のゆゑもなく、書の數によりてかくはなづけつるなるべし」とあり、石兮の序にも「宣英堂がおもひはかりにして、これが序を石兮かく」とあれど、石兮の附言には、「此篇をつくりて驚かすなり」と云ひ、各書を考鑑し又削除したことをも云つてゐるから、石兮が書肆と謀つて編したものと認められる。又七書を選んだことも、「俳諧七部集」以來の七部集に倣つて、七部集の一種としたものであらう。然るに、初め「行脚掟」「二十五箇條」「十六篇」「句合」（「續の原」の冬の句合）「嵯峨日記」「奥の細道」「芭蕉翁附合集」（麥太編）を集めて、「蕉門七書」（上下二册）と名づけて享和元年に刊行し、後この中の下卷を成してゐる「芭蕉翁附合集」を除いて、これに代へるに「芭蕉翁發句集」を以てし、書名も「芭蕉翁七書」と改めて文化十二年正月に刊行したものが本書である。そして石兮が同年同月に、同書肆（河內屋嘉七）から「芭蕉翁附合集評註」を刊行してゐるから、蕉門七書拔差は、恐らく該評註を刊行するために書肆と合議の上行つた變改らしく、附合集の如き大部のものを取替へたことは、方法として必ずしも惡意に出づるものとは見られまいが、併し變改の痕跡が板刻の上にまざまざ殘つてゐるのは甚だ醜い。月居の序、石兮の序（享和元年二月）、石兮の附言を見ると、石兮の序と附言とは全然元の儘で、從つて蕉門七書・附合集、宣英堂（前川源四郎）等の語も元の儘になつて居り、月居の序のみは、蕉門七書の方は元の儘に殘つてゐながら、もと「聯句に附合集ありて」とあつたところが「發句集等ありて」と改められてゐて、改刻の埋替への形跡も窺はれる。又目錄のところも、もと蕉門七書上卷目錄とあつたのを、上の字を削つて全書の目錄に利用し得る如き形とし、上卷のみの所收書として、六部の書名とそれ等の丁數との記してあつた後部へ發句集と埋め加へてあり、從つて上中二卷（もとの上卷一册）は丁數が追はれてゐて、發句集の部の下卷のみは一丁から始まつてゐる。なほ題簽及び表紙裏には「芭蕉翁七書」とあつて、內題は元の儘に蕉門七書とある。七書中「行脚掟」「二十五箇條」の二書は、芭蕉の眞書でないことを編者自ら考鑑してゐるので、それ故初め蕉門七書と名づけたのであらうが、それを後に芭蕉翁七書と名づけたことは不正である。なほ「十六篇」を路通の盜み廣めたものとしてゐることも「湖東問答」乃至「旅寢論」に不注意な失考である。かく七書の半ば近くが問題のものであるが、どちらにしても、全體として稀覯乃至新發見のものがある譯でもないので、集書としては價値の乏しいものと云へる。【參考】芭蕉と其周圍（沼波瓊音）○芭蕉の行脚掟（藤井乙男（江戶文學叢說）○芭蕉翁十六篇について・俳諧十六篇の作者・芭蕉翁行脚掟（小原退藏（俳諧史の研究）【志田】

芭蕉翁七部餘錄　ばしょうおうしちぶよろく　俳諧集三册【編者】醉室其成【名稱】「芭蕉翁新七部集」又は「俳諧新七部集」とも。【刊行】文政十一年【內容】田舍句合・常盤屋句合・續（つづき）が原・武藏曲・別座敷（べつざしき）・雪まろげ（各別項）・桃の白實を收めてゐる。【價值】延寶・天和・元祿の蕉門の古集を小册子にまとめた事は便利ではあるが、校合が杜撰で寫誤多く、安心しては使へない。ただ本書の注意すべき點は、其成の序に、「元祿の頃の集共をあつめて七部集と號る事は、支考の仕業なる由」といふ語の出てゐる事である。從來「七部集」の編者は何人であるかよく分らないのであるが、こゝに支考說が始めて現はれたことは、一說として注意するに足るものである。【萩原】

芭蕉翁新七部集　ばしょうおうしちぶしゅう　「芭蕉翁七部餘錄」を見よ。

芭蕉翁發句諸抄大成　ばしょうおうほっくしょしょうたいせい　註釋書　五册【名義】京都の書肆菊舍太兵衞が、芭蕉の發句の註釋書たる「芭蕉發句評林」「茜堀」「朱紫」の三書を合輯開板するに當つて名づけた名である。【刊行】天明四年【諸本】文政七年補刻本江戶須原屋・大阪秋田屋。俳諧註釋集（俳諧叢書）所收【內容】卷之一が「芭蕉發句評林」である。瞬紫庵杉雨著、寶曆八年の刊行で、芭蕉の四季八十七句の發句の比較的簡單な評釋であるが、芭蕉の發句註釋書の嚆矢といふべきものである。卷之二・三が「芭蕉翁發句西堀」である。春秋庵椎子丸著、天明二年の刊行で、數に於て同數の四季八十七句の前者よりはやゝ精しい註釋で、卷之四・五が「朱紫」である。越谷吾山の著、天明四年の刊行、前半が句解、後半が俳話で、句解の部は四季四十九句の註釋であるが、前二者に比べては一體に精しい。以上三書の句數を合しても句數に於て多くはないが　それ等の句が多くは著名な句であるのと、三書を合せ見得る便利とから可なり流布したのである。【志田】

芭蕉句選年考　ばしょうくせんねんこう　九卷【著者】石河積翠（いしこせきすい）【名義】擲筆庵華雀の編した「芭蕉句選」（元文四年刊）の句々に就いて、その句の作られた年代を考證したといふ意味である。【成立】寬政年間か。【刊行・諸本】本書は寫本として傳はり來つたのを、明治四十四年、

に自案を附してゐる。引用物の中には、芭蕉の書簡その他眞蹟によるもの、眞蹟の目擊者の所談等をも引き、又引用書は頗る廣汎に亙つてゐて、中には稀覯に屬するものも少くない。考證の該博と眞摯な用意とは多く類を見ないものであり、從つて年代の考定も多くは正確を得て居り、自案にも聽くべきものが多く、當時にあつてこれだけの成績の見られる類本は他にないと云つてよい。なほ本書には頭註が附いてゐる。頭註は本文の引用書の解說、本文中の事項の典據、引用書の補遺、その他各種の方面に亙つてゐるが、洒竹本と竹冷本とに於て多少の出入が見られ、著者自身の補記もあらう上に、漣々その他傳寫した人の加へ來つたものと思はれるもので、本文の末に各一卷づつの歌仙を加へてゐる。歌仙は

【諸本】蕉門俳諧續集（俳書大系）所收。

【內容】朱拙の序によると、當時蕉門と名乘るへら〳〵行脚が諸國を遍歷して、祕事傳授など稱する僞說を構へ、貴族富家に追從して撰集の撰者たらしめたりするのを慨し、正風を宣揚せんとして編んだものである。撰輯の方針を述べた三條の凡例に云ふ如く、守武以來の他流の古俳人や、蕉門の故人や、貴人・老少・婦尼（遊女もある）をも採つてゐる。卷首に「芭蕉先生前句附」と題するもの六章及び天和年間の芭蕉の發句二句、嵐蘭の發句二句を揭げ、以下は四季の部立に依り類題で句を集めてゐるが、各季の初めに花・時鳥・月・雪を置き、夏以下の三季には終りに雜題を置き、各季の最

見よ。

芭蕉と其周圍　ばしょうとそのしゅうい　「蕉風」（俳書）を見よ。

芭蕉文庫　ばしょうぶんこ　叢書　既刊七册【編者】萩原井泉水【刊行】大正十四年、春陽堂。【解說】初學者のために、芭蕉を味ふ手引として先づ讀むべきもの十二種を選び、簡單な字句の註解と全文の評釋とを施したものであるが、次の七册を出したまゝ未完成に終つた。

【第一編】奥の細道新釋【第二編】芭蕉句選略解（上）【第三編】野ざらし紀行評釋【第四編】芭蕉句選略解（下）【第六編】芭蕉連句選釋【第八編】初懷紙評註【萩原】【第十一編】頭註去來抄。

芭蕉門古人眞蹟　ばしょうもんこじんしんせき　俳書　大本二册【編者】蝶夢【刊行】寬政元年春、京井筒屋庄兵衞等【諸本】大阪天青堂刊行、

二年の刊行で、數に於て同數の四季八十七句の前者よりはやゝ精しい註釋で、卷之四・五が「朱紫」である。越谷吾山の著、天明四年の刊行、前半が句解、後半が俳話で、句解の部は四季四十九句の註釋であるが、前二者に比べては一體に精しい。以上三書の句數を合しても句數に於て多くはないが　それ等の句が多くは著名な句であるのと、三書を合せ見得る便利とから可なり流布したのである。〔志田〕

芭蕉句選年考（ばせをくせんねんかう）　九卷【著者】石河積翠（いしこ）【名義】擲筆庵華雀の編した「芭蕉句選」（元文四年刊）の句々に就いて、その句の作られた年代を考證したといふ意味である。【成立】寛政年間か。【刊行・諸本】本書は寫本として傳はり來つたのを、明治四十四年、洒竹文庫所藏の四種の異本中、花墻漣々書寫本を底本として、他の三種によつて手入れをなし、大野洒竹・沼波瓊音が校訂して、上下二册として刊行した。これには詳細な解題が附いてゐる。昭和四年、博文館叢書の一編として、竹冷文庫所藏本を右の校訂本にも稽へて一册として刊行した。これには笹川種郎氏の簡單な解題が附いてゐる。【解說】四季各部に追加のある再校本の「芭蕉句選」に據り、四季の部と雜の部（雜の句）合せて六百七十一句に就いて考證したのであるが、本書では春を上下、夏を上下、秋を上中下、冬を上下（下の末に雜之部）に分つて九卷としてゐる。句の出典と見るべき諸集諸書を引いて句作の年代を考定し、且つその句の語句の異同、前書の有無を明かにし、その句に對する論議等をも知らしめ、なほ杉雨の「芭蕉發句評林」、麥太の「芭蕉句解」、正月堂の「師走嚢」、素丸の「說叢大全」等をも引いて、句の註解をも明かにし、最後に自案を附してゐる。引用物の中には、芭蕉の書簡その他眞蹟によるもの、眞蹟の目擊者の所談等をも引き、又引用書は頗る廣汎に亙つてゐて、中には稀覯に屬するものも少くない。考證の該博と眞摯な用意とは多く類を見ないものであり、從つて年代の考定も多くは正確を得て居り、自案にも聽くべきものが多く、當時にあつてこれだけの成績の見られる類本は他にないと云つてよい。なほ本書には頭註が附いてゐる。頭註は本文の引用書の解說、本文中の事項の典據、引用書の補遺、その他各種の方面に亙つてゐるが、洒竹本と竹冷本とに於て多少の出入が見られ、著者自身の補記もあらう上に、漣々その他傳寫した人の加へ來つたものと思はれるもので、本文の補助となること多大である。〔志田〕

馬上集（ばじやうしふ）　連歌書　二卷【著者】心敬【諸本】續群書類從連歌部所收【解說】上卷は九條殿の若君に陪して石山寺に參詣した途上、問はれる儘に、連歌の附樣・てには・切字の事、又連歌師の逸話等を馬上で答へたのを、叡慮を畏みて更に書に綴り宮中に奉つたもので、中に救濟と周阿が申合せて一句の連歌に賞を取つたことが露顯に及んだ逸話もあり、下卷は、若君の使德阿に答へた連歌の十體・十好・二十五德・千句のこと・執筆の法式・切字・連歌の法報應三身の句・歌及び詩を連歌に取ること等を說いたものである。〔福井〕

芭蕉盥（ばせをだらひ）　俳諧集　一册【撰者】菊田有隣。但し內實は殆ど坂本朱拙の撰に成るものらしい。【本稱】俳諧ばせをだらひ【名義】朱拙の序によると、芭蕉の「芭蕉野分して盥に雨を聞く夜かな」の句によつたからの名であらう。【成立】享保八年冬【刊行】享保九年

【諸本】蕉門俳諧續集（俳書大系）に所收。
【內容】朱拙の序によると、當時蕉門と名乘るへら〳〵行脚が諸國を遍歷して、祕事傳授など稱する僞說を構へ、貴族富家に追從して撰集の撰者たらしめたりするのを慨し、正風を宣揚せんとして編んだものである。撰輯の方針を述べた三條の凡例に云ふ如く、守武以來の他流の古俳人や、蕉門の故人や、貴人・老少・婦尼（遊女もある）をも採つてゐる。卷首に「芭蕉先生前句附」と題するもの六章及び天和年間の芭蕉の發句二句、嵐蘭の發句二句を揭げ、以下は四季の部立に依り類題で句を集めてゐるが、各季の初めに花・時鳥・月・雪を置き、夏以下の三季には終りに雜題を置き、各季の最末に各一卷づつの歌仙を加へてゐる。歌仙は朱拙・盤子等の五吟、有隣・相夕等の九吟、芭蕉・洒堂等の七吟、朱拙・正秀等の五吟である。作者は前述の如く古今にわたるが、朱拙風交の蕉門俳人及び朱拙との關係上、九州俳人が多い。【價値】朱拙當時の九州蕉門を知るに便宜な點は本集に取るべき所であるが、時處人共に廣きに亙らうとした爲めに雜駁に陷つた感がある。芭蕉と誤られてゐると云ふ素堂の句を載せる一方、他人の作を芭蕉と誤り載せたものが四句許りあり、傳聞で句主の確かならぬ句を載せてゐるなどもそれである。從つて本集のみにあつて他集に見えない句は疑問を感ぜしめる。「芭蕉先生前句附」と題するものも、その中の一が「赤册子」に附合の例となつてゐるから、雜俳の前句附ではなく、かく標記することは杜撰である。畢竟本集は多きを貪つて雜駁に陷れるを免れない。〔志田〕

芭蕉談（ばせをだん）　「俳諧芭蕉談」を見よ。

芭蕉堂歌仙圖（ばせをだうかせんづ）　「施主名錄發句集」を見よ。

芭蕉と其周圍（ばせをとそのしうゐ）　「蕉風」（俳書）を見よ。

芭蕉文庫（ばせをぶんこ）　叢書　既刊七册【編者】荻原井泉水【刊行】大正十四年、春陽堂。【解說】初學者のために、芭蕉を味ふ手引として先づ讀むべきもの十二種を選び、簡單な字句の註解と全文の評釋とを施したものであるが、次の七册を出したまゝ未完成に終つた。

〔第一編〕奥の細道新釋〔第二編〕芭蕉句選略解（上）〔第三編〕野ざらし紀行評釋〔第四編〕芭蕉句選略解（下）〔第六編〕芭蕉連句選釋〔第八編〕初懷紙評註〔第十一編〕頭註去來抄。〔荻原〕

芭蕉門古人眞蹟（ばせをもんこじんしんせき）　俳書　大本二册【編者】蝶夢【刊行】寛政元年春、京井筒屋庄兵衞等【諸本】大阪天青堂刊行、古俳書文庫篇外の芭蕉門古人眞蹟集がある。【解說】蝶夢が粟津義仲寺の什物として蕉門古人の眞蹟を集めたもので、奥書に自らその由來を述べ、「天明二年寅十月時雨會於義仲寺芭蕉堂前」と識してあるから、當時成つたものであらう。その後天明六年秋、義仲寺の沂風法師が、筑前飯塚の依兮にこの由を話すと、依兮はこれを人にも傳へ後世にも殘さうといふので、沂風に託して眞蹟の謄寫を得、これを摸刻出版するに至つたのである。蝶夢はこの眞蹟を集めるために、自ら伊賀の藤堂侯を初め、近江・伊勢・尾張から江戸に至るまで、蕉門古人の子孫や緣故ある家を尋ね步いたので、彼が例の眞摯篤實な態度は、本書の價値を十分に高めてゐる。隨つてかの「芭蕉翁眞蹟集」（桃鏡編）などに比して、遙に信憑するに足るべきものである。（次頁揷畫參照）〔荻原〕

巴人（はじん）　俳人【姓名】早野氏、通稱甚助【別號】竹雨・宋阿・鄙月泉・夜半亭【生歿】延

ぎない。なほ芭蕉經歷の條に、芭蕉が故主に殉死しようとした事が、後世次々紹述者を出してゐるが、これも誤である事が明らめられてゐる。要するに本書は、附せられた追善沿革の部によつて當時の路通の知られる事と共に、芭蕉よりも寧ろ路通を知るべき事の多いものである。〔志田〕

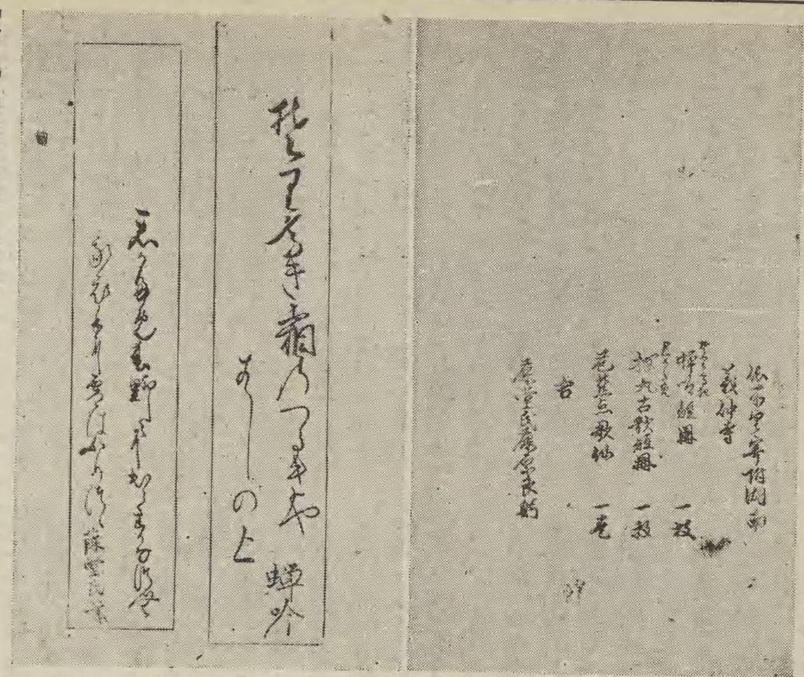
ものであらう。然るに、初め「行脚掟」「二十五箇條」「十六篇」「句合」（「續の原」の冬の句合）「嵯峨日記」「奥の細道」「芭蕉翁附合集」（麥太編）を集めて、「蕉門七書」（上下二册）と名づけて享和元年に刊行し、後この中の下卷を成してゐる「芭蕉翁附合集」を除いて、これに代へるに「芭蕉翁發句集」を以てし、書名も「芭蕉翁七書」と改めて文化十二年正月に刊行したものが本書である。そ

條」の二書は、芭蕉の眞書でないことを編者自ら考鑑してゐるので、それ故初め蕉門七書と名づけたのであらうが、それを後に芭蕉翁七書と名づけたことは不正である。なほ「十六篇」を路通の盜み廣めたものとしてゐることも「湖東問答」乃至「旅寢論」に不注意な失考である。かく七書の半ば近くが問題のものであるが、どちらにしても、全體として稀覯乃至新發見のものがある譯でもないので、集書と

林」「茜堀」「朱紫」の三書を合輯開板するに當つて名づけた名である。【刊行】天明四年【諸本】文政七年補刻本江戸須原屋・大阪秋田屋。俳諧註釋集（俳諧叢書）所收【內容】卷之一が「芭蕉發句評林」である。瞬紫庵杉雨著、寶曆八年の刊行で、芭蕉の四季八十七句の發句の比較的簡單な評釋であるが、芭蕉の發句註釋書の嚆矢といふべきものである。卷之二・三が「芭蕉翁發句書續」である。春秋庵雪丸著、天明

寶五年二月、下野國那須郡烏山に生れ、寛保二年（一七四二）六月六日江戸に歿す。享年六十六。「那須郷土誌」に據る。「西の奥」に據れば六十七）。

（祇空）等と相提携し、江戸俳諧の風格漸く俗化されようとする間に、獨り清高の氣品を保持し、時流の外に挺づるものがあつた。併し俳壇の大勢は結局俗流の跋扈に委せられ、且つ最もたよりとしてゐた百里も、享保十二年に歿したので、老境既に至つた五十一歳巴人は、落寞の情に堪へなかつたのであらう。遂に江戸を去つて遙かに西へ移つた。その西上は百里の殘後間もなくであつたらしい。最初は大阪に足を留めたが、直ぐ又、京都に移つた（享保十二年中か）。かくて京都に落ちついて門人も次第に加はり、享保十七年には門人の富鈴・郢里に、高點句集「卯花千句」を撰ばせる程になり、次いで翌十八年には自ら「一夜松」（別項）を撰んで北野聖廟に奉納した。かくて京都俳壇に於ける巴人の地歩は、益々確乎たるものとなつたが、而も名利に恬淡な彼は、在京十年にして再び江戸へと歸つて行つた。それは元文元年の春、彼の故友たる結城の砂岡（さをか）我尚の子雁宕が訪ねて來たので、俄に故郷戀しくなり、遂に翌元文二年四月、門人達に送られて京都を去つたのであつた。「故里を二つ荷うて松哉」といふのは當時の吟である。東下後日本橋石町に居を構へ、時の變に因んで、夜半亭と名づけ、又號を宗阿（後宋阿）と改めた。そして雁宕・宰鳥（蕪村）の二高足を初め、日夜石町の庵を訪ひ來る門友と風雅を語つてゐたが、寛保二年病んで歿した。【編著】一夜松（別項）○桃櫻二册（元文四年刊。其角・嵐雪卅三回忌の追善集として編したもので、追善の句々を初め、巴人が江戸・結城・下館地方の人々と唱和した連句や諸家の發句を集めてある）。なほ「誹諧家譜」によれば「經讀鳥」の撰があるといふが、今傳本を知らない。その句は「夜半亭發句帖」に集められてある。【人物・作風】作家としての技倆から論ずれば、その作品は享保期に於ける俳諧の一般的弊風から十分脫却してゐるとは思へない。併し彼に取るべきは、その高潔な人格であつた。常盤潭北は、その著「今の月日」（享保七年）の中に彼を祇空（別項）と並べて、「心の芥吐き盡して跡よりすら〳〵と出たるこそ、泥に染ぬ蓮より潔し」と評してゐる。燕村が後年師の三回忌を終んで、往時を追懐した言に據ると、巴人は世俗の事を耳にするのすら厭ふ潔癖の士であつた。かくて當時頻りに俗俳の徒が跋扈した間にあつて能く風雅の精神を保ち、句はなほ當時の弊から脫し切れなかつたとはいへ、これを他の作者に比すれば流石に氣品の高いものがある。且つ彼は奔放な才氣には富まなかつたが、常に落ち付いた靜觀的態度が見られる（夜半亭發句帖參照）。燕村はその作品の上には師の影響を多く見る事は出來ないが、かの「虛栗」「冬の日」（各別項）の高邁を慕つて、直に蕉翁の幽懷を探らうとした識見は、實に巴人に依つて養はれたのである。燕村は師が或る夜危坐して俳諧の道の必ずしも師の句法に泥むべからず、時に變じ時に化し、忽焉として前後相顧みざるが如く有るべき事を說き示した事を述べ、この一棒下に頓悟してやゝ俳諧の自在を得たと語つてゐる。即ち巴人は享保俳壇の過渡期に最も能く藝術的態度を持して、その門から遂に燕村の如きを生むに至つたので、天明期に於ける俳壇革新の母胎ともいふべきであつた。その意味に於て彼の俳風の感化は、俳諧史上重大な結果を齎すに至つたと言ふべきである。



芭蕉門古人眞蹟（東京帝大圖書館藏）

巴人筆蹟（大阪稻束芝馬太郎氏藏）

【法名】釋宋阿居士（辭世）こしらへて有ともしらず西の奥【墓所】淺草幡隨院門前卽隨寺【閲歷】早野新左衞門義見の次男。若い時から俳諧を好んでゐたが、夙く江戸に出て伯父の許に寄寓し、其角・嵐雪の二家に師事するやうになつた。最初は竹雨と號してゐたが、元祿十五年（推定）巴人と改め、當時既に江戸俳壇に立派な地位を占めるに至つた。併し彼が本當に俳人として活動したのは寶永以後の事で、其間の二師を失つてからは、「百里・青流

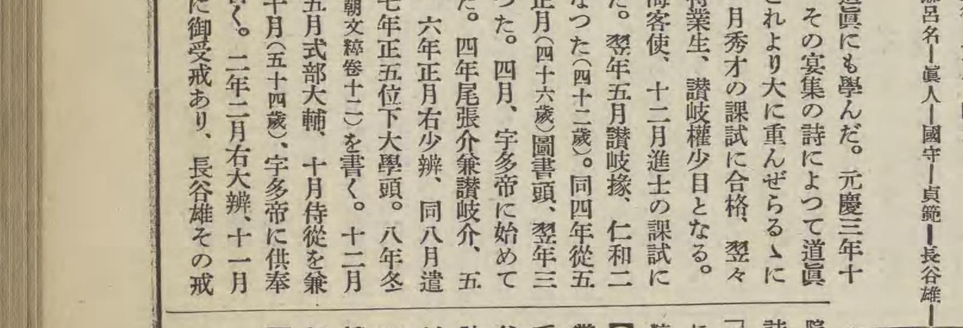
【門流】京都に於ける門人としては、望月宋屋・高井几圭（各別項）・湯淺隨古・長島嬰利・吉田壺角等がある。就中宋屋は、能く師の衣鉢を傳へ、巴人が歿した折には直ちに追善集「西の奥」上下二册（寛保三年五月刊）を撰び、三回忌には「手向の盤」、七回忌には「結び水」、十三回忌には「補山・武然等と共に「明の蓮」（一册）、十七回忌には「戴恩謝（一册）と、絕えず師の冥福を祈つた。江戸の門人では雁宕・燕村（各別項）が最も名高く、燕村は後、夜半亭二世を繼ぎ、安永三年、師の卅三回忌には「しをり」を

景）を撰んで手向けた。【讃岐】

【参考】夜半亭巴人「元本綱」を見よ。

巴人亭（はじんてい）　小説集　【作者】幸田露伴　【刊行】明治二十三年六月、春陽堂。露伴全集第一巻所收。【内容】「對髑髏」（別項）「奇男子」「一刹那」「眞美人」の諸篇を收む。「奇男子」は薩摩武士村上喜劍が、京の祇園で大石内藏之助に逢ひ、大石に復仇の意志がないものと誤解して大石を罵り、足蹴にして去る。後、四十七士の復讐を聞いて不明を恥ぢ、大石の墓前に割腹したといふ傳記そのまゝを描く。「一刹那」は、三つの短篇から成る。第一は道樂のため零落した男が羅宇屋になりさがつて廓へ入り、茶屋から呼びかけられてヒヤリとするのと、昔の馴染女と顔を合はせるのとの二つの一刹那。第二は道樂息子が狎妓に心中を迫つてはね付けられ、悲觀して毒藥を飲むと、それが毒でなかつたので、正氣に歸つた一刹那。第三は蝦夷の戀愛小話で、ルルカ（纏々加）といふ美少女に戀する優男レタリ（麗多理）と、同じくルルカに心を打ち込んだフウレ（風連）との三角關係を描いてゐる。レタリの掛けて置いた毒矢でルルカが誤つて負傷する。フウレとルルカとの關係が濃かになつたので、悲觀したレタリが、毒藥を飲んで果てようとする刹那、ルルカに助けられた。そこへ不意にフウレが現はれる。ルルカは雙方に義理立てして兩人に誠の心を示さうとする刹那にフウレに留められ、フウレはその戀をレタリに譲つて圓滿になる。なほ本書の姉妹篇「新葉末集」は明治二十四年十月刊行、「辻淨瑠璃」「寢耳鐵砲」（各別項）を收む。（高須）

長谷雄（はせを）　漢學者　【姓名】紀ノ朝臣。一名發昭（長谷雄の音に因る）。字は貫之、又は紀貫【生歿】承和十二年二月に生れ、延喜十二年（一五七二）二月十日歿す（日本紀略・扶桑略記・公卿補任）。享年六十八。【家系】紀氏は武内宿禰の後。祖父國守は、醫をよくして典藥守となつた。父貞範は長谷寺に祈り、一子を得て長谷雄と名づけたといふ。【閲歴】幼時から學を好み、初め業を大内記大藏善行に受けた。十八歳の頃作文を學ぶ。一日群飲して「幽人釣二春水一」の詩を賦し、島田忠臣に「綴韻之間、甚得二風骨一」と評せられて漸く聲價を增した。かくて島田忠臣に親炙し、貞觀十八年文章生となつてからは菅原道眞にも學んだ。元慶三年十月、大極殿成り、その宴集の詩によつて道眞を感嘆せしめ、これより大に重んぜらるゝに至つた。同年十一月秀才の課試に合格、翌々五年二月、文章得業生、讃岐權少目となる。同七年四月掌渤海客使、十二月進士の課試に應じて丁課を得た。翌年五月讃岐掾、仁和二年正月少外記となつた（四十二歳）。同四年從五位下、寛平二年正月（四十六歳）圖書頭、翌年三月文章博士となつた。四月、宇多帝に始めて「漢書」を進講した。四年尾張介兼讃岐介、五年二月式部少輔、六年正月右少辨、同八月遣唐副使となる。七年正五位下大學頭。八年冬「累代寶琴銘」（本朝文粹卷十二）を書く。十二月從四位下。九年五月式部大輔、十月侍從を兼ねた。昌泰元年十月（五十四歳）、宇多帝に供奉し、「競狩記」を書く。二年二月右大辨、十一月宇多法皇東大寺に御受戒あり、長谷雄その戒



長谷雄卿草紙（細川侯爵藏）

美しい死人の肉體を集めて造り出したもので百日經てば本物の人間になる筈であつたといふ。紀長谷雄に關する話柄は諸書に數多く載せてあり、その中には朱雀門に關係した話もあるが、この繪卷の筋の如きは、他に未だ記載あるを知らぬ珍らしいものである。通卷人物屋木などを大きく描いて構圖も姿態もよく整つてゐるところは、この繪卷に見る特色であつて、總じて動相の表現には鈍いが、部分的精寫に併せて姿の整美な點を見るべきである。書者は「後三年合戰繪詞」(別項)と等しく、飛驒守惟久と傳へられてゐるが、もとより明かでない。併し畫致から見れば、その特色に相通ずるところがあり、鎌倉末期の繪卷物に於ける一樣式を見るべきものとして、その製作も南北朝を下らないであらう。〔田中(一)〕

長谷川時雨(はせがはしぐれ) 戲曲・小說作家 【本名】康子(やす) 【閱歷】明治十二年十月二日、東京市日本橋區通油町に生る。源泉小學校に學んだ以外、別に學歷はないが、坪內逍遙に師事したことがある。若くして結婚生活に破れた後文筆に親しみ、明治四十一年海軍協會の懸賞募集に脚本「覇王丸」を投じて當選、二月歌舞伎座に上演された。爾來しぐれ女と號して脚本・小說等の創作に精進する傍ら、劇評に從ひ、森鷗外・岡田芳影(八千代)と共に「歌舞伎」の異色とされた。大正初頭舞踊研究會を興し、又尾上菊五郎と狂言座を創めて舞踊道の革新向上運動に力を致し、自ら數種の舞踊劇臺本をも書いた。この頃、中谷德太郎を助けて「シバキ」に據つたが、彼の死後、三上於菟吉の妻となり、女流作家の先達として今日に至る。昭和年代に入つて、女性の文藝發表機關「女人藝術」を創刊主宰して後進の誘掖に努め、左翼的傾向を帶びた進步的婦人雜誌として世の注目を惹き、昭和八年休刊するまでに幾多の新進作家を生んだ。その後は、月刊パンフレット「輝く」を出してゐる。【著作】その文壇的活動は概ね大正中葉までであるが、舞踊劇「空華」「玉はゝき」「江島生島」、脚本に「櫻吹雪」「丁字みだれ」「犬」等を擧ぐべく、長篇小說に「處女時代」「日本橋」等がある。その他、短篇小品隨筆も多く、「明治美人傳」等名がある。代表戲曲を收めた「時雨脚本集」の著がある。【作風】下町育ちの環境と、國文學の古典的な敎養とを享け、その作品には純日本的な情操が美しく盛られてゐる。夏に情熱を湛へた女性を描いてその心情を濃やかに寫すところは作者の境地であらう。江戶風俗に明るく歌舞音曲に通じてゐるため、よく時代物の作品に成功し、歌舞伎劇の批評に卓越する所以となつた。雜誌「女人藝術」の動向はどうあつてもせよ、この作者の如き飽く迄も傳統的な情緒精神を生かすことにその本領を認むべく、推重すべき作家の一人たるを失はない。〔水木〕

長谷川千四(はせがはせんし) 淨瑠璃作者 【本名】未詳 【生歿】享保十八年(?)(一三九三)四月二十日歿。享年四十五。【法名】若水信士 【閱歷】大和の生れで、青年時代は大和長谷寺の僧侶であつたが、後、還俗したと傳へる。竹田出雲に就いて淨瑠璃作者となり、竹本座に屬して働いた。享保十二年正月上演の「敵討御未刻太鼓」(別項)が初作であつた。同十七年に至る六年間に十篇ほど發表してゐる。享保十七年、吉田文三郎に誘はれて一時反旗を飜さうとした事もあつたが成功しなかつた。早く椎本才藏について俳諧を學び、「千四」も元來俳號であらうといふ說さへある。出雲についたのが何年頃からか判明せぬが、これ等の素養によつて、初めに單獨作の發表をも許されたのかと思はれる。門弟に長谷川傳吉がある。

【作品・作風】(一)單獨作は初めの「御未刻太鼓」の外に、「京土產名所井筒」(享保十四年十一月。古今彥三)の世話物があるだけであるが、これ等を通して見ても、出雲流の構想の複雜味とこれによつて生ずる道義的莊重味等の方面は缺けてゐるが、これに反して、抒情味の優れた作風を特徵とした。(二)出雲との合作には、「加賀國篠原合戰」(享保十三年五月。實盛最期。近江のお兼が現はれる)、「尼御臺由井濱出」(同十四年二月。由井正雪)などが現はれて一風を示した。(三)文耕堂との合作には、「三浦大助紅梅勘」「鬼一法眼三略卷」「壇浦兜軍記」(各別項)等の名篇を出して、世話がかつた時代物の妙味を發揮した。〔守隨〕

【參考】曉雲漫筆曉鐘成○靡曲類纂○江戶時代戲曲小說通志○近代國文學の研究 前島春三○淨瑠璃名作集上解題 黑木勤藏(名著文庫)

長谷川天溪

長谷川天溪(はせがはてんけい) 評論家 【本名】誠也 【閱歷】明治九年十二月、新潟縣刈羽郡高濱村椎名に生れた。鄉里の小學校・中學校を經て、東京專門學校文學科に學び、同三十年卒業。その後久しく博文館編輯部に在勤し、後には編輯部長を勤めた。大正六年まで早稻田大學文學部に英文學・文藝思潮等を講じた。明治四十年頃自然主義文藝運動の勃興當時は、文藝批評並に西歐近代文藝思潮の研究紹介に努め、その運動の一方の指導者として立つた。同四十三年から四十五年まで、英文學研究のために英國に留學したことがある。大正十年文部省臨時國語調査會委員となつた。昭和二年博文館編輯部長の職を退き、現在は雜誌「藝術殿」の編輯を管理してゐる。その主なる著作には、論著集「自然主義」(別項)一卷の外に、「文藝思潮論」(昭和四年)「文藝と心理分析」(同五年)等がある。

【批評】自然主義文藝運動の勃興當時、「現實暴露の悲哀」なる題下に、自然主義の根本思潮について提唱した。その「悲哀の三相」について、十九世紀の文藝がその初頭の文藝に發した悲哀が、次に自我發展の悲哀となり、寫實主義文藝に至つて自我勝利の悲哀となり、轉じて現代の文藝に於ては自覺の悲哀となつたと論じた。最近の思想傾向としては、ベルグソン哲學の生動的生命の發展と發現を心理活動に求め、その思辨的活動即ち哲學的活動についてクローチエを研究してゐる外、最近の精神分析研究及びゲシュタルト心理學を斟酌して、心理の科學的考察に潛心し、更にその立場から、印度・支那・日本の古傳說・文學・宗敎・哲學の新檢討に從事しつつあるが、要するに哲學と心理學とを融合した考へ方の上に、文學觀を建てようとするものである。〔千葉〕

長谷川如是閑(はせがはにょぜかん) 評論家 【本名】萬次郎 【閱歷】明治八年十一月三十日東京市深川區扇町二番地に生る。幼時坪內逍遙の塾に入り、後、東京英語學校を經て中央大學法律科に學び、明治三十一年七月卒業。久しく新聞記者生活をつづけた。明治三十五年新聞「日本」の記者となり、同三十九年社長陸羯

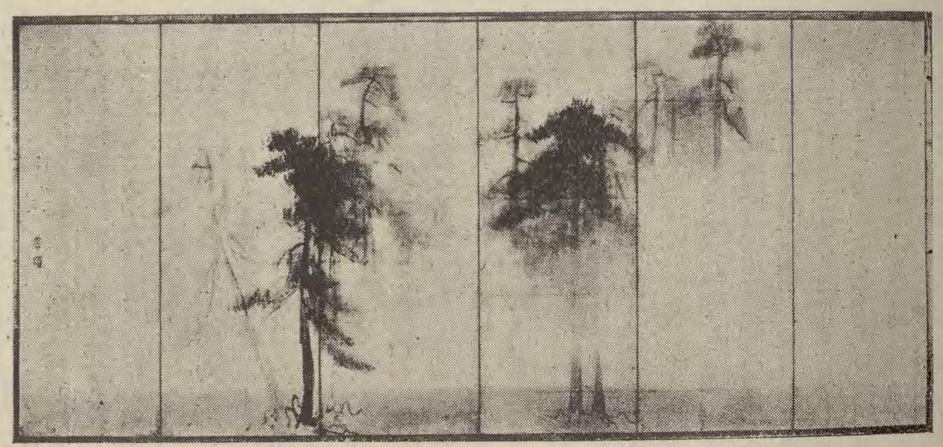
長谷川如是閑

(朝日)退社し、伊藤欽亮社長となるや、三宅雪嶺その他二十餘名と共に、同盟退社して「日本及日本人」別項)の記者となり、同四十一年、大阪朝日新聞の記者に轉じ、一時歐洲に遊んだ。大正七年、デモクラシー論のため寺內內閣から睨まれ、責任者として同社を辭し、爾來純然たる著作生活に入り今日に及んでゐる。大正八年二月、大山郁夫・河上肇等と結んで、雜誌「我等」を創刊、主宰編輯した。著述に終始し、獨身生活を續けてゐる。【著作】(一)單行本「現代の政治」(大正八年)「現代の社會問題」(同年)「現代の國家問題」(同年)「現代の婦人問題」(同年)「現代の思潮」(同年)「現代の文藝」(同年)「現代の女性」(同年)「現代の男性」(同年)「現代の人間」(同年)「現代の教育」(同年)「現代の社會組織」(同年)「現代の社會運動」(同年)「現代の社會生活」(同年)「現代の社會問題」(同年)「現代の社會思想」(同年)「現代の社會主義」(同年)「現代の社會政策」(同年)「現代の社會學」(同年)「現代の社會事業」(同年)「現代の社會教育」(同年)「現代の社會衛生」(同年)「現代の社會保險」(同年)「現代の社會救濟」(同年)「現代の社會保障」(同年)「現代の社會福祉」(同年)「現代の社會改良

（續）退社し、伊藤欽亮社長となるや、三宅雪嶺その他二十餘名と共に、同盟退社して「日本及日本人」別項）の記者となり、同四十一年、大阪朝日新聞の記者に轉じ、一時歐洲に遊んだ。大正七年、デモクラシー論のため寺内内閣から睨まれ、責任者として同社を辭し、爾來純然たる著作生活に入り今日に及んでゐる。大正八年二月、大山郁夫・河上肇等と結んで、雜誌「我等」を創刊、主宰編輯した。嘗て娶らず、獨身生活を續けてゐる。【著作】長谷川如是閑創作集（叢文閣）○現代國家批判○現代社會批判○宗教の現實性○現實はかく佯る ○歷史を捻る ○日本ファシズム批判。その他社會思想に關する論著並に文藝批評の著作がある。

長谷川如是閑

【批評】急進的民主主義の傾向で、科學的社會主義に甚だ近いやうに見えるが、彼はその純然たる立場の論著を示した事がないのをもつて獨自の特徴としてゐる。論著の多くは科學的の研究態度を示しながら、社會・文明批評の立場と領域を出でない。總じて彼の論著には論理のための論理の迷路に導くやうな傾向がないでもないが、論理的構成の規模の大きさと懷疑論的態度に於てすぐれた獨自の點をもつてゐる。彼の劇作は、專らコメデイ乃至フアースに屬するもの多く、屢々各新劇團によつて上演された。彼の小品などの諷刺とユーモアはその方面の作家と伍しても遜色ない。畢竟戯曲・小説・小品・隨筆・感想は、彼の思想的論著の内容、それ〳〵の藝術表現に變說したものに外ならない。〔武藤〕



長谷川等伯筆松林圖（福岡子爵家藏）

長谷川派（はせがはは）　繪畫【解說】桃山時代の畫家長谷川等伯を開祖とする日本畫の一流派。等伯は能登七尾の人、天文八年生れ、初め信春（或は養子ともいふ）と稱した。嘗時周防山口の雪舟の舊居雲谷庵に據つて雪舟三世を稱した雲谷等顏と雪舟の正系を爭ひ、所司代に上訴したが、等顏は雪舟の筆墨を學ぶ正本たることを雪舟の自ら記した畫卷を持つてゐた爲め、等伯の敗訴となつたといふ。等伯は雪舟の筆致のみならず、又頗りに宋の畫僧牧溪に私淑し、その蕭散にして幽遠な描寫筆意を汲んで、獨自な水墨の畫境を開拓した。併し桃山時代特有の濃麗な金碧畫にも豪壯の筆を揮つたらしく、この方面でも狩野派（別項）や雲谷派と相拮抗して桃山畫壇に重きをなした。慶長十五年歿。享年七十二歲。その畫は雲谷派ほどに雪舟の直摸に終始せず、筆墨更に縱橫の氣に富み、而も狩野の如き倭臭を見ざるところに特色がある。等伯の子（或は養子ともいふ）に久藏信春がある。父の後を繼いだが、この人の經歷はあまり詳かならず、その書蹟も能登地方に尠くないが、父等伯ほどの大手腕を認め難い。その他等伯の子として等周・左近・宗宅・宗也等の名も知られ、又その一族として、等重・等忠などの人々もあつたらしいが、その家系に就いては甚だ詳かでない。併し江戸時代に入つてからも一門が存續したらしく、祇園清水等の扁額には長谷川を名のる作家の落款が尠くない。蓋しかゝる繪馬などの製作を事とする町繪師の方面に進展したものらしく、やがて幕末にはその末流雪旦・雪堤などを出すに至つた。〔田中（一）〕

馬盥の光秀（ばだらひのみつひで）　「時桔梗出世請狀」（ときききやうしゆつせうけじやう）を見よ。

鉢かつぎ（はちかつぎ）　御伽草子（二十三篇の一）二卷【別名】「鉢かつぎの草子」、又「はちかつきさいしやうの君」【成立】室町期か。その師に就いては曾我紹祥、或は狩野祐雪等の諸說あるが、「等伯畫說」によれば、雪舟の流を汲む奈良の畫僧等春の弟子と見るべきである。かくて雪舟の遒勁な筆致を體得して一派を立て、自ら雪舟五代の孫と稱した。嘗時周防山口の雪舟の舊居雲谷庵に據つて雪舟三世を稱した雲谷等顏と雪舟の正系を爭ひ、所司代に上訴したが、等顏は雪舟の筆墨を學ぶ正本たることを雪舟の自ら記した畫卷を持つてゐた爲め、等伯の敗訴となつたといふ。等伯は雪舟の筆致のみならず、又頗りに宋の畫僧牧溪に私淑し、その蕭散にして幽遠な描寫筆意を汲んで、獨自な水墨の畫境を開拓した。併し桃山時代特有の濃麗な金碧畫にも豪壯の筆を揮つたらしく、この方面でも狩野派（別項）や雲谷派と相拮抗して桃山畫壇に重きをなした。慶長十五年歿。享年七十二歲。その畫は雲谷派ほどに雪舟の直摸に終始せず、筆墨更に縱橫の氣に富み、而も狩野の如き倭臭を見ざるところに特色がある。等伯の子（或は養子ともいふ）に久藏信春がある。父の後を繼いだが、この人の經歷はあまり詳かならず、その書蹟も能登地方に尠くないが、父等伯ほどの大手腕を認め難い。その他等伯の子として等周・左近・宗宅・宗也等の名も知られ、又その一族として、等重・等忠などの人々もあつたらしいが、その家系に就いては甚だ詳かでない。併し江戸時代に入つてからも一門が存續したらしく、祇園清水等の扁額には長谷川を名のる作家の落款が尠くない。蓋しかゝる繪馬などの製作を事とする町繪師の方面に進展したものらしく、やがて幕末にはその末流雪旦・雪堤などを出すに至つた。〔田中（一）〕

【諸本】古板本は御伽草子本、萬治二年板（高橋清兵衞板）、寬文六年板（山本九左衞門板）、延寶四年板（萬屋莊兵衞板）、元祿十一年板（吉野屋權兵衞板）、寶永二年板（和泉屋茂兵衞板）、享保板、松會開板本等。寶永十一年の古寫本（白河照高院殿、嘗院御連枝の貼紙あり）もある。御伽草子前編（今泉昌山校）・御伽草紙（有朋堂文庫）・日本文學大系第十九卷・御伽草子（名著文庫）等に收む。

【梗概】中昔、河内國交野の備中守さねたかの一人娘は、十三の時母の臨終に際し、手箱の中から取出した一個の鉢を頭に載せられた。後妻に實子の出來た後、讒せられて捨てられたが、入水しても鉢のために沈まず、國守山蔭三位中將の湯殿の火焚きに使はれてゐるうち、中將の四男宰相が通ひ始めたのを、宰相の母が賤しみ疎んじて、他の兄達と嫁競べをして恥を與へようとすると、これまで吸ひ付いたやうに離れなかつた頭の鉢が、突然に落ちて中から十二單衣の小袖や金銀の器が轉がり出た。その小袖を着飾つて嫁競べの席へ出ると、却つて他を壓して遂に父の後を嗣ぐ事となり、やがて帝から大和・河内・伊賀三國を賜り、長谷の觀音に御禮詣りして、圖らず修行者姿の實父と邂逅した。さねたかは後妻と不和になつて娘を捨てた事を悔い、修行に出て再會をこの寺に祈つてゐたのであつた。宰相はこのめでたい奇遇を感じ喜び、さねたかには河内國と我が子一人を與へ、自分は伊賀の御所で永く榮えられた。凡ては長谷の觀音の御利生であると云ふ。

【解說】繼母物であり、觀音靈驗記である。落窪物語・住吉物語の系統を引いてゐる。頭に戴いて離れない鉢の不思議が題材の中心で、又

この説話の特色である。繼母に不具者と蔑まれるのもこれがためで（落窪の君と相似てゐる）、幸運の開けるのもこの祕密の鍵からである。嫁競べの事は、「岩屋の草子」「花よの姫」（各別項）にもある。觀音の功德は「今昔物語」にも多くの靈驗談を載せて、平安時代から弘く信じられて來たが、これ亦室町文學の一特質たる濃厚な宗教色を示してゐる。この物語の民間說話としては、河內國寢屋村の長者が娘の事として傳へられる（鹽尻卷三十九）。本物語は後に寶永七年刊六段本「はちかつき」、安永元年刊黑本「はちかつき姫物語」（富川房信畫）等の諸作を生んだ。【島津】

鉢かつき宰相の君（はちかつきさいしやうのきみ）「鉢かつぎ」を見よ。

八陣守護城（はちぢんしゆごのはんじやう）　淨瑠璃　時代物　十一段【作者】中村漁岸・佐川藤太【角書】小田の幼君北畑の名君【名義】最後の段の小田家の軍師正木雪總が八陣の計を以て北畑の軍を惱ました事と、八段目に加藻（かざう）朝淸が幼君のために本城を死守した事とを含めたもの。正本には「八陳」とある。【通稱】八陣【初演】文化四年九月十日（正本は九月十一日）、道頓堀大西芝居、座本吉田芳松【題材】淸正の誠忠を中心として豐臣家の沒落を描いたもの。淸正の逸事は、「厭蝕太平記」等に依つたものであらう。なほ題材の一致から「近江源氏先陣館」（別項）系統の諸作に影響された所が多い。【梗概】〔初段〕（天竺）南天竺の南巖道士は邪法を以て日本を覆さんと、巖上に苦行をなし、後大蛇と化して日本に渡る。〔二段〕（安土城）先君の死後は叔父北畑春雄の勢力が日々に盛んで、幼君春若丸の威力は次第に薄らいで行く。この日城中には菊嶽寺の怪物退治の評定が行はれる。加藻（かざう）朝淸の嫡子主計之助は自ら進んで討伐の役を引受け、此村隼人之助と共に南巖寺に向ふ。〔三段〕（南巖寺）寺へ着くと意外にも森三左衞門の娘雛絹と小田の春姫とが出て二人に戀を仕掛ける。八十瀨の局の計ひで逢瀨が作られたのである。併し局と見えたのは實は南巖道士で、味方にするために誘ひ出したのであつた。主計之助は名劍七星丸を振つて立ち向へば、流石の道士も劍の威に恐れて消える。なほ北畑の家來共が寺を燒き拂はうとすると、邊りは俄に大海と化す。そこへ加藻朝淸と大內義弘とが來合せ、武威を以て邪法を退ける。〔四段〕（毒酒）雛絹は主計之助に戀を迫つてゐると折惡しく見咎められて了ふ。北畑春雄は二人を助命の上夫婦となして恩を加へる。間もなく春若丸へ將軍宣下の勅使が入來する。春雄は豫め勅使と諜し合せ天盃に毒を盛る。それと察した朝淸は若君を宇治に留め、自ら名代となつて毒を飲み悠々と歸つて行く。春雄に代つて毒を飲んだ森三左衞門は主人を諫言しつつ悶死する。（湖上）春雄は家來に樣子を覗はせると、朝淸は泰然として船唄に興じつつ、雛絹を伴つて下つて行く。〔五段〕（打出濱）略。〔六段〕（此村館）一子隼人之助が春姫と不義の罪にあるので、後室三浦は一方ならず心配してゐる。と、春姫は自ら上使となつて來て、自筆の自白狀と自分の首とを以て隼人之助を救はうとする。三浦はそれを留め、義理の娘お時を身代りに立てて兩人を助け、自分は罪を負うて自害した。そして今迄家の系圖を奪ひ返すために虛弱を裝うてゐた隼人之助は、俄然勇力を示して海賊から系圖を奪ひ、更に單身賊の巢窟へ行く。（片田濱）海賊の根據地に乘り込んだ隼人之助は、非凡な力量を示して賊徒を屠る。〔七段〕（布晒）宇治にある小田家の後室お通の方は、幼君を慰めるために腰元共に布晒をさせて見せる。〔八段〕（本城）本國へ歸つた朝淸は百日の心願があるとて一室に籠つて絕對に人を避けてゐる。大內義弘・船頭灘右衞門、それに一子主計之助までが駈け着けて朝淸の安否を問ふので、一同初めて一間の內を氣遣ふ。併し案に相違して、朝淸は鼠となつて忍び寄る春雄の廻し者を投げ飛ばし、嚴然として現はれ、若君の守護を怠せにして歸つて來た主計之助を叱り附ける。主計之助は父の明察に恥ぢ、身の潔白を示すために、奸臣の緣者である雛絹に離緣狀を殘して都へ去る。雛絹は悲しさのあまり自害。朝淸はその心を憐れんで未來の夫婦を許す。朝淸は先に見舞に來た武骨な船頭灘右衞門とは實は名將兒島之兵衞政次である事を知り、又古今の軍師正木左衞門雪總も味方に加はつた事を知つて、此處に初めて安堵の眉を開き、毒酒の物語をして死んで行く。〔九段〕（栗津）春雄の軍勢は俄に攻め寄せる。剛直の臣遠雲九郎左衞門はその不法を責めるが納れられない。時に紙鐵砲を持つた怪しい老人が捕へられて來る。春雄は目早く正木雪總の家に傳はる張貫筒である事を察して、老人に雪總の家を案內させる。〔十段〕（不動坂）比良の麓に不動尊を守る一軒の百姓がある。婿の次郎作は刀を見ると怯える病人であるが、宇治のお通の方は遙々來て良人に欲しいと云ふ。一方春雄も案內させて來て、次郎作は正しく軍師正木雪總なりと看破して味方に附けようとする。舅の心では春雄を誘き出して婿に手柄をさせようとしたのであつた。併し次郎作は飽くまで本名を名乘らない。次郎作の子供となつて折を待つてゐた主計之助も、又舅も共に次郎作の腑甲斐なさに悲憤して自害する。主計之助の死を見てお通の方を裝つてゐたその母親は、走り出て別れを悲しむ。春雄が安心して本當の綸言を出した時、死を裝つてゐた舅と主計之助とは、俄に飛び起きてこれを奪ひ去る。春雄は不動尊の下に小田家の赤旗のあるのを知つて早々逃げ歸る。〔十一段〕（比良の陣）軍師正木雪總は、八陣の計を布いて北畑の軍を惱ましたが、時の勢に鑑みてお通の方に和睦を勸める。かくて世は再び平穩に歸つた。

【解說】毒酒の淸正として有名である。この逸話が初めて劇に入つたのは「地震加藤」と同じく「けいせい遊山櫻」（寬政九年正月、大阪中の芝居。市川團三郎座）である。歌舞伎にも淨瑠璃にも屢々上演せられ、專ら八段目が行はれる。全曲を通して此處が山で、特に歌舞伎に於て、光彩を放つべき幾多の要素を持つてゐた。本曲は「近江源氏先陣館」系統の諸作と題材を同じくする所から、最初から趣向を借りたところがあるが、後になつて兩者を混合して上演したことなどもあつた。殊に人名は皆通り名に變へられた。卽ち加藻朝淸は加藤淸正、正木雪總は佐々木高綱、北畑春雄は北條時政等々。史實に比すれば春雄は家康、雪總は幸村、お通の方は淀君、兒島は後藤、大內は島津、加藻主計之助は加藤忠廣、森三左衞門は池田三左衞門である。

【參考】近世邦樂年表（義太夫節之部）〇歌舞伎細見〈加藤淸正の部〉。　〔鶴見〕

八代集（はちだいしふ）　和歌【名義】八代の勅撰和歌集の意味。卽ち古今・後撰・拾遺・後拾遺・金葉・詞花・千載・新古今（ふるい順）の八集をいふ。【成立】各集抄の奥に、註を始めた日と功を終へた日とを記してゐるが、これに依ると初め「拾遺集」を註し、次に「後撰集」「後拾遺集」以下「新古今集」に及び、最後に「古今集」を註したことは「古今集抄」の初めに記す所に依つてわかる。「拾遺集」は延寶七年八月三日より始め、「古今集」は天和二年二月頃終つて、全部完成したと思はれるから、約二年半を費したことがわかる。【諸本】刊本（天和二年刊）、國學院版（二冊、明治三十五年刊）がある。【解說】先づその集の解題を試み、歌の略解を頭に記し、作者の傳をも略記してゐる。本文は肖柏校本の八代集に依つてゐるが、出來る限り古寫本を參酌して異同を註し、異本研究にも觸れてゐる。隨つて本書の本文は流布本と多少ふ。【諸本】刊本には肖柏の校本（小本十五冊）、正保四年版（大本十六冊）がある。寫本は種々あり、中には異本を含むもの、所謂嫁入本として書寫されたものなどがある。【解說】撰者は「古今」「後撰」「新古今」は多數であるが、他は一人である。卷數は「金葉」「詞花」が十卷である外は二十卷である。「古今」「後拾遺」「千載」「新古今」には序があるが、他にはない。「群書一覽」の調査に依れば八代集の歌數凡そ九千四百八十九首とある。【註釋書】八代集抄（北村季吟）〇奧義抄（藤原淸輔）〇色葉和歌集（上覺）〇色葉和難集。

【附記】「二中歷」には「古今」「後撰」「拾遺」の三代集に「近代」は「後拾遺集」を加へて四代集と謂ふとある。「明月記」建曆三年十月十三日（別項）運動は、大正三・四年に至つて內部的に解體し、流に又流を生じたので、この作者が如何に自己の路を究明しつつ進んだかといふ事は、甚だ注意すべきであり、自序に「自己肯定自己否定の衝突背馳矛盾の所產なのだ」と書いてゐる言葉を以て見ても、動搖の過程にあることが察知される。「千足袋の夜のまゝ日のまゝとなれり」（卷頭、大正四年）、「ふだんの綿入朱つくことよ」（大正五年）、「芝の梅が冷たく女は一人で來て居た」（大正七年）、大正十年以後は外遊中の作である。「ミモーザの咲く頃に來たミモーザを活ける」（大正十年、ローマにて）、「ベッドの下から引き出したまゝの夜の行李」（大正十一年、パリーの夏）等。　〔荻原〕

鉢木（はちのき）「最明寺物の謠曲」を見よ。

八幡祭小望月賑（はちまんまつりよみやのにぎはひ）　脚本　四幕　世話物【作者】二代河竹新七（後の默阿彌）【通稱】「縮屋新助」「美代吉殺し」【別名題】「八幡祭宵宮雀物」（はちまんまつりよみやのねやのあまやどり）「三五夜中色新月」（さんごやちうのしんげつ）「帝國萬歲八幡祭」（ていこくばんざいはちまんまつり）「八幡祭禮宵宮賑」（はちまんまつりよみやのにぎはひ）【初演】萬延元年七月、江戶市村座。

【役割】縮屋新助・小天狗正作（市川小團次）、藝者みよ吉（岩井粂三郎）、赤間源左衞門（關三十郎）、

ふ。【諸本】刊本には肖柏の校本（小本十五冊）、正保四年版（大本十六冊）がある。寫本は種々あり、中には異本を含むもの、所謂嫁入本として書寫されたものなどがある。【解説】撰者は「古今」「後撰」「新古今」は多數であるが、他は一人である。卷數は「金葉」「詞花」が十卷である外は二十卷である。「古今」「後拾遺」「千載」「新古今」には序があるが、他にはない。「群書一覽」の調査に依れば八代集の歌數凡そ九千四百八十九首とある。【註釋書】八代集抄北村季吟○奥義抄藤原清輔○色葉和難集。

【附記】「二中歷」には「古今」「後撰」「拾遺」の三代集に「近代」は「後拾遺集」を加へて四代集と謂ふとある。「明月記」建曆三年十月十三日の條に、關東より五代集を書寫して送るべき旨を申來り、定家は「古今集」の書寫を分擔せしめられたことを記してゐるが、恐らく「古今集」以下「金葉集」までを指すのであらう。「和歌現在書目錄」には、「古今集」以下「詞花集」までに「萬葉集」を加へて七部勅撰としてゐる。

【參考】袋草子○拾芥抄　〔西下〕

八代集抄（はちだいしふせう）　註釋書　【著者】北村季吟【卷册】「群書一覽」に百八卷五十本とあるが如く、刊本は五十册で、「古今」八册、「後撰」六册、「拾遺」六册、「後拾遺」八册、「金葉」三册、「詞花」二册、「千載」七册、「新古今」十册。また著者が「新古今抄」の奥に記した天和二年二月の識跋によれば百八册であつたことがわかるが、刊本ではその分け目が見えぬ。蓋し百八は、百八煩惱に象どつたものであらう。「群書一覽」には、集毎に表紙の色をかへて搜索に便じた爲めとしてゐる。【別名】右の識跋によれば、初めは「八色抄」と命名された。【成立】各集抄の奥に、註を始めた日と功を終へた日とを記してゐるが、これに依ると初め「拾遺集」を註し、次に「後撰集」「後拾遺集」以下「新古今集」に及び、最後に「古今集」を註したことは「古今集抄」の初めに記す所に依つてわかる。「拾遺集」は延寶七年八月三日より始め、「古今集」は天和二年二月頃終つて、全部完成したと思はれるから、約二年半を費したことがわかる。【諸本】刊本（天和二年刊）。國學院版（二册、明治三十五年刊）がある。【解説】先づその集の解題を試み、歌の略解を頭に記し、作者の傳をも略記してゐる。本文は肖柏校本の八代集に依つてゐるが、出來る限り古寫本を參酌して異同を註し、異本研究にも觸れてゐる。隨つて本書の本文は流布本と多少の相違がある（各集諸本の項參照）。季吟は「古今集」に就いては清高法印より古今傳授を受け、宗祇より七世の血脈を繼いでゐたが、相傳の祕義は一般に發表することができないので、「古今榮雅抄」（別項）に從つてゐる。季吟は豫て歌の指導を飛鳥井雅章に受けてゐた關係から、「榮雅抄」を用ひたのである。「後撰集」は「後撰集正義」（別項）により、「新古今集」は「新古今集新抄」（東常縁作、細川幽齋補）により、その他の集は多くの參考書に依つて自ら註したのである。八代集を通解したものは、本書以外にない點に本書存在の意義がある。

【參考】國文學研究史　野村八良　〔西下〕

鉢卯（はちたゝき）　「門附歌」を見よ。

八年間（はちねんかん）　俳句集　一册　【作者】河東碧梧桐【角書】碧梧桐句集【刊行】大正十二年一月、玄同社。【內容】大正四年より同十一年に至る八年間の製作を蒐めたので、この名がある。嘗て著者が提撰したる俳壇の新傾向（別項）運動は、大正三・四年に至つて內部的に解體し、流に又流を生じたので、この作者が如何に自己の路を究明しつつ進んだかといふ事は、甚だ注意すべきであり、自序に「自己肯定自己否定の衝突背馳矛盾の所產なのだ」と書いてゐる言葉を以て見ても、動搖の過程にあることが察知される。「千足袋の夜のまゝ日のまゝとなれり」（卷頭、大正四年）、「ふだんの綿入朱つくことよ」（大正五年）、「芝の梅が冷たく女は一人で來て居た」（大正七年）、大正十年以後は外遊中の作である。「ミモーザの咲く頃に來たミモーザを活ける」（大正十年、ローマにて）、「ベッドの下から引き出したまゝの夜の行季」（大正十一年、パリーの夏）等。　〔荻原〕

鉢木（はちのき）　「最明寺物の諸曲」を見よ。

撥鬢小說（はちびんせうせつ）　「村上浪六」を見よ。

八幡宮緣起（はちまんぐうえんぎ）　繪卷物　【解說】八幡神たる應神天皇の稜威や八幡宮創立の緣起等を畫いたもので、數種類あるが、そのうち河內譽田八幡宮所藏の「譽田宗廟緣起」三卷が最も顯著である。詞足利義敎筆、畫土佐光信筆と傳へられてをり、奥書によれば、永享五年足利將軍義敎が當宮に寄進したことが明かであるが、當時は土佐光信の出生以前である。併し繪は足利期の大和繪系統の作で、型の如き描寫ではあるがよく整頓してゐる。この繪卷以外では、宇佐・男山・手向山・箱崎の各八幡宮にそれ〴〵二卷本がある。宇佐本及び男山本は、いづれも譽田本と同じく詞義敎、畫光信筆と傳へ、また永享五年義敎寄進といふ兩本同文の奥書を存するもので、蓋し源氏の出たる足利氏が、その守護神たる八幡宮に祈願報賽の意を籠めて、かくは多數製作寄進するに至つた

八幡宮緣起（譽田八幡宮藏）

ものであらう。手向山本には三條西實隆の奥書があり、これによれば、天文四年祐全法師の勸進に成るもので、詞は東大寺の寺務公順筆、畫は繪師宗軒の筆である。箱崎本は寬文十二年の奥書を有するもので、それによれば畫は住吉具慶筆、詞は當代の公卿十數人の寄合せ書きである。　〔田中（一）〕

八幡祭小望月賬（はちまんまつりよみやのにぎはひ）　脚本　四幕　世話物　【作者】二代河竹新七（後の默阿彌）【通稱】「縮屋新助」「美代吉殺し」【別名題】「八幡祭宵宮雜物」（はちまんまつりよみやのにぎはひ）「三五夜中色新月」（さんごやちうのしんげつ）「帝國萬歲八幡祭」（ていこくばんざいはちまんまつり）「八幡祭禮宵宮賬」（はちまんまつりよみやのにぎはひ）【初演】萬延元年七月、江戸市村座。

【役割】縮屋新助・小天狗正作（市川小團次）、藝者みよ吉（岩井粂三郎）、赤間源左衞門（關三十郎）、穗積新三郎（河原崎權十郎）等。

【諸本】默阿彌全集第四卷所收。【題材】文化時政等々。史實に比すれば春雄は家康、雪總は幸村、お通の方は淀君、兒島は後藤、大內は島津、加藻主計之助は加藤忠廣、森三左衞門は池田三左衞門である。

【參考】近世邦樂年表（義太夫節之部）○歌舞伎細見（加藤清正の部）。　〔鶴見〕

八代集（はちだいしふ）　和歌【名義】八代の勅撰和歌集の意味。即ち古今・後撰・拾遺・後拾遺・金葉・詞花・千載・新古今（ただし新續古今集を除く）の八集をい